
キング
KIN
新年號
二大別冊附錄
キング名訓集
科學的運命判斷



ヴェルサイユ大會議（世界史上の華繪卷 その十三）《裏面參照

帝國美術院會員 和田英作筆

者席、右側は來賓席である。列席者四百名肅然として控へて居る中に、時刻は進んで午後三時十分となる。ヴェニス女神像を背後にして席を占めて居た議長クレマンソー翁は屹然として起立した。――

『本條約が一度調印を終つた曉に於きましては、確固不變、調印各國は條約の全條項を嚴格に履行せねばなりませぬ。………』

凛として、聲は隅から隅まで徹る。やがて、先づ、獨逸全權たる外務大臣ミューレル博士、國務大臣ベル博士が署名する。續いてA、B、Cの順位をもつて米、英、佛、伊、日の五大國、次に他の二十二箇國の全權が調印し、こゝに歴史的大會議は完了したのである。百一發の祝砲はとゞろ〳〵と鳴り響き、宮殿外の群衆は、嵐の如き歡呼のどよめきを揚げた。

本圖は、當日の光景を髣髴たらしむるもので、我が全權西園寺公望侯が、中央の卓前に進んで、今丁度調印しつゝある一刹那を示して居る。

(因に松井男爵は、當時の駐佛大使で、西園寺侯、牧野伸顯男、駐英大使珍田捨巳子、駐伊大使伊集院彦吉氏と共に、日本全權であつた。)

熱





ヴェルサイユ大會議（世界史上の華繪卷　その十三）＝裏面參照

帝國美術院會員　和田英作筆

賀正

サダグ原色グラビア

新時代の印刷

ダイレクトプレート平版

秀英舍

東京市牛込區市谷加賀町

電話牛込(代表)一五一〇番

者席、右側は來賓席である、列席者凡百名肅然として控へて居る中に、時刻は進んで午後三時十分となる。ヴェニス女神像を背後にして席を占めて居た議長クレマレソー翁は屹然として起立した。——

『本條約が一度調印を終つた曉に於きましては、確固不變、調印各國は條約の全條項を嚴格に履行せねばなりませぬ。………』

凛として、聲は隅から隅まで徹る。やがて、先づ、獨逸全權たる外務大臣ミューレル博士、國務大臣ベル博士が署名する。續いてA、B、Cの順位をもつて米、英、佛、伊、日の五大國、次に他の二十二箇國の全權が調印し、こゝに歴史的大會議は完了したのである。百一發の祝砲はとゞろ〳〵と鳴り響き、宮殿外の群衆は、嵐の如き歡呼のどよめきを揚げた。

本圖は、當日の光景を髣髴たらしむるもので、我が全權西園寺公望侯が、中央の卓前に進んで、今丁度調印しつゝある一刹那を示して居る。

（因に松井男爵は、當時の駐佛大使で、西園寺侯、牧野伸顯男、駐英大使珍田捨巳子、駐伊大使伊集院彦吉氏と共に、日本全權であつた。）

ぜんそく
効力注射以上の
喘息エキス

驚くべき三ツの事實！

□＝五年十年の慢性痼疾も夢の様に治る不思議な力！
□＝發作の前兆ある時用ふれば奇妙に豫防も出來る！
□＝激發作もタツタ一匙でケロリ鎭る喘息エキス！

＝これで治らぬ喘息なし＝

この『喘息エキス』を用ふればどんな猛烈な喘息でも不思議に治ります。その鎭靜力の偉大なる事は過去數年間に於ける實驗者の等しく感嘆激賞するところで喘息藥中第一位の定評を受けて居ります。

＝タダ一匙で止る＝

激しい發作が起り息苦しくて堪らぬ場合に此『エキス』を一匙お湯に溶いて飲みますと大抵は大風が凪いだ様にケロ〳〵鎭ります又發作の兆ある時に一匙服用すれば完全にその苦しみから逃れる事が出來『喘息エキス』は已に社會的試驗の合格品であります。

◇『喘息エキス』は各地有名藥店にて販賣して居ります◇



◇御希望の方には「喘息研究誌」無代進呈す◇

試用分	¥ 1.30
三十回分	¥ 2.50
六十回分	¥ 4.80
百回分	¥ 7.00
送料 內地	¥ 0.15
送料 領土	¥ 0.50

發賣元 東京本郷區駒込坂下町四八 講談社代理部 振替東京六六二九番

特約店
神田三河町一丁目十八番地 植木商店
東京府下澁谷町公會堂通り 栗原藥局

浮彫＝愛の緊縮豫算

田中比左良作



『濱口先生、昭和五年度の親子愛だとか、夫婦愛だとかいふ愛の緊縮豫算はどう立てたものでせうか？』『愛の緊縮！　これは面白い。行ひ方によつては大なる幸福を齎す。つまりぢや、今まで愛の距離が二尺であつたなら、それを一尺に縮め、一尺のものなら五寸にするのぢや』

（これは粘土製の浮彫であります）

WELCOME!

新會員募集

研究社



英語通信講座

●英語は現代人たる一資格、直ぐ親切第一の本講座へ入會し給へ

●本講座の會員は小學卒業の知識だけ有つてゐれば充分です

●ABCの讀方から僅か十五ケ月で中學卒業以上の實力獲得

今年こそは

希望あふるゝ光輝ある昭和五春は明けた！

此の新春に當つて第一に決心すべきは何ぞ？

英語征服

本講座に入って第二日本語——英語征服！

●講師は岡倉先生を初め獨學に理解深き英學大家の平易明快な講義

●會員拾萬、整然たる日課表により勉強、文檢專檢高檢合格者續出。

●別冊五大附錄贈呈・學資全免懸賞・即刻内容見本(立志案内附)を御申込あれ

東京市麹町區富士見町六丁目

研究社英語通信學部

振替東京三〇八五番

阿部豊後守と鶉



荻生天泉筆

キング教訓畫譜（その一）　……裏面の説明を御覧下さい……

阿部豐後守と鶉

阿部豐後守忠秋は政務の傍ら、慰みに鶉を飼ひて、其聲を聽くを樂しんでゐた。さま〴〵の種類を籠に分け入れて、手づから餌を與へ、又卵を孵へさせて新種を作るに苦心し、平日の忙しい公事を忘れる唯一の慰安としてゐた。されば忠秋の邸には珍しい鶉が少からずあつたが、或時用人が一つの籠を携へて、忠秋の居間へ伺候した。

『殿樣、唯今これなる鶉をば差上げくれるやう、麹町の商人某が持參仕りました。』

忠秋は一寸眉をひそめて、

『其籠これへ。』差出された籠は黒塗の美しいもので、眞紅の總で結んである。中には珍らしい白毛の鶉。

『むう、これは世にも名高い稀代の鶉ぢや。予は夙うから其噂を聞いて居る。』

とためつすかしつ眺めてゐたが、

『好意辱けないが、此やうなものは豐後買ひ受けぬと申して、其者に返し遣せ。』

用人は異な思をして、籠を携へながら退出しようとする。忠秋は溜息ついて、獨語、

『私が鶉を好むと知ると、其隙に乘じて斯る賄物を致し、私に取入らうとするものがある。私情は公務に妨げ致す。私は私情を斷たねばならぬ。』

つか〳〵起つて、ありとある鶉の籠を縁先に運び出し、籠の戸を開くと、鶉はいづれも羽ばたきしながら庭へと飛び去つた。

文學博士　笹川臨風

研究社 英語通信講座



●英語は現代人たる一資格、直ぐ親切第一の本講座へ入會し給へ

●本講座の會員は小學卒業の知識だけ有つてゐれば充分です

●ＡＢＣの讀方から僅か十五ヶ月で中學卒業以上の實力獲得

WELCOME!

新會員募集

今年こそは 希望あふるゝ光輝ある昭和五春は明けた！

英語征服 此の新春に當つて第一に決心すべきは何ぞ？

本講座に入つて第二日本語――英語征服！

●講師は岡倉先生を初め獨學に理解深き英學大家の平易明快な講義

●會員拾萬、整然たる日課表により勉强、文檢専檢高檢合格者續出。

●別冊五大附錄贈呈・學資全免懸賞・即刻內容見本（立志案內附）を御申込あれ

東京市麴町區富士見町六丁目

研究社英語通信學部

振替東京三〇八五番

田中醫學博士創製の

毛はへ藥 フミナイン

△說明書進呈 發賣元へ申込次第詳細說明書進呈

男女を問はず頭髮や眉毛が薄いとか又は若ハゲの爲め、人前に出てどんなに恥かしい思ひをし肩身を狹くする事でせう。特に若い男女が年頃になつても無毛の爲め數知れぬ家庭悲劇が未だに繰り返されて居ります。然るに此のフミナインは我國皮膚科の泰斗田中博士が多年苦心研究の結果發見創製されたもので、その適確なる効果は、世人を狂喜せしめて居ります。フミナインは強烈な殺菌作用で毛根部の有害黴菌を殺して皮膚を健康化し、興奮作用で毛根部に適度の刺戟を與へて毛生機能を促進し又榮養作用で毛根毛母に特殊の榮養を與へますから毛の生えるのは當然であります。毛生藥も夥しく發賣されてあるが、斯様に其の實際的効果の著しいフミナインの創製に依つて毛生藥に對する世人の疑惑も一掃され、各新聞紙等に於ても其の偉効が稱讚報道された最も權威ある製藥であります。

（適應症）

●禿頭病●若禿●腫物禿●枕禿●かもじ禿●眉毛薄き●生際あしき薄毛●脱け毛●産前産後の脱け毛●男女あるべき所に毛なき又は薄き●總て毛の不足不恰好の老若男女等・・・



藥價＝五十錢 九十錢 一圓六十錢 三圓 五圓五十錢

送料內地十二錢

全國藥店にあり

賣切の節は下記へ・・

◎大日本雄辯會講談社代理部でも御取次致します。

發賣元

東京市芝區田村町一八

東京藥院

電話芝一八七四 振替東京三一八三

大阪市天王寺區石ケ辻町

東京藥院

電話南一二四六 振替大阪五〇八一八

阿部豊後守と鶉



荻生天泉筆

……裏面の説明を御覧下さい……　　キング教訓畫譜（その一）

耀く女性

日本では婦選がどうのかうのと騒いでゐるかと思へば、海の向ふでは一足お先に立派な女大臣や女裁判官が出來、悠然として椅子にをさまつてゐる。上圖はお馴染の英國勞働大臣ボンドフィルド孃（右）大臣室で一々書類に目を通してゐる處。下圖は米國ブルックリン裁判所の女判事ブリル夫人（左）就任以來名判官として頗る評判がよい。





顧問 海軍少將 小山武閣下
子爵 三島章道閣下

希望に生きる現代人の自覺

成功の基礎は元旦の決意にあり!! 立身出世の近道は「速記術」の習得にあり。即刻學んで榮達と生活安定の一路へ進め!!

速成 速記 講座

不景氣來、就職難、生活難の喧しい今日堅實にして安心の出來る世渡りの極意は活社會で最も需要の多い速記の出來る人になることである。速記の習得は活社會の第一線に立つ現代人の必須の武器であり且つ成功の近道で新職業としては最上のものであることは、帝國議會、府縣會、新聞雜誌社、諸會社等で速記者を一ヶ月八九拾圓から數百圓の給料で優遇してゐる事實が雄辯に物語つてゐる。生活の安定を得んとする者は來りて速記を修得せよ。學ぶこと一日早ければ一日早く成功の彼岸に達す。從來のものとは全然異り簡單で新式で獨創的教授法の本講座について學べば小學校卒業程度の學力さへあれば、誰でも樂に學業の餘暇或は仕事の合間に練習して僅か三ヶ月で完全に獨修が出來、早速役立たせるに十二分の實力がつく。速記とは斯く簡單なものだ。速記を六ヶ敷いと考ふるは食はず嫌ひの戯言だ。

▼先づ説明書ハガキで左記宛申越あれ無代急送す▲

入會の絶好期

會費 一ヶ月一圓廿錢 三ヶ月完了三圓

東京市麹町區三番町八三
日本速記學會
振替東京七七九七五番

現代人必讀の名著

三井王國の大立物
三井八郎右衛門



自動車王フォード



三井八郎右衛門



谷孫六先生

如何にして現代に生くべきか？
如何にして金を把むべきか？

活路茲にあり！ 秘鍵茲にあり！ 何人も見よ!!

フォードが成功の急所公開!!
今日及び明日
＝ヘンリー・フォード原著＝
自動車王フォード氏が事業經營の體驗より出でたる處世訓經營訓、定價二圓二十錢送料十二錢

大三井の致富の經路
三井王國
＝大淵毅局先生大名著＝
大三井の富は如何にして築かれたか？面白くて活きた教訓に富む快讀物、定價二圓送料十錢

株式必勝の虎の卷！
株式市場の表裏
＝安田與四郎先生著＝
本書により市場の眞相、取引の實際を研究すれば何人も成功疑ひなし！
定價一圓八十錢送料十錢

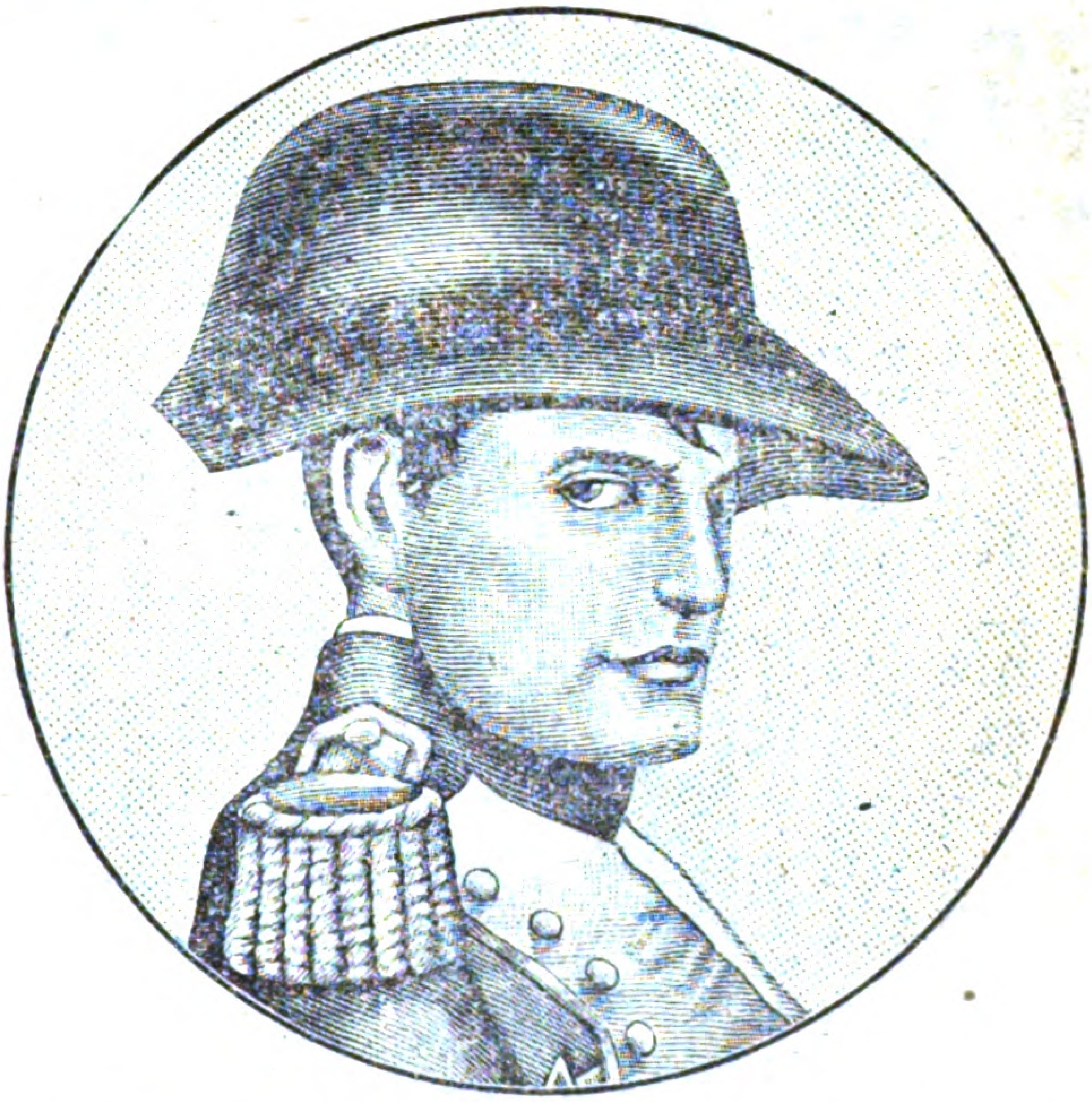
金儲けの秘訣實際談
岡辰押切帳
＝谷孫六先生大快著＝
誰にも直ぐ應用出來る貯金の妙道、利殖金儲けの工夫！評判の名著、定價一圓八十錢送料十錢

就職昇進の秘訣はこれだ
立身成功の近道
＝井關十二郎先生著＝
興味ある實例逸話を引き平易切實に就職處世成功の秘訣を說く
定價一圓八十錢送料十錢

▼何れも重版又重版！大好評!!▲

東京本郷 大日本雄辯會講談社發行 （振替東京三九三〇）

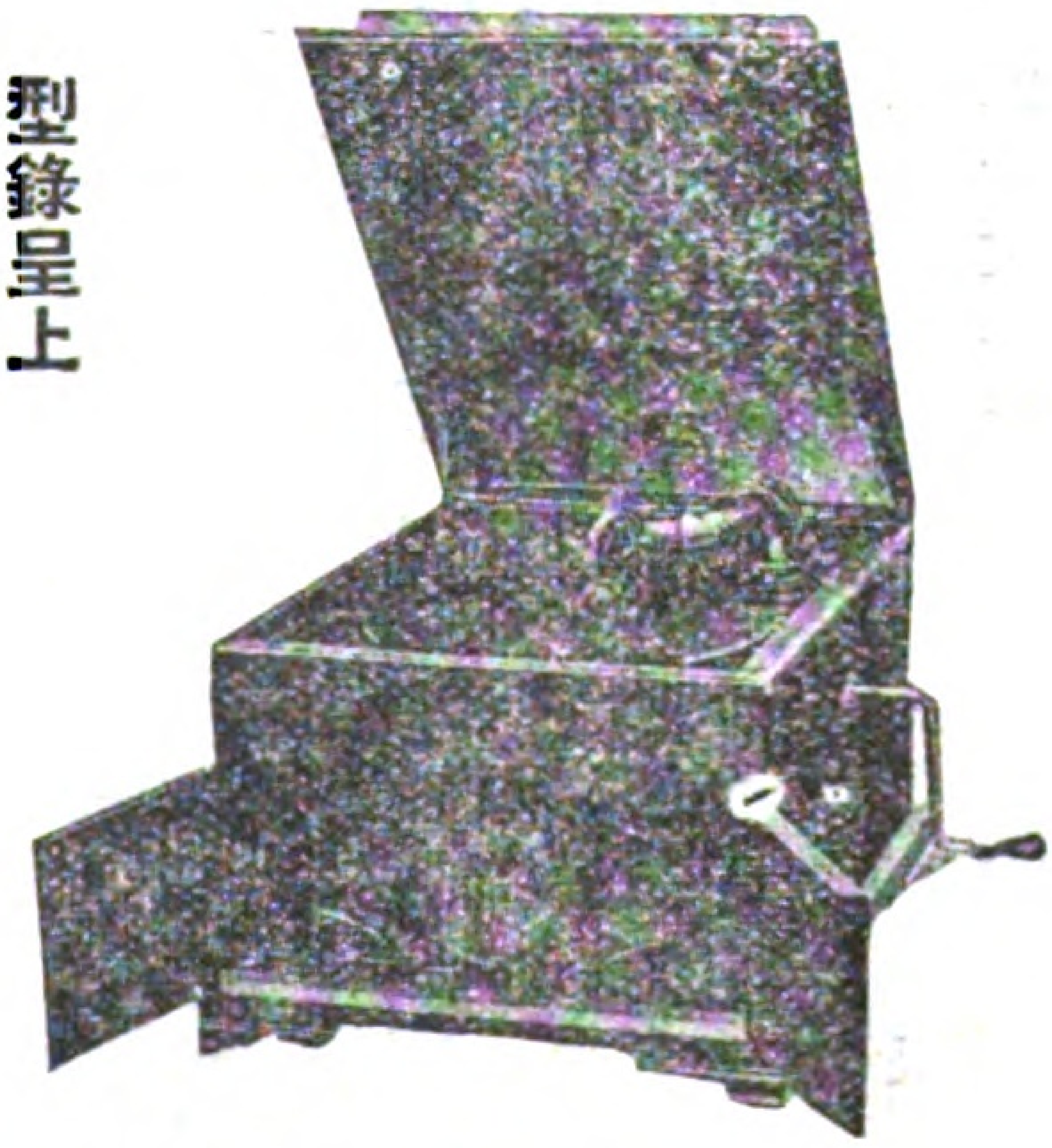
ナポレオン大衆號 蓄音器



最新發賣の科學的製品

斷然斯界を壓する驚倒的卓越廉價品

發明された苦心のサウンドボックス



型錄呈上

正價販賣絕對無割引

特定正價 金四拾五圓

お買上はお最寄りの蓄音器店にて

發賣元 東京神田 **大蓄商店**

全國著名の蓄音器店樂器店時計店は
悉くナポレオン大衆號の販賣店なり

輝く御英姿



今春陸軍に進ませたまふ澄宮殿下の御英姿 此の御寫眞は本誌に御貸下げの榮を得ましたものです

竹の園生の朝日かげ、
皇弟駿馬を御したまふ。
馬は月白、黄金蹄、
火焔のごとく勢へり。
若き日本を象れる
光のアポロ、澄宮、
遠く天馬を驅りたまふ
未來の空をうち仰ぎ、
八千萬の蒼生が
あぐる歡呼の鯨波の聲。

—西條八十—

雲の上

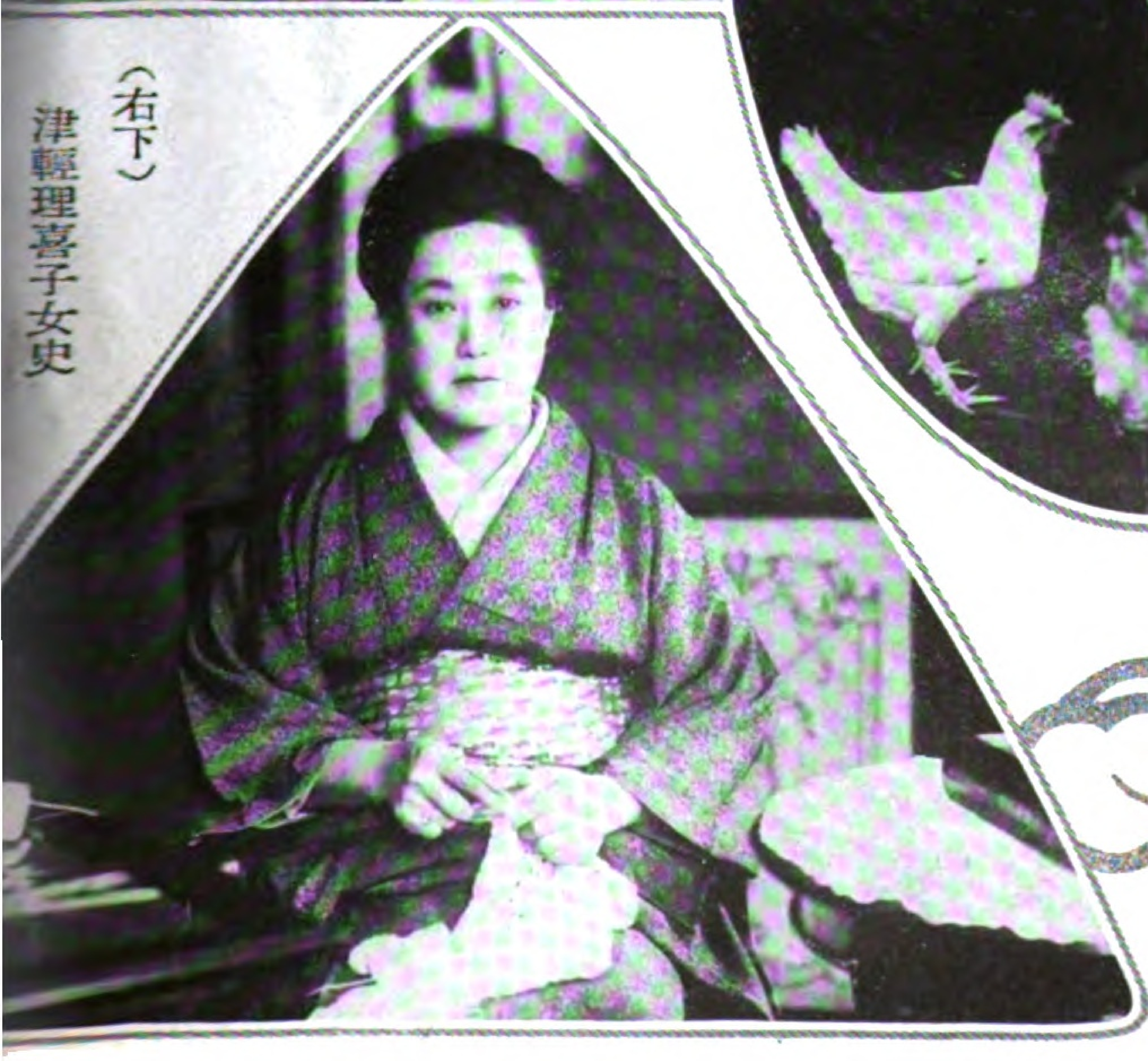
こゝに掲げましたのは、畏くも、朝な夕な宮中の大奥に仕へ奉る光榮の女官方です。



（左）女官長　竹屋志計子女史



（上）山岡淑子女史



（右下）津輕理喜子女史

近に仕へて

(下)萬里小路そで子女史
(左)油小路豪子女史





(下)北村民枝女史



御女官にはこの外伊地知ミキ子女史、高木たつ子女史のお二方がございます。

(本社寫眞部撮影)

今朝の春





嚴しき富士の山かもあら玉の年の明けゆく青空の上に　山田邦子

きはまりて明日より變る日の道の春に向ふと聞くが嬉しき　太田水穂

輝く御英姿



今春陸軍に進ませたまふ
澄宮殿下の御英姿　此の
御寫眞は本誌に御貸下げ
の榮を得ましたものです

竹の園生の朝日かげ、
皇弟駿馬を御したまふ。
馬は月白、黄金蹄、
火焔のごとく勢へり。
若き日本を象れる
光のアポロ、澄宮、
遠く天馬を驅りたまふ
未來の空をうち仰ぎ、
八千萬の蒼生が
あぐる歡呼の鯨波の聲。

―西條八十―

雲の上

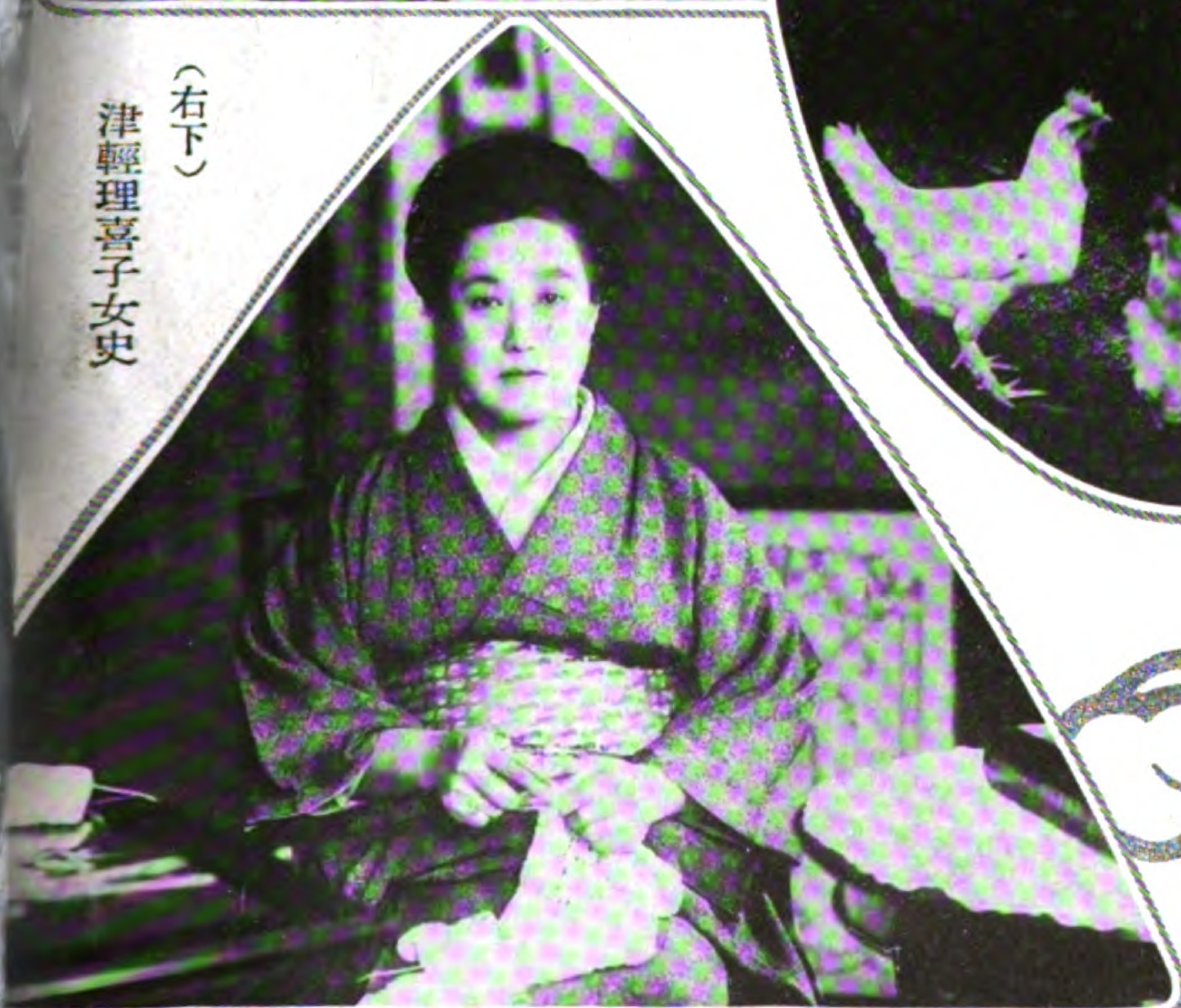
こゝに掲げましたのは、畏くも、朝な夕な宮中の大奥に仕へ奉る光榮の女官方です。



（左）女官長　竹屋志計子女史



（上）山岡淑子女史



（右下）津輕理喜子女史

に仕へて

（下）萬里小路そで子女史
（左）油小路泰子女史





（下）北村民枝女史



侍女官にはこの外伊地知ミキ子女史、高木たつ子女史のお二方がございます。

（本社寫眞部撮影）

今朝の春





嚴しき富士の山かもあら玉の年の明けゆく青空の上に　山田邦子

きはまりて明日より變る日の道の春に向ふと聞くが嬉しき　太田水穗



見よ 現代新年號大呼物の一部

稀有の大雄篇、三大特輯附錄



濱口雄幸　ハースト　マサリック　安田善次郎

(1) 新時代の處世道……衆議院議員 鶴見祐輔

…新日本の代表的新人鶴見祐輔先生が、青年男女は勿論、紳士も淑女も是非心得置かねばならぬ社交禮法から、談話、應待、手紙の心得まで、明快犀利に說かれた大寶典。新時代に活躍せんとするの士は、是非々々御一讀あれ！

(2) 歐米の新知識……エフイシエンシー協會長 池田藤四郎

…活眼！活眼！！ 年は明け、世界は廻る、目覺めよ世界の大勢に——社會相は？人物は？事件は？商賣のやり方は？經濟の事情は？ さうして我國の有樣は？ 我等の決心覺悟の程は？ 見よ！無限の知識と興味を盛れる作者苦心の大快篇。

(3) 感激の三大偉人傳

◇濱口雄幸傳……秋元俊吉

◇ハースト傳……清澤洌

◇マサリック傳……澤田謙

（この巨人を見よ！かくの如く、感銘深き人物傳は最近に於て絕對に見ざる所、本誌獨得、雜誌界の誇！ 見逃す勿れ。）



古河市兵衛　ロックフェラー　カーネギー　ヒンデンブルグ　ムッソリニ　エヂソン

更に見よ！左の如き名篇大傑作!!

▲何が彼を偉くしたか……矢野正世

……問題はこゝにある。彼等だけがどうして斷然！群を拔いたか？高島嘉右門、田中平八、安田善次郎、大倉喜八郎、古河市兵衛、ロックフェラー、カーネギー始め東西大人物十一氏出世の跡。この虎の卷を見ていはゆるコツを知れ！

▲高速度繁昌商店物語……石山賢吉

……一介の勞働者、十年の大奮闘、忽ち一年の純益丈でも十萬圓、見よ！須田町食堂主加藤清次郎氏の驚くべき經營手腕!!

▲各界活躍の人々……（二十數名）

……目下我國の政界、實業界、學界、宗教界等々、あらゆる方面の第一線に立つて花々しき大活躍をなしつゝある人氣者を拉し來つて、縱横に論評し月旦したる素敵に面白い大讀物。青年學生少年諸君の唯一の道しるべ無二の水先案内。

▲世界の三大商傑……岩崎英祐

……英の百貨店王セフィッチ、米の寫眞王イーストマン、英のレストラント王ライオンの小說より面白い逸話秘傳ぜヒ御覽

▲最近の科學應用の面白い話

……サア、大變だ、大飛行船時代が來る、死者が再生する、人間が改造出來る、無人戰場時代が來る、電波の世界になる、廢物を出さない產業が起る、限りなき人智は日に〳〵に進みゆく――科學とはいへ面白い說明で誰にもよーく分る物語。

▲世界の巨人に會ふ……（四名家執筆）

……支那の蔣介石、伊國のムッソリニ、獨逸のヒンデンブルグ、米國のエヂソン等四氏の面目、筆者の靈筆により紙上に躍如

尚此外、名篇滿載「現代」新年號　十二月十九日發賣！　發行所大日本雄辯會講談社　振替東京三九三〇

定價八十錢送料三錢五厘



□若駒

尾崎喜八

その濡れた賢い眼にうつるのは、
未來に滿ちた黎明の色。
そのうひうひしい耳を聳てゝ聽くのは、
明けそめた世界の深遠などよめき。
あゝ長い無邪氣なたてがみを
うすみどりの地平の風に吹き靡かせ、
蹄にかたい大地を蹴つて、
りんりんと勇みはやつた馬を見よ！

黄金の蜜の流れる、柔かな草の茂る
約束の地は遠くとも、
戞々の蹄のゆくところ皆征服。
やさしくも雄々しく、又けだかい若駒が
希望を額に、自信を脚に、
あゝ全身を汗に濡らして、
雷のごとく殺到する意氣を見よ！







初日待つ雲海のゆらぎ立ちにけり

海老よ鯛よ厨の窓の初明り

元日のほぎ聲あがる松の奧



初なげる海や踊も舞ひ出でよ





②

①

星移つて物變る。僅か六七十年の間にとんな變化が生れて來た。(1)昔は急ぎの用と云へば飛脚をとばせるのが關の山だつたが、今は(2)航空郵便といふ重×寶のものが出來た。



③



④

(3)昔は『いろは』を寺小屋で教はつたが、(4)今はモダーンの學校が出來て屋上まで教場に利用される。



⑤



⑥

(5)何か起れば昔は瓦版を讀賣りしたのが、(6)今は電光ニュースと云つて文字を電氣で現し、事件を知らせるといふ機械さだ。



8

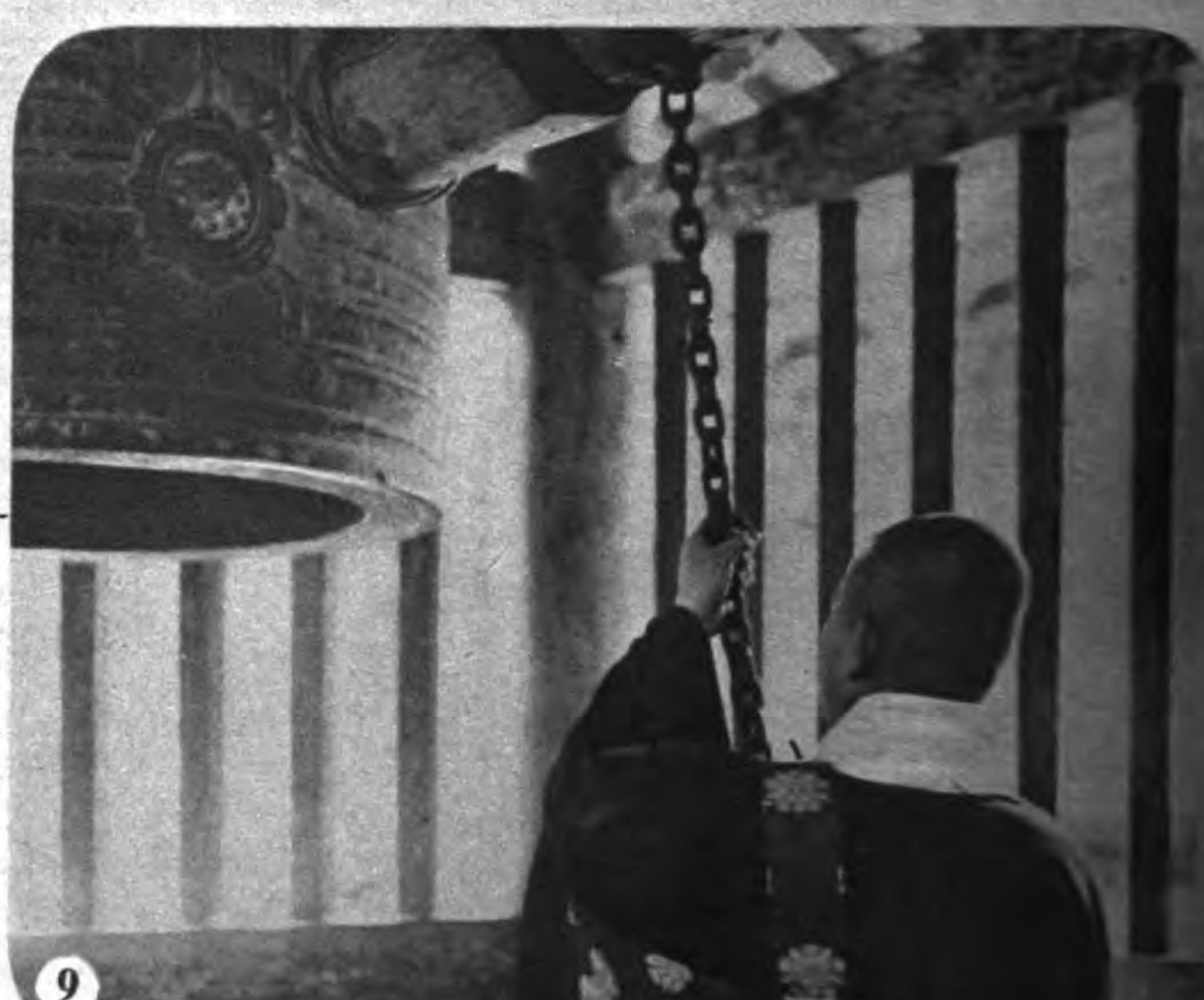


7

(7)此の頃往來を闊歩する斷髮のモダン・ガールも、(8)その昔黑繻子の半襟で猫とだけしか遊ばなかつた娘さんの子や孫であるのも面白い。



⑩



9

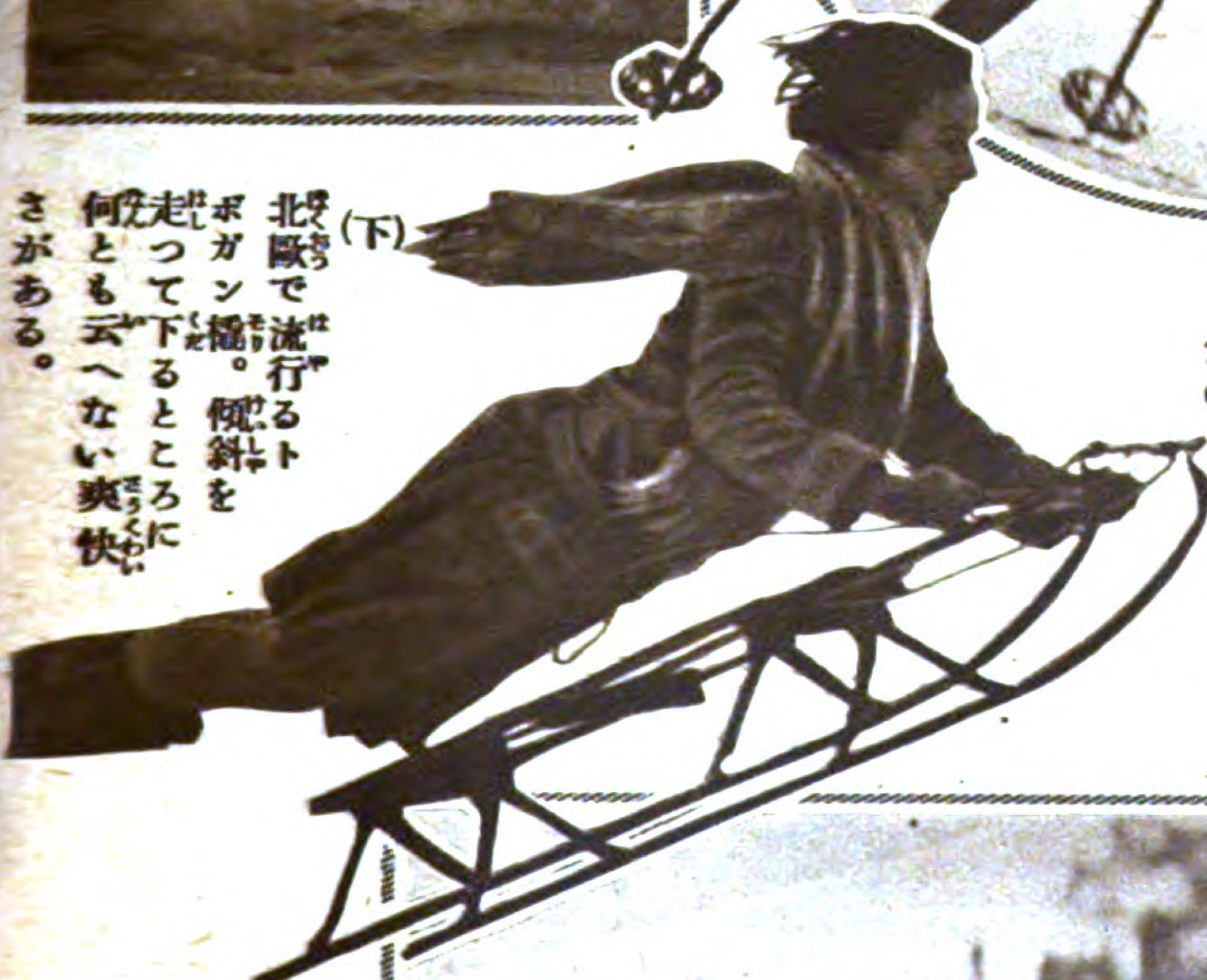
(9)芝居の臺詞でないが昔は『今鳴る鐘は明けの六つ……』と時を數へたのが、今は報時機で何哩先迄時を知らせるやうになつた。本當に世の移り變りは慌しい。

壮快な





(上)やあ見事なジャムプだ。山の頂上から白雪を蹴たてゝ矢の如く滑つて下りたと見る間に、スル〱ッと空中に舞上つた。スキーヤーの妙技程、小氣味よいものはない。



(下)北歐で流行るトボガン橇。傾斜を走つて下るところに何とも云へない爽快さがある。



(右)冬季競技として歐米で盛んな打球である。騎馬の選手が疾驅し乍ら敵の陣地に球を打込む一刹那。

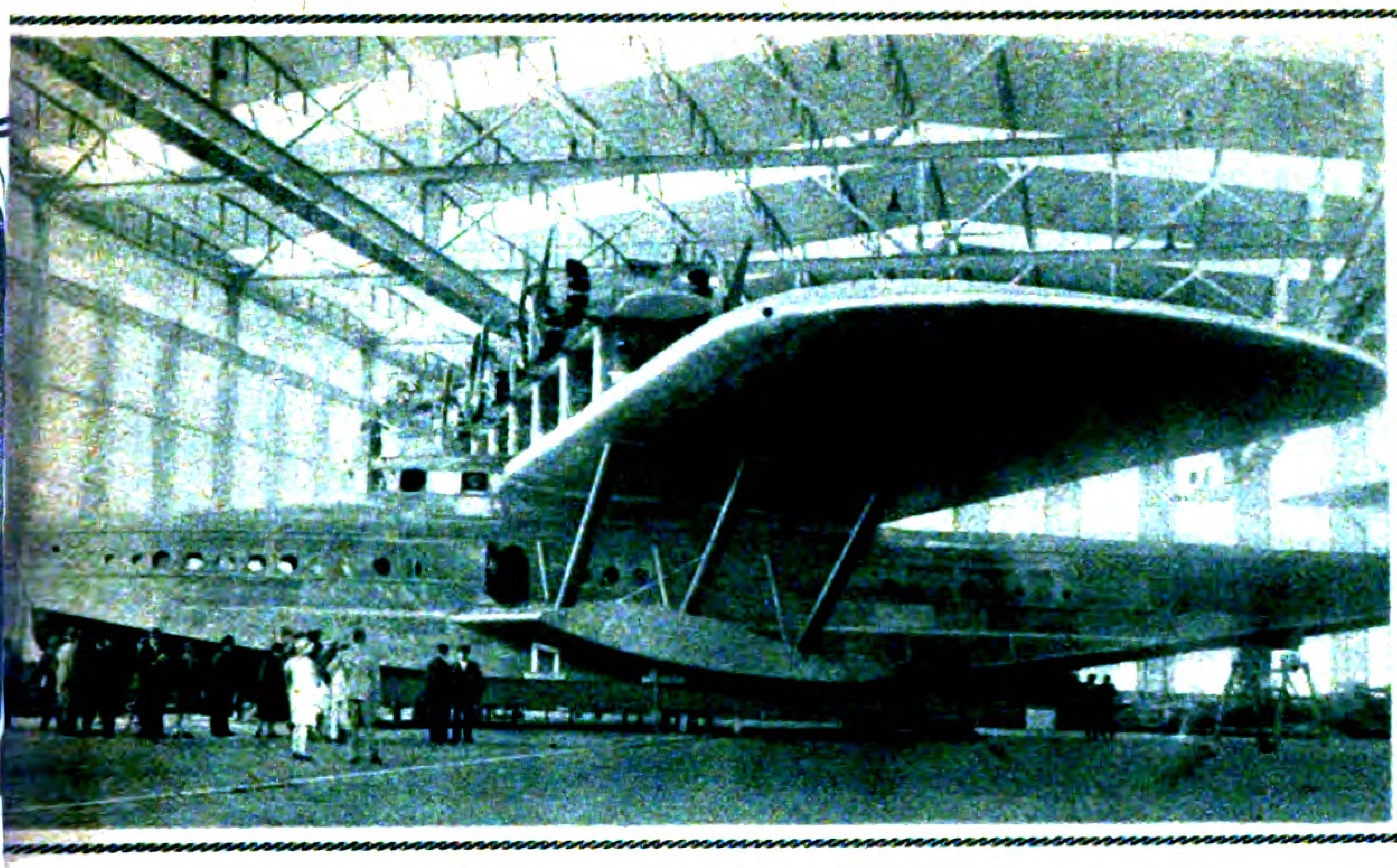


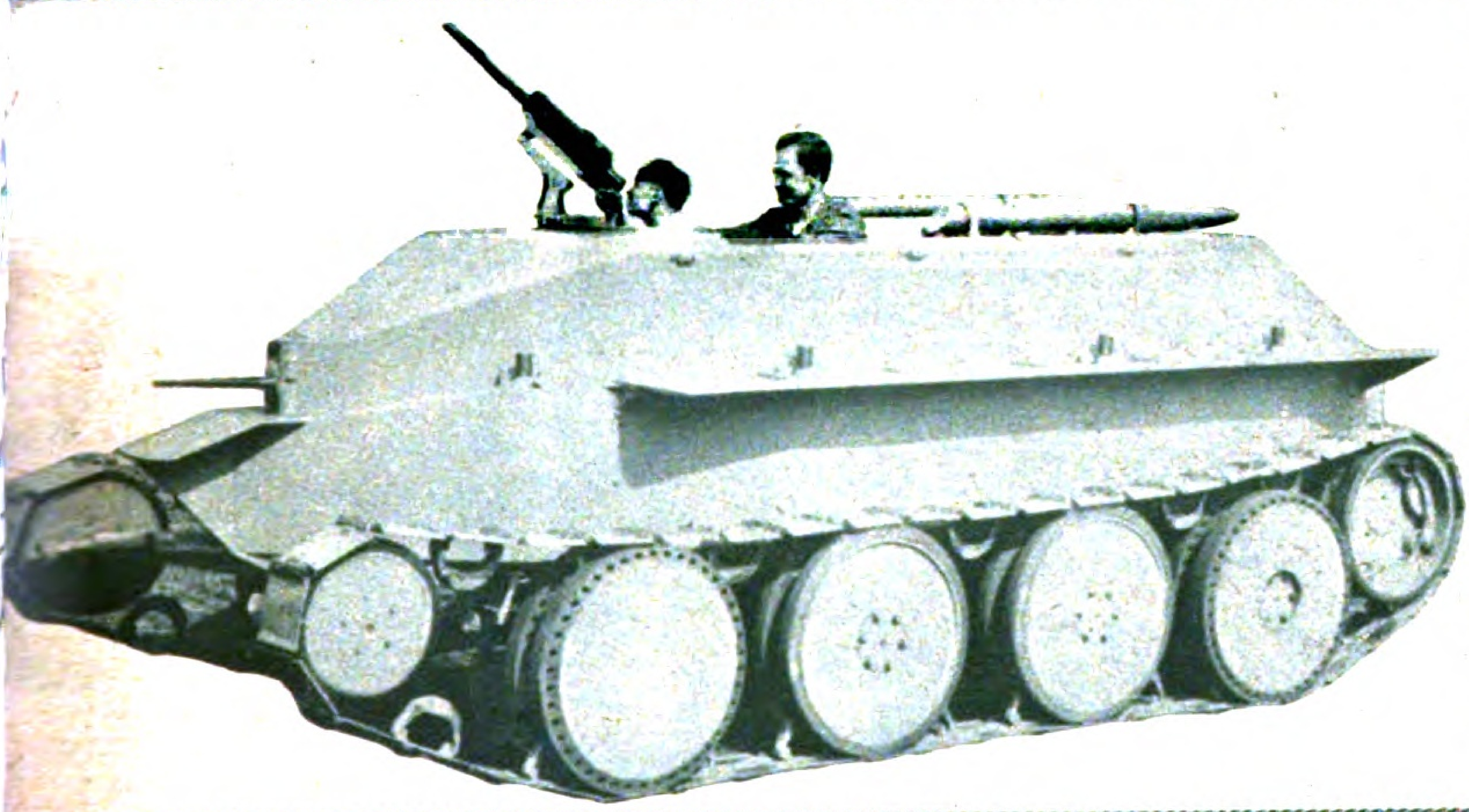
(上)突貫！又突貫！猛襲！又猛襲！フットボールは春秋の野球に匹敵する冬の代表的スポーツだ。數萬の觀衆の前に戰ひは正に白熱の頂點に達してゐる。

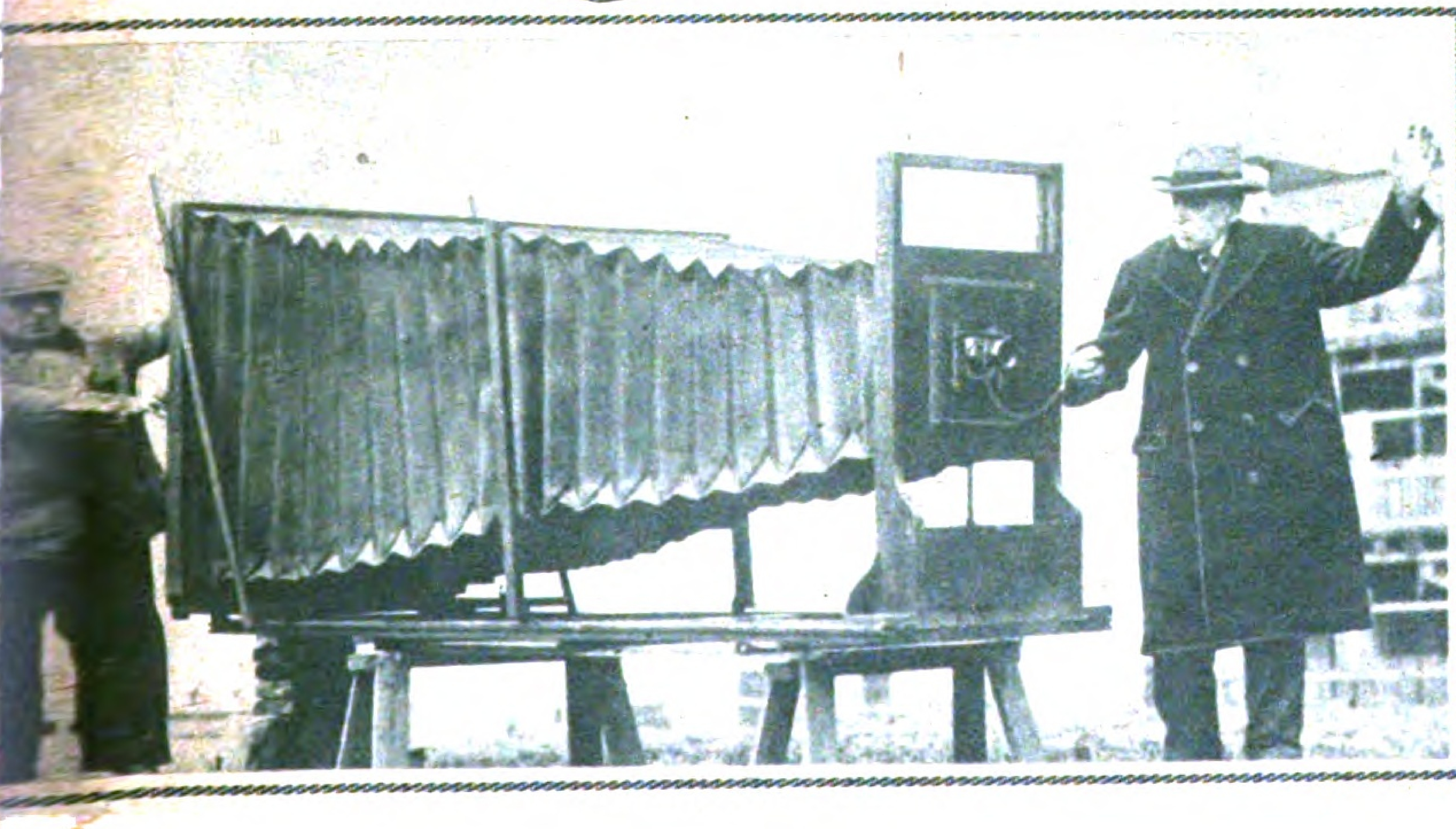


……ない[illegible]なスケート、大きな凧を持って風を孕ませ、縦横に氷上を滑走して行く。數十人一×

×團となってやってゐる處は一つの奇觀だ。







(上)は世界最大の飛行機、獨逸のドックス號です。翼の長さ百六十呎、十二臺のモーターが備へつけられ、百人の乗客と十二人の乗組員を收容出來るさうです。(中)は世界で一番速力の速い米國軍用タンク『クリスチイ』號です。一時間によく五十二哩を走ります。(下)この尨大な寫眞器は長さ十一呎四吋、世界一のものです。これは米國バッターフイールド氏の所有で、氏は歴代米國大統領の寫眞師として知られてゐます。

ぢ疾患者に幸福の黎明

いかなる重症者もかくして病根を根絶せられよ

東京肛門病院長　谷　泉　述



世界人類の六十パーセントは痔疾患者であるといふ、余の見聞する處に於ても特に印度支那方面の如きは殆ど全部の人々が大なり小なり痔疾に呻吟してゐる有様である。痔疾！この恐怖すべき肛門病こそ第二の亡國病として今更ながら戰慄に價する。しかして本症は、初期の裡非常な苦痛のない爲、患者は迂濶にも之を等閑に附する傾向多く、殊に婦人の如きは場所柄だけに之を隱ぺいするの風があり、爲に病魔は情容赦もあらばこそ、骨肉細胞の深きに入り、亦肺、肋膜、心臟病等の餘病併發の憂目を見、名狀すべからざる苦悶と慘狀を齎らすのである。

痔疾！痔疾！余は東京肛門病院にて多くの痔疾患者を診察するの時、常に念頭を離れざりしものは、種々なる事情の爲、責任ある醫師の治療出來ざる人、或は治療を嫌ふ人を如何にして救濟するかの問題であつた。即ち權威ある自宅療法藥の創製こそ！この氣の毒なる人々を救ふ最大の道ではないか！余は之を信じ、余の三十有餘年の實際的經驗と更に加ふるにドクトル・メヂチーネ谷岩太氏の最新學說を斟酌し、價格を超越せる高貴藥を配して、痔疾ヒットを江湖に送つたのである。

ヒットは含有各藥物の完全なる效果を速進せしむべく、最も愼重に配劑され、從つてその鎭痛、消炎、防腐、殺菌、止血、吸收等の實際的治療效果を最も安全に、最も迅速に擧げ得るのであり、この點斷然一般市場の痔疾藥と選を異にしてゐる。かくてヒットは手術を欲せざる人、できざる人等に眞に理想の自宅療法藥として推奬するを憚らないのである。

世に痔疾患者多く、痔疾藥亦枚擧に暇なき程であるが、醫藥をその儘賣藥とせるものは蓋しヒットを以て最初とする。江湖幾萬の痔に惱む方々よ！宣傳のみを生命とする舊式賣藥や家傳妙藥等と稱する駄藥に迷はず、速かにヒットによつて恐るべき肛門病を根本より掃蕩せられよ！初期輕症の人は勿論、いかなる重症者も決して悲觀は無用である。

（ヒットは三種あり。挿入、塗布、内服、挿入は内痔核、痔出血、内痔瘻等に適し、塗布は痒痔、裂痔、脱肛、痔核、痔瘻等の外部症狀に良し、内服は一般痔疾を輕快ならしむるの效著大なり。以上三種を以ていかなる痔疾と雖自宅で自分獨りで安全に治療し得るのである、**ヒット**藥價、挿入藥、一圓、二圓、五圓、十圓、塗布、五〇錢、一圓、二圓、五圓、十圓、内服、一圓、二圓、五圓、尙治療速進に**ヒット式痔バンド**あり。一具一圓。全國到る處の各藥店にあり。發賣元は東京市銀座新肴町八（振替口座東京七二二一）大阪市西區新町通一ノ二（振替口座大阪一〇六）丁子堂藥房（**誌名記入御申込み次第說明書進呈**）

鶴見祐輔

最後

名作「母」に引續き此の大巨篇發表に

天下熱狂愈々大評判!!

發賣忽ち賣切れ

大增刷出來

明るい、面白い!

新知識に滿ちた小說

世界の富と文明の中心たる米國——その米國の文明と歡樂を聚めてキューバ島、風光明媚の此の南國を旅する遊覽客の中に一人の日本青年あり、聰明快活、風姿颯爽、その名は高山巖　彼をめぐる——

花の如きアメリカ娘あり、妖艶なパリーの未亡人あり、

明眸比ひなきイギリス美人、熱情的なロシアの女あり、



挿繪中の一場面

先生　小說第二作

の舞踏

學者あり、實業家あり、彼はそれ等の人々の間に、如何に快活に如何に明るく、自由に振舞つたか？

風薫る椰子の葉蔭の戀は濃艶哀切

思はず胸トキめかす。而も得意の柔道を揮つて暴漢を懲らす快場面あり、堂々日本の權威を示す感激場面もあり、その間國際的知識社交的儀禮は縱横に織込まれ、全卷に漲る異國情調は、讀者自ら是等の人々と海外の旅を續けるの思ひあらしむ。更に——


最近の鶴見先生

奇想天外の機智、上品な諧謔に

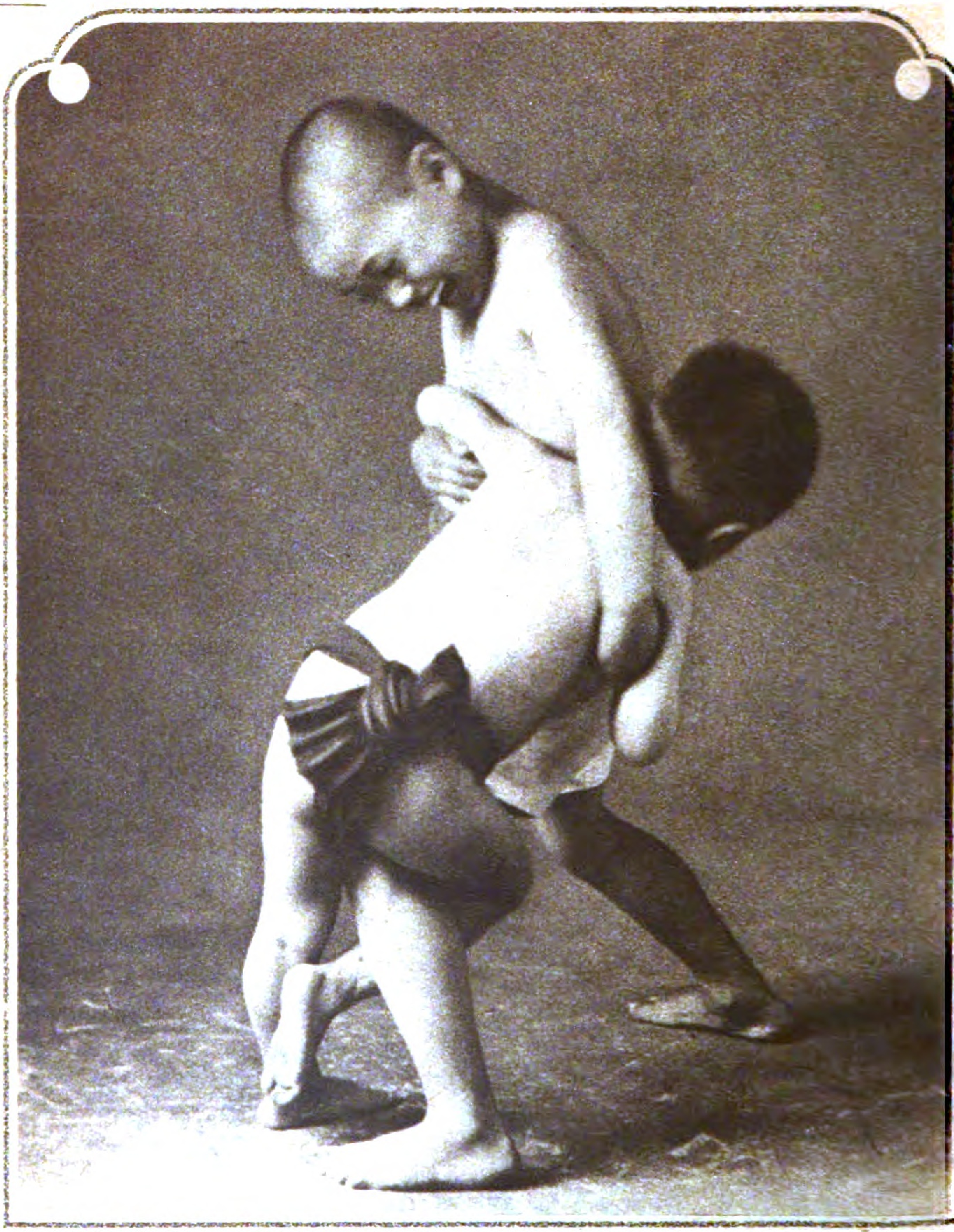
面白可笑しく讀み乍ら、世界の形勢に通曉し、各國の人情風俗が知れ、新時代の紳士淑女の禮儀作法が判る。全卷に流るゝ明るさ、朗らかさは、自然と讀者を快活にせずには措かぬ。

見よ！老若男女の必讀の國民小說！

日本人に缺けて居るのは明るさだ。勇氣だ。世界人としての教養だ。やがて來るべき日本の大飛躍の爲に、緊急の必要事は之だ。『最後の舞踏』一卷は鶴見先生が、此の意味で執筆せる大巨篇。面白き事は實に無類、而も、知らず〱、新時代の教養が得られる大巨篇。

▲四六判美本・挿繪豐富
定價一圓八十錢（送料十二錢

東京本郷駒込坂下　大日本雄辯會講談社
—振替東京三九三〇—



角力

『ヤッ、義つちやんうまいぞ、そこだ！そこだ！今一息。兄さんに勝つたら凧を買つてあげるよ』

『だつて兄さんはコスイや。猿股だから手がかけられないもの』

『それで勝つのが偉いんだよ。ウム今度は外がけだな。これは叶はんぞ。オット義つちやん、早くしないと褌が落つこちるよ』



(2) 童謡『子守唄』ををどる新井富美子さん(上)、住吉みさ江さん(中)、林まつ子さん(下)、振付は若柳吉三郎。



なんと可愛いではありませんか。ここに掲げましたのは東西の踊りさまざまです。

(1)加藤てい子さんの『供奴』(振付花柳徳之輔)



(3) 長唄『鶴亀』右から秋田敏子さん、河村圭子さん、鈴木ひな子さん、振付は花柳壽輔。

お上手



(4)紐育メトロポリタン劇場で評判をとつた少女踊子エリーナさん。『青い蝶々』の一場面。

(5)英國蘇格蘭で有名な、『ブレーマー大競技會』に於ける少女の劍舞です。

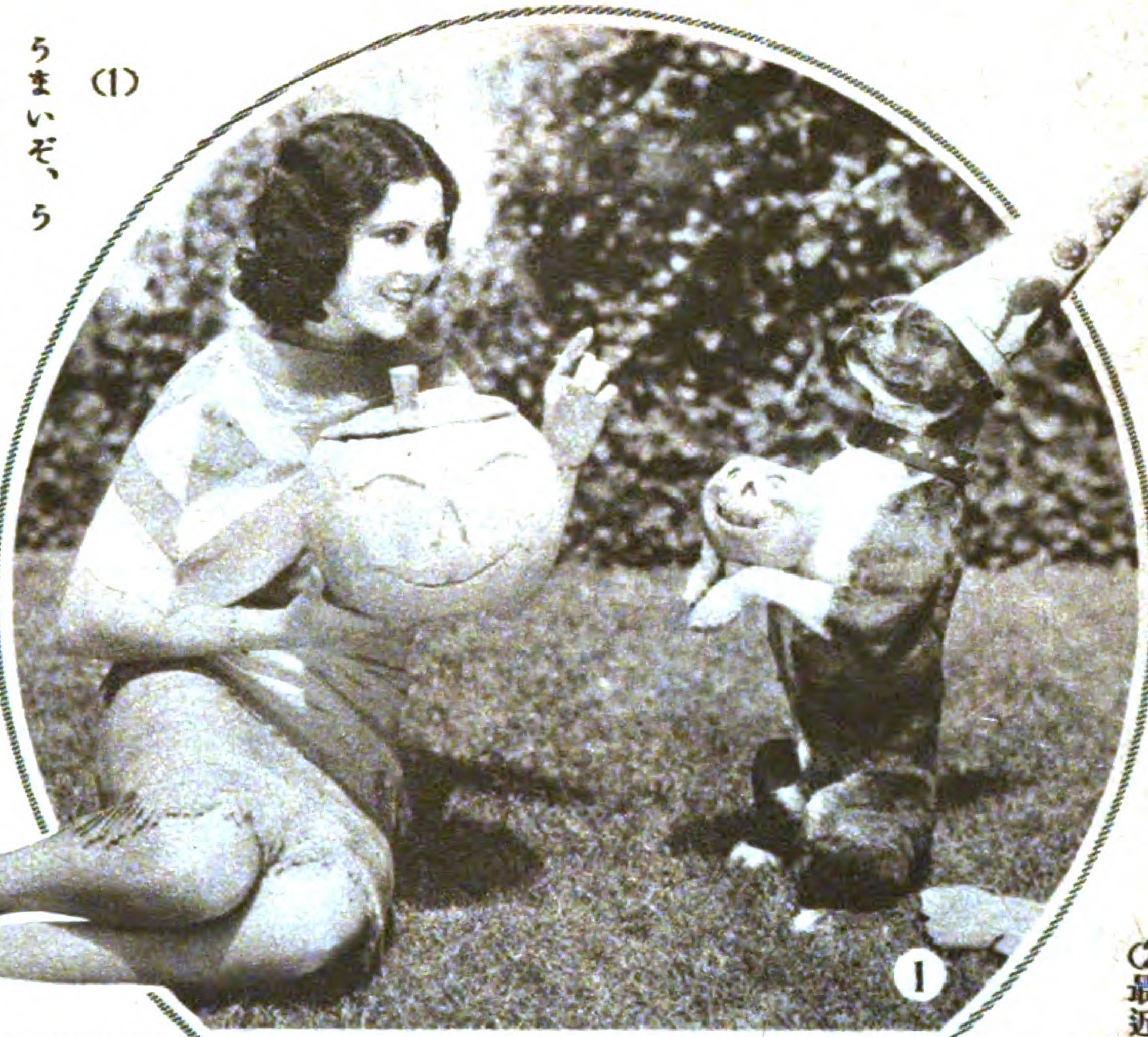




(6)小山李枝子さんの『菊づくし』(振付花柳徳之輔)

名犬腕

(1) うまいぞ、うまいぞ、シツカリ〳〵。これは米國メトロ社の名犬。三角帽子を横ッちよにかぶつて、粘土製のお化けを後生大事に抱いてゐる。この眞面目くさつた表情を御覽下さい。



(2) 最近英國で起つた話。一匹の犬に二人の所有者が現れ、互ひに爭つて果しがつかない。結局裁判沙汰になると、此の犬は稀代の利口者で、判事の前で本當の主人の煙管を咬へて御覽に入れた。それで忽ち判決確定とはまるで大岡裁判のやうである。





(3) 世にも感心な名犬パッチー（右）仲良しのお友達が不圖した病氣から盲目になつたので、大變これに同情し、毎日かうやつて繩の端を引張り、道案内となつてワシントンの街を散歩してゐる。

くらべ

(4)ヤア面白い。カナリアお犬の鼻の頭にチョコンととまつてゐる。此の二君はもと〳〵よそ目も羨しい程の親友同志だ。毎日ワン君はかうしてカナリアの小唄に聴き惚れてゐる。(5)米國ミシガン州で評判の名犬。飼主の驛長が片手がなくて不自由なのを見兼ね、畜生ながら主人に代つて旗を振つたり、切符にスタムプを押したりしてゐる。その上お客の荷物もドン〳〵運んでやるといふ働きもの。從つて諸方の劇場や、活動寫眞から大金を出して引張り凧だが、相變らず忠實に主人×に仕へてゐるとは、かうなると犬も人間以上だ。





(6)米國カンサス大學を犬が卒業？したといふ珍らしいお話。このビー三世君は四年間學校から一歩も離れず、精勤をつくした廉で人並に學士樣の肩書を貰つた。





(7)米國パークス氏の犬は音樂の天才だ。主人がハーモニカを初めると、それに合せて一匹は鈴を振り、一匹は小さいピアノを叩いて調子を合せる。一曲がすむと今度はダンスを始める。本當にこんな犬が一匹欲しい。



(1)申す迄もなく、床しい日本の花嫁姿です。結婚式は何と云つても振袖姿がうつります。断髪がはやつても、×高島田には又何とも云へない優美な古典的の感がいたします。



(2)これはアフリカの酋長の婚禮姿。これでも彼等にとつては一番の晴着ださうです。



(3)歐米の結婚風俗です。馥郁たる草花の香に包まれた純白の花嫁姿も見るからに清楚な感がいたします。

(4)人形のやうな花嫁さんではありませんか。これは蘭領東印度に於ける上流馬来人の結婚風俗です。金糸銀糸の刺繍のあるきらびやかな着物、美しい壁掛、何處か東洋らしい色彩が濃厚にあらはれてゐます。



④

(5)西班牙ラガトラ地方の古風な結婚風俗です。帽子から靴下に至るまで全てが二三百年前の服装といふ感じがいたします。

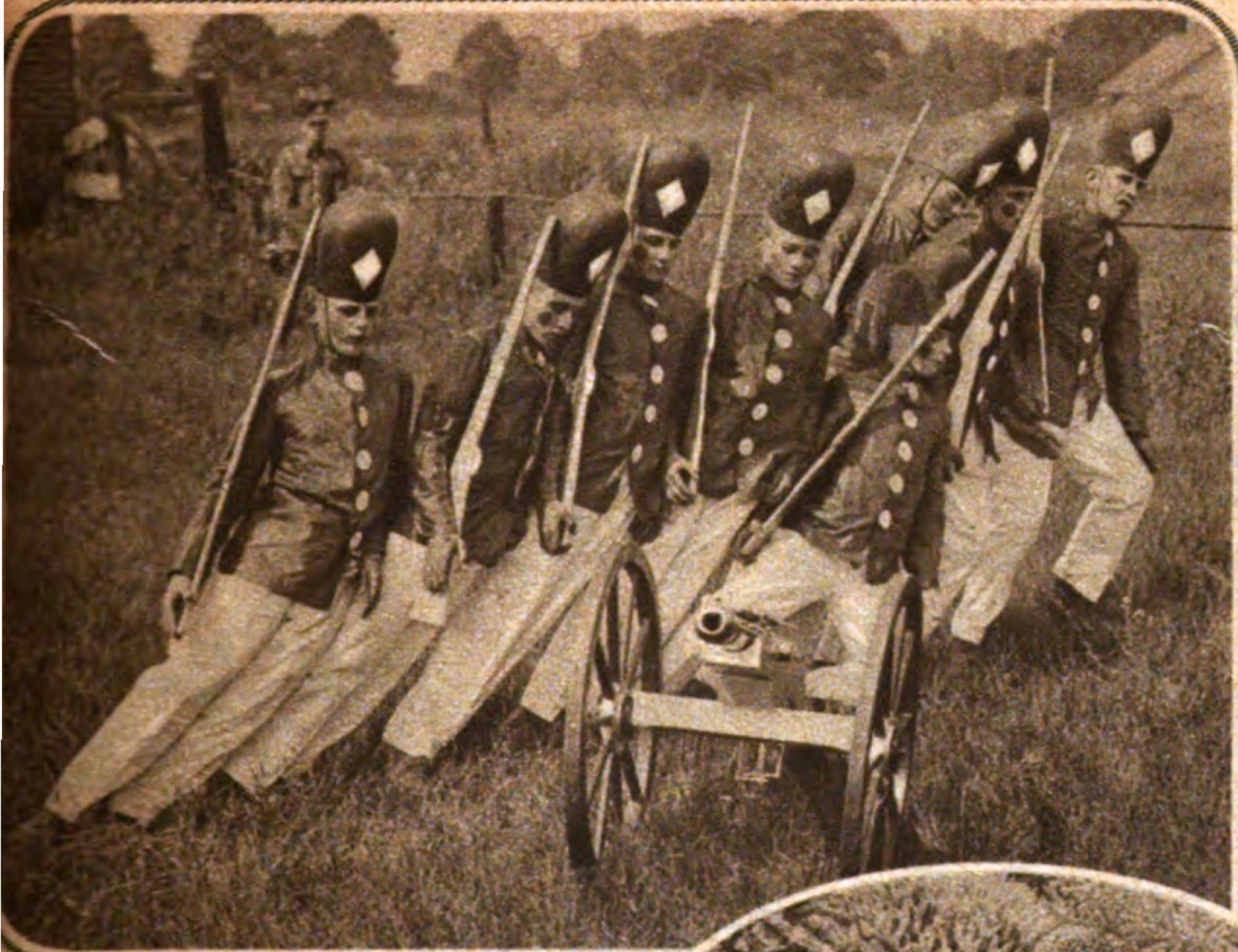


⑤

(6)これは朝鮮固有の風俗をした花婿さんです。太閤様のやうではありませんか。



⑥



（上）玩具の兵隊さんが並んでゐる。オヤ〳〵みんな倒れるぞ。氣をつけツ！と云つたら慌てゝ起きた。これはをかしい、よく〳〵見れば、英國士官候補生の活人畫。本物のおもちやもはだしの出來榮え。





（中）花かしら？それとも雪かしら？スーッと見當に迷つて了ふ。これは海底に繁茂した見事な珊瑚だ。（下）ヤア、アルピニストだ。綱を傳つて登山してゐる……としか見えない此の寫眞は、その實自動車競[illegible]

難病者、虚弱者が

續々救はれる。藥も效かぬ療法もないと諦めた方々も服用後メキ〳〵効あり。



信州天龍峽の奇景

三百年の歴史が物語る奇蹟的靈能!!

赤蝮蛇の活性絞り汁と

高山藥草七種の合釀『養命酒』

强烈無類の精力飲料

人を噛めば人を殺し、木を噛めば木を枯らす。强烈無類の猛毒を有する蝮蛇が諸病復活、健康増進に奇蹟的の效果ある事は周く人の知る所であります。併し乍ら蝮蛇にも種類多く從つて其の效力の點に於て大差あるものですが信州赤石嶽の赤蝮蛇は特に精分强く藥物としては他に比類なき活性成分を有して居ります

三百年來極秘家傳による養命酒の製法

由來「養命酒」の釀造元鹽澤家天龍館は、天龍川を遡る四十里、信州の奥地第一の舊家で、鹽澤家の經營にかゝるもので今より十八代の祖先鹽澤宗閑翁の創始によるものにして、特に强烈なる精分を充有する南アルプス赤石嶽の特産の赤蝮蛇の活性絞り汁に天龍峽の懸崖幽谷に生ずる靈草七種を配合して造り込み四時雪を頂くアルプス連峰に圍まるゝ海拔三千尺の高處に貯藏する事數年自然の氣候風土に依つて工合よく醞釀され、赤蝮蛇の精分は七種の靈草と十二分に相和し相熟するを待つて分配するものであります。

眞に奇蹟的靈效 實驗者何れも驚嘆

斯くして造られたる「養命酒」は黃金色に澄み蝮蛇の形はなく香氣馥郁として口當りよく女子供でも喜んで飲用される。赤蝮蛇特有の强烈なる精分と、高山靈草の神祕的靈能と相俟つて奇蹟的の效果を發揮し身體の眞底からズン〳〵根强い新精力を生じ血液を増し鬪病力を與へ病衰者に藥よりもメキ〳〵効あり、病弱者は不思議に强壯になり男女の精力はステキに强くなり健康者は層一層健康力を増進する。特に腦神經系統、生殖機能衰弱、肺ろくまく心臟、胃腸の弱い人、病後衰弱、虚弱者には不思議に良効を奏し、尚百藥効なき難病人も救はれ實に「一滴千金の靈液」と狂喜し、その禮状は毎日數十通に及んで居ります。現に阪口、横森兩醫學博士初め有名大家は實驗の上廣く賞讃され、各博覽會では金牌を受領し現代の化學藥人工藥養劑を絕對に超越せる天然自然の靈能を誇るものであります

東京大阪一流各百貨店全國有名藥店にあり都合上本社代理部に注文されてもよい。

定價 一瓶約二十日分三圓 徳用約三十日分四圓
（送料内地三十五錢 領土六十五錢）代金引替は實費

發賣元 東京澁谷町神宮通り一丁目五番地 **養命酒本舖天龍館**
電話青山五三九八番 振替東京六八八五五番

◎◎◎◎ **無代進呈** 見本瓶詰（家傳由來七ふしぎ）說明書申込次第急送す

新

雄

出世成功



青年男女當面の問題座談會

出席者

◎社會運動家 賀川豐彥　◎小說家 加藤武雄　◎婦人評論家 山田わか
◎大日本聯合青年團理事 田澤義鋪　◎歌人 今井邦子　◎生活改善同盟理事 塚本ハマ

右の方々が男女の交際、戀愛と結婚、教育と職業、青年男女の修養、女性の經濟的獨立、等々新時代の青年男女の知らねばならぬ諸問題について赤裸々なる意見を交換し合つた大座談會！　難を打破する秘訣

▲國民諸君と共に善處せん……內閣總理大臣 濱口雄幸

▲安部磯雄傳（無產者の父安部磯雄先生の眞面目を語る！萬人必讀！）……木村盛

◎彼等は斯くして大人物となれり（世界巨人譚）……米田實

◎日本の指導者を語る　◎明るい社會・愉快な生活……小林一郎

日本雄辯選手權大會（當選發表）

輝く榮冠は誰に？

永井柳太郎、鶴見祐輔先生の嚴選に依て、いよ〳〵當選者確定！何れも新進雄辯家熱火の大獅子吼！現代の隱たる雄辯家を知らんとする者は見よ

◎文藝と生活……菊池寬

◎新雄辯法六講（政談演說の仕方）……衆議院副議長 清瀨一郎

◎雄辯一騎打物語……望月紫峰

新年模範挨拶演說例

▲新年宴會開會の挨拶……犬丸徹三
▲新年宴會に於ける五分間演說例……安倍季雄
▲青年團新年會に於ける挨拶……後藤武夫
▲社員新年懇親會に於ける挨拶……矢野恒太
▲雄辯研究會新年會に於ける挨拶……田中□

年特大號

辯

を望む者は見よ!!

◎この青年を見よ!!…守屋東

▲私は斯うして獨學した…千葉龜雄

▲危機を救つた雄辯の偉力…澤田謙

▲青年を廻つて酒・女・金の對話…山中峯太郎



小說 **夢みる森** 佐々木味津三先生傑作

見よ！新春小說壇を飾る不朽の大力作！一讀何人も感激發奮！

別冊附錄 昭和名演說集

四六判二百八十頁の堂々たる大附錄！

政治に、社會に、思想に、文學に、宗教に、教育に、其他各方面に亙つて巨人新人熱烈眞劍の名演說！ 萬人感動の大雄辯！

◎外務政務次官 永井柳太郎
◎遞信政務次官 中野正剛
◎東京市長 堀切善次郎
◎文學博士 中村孝也
◎慶應大學塾長 林毅陸
◎代議士 鶴見祐輔
◎衆議院副議長 清瀨一郎
◎外務省情報部長 齋藤博

◎代議士 田子一民
◎代議士 牧野良三
◎代議士 植原悅二郎
◎代議士 堤康次郎
◎ 川村理助
◎社會運動家 賀川豊彥
◎經濟學博士 太田正孝

◎代議士 武藤山治
◎代議士 龜井貫一郎
◎ 加藤咄堂
◎文學博士 谷本富
◎ 久留島武彥
◎法學博士 岡實
◎婦選獲得同盟理事 市川房枝
◎文學博士 深作安文

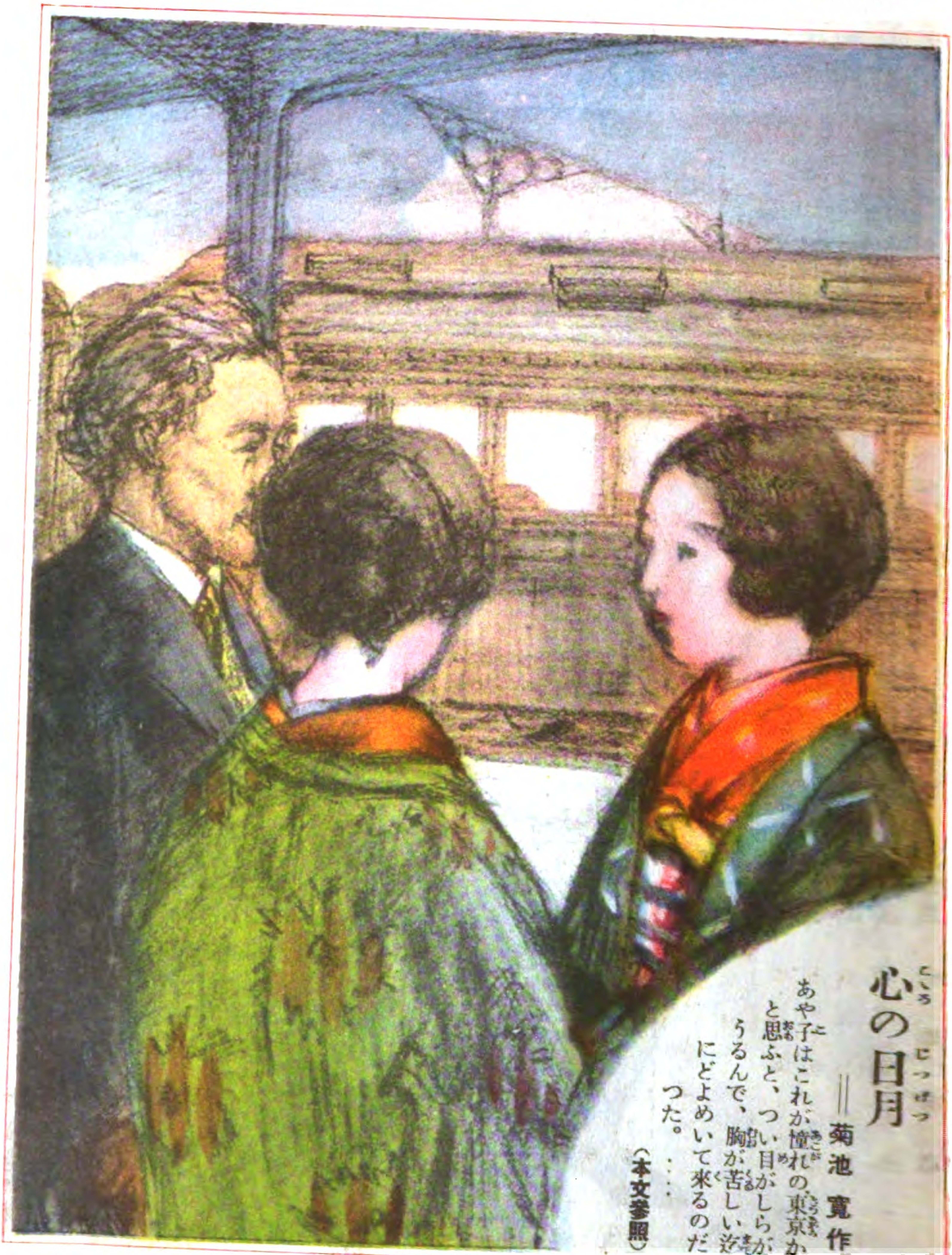
◎法學博士 田中穗積
◎法學博士 下村宏
◎辯護士 塚崎直義
◎伯爵 有馬賴寧
◎評論家 平林初之輔
◎文學博士 川合貞一
◎工學博士 山本忠興

此外辯論記事・修養記事・傑作小說等數十篇あり!!

本號定價八十錢（送料九錢）（普通號五十錢） 發行所 東京本鄉大日本雄辯會講談社（振替東京二九三〇）

本誌新掲載　萬人大熱狂

小説名場面繪卷



心の日月　＝菊池寛作

あや子はこれが憧れの東京かと思ふと、つい目がしらがうるんで、胸が苦しい迄にどよめいて來るのだつた。……（本文參照）

―結城素明畫―

『どうした藤吉？』
『へい……彼奴です。わしを附狙つてゐる奴は、彼奴です』
と藤吉は、顔色土色になつてゐるのが、夕闇の中にわかりました。
『何處へ行つた？』
と三十郎。
『こゝ……この邊で見えなくなつたんです。この家へ入つたかも知れません』
『ぢや、踏込んではどうだ』
『やつて見ます』
と藤吉は、萬一の時は賴むといふ心を三十郎に愬へて、何



—岩田專太郎畫—

處かの隱居所かと見える家の門を潜りました。その時です。

ワワ……ワッと叫び出した犬の吠聲！

不意を食つた藤吉、思はず二三寸跳び上りました。しかも吠聲は一頭や二頭でないのです。十數頭の吠聲です。

藤吉は立竦んでしまひました。すると枝折戸の奥から、

『誰方？』

張りのある凜とした聲。

『誰方？』

と再び聲がした方を見ると、

夕闇の中にクッキリと白い女の顔……



血ろくろ傳奇――土師清二作（本文參照）

燃ゆる花

――菊池幽芳作

彼女がナポリで興行して居る時であつた。丁度その時伊太利に漫遊中の信重は始めて彼女を見、そして直ちに戀に陷つてしまつた。それから羅馬に、フロレンスに、ヴエニスに、到るところ彼女の興行して廻る先には必ず信重の姿を見た。惠美子も信重を憎からず思つたけれども、容易に彼に許さなかつた。彼女には優しい一面があると共に、勝氣な男まさりの氣象があつて、巧みに異性の誘惑に打克つて來





て居たのだけれども信重の戀が眞劍で、深く根ざしたものであり、一時の氣紛れでないことを確めてからは、とうとう彼に許す氣になつてしまつた。（本文参照）

——小早川清畫——



──齋藤五百枝畫──

宙に浮く首

大下宇陀兒作

『た、大變です！　人殺しです。妹が殺されました！』

『な、なに、人殺しだつて――？』

二人の巡査は、自分の耳を疑るやうに眼を瞠つた。



ところは信濃の高原、大雪のあとはからりと晴れて、古びた家の屋根には。解けかけた雪がズズズつと辷つてゐる。

バラ〳〵と二人が走つて行つたのは藤の湯の裏手。掻き退けられた雪の中から、ニユツと若い美しい女の首が突き出してゐる。……

（本文參照）

ガラマサどん――佐々木邦作



『おい、何うだい？俸給が上つたよ』
と私は大威張りで、妻に辭令を突きつけた。
『まあ……』

『今度こそは大丈夫だよ』
『オホヽヽヽヽ、私、あなたの俸給が上るなんてこと、一生あるまいと思つてゐましたわ』

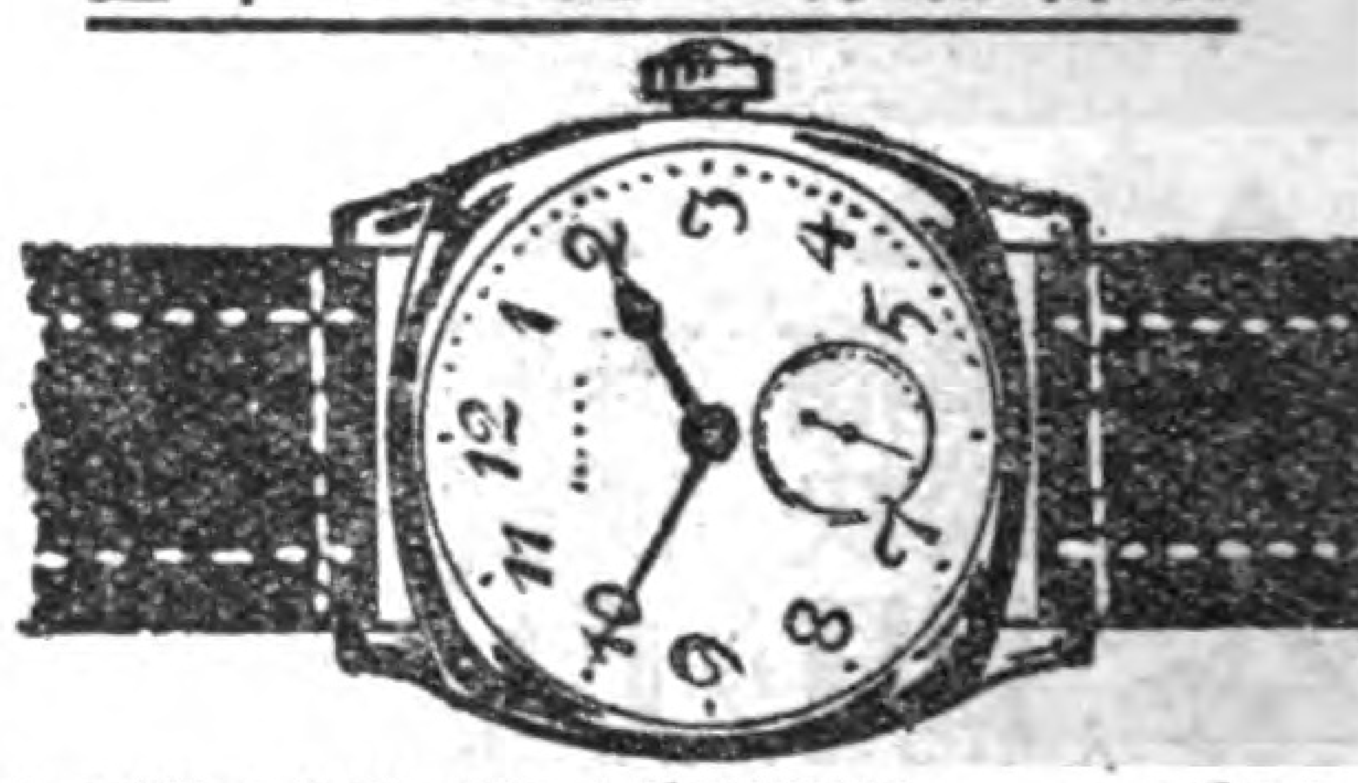
『馬鹿にしちやいけない』
『本當にお手柄よ。でも九年かゝりましたのわ』……（本文參照）

――細木原青起畫

キング愛讀者に限り

緊縮の時代に
實用本位の時計

最新流行一九三〇年型



(A)クローム側器械巻上切天府十五寶石入
米國式ウオルター會社製
特價拾貳圓五拾錢



(B)クローム側器械巻上切天府十五寶石入
米國式ウオルター會社製
特價九圓五拾錢



(C)瑞西國製アンクル(婦人用)十五寶石入
クローム側 特價拾貳圓五拾錢
十八金側 特價拾九圓

節約は時間から

正確で優雅で堅牢第一のこの腕時計で時間を節約して能率を上げませう！

大特賣!!

(圖は何れも實物大・上等サック付)

送料	
内地	十八錢
外地	四十八錢

◆個數に限りあり、お早く御用命下さい◆

本券を切取り御同封御註文に限り特に別記の如き思ひ切つた大特價を以て御送品申上げます。

特賣期間 昭和五年一月末日限り

東京銀座 天賞堂

株式會社
東京 天賞堂 銀座
(振替口座東京五五番)

新年號

土

▲感動實話 乞食上人の大願（家に生れながら深山に入りて仙人となつた清水榮一氏涙の半生！鬼神も感泣する事實物語）……山中峯太郎

▲大冒險譚 獅子に乘つて（恐しい獅子の背に乘つてアフリカの神秘境を探る！一讀何人もアツと驚く大冒險記！）……倉田觀齋

◎内藤富山 二大劍豪晴の一騎打……

◎名優苦心 命の定九郎……

◎特輯讀物 お國よいとこ……横山健堂

◎特輯讀物 偉くなる人相……小西久遠

◎長篇武俠戀 車（日本與試軍記）……吉川英治

◎社會悲劇 若者よ何故泣くか……佐藤紅綠

◎熱血躍る 本傳御前試合……霜田史光

三上於莵吉先生大傑作！

長篇小說 炎を踏む女

新年號から連載される問題のモデル小說！

薄命に泣く純情可憐の美少女と眉目秀麗の大學生の熱戀をめぐる社會悲劇！不幸なる老政治家、惡辣なる守錢奴、情火の捕虜となれる某富豪の令孃、恐ろしき假面をかむる美青年、復讐のため白鬼となつた令夫人等々いろ〳〵の人物が入り亂れて波瀾又大波瀾！涙を以て涙を洗ふが如き悲劇の渦卷は益〻深刻を加へてゆく！世にこれ程悲しく面白い小說が又とあらうか？眞に刮目すべき大傑作である。



◎右は内容のホンの一部此外大讀物十數篇！

定價五十錢（送料五錢）　發行所東京本鄕 大日本雄辯會講談社（振替東京三九三〇）

肺病や肋膜は養生次第で必ず癒る

ドクトル　尾山瑞雄

肺病や肋膜炎は養生次第で必ず治すとのできる病氣であります。それにも拘らず、世上肺病に惱める人々の多いのは何故でせうか？それは病者自身が適確なる療養上の知識をもたないのと、今一つには療養上最も大切なる藥物の選擇法を誤つてゐる爲であります。實に現代は肺病藥の洪水時代とも言ふべく、その數は驚くべき多數に上つてゐます。けれども頑強なる結核菌に對して、眞に徹底的の作用を及ぼし、肺病を根治に迄導くに足る藥物は、なかなか得難き實狀なのであります。

私は藥物研究の爲、米國に數年間留學いたしまして、只管理想的肺病藥の完成に苦心努力いたしました結果、幸ひにも此れならば誰方にでも責任を以てお奬めのできるといふ、最も理想的且合理的なる新しき藥物の創製に成功することができたのであります。それが即ち『ツベルシン』であります。この『ツベルシン』が從來の諸種の肺病藥に比して最も勝れたる特徴は、實に左の三つの點にあります。

(一)結核菌の蠟樣皮膜を溶解してますく喰菌作用を促すのに、著しき效果がある。

(二)結核菌を孤立せしめて諸他の病原菌との混合傳染を未然に防止する。

(三)菌體の毒素を稀釋して患者の最も恐るべき身體の消耗衰弱を喰ひ止める。

以上の三大特徴は、從來の肺病藥には絶對になかつたもので、獨り『ツベルシン』のみが有するものであります。故に本劑の服用に依つて先づ患者は著しき食慾の增進を覺え更に連服する時は、最も短時日のうちに體力の恢復に伴うて熱は下り、盜汗もかかなくなり、喀血や血痰もピタリと止り、次第に血色も生々となつて、今迄減る一方であつた體重もメキメキと增加して來るのであります。然も『ツベルシン』はその藥效の著しいのにも關らず、從來の肺病藥に有勝の危險なる副作用等は絶對にありませんから誰方も安心して服用を續けて頂くことができるのであります。（『ツベルシン』に就ての更に詳しい記事はキング昭和四年七月號三四八頁八月號二六〇頁を御參照くださいませ。）

最後に私は理想的肺治療藥『ツベルシン』の創製者として、世の肺病者諸氏へ大なる確信を以て本劑の御試用をお奬めいたします。事實これ迄、初期の輕症患者は言ふまでもなく、二期三期の重症患者で、今迄に全治の悅びを得てゐられる方は、多數に上つてゐるのであります。されば現に肺病でお惱みの方々は勿論、肋膜や肺尖加答兒で御心配の方も治癒困難の腸結核等の方も、どうぞ一日も早く『ツベルシン』の服用に依つて永久に病苦の境から遁れていたゞきたいとお祈り申上げる次第でございます。

▲右の「ツベルシン」は東京市牛込區原町三ノ二吉松仁平藥局（振替東京六六六一番）か又は大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二九番）へお申越ください。二週間量七圓、五週間量十五圓、十二週間量卅二圓、送料何れも内地十八錢、領土四十五錢。發送は振替又はカハセ着金次第、尙又不便の地は代金引替小包でも取扱ひ何れも嚴重小包にて發送致します。（御注意。初期の方なれば二週間量でも結構ですが稍ゝ進んだ方は五週間量、重症の方ならば初めから十二週間量を注文になればお得であります。）

進呈

△キングで見たる旨を記し、「ツベルシン」發賣元なる東京市牛込區原町三丁目二番地吉松仁平藥局へはがきでお申込になれば、肺病根治に就ての正しき療法を教へた詳細なる冊子を、誰方にでも無代で送つてくれます。御遠慮なくお申込なさいませ。

ニコ〳〵パラダイス



(1) 奥さんの失敗——露店の競り商ひの前、『つまらないわ、さあ行きませうよ』と奥さんが、夫と黙つて引張つた腕は赤の他人『アラッ』と云つたがもう遅い。夫の眼がピカーリ、ピカーリ。



(2) 立ン棒と紳士——『済みませんがチョイト煙草の火を貸しておくんなせい』紳士は仕方なく吸付けたばかりな金口を渡すと、立ン棒はワザと吸口を握つてスパスパ。紳士はムッとして返した煙草を地に叩きつけた。立ン棒『へ、勿体ねえ』と慌てゝ拾ひあげる。



(3) どちらが猿——少々酒を飲し召した職人、面白半分に店先の猿をからかひ始めた。そしてキャッ〳〵とはしやいでゐるうちに、どうやらその顔がだん〳〵猿に似て来る。これを見た悪太郎、『ヤーイどちらが猿だアい』

肺病や肋膜は養生次第で必ず癒る

ドクトル　尾山瑞雄

肺病や肋膜炎は養生次第で必ず治すとのできる病氣であります。それにも拘らず、世上肺病に惱める人々の多いのは何故でせうか？それは病者自身が適確なる療養上の知識をもたないのと、今一つには療養上最も大切なる藥物の選擇法を誤つてゐる爲であります。實に現代は肺病藥の洪水時代とも言ふべく、その數は驚くべき多數に上つてゐます。けれども頑強なる結核菌に對して、眞に徹底的の作用を及ぼし、肺病を根治に迄導くに足る藥物は、なかなか得難き實狀なのであります。

私は藥物研究の爲、米國に數年間留學いたしまして、只管理想的肺病藥の完成に苦心努力いたしました結果、幸ひにも此れならば誰方にでも責任を以てお奬めのできるといふ、最も理想的且合理的なる新しき藥物の創製に成功することができたのであります。それが即ち『ツベルシン』であります。この『ツベルシン』が從來の諸種の肺病藥に比して最も勝れたる特徴は、實に左の三つの點にあります。

（一）結核菌の蠟樣皮膜を溶解して、ます〱喰菌作用を促すのに、著しき効果がある。

（二）結核菌を孤立せしめて諸他の病原菌との混合傳染を未然に防止する。

（三）菌體の毒素を稀釋して患者の最も恐るべき身體の消耗衰弱を喰ひ止める。

以上の三大特徴は、從來の肺病藥には絕對になかつたもので、獨り『ツベルシン』のみが有するものであります。故に本劑の服用に依つて先づ患者は著しき食慾の增進を覺え更に連服する時は、最も短時日のうちに體力の恢復に伴うて熱は下り、盜汗もかかなくなり、咯血や血痰もピタリと止り、次第に血色も生々となつて、今迄減る一方であつた體重もメキメキと增加して來るのであります。然も『ツベルシン』はその藥効の著しいのにも關らず、從來の肺病藥に有勝の危險なる副作用等は絕對にありませんから誰方も安心して服用を續けて頂くことができるのであります。（『ツベルシン』に就ての更に詳しい記事はキング昭和四年七月號三四八頁八月號二六〇頁を御參照くださいませ。）

最後に私は理想的肺治療藥『ツベルシン』の創製者として、世の肺病者諸氏へ大なる確信を以て本劑の御試用をお奬めいたします。事實この『ツベルシン』の服用に依り、初期の輕症患者は言ふまでもなく、二期三期の重症患者で、今迄に全治の悅びを得てゐられる方は、多數に上つてゐるのであります。されば現に肺病でお惱みの方々は勿論、肋膜や肺尖加答兒で御心配の方も治癒困難の腸結核等の方も、どうぞ一日も早く『ツベルシン』の服用に依つて永久に病苦の境から遁れていたゞきたいとお祈り申上げる次第でございます。

▲右の「ツベルシン」は東京市牛込區原町三ノ二吉松仁平藥局（振替東京六六六一番）か又は大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二一九番）へお申越ください。二週間量七圓、五週間量十五圓、十二週間量卅二圓、送料何れも內地十八錢、領土四十五錢。發送は振替又はカハセ着金次第、尙又不便の地は代金引替小包でも取扱ひ何れも嚴重小包にて發送致します。（御注意。初期の方なれば二週間量でも結構ですが稍々進んだ方は五週間量、重症の方ならば初めから十二週間量を注文になればお得であります。）

ミックスパラダイス



(1)奥さんの失敗――露店の盛り商ひの前、『つまらないわ、さあ行きませうよ』と奥さんが、夫と黙つて引張つた腕は赤の他人『アラッ』と云つたがもう遅い。夫の眼がピカーリ、ピカーリ。

(2)立ン棒と紳士――『済みませんがチョイト煙草の火を貸しておくんなせい』紳士は仕方なく吸付けたばかりな金口を渡すと、立ン棒はワザと吸口を握つてスパスパ。紳士はムツとして返した煙草を地に叩きつけた。立ン棒『へ、勿体ねえ』と慌てゝ拾ひあげる。



(3)どちらが猿――少々酒を飲し召した職人、面白半分に店先の猿をからかひ始めた。そしてキャッ〳〵とはしやいでゐるうちに、どうやらその顔がだん〳〵猿に似て来る。これを見た悪太郎、『ヤーイどちらが猿だアい』

人生のユーモアは、至るところに轉がつてゐる。



1

(1) 好い機會

場所は、百貨店の家具賣場。鏡臺の前。

『オイもう止さんかい』

『一寸待つて頂戴、今少しよ』

『早くしないと人が來るよ』それでも夫は殊勝らしく妻がお白粉を直す番をしてゐる。

(2) 偶然の皮肉

ジリ〳〵しても、中々自働電話がかゝらない。成程見ればガラスに『不良』と書いてある。だが待てよ、『不良』なのは電話機の方か、それとも、ウツカリそこへ背中をつけてゐるモダンガールの方なんか‥‥。



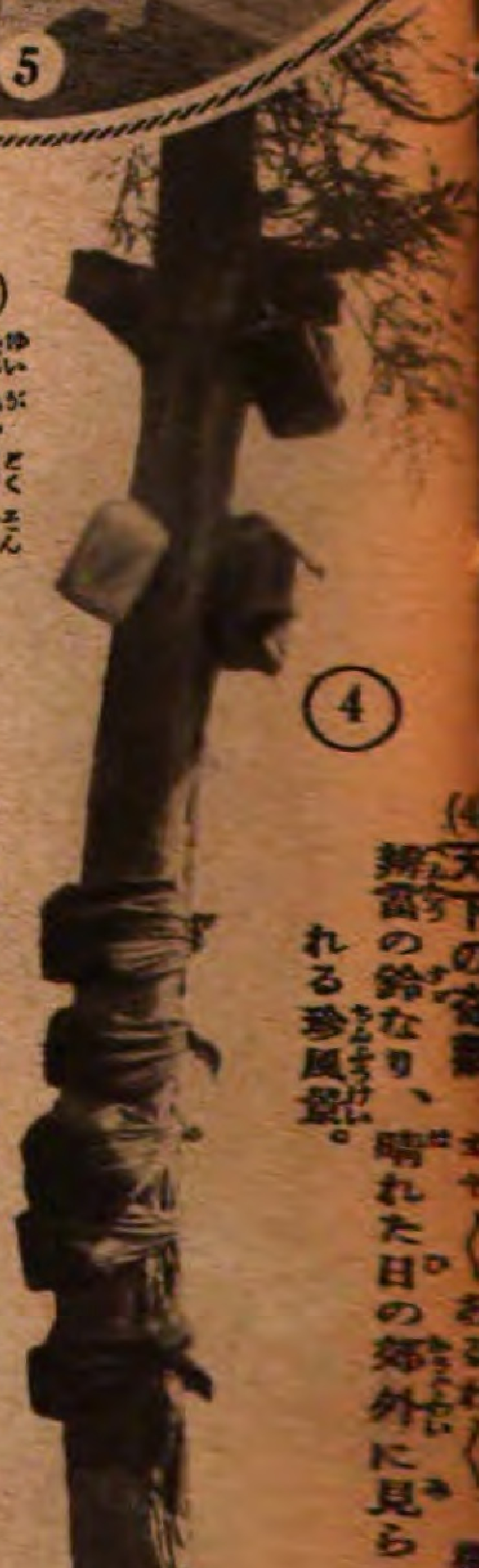
2

(3) ノンキナ トウサン

『サアこれで大丈夫だ』と子供を繩に結ひつけたまゝ、悠々と新聞を讀む。流石はお父さんだ。子守をするにも要領がよい。



3



(4)天下の奇觀 ヤ〳〵あるわ〳〵、樹にお辨當の鈴なり、晴れた日の郊外に見られる珍風景。



(5)唯我獨尊 日本橋の大通りに現れた今様ドンキホーテ。自動車やオートバイには尻目もくれず、驢馬に乘つて意氣揚々とパツカ〳〵。



(6)七ツ道具 ラケットにマンドリンにお裁縫に教科書にコンパクトに……

現代の女學生は七つ道具で身をかためてゐる。



(7)圓かな夢 土管の中に入つたり、出たりして遊んで居た子供、何時か遊び疲れてスヤスヤ眠つて了つた。子供は本當に罪がない。

①

(1) 今更ながら

新婚旅行に出かけた夫婦、汽車の中で並んでゐるのも氣まりが悪いので、少し離れて腰かけてゐると、不遠慮のお客がヌーッとその間に割込んで了つた。御兩人今更乍ら殘念やら恨めしいやら……。（しげを畫）



②

(2) 俄雨

折からの俄雨、紳士も淑女も、あわてふためいて店頭の日覆の下に逃げ込む。そこへゾロゾロ圓タクの行列、『如何です？如何です？』と運轉手が聲をかけても更に乘り手がない。成程紳士淑女にも都合のよい緊縮時代だて。（左行畫）



③

(3) とんだ時の氏神

セチ辛い世の中によくあるやつ。『ナニ一圓？そんなに安く賣れるもんか、さては盜んで來た品物だナ』『何をッ！』と馴合の喧嘩に人を呼んで、巧にローズもの、萬年筆を賣らうといふ寸法。そこへ本物の喧嘩と早合點して又ヌーッと仲裁に入つたのは柔道三段の猛者。兩人引くに引かれずオヤ〳〵。（田保布畫）



④

(4) 緊縮奥樣

奥樣甲『この間からずうッと頂くばかりで、ちつともお返ししませんで……サアどうぞお遣ひ下さい』

奥樣乙『オヤマア、これはマア……』

只のお湯でお禮とはサテも考へも考へたり。

（邦坊畫）





⑤

(5) 天の配劑

動物園で毛斷孃二人。

『鹿の足つて隨分細いわネエ羨しいわ』

『洋裝したら似合ふでせうネエ』

互ひに自分の足をかへりみて、

『アラ早く象の所へ行きませうよ。人が來るわ』

（[illegible]三畫）



(6) 罪は繪に在り

展覽會場で繪に見惚れてゐる男、思はずレデーのお尻を鉛筆でチクリ、

『イヤこれは失禮、つい見惚れて、後へ退つて來たものですから…イヤ失禮々々』（千帆畫）

⑥



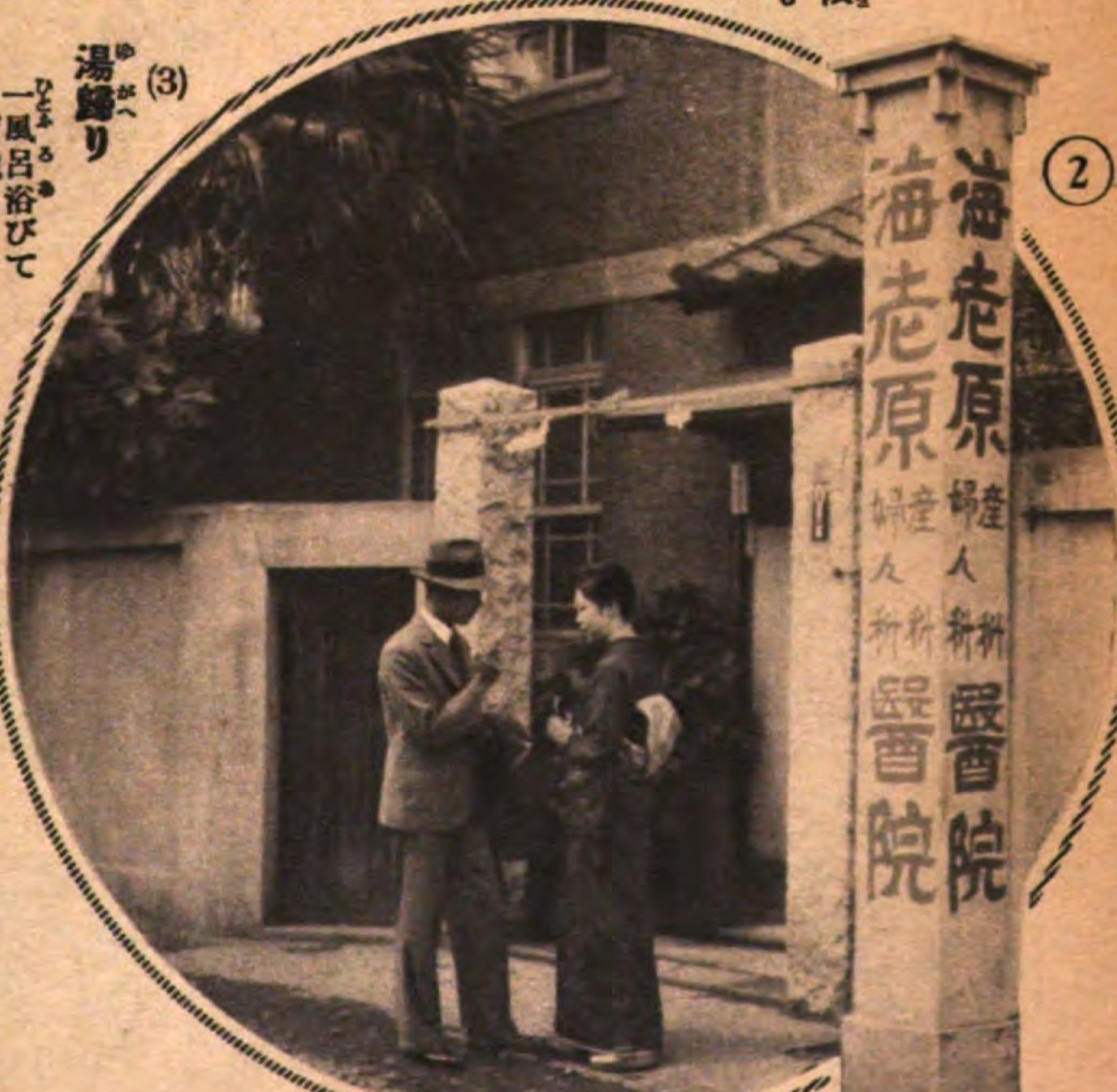
①

(1) 馬飛び

ある日の海岸。パッと飛んでゐるのは女性、馬になつてゐるのは男性。からして十代から男性を征服？の稽古をして行く女性の將來恐るべし／＼。

(2) 押問答

『いゝからお入りよ』『だつて……あなた……』いつも從順な若夫人、今日に限つて中々夫の言葉に應じさうもない。見れば産科醫院の門前だ。ナル程、ナル程。



②

(3) 湯歸り

一風呂浴びてよい氣持にブラリブラリ、だが好漢惜しむらくは着物の裏返しに氣がつかない、サテ途中で誰かに×



③

×合はねばよいが……



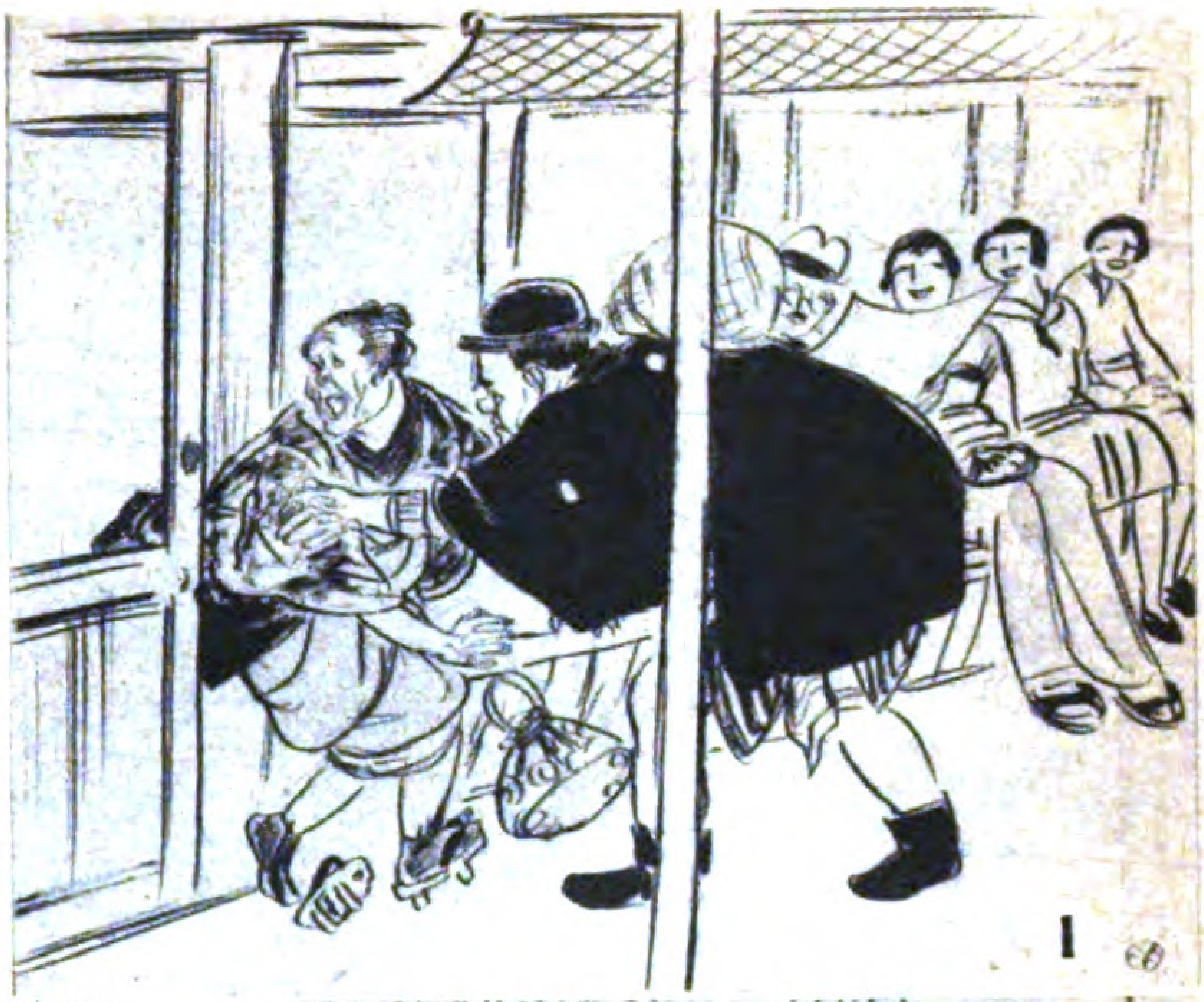
(4)江戸ツ兒『雨がナンチェ〳〵』と江戸ツ兒は莫迦に負惜しみが强い。お花見に雨が降り出しても、お蓙さんよろしくの姿で頑張る。



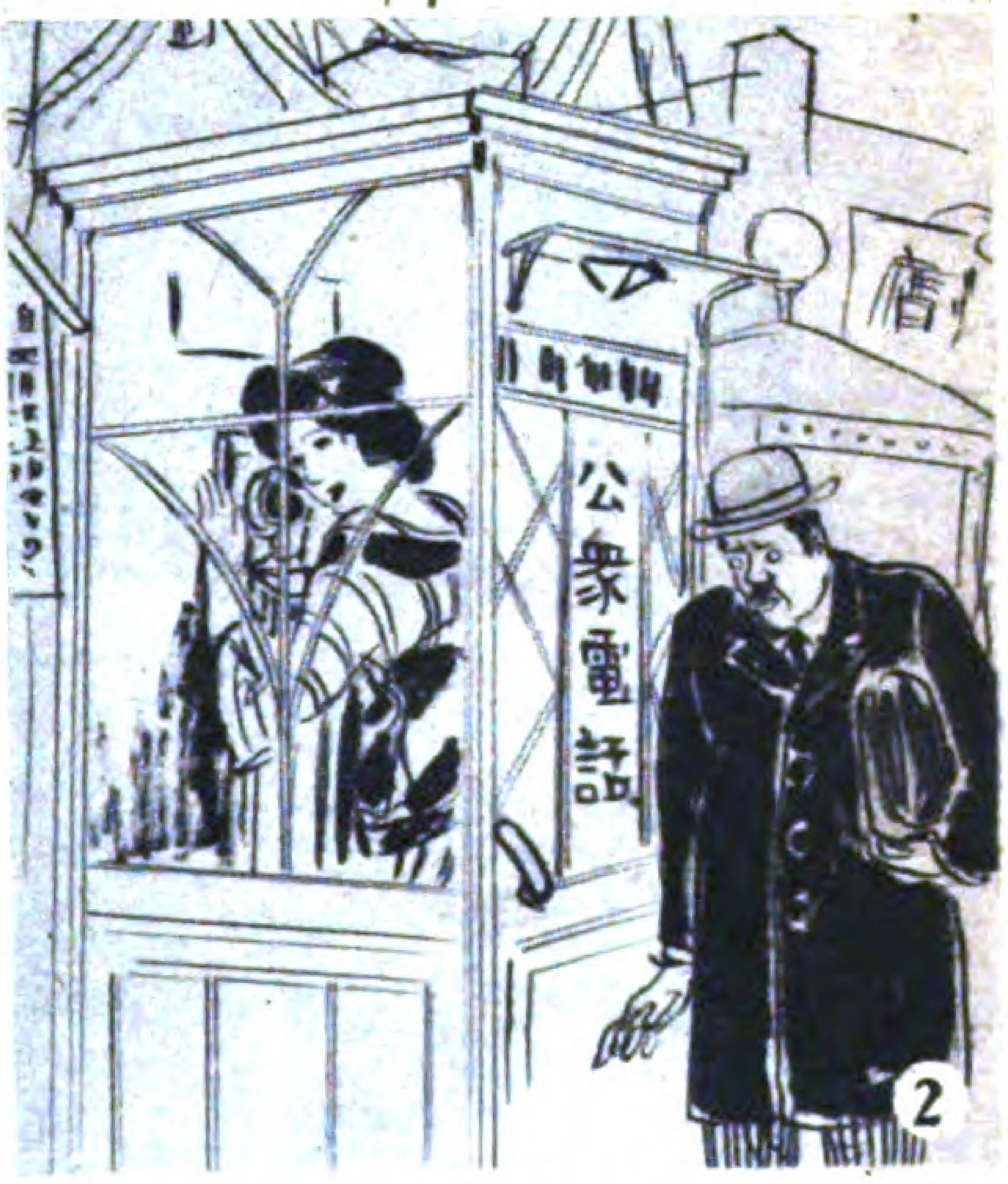
(6)自轉車行進曲
日傘を片手に全速力。洋裝斷髪のモダン孃が、自轉車で市中を練り廻るのも近代風景の一つ。



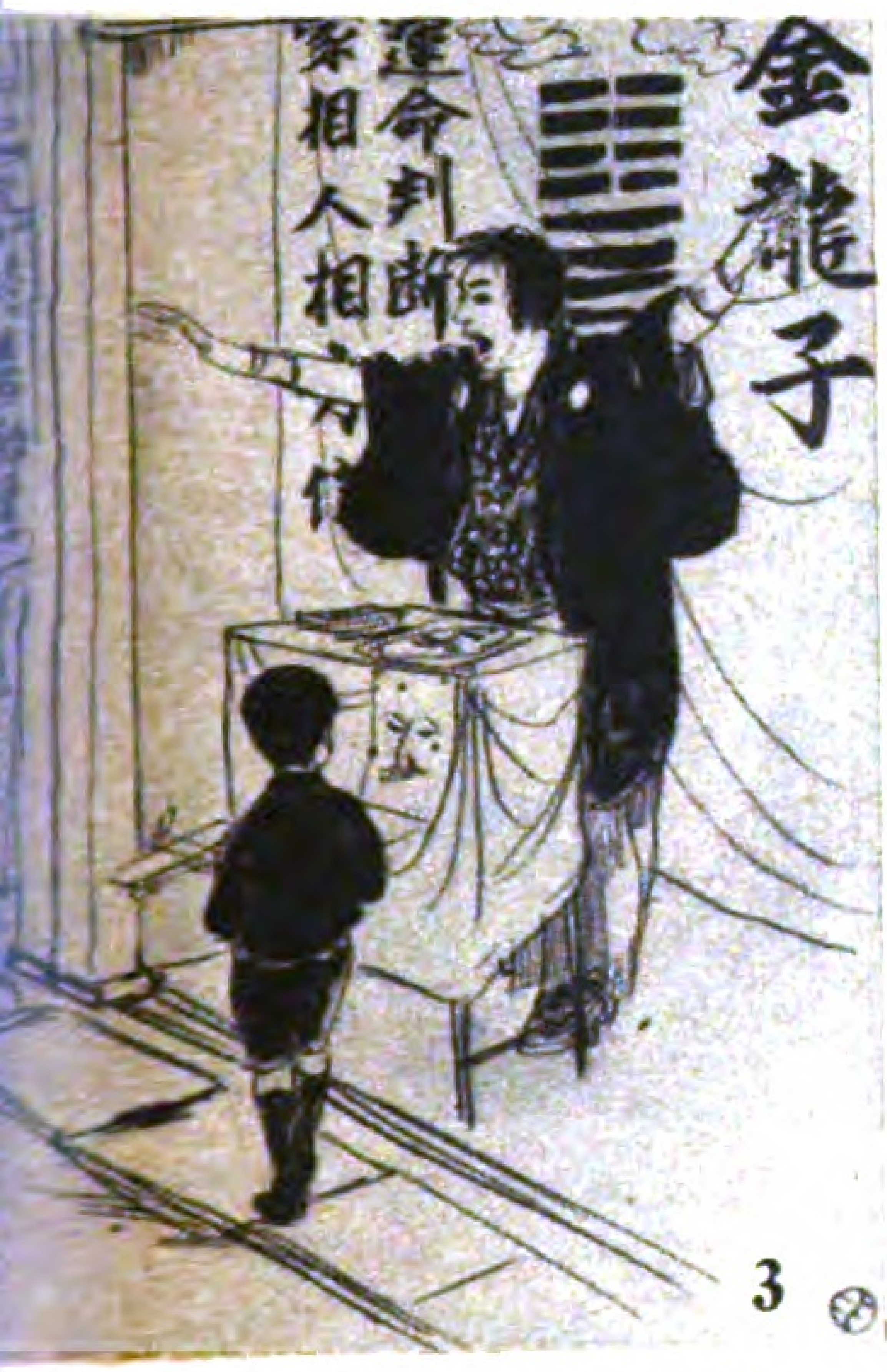
(5)喧嘩長屋
到頭又はじまつた。『燒つぎ屋夫婦喧嘩の門に立ち』ガチャン、ガラ〳〵。ほらら何かこはれるぞと、聞き耳を立てゝゐるのは燒つぎ屋ばかり。年中、喧嘩をやつたり、仲裁をやつたりして日を暮してゐるとは、いそがしい長屋もあつたもの。



(1) **電車無情**＝東京の省線電車に乗つた田舎出のお婆さん、ウッカリしてゐる間に、自働開閉式扉にお尻をはさまれて了つた。『誰だよッ、冗談するでねえ、これ離せッてばよう』



(2) **師走の自働電話**＝身體が幾つあつても足りないやうな忙しい師走、大急ぎで自働電話の處に馳せつければ女の先客、『アラさう？ 嬉しいわね、本當？ 又かつぐんぢやなくつてゝ、、』と電話はいつかなやみさうもない。待つてる男ジリ〳〵し乍ら唾をペッペッ！



(3) **運命判斷**＝『サア〳〵緣談、待人、身の上判斷……』と大聲で喚き立てれど、この不景氣に人ッ子一人寄つて來ない。しまひには喋りくたびれて、ペチャンとへこんだ自分の腹にソーッと手をやつて見る占ひ者。



(4) **子は穴に**＝海水浴の夫婦者、子供は砂の穴へ入れてパチャ〳〵。『お母ちやん、もうキャラメルは食べッちやつたよう』でも平氣な兩親。

この案内はどうぞ御保存下さい。お買物をなさる時、キットお役に立ちます。

代理部重要品の

確實な廉價提供を

▼代理部へ御用命の節は

必ず振替用紙を御使用下さいませ

▼振替貯金は料金も安く最も安全で便利な方法であります。

尚振替用紙は何處の郵便局にもあり又本社へ御申越しになれば差上げます

但し多少期日が普通郵便よりおくれる場合もありますが之が一番確實な送金法であります。

▼郵便為替又は銀行為替で御送附下さいましても結構で御座いますが、その場合は必ず書留郵便に御願ひ致します。

▼御註文の品名は勿論御住所御氏名等は是非解り易くハッキリと御書き下さい。

御下命次第最も迅速に御送り申上げる様手筈は何時も備つて居ります。

▼皆様の代理部

代理部では最も確實な品物を選擇し「親切」と「迅速」とを標語とし常に御用命に應じて居ります。

どうぞ盛んに御利用下さい

こゝに掲げたものは代理部取扱品の一部分でこの外如何なる品物でも皆様の御便宜を計り特に御取次の便を計る事に致します

◇……どうぞ盛に御利用下さい。

御利用下さい

使ひよいので評判の 小型パインミシン



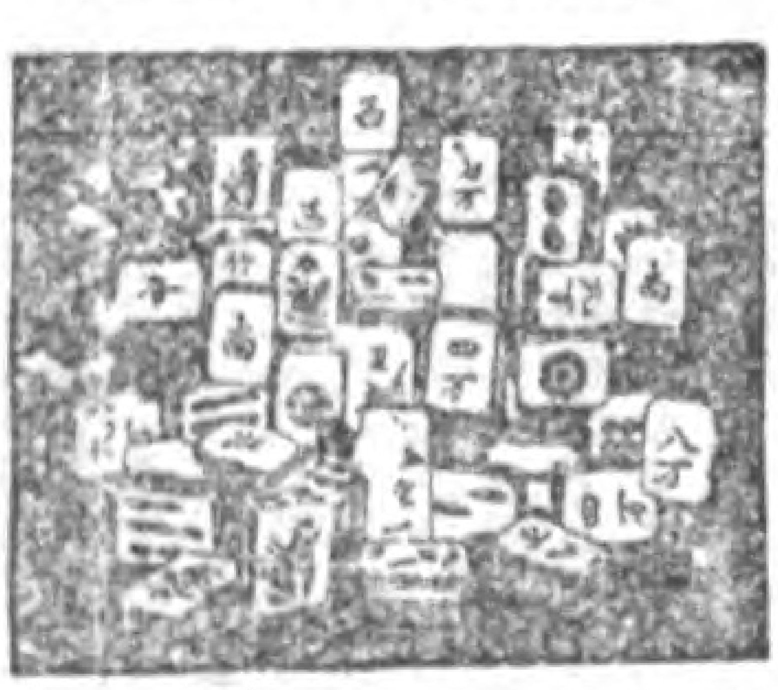
小型ですが大型に劣らぬ能力があり使用法が頗る簡單ですからどんな素人にも婦人や子供にも容易に使用出來ます。本機式で上糸下糸自由殊に調子のよいのもこのミシンの特長です。特價調整貳拾四圓臺木製蓋付參拾圓荷造賃五十錢送料[illegible]分本社負擔カタログ御請求者に限り進呈致します。

マーヂヤン 麻雀

=大特價大廉價=

純支那製、高級品

大流行の支那遊戲



厚肉牛骨製の逸品揃

何れも上等容器計數器付

▼一號特價貳拾八圓

▼二號特價參拾圓

▼三號特價參拾貳圓

▼四號特價參拾五圓

▼五號特價四拾圓

御註文の際何號品と御指定を乞ふ

◉麻雀遊び方 一部 一圓

送料（内地四拾錢 外地壹圓）

カタログ進呈

御申込次第誰方にも美しいカタログを差上げますドウゾそのカタログに依つて何なりと御用命下さい何時も用意して御待ち申して居りますから。

◉特にお願します

代金引換は早い様でおそくそれに色々手數もかゝり料金もかさみ比較的高いものになります故、矢張り振替貯金の御利用が一番御得策で一番確實で御座います。

東京市本郷區駒込坂下四八

大日本雄辯會講談社 代理部

〔振替東京六六二九番〕

電話小石川(85) 3,596 5,981 7,088 1,510 1,511
225 226 227 260

家庭常備
特効藥 滋養劑

痛みと創によく効く
銀から取った（外用藥）シルバーゾルの奇効

佐藤工學博士の發見になる銀の微粒子即ち銀コロイド製劑で外用にして神經痛ヤリユーマチス腐のコリ打身あらゆる痛みの病を始め切創一切皮膚病一切疥疾火傷等に驚くべき卓效を奏する不思議な藥であります。

價は軟膏（大）壹圓（小）五拾錢外にシルバーゾル練創膏（大）壹圓（小）五拾錢送料內地拾貳錢海外四拾五錢

病弱、老衰、生殖器不能等の新若返り貴藥（精壯）

和漢洋のあらゆる方劑の長をとり苦心創製され大新高貴藥で尊くも身心の青春の湧き來たる人體各種「ホルモン」の刺戟卽ち發膿素を圓滿完全に絕えず湧き立たしむるに偉效あるもので老衰者を若返らせ病弱神經衰弱性の不全等を回復せしむるに最良の藥劑であります。

藥價小罎（六十錠入）約一週間分金貳圓五拾錢大罎（百八十錠入）約三週間分金七圓送料內地拾五錢僻土五拾錢

咳一切に奇效ある
不思議な熱帶藥草

東印度の土人が神の藥と稱し珍重して居る熱帶地特有の不思議な藥草ダウンチリメンは流感、肺病、肺炎、百日咳、肋膜、喘息等咳の伴ふ諸病に奇效を奏するので發表以來實驗者間で非常な評判となつて居ります（原草一ケ月分貳圓）錠劑小瓶十五日分貳圓八拾錢、三十日分五圓、送料內地拾五錢僻土五拾錢

肋膜炎の塗擦藥
プロゲノール

山田博士發見のプロゲノールは嗜患部に塗布する丈で痛みも滲液も目に見えて消散その效果は實に百發百中と申してもよい位臨床醫家を始め多數實驗者は何れも驚嘆されて居ります。

藥價 八日分壹圓五拾錢、十六日分六圓五拾錢、五週間分拾貳圓
送料 內地拾五錢、臺灣參拾錢、滿鮮五拾錢

おでき腫物を切らずに治す
內服藥スヾノキ錠

面疔、よう、ねぶと、耳だれ、ニキビの寄り等すべて黃色い膿を持つはれものおできの類はタヾ內服するだけで何等塗布藥などの手術をせずとも短時日間で膿を出し初期のものは消失させ容易に根絕されます、おでき腫物に惱む人はお試し下さい必ず喜ぶべき效果が得られます。八日分壹圓五拾錢十六日分貳圓五拾錢廿四日分參圓五拾錢四十日分五圓。　送料（內地拾五錢 僻土五拾錢）

沖野岩三郎先生御推奬
石津博士のテッゾール



鐵劑の效力を眞に理想化したテッゾールを常用なされば、補血上非常な效力があるは勿論、然も他の鐵劑と異つて美味で茶やコーヒーと共に飲んでも差支なく吸收が速かであるから胃腸を害するとか副作用を起すことは絕對になく、幼兒や姙婦にも最適な滋養補血料であります、特に不眠症の人冷性の人貧血性の人等は是非御試用なさいませ。

一瓶貳圓八拾錢　送料三瓶まで拾貳錢海外四拾五錢です。

蟻の性質を巧に應用した
ありよけ液

蟻の通行場又は蟻の巢等へ數滴たらした丈で附近には一疋も姿を見せなくなります。

小瓶壹圓、中瓶貳圓、大瓶參圓八拾錢送料內地拾貳錢僻土五拾錢

痔疾患者の福音
內服藥ヘモール

何等外科的手術をせず單に內服するのみで步行不能の痔核症の人が八日目に全治し脫肛が十數日で恢復した等實例が澤山ある評判の內服痔疾藥です。

ヘモールは一週間分參圓、送料內地拾五錢僻土五拾錢

腎臟病に奇效ある
天然藥「木さゝげ」

本誌に發表されて以來その實效はそれからそれと傳へられ評判となつて居ります。百分の幾らと云ふ程の蛋白が增加した重い腎臟病でも之を用ひると間もなく蛋白は千分の幾らと云ふ程になり浮腫が見放した重症が一夜にして輕快と云ふ樣な全く不思議な夢の樣な實例が澤山あります。是非御試用下さい偉大なる效驗に必ず驚喜されるでせう。一ケ月分壹圓貳拾錢、送料內地拾貳錢僻土五拾錢

御家庭の常備藥
眞正支那六神丸

腹痛、頭痛、下痢、嘔吐、胃痙攣等その他突發的な病氣は一寸手のつけ樣もないものですがそんな場合どの六神丸はどんなに役立つ事でせう、又心臟病腦病その他慢性諸症にも偉大な奏效がある故是非家庭常備品の一に加へて下さい。

藥價
小兒用百粒入壹圓
大人用四〇粒入貳圓　一二〇粒入五圓
同　七〇粒入參圓　三〇〇粒入拾圓
送料　內地拾五錢海外五拾錢

溫浴藥「白仁」

他の藥や療法で效のない神經痛リウマチス頑固な皮膚病婦人病等がこの白仁で拭つた樣に快癒したと云ふ例が澤山あります。白色の粉末ですがその主成分は鹽だと云ふことですから在來の湯の花等と異り奇效があるのも當然と思ひます

十五日分　壹圓五拾錢
一ケ月分貳圓八拾錢送料拾八錢

胃腸病者 虛弱者に
にんにく丸

にんにくの嫌な臭氣を去り特に有效成分を抽出し小兒や婦人にも服みよい丸藥としたもので慢性急性の胃腸病、下痢、便祕、消化不良、などに用ひてよく特に胃腸の機能を整へる事妙であります、胃腸に惱む人は勿論、病弱に傾く人、精力元氣のない人、冷え性の婦人方などに是非御用ゐすゝめ致します。

十日分壹圓七拾錢、一ケ月分四圓五拾錢、送料內地拾五錢、海外五拾錢

毛虱驅除藥（ペヂクロス）

安全無害で用法簡易どんなひどい毛虱でも僅か五分間で死滅せしめる卓效があります慶應醫科大學其の他の諸大病院で推奬されて居る評判の毛虱驅除藥。

小瓶　六拾錢　送料內地拾五錢
大瓶　壹圓五拾錢　僻土五拾錢

村山ドクトル百瀨田所兩博士推奬
血壓低下劑プロモール

血壓を低下させ動脈硬化症を治し恐るべき中風や腦溢血を防ぐ最良劑として多數の專門醫家に賞用され又同病間に非常な好評を頂いて居ります血壓低下劑「プロモール」は十日分貳圓、一ケ月分五圓
送料內地拾五錢海外五拾錢

效驗著しき
わきが塗擦劑

「ゼット」は在來の藥と異り發汗分泌を止める強烈な作用があるので一度つけると臭氣はピッタリ止り偉大なる效果に實驗者が驚喜されて居ります。粉末劑一瓶定價貳圓五拾錢送料內地拾五錢

手や足の汚れは常に洗へども心の垢を洗ふ人なし

内服毛生薬養髪劑
セラシンの効験

有名な生理學者エンツンツ博士發表になつたもので、ありふれた塗布劑と異り内服して直接毛根の養分を補給し毛髪の發育助長を計る化學的毛髪榮養劑ですからその效力には多大の實證を博して居ります。

三十日分一瓶五圓、外用を併用すると更に一層有效、外用一瓶貳圓送料内地貳拾錢海外五拾錢

獨逸製痔疾薬

「ヘデンザ」は伯林大學臨床科を始め歐米各國の醫界に最も合理的な痔疾藥として好評を博して居る有名な藥であります。

價 十回分チューブ入壹圓五拾錢送料拾五錢海外五拾錢

諸方藥學士創製
いぼ、黒子除去藥

黒子やいぼは見難いものですから本社發賣のヒドロアーミンを用ひますと不思議の様にひどい跡も無くきれいに取れてしまひます。

定價 壹圓 送料 内地拾貳錢 海外 四拾五錢

米國ムッター博士創製
月經快通劑

米國製通經劑エメナゴータは頑固な月經とまりにも過少症にも副作用なく效果をあらはします。

三十錠入壹圓、百錠入八圓、送料内地拾五錢、領土五拾錢

新案特許
月經帶いらず）

清潔された脱脂綿とガーゼと血液を吸收する獨特の藥品を用ひて作つた錠で一日に二三錠の使用により月經中の御手當は極めて手軽に簡單に出來ます。

普通十五錠入五拾錢、小錠十七錠入五拾錢、送料十錠まで内地拾貳錢、領土四拾五錢

春日氏創製の滋養素

何人にも適する滋養劑で病弱者特に肺病患者に賞用されて居りますこれによつて驚くほど體重を増加したと多數實驗者は喜ばれて居ります。

一瓶貳圓送料内地拾貳錢外四拾五錢

婦人の性的障害特效劑
フリヂドール

獨逸デートリヒ博士の發見した内分泌製劑と同一の成分で性的障害即ち陰萎性感減衰生殖機能衰弱特に婦人の不感症に根本的の奏效を期する評判の内服藥であります。

十六日分六圓五拾錢、三十二日分拾貳圓、送料内地貳拾錢、海外六拾錢

評判の整腸藥

ニグリンは下痢、腹痛、吐き下し等に頓服的の卯效あり五年十年の慢性胃腸病にも大效があります。

一週間分壹圓貳拾錢、二週間分貳圓五週間分四圓五拾錢、送料内地拾五錢領土四拾五錢

激しい發作にもタッタ一匙
喘息のエキス劑



這般子爵をはじめ多數名士中にもこの喘息エキスを愛用される者は少くなく何れもその顯著な效果に驚嘆されて居ります實にその效力は注射以上との定評であります。

藥價 三十回分貳圓五拾錢 六十回分四圓八拾錢 百回分七圓 送料内地拾五錢 海外五拾錢

（申込次第見本及喘息研究誌進呈）

三日で治る
ツハリの妙藥

多くの姙婦嘔吐の方々に用ひて效果を立證されて居る確實なツハリ藥で、大概のものが三日で治ると評判されて居ります。

價三日分 壹圓拾錢 送料内地拾五錢領朝樺四拾五錢

害なくやせる藥

獨逸フランクフルト大學にて發表した新痩身劑で有害な從來のやせる藥と異り肥つて見惡い容姿も少しの害もなく確實に思ひのまゝに美しくなれます、痩身劑アイマーは一週間分壹圓、十五日分五圓五拾錢、一ケ月分拾圓送料内地貳拾錢領土五拾錢

精力充實 精力増進 湧力素

精神的疲勞に原因する早老衰弱者も身心衰弱者も病弱者もこれを用ひれば不思議の様に鋭敏氣力が泉の如くに湧き出て身心共に強健となり活力を喚起する靈妙な效能ある滋養劑で特に老人身心衰弱者の特效藥として推奨いたします。

三百粒入 貳圓五拾錢
七百粒入 五圓
千五百粒入 拾圓
送料内地拾五錢、臺灣樺太拾錢、滿鮮五拾錢

百日咳の良藥（フステン）

軍醫總監村松氏が發見創製され今日まで幾百千の幼き患者を救つた評判の專門藥であります。治療困難とされ居るあの百日咳に斯様な心強い藥の出來たことは病む子供にも又世話する親達にとつても嬉しいことであります。一週間分貳圓送料内地拾貳錢外四拾五錢

メンソレータム
（家庭常備藥）



家庭の小萬能とも呼ばれて居る本劑は一寸した怪我に用ひても良くハタケ、インキン、水蟲、霜燒にされた時その他すべて皮膚病、外傷、痛みに特效があり又化粧用にもなり大層重寶な家庭藥であります。

小四拾五錢、大九拾錢、特大壹圓八拾錢、送料内地拾貳錢、海外四拾五錢

強力増進保健飲料
吾藥エモヂン

文部の證明から創出する強壯の靈藥で老衰を若返らせ近眼を恢復し視力を増進させて體を丈夫にし又貧血を明晰にして不眠症、神經衰弱症にも著しい效を奏します一寸コーヒーに似て風味も良く保健飲料として一般家庭に常用されて居ります。

價十七日分壹圓五拾錢、五十五日分四圓、送料内地拾五錢、領土五拾錢

獨逸製治痳劑
アルホビンの效驗

數多い痳疾藥中最も理想的優秀なものとして御奨め出來るのは獨逸グーデック會社の此の「アルホビン」でありませう、服用後二三日で尿を清澄にし不快な痛みは數日で軽減させ急性痳も慢性痳疾も迅速に治癒に導きます。

定價は十日分參圓五拾錢
送料内地拾五錢海外四拾五錢

頭の藥ハレル

ヒドイ頭痛も只の一服か二服で五分もたゝぬ間に忘れた様に退散し頭は軽く晴々としてきますその效果實に百發百中常に頭痛に惱む方平素腦を勞する方は勿論勉強や事務で疲れた頭もボンヤリした頭腦もこれで忽ち恢復數倍の氣力が湧き出てます、つまりハレルは、獨逸のドクトルと謂ひこれこそ御常備藥の一個に御加へ下さい。

藥價 小 五十錠 壹圓 送料内地拾貳錢
中 一[illegible] 貳圓
大 二[illegible] 四圓 領土四拾五錢

一夜で效驗が分る
白帶下新坐藥

ひどい下り物も「エキソ」を用ひたその日からピタリと止り、清爽な氣分となります、と同時に不快苦痛な炎症やたゞれもスツカリと治す獨特の坐藥で、專門家も最も合理的有效の白帶下藥だと賞讃されて居るのであります。六球入(十二日分)貳圓參拾錢(倍量入)四圓五拾錢送料内地拾五錢領土五拾錢

眞に色白くなる 專賣特許ウテナ

どんなに色の黒い方でも一度つければすぐその效力がわかるので大評判です。顔色の惡い方、垢ぬけせぬ方、荒れ性の方、ニキビ吹出物のでき易い方、小皺を除きたい方等のために理想的美顔料で、赤津博士が有効を證明されるものです。德用三圓、愛用二圓、試用一圓送料内地十八錢、海外四十五錢

諸病に効く放射能原素
ラヂオカルク

北海道の帝室御料地内で發見された貴重な放射能藥で温浴に濕布に内服に塗布に用ひてあらゆる難症痼病に不思議な效驗を發し特に急性慢性胃腸病、皮膚病、婦人病、神經痛、リウマチス、氣管支加答兒、喘息、痔疾等に著效が認められます。粉末(大)六圓送料内地四拾錢海外七拾錢(中)參圓貳拾錢送料内地貳拾錢海外六拾錢(小)壹圓六拾錢送料内地拾五錢海外五拾錢座藥(子宮坐藥)六個入壹圓貳拾錢二個入五拾錢送料内地拾貳錢、海外四拾五錢　詳細說明書進呈

精力と根氣を補ふ
支那最古の高貴藥「壽仙」

效驗頗る妙なるは神經衰弱と陽性の不全……不眠、健忘、疲れ易る、煩悶みする、怒狂り易い、焦燥て、或は陰萎、早漏夢精、腎虚せぬ、全く不能、ヒステリー、とか云ふ人が用ひられたら必ず驚嘆する偉大な效果があります。六日分參圓十二日分五圓五拾錢送料内地拾貳錢海外四拾五錢

子寶妙藥
=肉蓯蓉=

支那四川省產のもの之は身體を温める作用があり精力を增し神經衰弱にも奏效があり特に不姙症の婦人が之を用ひて子寶を得たと報告がしてあります。約十五日分貳圓、三十日分參圓八拾錢送料内地拾五錢領土五拾錢

るゐれき内服藥

飯田莊平氏發見の「蘇生」は幾多同病者を救つたので非常な評判です十日分二圓七十錢、二十日分五圓三十日分七圓、送料内地拾五錢海外五拾錢

耳鼻病の内服藥
(チクノール)

總ての耳鼻病に驚くべき卓效がある新藥で特に蓄膿症には不思議と思はれるほど奏效します。十日分參圓五拾錢、二十日分六圓五拾錢　送料内地拾五錢、臺灣鮮四拾五錢

藥湯の素
好評のエマナチン

これを風呂に入れますとポカ〳〵とよく暖まり決して湯冷めせぬ神經痛リユーマチス特に婦人病痔疾に偉效があります。一週間分貳圓、二週間分參圓、送料内地拾五錢、海外五拾錢

アイヌ人の秘藥
イースクリン

數百年の昔からアイヌ民族間に萬能秘藥として傳へられてゐるイースクルスと云ふ木の實から秘成分をとりそれに最良の高麗人參精を配劑したもので内服して衰弱を回復させ腎臟病や婦人病、リウマチス、胃腸病その他の諸病を癒し塗布して切り傷、火傷、凍傷等の外症を快癒する特效があります。十五日分貳圓、三十五日分四圓送料内地拾貳錢、領土四拾五錢

シユメルツ博士發表
鎭痛内服斷劑

シメリーゼンと云ふ内服藥で神經痛、リウマチス、腰痛、頭痛、月經時の痛みその他種々の病氣に依つて起る痛みを根本から治すので評判です。一週間分貳圓五拾錢、二週間分四圓五拾錢、送料内地拾五錢海外五拾錢

内服白色新劑
(デルモペルス)

皮膚科の泰斗ヘブラ博士發見の内服白粉で用ひて害なく特に日焦ニキビソバカス色黒や赤顔サメ肌に妙效があります。一週間分壹圓八拾錢送料内地拾五錢領土四拾五錢

醫療器

婦人病胃腸病を始め百餘種の病氣に即效!! ラヂウム温灸治療器

古來より賞用せらるゝ温灸艾と近代醫療物質中の珠玉とも謂はれてゐるラヂウム鑛の放射能力を加へ巧みに結合應用し、療法を以て療するもの故、如何なる病にも效くのが驚嘆、特に婦人病、胃腸病には比類なき卓效、實驗者悉く驚歎の有樣です。

藥及特效艾五週間分付上製桐箱入
一個　金十三圓
書留送料荷造料共内地八十錢
補給用藥艾五週間分金三圓五十錢
書留送料荷造料共内地三十錢

輕便な子宮洗滌器
原名ベツドルームスプレー

衛生思想の進んだ新時代の婦人は何れもこれを愛用されて居ります殊に小形で獨特の裝置に依つて如何なる場所でも極く御手輕に充分其の目的を遂することが出來ます定價上木箱入五圓五拾錢、普通紙函入參圓參拾錢、有效な洗滌殺菌劑(スペルゴール)一函(約百回分)壹圓、三百回分貳圓、送料内地參拾錢海外六拾錢

婦人病豫防藥
スペルゴールB(膣内挿入藥)

取扱至便なる膣内挿入藥で花柳病豫防並に治療藥として有效副作用等も絶對にありませんから御家庭御常備藥として最も安全であります。十二錠入壹圓、二十錠入貳圓、送料内地拾五錢、海外五拾錢

お化粧品

=マスター化粧品=

マスター十番
吹出物やアブラ顔の人、キメの荒い人に最もよい化粧水　七拾錢

マスター三十番
水クリームとも云ふべき化粧液、荒性の人になど最適です　七拾錢

マスター四十番
急ぎの化粧に是非必要、顔の汚れや分泌物を即座に拭ひ取る油とり化粧液　參拾五錢

マスター五十番
ソバカスや顔のシミなどに常用すれば綺麗に除くことが出來る白色美容料　壹圓

マスター六十番
一名(洗顔クリーム)少量で極めて簡單に洗顔が出來その上顔の生地を整へるクリームです　八拾錢

マツ毛眉毛を美しくする
評判のアイビユー

新輸入のアイビユーはマツ毛を濃黒に伸長し薄い眉毛スリ切れた眉毛を濃く整へるに驚くべき効果があるので大評判です優雅なる眉と象牙色の鼻柱漆黒な睫毛と黒曜石瞳夢見る樣な眼差しは美と愛に輝く憧れの女性若き乙女のみの持つ麗しさであります水液になつて居ります安全無害使用に便利です價一圓五十錢　送料十五錢　外五十錢

過酸化水素クリーム

過酸化水素水が色を白くするに著しい效力のある事は既に認められて居る處で之をクリーム狀としたものが卽ち本品であります。一瓶六拾錢、送料内地拾五錢外五拾錢

古代アヅキ洗粉

純小豆洗粉に硼砂過酸化水素それに十三種の香料を加へて出來た優良な小豆洗粉です、徳用袋參拾五錢送料四錢、徳用罐五拾錢送料内地拾貳錢、アヅキの花は更に純良な蜂蜜を加へてヌカ袋に入れたもの半打入一函五拾錢、送料拾貳錢

＝優良な白粉各種＝

▼お白粉はこの中から御選び下さい。

▼北原先生創製
　肌色水白粉　壹圓
　同粉白粉　五拾錢・壹圓

▼オロラ水白粉　壹圓
　同煉白粉　六拾錢

▼理容館白粉
　煉水各（小）七拾錢
　　（大）壹圓貳拾錢

▼携帶白粉（コンパクト）
　金色薄形　七拾五錢
　同　小形　六拾錢

▼ポンピアン製壹圓六拾錢

▼サンキツス煉白粉參拾錢
　水白粉　壹圓貳拾錢
　粉白粉　七拾五錢

送料二個迄内地拾五錢　領土四拾五錢

レモン水クリーム

レモンの精から取つたクリームですから、眞に色を白くし肌を美しくする作用があります子供にも老人にも四季を通じて用ひられる重寶な化粧水です。一瓶壹圓送料内地拾五錢領土五拾錢

睡眠中に美しくなれる
美顔マスク



この美顔マスクを御使ひになりますと寝て居る間にマスクとクリームの相互作用に依つて眞から皮膚が純化されて高價な美顏術を施したよりもズツト美しいお顔となるので大評判です。定價クリーム共一組貳圓五拾錢別に補充用クリームは壹圓貳拾錢送料内地拾八錢海外五拾錢

鏝なしでウエーヴが出來る
便利なヘヤーカラー

ヘヤーカラーは日本に初めて出來た眞製品で夜お寢みになる時にかけておさますと朝までに自然なトテモ美しいウエーヴが出來ます形はピンセツトに似て至極安全四本乃至六本あれば十分です。四本一組一圓送料十二錢

新美顔料「鶯の精」

鶯の糞の有效成分を抽出しそれに幾多の美容料を配合したもので他の化粧品に見られない獨特の效果があります。價　大函壹圓、小函五拾錢　送料内拾五錢海外四拾五錢

植物性ポマード

七拾錢、送料内地拾五錢、外五拾錢

特許ニキビ取り器

本器を用ひれば手や爪で取り難い小さい頑固なニキビでも皮膚を傷めず容易く除くことが出來ます。
一個五拾錢　送料四錢

蜂蜜から製出した白粉トキ水



どんな人にも適する化粧水ですが特に白粉下として白粉のトキ水として顔る效果があり どんな白粉でもよくのびよくつくので評判です巴里ピヴエー會社製一瓶壹圓五拾錢、送料内地拾五錢、領土五拾錢

オロラ豐頬液

頬のこけた人や目の窪んだ人に用ひて肉を豐につける特效を有して居ります。小瓶壹圓五拾錢大瓶參圓、送料内地拾五錢、海外四拾五錢

オロラ除斑液

日やけ、白粉やけ、アザ、ニキビ、ソバカス、腫物の斑、その他皮膚の汚斑を除くに特效ある林きむ子夫人創製の御化粧液です。小瓶壹圓、大瓶貳圓、送料内地拾五錢、海外四拾五錢

白髪赤毛染ネオス・ヘナ

純植物性で絶對無害評判の染髪料であります。一罐定價四圓　送料拾八錢

皺とり化粧液

佛國製レーデリス

肌のたるみを整し小じわを除きお顔をいき〳〵と若返らせる高級若返り化粧水です。一瓶貳圓六拾錢送料内地貳拾錢、海外五拾五錢

佛國製マユ墨

（コールオリエント）

筆共函入一組七拾五錢、送料拾貳錢

脱毛劑タキー

タキーは普通の肌を刺戟せず完全に除毛します。定價貳圓貳拾錢送料拾五錢

北原十三男先生創製特殊マユ墨

つけて目立たず粘らず眉毛を損せず而も携帶に便利先生獨特のマユ墨一本五拾錢　送料六錢

北原先生創製の淨水劑

洗顔の都度數滴入れますと惡水も直ちに淨化する作用をもつて居ります。一瓶壹圓七拾錢、送料内地拾五錢、海外五拾錢

林きむ子女史創製
アカシア洗粉

毛穴が大きくガサ〳〵とした様な人、脂肪の多い人は特によい結果が得られます。半打入一箱五拾錢送料拾五錢です

フケ拔毛止の妙液

「ウキロー」歡病頭にふりかければひどいフケも拔毛も奇妙に止り常用すれば毛根を霊ひ毛髪の豐なよくし艶毛とする效能があります。一瓶壹圓八拾錢、送料内地貳拾錢海外五拾錢

縮れ毛くせ毛特效劑
パンチー

頑固なくせ毛も縮れ毛も直ちにしなやかにのんびり美しくする獨特の效果を有つて居ります。價壹圓五拾錢、送料内地拾五錢、海外五拾錢

椿の髪洗粉



純粹椿の實からとつた粉末ですから少量でよく綺麗になり毛質を良く美しくいたします。十二袋入五拾錢　送料拾五錢

純粹の椿油

一合入壹圓五勺入六十錢送料内地拾五錢領土五拾錢

專賣特許エンゼル香油

＝赤毛くせ毛の方に推む

A號は赤毛用
B號はくせ毛用



▽小瓶八拾錢
▽中瓶壹圓參拾五錢
▽大瓶貳圓五拾錢
送料は小中は内地拾六錢外は五拾錢大瓶は五割増の事
御註文の際AかBか必ず御指定下さい。

縮毛矯正特許鏝

どんなに頑固な縮毛くせ毛でもこれに依れば必ず卽座に見違へる程のんびりとした美しい毛髮となるので評判です。

特許鏝價壹圓五拾錢矯正クリーム七拾錢送料內地貳拾錢領土五拾錢

毛捲鏝（ヘヤーアイロン）

和製　八拾錢

送料內地拾貳錢、領土四拾五錢

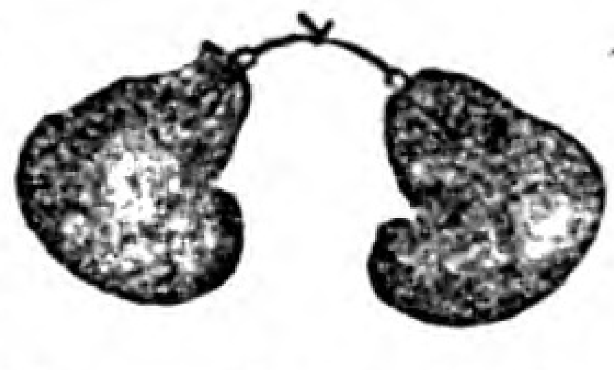
絹糸製 ヘヤーネット

かけて目立たず而も髮狀が美しいので評判。一枚拾錢、送料貳錢

誰にも似合ふ 耳かくしかもじ

地毛をいためる心配もなく素人の方でも人手を借りずに極く御手輕に恰好よく結ひ上げる事が出來るので大評判の耳かくし髱で御座います。

一組壹圓八拾錢送料拾五錢、注文の際は地毛見本歐本御送り下さい。



齒白粉「メルス」

只一滴のメルスに依つてどんな汚れた黑い齒でも見違へる程綺麗になる、黃ばんだ齒でも百合根の樣な美しく齒が出ます、眞の完全なる容貌美を望まれる方は何をおいてもまづ齒を美しくなさいませ。

メルスは小瓶壹圓貳拾錢徳用瓶貳圓、送料內地拾五錢、領土五拾錢

魅力ある眼とする 美眼液パミール

只一滴の點眼で五分たつかたゝぬ間に忽ち鈴を張つた樣なパツチリと黑眼勝な魅力に富んだ美しい涼しい明ろい眼發しとなります旅行にお散歩に男も女も是非このパミールを御愛用下さい。小瓶壹圓八拾錢、大瓶貳圓八拾錢、送料內地拾五錢、領土四拾五錢、各藥店に販賣



新發明の豐頰器

ホツソリした頰もふくよかに寧顏も凰ひのまゝの丸顏に變めのびて見違へる程若く美しく愛嬌と魅力のある顏になるそれで誰にも退く使用が出來てかけたまゝ談話も食事も自由に出來るから重寶。

價格　純銀並製七圓、送料內地貳拾錢、同　上製拾圓、十八金製貳拾圓、領土五拾錢

申込書に限り說明書進呈します。

御家庭用品

洋服でも和服でも一齊拾錢でクリーニング出來る（家庭クリーニング液）

決して生地を傷めずお子樣方の洋服でも綿物の着物でも帽子でもマント其外何でも手輕にクリーニング出來ますやり方は至極簡單です

一瓶壹圓（洋服十着分）送料內地拾五錢鮮、樺太等五拾錢

電燈自由點滅器

スヰツチのボタンを押せば欄間から自由に電燈の點滅が出來るから重寶この上なしです。コード九尺付價九拾錢、送料內地拾五錢、海外五拾錢

各大家御賞讚の 赤ちやん着物

お誕生祝の贈物に最適品

衞生と實用とを兼ねた純白綿ネルにガーゼを用ひて赤ちやんの肌に觸りよく保溫が完全で紐付が在來と異る故寢かせたまゝ着替へも出來おむつも取替へられるのが特長です。各物揃袢、下着、上着、肌着、帽子、ヨダレカケの六品一組箱入五圓八拾錢

羽織は別で貳圓七拾五錢、送料內地貳拾七錢、領土八拾錢

說明書進呈します。



萬能洗淨料

何でもキレイになる

「デ　ブ　ル」

純白無味無臭、油のついた天ぷら皿やその他食器はデブルを一匙はふり込んで洗つて御覽なさいザツト洗つたまでで忽ち油も汚れも去つて買立の樣にキレイになります。衣類、洗顏に、靴下や、機械磨き、硝子ふき等に至極重寶。一封度入壹圓貳拾錢送料內地拾五錢領土五拾錢

申込次第說明書進呈致します。

文化洗濯劑「レックス」



一寸削つて石鹼と一緖に溶解しそれに洗濯ものを漬けて二時間も經つとゴシ〳〵手でもまなくてもスツカリ綺麗にして異れるから重寶です。二個一組（大盥十杯分）七拾錢（送料四錢）

最後まで綺麗に削れる 安全鰹節削り機

鰹節を差込んで只ハンドルを廻しさへすれば少しの骨も折れないで最後迄美しく削れます。內部で三枚の刄が廻りますから在來のキカイの數倍の能力があり而も危險がなく無駄がないから御家庭には勿論、御料理店等には是非共お備へ下さい。

鍍鍍ニツケル渡々三圓五十錢

送料內地四拾錢、領土八拾錢



シャツ六枚は五分で洗へる ヘルクレス自働洗濯器

水と石鹼末と洗濯物を入れハンドルをクル〳〵廻しさへすればスツカリ綺麗に洗濯出來ます。

一臺特價貳拾八圓（送賃荷造費壹圓五拾錢）（運賃着拂）

說明書進呈いたします。

絕對に永久に さびない刄物

鐵物を切つた位では曇りもしないと云ふ特殊金屬の刄物一つあつたら忘れる程使へる逸品です。

臺所用庖丁特製壹圓九拾錢、同並壹圓五拾錢、果物ナイフ八拾五錢、刺身庖丁大貳圓五拾錢小貳圓貳拾錢食卓ナイフ壹圓八拾錢、懷中ナイフ壹圓貳拾錢、送料內地拾五錢領土五拾錢

室內自動掃除器

清潔で衞生的、贅沢にも手をぬらさずに立つたまゝどんな骨の折れる拭掃除も樂々と出來ます。

一組四圓八十錢、送料內地六拾錢

領土壹圓

申込次第說明書進呈す。



廿餘時間連續保溫 灰いらずカイロ

安全で美しく小形故携帶に便利口金さへ取替へれば永年使用出來る堅牢品。大形（二十四時間持）小形（十八時間持）各貳圓五拾錢送料內地拾五錢領土五拾錢

友禪鍋緣入り 防水前掛

美しき友禪鍋緣入の金巾に片面は優良防水ゴムを施してありますから醬油の煮掛と違つてどんなに濡れても汚れがつかず極めて丈夫ですお洗濯用として炊事用としてお擧あげ用として非常に便利です模樣入八十錢、模樣ナシ六十錢、送料拾貳錢

折疊み自在の
◇輕便小兒車
體裁優美安全で衞生的

一分間で簡單に折疊み組立てが出來ますから乳母車の樣に置場所に困る事もなく電車内にも持ち込み得られますから重寳です。



二輪車ですがスタンド附ですから四輪車同樣又腰掛ともなります。旅行に郊外散策に可愛い坊ちゃんやお孃ちゃんの爲に是非一臺を。特價九圓 荷造費五拾錢、運賃先拂 ―說明書進呈致します―

絶對に焦げない
◇安全御飯蒸し器
爲御試用下さい。

鍋が眞赤になつても御飯は焦げません臭味も水つぽさもなくいつも炊きたての樣な美味しい御飯が頂けます。



ニューム製三人前一圓三十錢 五人前一圓七十錢、八人前二圓二十錢 送料内地四拾錢領土壹圓 ―說明書進呈します―

◇萬能糊セルタス
木、竹、金屬、硝子その他どんなものでも接着出來るその接着力はニカワ以上水にも熱にも絶對離れぬ重寳糊です。小罎拾錢、大罎五拾錢、送料四錢

道具いらず
◇糊狀ハンダ
アルミニューム以外の金屬ならどんな金でも道具いらずに小さいものならマッチ又はローソクで簡單に接合出來ますからラヂオ器械組立等に便利です。小罎四拾錢（送料四錢）徳用罎壹圓送料拾五錢 ―說明書進呈―

◇便利な蒲團袋
ズック製ですから保存上安全、それに萬一の場合などどれ程重寳するか知れません。上製九圓五拾錢、特製拾壹圓、送料内地四拾錢領土六拾錢

一夜に數疋以上捕れる
◇評判の鼠捕り器
鼠の心理を研究して作つたもの、一夜に少くとも數疋十數疋は譯なく生捕りが出來るので使用者は一樣に賞讃されて居ります。價九十五錢、送料内地參拾錢、領土六拾錢

埃よけ虫よけ濕氣よけ
◇洋服保存器
安價で簡便な洋服簞笥代用品として重寳がられて居ります。背廣用 壹圓八拾錢 外套用 貳圓 送料各四拾錢

專賣特許
◇光澤の素
大好評の艶出しクリーム

塗物類、樂器類、指物類、皮類、金具硝子類、陶器類その他あらゆるものに用ひて底光りある美しい光澤を出す事が出來るので評判です。押出チューブ入五十錢、送料四錢 徳用罎貳圓送料拾五錢外四拾五錢

◇精製蜂蜜
純良の蜂蜜を御希望の方には特に本社代理部にて便宜御取次致します。一ポンド入一個六拾錢、送料内地拾五錢、海外四拾五錢、徳用五ポンド入貳圓五拾錢、送料内地五拾錢、その他壹圓

◇洗濯用さらし粉
布地をいためずどんな汚れでも見違へる程白く綺麗になります。一罐壹拾錢、送料拾五錢

煮る世話のない
◇輕便のり
水に溶かして直ぐ使へます普通の糊と同じ樣に障子張り等に使つても頗る便利です。十五反分參拾錢、六十反分壹圓、送料各六錢

◇西洋剃刀
▲アレキサンダー 特價 三圓五十錢

▲シルバーリング 特價 二圓八十錢

（ステキにソリ心地もよく一丁あれば永く使へる重寳な西洋剃刀を御愛用下さい。）

送料内地拾五錢 領土五拾錢

十ケ月保證付の
◇ちよだ耐久靴
お買上後表底革自然破損の場合三ケ月以内は新品と交換します。

A型（黑ボックス裏布なし學生實用靴）短靴 六圓九十錢 編上 七圓七十錢



F型（黑上等ボックス裏布つき紳士靴）短靴 六圓九十錢 編上 十圓七十錢

H型（新流行ウヰロー高級紳士靴）短靴 八圓 編上 九圓

◎御註文の際は正確なる足袋の文數を御知らせ下さい。送料内地貳拾五錢 領土七拾錢

ステキにソリ心地のよい
◇安全剃刀特價
▲セム（片刃式替刃付上等紙函入）特價 九拾錢

同上製（クロースサック入）特價 壹圓四拾錢

▲エバーセット（自動研式極上紙函）特價 一圓六十錢

▲エバレデースポート（片刃式替刃四枚付特製ニッケル容器）特價 參圓貳拾錢

▲同長方形（特製ニッケル容器）特價 貳圓

面白い程よく捕れる
◇捕鳥用カスミ網
只張つて置くだけで雀、つぐみ、頬白等の小鳥が面白い程よくとれる絹絲製の捕鳥具です。



長三間高さ六尺 特價四圓五十錢
長七間高さ六尺 特價八圓八十錢
送料内地拾五錢 海外四拾五錢

評判の新發明品
◇ポケット顯微鏡
手の中に入つて仕舞ふ程小さなものですがそれで高級品に負けない能力がありますか小中學生間に大評判。百五十倍壹圓五拾錢、二百倍貳圓、送料内地拾貳錢、領土四拾五錢 ―カタログ進呈―

驚くほど效力のある
◇米國製金屬磨き
―專賣特許ライトニング―

どんな金屬の汚れでも他の金屬磨で落ちないサビでも見る見る除かれて見違へる程美しく輝いて來ます。然も手數がかからず至極簡單ですからどんな子供にさへ出來ますから眞に重寳です



布狀壹圓貳拾錢、液狀大罎入壹圓、小罎入五拾五錢（布狀は眞鍮、ニッケル、銅等に適當）送料内地拾貳錢、領土四拾五錢

高級空氣銃

命中正確な
高級空氣銃
▼ミルター空氣銃(大形極上) 特價 二十圓 (荷造費四拾錢實先拂)
▼ミルター空氣銃(小形) 特價 十二圓半
BSA型特價 十五圓

少青年用空氣銃

アース印
携帶に便利彈力強く命中正確ミルターに比較しても優る共劣らない評判の品です
單發 特價五圓
五百連發 特價六圓
送料内地六拾錢 領土壹圓

彈丸

BB彈 BB彈一函 四拾錢
チョク彈五〇(二個入)四十六錢
ツヤミ彈五〇〇個入 壹圓廿錢
送料内地貳拾錢 海外五拾錢

藤式二百倍の顯微鏡

價は低廉然も高級品に劣らぬ能力
標本一硝子二枚付一組貳圓五拾錢
送料内地貳拾五錢領土六拾錢

萬能モートル

小さくても馬力が強いから何にでも使へます電車も出來れば汽車も自動車も出來ます、車輛八個心棒二本ネヂ網し付一組貳圓八拾錢別に乾電池六拾錢、送料内地貳拾五錢海外六拾錢

藤式モーター

藤五代策先生御考案
應用の仕方で電車汽車自動車あらゆる原動力となり器械にもなり米つきもする珍品。乾電池付一組特價壹圓五拾錢、送料内地貳拾錢、領土五拾錢

實物幻燈活動寫眞機

繪葉書でも自分で描いた畫でも文字でも何でも原色通り四五十倍の大きさに寫る面白い活動寫眞機活動畫六種付箱入一組金壹圓參拾錢、送料内地拾五錢、臺灣朝鮮五拾錢
—カタログ進呈—



家庭娯樂活動寫眞機

晩餐後の團欒しみに御家庭で活動寫眞を御覽になるも面白い事ですこの機械は幻燈にも應用出來ますし頗る鮮明に寫って少しも危險もなく御子樣にも映寫出來ます。
▼二號(一尺五寸寫し) 特價 參圓貳拾錢
▼三號(二尺寫し) 特價 五圓五拾錢
荷造送料内地四拾錢領土七拾五錢
▼四號(二尺五寸寫し) 特價 七圓五拾錢
▼五號(三尺寫し巻取機付) 特價 九圓
▼六號(三尺五寸寫し巻取機付) 特價 拾貳圓
▼七號(五尺五寸寫し巻取機付) 特價 貳拾六圓
荷造送料内地六拾錢 領土八拾錢

豆扇風器

可愛い玩具扇風器ですが涼い風が工合よく出ます。價貳圓貳拾錢送料内地貳拾錢、領土五拾錢

玩具ピストル

ニッケル鍍金五十連發價壹圓五拾錢送料内地拾五錢、領土四拾五錢

輕快に走る電氣機關車

電氣でレールの上を自由に走る理想的な玩具です機關車、客車二臺レール付特價拾五圓五拾錢、送料内地五拾錢、領土壹圓

アルコール焚 大形汽車

アルコールを焚いて蒸氣を起しその力で車を動かすので火をつけて二三分たつと走り出します。特價五圓荷造、送料内地四拾錢、領土六拾錢

實物幻燈機械

特價四圓八拾錢 送料内地四拾錢 領土八拾錢

▼フイルム目錄進呈
(一尺八錢より種々あります)
—カタログを進呈します—

モーターボート

船體は木製で美しいエナメル塗全長一尺三寸アルコール焚き精巧品です。特價四圓五拾錢、一尺五寸型特價五圓五拾錢、送料内地四拾錢領土六拾錢

双眼鏡

驚くべき安價で高級品に劣らぬ逸品。並製壹圓八拾錢、上製四圓五拾錢、上等革サック特價六拾錢、送料内地拾五錢領土五拾錢

望遠鏡

携帶至便視野頗る鮮明。價九拾五錢、送料内地拾貳錢。海外四拾五錢

特製ピンポン用具

組立金具、網、ラケット、ボール四個一切つき(ボール函入)一組價一號壹圓七拾錢、二號貳圓貳拾錢、三號參圓八拾錢、四號參圓五拾錢、荷造送料、内地參拾錢、海外七拾錢

カナ文字印刷器

精巧のカナゴム活字でどんな文句でも美しく印刷出來る重寶品。四百五十字入貳圓參拾錢二百三十字入壹圓參拾錢送料内地拾五錢、領土四拾五錢 —説明書進呈—

英文字印刷器

(英字のゴム活字)
AからZまで二十六文字それに1 2 3の數字各種記號等數個宛組合內緊活字バサミ、ピンセット等一切付どんな英文印刷でも出來ます
零號(各百二十字以上) 壹圓
一號半(字以上) 壹圓五拾錢
一號(字數二百五十個以上) 壹圓八拾錢
二號 貳圓
三號 參圓

面白い卓上遊戲 オリンピック競技カード

總計五十八枚のカードを自由に組合せますと十種競技五種競技砲丸投、投籃球水泳その他二十餘種の競技が誰にも出來るから面白い。遊び方つき一組一圓十錢 送料内地十二錢 領土四十五錢

高級トランプ

▼トランプ(小形で上品で美しい) 特價 壹圓十錢
▼小形トランプ 壹圓八拾錢
▼Aトランプ 貳圓五拾錢
▼Bトランプ 參圓

＝評判の新發賣品＝

高級脱毛美料 ハール

ハールは凡つて三ヽ後そのつけた所の無駄毛はスッカリ綺麗にとれてしまひます。ハールを御使用になれば剃刀や手數もなく何時もスッキリと浮き出た様な自然美が保たれ、從來の剃刀や毛拔の様な危險もなく使用して少しも肌を害しません。一度御使用になれば其の快さを覺えて下さい。一瓶一圓七十錢、送料内地十五錢 海外五十錢

藤本博士考案 カルシウム粉末吸入器

▼肺結核に有效なカルシウムも本器によって吸入すれば注射の十倍乃至四五十倍も吸收され注射の何倍も效果があります本器は自宅に居ながら容易に使用出來肺結核の治療に絕大な效驗があります。定價參圓
＝説明書を進呈します＝

佛國ピヴエー會社製 直輸入の豆香水

舶來品と思へぬ程安價なのが大評判となり輸入品が賣切れになるのが例ですからお早く御申込み下さいませんと又御氣の毒です
ムゲー(鈴蘭) ローズ
ジャスミン シープレー
フリージヤ スヰートピー
ヴイオレット ヘリオトロープ
各一瓶(四十瓦入) 一圓六十五錢
送料内地十五錢 外五十錢

進呈

代理部商品總目錄
少年用品總目錄
右御申込次第進呈します


世界王様づくし
目次
発明王……エヂソン
自動車王……ヘンリー・フォード
著作王……ウェルズ
石油王……ロックフェラー
船舶王……ダラー
銀行王……モルガン
銅山王……ガッゲンハイム
航空王……エッケナー
寫眞王……イーストマン
商店王……ローゼンワルド
タイヤ王……ファイアストーン
宣傳王……アイヴィ・リー
鋼鐵王……シュワップ
新聞王……ハースト
電話王……ヴエール



發明王エヂソン

『エヂソンの發明によつて、何れだけの富が世界に増えたであらう?』紐育タイムスといふ新聞が、エヂソンの發明によつて興つた事業の資本高を調べて見たら、アメリカだけで三百億圓以上に上るといふことが判つた。それも十年ばかり前のことである。今では全世界を通じて、一千億圓以上に上らう。

それが彼の頭腦から生れた事業の總決算である。エヂソンは或る日、新聞記者に向つて言つた。『俺も取る年だから、近頃はメッキリ働く時間を減らしたよ』『ほゝう、で、何時間ぐらゐにしたんです?』『十六時間!』若いときは十九時間半づつ働いたといふ。その驚くべき精力の泉は何處にあるか? エヂソンは言ふ。『それは私が、何時も「昨日」に生きないで、「今日」と明日に生きてるからです』

その故に彼は、何んなに失敗しても、決してクヨ〳〵しない。彼の心は絶えず快活で清新だ。これがエヂソンの八十三歳の少年といはれてゐる所以である。

（神保朋世畫）



自動車王 フォード

一人の靴屋が、フォードに出資を頼みに來た時、彼は素氣なく斷つた。

『俺は自動車屋だ。君は靴屋だ』

しかし彼は、それをかう說明してやつた。

『誰一人の例外なく、これこそは一番いゝ靴だと思ふやうな模型をこさへるんだね。そしてそれと同じ品を、何萬、何十萬、何百萬とこさへるんだよ。さうすれば君は瞬くうちに世界の靴王になれる。……俺の成功の秘訣はこれだよ』

さう言つて、フォードは、机の上の文鎭を手にとつて見せた。それは銀でこさへたフォード車の模型であつた。

『これがつまり俺の全事業なのだ』

この事業經營法が、フォードを自動車王となしたとともに、自動車を大衆化したのであつた。何故なら、たとへ財力は劣るとも、人間の數では中流以下の人口の方が、比較にならぬほど多いからだ。

フォードもまた大衆時代の英雄である。



（神保朋世畫）



著作王　ウェルズ



『科學は貴い、然しながら是れを鬪爭に利用したのでは人類を益する所がない。學問の價値は偉大である、然しながら是れを萬人に知らしめなければ何の價値もない』

此の二つの考へは英國王室科學專門學校に於いて生物學を研究し山の如く優美賞を貰つてバチエラー・オブ・サイエンスの學位を受けたエイチ・ヂー・ウエルズが全く方面違ひの理想主義的小說家となつた動機であつた。彼れは此の信念の實現の爲めに殆んど寢食を忘れて筆をとつた。それが五年や十年ではない。實に六十三歲の今日まで續けた。否な死ぬまで續けるであらう。偉大なる信念と努力である。

斯うして完成した彼れの著書は百數十に上り、小說あり評論あり文明批評あり、歷史あり、行くとして可ならざるはない。而して千八百九十五年の處女作『伯父との會話選集』より最近の評論に至るまで、人類の平和的理想を高唱せざるものはない。しかも作家及び文明批評家としての名聲の永續せるもの彼れの如きは少ない。殊に彼の千九百二十年に上梓した『人類史概說』は平和的理想主義の立場から歷史編纂の上に一新紀元を劃したもので、各國語に飜譯せられ全世界に普及した。彼れは著作王の名を辱めない。



（大橋月皎畫）





石油王 ロックフェラー

『人生の第一歩を踏み出さうといふ青年にとつて、一番大事なことは、信用を作ること、すなはち人格をつくることです』

スタンダード石油會社を中心にして、全世界に石油王國をつくり上げたロックフェラーは何時でもかう言つてゐる。英米の對抗は海軍競爭だけではない。猛烈な石油戰――觀様によつては、大英帝國總がかりで、一ロックフェラーと戰つてゐるとも言へる。

その巨大なる石油王國も、もとはといへば、ロックフェラーの人格性行を信用して、銀行が二千弗（四千圓）の金を貸してくれたのから始まる。

『ロックフェラーなら間違ひない――その信用が私の財産全部です』と彼は言ふ。僅か二十五弗（五十圓）の月給取りから出發した彼は、決して『私は』といふことを言はない。

『私は我々のうちの一人に過ぎません』

そして『我々は』と常に語る彼は、現代のやうな大衆時代の王國建設者としては、その資格を充分に備へてゐるものといへよう。

（石井朋昌畫）

船舶王ダラー

『ヤイ小僧、其所で何をして居るのだ！』髯むしやの荒くれ男が、中部加奈陀の大森林の眞唯中に立てられた木挽小屋で十二三歳の炊事場小僧の首筋をつかまへて怒なり飛ばした。髯むしやは木挽小屋の親方だ。

『僕勉強して居るのです』

『勉強だつて？　何の勉強だ』

『讀み書きと算術です』

成る程小僧の持つて居た紙片を取り上げて見ると、數字と親方には解らぬ文字でいつぱいだ。親方は感心して了つて怒るにも怒れなかつた。

彼れは小僧の熱心な勉強に惚れ込んで、それからと云ふものは成るべく時間を與へ遂には紙や書物をさへ買つてやるやうになつた。

世の常の小供ならば遊びたい盛りの年頃をロバート・ダラーは斯うした涙ぐましい境涯で勉學を續け、月々貰ふ僅かの給料を貯へた。

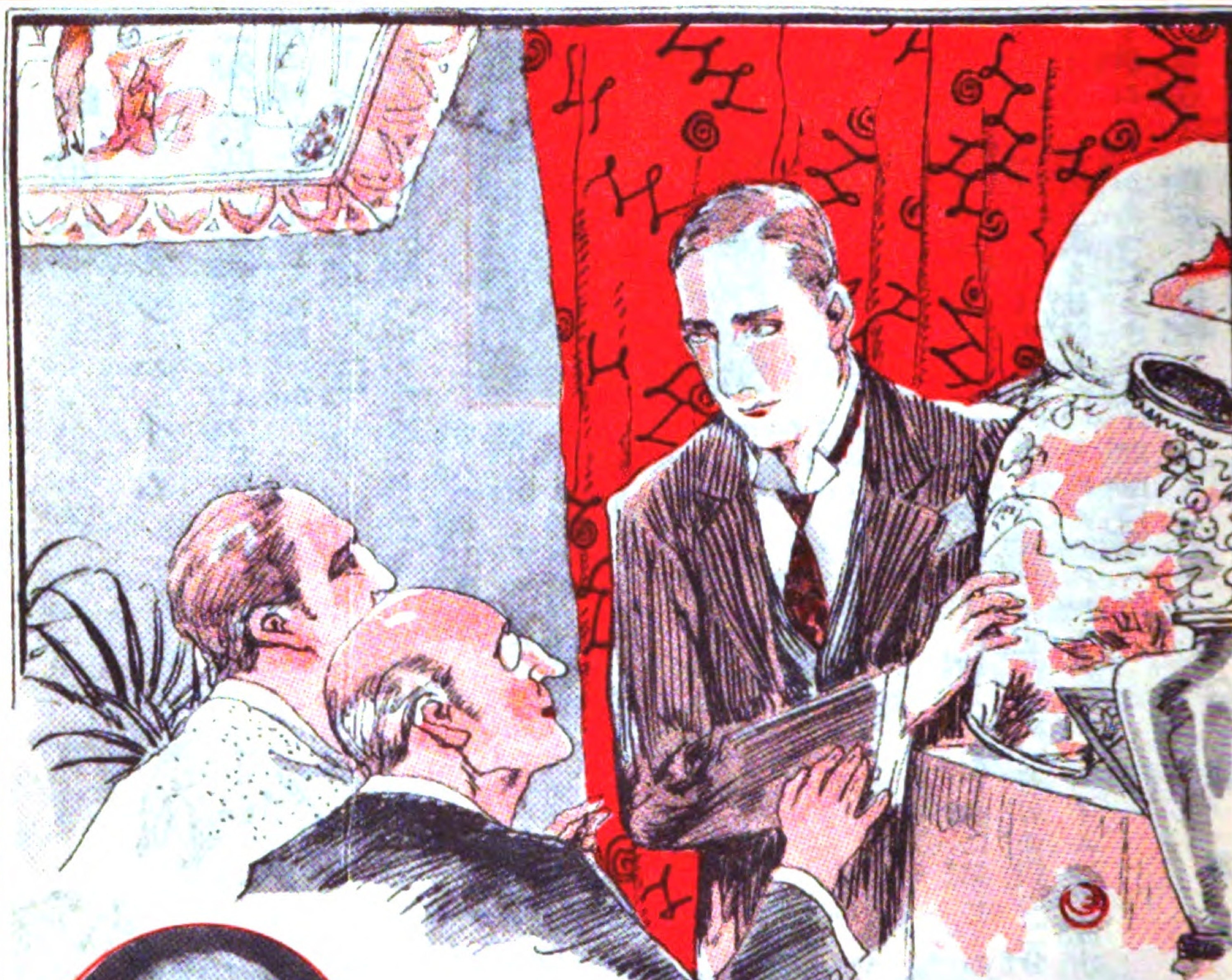
斯くて二十七歳の時彼れは大學出にも勝る學識と才幹の持主となり。加ふるに一かどの金持となつて材木商を始めるに至つた。やがて自分の買ひ込んだ材木を自分の船で運送すれば益々儲かると云ふ譯で、一隻の船を造つた。此の一隻の船は今や數十艘の最新式汽船となり、それが年々百數十億弗の米國輸出品を載せて五大洋を雄飛して居る。偉なる哉



船舶王ロバート・ダラー



（渡部審也畫）



銀行王モルガン

當主ゼー・ピー・モルガンは、先代が死ぬや否や父の愛藏した美術品を賣り飛ばして現金に替へ始めた。モルガン家中の者等は口を揃へて反對した。世間では當主モルガンは先代にも增して我利々々で器量が小さいと惡評を浴びせた。

頑固で自ら信ずる所の強いゼー・ピーは家中の反對や世評には耳を藉さず默々として其の所信を斷行した。彼の器が小さかつたのだらうか？ 決してそうではない。

事實先代モルガンの殘して行つたものは美術品と負債同樣金のかゝる財產と、殆んど價値の無い會社株と、其他にたつた千九百萬弗の現金に過ぎなかつた。然も當主

モルガンは三百萬弗の相續稅を拂はなければならず、遺言による財產分配を行はねばならず、尨大な事業を經營して行かなければならなかつた。彼れは實に父の愛藏した美術品までも賣らなければならぬ程の苦境にあつたのだ。彼れは默々として建直しを斷行した。さうして家運を挽回し、



モルガン商會を偉大ならしめた。斯くて彼れは米國經濟界を支配するに至つたのみならず、大戰中聯合國の爲めに百五十億弗の借款を取扱ひ、百億弗の金塊を歐洲から米國に移し、數百億弗の兵器糧食を動かし生死の境にあつた歐洲諸國を救ふ事が出來た。果然彼れは父にも優る銀行王であつた。

（大橋・月皎畫）

銅山王　ガッゲンハイム

『俺の銅山がいま破産しかゝつてるんだ。何とか助けてくれないか』

『ウン、それは可哀さうだ』

友情と義侠心に厚いガッゲンハイムは、友人の銅山事業に金を出してやつた。これが彼の銅山王國をつくる端緒であつた。



當時ガッゲンハイムはレース商をやつてゐたが、友人の銅山を助けて以來、フト考へついたことがあつて、子供たちを集めて言つた。

『レース商はいくら發展しても知れたものだ。一つ心を合せて銅山をやつて見ないか』

息子たちは贊成した。そして彼の銅山事業は始まつた。殊に第三子のダニエルは、有爲果敢、碎骨粉身、つひに年産額五十萬トン、世界産額の二分の一といふ一大銅山王國を建設した。そのダニエル・ガッゲンハイムに、成功の秘訣を訊ねた人があつたとき、彼は即座に答へた。

『犠牲！　犠牲！　犠牲！』

（神保朋世畫）



航空王エッケナー

ツエッペリン伯が、はじめて大飛行船の建造を思ひたつたとき、その經費の大部分は、熱烈なる國民の寄附金によるものであつた。にも拘らず、その飛行船は、飛んだと思へば壞れ、修繕したと思つたら墜落した。

第一回の飛行船——第二回の飛行船——その失敗ごとに、新聞紙の上で、痛烈なる批難の聲をあげる一人の記者があつた。ツエッペリン伯は、終にはその『エッケナー』と署名した記事を讀むのが怖ろしくなつた。



第二回の飛行船が慘敗したとき、流石のツエッペリン伯もガッカリして、恐る恐るその新聞を取り上げて見た。すると驚くべきことには！

『ツエ伯の飛行船はまた大失敗をやつた。しかしその失敗によつて、彼の前途には、洋々たる希望が展けて來た。予はツエ伯が、その特色たる不撓不屈の精神をもつて、捲土重來せんことを望む』

その好意と同情に滿ちた文句は、ツエ伯の落ちんとしたる心緒を引き締めた。これがツエ伯とエッケナー博士とを結ぶ緣であつた。昨日の敵は今日の味方。かくしてエッケナーは、ツエ伯の志をついで、つひに全世界周遊の大航空事業を完成した。

（富田千秋畫）

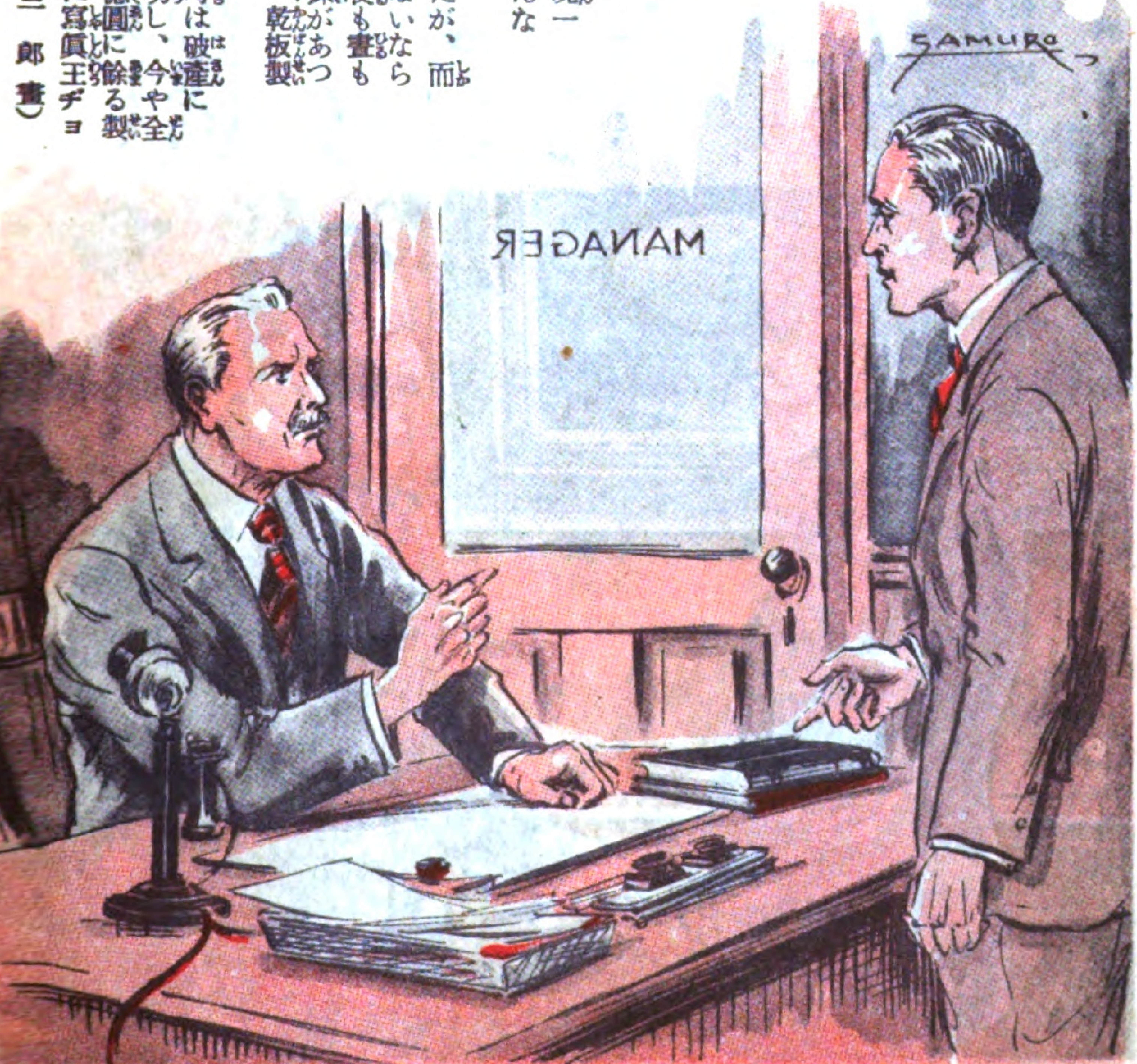




寫眞王 イーストマン

今から恰度五十三年前である。米國紐育州はロチエスターの或る銀行で、一人の若い行員が支配人の前に呼び付けられて叱られて居た。『一體お前の其の手は何んだ、聞けば紙幣でも手紙でもお前の手の觸れる物には汚い色がつくと云ふではないか』
『でもこれは何うしても仕方がないのです。私は毎晩一生懸命に寫眞乾板の實驗を續けて居るのでして、どんなに注意しても藥品が手に沁み込むんです』
支配人は非常に同情的な眼なざしで青年行員を見たが、而し行務は行務である。遂に、寫眞の實驗が止められないなら銀行を止めて貰ひたいと宣言した。若者は數日の間夜も晝も考へ抜いた。彼れには養はねばならぬ貧しい母と弟妹があつたのである。然し彼れは血を吐く思ひで銀行をやめ、乾板製造の初志を貫徹すべく決心した
其の後二十有餘年彼れは幾多の艱難に逢着し、或時は破産にさへ瀕したが遂に七轉八倒の後輕便寫眞機製造に成功し、今や全米に百數十の工場を有し數萬人の技師を使ひ年に一億圓に餘る製品を世界の隅々にまで賣弘めて居る。彼れこそは實に寫眞王ヂョーヂ・イーストマン其の人である。

（加東三郎畫）



商店王 ローゼンワルド



ローゼンワルドはいま、アメリカ全土に亙つて、蜘蛛の巣のやうな商業網をはつた。その賣上高は年に三億圓、日に百萬圓以上にのぼる。しかもそれが殆んど一弗（二圓）以下の品だといふから驚く。毎日、郵便脚夫の持つてくる注文書が、七萬通乃至十四萬通——使用人の數でも三四萬人にのぼる。夕方、彼と一緒にシカゴの街を歩いてゐた友人が、その事務所から流れるやうに吐きだされる一萬三千の從業員の群を眺めたとき、ローゼンワルドに訊ねた。

『君、あんなに澤山の人を働かせて、さぞ愉快でせうな』

するとローゼンワルドはすぐ答へた。

『私はそんなことを考へたことは一度もありません。私はあの人達と一緒に働いてゐるのです』



その人情味が、彼を世界の商店王としたのだ。彼が始めて金を儲けたのは、十五の年、夏休みに雜貨店で働いて、五〇圓の金を貰つたときであつた。その金は何うした。全部、父母の結婚二十年記念の日に、茶道具をお祝ひして喜ばせた——彼はさういふ孝行者でもある。

（石井滴水畫）

タイヤ王　ファイヤストーン

『田舍に燻るよりも商賣人となつて大儲けをしよう』と志を立てゝハーヴエー・ファイヤストーンが故郷を出たのは廿歲前後だつた。だが文無しで商賣の出來よう筈はなく、彼は賣藥屋の地方出張員を振出しに、轉々として各地を放浪した。ミシガン州のデトロイトでは資金欲しさに當時流行した一頭馬車の競走に馭者となつて出場したこともあつた。

其の後從兄の馬車製造會社を手傳つてホッと一息ついたが間もなく其の會社も潰れた。然し彼れが護謨タイヤの將來に考へついたのは此時だつた。彼れはそれから身も魂もタイヤにぶち込んで研究と努力を續けた。

傍目も振らぬ彼れの努力は着々酬いられ、其の事業は大戰前に既に千五百萬弗の大資本を有する會社となり、戰時中には其の資本を七千五百萬弗に殖やした。千九百二十年には二千萬弗に上るタイヤを賣捌いた。大戰終結直後彼が歐洲漫遊中ファイヤストーン・タイヤ會社は大缺損を蒙つたが彼れは直ちに歸米して之れを盛返し今では更に事業が擴張されて居る。



彼は又タイヤ製造業のみならず護謨栽培に着目し墨西哥チアパに三萬五千英加の土地を租借してゴムを栽培し、千九百二十五年には亞弗利加のリベリアに四萬五千英加の土地を獲得し一億弗の資金をゴム栽培に投じて居る。



（加東三郎畫）

宣傳王 アイヴィ・リー



プリンストン大學を卒業してバチエラー・オブ・アーツの稱號は貰つたが、一風變つたアイヴィ・リーには此れと云ふ面白い仕事も見當らず、千八百九十九年から千九百三年まで紐育で木つぱ記者を勤めなければならなかつた。然し何か新らしい活動の天地を開拓しなければならぬと云ふのが彼れの日頃の願ひであつた。彼れは遂にこれを開拓した。

『如何に大人物であつても、如何に有用なる事業であつても、此れを天下に知らしめざらば人類の失ふ所之れに過ぎたるはない。俺は之れから宣傳業を始めよう』彼れは斯う決心した。

千九百八年、彼れは當時難境にあつたペンシルヴァニア州石炭業者の爲めに有力なる宣傳をして彼等を窮地から救つた。其の後彼れは幾多の銀行商店の爲めに宣傳部長としての手腕を揮うて其の事業を擴張せしめ、千九百十五年には遂に石油王ロックフェラーを説き伏せ其の顧問となり氏の事業と人物を宣傳し、米國が大戰に參加するや赤十字社の宣傳部長として偉大なる功績を樹てた。其他米國各州の經濟的將たまた政治的改革運動にして彼の力を借りたのが少くない。更らに驚く可きは彼の宣傳の筆が劍よりも强いことである。



チエッコ・スロウアキア及び洪牙利が米國に於て大信用を成立せしめ經濟的基礎を固め得たのも實はリーの宣傳によるとさへ云はれて居る。彼は遂に宣傳王たるを失はない。

（渡部審也畫）

鋼鐵王シュワップ



八百屋の小僧から、十七歳のとき、カーネギー會社の一職工となつたのがはじまりで、シュワップは、三十五歳のとき、すでに全會社の社長となつてゐた。

『私の財産の半分はシュワップがつくつてくれたのです』と、カーネギーも言つてゐる。

米國鋼鐵會社が、カーネギー會社を合併したとき、その契約條件の一つは、シュワップを總支配人にすることであつた。それに異議はなかつた。しかし社長モルガンの頭痛の種はその年俸が二百萬圓であつたことであつた。當時、アメリカの最高給は二十萬圓であつた。

モルガンが、不承不承、その契約書をシュワップに見せたとき、シュワップは呀ッと言ふまに、ピリピリとそれを引き裂いてしまつた。

『私は自分の一生に費ひきれないほどの財産をもつてゐます。小供もありません。私の働くのは、働くのが面白いからです。金錢のためではありません』

その意氣がシュワップを鋼鐵王としたのだ。二百萬圓の俸給契約書を引き裂く勇氣のある人は、世界中、たゞシュワップ一人あるのみであらうと言はれてゐる。

（石井滴水畫）







新聞王 ハースト

『俺は政治の方が忙しくなつたから新聞は息子にやらせて見よう』

ハーストが父親から、「桑港エキザミナー」を引受けたのは、彼が二十四歳の時であつた。彼はこの田舎の小新聞を基礎として、四十年の悪戰苦鬪を續けた。いま米國十七大都市に跨つて、ハーストの經營する新聞の數は三十九紙。總發行部數は八百二十一萬であるから、最少限度三人の家族としても、讀者の數は二千五百萬に當る。米國の總人口は一億――其四分の一はハーストの讀者である。

西班牙領キューバ島に特派した戰時特派員が、

『ハバナには戰爭氣分がいさゝかもなし』

と打電して、直ぐ歸米しようとしたとき、ハーストはすぐに返電した。

『そのうち開戰するやう、ワシントン政府を動かしつゝあり。ジッと待つてをれ』

ハーストの勢力と自信とは、そのくらゐなものである。（石井朋昌畫）



電話王ヴエール

アメリカの電話事業は、米國電話電信會社といふ一民營會社が一手で經營してゐる。その電話取付數は約二千萬。――人口六人につき一臺といへば、アメリカでは一家に一個づつは電話がある勘定である。そしてこれほど電話を普及したのは、社長ヴエールの功績である。

發明家ベルが、はじめて電話をこさへたときは、まるで玩具のやうなものであつた。しかしヴエールはこの『玩具』の前途を逸早く見拔いた。そして米國遞信省における重職を、破れ草履のやうに捨てゝしまつて、電話事業にかゝることになつた。

『私はこのとき、七千圓の俸給を、無俸給と振替へたのだ』と、彼は後に苦笑してゐた。

電話事業は最初から困難であつた。經費はかさむし、金は儲からぬし、配當は無論一文もない。可哀さうなのは發明者のベルで、入院費用さへなく、公立病院の一室で呻吟してゐた。

しかしヴエールは、困難が加はれば加はるほど、電話普及の一路に猛進した。この一大電話王國こそは、まさにヴエールの不撓不屈の精神の記念塔である。

『眞個の困難といふものは、必ず打ち克つことができる。困るのは想像的困難だけだよ』と、ヴエールは言つてゐる。

（神保朋世畫）



と、その眞劍味の持續であります。

眞劍が連續すれば、一種の快き優越感を生じ、辛い、苦しい惱ましい、切ないなどいふ事は悉く消失する。例へば、母がその乳呑兒を育くむとき、實に一生懸命で、ろくろく寢ない晩が、幾夜もつゞくけれど、それを格別辛いとも思はず、我が兒の寢顏を眺めて、怡然として限りなき幸福を感ずるの類である。

眞劍は一切無我無心である。しかも胸裡自ら花あり、月あり、樓臺あり、愉然として、悦びに滿ち溢れてゐる。而して眼を舉げてその前途を眺むれば、そこには可能の大道が開け、そこには成功と幸福とが光り輝いてゐるのである。之に反し、眞劍ならざる者の前途には、不可能の暗雲低く大地を掩うて、悲しみと、歎きと、失望と、不滿と、あらゆる不幸が重なり合つて、その行方を遮つてをります。

○

偉大なる哉！眞劍の力!!

我等の親愛なる滿天下同胞諸君

日本は今極めて重大な時機に際してゐる。萬事萬端、浮いた心を以て之に當つてはならない。お互にいよいよ眞劍味を加へませう、一同氣を揃へて、今年よりは一層眞劍に、朝から晩迄すべてに對して從來に數倍、數十倍する眞劍味を加へるならば天下の惡は、人間の惱みは、必ず雲散霧消すること請合であります。

今、思想困難といひ、或は經濟困難といふ、之を打開するの途は、結局お互の内部の改造より始めるのが、第一の急務である。そのうち頗る重要なる一項目として、同人一同敢て茲に『眞劍』の二字を提唱し、先づ之を緣故深き愛讀者諸君よりはじめて、やがては之を全日本同胞に及ぼし、その熱烈なる贊同と體現とを希望する次第であります。

何事も最初は困難であるが、習慣は能く之を柔げるものである。否寧ろ、習慣は之に愉快を伴はせるものである。我々が幼時に步行を習つた時と、今日の步行の時とを比ぶれば、思ひ半ばに過ぐることでありませう。

○

諸君、眞劍にやりませう！本年第一日よりお互に直前の業務について、先づ以て眞劍に努力を開始しませう。到る處これ眞劍の人、眞劍の家、眞劍の會社、眞劍の役所を以て滿たさるるならば、我が國運の發展興隆と、お互の幸福繁榮とは、實に期して待つべしであります。

あゝ一劍天に倚つて來し。今や、國家は重大なる危機に際會して、國民の奮起を待つ。小社同人一同は、茲に諸君の健康と高堂の萬福とを祈ると共に、この『眞劍』の宣傳のために、眞劍なる後援を惠まれんことを切望するのであります。

明るい日本を目指して

本社々長　野間清治

× ×

今の世の政治の有様、經濟の現狀、思想の趨向、人心の不安、この世相に直面し、これを凝視しておいて、翻つて自己の責務と修養とを省みる時に、私はじつとして居ることが出來ない。それは決して、人を咎め、世を罵るのではない。われ自らを責める痛烈なる鞭を感ずるのである。

若し、幸に、私と感を同じうさるゝ方があるならば、冀くは、大いに共鳴して戴きたい、共に奮躍一番して戴きたい。

× ×

今年は一層健康に注意しよう

私は徒らに大言壯語することを好まない。坐して言ふべく、起つて行ふべし。富士の嶺は廣大なる裾野を延いて天空に聳えてゐる。平凡なる裾野がある、故に、非凡なる絶頂があるのである。されば私は先づ最も平凡なる、而して最も重要なる根本問題から考へることにしよう。それは先づ身體の健康についてゞある。

人間は健康でないと仕事が出來ない。凡そ人は年を取れば取るほど、値打の多い働きが出來る筈のものである。折角養つて來た自己の能力と品性、漸く積み立てゝ來た世間の信用と德望、これらを土臺にしてこそ、價値ある大きな働きが出來る。例へば、五十歳以後の一年は、恐らく二十年臺三十年臺の五年にも十年にも價するであらう。大成功の長壽者に多い所以は、實に此處に存するのである。

『爲すある身』とは、從來、若い人にのみ言ふことだと思つてゐたが、實は四十歳、五十歳に達して、其意味が更に一段と强めらるゝものたることを悟つた。私共は幾多の

年月を重ねて、苦勞と經驗とを積んで來た結果、いよ〳〵益々『爲すある身』となつて來たのである。我が爲めにも、子孫の爲にも、人の爲めにも、御國の爲めにも、この一身は、本當に大切にしなければ相濟まない。

その貴重なる一身を、健康に保つことは、國恩に報いる第一歩である。自己の健康を誤るのは、不忠であり、不孝であり、不道德である。

健康といふ樣なことは、若い人などは問題にもすまい、至つて小事と考へるであらう。然し、これはなか〳〵以て小事ではない、至つて大切緊要の事である。『五十にして四十九年の非を悟る』。私自身は若い時から、もつと〳〵自重すべきであつたと、今にして過去を顧み、あゝもすれば宜かつた、かうもすれば宜かつたと、悔恨の情に堪へぬことが多い。

×　×

年々歳々、希望を高く大きくしよう

身體の健康と相待つ問題は、精神の昂揚である。精神を引立たせるものは、希望の高大なることである。希望の高大なるところには、永遠の青年が活躍するのである。

思ふに年齡の重なるにつれて、氣力がだん〳〵衰へ、隨つて希望が低下するのが、世間一般の状態である。但し偉人だけはさうでない。偉人に共通する特質は、實にその大望心にある。彼等の望は、年と共にいよ〳〵高大となり、之を欲求するの熱情は、また日に月に熾烈を加へて行くのである。偉人の望は如何なる困難に出合つても萎縮することがない、頓挫することがない。却つて益々盛んに發揚するのである。

自分も是非さうありたい、さうしなければならぬ。否、さうする事が取りも直さず我々凡人を偉大化する所以である。この事がなければ、我々は年と共に萎縮し、沈滯してしまふであらう。若かりし時のやうな粗大豪放の功名心、空疎虛構の妄想は、我々にとつては餘りに內容が無さすぎるけれど、さりとてまた今のやうに、老若悉く眼前の得失と利害の打算とに沒頭し、小成に甘んじ、偸安これ事とするのも餘りに調子が低い。どこ迄も深き信念に根ざした底力ある望、計畫準備一切を具備して炎々として燃えあがる望、實行力の充實した大望を抱くべきである。一つを遂したならば更にまた一つ。一段一段と進んで盡きざる努力は、畢竟、大望の賜である。老いることを知らずして年月が過ぎる。若い氣分が何時でも溢れてゐる。永遠の青年は、こゝに大業を成し、史家はこれを標榜として說

痛するのである。

人物出でよ！　偉材現れよ！　現時の日本は特に英雄の出現を待望するの情、大旱に雲霓を望むよりも、もつと強い。冀くは我れ自らその英雄たらんか。各人各個に、自ら英雄たらんことを期する時に、國を擧げて、活力が横溢し、人物と、偉材とが充滿するに至ることであらう。

× ×

今こそ、一念發起の時

顧みるに、今日迄に、貴重なる幾多の歳月は流れ去つて了つた。それは實に永遠に過ぎ去つてしまつた。併しながら既往の事は之を恨むとも詮ない業である。過去の回想に耽るにしては、私共の將來は餘りに多事である。私共の生命は、何時も將來に存する。今からで十分だ。驚天動地の大活動を演ずるのは、實は、これからの事だ。殘る年月で仕上げねばならないのだ。

古來、齡三十にして眼覺めて大成した人は固より、四十、五十、六十にして、一念發起、猶且つ大志大望を成就した人が幾らもある。足がなくても、手がなくても、眼が見えずとも、耳が聞えずとも、それでゐて立派な大業を成した人が少くない。

今更そんな事はしたくないとか、此年をして今更そんな事をすれば笑はれるとか、『今更』の二字に壓しつぶされて、多くの人々が、飛ばず、鳴かず、落葉のやうに墓穴に落ちてゆくのである。『今更』は有爲の人を化して無能ならしめる。飜然として之を拂ひ棄てなければならない。

『稚氣がある』、『大人氣ない』、『野心家』、『年寄の冷水』、世間はいろ〳〵にいふであらう。世評の聽くべきは聽くことが必要だとしても、悉くそれにのみこだはるのは、餘りに卑屈であり、餘りに自覺がない。世間並以上の何事をもしてはならないといふ掟を、如何なる神が定められたであらうか。妄に他に動かされず、何處迄も自分を主として只々神に聽いて思慮し斷行すべきである。

意義ある人生を、有り難い生命を、勝手に自ら區切をつけて、この年になつてはと自ら限るのは謙遜の度を過して居る。一山登り盡したら更に又一山、白雲迢々として路は窮まらず。『志』を高く、『望』を大きく、今思ひ立つところに、新しい生命の世界が洞然として開けて來る。一念發起甦る迄もと、年頭に當つて、堅く心に誓はねばならぬ次第である。

× ×

さて大望を實現せんために一念發起した曉、その鐵脚となり、その金剛杖となつて、自己を進行させるものは何であらうか。先づ第一は、

考へる力である

考へる力とは、考察、考慮、考案である。何を為すにも必要なのは此の力である。人間が他の動物を征服し、此の地球を支配するに到つたのも、この『考へる力』であつた。人間お互の間で卓越するのにも、『考へる力』の錬磨が最も肝腎である。私は今までとても、それを感得し、又これに力も注いで來たのである。けれどもまだ〳〵足りない。もつと〳〵大いに考へねばならないのである。

不可能といふ文字は、愚人の辭書にあるだけだと言つたのはナポレオンだが、この意味の言葉は大概の偉い人が皆言つてゐる。世間の事多くは不可能なのではない。多くは考へが不足なために出來ないのに過ぎない。『能はざるにあらず考へざるにあり』。今、天下の人、餘りにも『考へる力』に無頓着である。考察、考慮、考案の力の偉大なることに大悟すると、しないとは、其人の一生の成敗にかゝはり、大にしては人類全體の進歩向上にも甚大の影響を及ぼすことと確信する。毎日毎晩考へることにしたい。微力にして重荷を脊負ふ私の如きは今後特に〳〵、一層深く此力を養はなければならない。

× ×

次は『辛抱』である

偉大なる發明王エヂソンは[illegible]試驗の努力だ。これを永年繼續して成功しないことは決してない』と。全くその通りである。我が國では昔から『辛抱第一』といふ言葉があつて、これを以て成功第一要件としてゐる。併しながら言ふは易く行ふは難し。『辛抱』を妨げる色々の邪魔がある。それは色々の欲念である。欲念が働くと色々の理窟が出て來る。つい其の理窟に惑はされて、『こんな事を毎日々々して居つてそれでどうなるのだ』などと、初一念がふら〳〵と迷ひはじめる。酒を飲みたいといふ欲念が働く場合には、今これを飲むことは恰も非常に必要な義務の如き感じになり、若しこれを飲まねば病氣にでもなる樣な考がいろ〳〵湧き上つて來る類である。之が辛抱を破壞する強敵である、惡魔である。深く自ら戒めねばならない。

× ×

正義は支配人である

能く考へ、能く辛抱するのは良いが、それは雇人である。その『考へ』と『辛抱』とを使ひこなす支配人は『正義』である。之を明確に第一義に置かねばならぬ。『健康』も『大望』も、『考へる力』も、『辛抱』も、この支配人が居なければ組織的に働くことが出來ない。例へば、石川五右衛門も、熊坂長範も、健康や、大望や、考へる力や、辛抱

では、優れた人物であつたらうが、彼等には最も大切な正義の念が缺けて居つた。『萬能達して一心足らず』であつた。これ即ち彼等が醜名を千載に流す所以である。私共は深く玆に思を致し、一層『世の爲』、『人の爲』を念じようと決心する次第である。

正義に立つことの自覺は、百萬の味方を率ゐるやうに、限りなき勇氣を湧き立たせる。その號令は天地に透徹して、健康も、大望も、考慮も、辛抱も、手足のやうに活躍するのである。

× ×

先づ自己當面の仕事に就いて

これは實際問題中の實際問題である。仔細に考察しなければならない。それは自己當面の仕事に就いてである。常に反省に反省を重ねて、一層深く之を知り、一層廣く之を知り、殆ど通ぜざることなしといふ樣にありたい。天下に於て先以て必要なる知識は、自己當面の仕事に就いての知識である。然るに自分の仕事に就いては、存外迂濶でゐながら、やたらに他の事を知りたがるのは無駄の骨頂である。世間には物を知り過ぎて困つてゐる人がある。この種の人を名けて『博學の低能』といふ。しかも、この種の人に限つて、結局何物をも知らないのである。無駄の事ばかり知つて、重要な事を少しも知らない人よ、多くを知つ

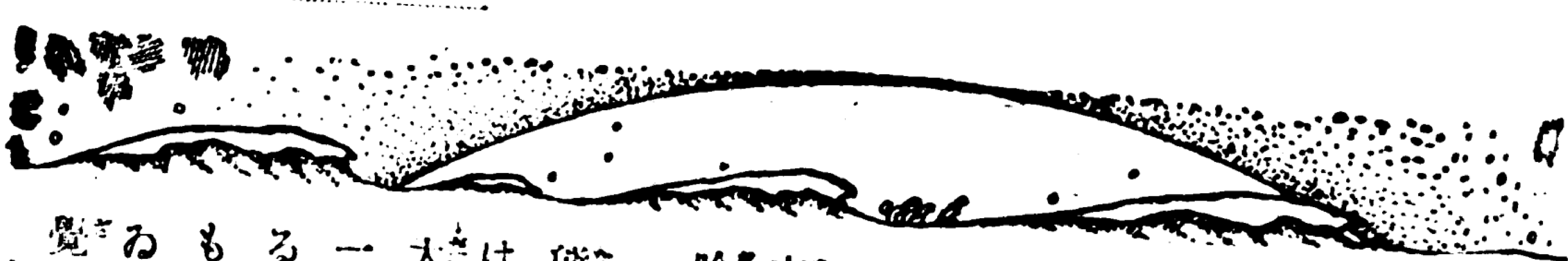
に一事をも知らない人である。先づ當面の事より始め、急所急所に力を入れ、要點要點に心を打込むべきである。

自分のやつてをる仕事は、それが何であらうとも、天上天下唯一のものである。是程大切なものはない。この『仕事』に就いて知らぬ事があつては大きな恥辱である。母親が嬰兒をかき抱くがごとく、私共は自分の仕事を靜と胸の中に抱いて、寸時もこれを離してはならぬ。寢る時も抱へて寢、起きる時もかゝへて起きねばならぬ。それを店において來たり、社に忘れて來たりして、仕事の成功、一身の出世を求めるのはそも〳〵大きな心得違である。

人並のことをして居れば人並の事だけしか出來ぬ。人並以上の大事を成さうとするならば、人並以上の努力を要する。人並の努力では、精々自分の一身一家の爲めに計る位が關の山だ。進んで人の爲めに、世の爲めに、奉仕的の仕事をすることなどは思ひも寄らぬ。昔は千人萬人に勝れた人を英雄とか豪傑とかいつたが、今は人が多くなつて來てゐるから、千人萬人に勝れた位では眼にもつかなくなつた。十萬人、百萬人、千萬人に勝れた人にならうと心がけねばならぬ。

× ×

日本はひどい貧乏になつたものだ



當り百圓近くの借金を背負つてゐるといふではないか。之を一戸五人平均として、一家の負債が凡そ五百圓、雨の日、風の日、せつせと働いても、一ケ年にそれだけの收入の無い家もあらうに、と思ふと、覺えず慄然たらざるを得ない。

自由は獨立より生ずる。貧乏人には自由がない。負債の奴隷となつて一生を苦惱の裡に送らねばならない。貧乏とは、榮養不良、寒氣、無學、飮酒、不道德、病氣を意味すると聞いてゐる。『貧すれば鈍する』といふ位では濟まない。貧故に已むなく、不正直になつたり、人を欺いたり、つい『窮すれば濫する』樣になり、隨つて苦惱、煩悶、悲哀、愁傷、一家を擧げてあらゆる慘めな浅間しい狀態に呻吟することにもなるのである。

愛する同胞が、尊き日本國が、貧ゆゑにかゝる悲慘の狀態にいよ〳〵深く陷つては、それこそ一大事である。お互は奮ひ起つて、早くこの借金を返さなければならぬ。米國大統領は、あの金持國でありながら、全米より貧乏の影を一掃しなければならぬと言つて、貧乏征伐に一心不亂であるといふ事である。獨逸も佛蘭西も英吉利も其の他の諸國も、偉い勢で、世界大戰後の復興に努力奮鬪をつゞけてゐるといふことである。借金國の私共は此處で本當に目覺めなければならない。

利子だけでも毎年三億圓からの巨額を支拂はなければな

らぬといふことを聞いては穩かな話でない。今後日本はどう成りゆくことであらうか。

×　×

もつと眞面目にならう

考へれば考へる程憂世の情に堪へぬ。それは自分達だけではあるまい。如何にして救世の大願を遂しようかと思ひ惱むのである。

總ての根本は精神である。本當の改造は内部より取掛らねばならぬ。金をつくるのも、借財を返すのも、國民全體が、もつと〳〵眞面目に眞劍に一生懸命にならなければならぬ。

隣りの金持が錦紗を着るから、家でも錦紗を着ようといひ、向うの大盡が芝居に行くから、俺も行かうといふ。何といふ無自覺であらうぞ。隣の國で素晴しい學校を建て、素敵もない道路を作つたから、此方も、それに倣はねばと力む。それはまだ可いとしても、隣の眞似して、踊つたり、跳ねたり、働く時間を矢鱈に短縮したがつたりする。何たる不眞面目の態度であらうぞ。

彼は彼たり。我は我たり。非常の時に際しては、非常の決斷を要する。私共は私共としての信念を以て、斷乎として進むべきである。

×　×

手始として

自分達は、今こんな事を考へてゐる。今年は特に、貧乏打破の方法や、各人致富の方策や、産業に關するいろ〳〵の事柄や、失業問題、人口問題などに就いて、自己當面の仕事『雜誌』の上に於て十分に働いて見たい。之が又道德振興の根元にもなる事である。更に又この他醇風美俗を作興するためにいろ〳〵働いて見よう。毎日の新聞紙上に忌しき事のみ多く報道せられてゐるのを見るにつけても、層一層道德の振興に力めねばならぬ事を痛感する。流行歌改善の運動をも起して見たい。例へば『枯すゝき』『すたれもの』などいふ淫蕩惰弱の歌に代ふるに、興國の意氣を昂揚すべき勇敢にして壯嚴なる詩風の作振に寄與して見たい。道德宣傳に就いても、色々方法を講じて見たい。

其他數へ來れば、曰く何、曰く何、我等の爲すべきことは一にして足らぬ。自分達同人の胸中には、既に幾多の方案が考究せられつゝある。その機を得て、漸次諸賢の御示教を仰ぎ、又御援助を願ひたいと思つて居る。

とにかく、自分達同人一同は、我社の三大社是の下に、更に一段の奮勵刻苦を積む覺悟である。思ひを練り工夫を凝らし、渾身の勇を鼓して雜誌に善處することが、小にしては我身のため、我社のため、大にしては世道人心のため、國家社會のため、我等に許されたるたゞ一つの正しき大道である。

西哲曰く『働く者に苦惱なし』と。尚又曰く『眞に天下の大愉快は自己當面の業務に精を出すこと、工夫を凝らすこと、それに依つて人を利し世を益することである』と。

× ×

明るい美しい日本へ！

繰り返していふ、物質的にも、精神的にも、日本は今や大難に直面してゐるのである。この事實を前にして、悲觀、苦惱、不平、恐怖、自暴自棄に落ちるのは、即ち、自ら、自らを葬り去るに過ぎない。何ぞ『勇氣』を奮つて起ち上らないのであるか。國民一致の大勇猛心は、一切の障礙を排して、前途に光明の溢るゝ生活を展開するに餘りがある。

古來日本人は、大難に遭遇する毎に、必ず一致團結して、見事に之を打開して來た歷史を有してゐる。男も女も、日本國民全體の有する、熾烈なる愛國心、必死の大勇氣は實に世界驚嘆の的であつた。それが我等の時代に限つて出來ぬといふ道理が何處にあるだらうか。

たゞ決心一つだ、覺悟次第だ。『容易ならず』と考へ込んで了ふと、心に重荷を背負つて委縮爲すなきに至らう。畏れてはならぬ。縮つてはならぬ、一時的の苦難は、如何に大きくても、男らしく之を忍ばねばならぬ。遲かれ早か

れ、當らなければならぬ苦難ならば、少しでも早く之にぶつかつて、毅然たる新天地を打開すべきである。うんと下腹に力を入れ、手に唾して起つべきである。

年は新たにめぐつて來た。人の氣分も亦新たになつた。此時此際、國民全體が、氣を揃へ、呼吸を合せて、各自の本務と天職とに於て、各自當面の仕事に於て、普通の場合よりも、二倍、三倍、四倍の努力を敢てし、思ふ存分、精限り根限り、稼ぎに稼ぎ、働きに働き、稼ぎつくし、働きつくす時に、天下何物のアルプスか能く我を遮らんや。眠い時に眠つたのを已めて、眠いのを我慢しよう。遊びたい時に遊んだのを已めて、遊びたくても働かう。身分不相應なる、着たい、見たい、食ひたい、聞きたいの己に打克つて、眞面目に、眞劍に、孜々汲々として、我が爲すべきを爲すのである。大きな釣鐘でも一寸動き始めれば、それからはもう動いて止まなくなる。骨折に張合がついて寧ろ苦痛でなく、愉快は事毎に加はつて來よう。少しの我慢である。お互に大いにやつて見ようではないか。其の結果は、成功であり、繁榮であり、人格の向上であり、國民の幸福であり、而して國威の宣揚であり、人類の進步である。

眞に暫くの我慢である。このやうな努力のつゞくこと一年、二年、恐らくは三年を出でずして、略ぼ當面の難局を打開し得るであらう。何のこれしきの困難！　燃ゆるが如き日本精神の前に、それが何であらうぞ。かくして國家の大難は、いつの間にか消え失せ、朝日さす日本、櫻咲く日本、明るい美しい日本が、莞爾として我等を待つてゐるであらう。次代の日本國民に、よき日本、借金なき富裕の日本、道德振興上下和悦の日本を、大威張で讓り渡すことが出來るならば、それは何といふ愉快であるだらうか。元來缺乏困厄は、之に打倒されず、却つて之を征服する勇者に限り、此上なき幸福の源泉となるものである。それはよき刺戟であり、奬勵であり、教訓であり、發憤の機會であり、發展進步の土臺である。我等は、勇者たらんと欲するが故に、この大難に對して、寧ろ熱心なる感謝を捧げたいものである。

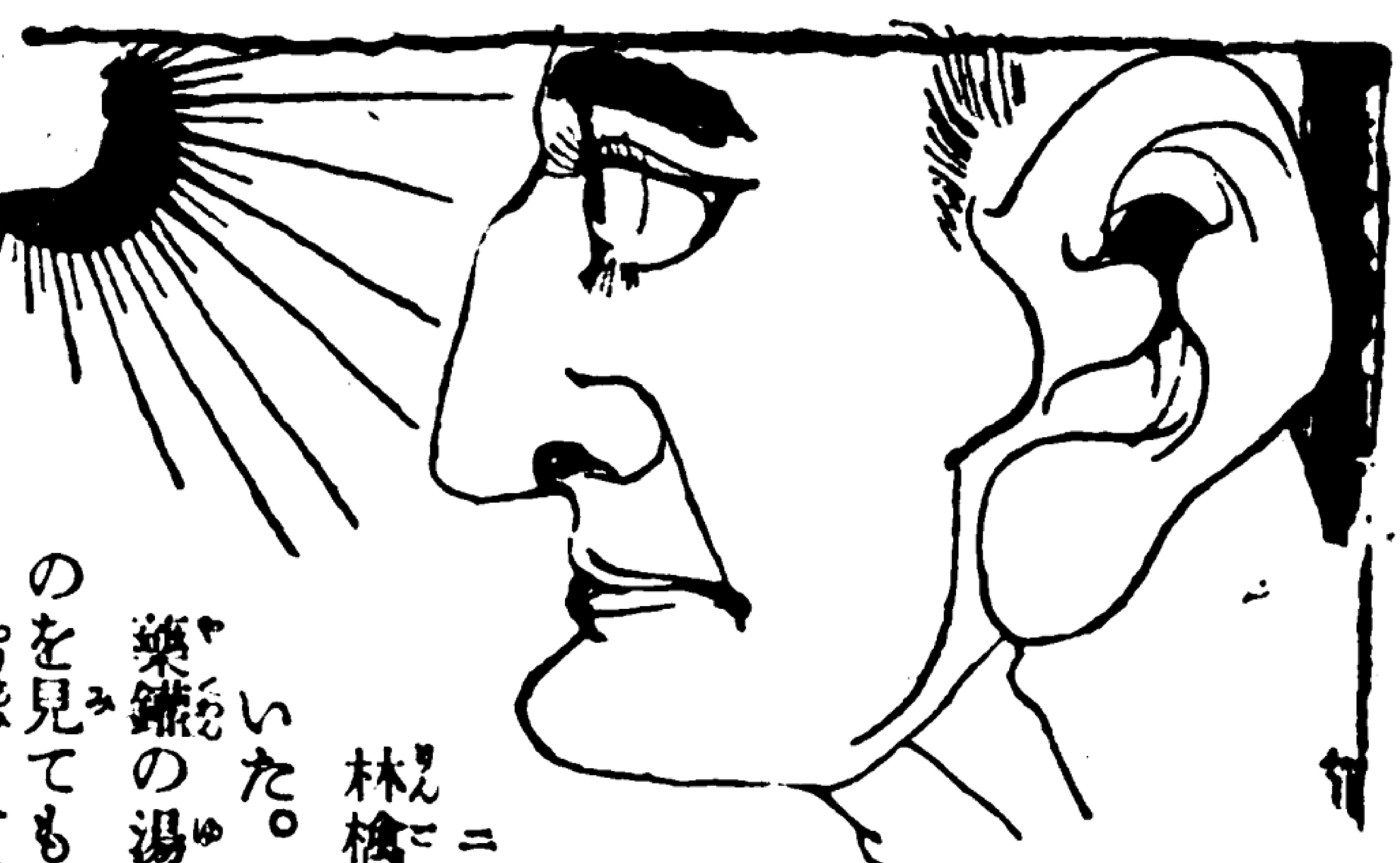
思ふに、我國將來の光輝も暗黑も、一に繫つて現代國民の覺悟如何に在り、努力如何に存する。國難打開！　これに向つて、自分達同人は、滿天下同志同憂の諸君と共に、昭和五年の第一步を踏み出したいと思ふ。知らず、新年劈頭に於ける諸賢の高懷や如何。新春を迎へて深憂に堪へず、過去の體驗に基いて、深く自ら戒むると同時に、諸賢と共に、敢て身を挺して國難に當ることを期し、茲に所信を披瀝して之を天地に訴へる次第である。（完）

回　次號掲載の大文章　萬人熱狂の大獅子吼

暁の鐘は鳴る　尾崎行雄

目の使ひ方、耳の使ひ方、口の使ひ方

能率增進協會々長　池田藤四郎



1

能く目の見える人は、物の見方が行屆いて居る。

ニユウトンは、木の枝から落ちる林檎を見て、引力の法則に氣がついた。

藥罐の湯がたぎつて、湯氣の立ちのぼるのを見ても、その偉大なる力に氣のつく人は、割合に少ない。ジエームズ・ウオツトは、それを一目見て、蒸汽機關の發明を思立ち、見事それに成就した。

鋼鐵王故人カーネーギー翁は、若い頃鐵道會社に雇はれて居たが、ある時、木橋が燒け落ち線路の不通になつたのを見て、將來は必ず鐵橋の時代が來るものと見込を立てた。彼は直ちに鐵橋請負會社の設立に着手した。

それこれが緣となつて、彼は終に製鋼事業に身を投ずることになり、軈ては世界二番目の大富豪と呼ばるゝ程の出世をしたものだ。

エドワード・ドヒーニといふ人は、貧乏のドン底に陷り、どうにも方法がつかなくなつた或日、偶然ロスアンジエレス市の往來で、土運びの馬車に行きあつた。何氣なく馬車に積んだ土を見て、如何にもそれがギラ〳〵と脂ぎつて居たのに氣がついた。

ドヒーニは、それに氣がつくと共に、その出所を御者から聞取つて、すぐさまそこへ急いで行つた。彼はそれまでに誰も氣のつかなかつた地中の富を發見して、それを掘り當てた。石油大盡ドヒーニの目は、たしかに普通ではなかつた。

西洋人は、子供を躾けるのに、能くコンナ事を言ひ聞かせる。『世の中を渡るには、兩眼をチヨツキのポケツトへ仕舞込んでおくな。』

物を見るのは、腦味噌である、智慧の働きである、そして又知識でもある。

名人の作を見ても、それを本當に味はふことの出來ぬ目は、要するに頭がないからだ。

同じ新聞や雜誌に目を通しても、甲乙の受ける印象では

きを見破る人もあれば、これを讀んでスグ忘れる人もある。

アメリカの一大會社は、曾て年俸五十萬ドルの一人物を雇入れたことがある。五十萬ドルといへば、百萬圓以上の大金だ。雇はれた高給者は、就任早々、會社の工場を見廻つた。大金を出して人を召抱へる程の大會社は、普通以上に其工場が整頓して居る。けれども目のある人にかゝつては、缺點が續々出て來る。高給者は、工場を一巡して、いろ〳〵の不都合を發見し、その改善策を申出でた。その御蔭で、會社は百萬ドル以上の節約をすることが出來たと言はれて居る。

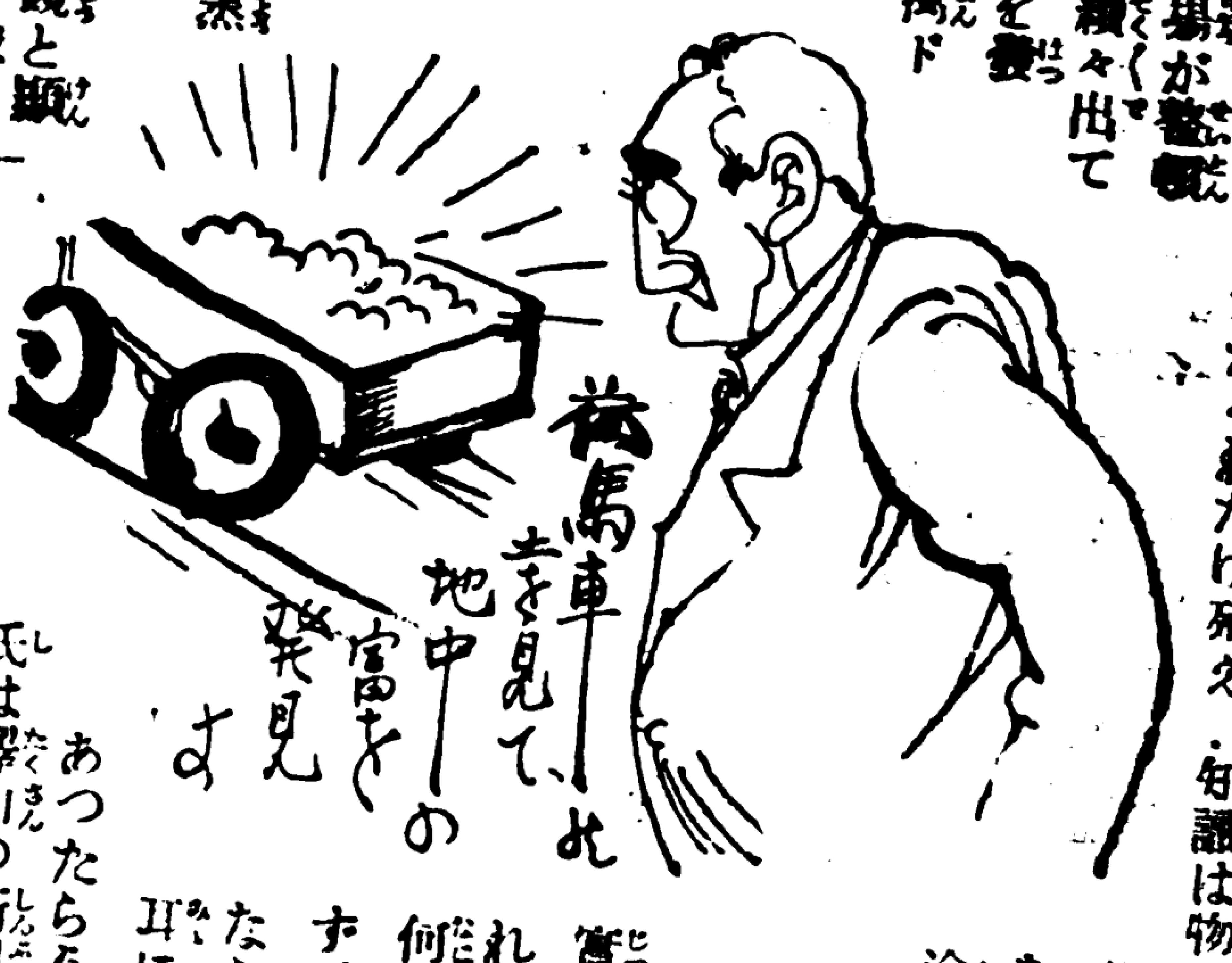
外の人に見えぬものを見破る力は、五十萬圓でも百萬圓でも高くはない。この力を養ふには、日頃から物を學ぶことに注意する。

多く學べば、目が開いて來る。生れた儘の目を育てずに居ると、節穴以上には發達が覺束ない。大きく目を見開いて居れば、智力が限りなく發達する。自然、目に映るものは、忽ち捉へられて、引力の法則ともなり、蒸氣機關ともなるものだ。

能く見える目は、早く言つて見ると、その内部に望遠鏡と顯微鏡とを用意して居るに均しい。目の表に映るものが、一切を決するのではない。目の裏に控へた何ものかゞ、萬事をきめるのだ。

『見える目』を養ふ秘訣は、物事を綿密に觀察する癖をつけるまでだ。物の内面を洞察する明と力とが備はつて居れば、目に映る一切のものが面白くてたまらない。

成功者は、人一倍、物をハツキリと而かも徹底的に見るからこそ、成功するのである。譯の判つた見方をすれば、知識の分量がそれだけ殖え、知識は物事を見通す力を、更に添へてくれる。目の見えぬ人は、品物の外形を尊び、目の見える人は、その用途を買ふといつた具合だ。



2

アメリカの新聞王ハーストは、實に能く耳の發達した人だと言はれて居る。金滿家を父にもつて、何不自由なく生長した人に似合はず、その我儘一杯が出世の妨げとならなかつたのは、特別上等の兩耳に惠まれ、聞き上手だからでもあつたらう。

氏は澤山の新聞雜誌を發行して、大勢の人を使うて居るが、人を召抱へる時、決して餘計な口をきかず、兩方の耳を充分に開けて、相手の言葉に格別注意を拂ふといふことだ。

人が何事かを獻策すれば、凝と耳を澄してそれを聽取り、いつもきまつて、

『成程それは面白い御趣向だ。もつと金を使つて、一層大規模にやつて下さい。』の一言で結ぶと聞いた。

ローズヴエルトといふ人も、聞き上手であつた。隨分見聞の廣い萬事に通じた人であつたが、能く人に會つては、何事かを相手方から聞き出さないと承知が出來ない。巧妙に問ひを發して、誘ひをかけては、聞けるだけ聞いて、これを頭の中へ仕舞込んで置いたものだ。

古今を通じて、世間に名の出た大人物は、その青年時代に、何でも人に聞いたものだ。さういふ人達は、追々成人するに隨つて、知識の兩替といふことを怠らなかつた。

知識の兩替といつては、變に聞えるかも知れないが、金錢の兩替と反對に、交換毎に倍加するのは知識のみだ。十圓札を取替へても、十圓は何處までも十圓だ。甲の知識と乙のそれとを交換すれば、甲乙ともに其分量が倍になる。このコツを心得たものは、勢ひ常に耳を開けて居る。と言つて單に耳の支度だけでは、仕樣がない。聞くには聞くだけの術がある。一言も口を出さず、相手の言ふことのみを聞くだけでは、聞き上手とは言へない。



本當の聞き上手は、相手の身の上か、その好き嫌ひも、悉く呑込んで、旨く誘ひをかける。何事かを成し遂げた大人物は、容易に口を開かない。それが舵の取り方一つで、自由になるから妙だ。

アメリカン雜誌といふのは、丁度キングと同じやうに萬人向きの大雜誌であるが、その前主筆ジョン・シッドウルといふ人は、聞き出すことにかけては、全くの天才であつた。

この人にかゝつては、巡査も、牛乳配達も、質屋の頑固おやぢも、大臣大實業家も、他愛なく肚の底を割つて、何事も打明けて了ふと言はれたものだ。シッドウル君の兩耳の働きで、この雜誌は僅の間に大發展を遂げ、今ではアメリカ隨一の月刊雜誌と認められるやうになつた。

3

愚な人でも口をきかずに居れば、利口に見えるといふことがある。たしかデイズレリイであつたかと思ふ、こんなことを言つたものだ。

『無言は眞理の母なり。能く語る人よりも、無口で一層面白い人物がある。』

その部下ロックフエラー翁は、人一倍氣をつけて油田を選擇した。同じ筆法で、石油王は口を利く時の言葉を選り好みする。

アメリカ一の大銀行ナショナル・シテイ・バンクに采配を振つて居るミッチエルといふ器量人は、口の利き方がハッキリとして、齒切れがよく、人を感奮せしめねばやまない。その言葉には熱があり、何處までも挑戰的だ。

ミッチエル氏と五分か十分間話をして居ると、誰しも吾知らず武者震ひがして、何でも構はぬ一番六かしい仕事に當つて見ようといふ氣が、自然に出て來ると言はれて居る。



話の上手下手は、内容の善惡によつて定まる。如何に音聲や調子がよくても、取りとめの無い下らぬ話では、口の利き損だ。

電話王と呼ばれたヴエール翁は、數十名の幹部社員を、數週間働き詰めにする程の用件を、僅に十分で命令した。鐵道王ハリマンは、長話と長文の手紙が大嫌ひ、主人思ひの秘書は長文を約めることに苦心したものだ。

政界や實業界に於ける巨頭株の傍には、簡單に物の要領を會得せしむる秘書が、大勢附添うて居る。さういふ仕組が充分整うて居ないと、迚もひとつカラダでは用が足せない。如何に授かりものでも、ムヤミに口を使ふことは遠慮したいものだ。

人は物事に通ずれば通ずる程、それを簡單に要領よく話せるものだ。頭のいゝ人に限つて、挨拶がテキパキして居る。自信のある人が、相手を説きおとして居るのを、傍で聞くほど氣持のいゝものはない。

口を利く時には、先づ相手方の身になることが肝腎だ。人の氣も知らず、管々と不得要領の長話をされては、出來るものも出來ない。繁昌する商店が繁昌するのは、一刻も油斷なく客の利害を第一にして居るからだ。同じ道理は、すべてに通用する。

一生は時間の連續である。餘計な長しやべりをして、他人の時間を奪ふのは、自分の大事な時間を二倍失うて居ることにも當る。

心得方の正しい人は、いつ何時、何處で何を聞かれても、受け答への用意がある。知らぬことを知らぬと言ひ得る人は、必ず引立てられて重要な仕事を任せられる。大事な場合には、豫め自分の言はうと思ふ點を、順序よく紙へ書き認め、それを判り易く呑込めるやうに、再三再四推敲して、其上言葉の節づけを試み、家族のものや友人の前で、一應豫習する。忙しい相手に對しては、このくらゐの親切と用意とが必要だ。

（をはり）

柚木久太畫

勅題 海邊巖





西條八十

巖と遊ぶ浦波は
妹背の仲に似たるかな。
もろきは波のつねにして
搖がぬはこれ巖のつね。
異なる性を持ちながら
千年を契る
伉儷に
波は眞白き
姥となり
巖の尉も
苔生ひぬ。

阪正臣

沖つ風吹きのまにまによる波を
花とさかする磯の大岩
朝な夕な潮の洗へは千代へても
色新たなりうみつらの岩

坪谷水哉書

勅題 初東風や海辺の巌にさくら浪 水哉

荻原井泉水

渚や寒明の浪にぬれてゐる巖
海に腰かけて巖のぬくみある春





井上剣花坊

どの磯も巖でかためた日本海

アメリカの浪がぶツかる金華山

佐佐木信綱書

沖つ浪力のかぎり寄すれども
大きいはほはゆるぐともなし

太田水穂

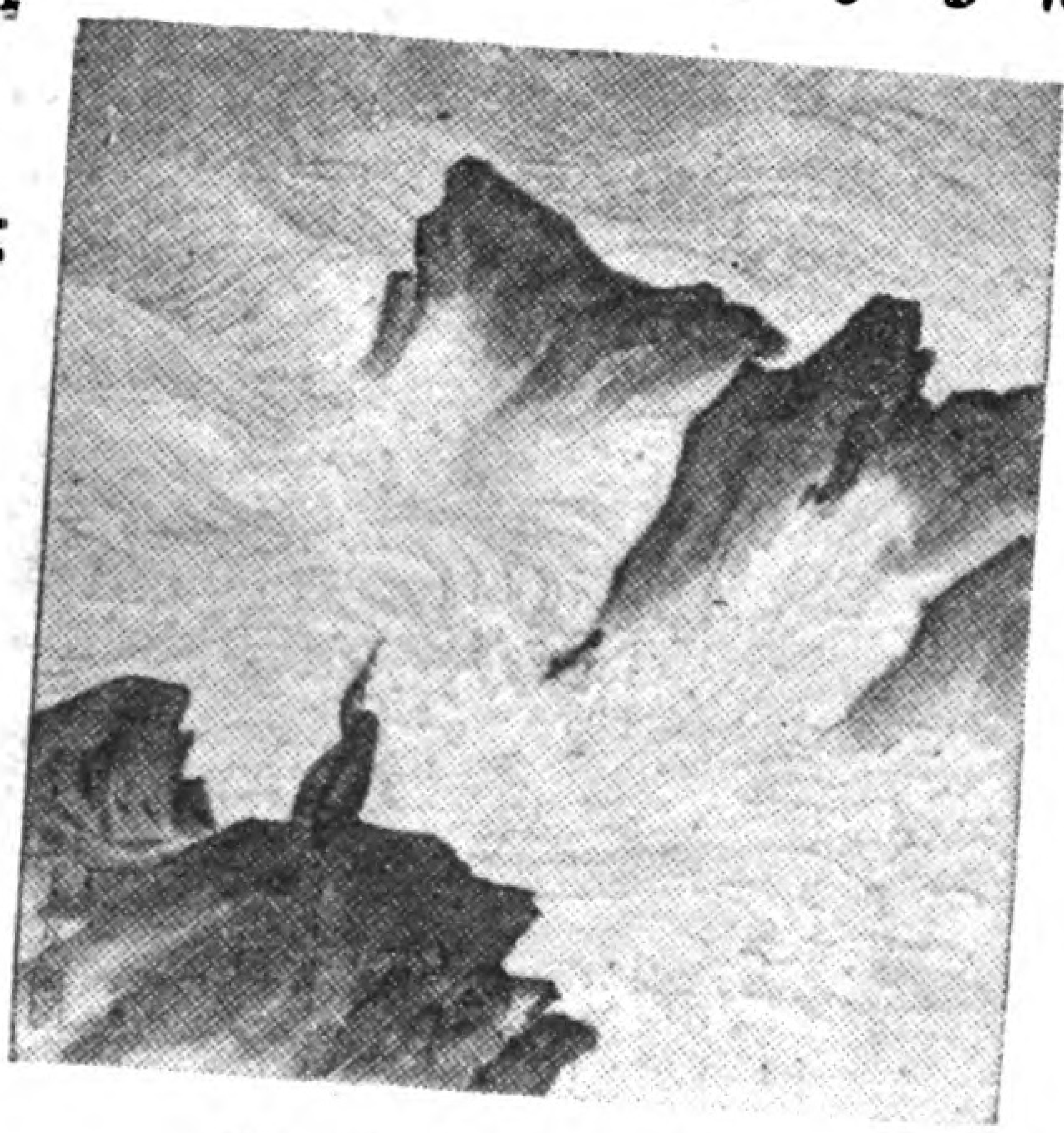
荒海を四方にめぐらして神大和
岩垣かたくきづきたる國

荒うみの浪にすわりてゆるがざる巖ともなるは人のこころなり

矢野錦浪

誘惑に打ち勝つ力岸の巖

岸の巖波を水晶にして返し



兒玉希望畫



吉植庄亮

八丈が島根荒巖黒汐の常白波にたぎちたる見ゆ

磯崎の巖にたぎつ汐沫の汐やけしたる色のさびしさ

武田鶯塘

この浦を鎭めて巖の初日かな

淑氣滿つる巖やいく世の波枕

金子薫園

夜明けがたの海を前にしてくろぐろと白砂の上の大き巖一つ

殘月の光をうけて砂のうへのくろき巖肌あをみてぞ見ゆ





心の日月

菊池寛
結城素明畫

したくない卒業

校長先生は、いつもの通り、誠實、質素、貞淑、向上の四つのモットーを諄々と說いた。それは、入學して以來、いく度聽かされたか分らない。でも、今日が、おしまひで、もう今後は絕對にきかれないと思ふと、そのかびのはえたやうな訓示が、しんみりと胸にしみ込んで來た。白いお髯までが、なんだかさびしくふるへてゐるやうに見えた。

その次ぎは、四年生總代の祝辭である。

四年生の中で秀才のほまれの高い古田よし子と云ふ、額のせまい小さい顏立の、聰明な眸をいつも、かゞやかせてゐる人が、しとやかに列を離れて、教壇の下の向つて左寄りの、ピアノの前に立つと、用意して來た草稿をひらいて、高々とよみ上げた。

「お優さしいみな樣のお姿を、もうこれぎり校庭のポプラの下に、お見かけすることが出來ないと思ふことは、どんなに悲しいことでせう。」

そんな言葉が、卒業する人々を、わけもなくホロリとさせた。

祝辭がすむと、いよ〳〵卒業生總代の答辭である。

皆川麗子は、滿場の人々の視線を一身に浴びながら、最前列から、五六歩前に進み出でた。彼女は、その才華と美貌とで、二三年來この旭東女學校の華とうたはれてゐた。

眉と眼とがすぐれて美しく、一寸眉をひそめて遠方をみつめるときなど、そこに夢のやうなほのかな翳をつくつて、見る人の心を惹かずには、ゐなかつた。口もとは、恰好のいゝ鼻に比べると、少し落ちてゐたが、それでも色が白くどこかモダーンな匂があつて、この學校と丘一つ隔てた六高の學生などは、彼女の名前を知らぬものはない位だつた。

彼女は、三日もかゝつてかき上げた、答辭の草稿をとり上げた。そして、美しい聲でよみあげた。

……でも、私達は、この學校にいつまでもゐたいのです。操山の綠の姿をいつまでも仰いでゐたいのです。地藏川のアカシヤの並木の下を、ときどきはあるきたいのです。おやさしい師の君や、親しい四年生以下の方々といつまでも御一緒にゐたいのです。さう思ふと、卒業式の歡びのかげには、堪へても堪へ切れない悲しみのあることを、どうぞお察し下さいませ……

そこまで讀み上げて來て、麗子はつい、自分自身の實感が、胸の中にこみ上つて來て、危く涙ぐみさうになつた。彼女の本當の氣持を云へば、もつともつと女學生でありたかつた。彼女は、ちつとも卒業をしたくはなかつた。彼女の卒業が、卒業生總代と云ふ榮譽で飾られてゐても、彼女は卒業したくはなかつた。なぜなれば、彼女は卒業と同時に、心にもない結婚を強ひられてゐたからである。

だから、彼女の答辭は、欣びよりも悲しみの調子の方が、強くひゞいてゐた。

卒業式が終ると、卒業記念の月桂樹を植ゑる式があつた。麗子は、茲でも卒業生總代として、土をかけた。みんなは、植樹の歌をうたひながら、麗子と月桂樹の周圍を、列を作つていく度もいく度も廻つた。

それが、終るとみんな一時解散した。すぐ、同窓會があり、新入會者として出席する筈だつたが、それには一時間も時間があつた。

麗子は、親友の山上浪子や木村とし子と、一しよに校庭の東の隅のポプラの陰に集つた。

浪子も、とし子も卒業の欣びで胸が一杯だつた。とし子は、卒業するとすぐ上京して目白の女子大學の試驗を受ける筈だつたし、浪子は奈良の女高師へ行く筈だつた。

『とし子さん、もう出立の日きまつた！』

浪子は、とし子に訊いた。

『えゝ、多分七日の午後、從兄と一しよに行くかも知れないの。あなたは？』

『わたしは、十日すぎになるかも知れないの。お母さまが、一しよに行つて下さるの。』

それは、かゞやかしい希望に溢れてゐるやうな會話だつた。麗子は、どんなに上の學校へ行きたく思つたか分らなかつた。彼女は、結婚の相手が、嫌ひであるばかりでなく、結婚そのものも嫌ひであつた。もつと、勉強もしたかつたし、處女でもゐたかつた。しかし、それは生さぬ仲の母には、云ひにくかつたし、また生さぬ仲の母にすつかり支配されてゐる父に、訴へてもたうていきかれないことだつた。



『うらやましいわ、わたし。そんな話、わたしの前で、しないで頂戴よ。』

麗子は、さびしく笑ひながら云つた。

『まあ。麗子さん、そんないや味をおつしやるものぢやなくつてよ。此方こそ、あたたがうらやましいわ。』

とし子が云つた。

『なぜ？』

『おかくしになつて、駄目だわ。ちやん

と分つてゐるんですもの。』
　とし子は、いたづらつ子のやうな目つきをして云つた。
『何が。』
『何がだつて……まあ、ねえ浪子さん。クラスの中で知らないものは、一人もなくつてよ。おほゝほゝ。』
　とし子は、さう云ひながら、麗子をじらすやうに笑ひつゞけた。
　とし子は、麗子に比べると、半分ほども美しくはなかつたが、しかし色白の丸顔に、どこか愛くるしいところがあり、學校の制服の紫紺色のセーラ型の洋服に、グリーンのネクタイをした姿が、一番子供らしく無邪氣に見えた。
『まあ、何が――何をみんな知つてゐると、おつしやるの。』
　もしか、胸の奥ふかく秘めてゐる麗子のたつた一つの秘密を、知つてゐるわけはあるまいと思つても、麗子は一寸不安だつた。



『麗子さん、おかくしになつても、學校中の評判よ。あなたが卒業すると、すぐ結婚なさることは。』
　今度、浪子がズバリと云つてしまつた。
『まあ、ウソウソ〳〵。』
　麗子は、顔を眞赤にしながら、その噂を拂ひのけるやうに、右の手を振つた。
『だつて、三年の園田さんが云つたんですつて、園田さんはあなたの親類でせう。』
　それは、たしかにさうに違ひなかつた。その三年生は、母方の遠縁に當つてゐた。
『ウソよ。ウソよ。そんなこと絶對にウソよ。』
　麗子は、さう云つて、この本當すぎる噂を打ち消さうとした。それは、麗子がどんなに打ち消したくても、どうにも打ち

消されない眞實だつた。

麗子の卒業するのを待つて、母が前に緣づいてゐた家で、生んだ實子である工藤良吉と云ふ靑年と結婚するやうに、麗子は定められてゐた。

麗子の母は、麗子とこの靑年を結婚させ、そして、麗子の家をつがせるつもりであつた。麗子は、妹のあや子との姉妹ぎりであるから、どうせ養子をするのだつたら、自分の實子を入れた方が、水入らずで圓滿に收ると云ふ說であつた。そして、その事は、麗子が二年生のときに定められた。結婚とか戀愛などについて、何の意見もなかつた麗子は、母からそのことを云ひわたされたときにも、何か他人事のやうに、聞き流してしまつた。

しかし、それから三年經つた。麗子は、自分の未來の良人である工藤良吉と、いく度か會つた。會ふたびに、この男がいやになつた。今では顏を見るだけでも惡感が、蟲のやうに身體中を這ひ廻るほどいやになつた。麗子は、この男の妻になるよりは、豚と一しよに住んだ方が、まだましだとさへ思つてゐた。

未來の良人

麗子の良人に定まつてゐる工藤良吉は、大阪の高等工業の土木科を出て、大阪市のある建築事務所に勤めてゐた。

麗子の卒業と同時に、式を擧げることにし、三月の終りに良吉は休暇を貰つて大阪から岡山に來ることになつてゐた。

麗子が、良吉を極端に嫌ひ出したのは、去年の夏からであつた。去年の夏、良吉は、休暇を貰つて麗子の家に遊びに來て、一週間ばかり滯在してゐた。



麗子は良吉が何となく、きらひであつたので、口をきいたことは、殆ど

た。母がなるべく、麗子を良吉に近づけようとして、御飯も一しよにたべさし、麗子を良吉と一しよに散歩にやらうとすればするほど、麗子は身をすくませるやうにして、良吉から遠ざかつた。麗子が、良吉を避けようとすればするほど、良吉は麗子を追つた。

　ある晩、母が妹をつれて、買物に出かけ父が旭川の堤へ涼みに出かけた後、麗子は一人自分の部屋で、本を讀んでゐた。すると、案内もせずに、良吉が麗子の部屋へ、つか〳〵とは入つて來た。

　おとなしい麗子だつたが、つい眉を昂げて良吉を見上げた。

『まあ！　だまつてお入りになつてはいけませんわ。』



『なぜ？』良吉はにや〳〵笑ひ乍ら云つた。

『なぜでも、わたしの部屋ですもの。』

麗子はニコリともせずに云つた。

『御免！御免、わしは麗子さんに怒られるのが一番恐いわ。』

大阪人らしいナマリのついてゐる言葉も、麗子はいやだつた。

麗子は、それぎり良吉の方をふりむきもせずに、本をよんでゐた。と、いきなり麗子の後に廻つた良吉は、麗子を後から、抱きすくめると、麗子の珠のやうな左の頬に、接吻しようとした。

『いや。何をなさるのです。いや。』

麗子は、斬りつけるやうに叫ぶと、立ち上つて、相手を力まかせにふりほどいた。それは、處女の烈しい怒りだつた。

良吉は、麗子がはづかしがつて、ふりほどく位だらうと思つてゐたが、そこには處女らしい羞耻などよりも、烈しい怒りだけがあつた。彼も、少し當がはづれて、茫然として立つてゐた。

『あちらへ行つて下さい。あちらへ！』

麗子の唇は、色を失つてふるへてゐた。

『えゝぢやないか。そんなに怒らなくつても。』

良吉も、少しふるへながら云つた。

『いゝえ怒りますわ。怒りますわ。』

『だつて、君と僕とは普通の關係ぢやないんだもの。どうせ、いつかは一しよになるんだもの。』

『いゝえ、知りません。知りません。』

麗子は、身をふるはして叫んだ。

『君は、お母さんから聞かない？』

『きゝませんとも。』

『だつて、……』

『あちらへ行つて下さい！ あちらへ！』

麗子は、良吉を部屋の中から突き出しさうにした。

良吉は、麗子のあまりにはげしい勢ひに、氣おされて、だまつたまゝ部屋の外へ出る外はなかつた。

麗子は、良吉の姿が見えなくなると、机にうつぶして泣いた。名狀しがたい侮辱を受けたやうな氣がして、身體中が怒りで燃え上るやうだつた。そのときから、麗子は死んでも、この男と結婚すまいと思つた。

心の愛人

麗子が、良吉を嫌ひ出した原因は、もう一つある。それは、彼女の心のたつた一つの秘密と云ふべきものであるが、彼女の心に、いつの間にか一人の男性の影が宿つてゐた。

彼女は、四年生の終り頃に、五六回教會に通つたことがあつた。麗子のゐる旭東女學校は、むかしミツションスクールであつた名殘りがあつて、敎頭の上村と云ふオールドミスのお婆さんは、敬虔なクリスチヤンだつた。その感化で、學生の中にも、日曜に教會へ行く人が、可なり多かつた。麗子も、さう云ふ人達にさそはれて、山陽教會へしばらく通つたことがある。ある日、麗子は教會から歸つて見ると、懷に入れて歸つた筈の小さいオフセツト版の聖書が、見當らなかつた。

それは、敎頭の上村先生からの贈本で、献辭が、ついてゐるだけに、失くしたら、わるいやうな氣が[illegible]た。

返して行つて、ベンチの下などを探して見たが、どうしても見つからなかつた。

　麗子は、少し憂鬱になつた。すると、あくる日學校から歸つて見ると、自分の机の上に、小さい小包がのつかつてゐた。麗子は、いそいであけて見た。すると、昨日失くした聖書が、いたまないやうに新聞紙でくるまれてゐた。

　麗子は、一體誰が送つてくれたのかと思つて、包み紙をしらべて見た。すると、表には、何も書いてなかつた。たゞ、その包裝につかつた二つに切つたらしい油紙に、

……案内

……村晃樣

と云ふ五字だけが殘つてゐた。

　それは、恐らくその送り手が、自分宛に來た小包の油紙を、二つに切つて包裝に使つたものらしかつた。

……村は、木村だか、川村だか、それとも松村だか、麗子には分らなかつた。

　だが、その送り手の巧くまざる親切だけは、麗子の心に殘つてゐた。同じ教會に行つてゐる人なら、訊いてみればすぐ分るに違ひないと思つた。

　麗子は、そのあくる日學校へ行くと、教會に一しよに行つてゐるお友達に訊いた。

『あなた知らない。山陽教會へ行つてゐる人で、村の字人を。』

『男の人、女の人？』

『男の人よ。』

『知らないわ。男の人なんか。なぜ？』

『なぜでもないの。』

　麗子は、少し顏を赤くして、そのまゝだまつてしまつた。

　麗子は、それぎり……村晃のことは、忘れるともなく忘れてしまつた。

　半月ばかり立つて、お友達二三人と教會の歸りに、旭川の上にかゝつてゐる相生橋の上を歩いてゐた。すると、先刻教會で見かけた六高の學生が、三人づれで麗子達の後から歩いて來たが、男の方が足が早く、麗子達の傍を、どんどん行き過ぎようとした。麗子は、ふと目を上げて、三人づれの麗子達に一番近い右側を歩いてゐる學生の帽子を見上げた。すると、もううすよごれてしまつてゐる白線に、A. Isomura とかいたローマ字が、彼女の眼に刺すやうに、は入つて來た。磯村晃、とつさにそれが明確な漢字となつて、麗子の頭にうつつた。

『この人だわ。この人だわ。』

　お友達が、居なかつたら、麗子はさう叫びたいほどだつた。

　その六高生なら、麗子はよく知つてゐた。もう二三年も教會

へ通つてゐると見え、日曜學校の子供達にお話をしてゐるところを見かけたことさへある。色は、黒かつたが背が高く、どこか賴もしい顏をした男だつた。

麗子は、向ふも、一人此方も一人なら、追ひかけて行つて、一寸挨拶したい位だつた。でも、そんなことは、今の場合あまり奇矯に見えて出來なかつた。

それから、また半月ばかり經つた。その間に、麗子はお友達にそれとなく磯村のことを訊いて見た。そして、彼が六高の三年生で、もうすぐ卒業する人であることを知つた。麗子は、それなら卒業するまでに、一寸一言だけでも禮を云ひたいと思つてゐた。でも、二人ぎりで顏を合はすことはなかつたし、また麗子自身も、自分でそんな機會を作らうとするほど、大膽ではなかつた。

三月の終りであつた。春が來るのが早い山陽道の都會では、もう後樂園の櫻が咲き始めてゐる頃だつた。

麗子は、學年終の休日に、岡山の圖書館へ出かけて行つた。そこで、午後四時頃まで、本を讀んでから、圖書館の門を出ようとすると、丁度その出口で磯村と行き會つた。

麗子は、ハツとして立ち止まつた。磯村も、思ひがけなく麗子と會つたおどろきが、あきらかに顏に出た。二人は、挨拶しようかしまいかと思つて、そこで瞬間狼狽した。だが、その狼狽は、お互に好意を示す狼狽だつた。

磯村は、やつと決心したやうに鳥打帽子をとつた。

麗子も微笑して頭を下げた。だが、磯村はだまつて、行きすぎようとした。

麗子は、磯村の鳥打帽子を見ると、それが六高を出て、岡山を去るしるしのやうに思はれて、今口をきかなければ永久に、そのまゝになりさうな氣がした。

『あの、一寸。』

麗子は思ひ切つて呼び止めた。

『えゝつ!』

磯村には、それが意外の出來ごとに思はれたらしく驚いて、ふり返つた。

『あの、いつか貴君は、わたしにわたしの落したバイブルを送つて下さつたのぢやございません?』

磯村は、驚いて目をみはつた。

『さうです。でも、それがどうしてお分りになりました。』

『だつて、分りますわ。』

麗子は、ニコ〱笑つた。

『お手渡し、しようかと思つたのですが、却つて失禮だと思ひましたから。』

『ありがたうございました。』

『いゝえ。どう致しまして。』

もう、それで用事は、すんでゐた。でも、二人とも何かもつと話したい氣持だつた。

『ときどき、圖書館へいらつしやいますか。』

今度は、磯村が口をきいた。

『いゝえ。たまに。』

『さうですか。僕は圖書館が好きで、三年間一日隔に、來たのですが、もう今日がお名殘りです。』

『まあ。』

麗子は、今日初めて口をきいた磯村が、岡山を去ることが何だか悲しかつた。



『東京へいらつしやいますの。』

『えゝ。もう、教會もしばらくおいとまです。』

『……』

麗子は、名殘りを惜しむ言葉を、何か云ひたかつたが、何も

云ふことはなかつた。

『あちらへ行つたら、ハガキ位差しあげても、いゝですか。』

『えゝ。どうぞ。』

『ぢや、左樣なら。』

磯村は、さう言ふと、どん／＼圖書館の階段を上つて行つた。

麗子は、欣びと悲しみとが、一しよに來たやうな氣持だつた。もつと、磯村と話したかつた。いなもつと／＼磯村に岡山にゐて貰ひたいやうな氣持だつた。口をきいたのは、今日が初めてであるが、もう、一年も二年もつき合つてゐたやうな氣がした。

（つゞく）

キングの讀者諸君の爲めに

菊池寛

キングの讀者諸君に、見ゆるのもこれで三回目である。『赤い白鳥』も『東京行進曲』も、作者としては、心に滿たぬ作品であつた。『東京行進曲』は、構想の三分の一も書くことが出來なかつた。映畫になり、小唄などが出來、日本全國に題名だけは、鳴りひゞいたが、作者としては、もつと東京生活の諸種相を書くつもりだつたのである。從つて、有名になればなるほど、作者は恐縮してゐるのである。

今度の『心の日月』こそは、もつとよい小說にしたいと思つてゐるのである。女主人公を、東京へ出して、東京に於けるいろいろな女性の受難を、充分に書いて見たいと思つてゐる。女主人公の性格も、きまりきつた淑女とはせず、あるときはその心が太陽の光りにかゞやき、あるときは月が出て夜となると云つたやうに、心の晝夜、心の晴曇を描いて見たいと思つてゐるのである。たゞ、長篇小說は、諸君の人生と同じやうに、創造されるものであり、往々にして作者の豫定通りに行かないものである。一度、小說中の人物の性格をきめてしまふと、彼等はその性格通りの存在を主張して、作者の思ふ通りには動かせなくなるのである。さう云ふ意味で、作者は描いてゐる中に自然に作者の意圖以外の人物になつたりすることがあるかも知れないのである。

とにかく、私が書かうと思つてゐる通りの小說になるか、どうかは分らないが、私は微力を盡くして、『キング』のため讀者諸君のため、出來るだけよい小說をかきたいと思つてゐる。


縮尻スキー
田河水泡画
よく降るな
寒くない様に
仕度をして
スキーの稽古だ
あぶない!
何くそ
やり直しだ
又ころんだ
家へ帰つて
斜面ですべる
ナルホド
今度は解つたぞ
ウントコサ
ヨウ高ソぞ
ウヘッ
ドシン
お、痛い
一念恐ろし
どうやら
すべれる
大得意
断崖
ヒエッ!
なんたる
しあはせ!
どんな所でも
もう自信がある
穴!
何のこの位
あ、いけねえ
埋没
ブルブル
寒いく
スキーも破損
家へ帰らう
─おはり─



血ろくろ傳奇

土師清二
岩田専太郎畫

恐怖の蜘蛛

一

『寒いですね』

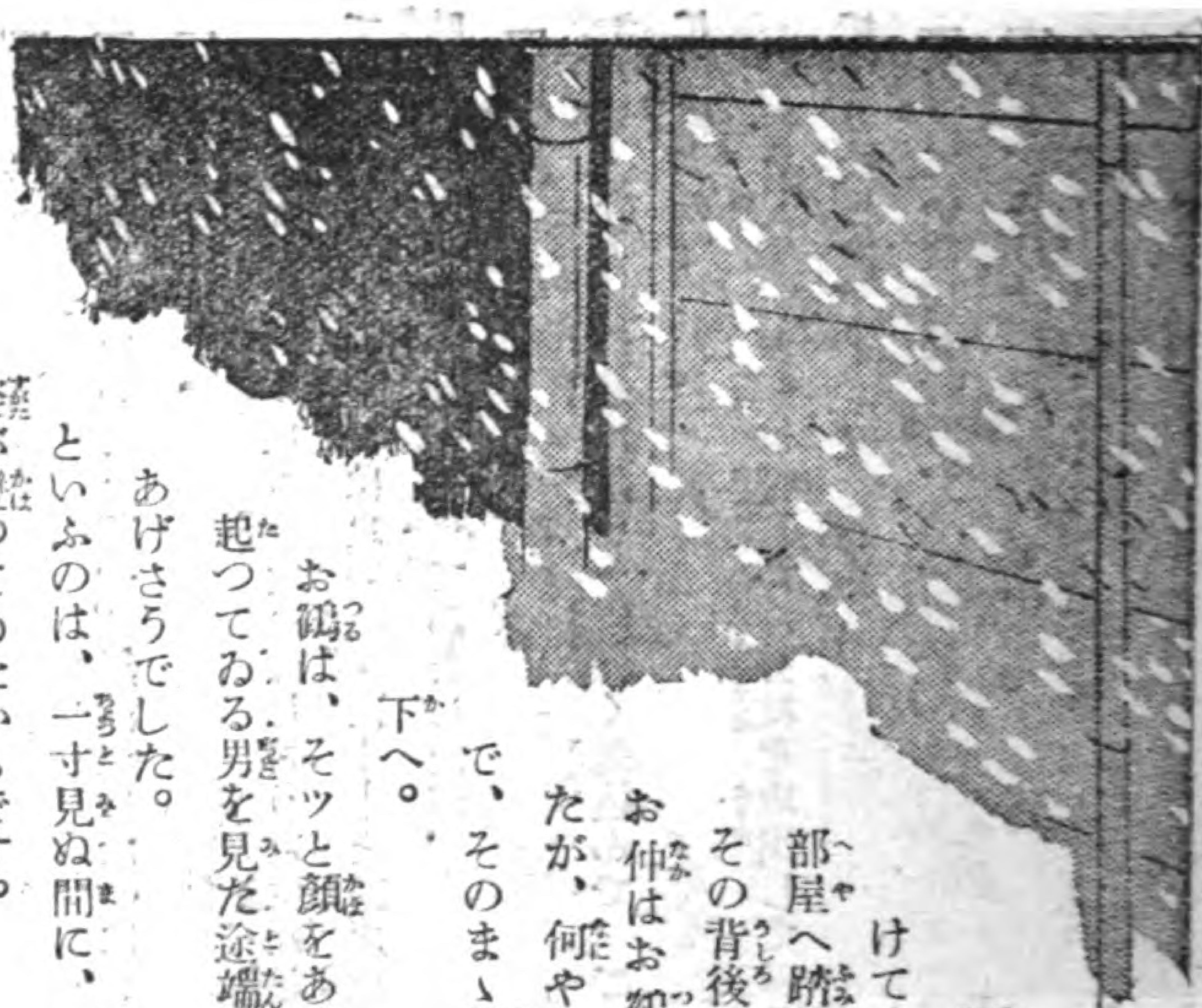
『はい、チラ〱いたしさうでございます』

『さう。雪空といふのでせうな』

女中のお仲を相手に、話しながら廊下を渡つて來る男の聲を聞くと、お鶴は炬燵から出ようとしたが、さうはせず、燃えるやうな鹿子絞の蒲團へ、顏を押當てるやうに伏せてしまひました。

『どうぞ、こちらへ』

『雜作をかける』



と、甚之助はお仲が開けてくれた襖から部屋へ跳込みます。

その背後からチラリ、お仲はお鶴の樣子を見たが、何やら呑み込み顔で、そのまゝ襖を閉めて廊下へ。

お鶴は、ソッと顔をあげて、そこに起つてゐる男を見た途端、アッと聲をあげさうでした。

といふのは、一寸見ぬ間に、スッカリ男の姿が變つてゐたからです。

『どうした?』

甚之助は、やつぱり起つたまゝで、愛撫に溢れる眼で、お鶴を見てゐるのです。

『まア……』

讃嘆とも、呆れたともなんとも云へないやうにお鶴は、微に唇をうごかしました。

『まア……とは、この姿か』

『えゝ……』

お鶴は、いつともなく炬燵の後へ、すべり出して俯向き加減に甚之助の顏を、姿を見てゐます。

『可笑しいか』

甚之助は、鮫鞘の大小を攫んだまゝ、稍ゝ胸を張つて、この立姿を見ろといふ形になつて、見せるのでした。

月代をのばした浪人髷、黒羽二重の小袖、白襟の襦袢、白献上の帶、洗朱黒紐の印籠、足袋は穿かず——どう見てもだてものの浪人の姿で、これが阿波家老の二男とは、誰の目にも見えぬ裝束なのです。

『え、どうぢや。似合はぬか?』

『いゝえ……』

『うム?』

『あまり、あの……お粹な……鶴は、そのやうなお姿が……』

『好もしい。好きだといふのか』

『はい』

『うまく云つてゐるぞ。どれ、御免蒙らうか』

と甚之助は、鮫鞘の兩刀を刀架に置くと炬燵に足を入れました。さうして、

『加減はいゝのか』

『はい。もう丈夫になりました』
『きつい挨拶だな。見舞ひに來なかつたを怨んでゐると見える。薄情な男だと思つてゐるのか』
『あら……わたくし、そんな心で申上げたのではございません』
『いや。わかつてゐる』
『……』
『怨むに無理もないことぢや。無沙汰したのは詫びるよ』
『わたくし……』
俯目になつて、今にも涙をこぼしさうな生な娘を、かうやつて見てゐるのも滿更ではない風情だ――と甚之助は、心の中で味ひながら、少時凝ッと見てゐましたが、
『御無禮……』
といふなり、炬燵に足を一層深く差込んで、ごろりと仰向けに臥轉ぶのでした。
それと見て、お鶴は押入から男枕を取出して、甚之助の枕頭に坐りました。
『お當ていたしませう』
『あゝ、さう』
と、頭をあげた甚之助は、枕を當てようとはせず、お鶴の膝へ、膝枕。

それから何ん時が經つたらう？
部屋には銀燭が灯つてゐた。
鹿子絞の蒲團は燃えるやうに紅く、二人の若く水々しい顏は、部屋の温氣に蒸れて火照つてゐるやうに見えます。
ぴッたりと閉切つた障子の外は、夕方から雪になり、まだシン……シン……と降つてゐるのでした。
甚之助は當年二十歳。阿波藩の江戸詰家老生田辨左衛門重次の二男。お鶴は十七、本銀町の藍玉問屋阿波屋德右衛門の娘。
今二人が逢つてゐる家は阿波屋の寮です。
お鶴から使を立て、甚之助を呼び寄せ、この川に臨んだ離座敷に、二人して籠つたまゝ、たうとう日が暮れたのです。
『どうあつても……？』
『あゝ、どうあらうとも』
鸚鵡がへしに云つて、甚之助は相手の心を探るやうな眼で凝ッと見ます。
『歸る……と仰有いますの？』
『あゝ歸ります。親爺が怖い』
『でも……雪が……戸外は、お寒いでせうに……』
『まだ降つてゐるかな』
甚之助は炬燵から半身をのび出して障子を四五寸引開けました。

漲れ出た灯に、そこだけ劃られた闇の中に、チラチラ白いものが降つてゐる……。

丁度その時だ。

今、甚之助が開けた窓の下の石垣に、小舟が一艘、音もなくピッタリ蝙蝠のやうに忍び寄りました。

それに氣が付いたのか、それとも何も知らずか、甚之助はピッタリ障子を閉めて、

『やらずの雨でなうて、雪か』

と、ひとり言をいひ、炬燵の櫓に頤をのせるやうにして、またお絹を凝ッと見るのでした――。

二

車坂を右へ、惠心寺といふ眞言寺の地内にある清淨庵。茅葺で、風雅な作です。

『御免なさい。御免下さいまし』

『はアい』

十四五と見える小娘が取次ぎに出て、ぴッたり手をつきました。

『慶了院様は、こちらでございますね』

『はい。こちらでございます。どちら様でございませう?』

『はい、私は本銀町の阿波屋様へお出入をさせて頂いてゐる彌七でございますが、阿波屋の内方からコレ〳〵を慶了院様に申上げて來てくれろと云ひつけられた者でございますが……慶了院様にお取次ぎをお頼み申します。へい、直々に申上げたいンでございます』

『少時お待ち下さいませ』

小娘が奥へ消えると、間もなく出て來たのは執事と見える六十ばかりの袴を掛けた老人です。

『俺は、丈右衛門と申すが、慶了院様に直々にお目通りしたいと云はッしやるのは、貴方かな』

『へい。左様でごさンす。阿波屋様のお内方から參りましたもンでございます』

『お内方とは、阿波屋徳右衛門殿の内儀からのお使かな?』

『へい。さうで――』

と、歯切れよく答へる使の男を、丈右衛門は迂散臭さうに、顔を顰めてマジ〳〵と見るのです。

縞の羽織の下は紺法被、腹掛紺股引、白緒の麻裏草履、野郎髷の刷毛先を横に振つてゐようといふ勇肌の風體。年齢は二十七八、苦味走つたいゝ男だ。が、こんな男を、どういふ譯で阿波屋が慶了院様へ直々の使に寄越したのか?

丈右衛門には呑込めないのです。

今でこそ、この惠心寺内に清淨庵主として行澄してゐらる



る慶了院樣であるが、二年前までは大阿波二十五萬三千石の主、蜂須賀大炊頭重喜侯の愛妾お伊勢の方だ。そのお伊勢の方樣へ下賤の男が直々の使……？

丈右衛門は、どう思案しても呑込めないのです。

『で……直々でないといけないのかな？』

と丈右衛門は、念を押しました。

『左樣でございます。他聞を憚ると仰有つたのでございます。へい』

『他聞を憚る……うム』

丈右衛門は、呻ると、そこへ、先刻の小娘がそゝくさと出て來ました。

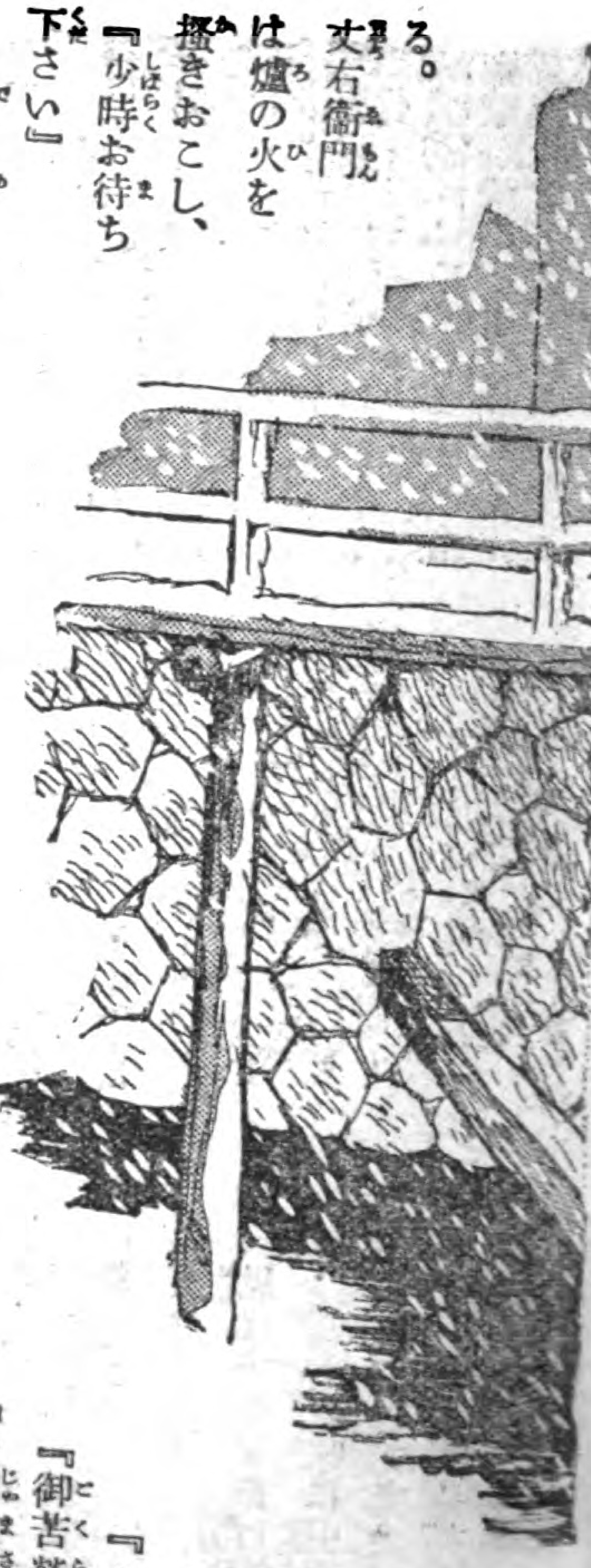
『丈右衛門樣』

『はい？』と丈右衛門。

『御案内申せ、とのことでござります』

『お方樣が。さうか——では、御案内申します。どうぞ』

そこで彌七は、丈右衛門に案内されて茶室に通る。小娘が座蒲團を運んで來



る。

丈右衞門は爐の火を搔きおこし、

『少時お待ち下さい』

と出て行きました。あとで彌七は、スッと起上つたかと見ると今、丈右衞門が搔きおこして行つた爐に跨がり、グッと腰を下げて股火です。

さうして凝ッと四邊の樣子に氣を配つてゐる――が、四邊は闃として人の氣配、誰がやつて來る樣子もない。

そこで彌七、獨り言です。

『チラ〳〵雪だ。これで漸ッと落着ける。寒さにガタ〳〵震へてゐちや、お使者の口上も出やしねえ』

猶もいゝ心地で、股火をやつてゐると、先刻こちらへ通つて來た渡り廊下に人の氣配がするので、彌七はツッと元の座に直つてピッタリ坐りました。

と、芭蕉張の開き襖が音もなく開いて、衣摺の音と一緒に、

現はれたのは慶了院お伊勢の方です。その背後には先刻の小娘が白綸子の蒲團を捧げてゐます。

彌七が、ピタッと平伏するのを鷹揚にうけてお伊勢の方は爐傍の主座に坐りました。

『阿波屋の使か』

『ヘッ、左樣でございます』

『御苦勞に存じます』

『お邪魔樣でございます』

と云ひつゝ彌七、恐る〳〵顏をあげてお伊勢の方の方を見ました。

お伊勢の方も微笑んで、彌七を凝ッと見てゐるのでした。切髪に紫の被布、眉のあとが淡ッすりと青く、媚を含んだ瞳、さうして膝に置いてゐる手は、むつちりと白く、しなやかで、艶々してゐるお伊勢の方――これが三十八であらうとは思へぬ水々しさです。

『彌七と申しましたか』

『はい。阿波屋樣の御贔屓になつて居ります』

『窮屈さうな……崩して樂になさい』

『ヘッ、恐入ります』

『痺を切ります』

お伊勢の方は、彌七に膝を崩せといふのです。穿く時は踵に竹の皮を當てゝ辷らさなくては穿けぬといふ――それほどピッタリ足袋に食付いてゐなくてはならぬ股引――それを穿いて行儀よく坐つてゐては、痺が切れるであらうといふのです。

そんな風で、努めて氣易く、馴れ〳〵しくお伊勢の方は、寛濶に、しかも艶冶な微笑を含んで、彌七を見てゐるのです。

『お使の口上を、承はりませう』

お伊勢の方は、さう云ひました。飽くまで落着き拂つてゐます。

『はい。そのことでございますが――』

と、彌七。四邊に氣を配り、凝ツとお伊勢の方を見詰めました。

『實は、御家老生田辨左衛門様の御子息甚之助様の御素性に就きまして、參つたのでございます』

『えツ……甚之助さん?』

『はい。甚之助様の御素性のことで――』

『素性……』

『お心當が、ございますかね』

射貫くがごとき鋭い眼光――何もかも一切わかつてゐるぞといふ刺すやうな彌七の眼光です。

それから小半刻、彌七とお伊勢の方は、誰をも寄付けず對座してゐました。さうして彌七がお伊勢の方に送り出されて、チラ〳〵降る雪の中を、何所へともなく消えて行くと同時に、お伊勢の方は玄關の衝立につかまつたまゝ、永い間動かうとしません。

衝立の緣に手を重ねて、その上に額を當てゝゐるのです。

『お方様、どう遊ばしました?』

執事の丈右衛門は、もう顏色を失つてオロ〳〵聲です。小娘は小娘で、お伊勢の方から二三尺離れたところに坐つたまゝ泣き出しさうな顏をしてゐるのです。

と、その時、門を潜つて一挺の駕が、斑雪の飛石を踏んでピタ〳〵こちらへやつて來ました。

丈右衛門はソレと見ると、俄に勢ひづいてお伊勢の方の耳近くで、

『御家老様でございまする!』

『えツ……?』

思はず顏をあげたお伊勢の方は、駕を一目見ると自分の部屋へ、急き氣味に引取つて行きます。小娘は、お伊勢の方の後を追うて行きます。

丈右衛門は、玄關の敷臺に降りて、平伏しました。

横着けになつた駕から、兩刀を取つて出て來たのは蜂須賀家の家老生田辨左衛門重次です。

『慶了院様は、御在宅か』

『はッ』と文右衛門。

『案内を頼む』

『少時……』

と、文右衛門は起つて、奥へ引返しました。

三

先刻まで怪しい使の者がゐた茶室に、對座してゐるのは、慶了院お伊勢の力と家老生川辨左衛門重次です。

辨左衛門は當年五十三、眉秀で、鼻高く、一文字に引締つた口、どちらかといへば痩形の筋骨質、今が思慮分別ざかり、阿波大藩中の利け者でありました。

『阿波屋から使が來たと云はるゝか？』

『はい。彌七とか申しまして、下賤の者でございました』

『ほウ……』

辨左衛門は、不審至極の面持です。それを見るとお伊勢の力は、いよ／＼氣が氣でなくなつて來ました。

『阿波屋は昨夜から大騷動だ。あの騷ぎの中で、こちらへ使を寄越さうとは、思はれませぬ。阿波屋夫婦は氣狂ひ同然になつてゐる……』

『えッ……生川様、それは本當のことでございますかッ』

『なんの……』辨左衛門が、お前様に嘘を申しませうや。不思議だ。怪しいことだ……』

『阿波屋の騷動と仰有るは、何事でございます？』

『さア、そのことを申上げるまでに、阿波屋の使者の口上、承りたいと存じます。どうやら阿波屋の騷動と使の者と關係があるやうだ……使の者は、ナニを申して參りましたな？』

と、辨左衛門は、何事か期するところがあるやうに、お伊勢の力の顏いろを凝ッと見るのです。

お伊勢の力は、辨左衛門から訊かれるまでもなく、實は彌七が立去つた後で辨左衛門を呼寄せようと決心してゐたのでしたが、辨左衛門から訊かれて見ると、事柄が事柄なので、胸が顫へて、なか／＼云ひ出しにくいのでした。

『はい……』

『甚之助様のことか？』と辨左衛門。

お伊勢の力は、漸く首肯きました。

『甚之助が、どうしたのだ？』

ガラリと語調も一變した辨左衛門。態度も途端に一變しました。甚之助の名が出るまでは藩公の愛妾に對する家老らしく慇懃鄭重。それが一變して對等以下、情婦に對するやうな態度に變つたのです。

と見て、慶了院お伊勢の力は、今にも泣きさうに面を伏せま

した。名狀しがたい哀しさ、悔恨、そんなものがグッと込みあげて來たらしいのでした。

『藩中の評判、古めかしい噂を、今になつてとやかく云つたか——使の下卑が云つたのか』

辨左衞門は、誰に見せるともない苦笑ひです。

『甚之助は、殿樣とお前の間に生れた子なのだ。しかし御父子の年廻がわるい。蜂須賀家代々の忌になつてゐる御父子の辰——禍があるといふので、その上妾腹。そこで甚之助は俺の次男になつた。これが世間體だつたな』

お伊勢の方は、化石したやうに首垂れたきりです。

『藩中は元より、御親族みんなソレで通つてゐるのだ。それを今更他人にとやかく云はれたとて懼々する奴があるか』

さう云はれると、お伊勢の方は少し顏をあげました。が、それは辨左衞門の言葉に促されて力を取戻した顏ではなく、憤りと怨みと、しかも猶男に愬へるやうなお伊勢の方の眼でありました。

『眞實また甚之助が俺の子であつて、俺が引取つて育てゝゐる——と、かうしても當然の措置だ。しかも殿樣からの御下命で甚之助を引取つた俺だ。な……な、さうだらう。さう考へたらよい』

辨左衞門は、圖々しくなれといふのです。聞いてゐる間にお伊勢の方も少しは落着いて來ました。幾分自暴自棄の氣味もあつたのです。が、こちらはそれとしても氣になるのは阿波屋の騷動です。

『あなたは、甚之助のことを……』

『甚之助のことを?』

『手輕に考へてゐらッしやる』



『重苦しく考へる必要はない。二十年も以前の過失ではないか。甚之助が殿のお胤であらう

と眞實は辨左衛門の胤であらうと、今では甚之助は辨左衛門の次男だ。二十年昔の古傷に觸る必要はないぢやないか』

『えゝ……わたくしも、あなたのやうに思ひませう』

『思へるかな。はゝゝゝ』

と辨左衛門は、爐に手をかざして、笑ひました。が、辨左衛門とて、腹の底ではその古傷がジク〳〵痛み出すのを、どうすることもできないのです。

近頃辨左衛門の身邊を黒い霧の樣な得體の知れぬものが、取卷いてゐる——それは捕へようにも正體が見えず、しかも生命の危險をさへ思はせる戰慄すべきものであつたのです。

『阿波屋の騷動と仰有つたのは、なんでございます?』

お伊勢の方は、話を前に戻してさう訊ねました。

『うム。阿波屋の騷動といふのは、昨夜のことだが——』



『はい……？』
『甚之助が、阿波屋の稲場の寮へ遊びに行つた。遊び相手は娘のお鶴で、川ぞひの離座敷で二人きり正午過ぎから初夜まで遊んでゐたらしいが、あまり靜かな樣子なので女中の一人が、離座敷へ行つて見たところ、二人の姿が見えぬ。あちこちと探して見ても影もない』
『まア……』お伊勢の方は眞ツ青になりました。
『それから騒ぎになつて、アレコレ探して見ると庭の雪だ、座敷の縁から石垣の上まで踏散されてゐる。どうやら曲者が忍び入つて兩人を捕へ、川へ落したか、それとも舟に下して漕ぎ去つたか——といふのでな。阿波屋は上を下への騒動だ。阿波屋は甚之助が殿樣のお胤だと思つてゐる。そこで、泡を食つて德右衛門が、俺の邸へ飛んできた。これが今朝のことだ』
聞いてゐるうちに、お伊勢の方は呼吸を彈ませ、ガタ〳〵震へ出しました。
『あれこれ思ひ合はせて見ると、甚之助とお鶴を攫つた曲者と、こゝへ使に來た下郎は同一人か、仲間か、一手の者に相違ないと思はれる』
『…………』
『この辨左衛門、お伊勢の方、阿波屋一家へ讐をしようと企む奴が、何所かにゐるに相違ない。怖れるには當らぬが、お互に用心に若くはないと思うて、それを云ひにきたのだ。使を立てて他人に聞かせることでもなし、手紙は殘る心配があるでな』
と、辨左衛門は極めて平靜に諄々と話して聞かせるのでした。
お伊勢の方は、今にも倒れさうなのを漸く自制しながら、
『惡人のお心當が……ございますか』
『あるやうでもあり、ないやうでもある』
木で鼻を括つたやうなことを云つて、辨左衛門は、お伊勢の方を睨み据ゑるやうに、ジロリ、ジロリと見てゐるのです。

四

淺草寺を一ノ權現へぬける途中、縄暖簾の一ぱい屋で、山ノ宿の藤吉は、先刻から誰かを待ち合はせてゐるらしく、一人でチビリ〳〵やつてゐます。
『親方、温ツためませうか』
『皮肉を云ひなさんな』
『ヘツ、皮肉……わかりません』
『まだ一本が空にならねえ。はゝゝ』
『なアるほど。火の番の留守で、キが廻つてるといふ奴だ、はゝゝ』
『氣を廻すのは稼業柄だ。勘辨しねえ』
と、藤吉が、老爺を相手に戲談口をきいてゐるところへ、縄

暖簾を刎ねて、
『父つあん、寒いな』
『入らッしやいまし』
『熱くして一本頼むぜ』
『畏りました。お掛けなすッて――』
『合點だ』と、氣前よく云つて藤吉が掛けてゐる隣の空樽に腰をかけた男。
襟のかゝつた袢纏、下に法被腹掛、紺股引白緒の麻裏草履、年のころは二十七八、勇肌の風體です。
『お寒うございますね』
『あゝ、滅法寒い。お前様なンざ若けえ勢ひで結構だが、かう老耄れると、昨今のやうに寒くちや凌ぎがつかねえ。そこでまア酒だな』
『なかく、親方のお年齢ぢやアこれからでさ』
と勇肌は歯切れのいゝ調子で、藤吉に話しかけた。そこへ燗ができる。
『いけさうな吞みッぷりだ』
『ナニ、少々ですよ。失禮ですが、一ツお酌をさせて頂きませう』
『遠慮なしに、うけますよ』
『えゝ、どうぞ』

と酌をする手附を、藤吉はソレとなく見てゐるのでした。言葉が勇肌の調子で勇肌にならず、どこやら腹掛のそぐはぬ様子や、藤吉は稼業柄先刻から怪しい奴と睨んでゐたのです。五本の指のしなやかさ――此奴ア食はせものだ――藤吉は、いよいよさう見ぬくと内心一種の優越感を覺えるのです。怪しい奴を引ッ捕へる時の――それよりもこれから引ッ捕へるといふ時の氣持といふものは、格別なものに相違ない。それを藤吉は今味つてゐるのです。間もなく乾兒の申太がこゝへ來る筈になつてゐる。さうなれば自分で手を下さずとも、この贋勇肌をしよッぴくことができるのです。
『若いの、この近邊ですかい?』
『藏前でござンすよ』
『さうか、いゝところだ』
『親方は、山ノ宿ですね』
『お前さん、それを知つてるのか』
『知つてゐますとも！ 界隈で鬼だと評判のある御用聞山ノ宿の親方を、知つてゐなくちや藏前には住めません』
『お世辭がいゝぜ。はゝゝゝ』
『全くですよ。ところで、あッしや親方にお頼みがあるのでござンすが、お聞きなすッて頂きたい――のですがね』
『俺に――初對面の俺に？』

『あゝさうだ。こッちから名乗らなくちやならねえンだ。が、後で名乗るとして、頼みだけ云はして貰ひませう。構はねえでせうな？』

『お前さんのいゝやうに——』

『ありがたうございます。ぢや、こゝを見ておくンなさい』

と云つたかと見ると杯に指を入れて、打ッ付のチャブ臺の板面に、字を書くのです。

『ふム』

と、藤吉はナニを書くかと見てゐると、達筆で、

阿波屋ノ娘ノ一件

と一くだりに書いて、また杯で指を濡らしながら嘲笑ふ眼で、藤吉の顔を見るのです。

さすがの藤吉、愕ッとしたが、藤吉とて普通の人間でない。ニヤ〱笑ひながら次ぎの文句を眼顔で催促です。

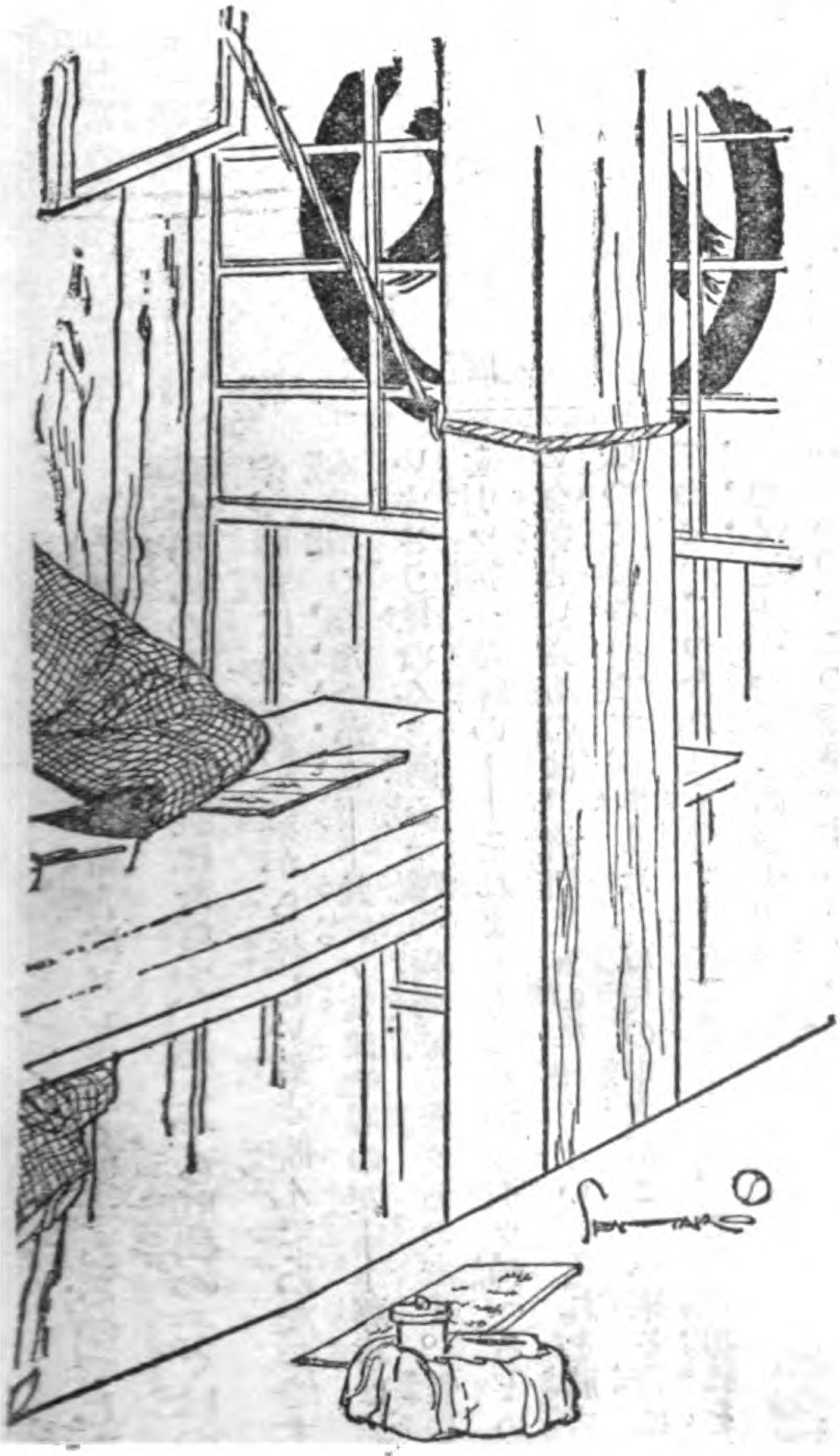
手出シ無用ノコト。
一件ニ手ヲ出シテキルト
オ前ハ殺サレル。

それを讀み下した藤吉は、内心無氣味を感じ、胸元へ匕首を差しつけられたやうな心地がするのを、押へました。さうして、

『お前さんの親切は親切で、うけるとせうかな』

と云ひ、怪しい勇肌に笑ひかけましたが、勇肌は冷たい一瞥を返したまゝ口をきかうとしません。やがて、また、

手ヲ引ケバ阿波屋ノ娘ト
息子ヲオ前ノ手ニ返シテヤル。
待テバヨシ、待タネバ、
殺サレルゾヨ。



『親方、よツく思案をなすツて下さい。探しものは、あんたの手に返るンですからね。合點がつきましたかい』

と、怪しい勇肌は晴れ〲と云つて人の好さゝうな笑顔を見せました。

『聞いて置かう。だが、お前さんのいふやうにするか、しねえか——此奴ア預かつて置かうぜ』

『さうですか。わかりました。親方は手を引けぬと云ふのですね』

と云ひつゝ、また指で書いた文字は、

無用ノ殺生ヲシタクナイカラ云ツタノダゾ。

といふ凄い文句です。

『親方、お先へ御免蒙ります』

腰をあげた怪しい勇肌は、勘定を拂つて表へ出て行きます。

途端に藤吉は『おいツ、待て！』と例の氣合で浴せかけようとしたが、咽喉まで出て來たその聲をグッと呑込んで、誰に見せるともない苦笑ひを洩らしました。



捕物の方では隨分殘酷で、鬼と綽名を取つた腕ッこきの藤吉でしたが、先刻からグイグイ壓付けられた心地で、內心『恐しい奴だ』と思はぬ譯にはいかなかつたのです。

　呼止めれば『なにか用ですか』と落着き拂つて振返るだらう——その時迂濶に『御用だ』などと云つて、こッちが非道な目に遇はされては、今日まで賣つて來た山ノ宿の藤吉の名も面目も丸潰れになる。默まつて見逃して置けば、こッちを大きくこそ見せるが、小さくはしねえ——突嗟に藤吉は、さう考へて、呼止めなかつたのでした。

『親方、今のは、なンでござンすね。いゝ氣ッ賦の若い衆のやうで……』

『あゝ、素晴しい野郎さ』

『親方を、見知つてゐると見えますね』

　老爺からさういはれて、藤吉は今更のやうに『俺を彼奴は知つてゐたンだ、この家に來てゐるのを知つてきたのだ』と思返して見ました。すると、目に見えぬ大きな手でギュッと心臟を握られてゐる心地になりました。

　が、藤吉は、凝ッと唇を嚙んで、恐怖を拂除けようと自分を勵ますのです。さうするには怪しい勇肌に對する敵愾心を起すよりほかはないのでした。

　畜生ッ……捕つてやる！

　藤吉は、さう決心することで、得體の知れぬ恐怖から解放されようとしました。

　しかし、胸に食入り、心臟を匍ひまはる恐怖の蜘蛛——といひますか、追除けようとすればするほど執拗く、恐怖は藤吉の心臟を捕へて放さないのです。

　藤吉は、だん〳〵恐怖地獄へ陷ちてゆくのでした。

　戸外は、また雪がチラづき出したやうで、風の音が強くなりました。

　老爺は、軒行燈に灯を入れて、入口に掛けに出ました。

　藤吉は、冷えた杯を前に、額を抑へて俯向いたきり、動かうともしないのです。

五

　本銀町阿波屋德右衛門の店の奧座敷。

　主人の德右衛門と差向ひに坐つてゐるのは山ノ宿の藤吉でした。

　藤吉は恐怖の中にも一夜中、いろ〳〵と考へた揚句思ひついたのは、怪しい勇肌が書いた文字の中に『息子』といふ文字があつたことでした。

　息子……息子……藤吉は、この文字から阿波屋の娘には件があつたのだ。阿波屋は俺に云はなかつたが、何か變な件があつたに相違ない——と氣が付いたのです。そこで、かうやつて阿波屋にやつて來たのでした。

　この藤吉の質問に、德右衛門は烈しい困惑の中に陷つてしまひました。

當夜の眞相を話せば、御家老の名を出さねばならぬ、甚之助のことも云はねばならぬ。從つて娘お鶴と甚之助の關係も藤吉に覺られ、知られてしまひます。それでは世間體も困る……阿波屋の商賣のために便宜を計つてくれてゐる御家老生田辨左衞門に對しても濟まぬことになる。況んや甚之助は辨左衞門の次男となつてゐてもその實は阿波侯と慶了院お伊勢の方の間に儲けられた若樣だ……困つたことになつた……。

德右衞門は、さう思ひ、丁度藤吉に調べられてゐる罪人の樣に、藤吉の前に首垂れたきり、顏を上る事ができないのでした。

『お伴の人の名を仰有つて頂けませんか』と藤吉は催促です。

『そのお返事は……』

『はい』

『明朝まで、待つて頂きたいが……』

『左樣で——よろしうございます。よつく御思案なさつて下さい』

『今度は、飛んだお世話になつて……』

『なアに、御斟酌には及びません。こちらこそ常々お世話になつて居りますので、かういふ時にお役に立たなくちや濟まねえのでございます』

云ふだけのことを云つてしまつた藤吉は、間もなく歸つて行きました。

その後、夕刻になるを待つて德右衞門は、駕を飛ばし、本所小名木川の阿波屋敷の近所にある家老生田辨左衞門の控家へ急ぎました。

何者の怨みか、仕業か……？

德右衞門は、それを考へました。が、コレと云つて思ひ當ることもないのです。思ひ惱みながら德右衞門は一室に通されて待つてゐます。

『德右衞門、心配ぢやな』

辨左衞門は、打寛いで脇息に凭つて坐りました。

德右衞門は、吃々と懺悔人のやうに、自分の思慮の至らぬため岡ッ引の藤吉を頼んだことを詫び、今日の藤吉の口上の概略を辨左衞門に語りました。

一々首肯いてゐた辨左衞門は、

『なア德右衞門』といふのです。

『はッ……はい』

『もう遲いわい』

『はい……？』

『藤吉とやらは、娘に件があると知つて來たのだぞ』

辨左衞門は、笑ひながらさういひました。

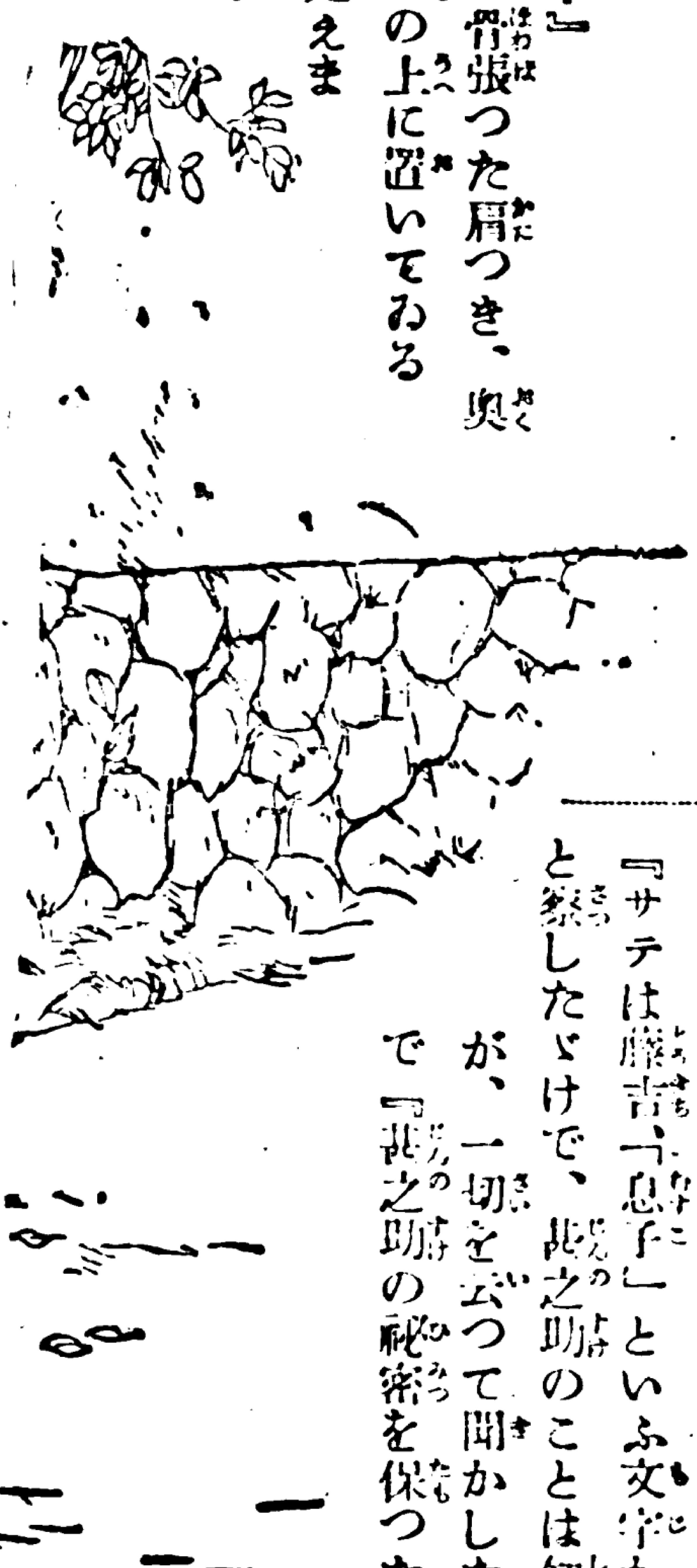
『はい……』

『岡ッ引なら稼業柄の早耳で、甚之助がゐなくなつたと知つてゐるのだ。さうではないか——今更藤吉の手前を匿して置からとしても無駄だな』

『はい……』

『この上は、藤吉に手當を充分にしてやつて、事件を他へ洩ら

さぬやうにする――そのほかに手段はないやうだ』
『………』
『しかし、それほど早耳の利く男なら、役に立つ男だと思はれるが、德右衛門はドウ思ふ？』
『はい。御意で……ございます』
『これまで世間の評判もあることだらう――ではからうしよう』
と云つたかと見ると辨左衛門。大机の上にあつた銀鈴をチリン／＼振りました。
すると遥か先方の部屋から『はい』と答があつて、襖の外で、
『お召でございまするか』
『道岡三十郎を呼んでくれ』
『はッ』
若侍は退つて行きました。間もなく、辨左衛門と德右衛門の前に現れたのは、道岡三十郎で、彼は生國も云はず諸名も名乘らず三月以前兩國で辨左衛門に拾はれてきた怪しい浪人でした。
『御用でございますかな？』
無愛想至極、蒼白い顔、骨張つた肩つき、奥目の氷のやうな瞳、薄い膝の上に置いてゐる十本の長い指が筋立つて見えます。見るからに凄涼といふ道岡三十郎の風采です。
『少し、骨折つて貰ひたい』と辨左衛門。
『はい』三十郎は、冷やかです。



六

その翌日の夕刻。道岡三十郎は、山ノ宿の藤吉と待乳山の下を聖天町、橋を渡つて鳥越へかゝつて來ました。
『……ゐなくなつたのは阿波屋の娘一人でなかつたと知つた經緯を、白狀すればザツと以上の通りでございますがね。なアにあんな奴、凄がるにも恐がるにも當りません。はゝゝゝ』
と藤吉が云つてゐるのは、縄暖簾で出會した任俠肌のことらしい。
『その上に、阿波の御家老樣お聲がかりといふ貴方がこツチの後楯になつて下すツたのだ。鬼に金棒です。まツたく！』
『うム』
と三十郎は答へながら、
『サテは藤吉「息子」といふ文字から阿波屋の娘に伴があつたと察しただけで、甚之助のことは知らなかつたのだ』と思つたが、一切を云つて聞かした以上今更仕方がない。そこで『甚之助の祕密を保つために、此奴を斬つてしまはうか』と胸算用でした。
そんな物騒なことを三十郎が思つてゐ

ると知つてか知らずか藤吉は、先刻待乳山下で一ぱいやつたいゝ機嫌で、しきりに話しかけるのでした。

　これから二人が行かうとする先は山谷裏の怪しい小路、そこで白粉臭い女に戯れようといふのです。

　一丁目から二丁目へかゝらうといふ正法寺門前まで來た時です。二人の背後から急ぎ足にやつて來た男。藤吉の直ぐ背後まで近づいてきたので何氣なくヒョイと振返つた藤吉の目に、ギロリと光つたのは、豆絞の頰冠の鋭い眼光です。

　不意で、ハッとなつて藤吉が、思はず立止つた途端に、一足追ひぬいた頰冠は、藤吉の足もとへ手紙のやうなものをパタッと落して置いて行過ぎようとするのです。

『アッ……彼奴だ！』



思はず叫ぶ藤吉へ、振向いて『拾へ！』といふやうに路面を指ざしたかと見る間もなく頬冠は、風の如く正法寺の横堀へ曲つてしまひました。

藤吉は、氣狂ひのやうに手紙を拾つて掴むなり叫びました。

『道岡さん……彼奴です……畜生ッ』

藤吉は、横堀へ驅け込みます。三十郎も思はず急いで横堀に曲つて見ました。

が、そこで三十郎が見たものは、四邊を迂路々々見廻してゐる藤吉で、頬冠の男の姿は見えないのです。

『どうした、藤吉？』

『へい…彼奴です。わツしを附狙つてゐる奴は、彼奴です』

と藤吉は、顔色土色になつてゐるのが、夕暗の中へわかりました。

『何所へ行つた？』と三十郎。

『コ、……この邊で見えなくなつたンです。この家へ入つたかも知れません』

『ぢや、踏込んではどうだ』

『やつて見ます』

と藤吉は、萬一の時は頼むといふ心を三十郎に目で愬へて、何所かの隠居所かと見える家の門を潜りました。門を入つたが玄關の格子戸、行當りは枝折戸になつてゐます。藤吉は玄關へはかゝらず、跫音を盗んで枝折戸の前まで進みました。

その時です。ワヽヽワッと叫び出した犬の吠聲―

不意を食つた藤吉、思はず二三寸跳びあがりました。しかも吠聲は一頭や二頭でないのです。十數頭の吠聲です。

藤吉は、立竦んでしまひました。すると、枝折戸の奥から、

『誰方？』

張りのある凛とした聲です。途端に多くの犬の吠聲はピッタリ止みました。

『誰方？』と再び聲がした方を、藤吉が見ると、緣端に立つてゐる女があります。

夕闇の中にクッキリと白い女の顔……

その刹那、惑亂した藤吉の頭を掠めて通つたのは『見覺えがある！』と云ふことでした。次の瞬間には、

『おゝ……犬飼のお豐か！』と藤吉、思はず呟いたのでありました。

犬飼のお豐――この女は犬を飼育てること馴らすことに妙を得てゐる女で、近頃は諸大名、旗下の屋敷大町人などから頼まれて、犬を預かつたり、名犬を周旋したりしてゐる女なのです。

『あゝ、お豐さんか……』

藤吉は、俄に愛想よく聲をかけました。

と、何時の間に入つて來たか、道岡三十郎も藤吉の背後に立つて、女を凝ッと見てゐるのです。（つゞく）

この小説は作者が熱魂を打ち込んだ大傑作です。奇は奇を生み、怪は怪を生んで止まるところを知りません。次號は

友情美談

恩愛の復讐

岸　八郎

昔、播州加古川在に四書五經を學び、母と二人、清貧に暮す佐野經雄といふ侍があつた。近くに、知合ひの槖家があつて、一日その家に行き主人と碁をうつてゐると、隣に病人のうめき聲がする。きいてみると、年若い旅の浪人に一夜の宿をかした所、そのまゝ大病となり今更追ひ出しもならず困つてゐる、と眉をしかめての話なので、佐野は双方に同情して、さらば病人は拙者が引きうけようと、その夜、彼は熱にうかされて前後もない大病人を背負つておのが茅家へと歸つて來た。

母子二人がかりで看病の甲斐あつて三箇月目に病人はもとの體となつた。

『佐野氏、ご厚恩は終生忘れませぬ』と、其浪人は始めて素性を打明けた。彼は眞部勝種といつて、毛利に滅された尼子德久の遺臣で主家再興のために諸國を流浪してゐるのだとわかり、二人は肝膽相照らして、ここに義兄弟の契を結んだ。



まもなく九月九日重陽の節句となつた。眞部は、元やはり尼子の家臣で自分の從兄に當り、今は敵將毛利氏についてゐる因幡郡家の城主赤松氏を、主家再興の義擧に加はるやう勸めに行く目的を佐野に告げ『來年の今月今日、必ずここに歸つてきて、けふのやうに樂しい酒盃をくみ交さう、必ず待つてゐてくれ』といつて、出立した。

一年は巡つて、又九月九日となつた。『さあ、けふは義弟の歸つてくる日だ』と佐野は喜んで未明におき、母にたのんで貧しい乍ら酒とご馳走をこさへて待つてゐた。

ところが夕方になつても、夜に入つても眞部の姿はあらはれない。佐野は座敷に坐つて一杯の酒ものまずに待つてゐる。『人間には不時の故障といふものがありがちだから』と母になだめられても、灯影に端坐したまゝ『いや、眞部氏は決して約束に反く男ではない』と、少しも己れを疑はない。

母は待ちくたびれて先きへやすんだ。やがて夜は白々とあけかけて來た。佐野はそれでもまだ一人縁近く障子のかげに坐つて待つてゐた。

すると、『兄上』といふ聲がして、すうと障子があいた。みれば髮ふり亂して、色青ざめた眞部が、疊の上に兩手をつき、『唯今、歸つてまゐりました』

『おゝ眞部氏、久しく待つてゐたのだ!』佐野は走りよつて彼れの肩を抱いた。すると眞部ははら〳〵と淚をおとして、『兄上、赤松は主恩を忘れ、拙者を擒にして牢屋につないだのです。どうしてもぬけ出すことができません。今夜こゝへ來なければ兄上との約束に反く! やむなく拙者は切腹をして相果て、魂となつて、ここにまゐりました……』といふと、ぱつと眞部の姿は消えてしまつた。佐野ははつと我に返ると同時に一切の事情が分つた。夜のあけるのを待たず、彼れは母に別れ一目散に因幡の國に走つた。赤松の館にをどりこんで、佐野が一刀のもとに、赤松を討つて義弟の讐を報じたのは僅かに、その翌日のことであつた。（終）

外國名士



スペリー氏

日本人の創造力

米國 スペリー博士

日本人は、自ら模倣の上手な國民だといひ、日本の文明は、歐米文明の模倣に過ぎないと卑下してゐる。併し、自分の眼から見た日本文明は、決して模倣ばかりの文明ではない。形式から見れば模倣に過ぎないものも多々あるけれども、文明は形式ばかりで發達するものではない。過去半世紀以上に亙る日本文明の發達の跡は、日本國民の驚くべき創造力を示現してゐる。我等は日本文明に就いて、就中、その適應性に就いて、深く考へさせられ、また、學ぶところが多い。これが、自分の最も日本人を尊敬する所以である。



ケツトゲン氏

三つの要素

獨逸 カール・ケツトゲン博士

考へることです。工夫することです。努力することです。この外に成功の道はありません。獨逸の産業合理化運動の促進は、要するに、困り拔いた揚句、考へ、工夫し、努力した結果に外なりません。私は、人間の活動の要訣は、すべてこれであると信じて居ります。若し成功の秘訣は何かと問はるゝならば、私は、以上の三つを繰返すのみであります。



マウロ氏

最も重大なる問題

伊太利 フランチス・マウロ博士

文明人は、文明を創造し發達せしむる科學の力について深く反省すべきである。文明は、伊太利の如き、日本の如き、狹き國にあつては、忽にして國民生活を脅威する場合が多い。人口の増加、食糧の不足などが、當面の大問題である。恐らく、世界の小國では、この問題解決のために、四苦八苦の狀態にあるであらう。當に

H.Y

小國に限らず、大國と雖も、人口食糧問題の解決は、文明世界における重大事である。この問題の解決には、二つの道がある。その一つは戰爭であり、他の一つは平和である。而して、萬人の希望する平和的解決の道は、一に科學の利用にある。今日我等の唱道する、能率增進、生活改善の要諦は、一に科學の利用に存するのである。科學を利用する精神なく、科學の權威を尊重せざる國民は文化人ではない。

特別寄書



エドストローム氏

文明の支配者

瑞典　エドストローム博士

勇敢に科學の世界を開拓するもの〻みが、將來の支配者となることが出來る。それがためには、何を措いても、生活の合理化を實現する必要がある。

常に備へよ

米國　リリアン・ギルブレース女史

『常に備へよ』これは私のモツトーであります。準備は何時でも必要でありますが、その準備は戰爭の準備であつてはなりません。世界の文化が進むに伴れて、男子も女子も、共に家庭を離れて働かなければならなくなります。併し、家庭はどこまでも人間生活の本城であり、王城であります。文化のために働く者が、文化奉仕の美名の下に、家庭を荒廢せしめてはなりません。私は、人間生活の基調は、この家庭の團欒に存するものとして、生活改善のために努力して居るものであります。私の求め、私のなしつゝある『準備』は、一にこの家庭團欒のためであります。



ギルブレース氏

英國前首相ボールドウイン氏の秘書ブラーセット氏よりの書狀

拜啓

スタンレー・ボールドウイン氏は、八月二十日附の貴翰を以て、雜誌キングへ寄稿せよとの御提議に對し、有難く感謝を申進めよとの事を申出候。ボールドウイン氏は、これまで同様の依賴を受けたる都度、不本意ながら御辭退せしこと尠からず、從つて殊更貴誌にのみ差別付け兼ぬることを甚だ遺憾に存じ居られ候。

敬具

日本帝國に還れ

蘇峰　德富猪一郎

此頃外國を一周し來つた人の話として傳ふる所に依れば、『世界を見聞して、何物をも得たる物は無い。只自國に對する愛國心の色上げをなした迄だ』と云ふことであつた。これはその人のみに限らず誰しも持つべき經驗である。山の中では山は見えない。山を見るには、山より飛離れたる地點よりせねばならぬ。國の姿も又同樣である。

×　×　×

今日の吾が日本帝國は、その總てとは云はないが、國民の或る人々の中には、全く日本帝國そのものを見失つてゐる者もある。或者は政黨に頭を突込んで、政黨以外に何物も打忘れるに至つた。或者は生活に其日を追はれて、生活以外に何物をも打忘れるに至つた。或者は共産主義に耽溺して、吾が帝國を打忘るゝに至つた。或者は眼前の享樂に身心を打込んで、自國を忘るゝに至つた。或者は外國の文化富强を羨んで、自國を失念するに至つた。

高僧感話集

坐禪の力

『うゝうーん』

卍庵和尙は呻きつゞけた。議論をして相手をいひ負かしたところ相手はそれを恨みに思ひ、卍庵和尙に毒藥を呑ませたのであつた。五臟六腑は煮え返るやうな苦しみである。

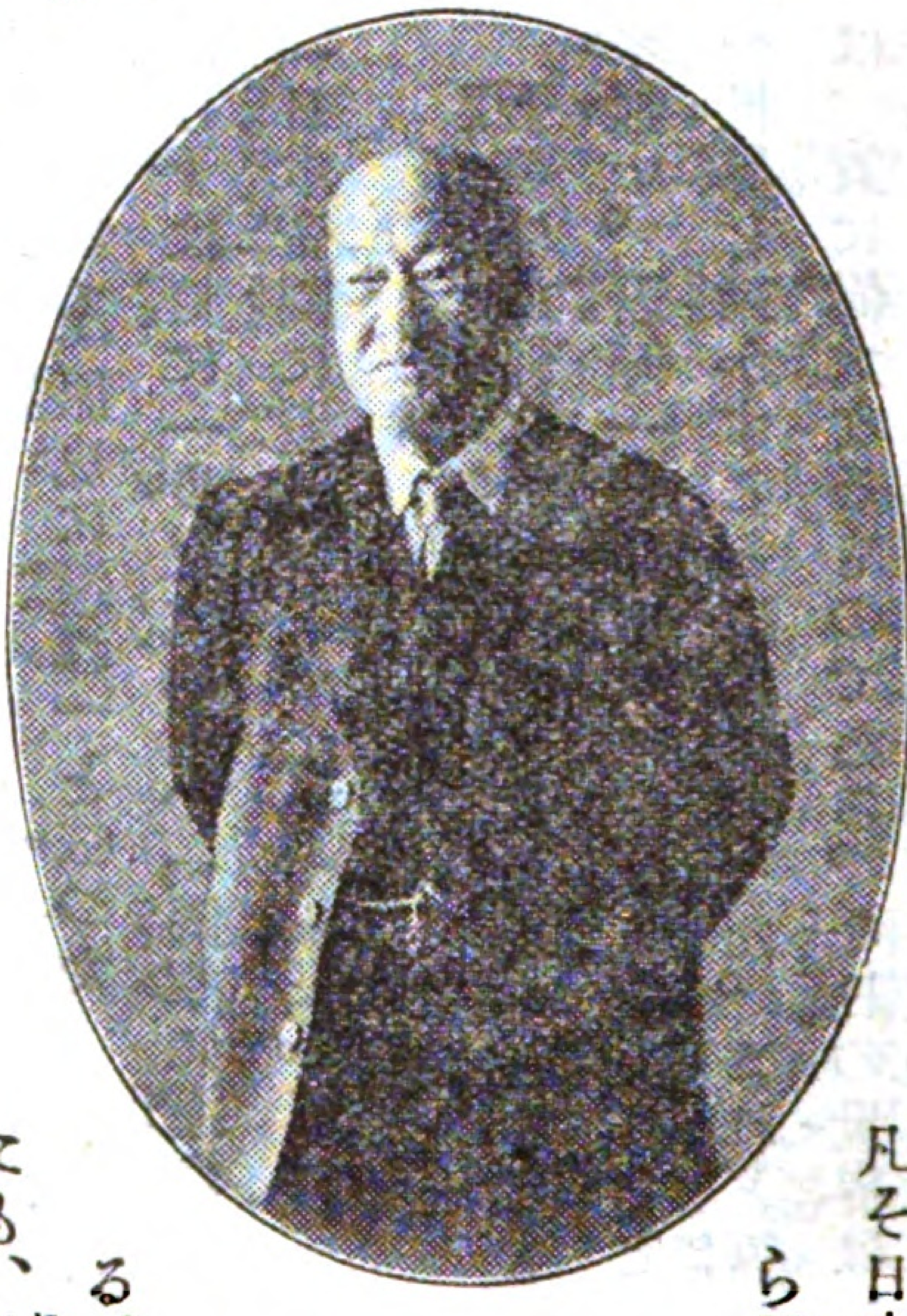
『なに糞ッ、十七歳の時から二十八歳の此の年まで十年間、坐禪修行して少しは功を積んだつもりであつたが、これしきのことで……えゝさても意氣地の無い』



奮然と起き上つてしつかと坐を結んだ。斷痛をこらへこらへ臍下丹田にう

予は彼等に向つて、一度身を銘々の環外に置き、國の姿を眺めんことを、望まざるを得ない。

× × ×



徳富蘇峰翁

凡そ日本國民には、宗教の上から云へば、基督教徒もあれば、佛教徒もあり、儒教者もある。或は有神論。或は無神論。謂はゞ十人十色である。而してその佛教徒の中にも、日蓮上人の徒もあれば、親鸞上人の徒もある。弘法大師の眞言宗、傳教大師の天台宗、臨濟曹洞の禪宗等佛教と云ふも、其の宗派は澤山ある。

× × ×

更に職業から云へば、地主もあれば、小作人もある。資本家もあれば、勞働者もある。孰れの方面に就いても、これを分類すれば、等し

じめた。

初夜から中夜、いつか正念になりきつた。苦しみは靜まつた。中夜から天明に至つて身心何とも云はれず輕快になつた。軈て夜が明けはなれた。と、瞬間ゲーッと一時に吐瀉が來て、毒藥も諸共に吐き出して了つた。危く死ぬるところを助かつたと同時に、相手を憎む情もからりと晴れ、玲瓏皎潔の心地を得た――即ち悟りを開いたのであつた。

竹の實の團子

『よく歸つて來ました。』と云つて母親は悟由の歸省を心から喜んだ。臺所でごそ〱何かしてゐたと思ふと、やがて幾個かの團子を盆にのせて持つて來た。

小僧の悟由、その一つをつまみ上げて口に入れたのはよかつたが、そのまづいこと。

『お母さん、ひどくうまくない團子ですなあ。』といふと、母親は端然襟を正

く日本國民とは云ふもの丶、幾多の階級にも分つことが出來る。而して彼等の多くは、資本家は資本國あるを知つて、日本國あるを知らず。勞働者は勞働國あるを知つて、日本國あるを知らず。官吏は官吏國あつて、日本國あるを知らず。何れも各〻の職業を、一の本體と心得て、其外に安心立命の地あるを打忘れてゐる者が尠くは無い。

× × ×

予は曾て『歴史に還れ』と云つた。此の歴史は日本國の歴史である。併し予は更に一歩を進めて、『國家に還れ』と云ふ。具體的に云へば『日本帝國に還れ』といふのである。

× × ×

吾等は如何に最善の努力を致さんとするも、一人一個では何事も出來無い。吾等一個の力では、隣人を動かすことさへ困難である。況んや世界を動かすことに於てをやだ。されど吾等が國家を通じて働く力は、實に偉大なるものである。今日の世界はおろか、百年後の世界をも動かすことが、絶望では無い。吾等一個の發言には、誰も相手になつて吳れない。されど吾が日本帝國を背景としての發言には、何人も相當の敬意を拂はない者は無い。

縱んば世界的人種の差別を撤廢する、一大水平運動をなすに就いて

して『まづいのは當り前です。これは饑饉の時食べるものがなくて竹の實で團子を作り漸く飢を凌いだことから思ひついて作つたもの——その竹の實の團子なのです。お前はまだ年は行かぬが、行く〱は佛祖の法を繼いで大勢の人の手本になるべき人、それまでに



は樣々の難行苦行をして、修行を積み、あつぱれの僧となつて下さい。特にこの團子を作つたのもお前がたま〱の歸省をもてなす母の寸志からであります。』

と云つてきかせた。悟由は、非常に感動して、こゝに始めて萬難不撓の志を固めたのであつた。悟由は卽ち後の森田悟由禪師、明治年間の高德とたゝへられた方である。

瓜作り和尚

も、將た戰爭の慘禍を杜絶する世界平和の保障に就いても、日本帝國の背景に依つて發言すれば、相當の効果が期待せらるゝ。

× × ×

今日、日本帝國に缺乏するものは何である乎と云へば、國家的思想である。極めて露骨に云へば、平常の場合に於ける、愛國心である。吾が國民は、一旦緩急あれば、義勇公に奉ずることは、今日と雖も、固より然るべきである。しかも常時に於ては殆んど國家を閑却してゐる。緩急の際には吾が身命をも擲つて辭せざる者が、通常の場合には、如何に國家に損害をかくるも顧みないと云ふが如きは、矛盾の最も甚だしきものであるが、實際その矛盾が、吾等の眼前に、數限りも無く展開せられてゐる。

× × ×

吾等は何よりも先づ此の大なる矛盾を取除かねばならぬ。非常の時は勿論、通常の時でも、吾等は國家第一を標識として、進まねばならぬ。吾等に取りては、國家は吾が偶像であり、國家は吾が宗教である。日本國民が一切の分類を脫却して、統一せらるゝものは、唯皇室を中心とする、日本の國家であらねばならぬ。吾等はそれが餘りに接近してゐるが爲に、却つてそれを見失つてゐる。故に余は『日本帝國に還れ』と大呼疾呼する。（昭和四年十月二十五日民友社に於て）

伊勢國度會郡牛馬村に一箇の禪寺がある。この寺は檀中と云つても僅かに十四五軒、殆んど無檀無祿と云つてもよい程の貧地であるが、不思議なことに立派な本堂が建つてゐる。

今より四十年程以前のことである。この寺に透檀和尚といふ坊さんが居た。和尚は百丈禪師の『一日作さざれば一日食はず』の主義を實行し、明けても暮れても瓜を作り、作つた瓜は賣つて金にかへる、かやうに瓜を作り通すこと驚く可し前後三十年。實はその賣上で本堂を建てたのであつた。



和女等ゆかんせ牛馬の寺へ
和尚はだかで瓜つくる

とは里人が和尚の德に感じて歌つた俗謠で、今でも盛んにうたはれてゐる

見よ此の數字 此の事實 國民總動員漫畫

(1)



(1) 小學生の鉛筆

我國の小學生の總數は約九百五十萬人ある。假りに一人が一月に一本二錢の鉛筆を無駄にすると、一年で一億一千四百萬本、金にして二百二十八萬圓の大損失となる。

(2)



(2) 一日一錢貯金

最近の調査によると帝國の人口は八千三百四十五萬六千九百二十九人。今一人一日一錢づつ一年間貯金すれば三億四百六十一萬七千七百*

*九十圓八十五錢の貯金高となる。之を十年續ければ、我國債も大部分償還出來る。

(3)



(3) 開墾の九億圓

我國の耕地面積は約六百〇八萬町歩、年額約二十八億圓の農産物がとれる。ところが日本には、まだ手をつけてない開墾可能の土地が約二百萬町歩殘されてゐる。若し之が開墾されたら優に一ヶ年約九億圓の增收となる。

(4)



(4) 年賀狀

虚禮の年賀狀、字體不明で配達不能、住所錄不完全から宛名人なし、これらは郵便事務の努力を無駄にする。切手は一錢五厘でも澤山な數だ。莫大な金額に違ひない。



(5)

(5) 一粒の米

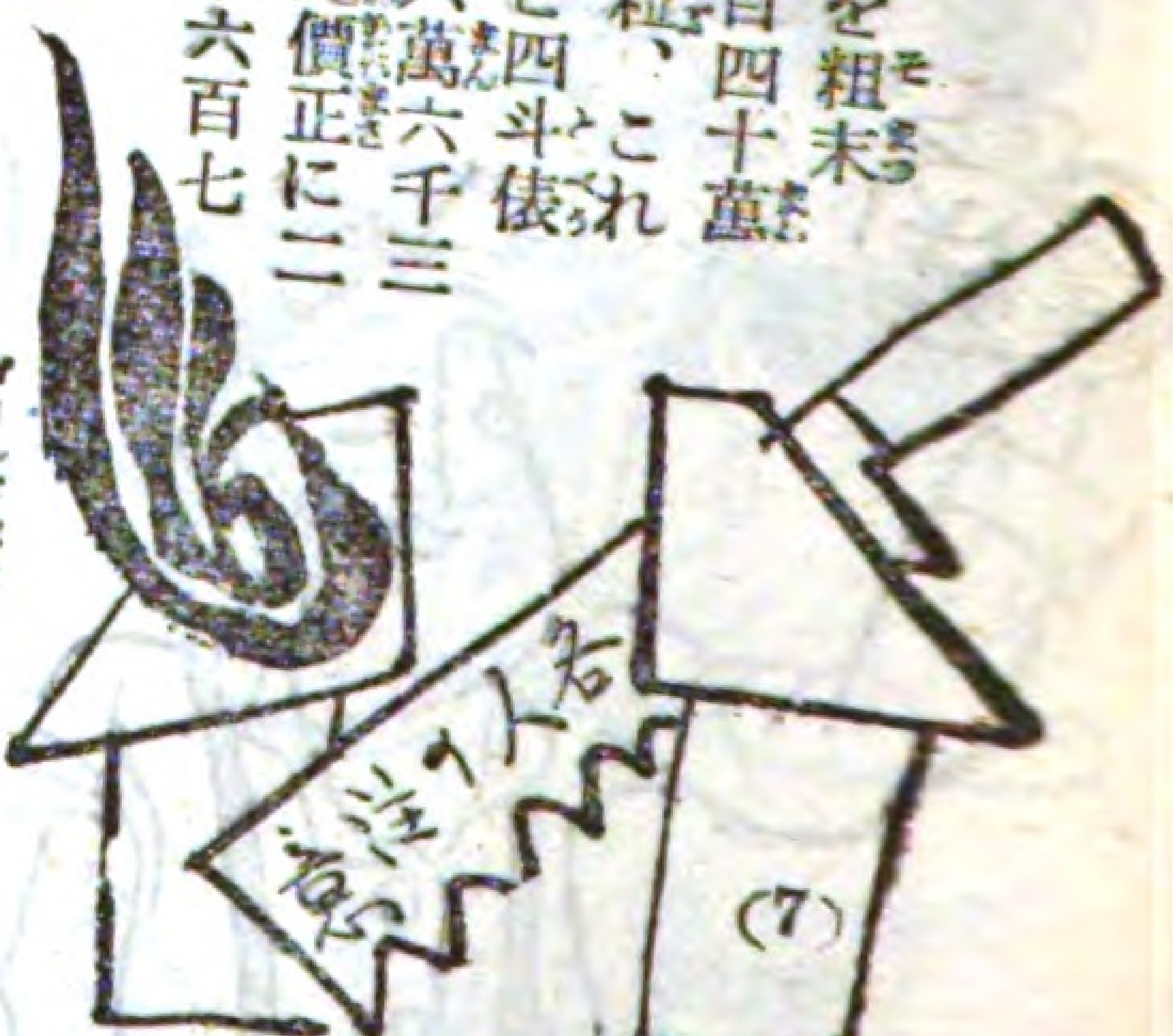
一世帶で一日に百粒の米を粗末にすると、全國一千二百四十萬世帶で十二億四千萬粒、これが一年となると四斗俵に換算して十六萬六千三百九十七俵。此價正に二百四十六萬二千六百七十七圓也。



(6)

(6) 道路から一千萬圓

我が國の道路の總*延長は國道府縣道合計二萬五千四百四十里ある。假りにその半分の道の兩側へ、平均一町に二十本の割合で有用な木を栽ゑたとすると、總計千八百三十一萬六千八百本の木が植わる。果樹ならば一本一ヶ年に一圓の收益があるとしても千八百三十一萬圓、又材木として五十年後に一本百圓とすれば十八億以上の金額になる。



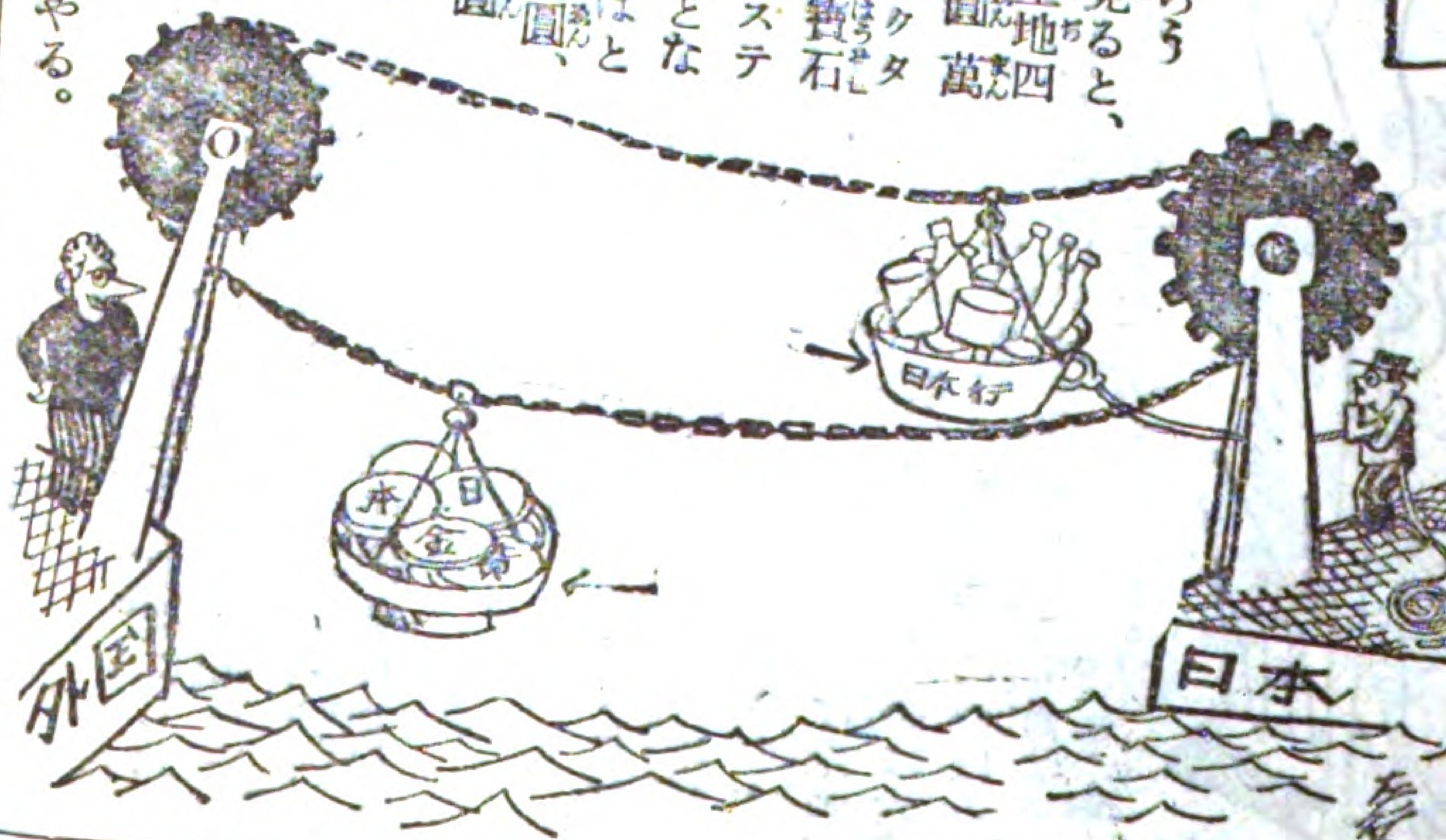
(7)

(7) 火災の損害

一ヶ年間の火災による損失高は八千九百六萬八千百五十八圓となつてゐる。假りに各人の注意によつて此火災を半減出來れば、四千四百五十三萬四千七十九圓の財產が浮き上る。

(8) 金打者（ゴールドバッター）

舶來品でスタイルを作らうとする紳士の服裝を一寸見ると、洋服の生地五十圓外套の生地四十圓、帽子二十圓、靴二十圓、萬年筆二十圓、時計二百圓、ネクタイ五圓、エリマキ二十五圓寶石入襟止ピン百圓、手袋五圓、ステッキ二十圓、合計五百五圓となる。舶來品で身を飾る淑女はと見れば、帽子三十圓、洋服百圓、狐皮頸卷三百圓、靴二十五圓ヘヤピン三百圓、腕時計二百圓、寶石指輪千圓、ハンドバッグ三十圓、パラソル二十圓、合計二、〇〇五圓だ。かうして紳士も淑女も海の向ふへせつせと金貨を運んでやる。



(1) 遠大な計畫

日獨戰後獨逸の俘虜が日本へ來たが、彼等は毎日支給された鷄卵を食べずに藏つておくので、どうするかと見てゐると、一まとめにして盡く鷄にかへした。そして毎日殘りのパン屑で其を育て、そして其鷄の生んだ卵を食べてゐた。彼等の節約は積極的であつてもの を活して つかふと云ふ所にある。



(1)



(2)

(2) マッチの節約

一世帶で一日マッチ三本を浪費にしたら其結果はどうなる？ 全國で一ケ年百三十五億七千八百萬本となり、小箱一つ九十本入六厘として 九十萬五千圓餘の損害となる。

(3) 海外に出稼ぎ

海外に出てゐる我が內地人は、六十七萬四千五百二十二人である。若し海外雄飛の思想が盛んになつて、在外邦人が今の十倍になり、一人一ケ年に平均百圓だけ送金するとなれば、年々我國に流入する金は六億七千四百五十二萬二千圓の巨額にのぼる。昨年度始めに於ける刑務所收容人員は三萬九千五百二十七人である。此の人達が刑×

×務所の厄介にならなくなり、みんな海外へ出稼して一人一年百圓宛送金すれば、毎年三百九十五萬圓餘の金が日本へ入つてくることになる。



(3)

(4) **必要以上の飲酒** 酒豪を氣取つて吞み明かす元氣は羨しいが、御本人の胃袋が迷惑することと、外國米輸入の増加になることは請合。

(4)



(5) **腹八分目** 飯を腹一杯詰め込まなきや承知の出來ぬ人間は文明國では日本人だけなさうだ、人口の九割は胃擴張だなんてえのは日本の名譽ぢやないから、腹八分目にすれ＊ば健康にもいいし緊縮にもなる。今日本人が十日も腹八分目に食べてゐたら中學校の四五十はわけなく建つ。

(5)



(6) **時間貪重** 集會時間の不正確は必ず他人の貴重なタイムを無駄にする。冠婚葬祭總ての集り毎に無駄になるタイムは蓋し驚くべき數字であらう。



(7) **生絲の加工** 我國一ケ年間の生絲製産高は七億九千八百萬圓で、其輸出高は七億四千百萬圓である。絹織物の價格は普通原料生絲の十倍位の値段だ。それ故輸出生絲を全部加工して絹織物とすれば其額正に七十四億を突破する。

(7)



偉人と偉人の會見

彼等は何を語つたか？

巨星暗雲に閃く

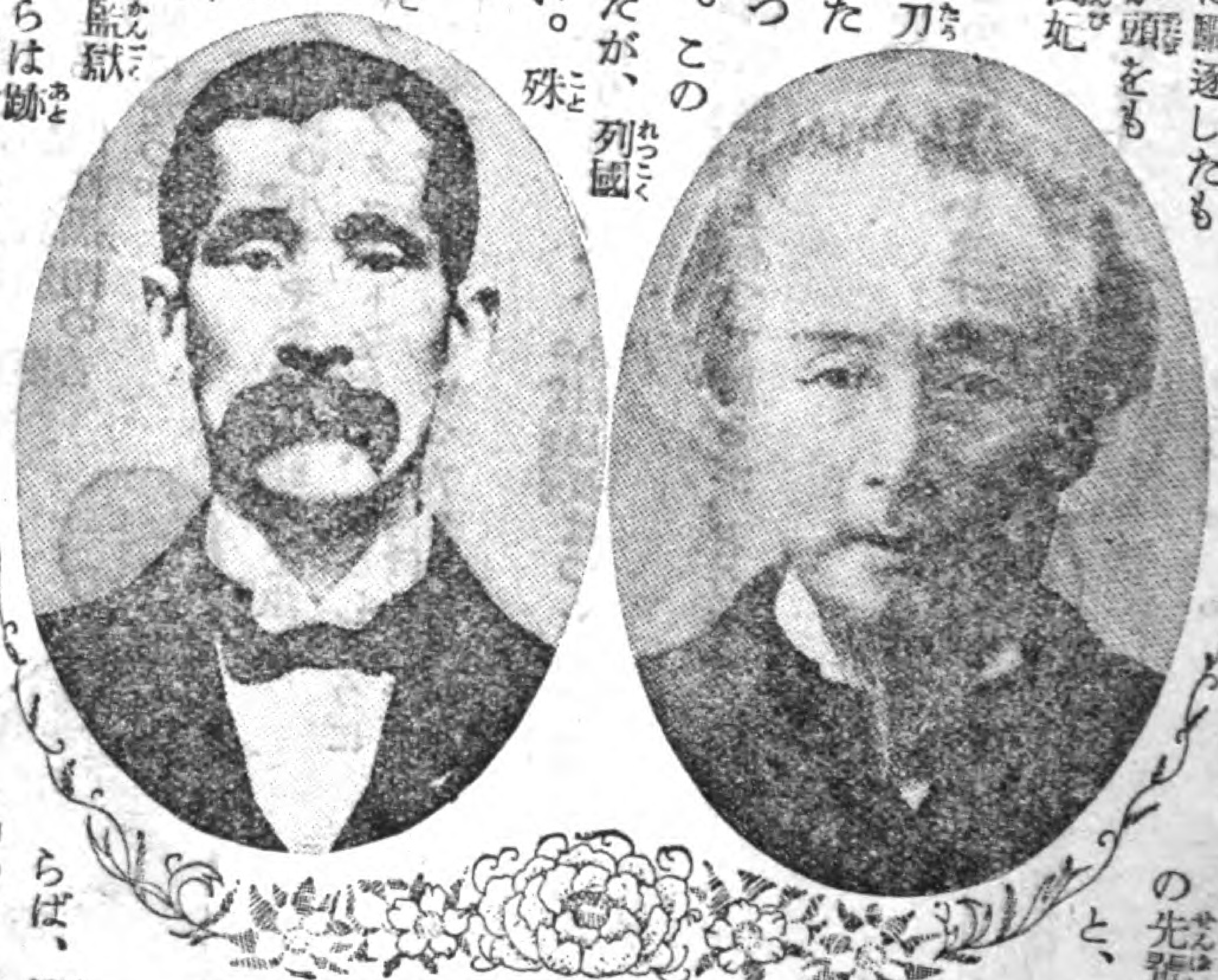
望月紫峰

此の話は既に二三の文献にも見受けたが、余も又老父から聞いた幾多の事件の中で特に印象の深い話である。然るに、時の朝鮮公使、三浦梧樓氏等事件關係者の多くは故人となつて、今は知る人も尠いであらう。時は移り人は變り往時を思うて茫々夢の如しである。

小村欣一

その日、外務省政務局長小村壽太郎は、ボカンとして考へてゐた。『些と俺には荷が重過ぎるやうだが、やつてやれぬ事も

あるまい』
　そんな風に考へた。『何せ三浦梧樓の閔妃暗殺事件といふのは、伊藤内閣の致命傷だつた。日本は、日清戰役に於て、朝鮮から清國の勢力を完全に驅逐したものゝ、今度は、露國が頭をもたげて來た。いはゞ閔妃はその傀儡であつた。
　豪膽三浦公使は、一刀兩斷、禍根を永久に絕たんとして、妃を葬り去つて、大院君を擁立した。このクーデターは、快は快だが、列國が默つては見てゐまい。殊に、露國が何う出るか。伊藤内閣がひや〳〵したのは、此の一點である。
　直ちに、三浦公使をはじめ、四十八名の關係者を捕へ、囚人として廣島監獄に收監したが、外務省からは跡始末の爲、然るべき人物を京城に派遣せねばならなかつた。
『誰にしようか？』
白羽の矢は、小村局長にたつた。



勝海舟と小村壽太郎

『厄介ちやな』
　彼は、頭を惱ましたが、國家の一大事とあつては、進んでこれを有利に解決せねばならない。彼は、京城へ出發前に、相當の先輩者に會うて、意見を聽きたかつたが、よく〳〵考へると、此方から訪問して、高見拜聽と出る程の人物が見當らなかつた。
『あゝ、さうだ』
最後にふッと思ひついたのは、勝海舟翁である。
『勝さんなら、話が分る、あの人なら意見があるだらう、又その意見は十分聽くだけの値打があらう、……勝さんに會はう』
秘かに心に決めた。
　ところが、困つたことには、小村局長はまだ一度も海舟翁に會つて居ない。翁は當時志を當世に絕つて、氷川の屋敷に住んでゐた。千客萬來、政治家も出かければ、實業家もゆく。さうかと思ふと、親分が尋ねる、料理屋の女將が訪れる。賑かなことであつた。で、誰にでも會ふが、初對面ならば、紹介狀が必要であつた。
『わたしは、誰それの紹介狀をもつて參りましたが、伯に一度お目にかゝりたいと存じます』
　さういつて、紹介狀を出せば、書生にでも會ふことにしてあつた。

小村局長も、紹介狀を必要とした。えゝ、まゝよ、どうにかならうと、高を括つて、ノコ〳〵と海舟翁の邸の前へ現はれたのは、明治二十八年十月九日の午后。門は黑門の昔造、敷石をわたつて、玄關にたつ。

『御免』

取次の少女が出て見ると、背の小ちやな、朝鮮髯を生した男が、古ぼけた鮐色のフロックコートをきて、さびしさうにたつて居る。田舍から出て來た村長さんといつた恰好である。

『あなたさまは?』

しとやかに手をついて此う出たので、小村局長はつとめて鷹揚に構へ、

『勝伯は此頃御病氣で御引籠中と伺つて居るが、どうですか、御容子は?』

慇懃しく言葉をかけた。

『はい、大分およろしい方でムいます……』

『御宅ですか』

『はい、……失禮でムいますが、あなたさまは?』

少女は此の客は初めてぢやない、もう何同も來て居る、たしか主人の伯爵とは別懇だなと思つた、又さう呑込むやうに、小村が仕向けた。

『わしは小村だが……、どうぞ、小村と仰在つて下されば分る』

『左樣でムいますか、でも、恐入りますが御名刺を頂かせて下さいませ』

『さうですか』

そこで、名刺を出した。『外務省政務局長小村壽太郎』とあ



る。少女は、それを押し戴いて、奥へ消える。素敏ツこい小村局長は、此時すぐさま靴をぬいで、少女の跡からつゞく。少女は、どうせ知合の御客なら、取次は形式だけのこと、跟いて來ても差支へないので、默つて居た。

　やがて取次は奥の間に入る、小村は次の間で神妙に控へて居る。

　翁の聲は、筒ぬけに聞えてくる。

『何だい、此の男は？』

『御存知の御方さまでは厶いませぬか……？』

『いゝや、知らないよ、紹介狀をもつて來たかい？』

『いゝえ、御持になりません、もう次の間で御待になつて居ります』

『馬鹿だな、お前は？　紹介狀をもつて來ない男を、勝手にあげて了つては困るぢやないか、……隣室に居るのかい』

『は、はい』

『ぢや、仕方がない、此方へ通しなさい、會つてやらう』

　しめたと、小村局長。ツカ／＼と奥の間へ現はれた。

　見ると、十五六疊も敷からうかと思ふ座敷、上段にねんねこのやうな搔卷にくるまつて、胡座をかいて居る老人、眼は凛々として、顏の色艶が恐しくいゝ、床の間には、『虛明自照不勞心』の一幅がかゝつて居る、花瓶には白菊が活けてあり、香爐には香がたいてある。

『お前さんかい、小村さんといふのは？』

　名刺と本人とをじろ／＼と見比べてゐる。

『はい、私が小村で厶います』

『オイラは、紹介狀のない人には會はんことにしてゐるんだが……』

『それはよく存じて居ります、しかし伯、私は紹介狀の必要を認めなかつたので』

『そりや又何うしてよ。』

『名刺には外務省の一小吏となつて居りますが、不肖小村は、志天下にあるものでありまして、其點にかけては、今日の伊藤博文、山縣有朋と同然である、失禮な申分でありますが、伯とも同等である、素より長幼序あり、年齡に於て、經驗に於て、閣下は拙者よりも一日の長があるが、國を愛ふる點に於ては、同等である、かく信じましたので、あへて他の紹介狀を持參いたしませぬ、天下の小村が、天下の勝伯と、一日天下のことを談ずるに於て、紹介狀も糞もあるものでない……』

　此うやつた。すると、流石の勝伯がきよとんとして、

『小村さん、近頃の役人には珍しい、……もつと、前へ出なさい、コリやものになりさうだ』

　忽ち氣に入つた。それ迄は、勝も此の小倅、何しに來たかといはぬばかり、冷かな態度を見せたが、最初から手硬いので、意外に思つたらしい。

『さア、何でもお話し、……相手になつてやる』
今度は、勝伯の力から開直つてくる。
『では申上げます』
小村局長も、心置きなく打碎けて話すことが出來た。
『實は、此度御承知の朝鮮事件でムりますが』
『ム、ム』
『その跡仕末をする爲、私が京城へ派遣されることになりました、ついては、これを何う處置してよろしいか、心得の爲、伯から御指示を得たいと存じます』
『成る程……では、お前さんに訊ねるが、お前さんは死ぬ用意が出來てるかい』
眞正面から一擊來た。
『老伯の御言葉でムりますが、已に生あり、死は當然の歸結、いつでも死ぬ用意は出來て居ります』
小村局長がきつぱりと答へた。
『さうかい、豪いよ、大抵のものは、その當り前のことが、なか〳〵分つて居らん、誰でも死ぬのを厭がるもので、大事の前に臨むとグニヤグニヤになる、御維新の時にはね、



オイラを殺さうといふものが、屢山ゐた、貴下は危い私の公使館へ來てゐなさいと、英國公使館の書記官サトウがいうてくれたよ、けれどもオイラは、天下の難局に當る以上、暗殺位のことが怖くて何が出來るものでない、で、サトウが折角いうてくれたが、オイラは一度も公使館の御厄介にはならなかつた、一國の大事に身を投出したからには、命が惜しいなどと、云ふやうな、そんな未練がましい考があつては、何も出來やしない』
『では、生死を度外に置くことが、一番大切でムいますな』
『さうだよ、さうすると、眼前の勢といふものを捕へることが出來る、勢といふやつは、容易に獲られないが、又容易に得られることもある、そこで、眼の見えるものと、眼に見えないものとの區別が出來る、明眼の者にはちやんと分るが、鈍眼の奴には、それが分らん、早い話が、腰がすわらんからさういふことになるんだよ、お前さん、まア、もつと前へおいで』
伯は愈々上機嫌になる。
『舊幕府の話をするとね、薩

幕府の奴等は、量見が狹くて、唯だもう幕府の外には眼が見えない、だから此の勝を惡人だというて居たよ、だが今となつて見れば、段々と其の惡人の名前がうすらいで來たよ、今の大臣だつて何だつて、太平無事の時は、カラ威張に威張つて居るが、少し事が六かしくなると、みな身ぶるひしてちゞこまる先生ばかりぢやからこまる……

……今度の事件だつて、さうだらう、一體閔妃といふのが、いけないよ、女の癖にして、彼是政治上に容喙するのは、困つたもので、三浦がソレをばバッサリとやつたわけだから、云はゞ朝鮮の將來の爲にも結構なわけだよ、ところが、外國がどうの此うのと、すぐにさわぎ立つ、さう狼狽ないで、しつかりと臍の下へ力を入れてかゝるやうにすれば、禍を轉じて福と爲すことが出來るんだよ、伊藤さんはマゴ〳〵して居るだらうね』



此の伊藤は勿論伊藤總理大臣をさして居る。

『ハイ、狼狽して居るやうです』

『しかし、その解決をお前さんにさせようといふのは、感心だ、オイラは、お前さんとは初對面だが、お前さんならきつとモノになるだらう、オイラも安心して居る』

勝が、えらく賞めたてるので、小村は恐縮して了つた。

『いや、私は其任ではありません、しかし誠心誠意、事に當るつもりで居ります』

『それで好いよ』

伯の眼がじろりと光る。

『政治でも外交でも秘訣は、誠心誠意の四字しかない、道に依つて起ち、道に依つて座すれば、草莽の野民でもこれに服しないものはない、見なさい、お前さんの親分伊藤さんの政治は、僅か四十萬五十萬の人心を收攬することが出來ないとは、何と齒がゆいぢやないか、つまり伊藤さんは、此の秘訣を知らんのだよ、知つてゐても、身に行ふことが出來なければ、矢張り知らないのも同じことだよ』

『御尤もでムいます、一體私も考へて居ることですが、此頃の外交といふのは、噓をつくことですな、相手が一ツ噓をつけば、此方は二つ噓をつくやうにして居る、ところがです、此の

嘘をつくことがなか〳〵六かしい、先方に嘘らしくない、眞實らしいと思はしめねばならんので、大變な努力を要します、のみならず、此方は、相手の表情を見て、相手の話が眞か僞かそれを見極めねばならぬので、それが又厄介です』小村局長の話にも油がのツてくる。すると、耳を傾けてゐた海舟翁。

『いゝことを云うた、それぢやアオイラもいうてやる』

妙に調子をかへた。

『何で厶りますか』と、局長もどぎまぎした。

『いゝや、たつた今、お前さんがオイラの處へ來た。何故紹介狀をもつて來ないのかときけば、大抵の者は、その暇がなかつたとか、忘れたとか、先輩が留守だつたとか、何とか口實をつくつて嘘を申立てるものだが、お前さんはさうでない、てんからさういふものは要らん、吾自から天下の廣居に居つて、天下の大道を行はんとする者であると高く止つて居るのが氣に入つた。若い者は、それ位の胃つぶしがなくてはいかん、お前さんは、小ッ細工の嘘をいはずして、さういふ世界を一呑みにするやうな寛々とした心持が何ともいへずオイラを引きつけたよ』

意中を打ちあけて、さて鋒先をくるりと向け直す。

『今の政府に居る人々は、日本とか朝鮮とか支那とか露西亞とか云うて、別々に見て外交の駈引をするから遣り害ひが起る、且又、その經綸も小さい、百年の長計などといふても口先ばかりで、十年は愚か、一年先きの見通しもつかない、オイラは、何でも物を見るのに、東洋の二字を頭におく、そこが小島の政人間と違つて居る、お前さんもそのつもりで、朝鮮へ行つたら、随分しつかりとやりなさい、下手をすると、お前さんは、內閣のものから爪はじきされるかもしれない、國民からも疎外されるかもしれない、支那人、露國人からも憎まれるかもしれない、……好い子にならうと思ふと間違が起るからね、天下みなお前さんの敵になつても、氷川に居る此の爺さんは、お前さんの味方だと思つてゐなさいよ、ハツ、、、、』

高らかに笑ひ出した。

『伯、私はその決心で、きつとやつて參ります』

『む、それでいゝ、行きなさい』

『見てゐて下さい』

『待つて居る』二人は、その場で別れた。

初對面だが、會うて談ずれば、正にこれ十年の知己も同然である。果して、風雲の巷に突入した小村局長の快腕は、此の紛糾した國際關係を巧みに解決して、幸に事なきを得たのである。三浦公使も、今の內相安達謙藏氏も、一時は囚人となつたが、間もなく許されて、自由の身となつた。

流石の『鼠公使』の綽名をとつた丈のことはある。事おさまつて後、海舟翁から大院君に贈つた一詩がある。

世事半ば兒戯。
豈意詩を作すに堪へんや。
長白山頭の月。
照り…

一行博士

○イーストマン會社で一日に作るフイルムの長さは五千哩。東京から下關迄の約七倍。

○ロンドンのリヂエント街にある一番小さな商店でも家賃一ケ月三百七十五磅（三千七百五十圓）。

○米國のコルゲート工場の大時計は世界一で徑三十八呎分針の長さ二十呎、半哩先から時刻が分る。

○シカゴのリナ・ローム夫人は一日一萬の鷄卵を割る記錄を持つ。十六年間に割つた卵の數四千八百萬。

○一匙の人間の淚は一ガロン（二升五合）の鹽水に匹敵する防腐力を持つてゐる。

○一九二九年度の米國の總收入は一千八百億圓、之を國民の總數に割當ると赤坊でも年收千五百圓。

○五仙の切手一枚がボストンで五萬五千二百弗で賣れた。これは一八六四年米國郵便創始の年發行のもの。

○米國人は段々早口になる、最近廿年間に一分間十五語宛增加してゐると、紐育速記者大會で發表。

○伊國首相ムツソリーニが從來男子十八歲女子十五歲で許した結婚法を十六歲と十四歲に改正した。

○紐育市内の乞食約七千、一人一日の平均稼ぎ高廿弗、人通りの多い處の者は一時間で廿弗。

○富士山の重量は故大森博士の計算によると一萬二千億噸、每日一萬噸宛運んでも約三十三萬年かゝる。

○世界最大の水晶はマダカスカル島で發見された、高さ五尺周圍二十尺土人は之を水の精と考へてゐた。

○カナダのヴイクトル・デラマーレと云ふ男は八百四十貫の重量を脊中であげる、人間體力の最高限。

○最近化學者の研究では有色人種も白色人種も皮膚の色素は同一、只その分量によつて黑黄白となると。

○赤露の陸軍では最近一秒間に十個の彈丸を打出す機關銃を發明した、今日では之が最高速度。



情趣

中川一政

はじめに谷の水が流れてゐる。
さうすると水をくむ人が其處へ來る。
冬が來て樹が枯れ、落葉する。
里の人が來て枯枝を拾ひ、落葉を掃き集めて冬の仕度をする。
情趣とは此事を云ふ。
情趣とは自然と人生と交渉するところにある。
人生無き自然は鬼氣を帯びるものである。又、自然なき人生は喧騷を覺ゆるものである。もしも、窈窕たる美人を描きて、一枝の柳を添へざらんは、畫人、情趣を解せずと云ふべし。



治に居て亂を忘れず

尾崎士郎

勝軍に驕るのは常人の常であるが、敗軍に心を亂さないことは常人のよく爲し得るところでない。人生は戰場だ。勝敗の數は知るべからず。落人となつて人の譏りを受けるときにも敢然としておのれを持する人こそまことに大人物といふべきである。人生の戰士は常に治にゐて亂を忘れてはならぬ。



靑年重ねて來らず

高島米峰

休止して居る時計でも、一日に一度は、正確な時間を指し

床しき世界

尾崎喜八

歐洲戰爭がたけなはだつた。
シャンパアニュの戰線幾百哩に亙つて敵味方の間斷なき進出、後退、蜿蜒たる長蛇の軍は相對して、のたうつてゐる。
佛軍の後方陣地へ敵の俘虜が護送されて來た。
今その俘虜の一人と若い佛蘭西の將校とが互に手を取り合つて話をしてゐる。
彼等は二人とも錚々たる科學者である、平和の時、學問上の彼等の論爭は獨佛の學界に凄まじい渦を巻き起してゐた、戰爭は彼等の論爭を中斷して、今や二人の科學者は干戈の間に相見えたのだ。
佛軍の少尉マルノル博士は尊敬と愛とをもつて獨軍の中尉ガルテン博士の手をしつかと握る。
「御健在で何よりです」「貴君も御同樣に」
「もしも平和の日までお互に命を完うしたら、再びあの論爭を續けませう」「お、誓つて！」

祈す。苟も、生きて居る人間が、一生に一度位、世のため人のために、何事か寄與するところが無くて、濟む譯のものではない。

まだ親の脛を噛つて居る青二才共が、酒だ烟草だ、カフエーだダンスだと、人生創造の最も大切な時期を、低級愚劣な享樂のために空費して、春草の夢のまだ醒めないうちに、早くも既に梧葉の秋聲に驚いて、ア、これ誰の過だなどと叫んでも、もうその時は手おくれだ。

机上の花

相馬御風



机の隅の小さな一輪活に花を挿して置くとは、いつの間にか姿がくづれてゐる。それは窓に射す日光を慕うてその方へ〳〵と頭を下げて行くからである。折られた草花でも生きてゐる限りは光を慕はずにゐられぬと見える。

國際的と國粹的

文學博士 野上俊夫



眞に國際的たらんと欲せば、眞に國粹的でなければならぬ。世界各國皆其の國粹とする所を十分に發揚して、始めて眞の國際的の一大調和が出來る。紅白紫黄いろ〳〵の花が咲いてこそ、世界といふ花園が美しい模樣のながめを呈するのである。衣食住から運動競技の末に至るまで、氣候風土も歷史も全く異つたヨーロッパやアメリカの眞似をして、それで日本が世界的になるだらうと考へるやうな人々は、花園を悉く一色の花のみにしなければ美しくないと思ふのに等しい。

眞理の使徒は堅く手を握り合つて別れた。
互に相手を殺したくないと願ひながら。
又戰爭の荒寥たる世界の中で、ゆくりなくも味つた床しい心を抱きながら。
此の瞬間二人の學徒の眼には、
戰爭を越えた永遠の世界のまぼろしが、
砲聲の殷々たるマルヌの空遠くひらめいて見えた。

星

赤松月船

ぢつと見つめてゐればゐるほど
奥から奥からいくらでも輝き出るあの星は
どんなに心にぎやかなものであらう！
われわれ人間が
友愛のうれしさをはじめて思ひ知つたのはあの青い星の瞬きからではなかつたらうか！
快活に微笑みかけたり
なつかしく私語きかけたり
若しあまりにわれわれがだらけてゐると
鋭く叱責の眼を射かけたり
まことまたかうした賢い心——友達の心は
美しい夜空に於て仰がれるのである。



怪盗夜叉王

前田曙山
山川秀峰 畫

双美の接觸

風の如く來り、影の如く去る、鬼神と雖も捕捉すべからざる怪盗の變幻自在の出沒、秦姫君の小梅御住居を脅やかした不敵の振舞に、玄蕃が歯を噛み、目を瞋らし、滿身烈火の如くになつて忿激すれば、右近も灼け爛れるやうな胸を抱いて激昂した。苟しくも公儀大御番歴々の旗下、然も天下の大老に直々信頼されて居る身が宿直を承はりながら、長夜の快よい夢の間に、怪盗に潜入され、伯耆守安綱の名刀の外に、中納言雅信朝臣を誘拐し去られたのは、言はうやうたき恥辱にして、武門武士の顔に飽まで滓泥を塗りたくられたので有る。腰拔腑拔と嘲けられても一言返すべき言葉はない、彼の武士は全く頽つて、敢なく祖先以來の名を汚したのだ。

『己、怪賊奴何として吳よう。己と此方とは、子々孫々迄の仇敵だぞ。』

苦しい息を的も無く倒まに吹き上げた彼は、又冷たい透通るやうな一脈の清氣が、夫を宥めるやうに訪れて來るのを感じた。武士としての面目は踏み躙られたけれど

も、隱密としての彼の目的は、怪盜の御陰で漸く頼母しい方に仰びて行くのでは無いか。

天下静謐の爲に、姫を女らしい溫みの中に引戻さねばならぬといふ大切の使命、夫も中納言雅信朝臣の出現によつて、殆んど水泡に歸せんとしたのだが、其夜を去らず朝臣の誘拐、剩さへ外庭の稻荷の社の側から、朝臣の血附の着衣を見出した上は、肝腎の死骸は無くとも、怪賊の爲に不慮の死を遂げられ、其亡骸は大川へでも捨られたに違ひない。

『姫君は折角邂逅はれた約束の殿が、思ひの外の遊蕩三昧で有つた上に、其の夜圖らずも夜叉王の爲に殺されたのだに因つて、定めしお力も落ちお寂しい心地で御在さう。……最早此世に頼む力が無いとすると、夫から先はどうなるであらう。』

恁考へて行くと、右近の胸には擽ばゆいやうな芽生えが、好もしい希望を以て俄かに萌えて來た。

『姫君を蕩し參らすといふ事は、如何に御大老の深い思召しでも、拙者には夫はならぬ。然し姫君の言ふに言はれぬお情に濡れて、綾の御袖の下に闘はれ、彼男優りの御氣性を、優しい女性に引戻しさへすれば、自然御大老の御旨にも協ふので、僭上ながら男と生れた冥加では無いか。』

天下の驕婦淀殿を強かに痿しかけて、思ふ存分喜怒哀樂に咽ばしめた大野修理を、佞臣と言ひ、奸物と罵るが、修理としては夫も男としての無上の滿悅で有つたかも知れぬと、遠い昔の事まで思ひ泛べた。

前號までの梗概 安政年間尊王攘夷の說處士の間に昂まり、剩さへ怪盜夜叉王丸なる者、江戸市中を横行し、幕府の閣老は內憂外患に苦しめられて居た。其頃江戸に流寓せる萩の門御方泰姫は、前將軍夫人の緣邊にして、實は尊き御血統を引く巳む事なき御身分だつた。姫の許婚の良人西園中納言雅信卿は、尊王の大義を抱いて、一度蹤跡を晦まして居たので、姫は荐りに其所在を捜索しつゝ、一面には尊王派の爲に、江戸柳營の內情を密偵して居た。夫を知つた閣老は、幕臣波多野右近といふ古今の美男に囑し、色を以て姫に近づき、其神身を魅惑せしめんとしたが、姫の守護役たる鬼玄蕃と言はるゝ豪傑は、右近の出入を厭ひ、事を構へて墨堤の花下に於て果し合ひに及んだ。然るに此時思ひがけず二人を仲裁したのは、行衞不明の中納言だつたので、玄蕃は強て中納言を姫の御住居へ伴なひ來つたが、此時中納言は業に昔の中納言に非ず、遊里に耽溺して尊王の大義を忘れ、殆んど一介の遊冶郎になつて居た。姫は悲愁と怨恨とに身も世もなかつたが、此夜怪盜夜叉王入り來り、姫が護身の伯耆守安綱の名刀を奪ひ、中納言をも誘拐し去つた上、僅三日の中に、姫にも天裁を加へるといふ落し文をして行つたので有る。右近は中納言の出現によつて、殆んど絶望の淵に沈まんとしたが、再度の失踪により、再び姫誘惑の希望を恢復し得た。右近果して姫を籠絡すべきか、中納言の所在は如何、夜叉王とは何者か。雄大なる政道の背景裡に、事件は益々錯綜し、變幻百出得て端倪すべからざるものは本篇の結構で有る。

『右近、其方は宿元に定めし用事もあらうに、之へ詰めて居てたもるは、妾心支でなりませぬ。』

御酒下されの後の軽い勞を脇息へ預けられた姫は、嬋娟な眼元に言ひ知らぬ艶を湛へ、軟かく仄めく絹燈を恍惚と眺められた。其絹燈の輝やきに描かれる右近の上品な優美の姿が、金屏や調度に對照して、源氏の遊びの繪卷を擴げたやう、現世に有りとしは思へぬ彩どり、名畫の精の美男と美女とが、夢の中に縺れ合つて浮き出でたので有る。何時しか燻き罩めた香の媚めきが、一層心と心とを繋ぎ合せるべく薫つて行く。

『何と仕つりまして、手前は夜叉王奴に誑らかされまして、御前様の御行衛を失ひましたは、何としても申譯無き仕儀、必ず夜叉王を引捉へて遣はさねばなりませぬ。』

姫に對する面目のみでは無く、武士の態面を維持する上に於て、夜叉王を取つて押へなければ、死んでも瞑目されぬのだ。

『玄番も殘念に思うて居やるが、夜叉王とやらを召捕つてたもつても妾は……。』

姫の胸の嫉みを拭ひ去られぬのは、朝臣の行衛で有ると、右近は内心嫉ましく思へぬでもなかつた。

『御前様の御行衛も夜叉王の口より明白と相成りますによつて、御安堵有つて宜しう御座いまする。』

『其御儀も彼様に。』と、姫は人知れず遣る瀬無い息を吻つと吐いた。

『久々にて御逢ひ遊ばしたので御座りまするに因つて、御前様も定めし御喜び、又姫君様に置かせられても、薄暗い世の中が、俄かに明るう相成遊ばした事と存じ上げまする。』

見上る右近の鮮かな目には、男の精根が滑かに盛上つて、夫を受け入れる姫の目へと、人知れず通つて行くので有る。

『何で其様な事が有りませう、妾の心の曇りは、何日何時までも拭はれはせぬものを。』

姫が面羞さうに俯向くと、大きな男髷の上を、媚めかしい灯の光が、瑠璃色に辷つて、只一筋の遅れ毛の綾が、右近の心を身動きされぬ程絡め附けて了ふ。

『之は怪しからぬ事に御座りまする。姫君様は此上も無く尊い御身分、世に御心を傷めるやうな事は御有り遊ばしませぬ筈、若し又御心に染まぬ節が御座りますれば、畏れながら右近に仰せ聞けられまするやう、手前聊か身命を厭ひませぬ、家祿を抛ちませうとも、必ず其御心痛を除いて差上げまする。』

右近の目は一層鮮かに冴え、男には惜しい程白い顔に、ポウッと薄紅が潮した。思ひ入つた必死の心が、色に仄めき出でたので有る。女として身もうづくばかり、頼母しく力強く感ぜずには居られぬのだ。

『嬉しう思ひます。したが其方が妾の爲を思うて呉やつても、

題のみは是非ない事で有るものを。』

男優りの任俠に浮世を見下しても、爭ひ難き女性の惱み、人に言はれぬ優しさが朽ち込むので有る。

『姫君樣の御心痛は、御前樣の御事と存じまする。成程御前樣の召物が落ちて有りましたが、御骸を見上げぬ中は、御一命に及んだ事とは承知致されませぬ。必ず御無事に御在します事と存じまする。』

姫への氣休めに言ふものの、右近は朝臣が此世に永らへるとは信じなかつた。血に塗れた羽二重の召物と無事といふ事は、二つを一つにして考へられぬのだ。



『殊に御前樣は天晴武藝にも御達し遊ばしまする。手前と望月との眞劍の爭ひ、其節白刄を拂つてお止め下されたは、確かに並々ならぬ御手の內、假令彼節思ひの外お醉ひ遊ばすとも、盜人如きの手籠にお遭ひ遊ばす筈は御座りませぬ。』

右近は窃かに夜叉王の悪毒い腹の蟠まりを讀むだので有る。世にも大膽不敵の怪盜は、先朝臣を生擒にして、姫の許へ取替への身代金を強請る了簡で、朝臣を誘拐したのだつた。然し前後も知らずに醉ひ伏したりとは言

へ、腕に覺えの朝臣で有る、我に返ると共に急に中途で抵抗ひして、夜叉王の思ふに任せなかつたので、是非なく刺殺して、死骸を隱したものと見切つたから、千年萬年俟つたとて、朝臣が甦生へる筈は無いと、右近は内實思はぬ拾ひ物をした氣で居るのだつた。

『いえ〳〵妾は御前の御心が口惜しう思ひます。』

姬は挫折れた裏寂しい顏を僅かに起した。心に秘めた不滿の一端が洩れたので有る。

『と仰せ遊ばしまするは。』

『御前は音羽とやらいふ色里の賤しい者を、妾に易へようと遊ばすでは無いかえ。』

勝氣の姬の豫期したは、淨い純白な朝臣の神身で有つたのが、朱に染み紫に滲むだ汚れを、吾身に押附けようとする朝臣の怪しからぬ振舞が口惜しい。況して九重の都に匂ひぬる名花に譬へられ、禁裡御爲に深く思ひ立つて、流浪の旅路に彷徨ひ御在す筈の朝臣が、酒に腸を爛らし、女に魂を奪はれる淺ましき現在の有樣。夫でも吾身の良人たるべき人かと思ふと、姬は只苛立たしく口惜しくなるばかりで有る。

『恐れながら、御前の御戯むれは一時の御醉狂と存じまする。決して御案じ遊ばす事は御座りませぬ。自體男と申す者は、仇し色香に存じの外興を催ほし、思はぬ戯むれに深入りするもの、御案じの事も御座りませぬ。』

『然らば右近、其方もかえ。』

油斷し切つた處を不意に斬り込まれて、右近は危ふく一刀の下に首を授けさうになつたが、辛うじて四度路ながらに立直つた。

『却々手前如き無粹の者は、何事にも只一圖に思ひ詰める備には外へ氣を移すなど毛頭御座りませぬ。假令一命を捨て、醜名を後の世に遺しませうとも、更に厭ふ處では御座りませぬ。』

右近の顏色は此時に冴え、喘ぐばかりの咽喉は、燃え盛る情熱の火炎に焼け盡すかと思はれた。

『夫こそ男らしい健氣な心。若し御前に其方の半ばも其御心が御在したなら。』

心の中には身も浮くばかり迸る瀬無い歎息、觸るも惜しき身體を、斜めに脇息へ靠せかける時に、若い女性の惱みは、波瀾の火となつて、玄妙な肉身を咽びつゝ逆流するので有る。思ひ迫つて鬱積した姬は、又諦らめたやうに身を起した。

『妾は世を捨ねど、世に捨てられた果敢ない身の上、之からは倚頼に思ふ人も無い、只世の中を氣樂に思うて、切ない心を紛らすばかりでは無いかえ。』

姬としては愚痴の述懐で有る。思ひに思つた背の君の放埒、剰さへ怪盜の爲に誘拐される意氣地なさを思ふと、つく〲男

の亂次なさに愛想が盡きたらしい。

『何と仰せ遊ばしまする。世に捨てられたの、倚頼無い御身のと、以ての外の御意に御座りまする。』

右近の四肢には、凛然たる氣力が充實し、必死の思ひが忙だしく込み上げて來た。今こそ姫の御機嫌を取結ぶ絶好機會では無いか。

『妾の寂しい心を察してたも。』

『左樣な御弱い御心は、姫君樣とも存じ上げませぬ。假令世の中の凡ての人が姫君樣に乖きまするとも、右近は七生まで御附添ひ申し上げまする。』

右近が男らしくキッパリ言切る聲の響きは、鐵をも石をも飴の如く溶す力強さが有る。姫の顏には擽ばゆい紅が淀むやうに時めいた。

『親しみも淺い其方が、其樣に妾を。』

『士は己を知る者の爲に死すと申しまする。賤しき右近、姫君樣の御見出しに預り、恁樣に御出入協ひまする御恩、身に餘つて辱けなき次第、畏れながら人生意氣に感ずとやら、及ばずながら姫君樣に犬馬の勞を盡しまする所存、梵天帝釋弓矢八幡も照覽あれ、姫君樣の御爲を思はずば、此身は八ツ裂になる法もあれ、誓つて冥土までも御供申上げまする。』

熱烈火の如き意氣は、優しい女性の滑らかな胸を燒き盡さでは措かぬ。姫の足の指先より、頭の心まで、火のやうな閃めきが駈け抜けたやうに感じた。夫と共に酔へるが如き仄めきが、夢とも現とも無く渦巻いて、四方が朦朧と灰色に霞むで來た。

何か言はんとしても、薔薇の蕾の唇は戰なき、聲は怪しく涸れて、苦しい喘ぎの中に、快よく息詰つて行くかと思はれた。生々しい浮膩が、豐艶な姫の肌を、人知れず舐めるやうに這ひ廻る。

右近も今や必死の瀬戸で有る、一か八か、恁まで大膽に言つて退けたのは、乾坤一擲の思ひ切つた賽を投げたので有る。假令言葉の品に媚めきは無くとも、心の底に燃ゆる情火の熱氣が、姫に徹らずにゐようか、よしんば秘める思ひが姫を動かさずとも、身分の違ふ尊き姫に、濫りに打出すべき言葉では無いのだ。もしも姫の怒に觸れなば萬事休す、右近は再び御住居の閾を跨ぐ機會は無く、さうして大老極秘の苦肉の策は、空しく

畫ける餅と失敗に畢るので有る。右近の胸は怪しからず騒いで、早鉦の如き轟ろきが、不隨意に突上げて來た。

『右近、其方の心入、妾は嬉しう思ひまする。』

英氣の姫の言葉は、蚊の鳴くよりも小さく、仄白い耳朶は、緋桃の花を薄葉の紙に包むだやうに熱し來つた。右近の心は一層時めいて目も眩みさう。

『此上とも妾は其方を頼みまする。……したが女番には何も言うてたもるなよ。』

姫の心は他愛もなく



彼の擴げる手の中へよろめき込んだのだと、右近は甦生つたやうに吻とした。百尺竿頭一歩を進めるのは、畏れながら只上下の隔てを、念なう近づけるばかりで有る。右近の命懸の望みは此處に遂げられ、左樣して大老の頼みが成就するのは、只一轉瞬の刹那に肉薄した。

『姫君樣の御爲に、右近の一身を捧げる事を御許し下さりますやう。』

右近が一膝乘出さうとした途端で有る。ヅシリ〳〵と鈍重な跫音が廊下から響いて來た。言ふ迄もなく鬼女番の足取。右近がハツと思つて、二三尺飛び退れば、姫は脇息から離れて、胡散な眦を覺束無く上げられた。右近に取つては、流星光底に長蛇を逸する無限の憾みで有る。

貞宗に相談

右近は三斛の冷水を天窓から浴びせられたので有る。人は覺らずとも、心の怯れに冷汗はジリ〳〵と滴たつて來た。危ふく今一歩を進めて、玄番に覺られたなら、如何なる椿事が出來したらうか。さらぬだに凄い目を光らして、吾身を睨めて居る彼が、何を仕出すか解らぬと思ふと、殆んど九死に一生を得た思ひがした。

『波多野氏、其許屋敷より急用の使者が參つた氣ぢや、小座敷へ通して有るに因つて、逢はつしやるがよい。』

玄番が何事も察しなかつたのが仕合せで有る。右近は虎の顋を逃れた心地がして、急いで小座敷へ行つて見ると、給人の水田五平といふのが控へて居た。

『五平何ぞ用件か。態々其方が參るやうでは氣懸りぢや。』

五平は疊へ兩手を突いて、恐る〳〵進み寄つた。

『實は今晩霞ケ關樣より。』

言ひかけるのを叱と手で押塞いだ。殆んど大願成就の背戸際へ取詰めた處へ、此處では大禁物の霞ケ關、夫は言ふ迄も無く大老の屋敷では無いか。

『フム、御使者が參つたと有るか。』

『ハイ、至急に霞ケ關樣へ御入來有るやう、先樣御待受といふ事に御座ります。』

大老より火急内々の思召。又風向が變つたのでは有るまいか、夫なら武士として不面目な女蕩し、色を賣る俳倡同然の業から藻搔出る事が出來ると喜んだが、三日の間は我から宿直を望むだので、一時たりとも御住居を明ける事は不本意ながら、是非なく母が病氣と言拵らへて御住居を拜辭すると、直に其足で霞ケ關へと向つた。

殿は御奥に寛いで居られたが、右近見參と聞いて、直ぐに平生の閑室へ召し入れた。

『右近、よう参つた。其後は何と致したな。』
微醺を帶びた殿の機嫌は極めて麗はしく、腹心の者として、更に心を措かぬ樣子が、感激し易い若者の血を花やかに喜ばせる。
『ハツ、御内命を承はつて、追々御近附申し上げて居ります。』
小梅の報告をするのが、寧ろ氣が咎めるやうな切ない心地がするのだ。右近は今隠密の役目から放れて、我知らず一寸づつ返忠の方へ接近しつゝ有る事を、明らかに意識して居る。
『其方が破落漢を用ゐて、姫に取入つた巧者の手段は、近頃面白い機關で有つたぞ。』
ドツシリした身體を搖つて、殿は滿足さうに微笑した。
『ハツ、御存じ遊ばしまするか。』
若い右近は不意を襲はれて眞赤になつた。姫に近づく手段として、破落漢を使役し、喧嘩を仕懸さして置いて、先方への加勢に飛出すといふ古い手段を用ゐた事が、反つて氣が差してならぬので有る。
『望月玄蕃と眞劍勝負に及んだ事も存じ居る。……其方の忠節は十分認め置くぞ。』
殿の機嫌は斜めならず上々吉では有るが、何から何まで筒拔に知つて居るのは、隠密の後に隠密を附けて有るので、油斷も際も無い周到の手配に、右近を顫へ上らした。
『然らば中納言樣と姫君とお逢ひの事も。』
『オウ夫も聞いた。』
殿は其明察を誇るやうに、厚い下唇に反を打たして、眦に無限の微笑を浮べる。流石天下の政道を切り盛りするだけ有つて、便々たる肚皮の中には、大小清濁合せ呑むの概が有る。右近は其威に打たれて、身體が竦まつて行くやうに覺えた。
『その夜夜叉王と申す賊の爲に、朝臣は誘拐されたと申すではないか。』
『左樣に御座ります。實に思ひも寄りませぬ事で。……剰さへ殺害に及ばれたものと承知致しまする。』
殿は默つて右近の顏を眺めて居た。
『何として殺害の事が知れたのぢやな。』
『御住居外庭に、中納言樣血附の召物が捨て御座いましたに因つて。』
右近は畏る〱當夜の始終を演述した。
『血附の著衣が有つたというて、朝臣が殺害されたものと極めを打つは、少と早計とは思はぬか。』
『御意に御座ります。手前も如何かと存じまするが、何分夫以來御行衛が知れませぬに因つて、中納言樣御骸を、賊共が大川へなと、投入れたものと承知致して御座りまする。』
『夫は只推量ぢやな。』
『御意に御座りまする。』と、右近は何となくモヂ〱と擽ばゆ

かつた。死んだと斷定するのは、早計には相違ないが、さう見切る外に途は無いのだ。

『若し存生で有つて、再び小梅へ舞ひ戻られた時には何と致すな。』

皮肉を極めた冷やかな問ひで有る。萬一朝臣が生存して居て、御住居へ戻られたと有れば、如何に忠義の爲とは言へ、右近は姫の邊から身を引かなければならない。

『瑞たく御夫婦の御契りを結ばれるのが、自然の成行かと考へられまする。』

殿は脇息を掴み寄せるやうにして、グイと突張つた。

『自體中納言は、公儀御爲に相成らさる事を考へ居られた仁ぢや、姫君とても京方で居らせられる。其二人が神身共に合體致したなら、公儀重役の者に取つて一方ならぬ妨げと相成らう、言はば恐ろしき一敵國を設ける者ぢや、其方は左樣には存ぜぬか。』

『恐れ入りまして御座りまする。』

右近は呀と胸を衝かれた。流石に重い役處を預られるだけ有つて、先の先までを考へて居られるのだと、一も二もなく敬服して了ふ。

『夫を考へたならば、御上への忠節の爲、夜叉とやらの手を待つ迄も無く、朝臣が醉伏される間に、其方が兎も角も致すべきでは無かつたか。何も御奉公で有るぞ。』

右近は慶へ上つた。此殿は公儀政道の爲には、如何なる事をも忍んで犠牲とするのだ。姫君を甘い餌の粘着く魔道へ引込むなどは、瞬たき一つするよりも容易く、歯牙にも懸けぬ尋常な所道下世話にいふ朝飯前の仕事だつたのかと、右近は驚き呆れた。

『然し幸ひ夜叉の爲に行衛を失つたと有るは、萬事につけて仕合せで有るが、萬々一朝臣が甦生つて、立戻らぬものでも無いに因つて、其方は夫を防がねば相成るまいぞ。』

降つて湧いた難題で有る。謎のやうな殿の御意は、朝臣の行衛を徹底的に追窮して、誠殺害されたなら可し、萬に一つも賊の囚はれにでもなつて居るやうなら、一刀の下に息の根を止めて了へと言ふのでは無いか。

『恐入まする。然らば手前直樣朝臣の御行衛を調べまして。』

『夫は手ぬるい事ぢや。』

『ハッ。』と、右近は又戸惑つた。

『姫を其方の儘にする事は即ち朝臣との御仲を破る事では無いか。』

儼然たる態度から一轉して、殿は砕けた調子に軟らいだ。若い血氣の武士を操縱する如きは、老猾なる殿としては、赤兒の手を捩るやうなもので有る。

右近は又鼻白む外無かつた。現に今の先、可なり際どい處まで鑽り進むで、殆んど懇ろ過ぎる御言葉を戴かんと迄漕ぎ附け

た矢先、此殿よりの使者と有つたので、寶の山へ入りながら、手を空しくして立歸つたのでは無いか。彼時御使者さへ來なければと、右近は今更残念でならない。

『御意の通り、粉骨砕身致し居りまする。』

餘りに堅苦しい挨拶なので、殿は満面に微笑を湛へられた。右近が此調子では容易に捗が行きさうにも無い。

『其方は姫を思ふ壺へ引入れさへ致せばよい。其方が引入れられたでは、頓と勞して功無しぢやぞ。』

右近は苦しい脂汗を流して、ジリ〳〵と咽喉が詰つて行くやうで有る。

『其方には必ず望みを遂げるといふ目安が有るかな。』

『ハッ、其中には。』

『其やうな目俗い事ではならぬ。殊に姫君は女ながら、男も及ばぬ智者と聞く、其方が謀る〳〵と思うて深入して行く時、姫は態と謀られた風を見せて、反つて其方の窮所を押へようとされるかも知れぬぞ。』

右近は又生壁へ行當つて、後を振返つたやうな心地がした。言はれて見ると、餘りに姫の待遇が甘過ぎはしまいか。始めて御目通りして以來、女番にも増して、又無き者のやうに召されるのは、姫が何も彼も察しの上で、自分を弄り物にして居られるのかも知らぬと、忽ち愕然として、頭腦の中に爀と熱い血が流れたやうに感じた。

『左樣な譯で有るに因つて、其方は油斷致しては相成らぬぞ。』

『畏まりまして御座りまする。』

是だけの注意で濟むだのかと、右近は吻とした。

殿は後の手文庫を引寄せて居られたが、此時紫の上紐を解いて、中から一口の匕首を取出した。

『右近、之を取らすぞ。』

『身に餘る面目、辱けなく拜領致しまする。』

恐れみ愼しみ、恭しく膝行して兩手に頂だいた。

『右近、夫は貞宗の鍛冶ぢや、よう斬れるぞ。』

低いながら力の籠つた重味の有る聲で、ジッと右近の眼を見据ゑた。

『ハッ。』と言つたが、只無意味の拜領とも違つて、どうやら擽ばゆい感じが、趾の裏をせゝるので有る。

『天下政道の御爲、上への忠節ならば、非常の手段を須ひるも詮方無いぞ。』

右近は何かは知らず、電光のやうな鋭きものが、胸の只中から、天窓の先迄を燦めき徹すのを感じた。然も其電光は、只一閃にして、五體を破滅する恐ろしい偉力で有る。右近は四方が眞闇になつて、危ふく仰反倒れんとした。

『恐れながら夫迄には御座りますまいか、只其覺悟を以て致せば。』

『いや猶豫は致されぬのぢや。今日京都所司代より内報が有つたが、此程よりして御本丸御表重職に於て、内々評定を盡す或事柄ぢや。懸り合ひの重職の外は、御上より外御存じ無き筈を、百二十里も隔てたる京都御



所に於て、疾くも御存じあらせられるといふ事ぢや。夫を調べたる處、小梅姫君より、水戸殿の手を經、水戸浪士と稱へる不逞の輩が、先日急使として中仙道から上つた趣きぢや。萬事は御上より大奥、大奥より姫君、恁樣にして柳營內評定は、盡く京都へ通達されるのぢやぞ。……予が苦肉の策は急を要する事に相成つた、其中などいふ悠暢な事は致されぬ。今宵にもあれ、此貞宗に相談致し呉、貞宗の申す事は忠義の鑑、御奉公の眞髓、天下靜謐の御爲には易へられぬぞ。』

右近は必死の息を肩先に刻み込むだ。貞宗の鍛へた業の短刀、夏尚寒き明晃々たる光が、何を語るかと思ふと、彼は惱亂して氣死する外は無い。

夜叉の失敗

怪盜夜叉王が書き殘した落し文の三日の期日、其約束の十五日は今日の今夜で有る。水戸御館へも告げずして、窃かに怪盜の襲來を待ち受け、一擧に此賊を退治して、江戸上下の枕を高くさせようと意氣込む鬼玄蕃、先刻急用を以て立歸つた右近も再び戻つて來て、宿直の數に加り、玄蕃と共々姫の御相手をして居たが、夜は沈々として、夢に驚く寢鳥も無く、閑やかに更けて行くばかり、皎々たる月魄も、朧の被衣を脫いで、思ひの儘に輝き亙ると、滿庭の樹影は狼藉として、紋の目の如くに地に印される。

內庭外庭隈無く見廻つて、何等の異狀だも認めなかつた玄蕃は、元の席へ戻つて來た。

『姫君、夜叉が參るといふは、畢竟僞りの脅しに御座りまする。只今御庭內を見廻りましたる處、御庭門の締り等、嚴重の上にも嚴重で御座りまする、又御構へ外も田甫續き、後は隣家の下屋敷、月は眞晝を欺むきまするから、夜叉など申す曲者が、立廻る餘地は御座りませぬ。』

此月夜を選むで、賊が押込まうとは、全く豫期し得ぬ事だつた。

『如何さま、今夜を限ると申すは、曲者の出放題で御座らう。』

と、右近も同じた。

『早亥刻半に御座りますれば、御退け遊ばして宜しいかと存じまする。』

玄蕃は右近といふ危險な者から、成るたけ姫を遠遁らしたいので有る。

『殊に曲者が參りも致さぬに、徒々と夜を更して待設けて居りまするは、取るに足らぬ夜叉如きを恐れるに當りまして、誠に殘念にも心得まする。』

案の外、右近までがお退けに同じたのは、玄蕃と別れて、單獨の行動を胸に描くのかも知れない。

「其方達も寢やつたがよい。」

姫はヤンワリ立ちながら、玄蕃に向けた目を、右近の顏に落した美女の微笑み、見上げる右近の眦には、美男の精靈のやうた妖みさが、有りと有らゆる女の魂を引摺込むばかりに仄めいた。

絹燈滑らかにして夜は深し、玄蕃の鬼の眼が睨まなかつたなら、其處に上下の隔ては有りとも、一對の内裏雛が桃の葩を御み、白酒の醉に蕩けて行かぬとも知れぬのだ。玄蕃としては逆さに釣したビイドロの番をするやうなもので有る。

不寢番をする事が、一同の臆病にも聞えると言つたのは、右近の舌刀の巧みな閃めきで有つた。鼠賊同然の夜叉王を、床にも就かずに待つて居て、若し來なかつた時には、下々の小者の笑ひ草だと氣が附いた玄蕃は、夫なり我部屋へ引取り、右近も當がはれた座敷へ引籠つた。

御住居の中で、起きて居る者は只の一人も無い。夜叉王が來ると豫告した三日の日限にも拘はらず、平穩無事でコトリとも言ふ音すら無い。遠く離れた召使の部屋々々では、寢た間が極樂の軒さへスヤ〱と安らけく聞えて居る。

子刻の御土圭が、奥の間から冴えた遠音を浪打たせた。家の棟も三寸下ると言ふ眞夜中、月は中天に昇つて、下界の人の夢を照しつゝ、浄玻璃の鏡に、僞らざる世相を映しつゝ行く。

寢もやらで小一時の間、褥の上に坐つて居た右近は、腕を拱ぬいたり解いたり、力の拔けたやうな吐息を吐いた。彼は大老の威嚴有る冷酷な言葉と、物凄い短刀とを、燃ゆる情熱の渦卷く胸の中で考へ合せて居るので有る。

色を以て魂を奪へ、夫がならずば、刄を以て命を失へ、天下の爲には、小の虫を殺して、大の虫を助けるのだ。右近は騎虎の勢ひに驅られて、是非なく引摺れて來た今、頼む人を裏切もならず、さればとて姫を危ふきに落し込むには忍びない。姫を殺すは懐に抱く連城の璧を、微塵に打砕くより猶辛いので有る。

然し今夜に迫る大老の嚴命、自分が仕遂げねば、必ず他の者に仰せ附けて、惜し氣もなく瑠璃の名玉を打砕くか、さらずば見す〱其玉を横取されて了ふので有る。他人に玉を取られるを、如何で指を咥へて見過されよう、他人に砕かれるなら、自分が砕いて了ふ。

右近の心には是非黑白が、同じ力を以て鬩ぎ爭ひ、思慮分別が渾沌として了つた。忠義の爲ならば、天下の爲ならば、暗示を與へたやうな大老の言葉が、頭腦の心にこびり附いて、右近を狂暴の三悪道へと押轉して行く。

彼はフラ〱と立上つた。廊下を過ぎ、入側を通つた幾間かの先は、豫て知る姫の寢所で有る。

燃ゆる眼、灼ける胸、上氣しながらも、色蒼褪めた右近の身の周圍には、凄慘たる鬼氣がメラ／＼と立上り、異形の惡魔となつて、刻々伸立つて行くので有る。

僅かに有明の鐵行燈が廊下の隅に置かれて有るばかり、其周圍のみが仄明るく、隔たるに從つて一層黒暗々の度を加へて來る、其暗い闇には千魔百鬼が跳梁するのであらう、人は息づまる苦しさに蜿蜒打つ。

右近の餓ゑたる魂は、脫殼のやうな生身を驅つて、入側より入側へと音も無くフラ／＼と運ばせた。

轟ろく胸、喘ぐ息、人間の精根は頭上に上ずつて、胴から下は手應へも無く輕くなつたので有る。堅く下唇を嚙み、乾いた唾を呑み込むで、守宮の如く徐々と傳はつた。

何處からとも無く洩れる空炷の香のときめき、言ふ迄も無く寧姬君の寢所で有る、忍び忍んで辿り寄つた襖一重の彼方に、妖冶な夢を飯せる姬君の妙なる寢姿を思ふと、右近は耳熱し氣迫り、不隨意の武者震ひが、踊躍するやうに突き上げて來た。

廣い御住居の中には、鼠の走しる音も聞えず、針の落ちた音さへ、銅現しく響きさうに思はれる程の靜けさ。さしも油斷なき鬼女番さへ、内外の氣配りに勞れて、右近が寢所近く忍び寄つた不敵の振舞を知らずに、白河夜船の枕高く眠りこけたのであらう。

七珍を盛る黄金の盤、珮寶を鏤むる玉の冊へ、象牙を削り成した右近の食指は、將に其襟に觸れ來らんとして、襖の引手に手をかけた。

打物執つては鬼神も避けざる波多野右近、二十五歲の男の盛が、頭の腦天より足の爪先迄乘り切つて居ながら、我とも無き怯に引戻されて、危ふくガタ／＼と襖に音を立てゝ、突き飛ばされたかと驚き恐れた。然し夫は音とは名の附かぬ程の幽かの響きでは有つたが、我耳へは百雷の如くにはためいたのだ。

襖はスルリ／＼と明けられた。同時に薰り來る炷香の媚めく匂ひ、右近は身を摺拔けるやうにして、僅に中へ入ると共に、殆んど眩暈せんとした、身體中を目に見えぬ何物かで、快よく擽ぐり廻られるので有る。香の薰りに和へる玄妙なる天女の移り香、床も違棚も屛風も有明も、凡てが悅樂其物の姿で、芳しき桃源の洞の、人を蕩かす玄妙な魔道への誘ひで有る。

右近の戰のきは、軈て快よい死の疼痛に瀕し、岑々として何處とも分けず身體中がうづいて來た。

極めて靜かに、

暴の

目を數へるばかり、足の拇指を刻み込ました。寢所の内は淡い燈が立罩めるやうに朦朧として、緞子の衾の裾の方が、灼き附くばかり目先に肉迫し、彼の身體を促がすべくゆすぶり立てるので有る。

誘惑か、短銃か、右近の心には死物狂の魅が、萬字巴と環を描き、彼の懐には惡魔の牙の白刄が唸き始めた。

萬々一、姫君が無禮を咎められたなら、モウ萬事の破滅で有る、愛惜窮まつての憎惡、是非なく嫋やかな雪白の隆起の下に、氷の刄を押附け、觸るも惜しき秀美な膚に、生々しき血を見せる外は無い、而して我身も其場を去らず、一つ刀で生害する迄、苟にも姫の肉身を犯した刄先を、我咽喉へ突き込む事は、死しても餘榮の有る男冥利ではないか。

彼の知覺は痺れ、舌は硬張つて、恐怖と希望と失望との豫感が、互ひに叩き合ひ打合ふやうに混淆になつて藻掻き狂つた。膏汗は氷よりも冷やかに、美男の脊筋から腋の下へネバ〲と滑り込んで行



く。苦しみに昂奮して、氣が遠くなつた右近は、恐る／＼金屏を排いた。綾を重ねたフツクリした敷蒲團、蠟色の角枕に、緋縮緬緋房の括り、其處には潤ふ息も朗かに、媚めかしき玉の顔せが、縹渺たる魂を現に吸ひ込むで、芳醇な膠の中へ同化し行くので有る。

臆病な勇氣に喘いだ右近は顫へながら手を差延べて、亂れ心の亂れる儘に、アハヤ夜具の袖へ手を觸れんとした時、昂奮し切つた息も絶え／＼になつて、危ふく蹣跚き仆れんとして、正體もなく躄り寄つた。

『畏れながら姫君。』

彼は必死の旋渦に迄蜿蜒打ち廻つて、一所懸命に呼んだので有るが、顫ふ聲は咽喉の中に悶えて、唇限り外へは出なかつた。

然しもう此處まで肉薄しては、死か活か、乾坤一擲の賽を投げるより外は無い。箔摺の衣打ち覆うた絹行燈の灯は光無く紅に沈みかけ、寢所の中を、夢を溶したやうた朦



氣が、軟らかく封じ込めた。次の室に宿直の小姓は無く、温たかき雪を綾羅に包むだ姫君の、敬虔の限りの身體一つが、目の前に横たはつて居るのではないか。

機は熟しに熟せり、此好き首尾を外して、望みを遂げ、思ひを霽らす事があらうか。

右近は有ん限りの戰のきに怯えながら、天鵞絨の衾の襟に手を置いた。餘りに畏れ多い僭越で有るが、彼は昻奮に昻奮して、氣が狂つたので有る。

『姫君。』と、囁やくやうに再び呼びかけて、夜具の上からヤンハリと手を置く途段、彼は肩透しでも食つたやうに、何の手應へも無くフハリと前へのめつた。

『ハツ。』と右近は氣も顚倒した。正しく無何有の里の夢路を辿らるゝ筈の姫君は藻抜の殼、只スンナリと膨らまされた夜具が有るばかりだ。

愕然とした彼の魂魄は形も無く砕け飛んだ。アナヤと驚いて飛上る途段に、遥か表の方に方つて、銷魂しき人聲、忙たゞしき跫音、咄嗟の瞬間に、彼は大老の言ふ如く、姫に謀られたのだと覺つた。

此上は生きて恥を残し、物笑ひの種を蒔からうか、波多野右近二十五年の運命は玆に窮まつたと、貞宗の短刀に手を懸ける時、

又しても遥かに聞ゆる聲々。

『夜叉王ちやく、御出合召され。』

小姓達の脅えた金切聲が、表座敷の方から耳を劈ざいて反響する。

右近の氣は俄かに變つた。同じく死ぬるものならば、怪盗夜叉王と耦刺へ、最後の最後までも、姫の慈愍の御褥に浴せんものを。幸ひ誰知らぬ個中の消息、右近は一足飛に我部屋へ駈け込むと、床に在つた刀を一摑と飛附いたが、刀架けは其處に在りながら、武士の魂の兩刀は、何時の間にか紛失して、影も形も無い。

『殘念、今の間に賊に遣れたか。』

彼は飛び上り、狂ひ上り、地鞴踏んで足掻いたが、如何ともする術は無い。表の騒ぎは倘忙たゞしく、右往左往に亂るゝ跫音。

『よし、匕首にもせよ、貞宗が擧の一口。遺恨の骨髓を貫ぬくに餘りがあらう。』

右近は悪鬼羅刹も物かは、夢中に駈け附ける廊下先、其處は行留りになつて、二階へ通ふ梯子が懸つて居る。失敗つたと思つて引返さうとすると、どうやら二階に人の氣配、偖は盜人の同類が此處にも居るかと氣附くと、只一踏に飛び上つた。

『オウ右近、よう參つてたもつた。』

一人の侍女を從へて、案外其處に立たせられるのは、寢所に殼を踏ませた姬君だつたから、右近は穴もあらば消えも入り度く、眞赤になつて物も言はれなかつた。

『其方は今心附きやつたか。妾は今の先怪しの物音に夢覺まされて、偖は夜叉王が參つたかと、密と寢所を脫け出して之へ參つたのは、此高見より外の樣子を見ようと思うてぢや。』

右近が姬の閨へ覗ひ寄つたのは、姬が拔け出られたと、殆んど間一髮の差で有つたのだ。右近は始めて姬に謀られたので無い事を知つて、生れ變つたやうに落附いた。

二階の雨戸は一尺ばかり明けて有つた。銀色に閃めく蒼白い月光は、一輪の明鏡を懸けて、限なく庭面を照して居る。廣い芝生の盡きる處に黄楊樹の大木、其下に立つ眞黑な人影の、右に左に動く姿が歷々と描き出された。

『右近、彼こそ夜叉王といふ賊ぢや。妾が見て有るに、五六人の男が、彼者の指揮で働らくやうで有りますぞ。』

果して一人の黑裝束が、其側へ駈け寄つたが、彼の指揮に因つて、外庭の方へ引取つて行く。其肩に擔がれたのは、夜目ながら正しく兩刀。

『南無三、又ケ〳〵と我魂を盜み行くのぢや。』

怒心頭に發した右近、爪が肉へ滅入込む迄、左右の拳を握り固めた。

『姬君、夜叉奴は手前が討取りまする。言語道斷の不敵者奴。』

渾身一時に破裂せんばかりの忿激に、火を噴くばかり激昂し、身を飜へして飛び行かんとするのを、姬は華奢な手で扯住めた。

『コレ待ちや。妾が討取つて見せまする。』

勝氣の姬の負けじ魂は、二度まで館を騷がした不敵な强賊を、其滑らかにしなやかな手で制敗しようとするので有る。

『エツ、姬君樣がツ。』と、右近は驚き呆れた。

『時に取つての好い試しもの、妾の爲る樣を見てたも。』

何時の間にか右手に携へた短銃、阿蘭陀渡りの飛道具の覗ひは定まつた。矢頃は聊さか遠けれども、殘り無く月に描かれた黑裝束の姿は、正しく怪賊の張本夜叉王丸では無いか。

姬は花羞かしき頰を冉たりと銃身に密着した。照星と照尺とを通して、夜叉王の胸板とは一致したので有る。然も敵は其魂を天涯に奪ひ去る脅威が有るとも知らで、行つては還り來る手下に何事をか命じて居る。

瞬一瞬、覘ひに覘ひ拔いた筒口は定着し、姬が息を凝すと、右近も侍女も固唾を呑むだ。

轟然一發、天地を碎く筒音、雷火目前に隕ちた火炎の閃めき、アッと擧る悲鳴、見よや夜叉王はバッタリ地に仆れた。下げた短銃からは、まだ濛々たる餘煙を噴いて居る。

『御見事に御座りまする。惡運盡きたる夜叉王奴、今こそ思ひ知つたで御座らう。』

右近は直に梯子を駈け下り、一散に庭へ飛出した。恐ろしき物音に驚いた小姓の一人二人、何處からか姿を現はし來つた玄蕃、我劣らじと現狀へ駈けつけたが、驚く可し神速風の如き夜叉一黨、只一瞬の間に、射たれた首領を擔ぎ去つて、疾くも影を隱したので有る。

『確かに夜叉王は御射留遊ばした。』と、右近は夜叉の仆れた處へ佇ずんだ。果して軟らかい草が靡き伏して居る。

『姬君が御討ちになつたか。然らば百發百中ぢや。夜叉も惡魔も年貢を上げ居つたわい。』

玄蕃は自分が射ち取つたやうに誇りやかに立ちはだかつた。

『其木立の中へ二三人逃げ込みました程に、其邊に仆れては居ませぬかえ。』

姬の白い顏が、二階の欄干に仰がれた。然し夜叉王の死體は、木立の中にも見當らないのだ。（つゞく）

手に汗を握つて成行を待つ

鈴木彥次郎



前田曙山氏が、素晴しい意氣込で、年餘の苦心に成る快作を、近く『キング』誌上に發表されるといふ風聞を洩れ聞いた時、僕の心は、大なる期待に躍つた。云ふまでもなく、曙山氏は、我が大衆文藝界の最高峯、その流麗たる妙筆、雄大絢爛たる構想は、夙に滿天下讀書子の嘆稱する所である。その巨匠が、大なる自信を以て、世に問はれる大作だから、我も人も、その內容を仰望したのも當然である。

愈々それが發表された。僕は、貪るやうに『怪盜夜叉王』を讀みつづけてゐる。期待は全く滿たされた。靈筆は、益々冴え、構想は、愈々多奇奔放！　しかも、テムポは素晴しく速く、興味津々として盡くる所を知らない。しかも、淸新な筆致は、毎月二十餘頁の長文を、眞に息をもつかず、一氣に讀了させ、『ああ、此の次は――』と翌月號を、心から熱望させるのである。勤王佐幕兩黨の重大な使命を、各々一身に荷うて活躍する美男右近と美女泰姬の微妙な交渉！謎の人物西園中納言、さては全く正體のつかめぬ怪盜夜叉王――それらの人傑をめぐつて、奇々怪々な事件は、幕末騷然たる活舞臺上に、變轉極りなく開展してゆくのだから、僕ら讀者は、たゞ、作者の靈筆に魅せられ、手に汗を握つて、その成行に胸ときめかすばかりだ。

僕は近頃此の作ほど全身の興味を唆られたものはない。是程感激して熟讀してる快作は斷じてない。僕は近時文壇最大收獲として此の『怪盜夜叉王』を推す事に躊躇しない。そして、感動の眼をみはつて、更に、その續篇を、心から待ち焦がれてゐる者である。（寫眞は鈴木氏）



諧謔小説

ガラマサどん

佐々木邦
細木原青起畫

失業の名人

長男が小學校へ入學して、初めての成績が全甲だつた時、妻は、

『矢つ張りこの子は頭が好いわ。』

と得意になつた。

『おれに似たんだ。』

と私は主張した。

『オホヽ。』

『何だい？』

『然うでございませうよ。』

『無論さ。』

『あなただつて決して足らない方ぢやありませんから。』

と妻は日頃持つてゐる見積りの一端を洩らした。

『當り前よ。見括るな。』

『だから、好いつて申上げてゐるぢやありませんか？』

『何處へ出たつて押しも押されもしない。』

『しかし……』

『何だい？』

『勤め運が悪いんですわ。』

『然うさ。頭は好いんだけれど。』
『あなた、大丈夫？』
『安心してゐろ。首になつたつて、饑じい思ひはさせない。』
と私は消極的の保證しか與へられない。
『……』
『心配かい？』
『え〻。』
『何故？』
『あなたは落ちついた頃が一番危いんですから。』
『取越苦勞をしたつて仕方がない。今の會社にばかり日が照りはしまいし。』
『そんなことを仰有るところを見ると、又ソロ〱怪しいんぢやございませんの？』
『大丈夫だよ。萬一いけないにしても、直ぐに後を探す。』
『あなたは後を探すことにかけると名人ね。』
『失業しても一月と遊んだことはない。』
『そこ丈けは本當に豪いわ。』
と妻も認めてくれた。
但し、探す方が名人なら、失ふ方も名人といふことになる。失はなければ探す必要がない。
實際、私は勤め運の好くない男である。學校を出て直ぐに入つた會社は特別に優遇してくれたが、三年目に潰れてしまつた。事情が事情だから、涙金を貰ふどころか、俸給を一月分倒された。最初その會社へ私を推薦してくれた先輩の三好さんは、



『それは君の

責任ぢやない。不可抗力だ。』
と同情して、その月の中に一流新聞社の口を探してくれた。
私はホッと息をついた。結婚したばかりだつたから、長く遊んでゐると妻の信用がなくなる。その當座の心持を忘れずに辛抱すれば宜かつたのだが、上役に一人意地の惡い辣腕家がゐて、その機嫌が取り兼ねた。此奴に泣かされたのは私ばかりでない。同難の向きが大勢あつた。一年たつて席稍暖まると共に、私は多少義侠心が手傳つて、美事正面衝突をやつてしまつた。面を見るのも厭だつたから、三四日病氣缺勤をしてゐたら、
『依りて御懸念なく明日より御出社に及ばず候。云々。』
といふ鄭重な辭令に接した。しまつたと思つたが、もう追つ着かない。親しい同僚は皆同情して、その代表者が見舞ひに來てくれた。
『兎に角、僕等は僕等で微衷を表したいんだが、何んなものだらう？』
といふ相談だつた。
『宜しく頼む。』
と私は無論未練があつた。
『それぢや明日の晩六時に倶樂部へ來てくれ給へ。』
『よし。皆集まるのかい？』
『うむ。送別會だ。』
『何だい？　馬鹿々々しい。』
『實は僕等も見殺しには出來ないと言つて、夫れ〳〵運動したんだが、手後れだつた。元來喧嘩は兩成敗だから、こんなことになる筈はない。君が休むでしまつたものだから、何うなつてゐるのか分らなかつた。諦めてくれ給へ。』
と代表者は因果を含めた。
斯うなると、唯一の頼みは先輩の三好さんだ。以來年賀狀を一枚出したきりで具合が惡かつたけれど、仕方がない。私は早速伺つて、
『先生、又不可抗力に出會ひました。』
と一部始終を打ち明けた。
『困つたな。』
『何處でも宜いですから、至急一つ。』
『差當り心當りはないが、申込があり次第推薦しよう。』
と三好さんは快よく引受けてくれた。出身學校の幹事を勤めてゐるから、卒業生を賣る責任がある。
間もなく私は某雜誌社へ紹介して貰つた。一年でも新聞社にゐたといふのが資格になつて、考査の形式もなく、直ぐに採用された。しかし私は勤め運の好くないことがソロ〳〵分り始めた。一年足らずで、こゝも首になつてしまつたのである。理由は未だに分らないが、文筆癖が祟つたのらしい。記者として文章の嗜みは結構な筈だが、私は餘所の雜誌記者と懇意になつて、小遣稼ぎの原稿を時折自社の机で書いてゐた。餘暇を利用したので、編輯事務には少しも支障を來さなかつたが、矢張りこれがいけなかつたのかも知れない。兎に角、或日、

『熊野君。』

と編輯長が呼んだ。

『何ですか？』

『一寸。』

『今少し忙しいんですが……』

と私は迷惑した。某誌の締切が迫つてゐた。

『冗談ぢやないよ。』

『何ですか？』

『君は餘所の社へ行つて働いた方が宜いだらう。』

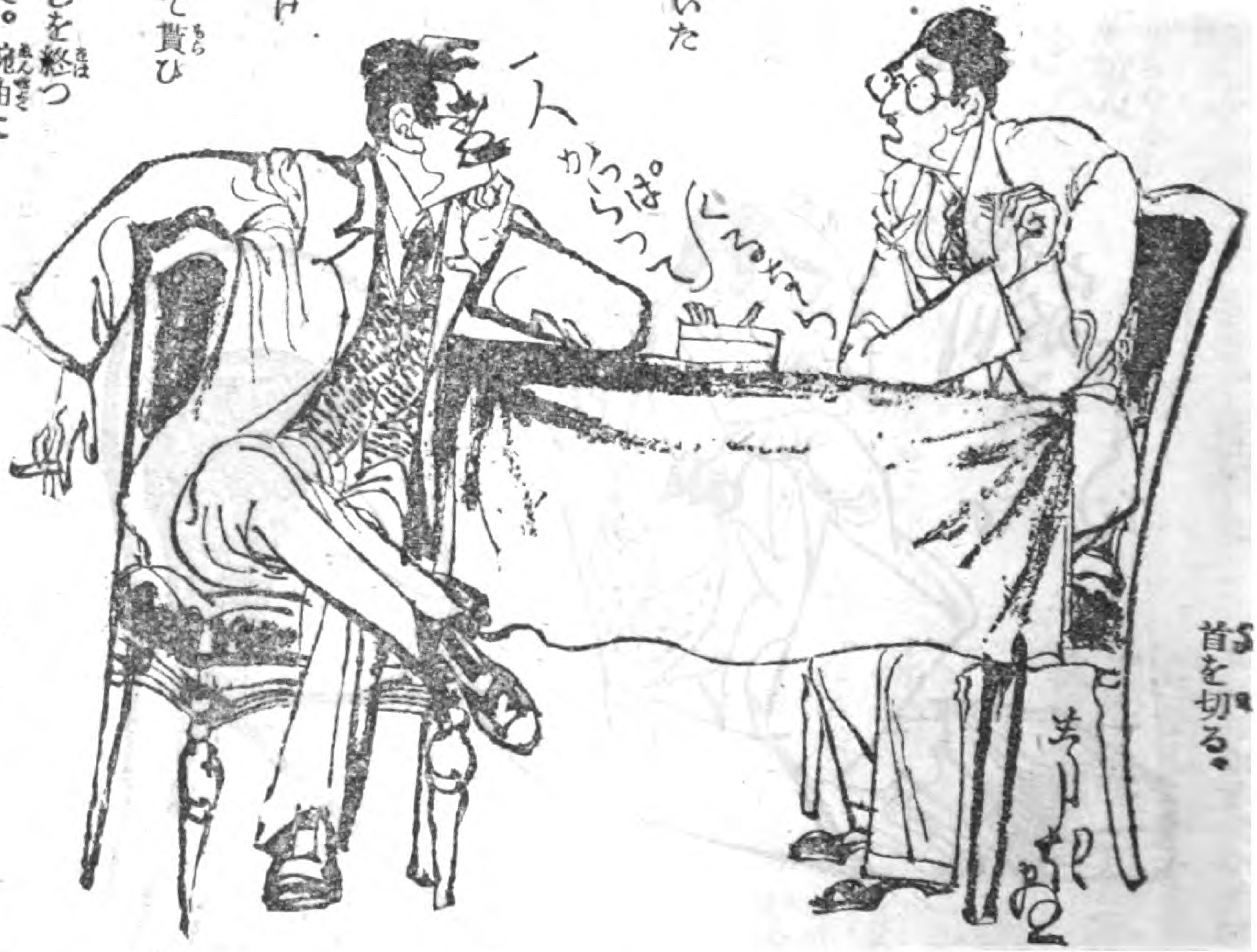
『はあ？』

『この間から考へてゐるだんが、矢つ張りその方が宜いよ。餘所へ行つて大に働くことにしてくれ給へ。』

『僕は何方でも同じことですけれど。』

『同じことなら、是非然うして貰ひませう。』

と編輯長はそれでもう申渡しを終つたのだつた、流石に大衆雑誌だ。婉曲に



首を切る。

私はジタバタしない。直ぐに諦めて、母校へ駈けつけた。門のところで三好さんに行き會つたから、會釋をして進み寄つたら、

『君、又不可抗力ぢやないかい？』

ともう察してゐた。

『失策りました。』

『困るね。』

『何處かありませんか？』

『ない。』

『何でも宜いんです。』

『今急用で出掛けるところだから、又今度來てくれ給へ。』

と三好さんは電車を目がけて駈けて行つてしまつた。

次に私はこの不幸の原因になつた記者をその社に訪れた。事情を打ち明けたら、

『それは氣の毒だね、何うする？』

と同情してくれたのを力に、

『こゝで使つて貰へまいか？』

と頼み込むだ。

『さあ。』
『無論滿員だらうが、一人ぐらゐ割り込めさうなものだ。』
『何か手土産を持つて來るか？』
『手土産つて？』
『君の方の雜誌に書いてゐる流行つ子が三四人あるぢやないか？』
『うむ。』
『何奴でも宜いから、一人攫つ拂つて來るなら、何とか相談して見る。』
『それはむづかしい。』
『唯ぢや話にならないよ。』
といふことで體好くお斷りを食つた。
　いや、調子に乘つて、首になつた經歷を書き立てたが、もう端折る。要するに、私はそれから二箇所で又々不可抗力に出會つて、現在の會社へ移つた。その折、三好さんは、
『熊野君、もう構はないよ。宜いかね。』
と念を押した。



『はあ。』
『初めからで何度だつたらうね？』
『片一方の手では勘定出來ません。』
『學校としてはもう充分責任を盡してゐるんだから、もう本當に構はないよ。』
『今度こそ氣をつけます。』
と私も懲りた。三十を越して然う然う腰が据らなくては困る。
『何うして長續きがしないか、考へて見たことがあるかね？』
『さあ。』
『然う度々首になるからには、何か道理がある筈だよ。』
『不可抗力です。』
『いや、違ふ。寧ろ君の方が不可抗力だ

らうと熊は默つてゐる。
『何ういふ意味ですか？』
『否應なしに君の方から切らせるのさ。』
『そんなことはありませんよ。』
『上への努め方が足らない。』
『然うでせうか？』
『學生時代から當局を當局と思はないやうな風があつたよ。』
『……』
『二年の時、ストライキを起したらう？』
『先生、あれはもう時效にかゝつてゐます。』
『いや、あゝいふ反抗心が自然に現はれるんだよ。』
『自分ぢや温厚篤實の積りですけれど。』
『何あに。』
『相變らず信用がありませんな。』
『君は日本の歴史では誰が一番好きだね？』
『さあ。』
『徳川家康は何うだい？』
と三好さんは妙なことを訊き始めた。
『あんな狸親爺は大嫌ひです。』
『それがいけない。家康公の嫌ひなものは大抵成功しないよ。』
『そんな統計があるんですか？』
『成功者の嫌ひなものが成功する筈はない。』
『御道理です。』
『光秀は何うだね？　明智光秀は？』
『さあ。』
『有りのまゝを言つて見給へ。』
『好きです。』
『いけないね。光秀の好きなものは大抵成功しない。』
『おや〳〵。』
『熊野君、考へどころはこの邊だよ。』
『はあ。』
と私は頷いた。世話になり通しだから無理を言はれても仕方がない。
『君は小才が相應利く。』
『はあ。』
『御機嫌を取らうと思つてかゝれば、隨分取れるんだ。』
『はあ。』
『もつと上へ努めるやうにして見給へ。屹度重用される。』
『大にやります。』
『同輩には何處へ行つても可愛がられるんだらう？』
『迚も評判が好いんです。』
『下には何うだね？』
『さあ。下は小使と給仕丈けです。』
『成程。ハツハヽヽ。』
『その度に新規になりますから、いつまでたつても一番下つ端です。』



『動く石には苔がつかない。』
『確かに然うです。役がつきません。』
『この調子で行くと、平社員のまゝで頭が禿げてしまふよ。詰まらないぢやないか？　今度こそは腰を据ゑ給へよ。』
と三好さんは懇切に尚ほ種々と戒めてくれた。
さて、現在の會社は釀造會社で、規模頗る宏大だ。清涼飲料もやるが、主としてビールを拵へる。冷藏室へ行くと、社員は幾らでも飲める。それに待遇も悪くない。今まで入つた中で一番景氣の好い會社だ。私は最初庶務だつたが、新聞社にゐて筆が立つといふ評判から、先頃宣傳部へ廻されて、主に廣告文案を扱つてゐる。その折、極く少々だつたが、俸給が上つた。これは私としては生れてから初めての經驗だつた。
『君は早いです。』
と同僚で殊に懇意な香川君が敬意を表してくれた。實はもうソロ／＼いけないのかと内心案じてゐたところだつたから、取り分けて嬉しかつた。
『おい。何うだい？　俸給が上つたよ。』
と私は大威張りで、妻に辭令を突きつけた。
『まあ！』
『お美津やあい！』
『オホヽヽヽ。』
『氣を確かに持てやあい！』
『オホヽヽヽ。まさか癪を起しもしませんけれど、驚きまし

たわ。』

『今度こそもう大丈夫だよ。』

『私、あなたの俸給が上るなんてこと、一生あるまいと思つてゐましたわ。』

『馬鹿にしちやいけない。』

『本當にお手柄よ。』

『本氣になればこの通りさ。』

『でも九年かゝりましたのね。』

『漸く認められたんだ。これから芽を吹く。』

『私、矢つ張り心配ですわ。』

『何うして?』

『餘り思ひがけないんですもの。あなたが大病をなさる前兆ぢやありますまいか?』

と妻は未だ第一印象が拔けない。

私は三好さんの忠告に從つて、大に上へ努めてゐる。上といつても、私達の地位では課長級までしか手が屆かない。社長や重役には社内で行き會つた時、最敬禮をする丈けだ。私に限らず、すべての下積みは此方から咫尺して眞價を認めて貰ふ機會がない。それは課長級の壟斷するところとなつてゐる。この故に彼等はドン〳〵出世する。此方はいつまでも取り殘される。



『社長や重役の家へは何はなくても宜いんですか?』

と私は新任早々香川君に訊いて見た。

『年賀に行く丈けです。』

『普段は御無沙汰ですか?』

『えゝ。全く交渉がありません。しかし社長の所へは近々機會がありませう。』

『これは有難い。何でですか?』

『令夫人が御病氣です。』

『お見舞ひですか?』

『いや、お葬式です。随分長いですから、もう最近でせう。』

と香川君は待つてゐるやうだつた。

『僕達は存在を認められてゐないんですな。』
『そんなことはないでせう。チャンと俸給を貰つてゐますから。』
『それは然うですけれど。』
と私は氣がついて控へた。こゝだ。相手構はずに不平を言ふなと三好さんから戒められてゐる。
香川君とは机が並んでゐたから、直ぐ懇意になつた。私は用心しながら話す。先方は故參だから遠慮がない。
『毎日斯うやつてセッセと働いてゐても、下積みは詰まりませんな。』
と或日香川君の方から不平を言ひ出した。
『私なんか下積みの下積みですから。』
『ハッハヽヽ。』
『君は幾らでお出になつたんですか？』
『八十圓です。』
『それなら特別好い方ですよ。學校を出たばかりのものは六十五圓です。』
『はゝあ。私の下にまだ下があるんですか？』
『ありますとも。』
『尤も私は學校を出てから、もう十年以上になります。』
『今まで矢張り會社ずけでしたか？』
『いや、新聞社だの雜誌社だのつて、方々歩きましたよ。』
とつい告白して、私は急に口を噤むだ。方々で首になつたことを喋るなと言はれてゐる。
『世の中の荒浪に揉まれましたね。』
『はあ。』
『しかしこゝは大きいですから、清濁併せ飮むつて具合で、首なんてことは滅多にありません。』
と香川君はもう察してしまつた。
『勤め運の悪いものは仕方ありません。まあ〳〵、こゝで拾つて貰つたのを振り出しに、下積みから仕上げます。』
『八十圓なら必ずしも下積みぢやありませんよ。』
『しかし大抵の人は上でせう。』
『それは上には上があります。課長だつて上を見れば果しがありません。重役連中は半期に四五萬ですからね。』
『はゝあ。』
『ガラマサどんは十萬からですよ。』



『社長ですか？』
『えゝ。』
『ビールを飲ませて、世間を酔つ拂はせて、うまい話ですな。』
『本當に。』
『何うです？　冷藏室へお供しませうか？』
『晝から參りませう。』
『此方だつて働いてゐるんですから、飲むぐらゐの權利はありませう。』
と私は初めて冗談を言つた。
『ガラマサどんは勳三等ですよ。』
『それは承はりましたが、何んな手柄があつたんですか？』
『矢つ張りビールですよ。』
『ビールを拵へて同胞を酔つ拂はせて、勳章が貰へるんですか？』
『それは半面觀に過ぎません。國家の自供自足といふ點から見ると豪いものです。國產奬勵の意味からでせう。ガラマサどんがビールを拵へなければ、外國品が入つて來て、日本の金が海外へ出てしまひます。』



『成程。』
『國家事業の積りでやつてゐるんです。』
『これは驚いた。』
『しかし昨今のガラマサどんにはそれぐらゐの意氣込みがありますよ。勳三等を貰つてから、悉皆人格を上げてしまひました。』
『ガラマサどんてのは大將の綽名ですか？』
『えゝ。』
『何ういふ意味ですか？』
『蟹のことです。』
『はあ？』
『蟹です。蟹に似てゐるでせう？　大將の體恰好が。』
『成程。』
『勳三等になつた時、社員が祝賀會を催したんです。大將、大喜びでした。酔つ拂つて、歌ひ出したんです。上の句は忘れてしまひましたが、「ガラマサどんの横這ひ這ひ」つてんです。』
『はゝあ。』
『ガラマサどんの横這ひ這ひ、キンキラキンのキンキラキン。』

『成程。そんな恰好をしたんですか？』
『えゝ。如何にも蟹らしいでせう。それに體つきが似てゐますから、以來ガラマサどんで通つてゐます。』
『何處の言葉ですか？』
『熊本の方言ださうです。大將は熊本の產です。』
と香川君はガラマサどんの由來を說明してくれた。
然う聞けば皆ガラマサどんと呼んでゐる。無論、陰へ廻つてのことで、面と向つては社長樣々だ。
『昨夜は到頭ガラマサどんに取つ捉まつてしまつたよ。』
『金曜の晩に行くものぢやない。大將、手ぐすね引いて待つてゐるんだ。』
『道理で初めから取り持ちが好いと思つたよ。』
『お師匠さんが來てゐたらう？』
『うむ。』
『何をやつたい？』
『例によつて日吉丸三段目さ。君、立派な見臺を拵へたよ。』
『ふうむ。』
『上下も出來た。』
『着て語つたかい？』
『うむ。でつぷりしてゐるから、如何にも太夫さんらしい。』
『イヨ／＼本式だね。相勤めまする太夫、竹本蟹太夫か？ハッハ、、。』
『ハッハ、、。』

と課長同志が話し合つてゐた。
私は早速香川君に、
『ガラマサどんは義太夫を語るんですか？』
と訊いた。
『やりますよ。』
『聞いたことがありますか？』
『えゝ。宴會には必ず出ます。あれで悉皆醉が覺めてしまひます。尤もそれを察してゐるのか、酒丈けは全部社長持ちです。』
『そんなに下手なんですか？』
『横這ひ／＼の方です。しかしガラマサどんが語り出したら油斷はなりませんよ。』
『何故ですか？』
『秘書の松木君が見張つてゐて、居睡りをしたり欠伸をしたりするものを手帳につけます。』
『後から報告するんでせう？』
『えゝ。勤務上の參考としていつまでも殘ります。』
『ボーナスに影響しますか？』
『そんなこともありませんが、俸給を上げません。』
『尚ほいけない。』
『皆知つてゐますから、固唾を飲んで聞いてゐて、終ると直ぐに大喝采です。大將、それを自分がうまい所爲だと思つて、大喜びをします。』

『後生の好い人ですな。』
『えゝ。やかまし屋ですけれど、斯ういふ具合に間の抜けたところがありますから、決して憎まれません。德人ですよ。』
と香川君は社長を推賞した。
その後、私は新年宴會で社長の義太夫を拜聽した。香川君の言つた通り、三味線が鳴り出すと共に皆かしこまつた。語り物は寺小屋の段だつた。それもサハリ丈けの座興でない。本式に源藏の戻りからやる。
『すまじきものは宮仕へ……』
と來た時、私は成程と思つて涙を流した。秘書が帳面につけるとすれば、私の勤務成績は滿點だつたらう。
しかし社長は實際人氣がある。義太夫ばかりでない。何をやつても、ガラマサどんが會社隨一だ。ゴルフは重役連中丈けの娯樂で下積みの端倪すべきところでないが、社長が一番強いらしい。玉突も天狗で、屋敷に玉突臺を三つまで備へてゐる。社長の將棊については、同僚の小畑君が、
『ガラマサどんは神さまですよ。』
と感歎した。
『何故ですか？』
と私は妙に社長に興味がある。
『初段です。』
『それぢや本當に強いんですね。』
『いや、弱いんです。免狀を買つたんです。』
『成程。』
『會社では工場長の鬼島さんが一番強いんですが、社長と差すと、いつも大汗です。』
『それぢや社長の方が強いんでせう。』
『いや、うまく負けてやるのに骨が折れるんです。』
『成程。』
『僕でもうつかり差してゐると勝ちますよ。』

『君もやるんですか？』
『えゝ。大會へ出ようと思つて、去年から始めたんです。』
『この間のですね？』
『えゝ。毎年社長の屋敷でやるんです。鬼島さんが二等賞を取りました。時價百圓からする骨董品を頂戴しましたよ。』
『一等賞は誰でした？』
『そこが面白いんです。「一等賞は何うせ我輩に定つてゐる。我輩のものを我輩が貰つても仕方がないから」つて、初めから缺員にしてゐます。』
『成程。』
『皆態と負けをしますから、何うしたつて社長が一等になります。』
『それが分らないんでせうか？』
『神さまですよ。あれ丈け部下を信じてゐてくれると思ふと、僕達は犬馬の勞を厭ひません。矢つ張り將に將たる人ですよ。』と畑君も社長に敬服してゐた。
ところでガラマサどんのことよりも自分のことだ。宣傳部へ



廻つて、俸給の上つたのを力に、一安心すると間もなく、甚だ好ましからぬ形勢になつて來た。或日庶務課長の中島さんが、
『熊野君、一寸。』と呼んだのである。
『話したいことがあるから、應接室へ來てくれ給へ。』
『はあ。』
と答へて連れ立つた時、私はもう落膽した。以前この手でやられてゐる。
『熊野君、君は小説を書くつてね？』と中島さんは果して變な事を訊いた。
『さあ。』
『何とかいふ雜誌へ出して懸賞を取つたつてぢやないか？』
『あれは記者をしてゐた頃の友人がやつてゐるんで、つい勸められたんです。』
『何を書いたね？』
『探偵物です。』
『ふうむ。』
『しかし會社で書いたんぢやありません。』
と私は辯解を始めた。
『無論家でやるんだらうけれど、あれは時間のかゝるものかね！』

『はあ。』
『會社でやるとしたら、一日に何枚書けるだらう?』
『事務と違ひますから、會社では書きません。』
『しかし假りに書くとしたら?』
『假りにも書きません。』
『君、心配は要らないよ。』
『はあ。』
『他の人は何と言ふか知らないが、僕は會社の宣傳部に君のやうな文士がゐるのを結構だと思つてゐる。』
『何うぞ宜しく。』
『假りに家で書くとしたら……』
『本當に家で書いてゐるんです。』
『それぢや家では一晩に何枚出來るね?』
『五六枚でせう。』
『案外捗の行かないものだね。五枚といふと、月に百五十枚。』

と中島さんは考へ込むだ。
『……』
『探偵小説と立志傳は書き方が違ふだらうね?』
『さあ。』
『君はもつと堅いことは出來ないのか?』
『はあ?』
『例へば青年訓とか成功要訣とかいつたやうなものさ。』
『記者時代には可なり書きました。』
『この頃はやらないかね?』
『はあ。成功しない人間が書いたつて賣れません。』
『成程。ハッハ、、、。』
『……』
『しかし昔取つた杵柄だから、材料さへあれば書けるだらう?』
『はあ。』

『君のは好い隠し藝だよ。碁や將棊よりも氣が利いてゐる。』
『……』
『いや、忙しいところを有難う。』
『何う致しまして。』
『この話は何れ沙汰のあるまで內聞にして置いてくれ給へ。』
『はあ。』
『それぢやもうこれで……』
『中島さん。』
『何だね？』
『僕が小說を書くのが問題になつてゐるんでせうか？』
『そんなことはないだらう。本務に差支ない限り、何をしたつて構はない筈だ。』
『餘暇を利用してゐるんですけれど、これから氣をつけませう。』
と私はそれとなく穩便の計らひを願つて引き退つた。
さあ、心配だ。
『あなた、何うかなすつて？』と妻は直ぐに感づいた。



『每度のことで面目ないが、又いけないかも知れないんだ。』
『厭ですよ、あなた。厭ですよ、あなた。』
『十中七八まで又不可抗力らしい。』
『何か前觸れがございましたの？』
『うむ。おれは能く〳〵勤めの運が惡い。』
と私は悄げ返つて、一部始終を物語つた。
それから一週間たつたが、何とも沙汰がない。中島さんは相變らず機嫌よく口をきいてくれる。宣傳部長からは來月の仕事について相談があつた。出張の內命さへ下つた。首にするものなら、そんな筈はありやうがない。して見ると、あれは中島さんが一存で注意をしてくれたのだらうと私は少し安心した。二日三日と何事もない。好い鹽梅だと思つてゐるところへ、
『熊野さん、社長さんが御用でございます。』
と言つて、給仕が呼びに來た。
『へえッ』
と私は忽ち飛び上つた。（つゞく）

之ぞ佐々木邦氏得意の壇場！　興趣限りなき勳三等の社長に數多の社員を配して事件は如何に展開するか？　社長ガラマサどんとはそも如何なる人物か？　凡人か非凡人か？　見るべきは次號！　必ずや家庭の大騷ぎ大評判となりませう。

途上美談

おでんの代

小酒井不木（遺稿）

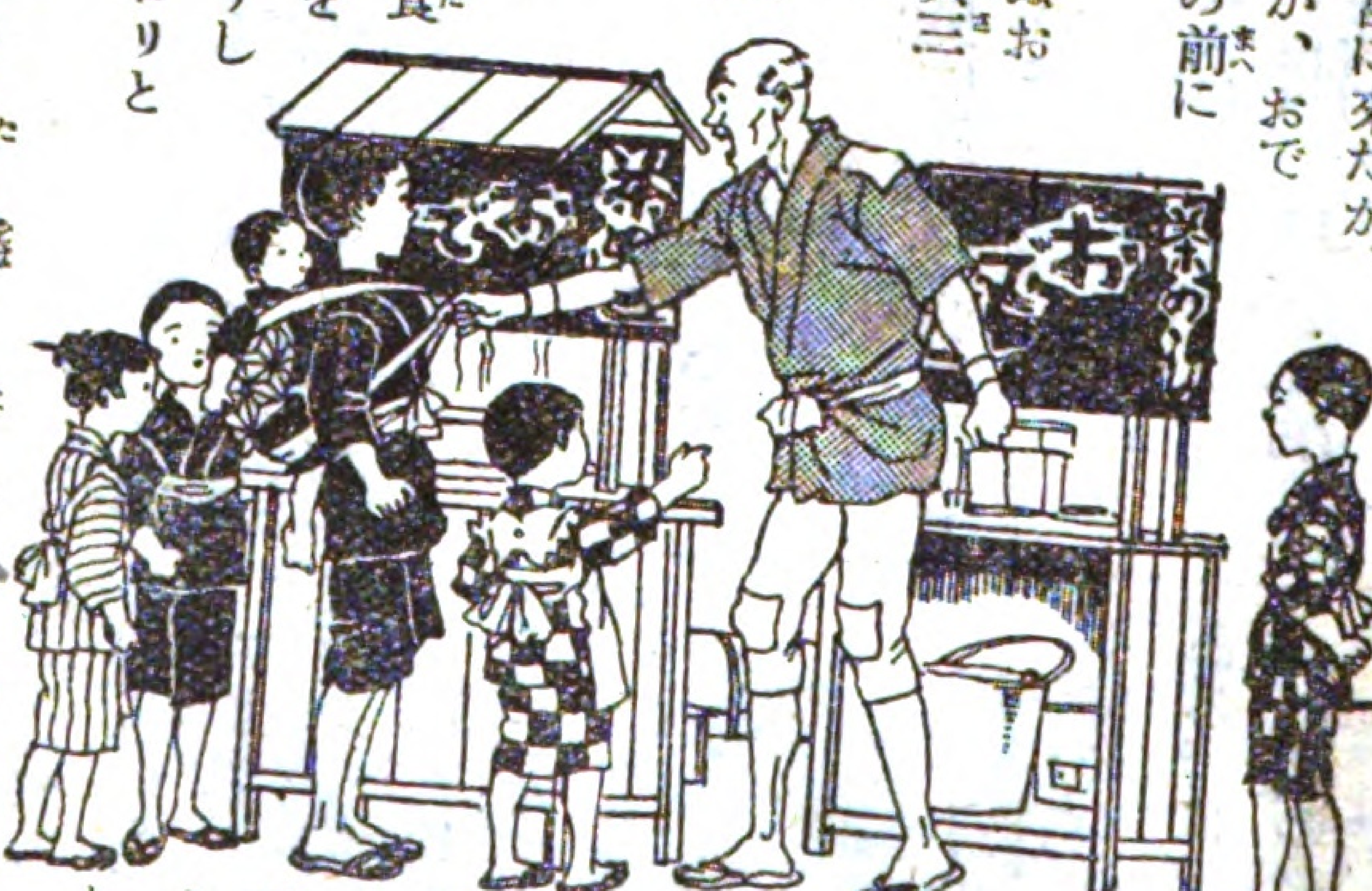
私がまだ十歳にならぬ前の事である。

私の郷里は尾州蟹江在であるが、毎年舊暦八月に神祭が行はれるならはしだつた。その年は、例年にない豐作であつたから、彼岸過ぎてから七日目の祭りはひどく賑はつてお宮の境内にはいつもよりも多く小商人が菓子や玩具の屋臺店を張つて、子供たちを迎へた。駄菓子の外に、甘酒とおでんが子供たちの食慾をそゝつた。ことに、串にさしたこんにやくの味噌つけは、子供を引きつけずにはおかなかつた。

さて、隣りの村に、十二歳の與三と呼ぶ白痴があつた。別に狂暴性は帶びて居なかつたので、人人は可愛想に思つて、畑のものなどを無斷で食べることもあつたけれど、大目に見てやるのであつた。

その日、與三は、赤ん坊を背負はされてお宮に來たが、いつの間にか、おでんの屋臺店の前に來て居た。

何も知らぬおでん屋は、與三が臺のそばへかきわけて出た時、皿に一串盛つて前に差出した。與三は忽ち貪り食べて、今一本を要求した。さうして二本目もペロリと平げた。



ところが、おでんを食べ終つた與三は、言ふまでもなくそのまゝ立ち去りにかゝつた。驚いたのはおでん屋のおやぢである。

『おい〳〵、錢をおいて行かぬか。』

『……』

『一本五厘づつだから合せて一錢、さあそこへ出しな。』

それでも與三は返答をしない。ただにたにた笑つて居るだけであつた。

『うぬ！』

から叫んだかと思ふと、おやぢは血相變へて、前方へまはり、與三を引つとらへて、あはや拳骨を振り下さうとした、その時である。『ぢいやさん、待つておでんの代は坊が拂ふから與三を堪忍してやつとくれ。』

から言つてとめたのは與三の前に居た、まだ學校へあがらぬ彦坊であつた。

『なに、坊が拂ふ？　坊やはこいつの親類か。』

『いゝや、親類でないけれど、與三が可哀さうだから、坊も母さんにねだつて一錢もらつておでんを買ひに來たけれど、坊は食べなくも辛抱出來るから。』と、一錢銅貨を老人の手に渡した。

彦坊が、村で一ばん貧乏の、常八といふ水呑百姓の子であることを、おでん屋のおやぢはもとより知らないけれど、祭りだといふのに破れた着物をきて居るみすぼらしい姿を見ては、たしかにそれが貧乏な家の子であることを知つたらしかつた。それと同時に、附近には幾人も、年上の子供が居るに拘はらず、一ばん小さな子供が、かうした健氣な申出をするのは、流石に強く心を打たれたらしく、

『こつちへおいで！』

といつたかと思ふと、おやぢは彦坊の手を引張つて、やがて皿の上に、おでんの串を山盛りにして彦坊に振舞ふのであつた。（終）

時勢に鑑み同胞に訴ふ



内閣總理大臣　濱口雄幸

思想に經濟に今や國家重大の時國民は勉めて良き雜誌書籍に親しみ修養努力せんことを望む。



元內閣總理大臣　高橋是清

子供の躾方でも、女中や番頭の使ひ方でも、決して叱つちや不可ない。自分から、これは善くない事だと悟らせる事が大切だ。

國家だつて其の通り、國民が自覺する事が根本だ。今日の國家の狀態は容易な事では解決出來ない。大奮發が必要だと云ふ事がはつきり胸に入りさへすれば、國民は自然緊張するなつて云つたつて、緊張せずにはゐない筈だ。所謂、節約でも無駄除きでも、國民の心持が其處迄行つて始めて徹底する。附燒刄では駄目だ。

『國民全體が眞に國家の現狀を自覺して起つ』此の確固たる精神こそ國難打開の鍵であり、國家百年の計をなすものであると我輩は信じてゐる。



神學博士　綱島佳吉

輓近我精神界の混沌と其不眞面目なるが爲めに歸趨する處を知らざる刹那的社會相は我國民生活の一大缺陥である。自己內省より天を敬畏し、眞理と正義に對する確乎不動の信念を持して進むところの深い精神的基礎がなくして建てられる文化の高塔は、シロアムの櫓か將た又バベルの塔と異なる處がない。

國民生活の精神的基礎は、深い悔改めと更生を要する、もしこゝに我國民が覺醒し復活して來たならば、一切の政治も、教育も、經濟的事業も新生して來るのである。偉大なる精神的革命、それは天の我國民に對し求むる處であると信ずる。

途上美談

おでんの代

小酒井不木（遺稿）

私がまだ十歳にならぬ前の事である。

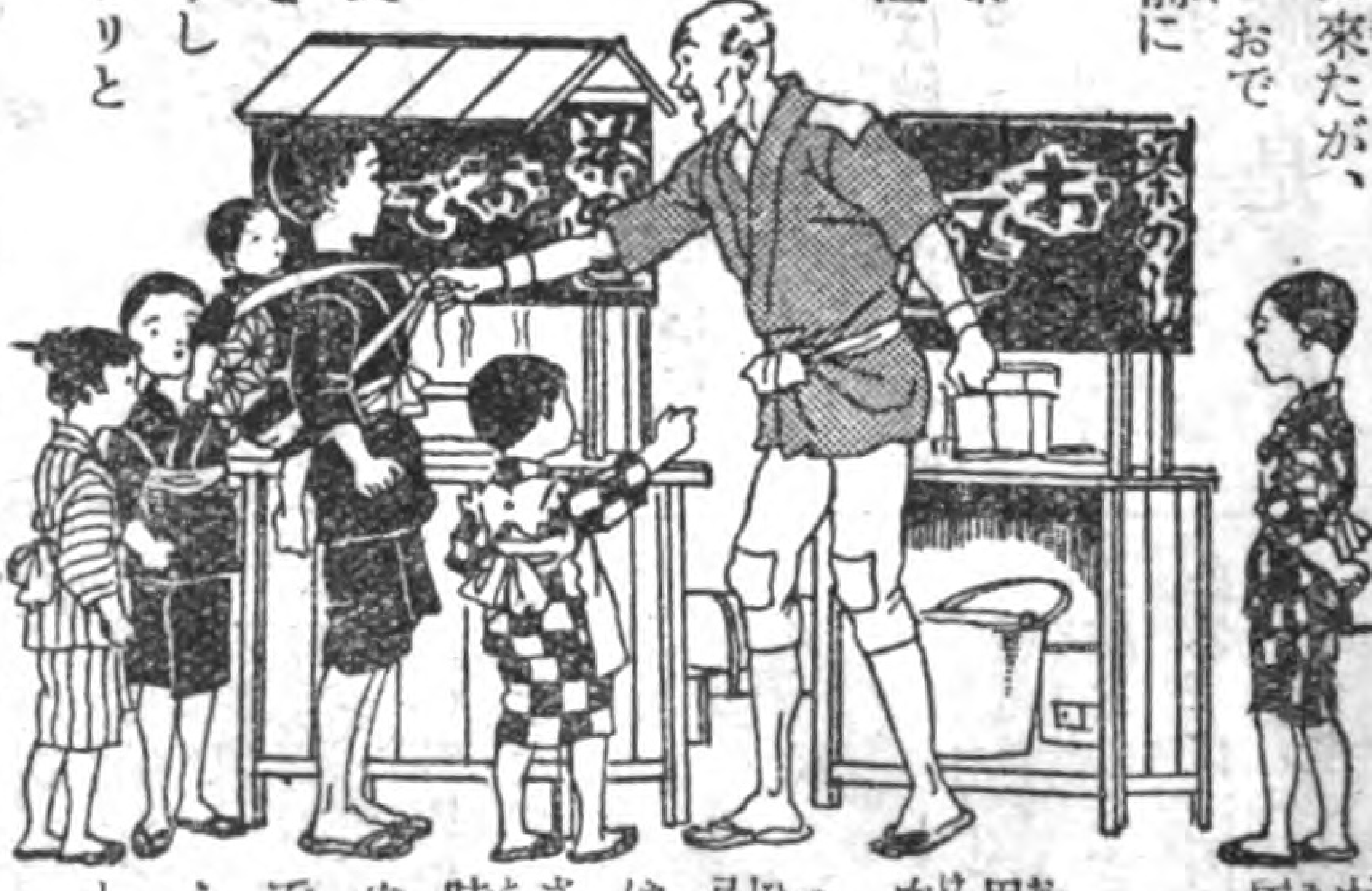
私の郷里は尾州蟹江在であるが、毎年舊暦八月に神祭が行はれるならはしだつた。その年は、例年にない豊作であつたから、彼岸過ぎてから七日目の祭りはひどく賑はつてお宮の境内にはいつもよりも多く小商人が菓子や玩具の屋臺店を張つて、子供たちを迎へた。

駄菓子の外に、甘酒とおでんが子供たちの食慾をそゝつた。ことに、串にさしたこんにやくの味噌つけは、子供を引きつけずにはおかなかつた。

さて、隣りの村に、十二歳の與三と呼ぶ白痴があつた。別に狂暴性は帯びて居なかつたので、人人は可愛想に思つて、畑のものなどを無斷で食べることもあつたけれど、大目に見てやるのであつた。

その日、與三は、赤ん坊を背負はされてお宮に來たが、いつの間にか、おでんの屋臺店の前に來て居た。

何も知らぬおでん屋は、與三が臺のそばへかきわけて出た時、皿に一串盛つて前に差出した。與三は忽ち貪り食べて、今一本を要求した。さうして二本目もペロリと平げた。



ところが、おでんを食べ終つた與三は、言ふまでもなくそのまゝ立ち去りにかゝつた。驚いたのはおでん屋のおやぢである。

『おい〳〵、錢をおいて行かぬか。』

『……』

『一本五厘づつだから合せて一錢、さあそこへ出しな。』

それでも與三は返答をしない。たゞにたにた笑つて居るだけであつた。

『うぬ！』

かう叫んだかと思ふと、おやぢは血相變へて、前方へまはり、與三を引つとらへて、あはや拳骨を振り下さうとした、その時である。『ぢいやさん、待つておでんの代は坊が拂ふから與三を堪忍してやつとくれ。』

かう言つてとめたのは與三の前に居た、まだ學校へあがらぬ彦坊であつた。

『なに、坊が拂ふ？　坊やはこいつの親類か。』

『いゝや、親類でないけれど、與三が可哀さうだから、坊も母さんにねだつて一錢もらつておでんを買ひに來たけれど、坊は食べなくも辛抱出來るから。』と、一錢銅貨を老人の手に渡した。

彦坊が、村で一ばん貧乏の、常八といふ水呑百姓の子であることを、おでん屋のおやぢはもとより知らないけれど、祭りだといふのに破れた着物をきて居るみすぼらしい姿を見ては、たしかにそれが貧乏な家の子であることを知つたらしかつた。それと同時に、附近には幾人も、年上の子供が居るに拘はらず、一ばん小さな子供が、かうした健氣な申出をするのは、流石に強く心を打たれたらしく、

『こつちへおいで！』

といつたかと思ふと、おやぢは彦坊の手を引張つて、やがて皿の上に、おでんの串を山盛りにして彦坊に振舞ふのであつた。（終）

時勢に鑑み同胞に訴ふ



内閣總理大臣 濱口雄幸

思想に經濟に今や國家重大の時國民は勉めて良き雜誌書籍に親しみ修養努力せんことを望む。



元内閣總理大臣 高橋是清

子供の躾方でも、女中や番頭の使ひ方でも、決して叱つちや不可ない。自分から、これは善くない事だと悟らせる事が大切だ。

國家だつて其の通り、國民が自覺する事が根本だ。今日の國家の状態は容易な事では解決出來ない。大奮發が必要だと云ふ事がはつきり胸に入りさへすれば、國民は自然緊張するなつて云つたつて、緊張せずにはゐない筈だ。所謂、節約でも無駄除きでも、國民の心持が其處迄行つて始めて徹底する。附燒刃では駄目だ。

『國民全體が眞に國家の現状を自覺して起つ』此の確固たる精神こそ國難打開の鍵であり、國家百年の計をなすものであると我輩は信じてゐる。



神學博士 綱島佳吉

輓近我精神界の混沌と其不眞面目なるが爲めに歸趨する處を知らざる刹那的社會相は我國民生活の一大缺陷である。自己内省より天を敬畏し、眞理と正義に對する確乎不動の信念を持して進むところの深い精神的基礎がなくして建てられる文化の高塔は、シロアムの櫓か將た又バベルの塔と異なる處がない。

國民生活の精神的基礎は、深い悔改めと更生を要する、もしこゝに我國民が覺醒し復活して來たならば、一切の政治も、教育も、經濟的事業も新生して來るのである。偉大なる精神的革命、それは天の我國民に對し求むる處であると信ずる。



明治神宮宮司
陸軍大將
一戸兵衛

昔日と今日とは世相が著しく變化してゐる。併し、孔子の言はれた『人間若い時には色を戒め、壯なる時には人との爭ひを戒め、年老いては利慾を戒める』――この事は數千年後の今日に於ても毫も變らない。故に此等は強ひて抑制する事なく、寧ろ青年には性の教育を、壯者や老人にはその爭心や利慾心を夫々適當に指導轉向して、自他共同の幸福を增進する樣にする事が肝要である。



評論家
山田わか

人間社會の第一義の理想は家庭より生れます。愛の感念、奉仕、自己犧牲など云ふ德は皆家庭に於て培はれます。子供の時、それ等の精神が家庭に於て培はれ、成人してから其れを社會的に應用することがとりも直さず人道主義の實行です。

して見たならば、家庭は社會生活の理想と模範を發達させ、且つ、取次ぐ處でなくて何でせう。過去に於ては、家庭は文明の搖籃でありました。そして、現代人が今社會に實現しようとしてゐるものは何でせうか？　社會を大家庭化しようとしてゐるのではないでせうか？　一國の主宰者は國民の父、又は母、國民は凡て同胞として其の實を擧げて行かうとしてゐます。そして、これは、社會理想の製造所及び保存所としての家庭の重用さを說明するに充分だと私は思ひます。男も女も先づ家庭へ歸らねばなりません。



貴族院議員
花井卓藏

爲政者は產業政策を確立し人心を萎靡せしめざる事を心懸くべし。



文部大臣
小橋一太

國民精神を緊張し良風美俗を作興するは刻下の急務である。此際健全なる思想奮鬪の精神を涵養する雜誌書籍の普及は國家のため喜ぶべきことである。

日本の學者は今何を研究してゐるか

風味の研究

農學博士　澤村眞



生命を繋ぐ養分たる蛋白質、脂肪、澱粉などには全く味がない。然らば食物の風味は何に由つて生ずるかと云へば、糖類の甘味や酸類の酸味や食鹽の酸味などはよく知られて居るが、その他はまだ不明瞭である。

自分は年來食物の風味に就て研究しつゝあるが、風味の生ずる原因が明瞭にならば不味い食物も忽ちにして美味となすことを得て、人は安價に美味を攝つて生活し得るやうになり人生の幸福は大に增進するであらうと思ふ。

ドルメン

文學博士　鳥居龍藏



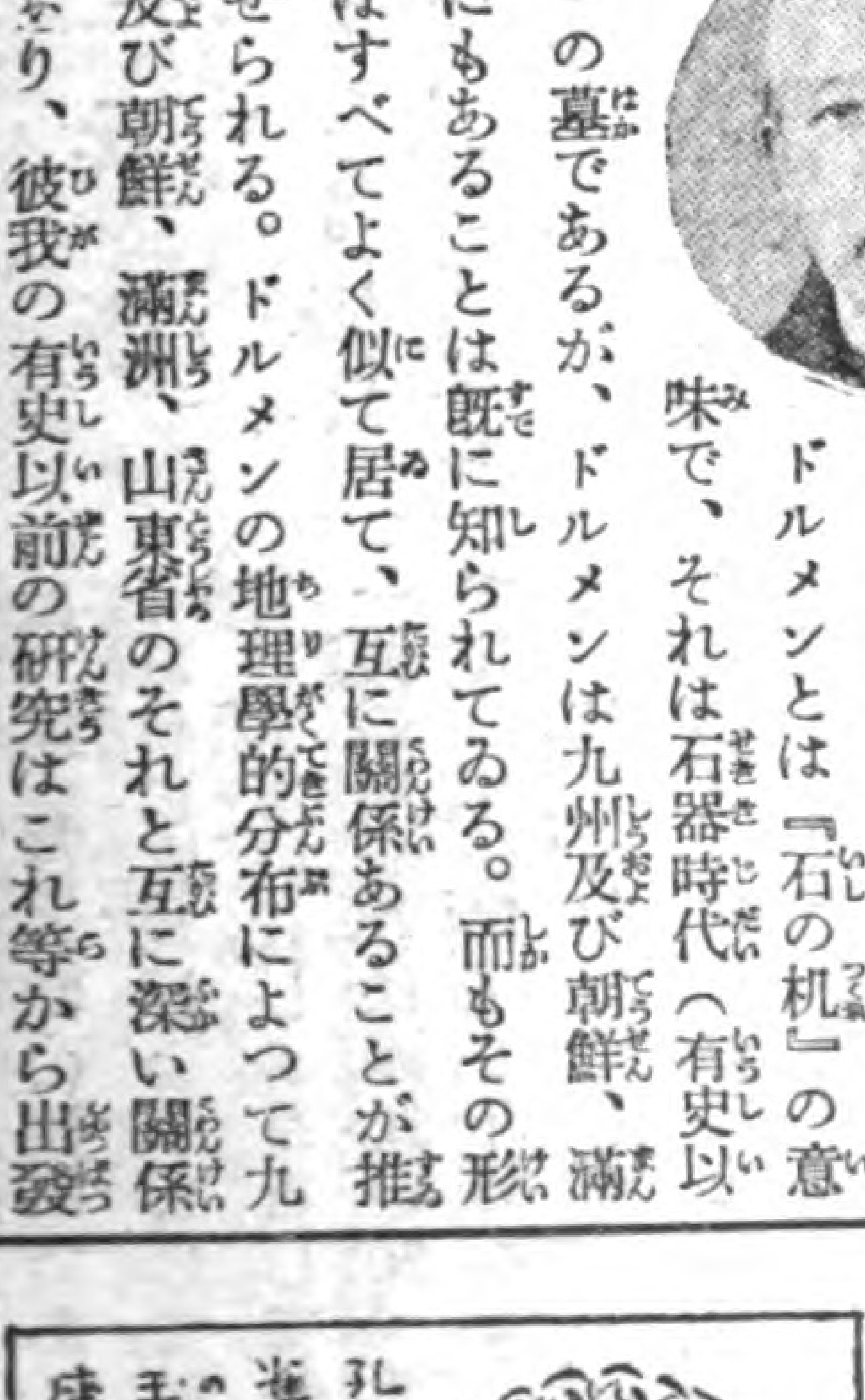
私は昨年十月支那山東省に調査旅行を試みた際、ドルメンを發見して實に愉快であつた。

ドルメンとは『石の机』の意味で、それは石器時代（有史以前）の墓であるが、ドルメンは九州及び朝鮮、滿洲にもあることは既に知られてゐる。而もその形式はすべてよく似て居て、互に關係あることが推知せられる。ドルメンの地理學的分布によつて九州及び朝鮮、滿洲、山東省のそれと互に深い關係があり、彼我の有史以前の研究はこれ等から出發して見ねばならぬと思ふ。

海外面白ニユース

一個一億圓の寶物

世界中での寶石持ちだと云はれてゐるペルシヤ王は、此程、所藏寶石全部の價格が現在幾何位かを確かめる爲めに、フランス人及びオランダ人の寶石商より成る委員會設置を命じ宮殿内の寶石は勿論主なる寶物を評價せしめた。ところが驚くべし、一流の寶石商が懸命に値ぶみした結果寶石全部の價格は約三億四千萬圓といふところに落ち付た。



孔雀の玉座　一億圓

これらの寶石といふのはエメラルド、ダイヤモン

病氣の豫防



醫學博士　高野六郎

醫學の目的は人類健康の保護向上である。病めるものを治するのは傷ける健康の回復であつて此の方面を擔當する治療醫が一應必要である事は勿論だが、それ以上に大切なものは豫防醫學であつて、未だ病まざるに之を豫防する事が出來たなれば人類の幸福、國民の繁榮の上に非常な効果を擧げ得るに相違ない。

余の現下研究の對象は、豫防醫學の立場より日本人の最も災されてゐる消化器傳染病と寄生蟲の二野蠻病の撲滅である。

上水道下水道



工學博士　草間偉

本邦に於て上水道は可成り普及して來たが小都市や町村にては未だ充分でない。故に今後は如何にすれば經濟的に安全な上水道が出來るか、精しく云へば從來の型に嵌まつた緩速濾過の設計のみでなく水源の選定、濾過、殺菌方法、配水管の材質及び經濟的直徑等を研究して見たいと思ふ。下水道は其性質上投資に伴ふ收入が無いので衞生上は肝要であるが上水道の樣に普及して居ない。併し大都市に於ては河海汚染問題を生じ其處理方法を講ぜねばならぬ。之も私目下の研究問題に屬する。

鼠咬症に就て



醫學博士　高木逸磨

鼠咬症は古來日本に多い。鼠に咬まれた場合、多少の時日を經て高熱を發し且つ身體に痛みを伴ふ腫れを生ずる。この病原體は鼠咬症『スピロヘータ』であるが家鼠の一〇％は之を有する。『サルバルサン』は本症の特効療法である。痲痺性痴呆の療法に『マラリヤ』の人工感染法が行はれつゝあるが、夫に代へて『スピロヘータ』の注射を試みんとする學者が増加した。私は動物實驗に於て黴毒は鼠咬症『スピロヘータ』によつて、痲痺性痴呆にはサル・バルサンによりて完全に治癒する事を確證した。これが果して人體に於て如何なる成績

ド、ルビー、眞珠等を網羅し、その中でもダリア・イ・ヌール（光の海）と稱するダイヤの如きは世界無比の逸品だといはれてゐる。またエメラルド中でも大きいのは價格にして三十五萬圓位。王が晴れの儀式に用ふる首飾りの寶石類が約二十萬圓だといふ。なほ寶物中の横綱格は嘗て印度デリーのモガル王國から分捕つた「孔雀の玉座」で今日の價格にして少くとも一億圓以上のものだといふ。

百六十八人を喰つた虎

最近、印度ベンゴール州で四年間に百六十八名の人間を喰つた獰惡な牝虎を射止め、大いに男を上げたゲストといふ人の手柄話は非常に興味深い。以下はゲスト氏の直話である。

『私はその牛餌から四十ヤード程離れた大木の上に身をかくして待ちかまへてゐた。雨はしとしと降りつゞけて照尺をぬらすので絶えず之を拭いて狙ひを誤らぬやうにしなければならなかつた。三十分程待つて居ると、草叢の中にガサガサ音がし始め、やがて大きな黄色の二本の前

示すかは今後の研究と實驗とに俟たねばならぬ。

石炭から石油

工學博士　大島義清



石炭を石油に變へると云ふと少し奇拔に失すを樣であるが、實は左程困難な事ではないので、石炭を粉末にして水素を作用させると立派に石油になるのである。日本の石油は追々產出が減退して來る上に新しい油井の見込も少ない樣である。然し石炭はまだ〱無盡藏であるから、之を以て石油を造るならば石油の少ない事は少しも心配にならない。實驗室だけでなく一日も早く之を工業的になし得る樣、目下鋭意研究中である。

蛔蟲研究に沒頭

理學博士　小泉丹

教室の人達と共に私が專ら從事してゐるのは蛔蟲の研究です。蛔蟲は我國に於ける最も普通な人體寄生蟲です。そして其の病害驅除等に就て、盛んに書かれたり、說かれたりしてゐますけれども、其等には誤解が多く、また根柢のないことが盛んにいはれてゐると、私には思はれます。私は、私共の教室の作業として、蛔蟲の病害作用の根本からの研究計畫を立てて着手して既に四ヶ年近くになります。教室員諸君の熱心によりまして、既に約二十篇の業績を公にすることが出來ました。其等の概要は、汎太平洋學術會議と、今夏の日本學術協會の席上で述べて置きました。今後數年に亙つて努力を續けて、五六十篇の業績を作り上げたならば、日本にとつて最も重大な意味のあるもの丶一つであるこの問題に何かの解答を出すことが出來る資料が出來ようかと冀つてゐます。近頃世間に見られる種々の立場の人達の態度を苦々しいことに思ひながら、地味な作業に苦心してゐる次第です。



スペクトル

理學博士　長岡半太郎



同位元素のスペクトルの違ひを研究してゐます。是に由つて原子核の差違を探る手段を得るものと信じます。

脚が現れると見る間もなく、小牛のやうな猛々しい大虎が巖の上に現れてその生餌を見下して居る。私は此時だと、全身の力をこめて狙ひを定め、一發切つて放したが、それがうまくその頭に命中した。虎は立つて居た巖の上でたじ〱とよろめいたがやがて小山の崩るかのやうにドサリと音を立ててうつ伏しに倒れて其まゝ息が絶えた』



女の過多に惱む佛國

歐洲大戰に數百萬の壯丁が犧牲となつた爲め、此戰に加はつた諸國は結婚年齡の女が多過ぎるのに惱んで居るが、中にも英國及び佛國は殊に甚しく、佛國には年頃の女が男よりも二百萬名多いといふ。その爲め結婚媒介所は非常に繁昌して、またこれを目的とする雜誌がいく

心臓内の手術

醫學博士　池田孝男



外科醫學の最近の進歩は、人體の内で外科のメスの達せぬ臓器が無いまでになつた。胃癌を切り取つたり、膽石を取り出したりする腹の中の手術はもう珍しく無い事で、以前に不可とされた肺の手術も行はれ、腦や脊髓の腫物を取り去る手術も可なり盛に行はれる様になつた。唯我邦では一般の人に理解が無い爲未だ普及せぬだけである。更に驚くべきは心臓内に心臓鏡を挿し込んで中をのぞきながら心臓内部の手術することに成功した學者がある。但し、是は動物に就てゞあつて未だ人體に應用されるまでにはなつて居ないが前途ある面白い問題である。

昆布の有性生殖

理學博士　三宅驥一



コンブやワカメのやうな無性科植物は、これまで無性生殖のみで繁殖するものと考へられてゐたが、近年に至りフランスの植物學者ソーバジョー氏は、昆布科植物に有性生殖のあることを發見した。私は其の後間もなく、日本産の昆布科植物約九種につき研究した結果、悉く有性生殖によつて繁殖することを確めた。其他の研究としては、松柏類の受精、海藻類の生殖及び發生、植物細胞の減數分裂及び染色體の研究、植物の遺傳、人間の左利きの遺傳等である。

病原體の研究

醫學博士　草間滋



諸種の傳染病の病源體は、諸學者の不撓の努力によりて發見せられ、その豫防法や治療法も確定されましたが、今日尚ほ病源の決定に至らぬ病氣も甚だ多數殘れる狀況であります。人間の傳染病にても天然痘、狂犬病、發疹チフス、痲疹、御多福風等の病原體は何れも不明で學界の謎といはれてゐる次第です。

私は此方面の研究に沒頭して居りますが、病原體の發見に重要な役割を演ずる細菌の培養上に於て極めて有望な事實に遭遇し、着々研究の歩を進めつゝあります。

つも發行され、いづれも飛ぶやうによく賣れて居る。これ等の雜誌は極彩色のはでやかな表紙がついてあり、その表紙に美人の花嫁や、子供と遊んでゐる若い幸福な母の繪が載せてあり、また求婚廣告が多く掲載されてある。その廣告の代表的なものを擧ぐれば



『金髪美人、年齢は二十九、財産は五萬フラン、眞面目で温厚なる紳士と結婚を望む、年齢は問はず』『田舍に家を所有する中年の婦人、實業界より隱退して相應の財産ある人と結婚を希望す』等である。地方の新聞にもよく求婚廣告が出て居るが、それ等は自然農業に經驗ある壯丁を婿として求むるのが多い。中には幾月かの間、雇人として働いた後、見込があると見ればその娘を娶はすといふやうな廣告もある。


御隠居様
ゴインキヨサマ
麻生豊
1
寒イ〳〵コー寒クチヤコタエル
2
オジイサン遊バナイ？
3
子供ハ風ノ子ダ外デ遊ンデオイデ
オジイサンノ寒ガリ屋
4
オジイサン遊ンデヨー
オジイサンハ寒イカラ兄チヤント遊ンデオイデ


オヤヽコンドハ仲間ガ来タ
ニャーゴ
6
這入ッタラアトノ口ヲヨク塞イドクンダヨ
7
8
痛テ〜〜
猫メ コラシテヤラナイトクセニナルデテコイヤイ
10
オジイサンハヒドイヤボクタチト遊バナイデ猫ト遊ンデルンダモノ
11



世界的大驚異！　小說以上の事實談

ダイヤモンド洪水

小山莊一郎
さしゑ　富田千秋

はしがき

ダイヤモンドの洪水！

ダイヤモンドの洪水！

ダイヤモンドの大洪水が、今、阿弗利加大陸の一角から初まりかけてゐる。欣ぶべきか、はたまた呪ふべきか――兎まれ、素晴しい觸れ聲ではないか。

昨年の夏、阿弗利加から『驚嘆すべき金剛石坑が發見された。僅かバケツ一杯の砂からさへ、五カラット、七カラット、十カラットも金剛石が得られる』云々といふ報道があつたけれど、餘りに簡短過ぎて、その鑛區の位置すら曖昧であつたので、『眉唾ものだ』とばかりで、てんで相手にする者がなかつた。

ところが昨年から本年にかけて、英吉利の議會報告書や、南阿政府の公文書の中に、このとても話以上のダイヤモンドの大產地のことが、明かに載り初めた。

『さては、事實であつたのか』

と、消息通程、今更の如く驚き呆れたが、事實であるとすれば大變だ！　いふ迄もなく、そこで產出した金剛石が、ドン〱市場に送り出されると、世界の寶石相場は木ッ葉微塵に打碎かれてしまふのだ。氣が氣でないのは、寶石商ばかりではない。

『では、どんな樣子か？』

と早速調べて見て二度吃驚。とても話以上、とても想像以上の金剛石の大產地が、奇蹟的に存在してゐたのだ。

では、この驚くべき金剛石坑は如何にして發見されたか、奇々、怪々、事は小說以上である。

ブライトンの謎

南阿の金鑛市、ヨハネスブルグは、有機的に見れば南阿の鑛業の心臟であり、鑛山師達の巢でもある。そこには、鑛業に關係を持つ大小の企業家達の事務所が、軒を並べて殷賑を競つてゐるが、中にもエリック・ローゼンタル氏の鑛業事務所は、一際目立つ宏壯な建物だ。

恰度、食後の休憩時間と見えて、二三の事務員が、窓際に立つて外を眺めながら、雜談に耽つてゐたが、ふと事務所の前を行きつ戻りつしてゐる一人の男の擧動に目をとめた。

『おや！　變な奴がうろ〳〵してゐるぜ、あの樣子ぢや、どうやら此事務所に何か用事でもあるらしいが……』

『ナアに、例の奴さ――、その日のパンにも困るところから、新しい鑛脈を見附けたとかなんとか、出駄羅目なことを觸れ込んで、いくらかの小遣ひにでもありつかうと云ふのだらう、フフン、あれでも鑛物獵家の內だとよ』

『あはゝゝゝ』

鑛脈を搜して、當もなく山野を驅け廻る――鑛業の盛んな南阿には、土地柄、斯うした種類の人々――即ち鑛物獵家がうようよしてゐる。そして百萬長者、千萬長者の夢を見て、ライオンや犀や其他恐しい猛獸毒蛇の棲んでゐる蠻地を、輕便鶴嘴と分析用の器具を携へて、野また野、を重ねながら、うろつき廻つてゐるのだ。しかも、十年、二十年、苦心に苦心を重ねながら、少しの幸運にも惠まれぬ人々も尠くない。

『だがね、頭から輕蔑するのはどんなものかね、案外、あんなのが素晴しいニユースを齎して來ることがあるぜ』

『彼奴も、ブライトンの殘した謎の鍵でも拾つて來たかナ』

事務員達は、顏見合せてどつと笑つた。

金剛石坑の探檢家、ブライトンが殘した謎こそは、いはゞ南阿の鑛物獵家の夢そのものなのだ。ブライトンは南阿の首都ケープタウン市の草分の英吉利人の一人で、その時分、文字通り全くの無人の境で、猛獸毒蛇の巢も同樣だつた、今の南阿のオレンヂ河の川筋を、死を冒して幾度か上下し、はてはその河口の海峽までも、根氣よく探檢し廻つた稀有の冒險兒である。そしてたうとう、大變なダイヤモンドの塊り溜つてゐる所を發見し、大急ぎでケープタウンへ戻つて來たが、恰も金剛石の精にでも呪はれてゞもゐるかのやうに、何人にもその鑛區の位置を告ぐることなしに、頓死してしまつたのである。

『だが、考へて見れば、ブライトンも罪な男だぜ、あいつが、はつきり、誰れかに知らせて置いたら大勢の人間が命を無くするやうな目に遭はなかつたらうに』

『然し、強ち、それはブライトンばかりの罪でもあるまいよ、

つまり、金剛石の精の祟りなんだ。フレット・コルネル君にしろ、確かにブライトンの謎を解いた一人と言はれてゐるんだけれど、その位置を誰にも告げずに阿弗利加を去り、採掘の準備のためロンドンへ戻ると早く、オートバイに衝突して死ぬやうなことになるんだからね』

『要するに、その寶石の世に出るのを、神が未だお許しにならないのだらう』

『そんなら、ブライトンの謎を解いた者は、世界一の不幸者といふことになるね。呪はれて詰らぬ死やうをするのだから』

『ぢや、さしあたり彼の男も世界一の不幸者かも知れないぞ』

さう嘲つて、また吹き出した事務員達は、急に苦り切つた。

それは、當のみすぼらしい風態の男が漸く意を決したらしく、ローゼンタル氏の事務所の入口の扉を押して、這入つて來たからである。そして怯々した口調でいつた。

『御主人にお目にかゝりたうございます』

世界一の不幸者

『貴君ですか、私に御用といふのは？』

ローゼンタル氏は、この奇異な訪問客を眼鏡越しに凝つと見詰めながら、口許に笑みを浮べてものやさしく訊ねた。

『はい、お忙しいなかを、飛んだ御無理をお願ひ致しまして恐縮に耐へませぬ。私はヴァン・ルーエンといふ和蘭生れの者で、もう何十年か、鑛物獵家をやつて來たものです』

襤褸こそ纏うてゐるものゝ、ガッシリした骨組、錆びた銅色のやうな日に燒けた顏、朴訥そのもののやうなルーエンの態度に、好感を持つたらしく、ローゼンタル氏は椅子をすゝめた。

『お掛けなさい、ぢや、何かその方で御用といはれるので？』

『はい』

『さうですか、兎に角、御用件を承はりませう、御相談の出來る出來ないは、その上のことに致しまして……』

『はい、でも、どなたかおいでなさいますが……』

と、ルーエンはローゼンタル氏の傍で事務を執つてゐる技師を顧みた。

『御心配には及びません。私の顧問をしてゐる方です。鑛業——殊に金剛石鑛に關しては、造詣の淺からぬ方です。どうせ専門上のことは、この方に鑑定して戴いた上でなければ、私の決心もきまらないのですから』

『さうですか、では失禮させて戴きます』

ルーエンは勸められるまゝ椅子に腰を下したが、齎して來た用件の重大さに、餘程昂奮してゐる態で、暫くは唇を痙攣させてゐたが、やがて吃りつゝも、熱心に話を切り出した。

『私は金剛石坑を發見したのです』

『えツ！』

『こゝで言つても、誰も信じない程、金剛石の澤山あるところを發見して來たのです』

その瞬間、主客三人の眼は異樣に輝いて、相顧みた。

『ど、どこですか』技師も流石に息をはずませる。



『ナマクアランドの奧です』

『それで』

『出來るなら、投資して戴きたいと思ひます』

『そりや、場合によつてはね』

――ローゼンタル氏は、技師の鑑定を求めるやうに顧みた。

ナマクアランドは、これまで專門家の注意を引くやうな事のなかつた土地である。技師はルーエンの心の奧底を見透すことが出來なかつた。その異樣に昂奮してゐる態を蔑しむやうに、凝とルーエンの襤褸々々の服と顏を見比べてゐた。

が、ルーエンは熱心だつた。

『餘計なことは言ひません、どうぞ私がモーターカーを買ひ、簡單な準備を整へて現場へゆく費用として、二百五十磅だけ、出して戴けませんか、そしたら、私は直ぐにその現場に鑛區の先取權を得るために、立札をたてますから……』

『フン』技師は鼻で笑つた。

『立札を立てる？　何故、君は直ぐに探取に着手すると言はない、たゞの石塊ばかり

の土地へ、札を立てたつて何になる』
吐き出すやうに言ふと、技師は向きをかへて、事務を執り出した。そして、それつきり口を閉ぢて、ルーエンが幾度懇願しても、答へさへしなかつた。ローゼンタル氏も氣の毒とは思つたが、さりとてこの風來坊の和蘭人に、自分の信認する技師以上の好意を持つことが出來なかつた。結局ルーエンは悄然としてこの事務所を立ち去る外はなかつた。

この大金剛石坑を發見したと自稱するルーエンを、貧乏神扱ひをして追拂つたのは、ローゼンタル氏ばかりではなかつた。たうとう、ルーエンは何處へ行つても相手にされず、絶望してヨハネスブルグを立ち去つたのは一九二六年、即ち我が昭和元年のことであつた。

メレンスキー博士

それから一年經つた。
人の噂さも七十五日、ルーエンのことも、彼れが狂氣のやうになつて力說したナマクアランドの金剛石坑のことも、殆ど人人の記憶を去りかけた時に、このヨハネスブルグに住んでゐる地質學者のメレンスキー博士が、トランスヴアール北方の蠻地に於ける、白金鑛探檢に成功して歸還した。

メレンスキー博士は、ふとしたことから、このルーエンの噂さを耳にすると、何かは知らず、ギクリと胸を刺られるやうに感じた。そこで早速、同じヨハネスブルグに住んでゐる同商賣の親友リウニング博士の許を訪れた。

『ねえ、君。世間ではルーエンの言つたことを、頭から馬鹿にしてかゝつてゐるが、僕には、阿弗利加大陸の神秘を解く鍵を與へて吳れたやうな氣がしてならないんだ。どうだい！僕と一緒に、一氣に暗黑大陸の脊髓を、一千哩ばかり潜つて見る氣はないかね。僕は、この際、精限り根限り寶石狩りをしてみたいんだ。無論、最後の目的地をルーエンの洩らした歷山灣のナマクアランド迄としてさ』

リウニング博士も別に異議がなかつた。

『ルーエンの言つたことは兎に角として、君となら寶石狩りに出掛けてもいゝ』

『有難い、贊成してくれるか、ぢや、直ぐ決行しよう』

そこで二人は、極く簡單な準備を整へ、險阻な山道や、徒渉らなければならぬ河へさしかゝつたら、二人で擔つてもゆけるやうな輕便で丈夫なオートバイ一臺に乘つて出發した。

勿論兩博士とて、確たる目途がある譯ではなかつたけれど、何かしら素晴しい獲物にありつけさうな豫感から大變な鼻息だつた。この鑛物獵家達の向ふ見ずな勇氣を目して、歐羅巴人は『阿弗利加の流行性樂觀熱』と嘲つてゐるが、金鑛が、寶石

が、多分あの邊にあるだらうといふ單なる想像だけで、聞くも恐しい人外の魔境へ、命懸けで飛び込んで行くのだから思へば危険千萬な話である。

失望！

一口に一千哩とはいふものの、猛獸毒蛇の巣ともいふべき蠻地を踏破するのだ。決して容易な業ではない。

或日は、ムツとして眼も眩みさうな、南阿名物の草いきれの烈い大草原を越えねばならなかつた。また、或日は、何處迄行つても涯しのない、大陸沿岸の小石山の山續きを重いオートバイを擔つて越えた。斯くて砂の山、樹の海、石塊の原と進み進んで、ルーエンが極く小數の人に洩らしたといふ謎のナマクアランドの近く迄やつて來た。

その間兩博士は、これはと思ふところは殆ど手當り次第といつてい丶位に、掘つてみ、調べてみた。或時は、砂の吹雪に幾度も埋れてはまた現れた、沙漠に横はる人骨獸骨の陰までも、溢れんばかりの熱心と專門的の注意を以て漁り廻つた。が、寶石に似たものとては一小片だも獲ることが出來なかつた。

『矢張、ルーエンのゑがいた幻想だつたのか』

『でなければ眞赤な嘘だつたのだ。ヨヘネスブルグ全體の專門家が、愛想を盡かした代物の言葉に、理由なしにひきつけられて、こんな苦勞をするなんて——思へば、俺達は世界一の大馬鹿者だつたなあ』

流石の兩博士も、今は阿弗利加名物の樂觀熱もすつかり冷めはて、自分自身の愚さを呪ひたいやうにさへ思ふのだつた。

無理もない、こ丶ら邊は、人の住んでゐる處からは直徑五十哩は離れてゐる。慾と道件れ、夢中になつて突進して來たものの、連日の過勞と連夜の野宿に加へて、野獸の遠吠えに脅かされ、安かに夢を結んだこととては唯の一夜もないのだから、張り詰めた氣がくづれると、動くのさへ懶く感ずる程疲れ切つてゐた。

だが、此處まで苦勞に苦勞を重ねて來たのだ。たとへ、途中で平太張る迄も、謎のナマクアランド——即ちルーエンが確かに寶石があると言つた地點を見ずには歸れない。

『え丶、斯うなつたら焼糞だッ！ どうせ馬鹿になつたついでに、ナマクアランド迄滅茶苦茶に頑張らう』

兩博士とも、さうでもせぬことには、胸の癒えやうがなかつた。

や！ これは！

たうとう、謎の歴山灣に到着した。

海岸に削ぎ立つ岩壁を這ひ降りて、粗い砂濱の浪打際に立つ

た時には、メレンスキー博士も、リウニング博士も、心身全く疲れはてゝ、崩れるやうにぐつたりと身を横へた。

『此處だ！　たうとうやつて來た』

『あゝ、たうとう來たね』

此處だ！　此處こそはルーエンの名指した處なのだ。若し、死に優さる難行苦行を重ねたこの度の寶石狩りの辛苦に、酬いられる機會があるとすれば、此處で惠まれる外はないのだ。それと同時に、此處でも何等の得るところがなければ、あゝ……！絶望、然り、絶望あるのみだ。

兩博士は暫くの間は、唯ボンヤリと水や空なる遙かの彼方を見るともなしに眺めてゐるのであつた。

やがて、メレンスキー博士は、力なく身を起した。續いてリウニング博士も起つ。

『兎に角、調べて見よう』

『ウム』

だが、二人は僅かに頭をめぐらして四邊を見廻すだけで、立て動かうともしなかつた。それ程、弱り切つてゐたのだ。

『だが、變な海岸だナ、水際の岩といふ岩に、更らに岩が盛りあがつてゐるぢやないか』

『ナアに、こりや牡蠣だよ、とても良く肥えた牡蠣だ。これで見ると、此處へは開闢以來、人間が餘り來なかつたと見える』

ものの二十分もさうしてあちらこちらと眺めてゐる中に、兩博士の疲れきつた凹んだ眼と、乾き切つた悄氣た眼に、幾週間振りで生々とした光りが申合せたやうに出て來た。

それは巖のやうに盛りあがつてゐる牡蠣と牡蠣の間に見える岩の地肌の色が、二人の專門家の頭にピーンと來たからである。浪打際の岩から背後の絶壁まで、何とも言へぬ黒味がかつた色が、たゞの岩でないことに漸く氣がついたからである。

『や！』

『これは！』

二人は殆ど同時に叫ぶと、猛然として間近の岩に駈け寄つた。そして牡蠣の着いてゐる小石を、岩を、はね起して、氣が狂つたやうに濱の地中を堀り初めた。それは殆ど一千哩の間、喉を涸したところで本當に幾千週か解らぬ程、土を堀り、岩を堀り、山、澤、谷、沙漠と手當り次第に堀つて調べた癖が、無意識の間に出たのであつた。

が、こん度は無駄ではなかつた。純ダイヤの含有鑛石は、初めから無論そんなにピカピカしてはゐないけれど、多年の經驗を有する專門家の眼には、一見してそれと見極めがついた。

『占めた！　こんどは本物だぞ！』二人は殆ど夢中であつた。

やがて兩博士は、ふと自分達の靴で踏みにじりつゝある濱の砂の色の唯ならぬのに氣がついた。

掘る手を止めた。そして同時に瀧の砂を掴んだ。そして掌を眼先きで開いて凝つと見た。

『おゝ、これも！』

『あゝ、これも！』

見合せた四つの眼からは、いつまでもいつまでも、涙が止め度なく流れ出た。

斯くて兩人は、ホンの子供の濱遊びに拵へるやうな小さな凹地を作つたゞけで一生樂々と生活して餘りあるだけの、ダイヤモンドの純鑛石を堀り出したのであつた。

必死の善處策

破天荒の大發見をして、ヨハネスブルグに歸つて來たメレンスキー博士と、リウエング博士は、自宅には寄らず、直ぐに二人が最も信頼する金鑛都市の大鑛主の一人であるO氏の本邸へ、殆ど壞れかけてゐるオートバイを乘りつけた。

目もあてられぬ位にボロ〳〵になつた探檢服のまゝの二博士のひどい姿に、邸の番犬は盛んに吠え立てた。取次の者はこの異様な怪漢が、主人が日頃尊敬してゐる二博士であることを知つて、眼を圓くした。



やがて主人の居間に通された。たつた今、地獄から歸つたとでもいふやうな風つきのメレンスキー博士は、汚らしいものをO氏の前にドサッと置いた。それはリウニング博士の着古して襤褸々々になつた下シャツを丸めたものである。

メレンスキー博士は、戰く手先きで、靜かに解くと、世界一のお土産が、ザラリと音たてゝ、ナマクアランドで採取した金剛石が活きてるやうにテーブルの上に廣がつた。

この時まで、主人も二博士も物を言はなかつた。物を言ふべく、餘りに肉體も精神も緊張し過ぎてゐたのだ。

やがてメレンスキー博士は、凝つとO氏の顏を見詰めながら、徐ろに口を開いた。

『私の體は今戰慄してゐる。ナマクアランドといふ語、歷山灣といふ語、此二つの語を聞く毎に、私のこの戰慄は當分續くであらう。こんなに多量のダイヤモンドが、此地球に存在するといふ恐しい事實を發見したので……その結果は世界に如何響くであらうか、思へば恐しいことだ。私共は下級動物でないから、私慾にばかり囚はれてゐる譯にはゆかぬ、この際、この時、慎重に考へて善處しなければ、大變なことになる』



聞いてO氏は唸るばかりだつた。

『では、寶石の總分量の豫想は？』

『强ひて豫想をせよといふなら、無限を豫想したい位です』

その夜の裡に、二博士は最初訪れたこの大鑛業家と同伴して、市の粒選りの大鑛業家を人目を避けて歷訪して、發見者二博士を大株主とする組合を作つてしまつた。

秘密が保れたのは僅か一週間である。

南阿政府の鑛務大臣ベーヤー氏の名を以て、この新金剛石坑が正式に許可されたことが知れ渡ると、ヨハネスブルグに上を下への大騷動がはじまつた。忽ち、全市のオートバイは、歷山灣に向けて影を消してしまつた。が、驚いたことには、野次的慾望家連が、道なき道を遙々一千哩、驅けつけた時には、隨分廣い寶石の出る現場は、嚴重な木柵で圍まれ、多數の制服巡査と新組合からの出張員が、肩を怒して頑張つてゐた。

新金剛石鑛の産出量が愈々益々多くなつてゆくのを見ると、先づ南阿政府が動き、輿論が動き、新組合の幹部の諒解の下に、間もなく南阿議會に特別法案が提出され、滿場一致を以て通過した。その結果、この驚くべきダイヤの産地の一切の經營は、上に英皇室を戴く半官的のシンヂケートの手で行はれ、そこで産出したダイヤモンドは南阿政府の鑛務大臣の許可なしに一カラツトも賣出せないことになつた。でなければ、世界の寶

石相場は木ッ葉微塵になるのだ。

斯くて最初から上下一致して注意に注意を重ねた結果、このナマクアランド物が市場へ出たのは、今日迄で僅かに時價六萬圓に過ぎないといはれてゐる。



ヨハネスブルグからの最近報に據ると、同じ南阿のキンバレーの金剛石坑の周圍は、高さ六呎ある電流を通じた二重の鐵條網に取り圍れてゐるさうであるが、新金剛石の産地は、それにも増して嚴重な高塀にとり圍まれ、近寄る道筋の要所には歩哨をたて、周圍は侵入者を射殺する權能を與へられた多數の警官によつて固められてゐるさうである。しかもその構内で實際の仕事に從事する從業員は僅かに六十人、この六十人の手で、僅々十數ケ月間に拾ひ上げられた金剛石の總金額は九千萬圓に上り、毎週一回、そこから南阿の首都ケープタウンに飛行機で運ばれ、鑛務省の秘密地下室へ運び込まれて、封印してしまはれる金剛石は、最近はどんな少ない時でも五十萬磅（五百萬圓）を下らぬといはれてゐる。

ベーヤース鑛務卿は、最近、英吉利から特派された或新聞記者に對して『ねえ君、うちの歴山灣のやうな所が、南米大陸に一箇所、極東に一箇所、更らに歐洲か亞細亞の北岸にでも一箇所假りに發見されたとしたら、世界に面白い繁榮革命が來よう、さうしたら我輩はさしづめ、世界一等國の金貨本位を、ダイヤ本位に改める提議を、專門的に壽府會議に持ち出すことに骨を折りたい！』と話したと傳へられてゐる。

が然し『滿腹は排出を結果する』といふ醫學上の原則は、同時にまた經濟上必至の天則でもあるのだ。いくら滿腹平氣の英吉利政府でも、やがて金剛石の排け口を求めるに違ひない。その時こそ恐怖すべきことが現出しよう。

世界二大ダイヤ市場の一なる紐育市の專門家には『英吉利は極めて巧妙な金剛石の專賣制を全世界に施さうとしてゐる』と罵しつてゐる者もあるが、他の大市場、ハツトン・ガーヅンでは、反對に感謝してゐる玄人もある。

兎に角、ダイヤモンドの洪水を、今、堰き止めてゐるダムは英吉利政府なのだ。

それにしても哀れなのはルーエン、その後杳として消息不明であるが、今にして思へば、彼れルーエンこそは、世界空前絶後の大富源を發見しながら、一指だも染めることの出來なかつた世界一の不幸者だつたのだ。（終）



【古今の名勝負】

荒岩常陸の全勝争ひ

鈴木彦次郎

近藤紫雲畫

上

國技館が立派に出來上つてからも、太刀山、鳳、大錦、栃木山など、大力士は可成り出たが、何と云つても、角力の一番面白く、また盛んだつたのは、まだ、回向院の掛小屋で、興行してゐた時分――明治卅三四年から卅六七年迄――である。

面白くて人氣があつたも道理、此頃ときては、常陸山、梅ケ谷が最も油が乘つてゐた頃、それに、大砲なんといふ今の出羽獄みたいな化物も控へてゐるし、太刀、駒ケ嶽が若手のチヤキチヤキで昇つてくる。そこへ、角力の神様と呼ばれる名力士荒岩が縱横無盡の働きを見せて、毎場所江戸ッ兒の溜飲を下げてくれるのだから、たまつたものぢやない。天下の好角熱はいやが上にも沸騰し、場所毎に棧敷を建て増しても間に合はぬ滿員つゞきの大盛況であつた。

その頃の代表的好取組といふのが、この『荒岩常陸の全勝争ひ』である。此の勝負の豫想ときては、何しろ場所のあく一月も前から、戰爭でも始まりさうな大騷ぎ、全く滿都好角家の熱を一點に集中した名勝負だつた。



常陸山は、どなたも御存じの斯道始つて以來の大力士、此の人の泉川にかゝつては、何人も敵はぬといふ古今未曾有の剛勇。

一方、荒岩は、身長こそ五尺五寸の力士としては小軀だつたが、角力は摩利支天の再來と云はれた名人、實にキビキビして男らしい角力を取る人、前に横綱小錦を得意の蹴手繰りで土俵の砂に埋めてからは、滿都の人氣を獨りで脊負つた花形力士。

その二人が、八日目まで勝放しの大元氣で、顏が合つた卅三年夏場所の九日目、(その頃は幕の内力士は九日間しかとらなかつた)それに優勝者には、斯道始つて以來、最初の全勝褌が懸賞に出てゐるといふのだから、いやが上にも興味をそそるのであつた。

戯が、困つた事にその前日になつて、荒岩が持病のリウマチスを再發して、腰が痛んで利かない。ために、小敵稲川に辛うじて勝つたといふ始末である。

こいつア遺憾ながら、荒岩、九日目は休むな――相撲通の面々、誰しもさうと考へて、残念がつてゐたが、

『力士は土俵が死場所、殊に大敵常陸山と顔合つて、怖れて逃げたと云はれては一代の恥辱、明日は死んでも取組みます』

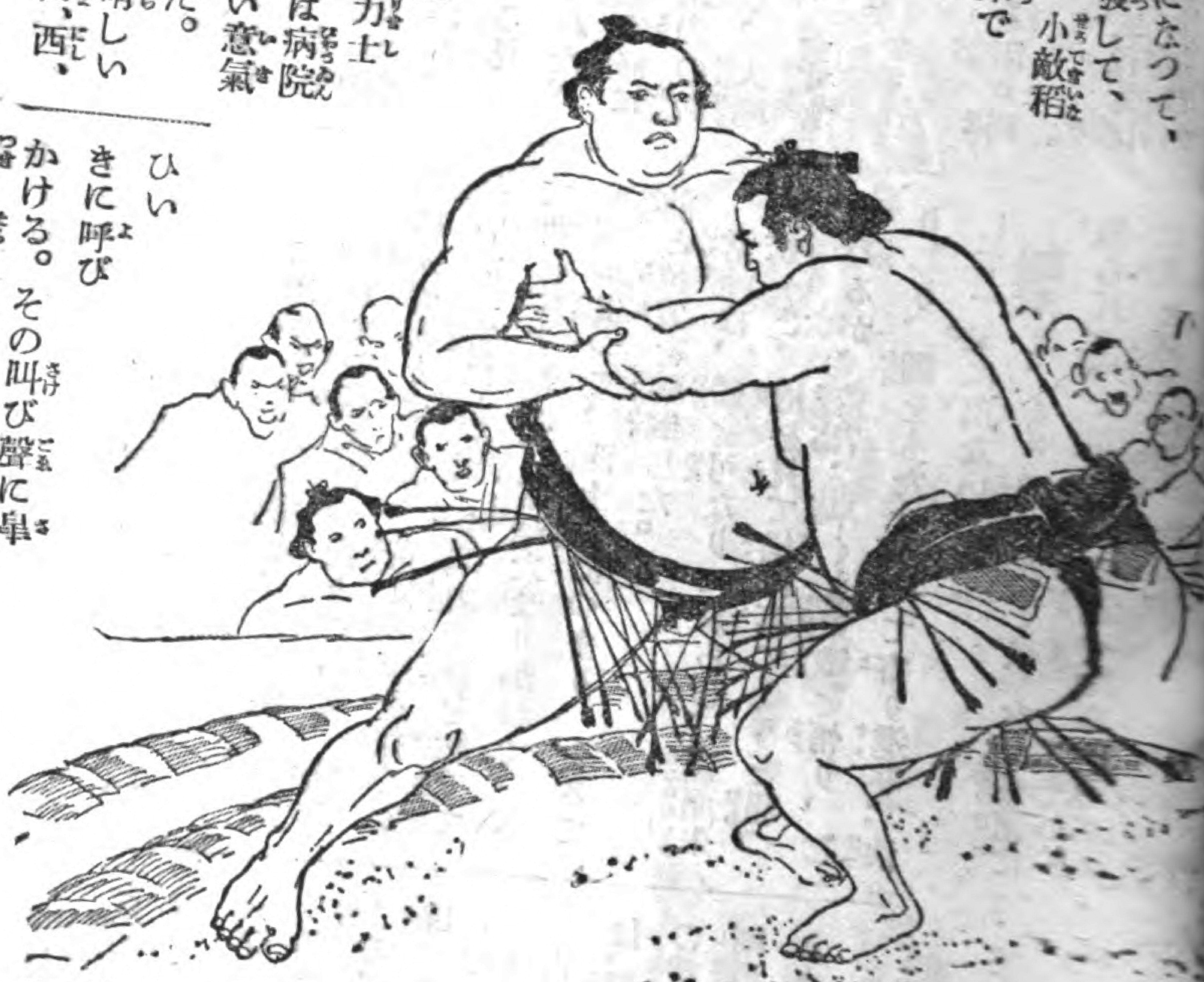
と歯切れのいい文句を残し、快力士荒岩は早速病院へかけつけ、當日は病院から場所入りしようといふ素晴しい意氣込み。ます／＼人氣をあふり立てた。

いよ／＼當日となつた。實に素晴しい大入り。番數取進んで『東、常陸山、西、荒岩』と呼び出した。

『常陸い、常陸山、しつかりたのむぞ！』

『荒岩ア――荒岩ア、勝つてくれよう』

と、萬餘の觀客、我を忘れて、ひいきひいきに呼びかける。その叫び聲に皐月の空もつきぬけんばかり。



中

さて、當日の豫想は、常陸六分に荒岩四分。これは仕方がない。

なにしろ體格力量から云へば、全く段違ひ、殊に常陸は初日以來、破竹の勢、殆ど誰も相撲にせず、好敵手梅ケ谷をも苦もなく押切つた大元氣へもつてきて、荒岩いかに角力の神様とはいへ、リウマチスで入院中ときては、とても勝味がない。當日も仕度部屋で、ずうつと按摩にもましてたといふ噂。

なるほど、土俵に上つた姿を見れば、腰のあたりには、べたべた膏薬を張りつけ、見るから痛々しさうな風情である。

これに比して、常陸は肉附豊に見るから常勝將軍の態度、行司の指圖に従つて悠然と仕切つた。

常陸に對し低く仕切つた荒岩の顔色は次第に蒼白となり、決死の色がすさまじい。仕切り直し二度、三度目に氣合し、双聲で清く立ち上るや、觀客は思はず、ワアーツと總立ちになり、見る見

る眼前に展開する古今の名勝負に膽を冷すのであつた。

下

立上るや、荒岩、飛鳥の如く飛び込んで、得意の左を差す。その素早いこと、目も眩むばかり、しかし、常陸は、ちつとも驚かず、むしろ、その手を引張り込んで挾みつけ、十八番の泉川に埋めて、ぐいぐい持つてゆく有様は、まるで仁王が拔け出たやう、その強力には、今更ながら、見物も舌をまいて片唾を呑む。見る見る内に、荒岩は東土俵につまり出された。

あはやもう一息、荒岩の踵が劒の峰にかかつたと思ふと、さすがは角力の神様、痛みある筈の腰も磐石の如く、大剛常陸が滿身の力こめて押しても、一寸も後には下らぬ。

觀客は、ただ

『アレヨ、アレヨ……』と、聲を限り叫ぶばかり。

やがて、常陸は、面倒な、と云はんばかり、『えい！』と懸聲もろとも嵩にかかつて、ぐいと押し進めば、荒岩、つぶれたとは思ひの外、うむとこらへて咄嗟に敵の體勢を利用して左から掬つた掬投の奇襲に、常陸の大兵は思はずぐらり浮いた。

『おや』

と思ふ瞬間、素早い荒岩は、既にぐるりと廻り込む。

ここ逃がしては大變と、さすがの常陸も、あわて氣味になつたところを、此の機に乘ぜんとばかり、荒は差手を拔くが早いか、筈にかひ、金剛力で砂を蹴立てて押しすすめば、常陸たまりかねて、ズルズル退つて、西土俵につまり、まるで前と位置を轉倒した。

常陸は、體を弓なりに反らし、滿面朱を注いで、機を見て横に棄てようと狙つてゐるが、荒岩、早くも策戰を悟り、じりじり、體をもたせかけて寄り進み、決して一氣に出ない。

觀客は、もう醉つたやう、ただ呆氣に取られて、この理詰の堂々たる角力ぶりに見とれてゐる。

此の體勢を保つこと、しばらく、常陸の全身、愈々朱に染つたと見るせつな、荒岩、最後の猛襲。『エイッ』と押せば、大剛常陸もたまり兼ね、どうと西溜りに仰向けに倒れてしまつた。

滿場の狂騰は渦を卷き黑煙がもう〳〵と立昇る有様。

『ワアワア、ワアーッ！』

『アライワア！　アライワア！』

あまりの嬉しさに、素裸で土俵に驅け上る紳士があるかと思へば、雨霰と荒岩目がけて投げる纏頭に土俵は埋つたといふ騒ぎ。

古今未曾有の大喝采のうちに、荒岩は、靜かに勝名乘りを受け、本場所全勝の賞として、角道最初の全勝旗を受け、斯道の神様、角力の名人の名、愈々高くなりまさつたのである。

この勝負は、實に兩力士とも決死の戰で、こんなに力が入り、且つ大騷ぎされた取組は、後にも前にも類例がなかつた。

――をはり――

興味よく
白熱の絶頂！

見よ二月號の大壯觀

◎金言

良き食物は、安くてしかも滋養があり、生新でしかも消化し易く、その美味は萬人に喜ばれる。
良き雜誌も亦これと同樣だ。萬人の心の糧としてなくてはならぬものである。

ハチ切れさうなその内容！
飛上がるやうな面白さ！

斷然！先頭！
ぐんぐん伸びる
キングの出來榮！

二月號は一月七日發賣

……次の頁を御覽下さい……

天下の耳目を

世界名探偵事實物語

世界に一二を爭ふ名探偵が、縱横の奇才をふるつて、神出鬼沒の離れ業！　全篇盡く手に汗を握るやうな活場面の連續である。これこそ眞に小説より面白い事實談。秘中の秘話。

熱血迸る拳鬪大試合

突撃又突撃！　猛襲又猛襲！　血は全身に逆湧き、五體の力は双腕に漲る！　拳は相觸れて金石の聲を發し、呼吸は熱して火焔となる。敵を屠るか！　吾れ斃れるか！　あゝ凄じき白熱戰！

心機一轉　大發奮驚嘆物語

一度感激に甦つたその姿の雄々しさ！　今日の彼は昨日の彼でない。今や震天撼地、大奮鬪の幕は切つて落されたのだ！　輝く瞳、轟く胸彼は果してどこに行く？　あゝ熱と涙と力の交響樂！

◎金儲け一筋道

（お馴染の谷孫六先生が、特に讀者諸君のために公開された破天荒珍無類の金儲虎の卷。）

◎肥える法瘦せる法

（これは痛快、肥えるも瘠せるも思ひのまゝ。大森博士によつてなされた科學的新研究。）

駭かす大讀物

—次の頁を御覽下さい—

滿天下熱狂の傑作長篇小說

長篇小說 **心の日月**（菊池寛）

傳奇小說 **怪盜夜叉王**（前田曙山）

家庭小說 **燃ゆる花**（菊池幽芳）

時代小說 **大醜女物語**（本田美禪）

長篇小說 **春遠からず**（加藤武雄）

探偵小說 **宙に浮く首**（大下宇陀兒）

長篇講談 **三家三勇士**（大島伯鶴）

時代小說 **風雲天滿双紙**（佐々木味津三）

諧謔小說 **ガラマサどん**（佐々木邦）

大衆小說 **血ろくろ傳奇**（土師清二）

長篇小說 **霧の中の曙**（野村愛正）

偉人小說 **二宮尊德**（武者小路實篤）

燦たり!! キングの小說!!

百花繚亂。文壇の巨匠、轡を並べての會心の傑作は天下の人氣を沸騰せしめてゐる。就中次號は作者の靈筆益〻冴えて、いづれも興味は最高潮に達し、次から次へと名場面の續出！ 息もつかせぬ面白さ！

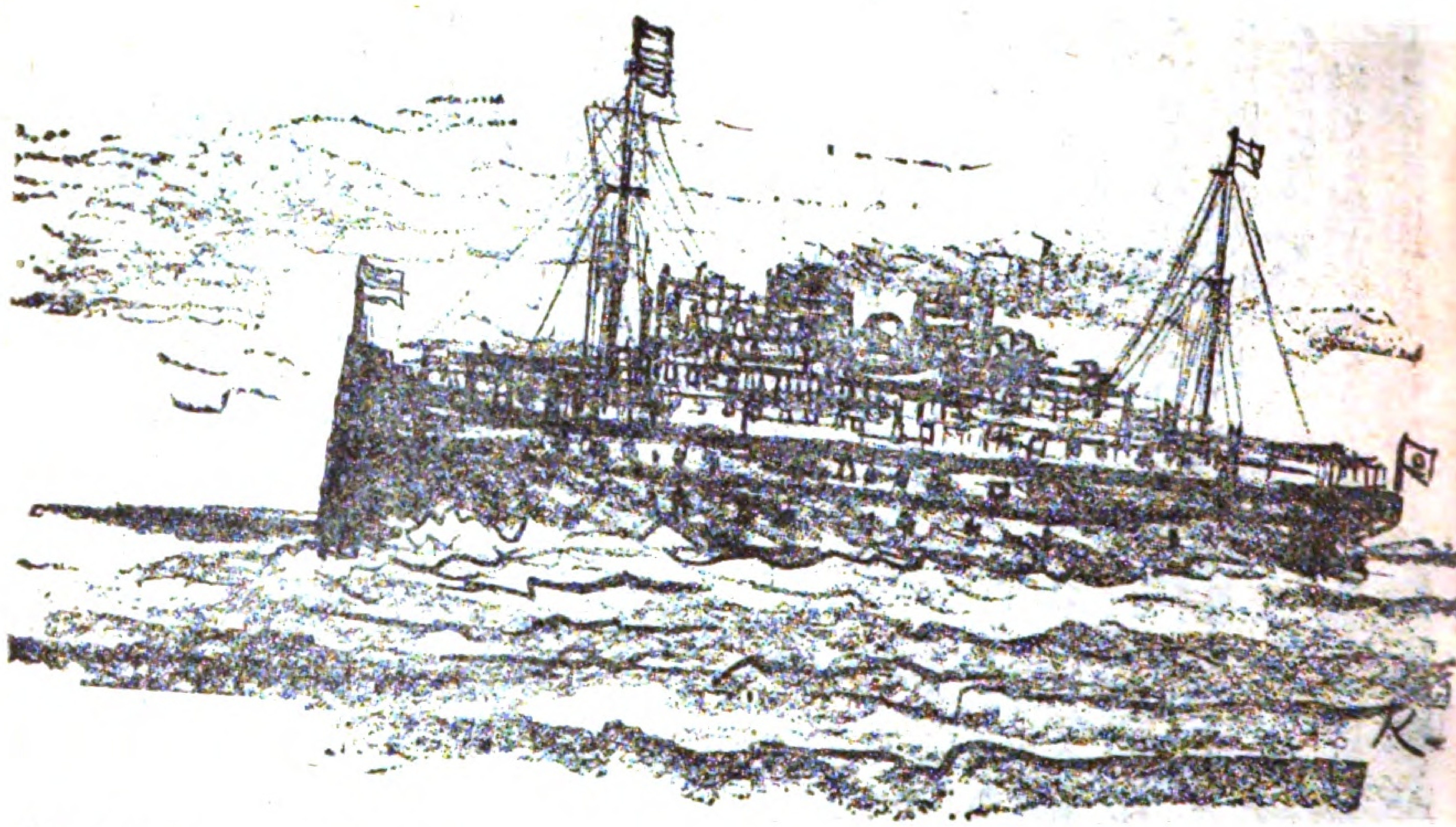
更に此の外

一粒選りの感動美談、海外珍聞、科學ニユース、海外名士の寄書、偉人物語等から漫畫笑話に至る迄、キングでなくては見られぬ素晴しい充實振り！

口繪表紙は

帝展審査員山口蓬春、同堂本印象氏を始め一流大家盡く執筆、堂々六十頁、雜誌界空前の美觀！

ぜひ二月號をお待ち下さい



家庭小說

燃ゆる花

菊池幽芳
小早川清畫

一組の男女

上海を出て、今長崎に向つて居る郵船の一等船室は皆滿員だつたが、その中彼等一等船客の間に問題を提供して居る一組の青年男女があつた。二人は特別船室を占領して居て、船室内に過して居る事が多く、あまり外の船客と言葉も交へないのは、どうやら人目を避けて居るもの丶やうにも思はれるのだつた。二人の服裝や持物から判斷すると、相當身分のある者に相違なく、男は二十八九で、貴公子らしい風采の、明るいフランクな表情を持つた、背の高い髭のない男で、シツクリと身に着いた背廣のスタイルから、ネクタイ、それにさ丶れたピン、カフス釦の好みまで、よくセレクトされて居り、どう踏んで見ても、上海仕立の青年とは見えず、厭味のない態度から、物靜かな話振など、どこか英國あたりで教育された若紳士を思はせるものがあつた。

併し船客等の注意の焦點となつて居るのは、彼ではなくて彼女の方だつた。彼

女は二十二三歳、ひよつと四位にはなつて居るかも知れない。いつの場合にも問題となる女は、服装とか、容貌とか、態度とかに異常の點があるものだが、それ等の點のいづれにも、彼女は人の注意を惹つけずには措かない何ものかを持つて居た。第一に彼女の容貌はやゝ暗いところはあるけれども、凄いほどの美くしさを持つて居た。彼女の半斷髪にして、巧みにウエーブした洋装は、それこそ巴里の流行界から抜出して來たかのやうに、全く粋でもあれば優雅でもあつた。そしてその態度には社交界の貴婦人の場馴れきつた柔軟さと、コケチツシユなところがある一方、誇りを見せた鷹揚さと、不思議な氣位があつた。明るさと暗さが妙に錯綜して居て、ひどく冷たいところがあるかと思ふと、また折に觸れて燃ゆるやうな情熱を見せる眼光に、何ものをも魅し去る力があつた。その茶色の眼と、黒いけれどもやゝ褐色がかつた髪の毛が、情熱の血の流れて居る伊太利か西班牙の女を思はせるやうなところがあるが、さりとて混血兒と見える風では決してなく、どこから見ても日本の女のタイプであつた。そのよく發育して釣合の取れた身體、美事に伸びた脚の美くしさは、彼女の洋装を此上もなく似つかはしいものにした。

彼女は船客の男などを何とも思つて居る風ではないが、さりとて輕蔑して居るやうなところは微塵もない。社交にはよほど馴れて居るらしく、外國人とは自由に話をして居た。何か粗野なところがある一方に、また貴族的なところも多分にあつた。女優でもあるかと見える瞬間があるかと思ふと、次の瞬間にはすつかり貴婦人になり済して居る。私は今明暗の兩面を持つた女だと云つたが、多くの場合には明るさが表はれて居て、隠れた暗さが折に觸れて閃めくに過ない。

この二人が新夫婦らしい事は、船室の標示に明らかであるが、どうした身分の男女であるかは、船客の疑問の中心であつた。たゞ船客の誰にも明らかな點は、この二人が非常に愛し合つてゐるといふ事だ。人前で彼等の愛を、無遠慮に見せびらかすといふ事は避けて居るけれども、女の方は西洋の新婚の女がその新夫に捧げるであらう通りの愛の表示を、人に見られる事を、少しも意としない風があつた。つまり彼女は極めて自然にそれを取扱つて居るものと思はれるのであつた。

女はどうした素性のものだらう？　彼等は新婚旅行の途上のものなのだらうか？　二人は果して眞實の夫婦ものだらうか？　人を避けるやうなところがあつて、二人ともあまり甲板やサロンに姿を表はさないのはなぜだらう？——かうした點が、船の長崎へつくまで、船客の間の話題の中心だつた。

私は今こゝでこれ等の疑問の謎を解かなければならぬ、なぜなら船はもう二三時間で長崎へ着く筈であるから。



松尾信重――これが男の姓名である。彼は二十五で帝大の法科を出ると、二年間英國に留學した後、外交官生活が彼並びに彼の兩親の希望であつたので、書記生として北京の公使館に二年ほど勤めて居る中、極度の神經衰弱に陷つたので、職を辭し、保養のため氣任せの歐米漫遊の途に上つたのは、今から約一年ほど前だつた。

彼はいくらでも引出せる旅費に惠まれながら、好な歐羅巴に半年ほど氣樂な旅をつゞけて居る中に、すつかり健康を恢復する事が出來たので、漫遊期間は一年の豫定であつたが、この調子なら、もう歸つてもいゝと考へて居る中、ふと或女と熱烈な戀に落て了つたのである。そして彼は日本へ歸る考へをすつかり忘れて了つたのだつた。それから半年後の今日、彼はとうとう戀しい女を得て歸國の途につ

き、途中上海に寄道した上で、昨日此船に乗込んだのであつた。

彼の生立が平凡であるに引かへ、女の方は数奇を極めて居た。恵美子がその名で、長崎の小商人の家に生れた彼女は、まだ小學校に通つて居る十歳の時、母を失ひ、一家の事情から父のため、或曲馬團に賣られ、いろ〳〵の藝を仕込まれた揚句、一座の歐羅巴巡業に連出されたのである。この巡業團は成功しなかつたので、伊太利を興行して居る折、一座はとう〳〵ミラノで解散して了ひ、座員等はそれ〴〵辛くも日本へ送り返されたが、恵美子の父は彼女を賣渡した後間もなく流行病のため死亡して居るので、彼女は歸る家もない哀れな孤兒となつて居たのだ。ところが幸ひにもミラノに日本の骨董品を取扱つて成功して居る伊太利人があつて、恵美子が可愛らしくて、可哀相な身の上なのに同情し、自分達に子がないところから、慾得なしに彼女を引取つて世話をする事となつたのである。その時恵美子は十三になつて居たが、よく夫婦のものに懐き、可愛がられたので、全く今までの悲惨の境遇から救はれる事が出來たのだつた。彼女はこの伊太利人の手元で、立派に教育もされた上、音樂の天才である事が見出されて、音樂學校に入れて貰ひ、始めはピアノを志したが、聲樂の方に見込が多かつたので、その方に轉じ、學校を出る時には、コロラチユア・ソプラノの歌手として、第一番の成績だつたのである。

併し幸か不幸か、彼女のために第二の轉回期が來た。彼女が音樂學校を出ると間もなく、養家の伊太利人は妻に死なれ、同時に經濟上の蹉跌を招き、彼自身も脊髓の病氣にかゝつて、病院生活をするの止むなきに至つたのである。そのため恵美子を更に第一流の聲樂家につかせて、立派な歌手に仕立てゝ見せると自慢して居た彼の希望も仇となり、恵美子は自活しなければならない境遇にさへなつた。これまでにそこゝの音樂會に出演して、かなりの評判を取つて居た恵美子は、斷然ステージの上に立つ考を極め、養父の同意を得た上、或マネージャーに一身を托して了つたのである。

彼女は養家の姓を取り、エミコ・マルチニの名で、日本娘を呼ものに、そこここを興行して廻つた。彼女の第一の呼ものは、日本娘に付ものゝマダム・バタフライであつた。トラビアタ、カルメン、ラクメー、ラ・ボエームなども彼女の呼ものだつた。伊太利の小唄や、民謡のやうなものも得意とした。聲量は豐富で變化と色彩に富んで居たが、技巧にはまだ至らぬ節が多かつたに拘らず、南歐の美女にどこか共通して居るところのある彼女の美貌と、伊太利で育くまれた日本娘であるといふハンチキヤツプとなつて成功を彼女に齎らした。彼女を今舞臺に立たせるのは惜しい、あと二三年みつしり修業させれば、[illegible]

事も難くはあるまいなどとさへ嘲された。

丁度彼女が舞臺に立つてから六ケ月目、ナポリで興行して居る時、伊太利漫遊中であつた信重が始めて彼女を見、そして一目で戀に落ちて了つたのである。それから羅馬に、フロレンスにヴエニスに、コモにトリノに到るところ彼女の興行して廻る先には、必らず信重の姿を見た。惠美子も信重を憎からず思つたけれども、容易に彼に許さなかつた。彼女には優しい一面があると共に、勝氣な男まさりの氣象があつて、それまでとても巧みに異性の誘惑に打克つて來て居たのだ。けれども信重の戀が眞劍で、深く根ざしたものであり、一時の氣紛れでない事を確かめたところから、とう／＼彼に許す氣になつて了つたのである。まだ最後のものを彼に與へはしなかつたけれども、信重はそれだけに滿足した。信重の目的は惠美子を己が終生の伴侶とする事にあつたのである。

が、自分に取つてはその目的を果す爲に大きな困難のある事を信重はよく知りぬいて居た。それは尋常の手段を取つて居ては、到底彼の兩親の承諾を求められないといふ事だつた。彼の父松尾信品は中國筋の或舊藩主で、現在は貴族院に籍を置いて居るが、伯爵議員の間に重きをなし、嘗ては和蘭西班牙等の公使を勤めた經歷の持主である上、彼の母も同じ大名華族の出で、松尾伯爵家は同族中でも有數な家柄なり、また富豪として聞えて居るのである。さういふ家柄なので、家風等といふものも隨分むづかしく、また家系の事を最も八釜しく云つて居り、殊に母が貴族以外の人間を人でないやうに思つて居る女なので、自分と惠美子との結婚を許してくれ、結婚前に求めたところで金輪際許してくれさうな筈はないと思ふのだつた。そこで彼が思ひついたのは伊太利で惠美子と結婚して了つて、否應云はせず兩親に承認させて了ふ手段を取るといふ事だつた。自分は一人息子で、兩親の鍾愛を一身に集めて居り、これまで自分の云ふ事で、何一つ通らぬものもなかつた事を思ふと、母よりはずつと平民的で譯の分つた父は結局承認して呉れるだらう、父が承認すれば、母にしたところで仕舞には折れる外はなく、殊に母は嫁自慢をしたい方なので、惠美子のどこに不足のない姿を見さへすれば、家系の事などはあまり八釜しくせずに納得もしてくれるだらうと獨り合點し、それが重大の結果に導びくものとも知らずに、その覺悟を固めて了つたのである。

併し惠美子を得心させるためには大分骨が折れたが、外國に育つた彼女は、大名華族の間の家憲とか、家系問題とかいふ事には、深くも思ひ至らず、結局信重を信賴して結婚を承諾したのである。病院生活をして居る養父も、この結婚に反對をしなかつたので、善は急げと、結婚式はミラノの教會堂で行はれたのだが、立會人として式に列したものは、二三の伊太利人と二

人の日本人とであつた。それは全く秘密結婚と云つてもいゝ性質のものであつたが、けれども伊太利の法律による正式の結婚であつた事はいふ迄もなかつた。

結婚を濟せると新夫婦はすぐ南佛の樂園リビエラの海岸に廻り、マントン、モナコ、ニース、カンヌなどに一ケ月ほどの樂しい夢のやうな蜜月の旅をつづけた後、巴里に出で、そこに三ケ月滯在し、惠美子の四季の衣裳、持物などを整へた上、マルセーユから佛國郵船で立つたのであるが、新らしい妻を連れて歸る事は當分秘密なので、直接日本に歸る事の危險を避け、わざと上海で下船し、何の豫告なしに長崎通ひの郵船に乘込んだのであつた。

長崎航路を擇んだのは、長崎で上陸すれば知人などに出逢ふ心配がないといふだけではなく、外にも理由があつた。それは惠美子の郷里が長崎なので、彼女の憧憬の土地であるばかりでなく、自分を愛してくれた叔母がそこに居る筈だといふので、若し探しあてる事が出來れば逢つて行きたいといふ惠美子の希望から、都合では三四日長崎に滯在してから東京に立たうといふためなのであつた。

船室にて

信重と惠美子があまり甲板に姿を見せないのは、なるべく人に接したくないためでもあるが、戀人同志の二人きりで話し合ふ時間を、なるべく多くしたい爲でもあつた。今も二人は船室の中で語り合つて居る。

『ねえ、あなた、私、もう日本へ着くかと思ふと、何だか心配で、心配でたまらなくなりましたわ。今日まで五月近くの幸福が、あんまり大きかつたんですもの……。』と、惠美子は濃い眉をよせるのである。

『それは私だつて心配にならん事はないが、覺悟はちやんと出來てるんだから、いゝぢやアないか。どんな力だつて、私と惠美さんの間を引放す事が出來やしない。だから私を信じておいでよ。』

『それはあなたを信じますわ。あなたを信ずればこそ結婚までしたんですけども、併し御兩親はほんとに私を認めて下さるでせうか。』

『どんな事をしても認めさせるさ。心配はないよ。』と、信重は大してその問題を氣にして居ない風に見えた。

彼は今までどんな無理でも兩親に許されて來て居るので、今度の事でも、多少の波瀾は免かれないとしても、結局は聞屆けられるものと、多寡を括つて居るのであつた。

惠美子もその言葉を信頼しきつては居るものゝ、何かしら本能的に心配になり出して來て居るのであつた。

『それはあなたが平民で居らつしやるなら、何にも心配はしませんわ。ですけれどもあなたと私とはあまりに身分が掛違ひ過ぎて居るのですもの……。』

『身分などを問題にするのは時代錯誤だよ。華族と平民との結

彼等は、現代自由に囚はれて居るぢやアないか。それは両親は無論承諾しようさ、怒りもするだらうさ。若し二人が結婚前に承認を求めたとしたら、やれ家憲とか、親族関係とか、いろ〳〵の面倒な問題があつて、到底許してくれさうもない事は分つて居るんだが……それだからこそ抜差のならぬやうに、先手を打つて結婚をして了つたんだが、もう結婚をして了つたものは、泣いても笑つても認めて貰ふより仕方がないぢやアないか。両親はどんなに怒るにしても、それは可愛い子の幸福になる事なんだし、結局泣く子には勝たれぬといふ事になつて了ふよ。身分とか素性とかいふ事を除いては、松尾家の妻としてどこに批難の打どころのない恵美さんたんだもの、母などは何のかんのと云つたところで最後には恵美さんに惚れて了ふのが落なんだ。それに私は将来外交官で暮すんだから、外交官の妻として、全く理想通りの恵美さんなんぢやアないか。私は誰にだつて、これは己の妻だつて誇れるんだ。両親が怒つたり苦い顔をするのは、只一時の事なんだからね、その間恵美さんに一寸辛い思ひを忍んで居て貰へばいゝのさ。』

『それはあなたの独りぎめよ。第一私はそんなに誇つて頂ける立派な女ぢやアないわ。……御両親はきつと私の素性を問題になさいますよ。』

『素性がどうのかうのと云つて、恵美さんは女の中のゼムのやうなものなんだからね、親達が一目見てくれさへすれば、それで何もかも解決されるんだ。恵美さんの身體が物をいふから心配はないよ。』

『私はあなたがその通りあんまり無造作に考へてらつしやるから心配なのよ。私、御両親が認めて下さらなかつたら、どうしませう。』

『私は生命を賭ても、恵美さんを離婚なんかしないよ。最後まで私の身體は恵美さんのものなんだ。』

彼は彼女を抱擁して、額に熱い接吻を與へた。彼女はにつこりして、

『私だつて最後まであなたのものよ。』

『それならその外の事は何も心配せずに、懐かしい日本が目の前に迎へてくれるんだ。あくまでわれ〳〵の生をエンジョイしようぢやアないか。』

『えゝ。……私、どうしてあなたがこんなに戀しいでせう、決して私を捨てないでね……。』

『そんな私でない事は分つてるぢやアないか。』

『あなたに捨てられたら、生きては居ませんよ。その代りあなただつて……。』

『私は喜んで恵美さんの手に死なう。』

『きつと覺えて居らつしやい。』

信重を見つめた眼光に、彼女の魂が宿つたかと思はれるやうな、深く彼を魅する異様な閃めきのあつた事を、彼は長く忘れる事が出來なかつた。

彼は妻を柔らかな抱擁から離して、

『どれ、もう長崎が見えるだらう。甲板へ出て見ようぢやアないか。』

『えゝ、さうしませう。』

『長崎の土を踏むのは何年ぶりなのかね。』

『十三年ぶりですの。きつと變つてるでせう。……でも懷かしいやうでもあり、恐ろしいやうでもあり、變ですわ。』

『惠美さんに取つて、たゞ懷かしいばかりの土地でない事は、私にも察しられる。併し悲しい思出や、恐ろしい思出のあるといふ事も、過去を振返つて見ると、やつぱり懷かしいといふ感情の中に包容されるものだよ。』

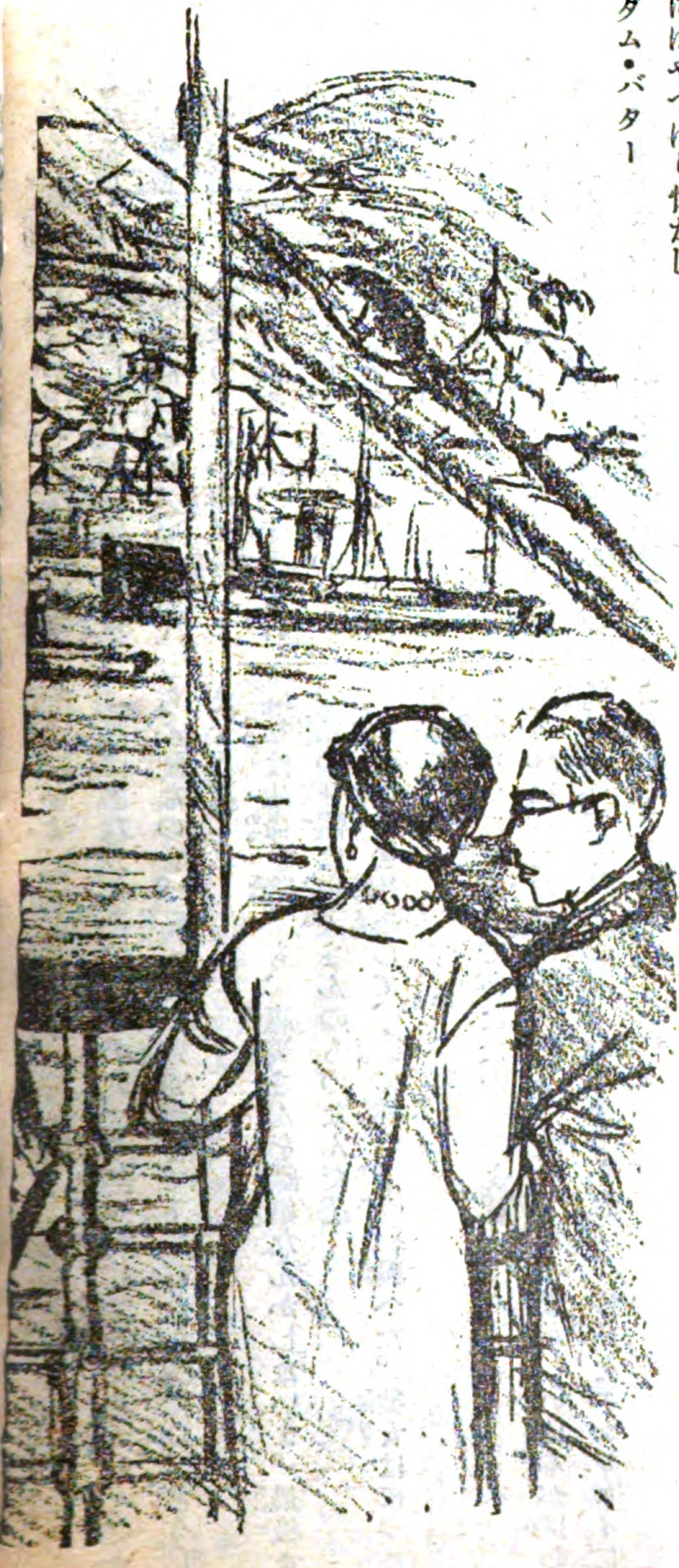
『それは懷かしいにはやつぱり懷かしいのよ。それにマダム・バターフライの故鄕でせう。どこへ行つてもあれを唄はせられるので、何だか自分がお蝶さんのやうな氣持になり切つて了ふ事がよくありましたわ。……何て可哀相な女でせう。私にもきつとお蝶さんの血が流れて居てよ。』と、彼女は感傷的に云つた。

『何を云つてるんだ。それは度々唄つて居る中に、そんな幻覺が起るのはありさうな事だけれども……お蝶さんはお蝶さんさ、惠美さんは惠美さん以外の何ものでもない。』

『でもお蝶さんの運命が、ひよつと自分の運命だつたら……。』

『下らない。そんなヒステリックな考を起すもんぢやアない。私は斷じてピンカートンのやうな男ぢやアないからね。』

『それは分つてますわ。……だけどもピンカートンだつて、そんなに責める事は出來ないと思ひますわ。それがお蝶さんの運命なんですもの……。だつて私、お蝶さんのやうに弱い女ぢや



アない事よ。』

『さうとも。恵美さんはどんな運命にだつて戰ふ強い女さ。……だから不吉な考はさらりと捨てゝ、機嫌よくあんたの長崎にお目にかゝらうぢやアないか。』

『えゝ、機嫌よく長崎の土を踏みませうね、機嫌よく……。』

二人は立上つて船室を出て、甲板へ上つて見ると、もう長崎の入口が、四月の晴やかな陽光を受けて、繪のやうに見えるので、多數の外國人始め人々は皆甲板へ出て、次第に近よる春の日本の玄關口を眺めて居た。



會見

昨日から帝國ホテルの一室を借受て居るのは信重と惠美子の新夫婦であつた。二人は長崎で二日がかりで、やつと尋ねる惠美子の叔母を探しあてたのだつた。叔母は一度亭主に死別れ、今では長崎在住の植木屋の後妻となつて、その日の生活には差支なく過して行けるのであつた。思ひがけなく錦を飾つて歸つて來た姪の顏を見た彼女の喜びはいふまでもなかつた。

惠美子は一日叔母を宿へ呼んでつもる話を仕合つた上、土産物などを與へて別れると、その翌日長崎を立つたのである。東京へ着くと、人目を避けて取敢ず帝國ホテルへ落ついたのであるが、信重は幸ひに誰にも認められずに、ホテルに入る事が出來たのだつた。

その朝惠美子はあつさりとお化粧を濟ませ、衣服も信重と共にあれかこれかと擇んだ上、なるべく清素で上品な身拵へをしたので、誰に見せても、華族の若夫人として恥かしくない上品な姿で、今朝は取分けノーブルなところが目立つて見えた。

惠美子の身仕度が出來上つたところで、信重は卓上電話を取り、麹町の自分の邸へつながせたのである。それは大膽な計畫であつたが、父を呼出して單獨にこのホテルへ來て貰ふ事とし、その上で惠美子を父に逢はせ、厭應なしに承認させて了はうとする目的の爲だつた。彼は自分の母が十時までは部屋を離れずに、父にも逢はぬ習慣である事を知つて居るので、母に知らせずに父を呼出さうため、此時間を擇んだのである。

すぐ父は電話口に立つた。信重は簡單に途中寄道した上海から、豫告なしに歸つて來た事、或必要な事情のために、麹町へは歸らずに帝國ホテルに宿を取つた事、母には秘密に父に逢ひたい事、何事も父に逢つた上でなければ説明の出來かねる事、時を移さず父には來て貰ひたい事を父に通じた。父は非常に驚いた樣子で、電話で要點を聞かうとするのであつたが、電話では一切説明の出來兼る事を繰返し、すぐ來て貰ひたい事を懇請すると、父からはそれたら兎も角すぐ出かけると云ふ返事なので、電話を切つた。

『さア、親父が來るぞ。』と、卓上電話をさし置くと、信重は笑顏で妻に向直つた。

惠美子はすつかり緊張した顏色になつて、

『あなた、どこでお逢ひになつて？』

『この室へ通すのさ。惠美さんと一緒に父を迎へるのさ。退引させず承認させて了ふにはその方がいゝよ。』

『さうでせうか。隨分心配だわ。もしかお父樣が私をお認め下さらなかつた時は……？』

『何度その問を出すんだね。その時の覺悟は出來て居る筈ぢや

アないか。併し父は兼て話してある通り、極めて平民的な上に二十年も歐羅巴で生活して來て居るんだからね、レデーにはいつでも一目置いてかゝる父なんだ。そして父はいつでも美しい女の味方になる事を心得て居る。その上に私には目がないんだ。今迄私の無理を何でも通してくれたのだから、一生一度の無理を通してくれない筈はない。尤もね、私の邸では母の方が權力が上なんで、母さへ納得すれば、父はどうにでもなるんだが、今度の場合最初に母を味方にする事は、一寸骨が折れるからね、そこで骨の折れない父の方から説落さうといふ計略なのさ。』

『それぢやアお父様がお認め下すつても、お母様がお認め下さるとは極らないぢやアありませんの。』

『それはさうだけれども、父が承認してくれゝば、後は只時間の問題さ。母も結局は承認するに極つてる。』

『お母様はそんなお難かしい方？』

『さうでもない。母だつて私を非常に愛して居るんだから、實は一か八かで、まづ母に逢つて見るのも一策だつたのさ。もういけないけれども、母なら一遍に物が極つて了つて、案ずるより産むが易いといふ結果にならぬとも限らなかつたのだ。』

『それはさうかも知れませんわ。私も何だかそんな氣がしてよ。私、あなたのお母様ならきつとお優しいところのある方だと思ひますわ。』

『母は惠美さんを見れば、きつと心が折れると思ふけれども、やはり父に逢つた方が萬全であるやうな氣がする。……惠美さん父の前であんまり固くならない方がいゝぜ。』

『固くなりさうですわ、そのつもりでは居ますけども……。私、色が青くはない？』

『青い事はないよ。丁度いゝ位にお化粧が出來て居る。衣服だつてそれで完全だ。父はまづ吃驚して了ふに相違ない。お伽噺のお姫様を連れて歸つた王子だと思ふだらうよ。』と笑つたが、併し信重とても甚だしい不安を感じて居るのは、その笑ひが空虚に響いたのでも知れた。

兎角する中に電話の鈴が鳴つたので、二人はハッとしてまた緊張した。わけても惠美子は烈しい心臓の鼓動を感じた。

果して父が訪問して來たのであつた。信重はすぐに室へ案内して來るやうにと命じた。

ボーイに案内され、ノックの音と共に入つて來たのは信重の父、松尾信高である。六十五といふがまだ少しも衰ひの見えぬ立派な體格の、口鬚こそ眞白であるが、頭は中禿のした半白の、よく信重に似た顔立で、如何にも大名華族らしい品位のある老紳士だつた。

わが子の身に何事かあつたに違ひないと、不安の顔色で入つ

て來た信高は、わが子と共に自分を迎へた洋裝の美しい女を認めると、それがあまりにも意外だつたので、呆氣に取られながら一歩扉を入つたまゝ、釘付にされたやうにそこに立留つて、疑問と恐ろしい掛念の眸子を二人の上に濺いだ。

信重は隙さず父の前に進んで、

『お父さん、よくおいで下さいました。わざ〳〵お呼び寄せ申しまして、何とも申譯がありませんが、實はさうするより外なかつたのです。御機嫌よいお姿を拜見して此上の喜びはございません。』

『併し……。』と、父が言葉を失つたまゝ相變らず惠美子を凝視して居るので、

『お父さん、あなたの御不審を解くため、まづこの婦人を引合せさせて頂きます。それが私の第一の要件でもありますから……。歐羅巴から連れて歸つた妻の惠美子でございます。』



惠美子は美くしい顏を心持染めて、叮嚀に會釋したが、つゝまやかに自からは名乘らなかつた。

信高は己が耳を疑ふほど驚ろいて、殆んど恐怖に近い表情を見せ、惠美子には會釋を返さず、たゞ説明を求めるやうに、だまつて二人を見比べた。

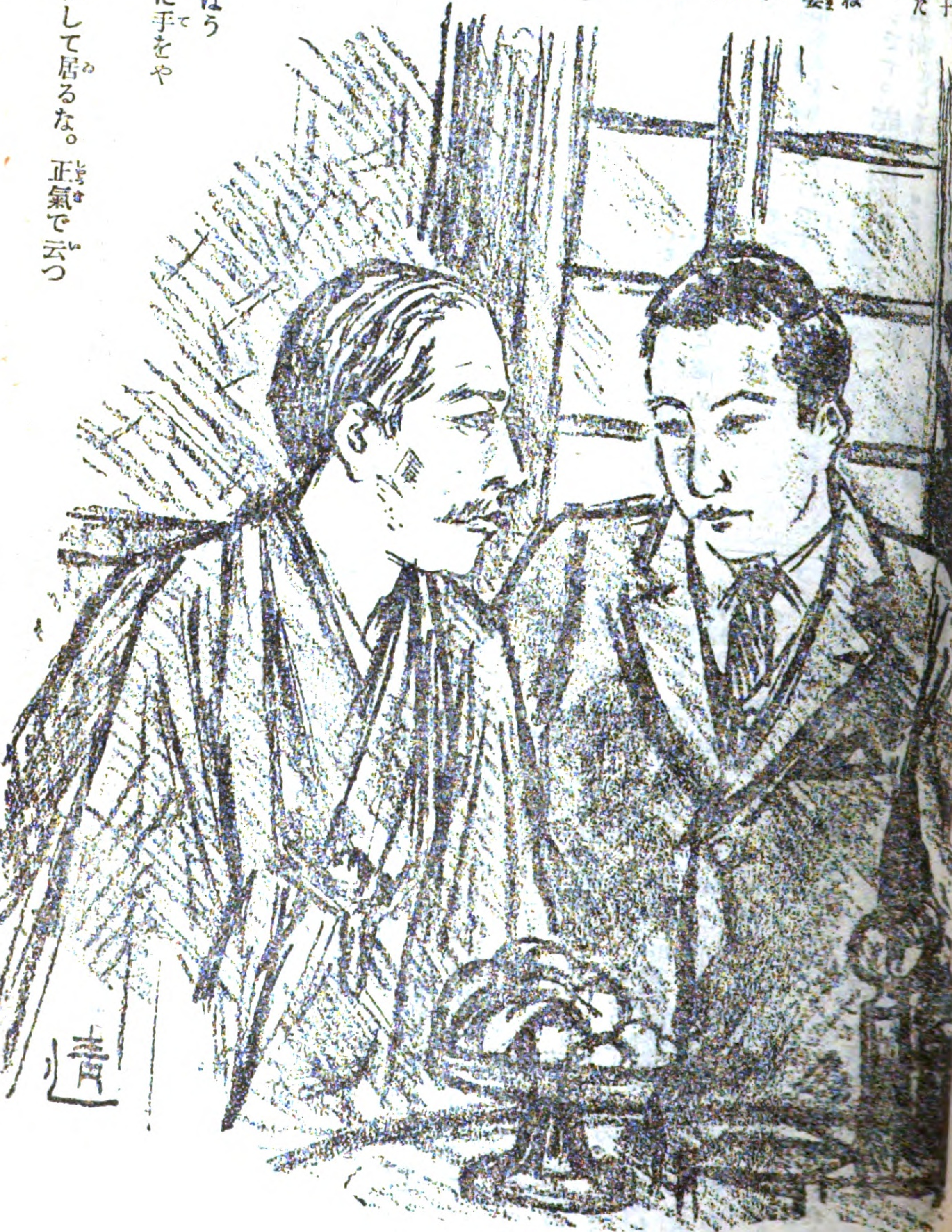
『どうぞお掛下さい。その上で説明を申上ますから……。』と、信重は椅子を進めたが、父はなほそれに掛けようともせず、答

めるやうにわが子を見据ゑて居るだけだつた。

『お父さん、重ねて申上ますが、妻の惠美子でございます。あなたの御承認なしに結婚した事をどうか、お許し下さい。それは止むを得なかつたのです。どんな事をしてもお詫はいたしますが、どうか惠美子に何とか仰しやつて頂だきます。』

信高は悪夢でも拂はうとするかのやうに額に手をやつて、

『信重、お前はどうかして居るな。正氣で云つ



て居るのではあるまい。』
『お父さん、私は今日ほど眞劍なことはありません。私の妻を認めて頂きたいのです。』
　信高の顏は怒に靑ざめて、
『わしにはそれは正氣の沙汰とは思はれん。この婦人には氣の毒ぢやが、わしはお前の妻と認める事は出來ん！』
　それは何の容赦もなく云はれたので、惠美子は思はずそこによろけようとしたのを、僅かに自から支へる事が出來た。が、彼女の顏色は、血の氣がないまでに蒼ざめて了つたのである。
『お父さん、あなたはそんな慘酷な事を仰しやるのですか。惠美子の姿を御覽下さい。私はお父さんの口からそんな無慈悲なお言葉が出ようとは、全く豫期しませんでした。』
　父は嚴肅に、
『慘酷なのはお前の方ぢや。……わしを苦しめるのは止してくれ。わしがどうしてこの婦人をお前の妻と認める事が出來る？』
『私共は立派に結婚式を擧げたのです。』
『どこでぢや。』
『伊太利のミランです。結婚證明書も持參して居ります。』
　信高は絶望の身振をして、
『お前は第一お前の母がそれを承認すると思うて居るのか。』
『私はお父さんがわれ〳〵に助力をして下さるものと信じて居りました。……お父さん、どうか少くとも惠美子に優しいお言葉をおかけ下さる事は出來ないのですか。』
　信高は惠美子の方を一瞥した。惠美子の身體が震へて居て、辛くもそこに立つて居る姿を見ると、彼は急がはしく椅子を引よせて、言葉を優しく、
『あんた、これへかけるがよい。あんたには全く氣の毒ぢやが、致し方がないのでの……さアおかけ……。』
『お父さん、あなたもおかけになつて下さい。』
　父がやつと腰をおろしたので、信重も惠美子も椅子に着いた。重苦しい暗い空氣が室の中に充渡つた。（つゞく）

戀の甘酒に醉ふ、若き二人にとつて、父の言葉は實に靑天の霹靂であつた。例へばそれは地に擲たれた水晶の玉の如く、彼等の築きあげた愛の殿堂は、無殘にも打碎かれようとしてゐる。
　思へばこの數ケ月の間、信重と惠美子は餘りに幸福であつた。あの月の明るい晩、水の都ベニスで小夜曲を聞いたのも、ホンの昨日のやうだ。然るに何といふ運命の神の戯れであらう！
　今や呪はれた彼等の前には、けたゝましく危險信號が鳴り響いて、事件は急速度の展回を見せて行く。戀か、名譽か、運命か、さても氣づかはれる二人の身の上！　是非次號をお俟ち下さい。

東西笑話選



◇秘密

『マルフイー、君は何故僕の話した秘密を裏切つて他に打明けたのだ』



『君の言ふやうなのが所謂裏切か知らん。僕は自分では秘密にして置くことが出來さうも無いと思つた時、誰でも其秘密を保つことの出來る人に話して置くのは善いことだと思つたが』

◇忘れつぽい

父『昨夜お父さんが帽子を何處へ置いたかお前覺えてゐないかえ』

子『あたいは覺えてゐませんよ』

父『馬鹿子供のくせにそんな忘れつぽいことでどうするのだ』

◇謎かけ

淀川下りの舟の中、

大阪者『お互に永い間退屈でおまんな。謎々でもやりましよか』

江戸者『そいつは面白い。やんなさい』

大阪者『いろはにほへとーーと掛けませう』

江戸者『解けねえ〳〵』

大阪者『花の盛りと解く。心は、散りぬる前ぢや』



京都者『成る程上手どすな。私が一つ、エーゑひもせすーーと掛けます』

大阪者『上げませう』

京都者『朝の別れで、ゆめ(夢)みし後はどうどすエ』

江戸者『俺も斯うなつちやあ黙つてゐたら江戸つ子の面汚しだ。サア、やけーと掛けた』

大阪者『アハヽヽ、江戸のお方だけに、氣の短かい掛けやうやな。上げまほう』

江戸者『氣の利かねえ奴と解く。心は、まが抜けてるぢやねえか』

◇生れつき

A『君は僕を馬鹿にするのか』

B『いゝや其必要はないさ、君の馬鹿は今に初まつた事ぢやなし』

◇この野郎

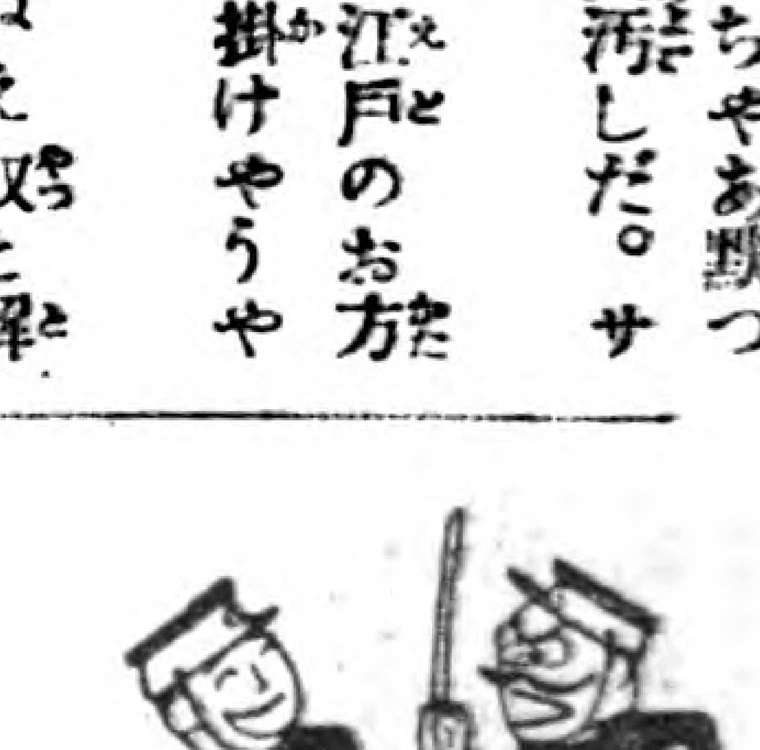
——ボーイ、この鶏は一體何だ。骨と皮ばつかりぢやないか。

——へえ、まだ何か御不足ですか。羽根でも。

◇兵法

士官『こらッ！敵に出會つて逃げると云ふ卑怯な法があるかッ！』

兵卒『決して卑怯ではないのであります。兵法の極意であります』



士官『何、兵法ッ?!』

兵卒『さうであります、地球は圓いのであります。ぐるつと廻つて敵の背後を衝くのであります。』

◇忘れ物

——赤帽や、妾の荷物はみんな積みこんでくれたね。

——へえ。

——ぢや妾の忘れ物は何んにもないね。

——いえ、奥樣、御祝儀が殘つてをります。



風雲天満双紙

佐々木味津三
小田富彌畫

前號迄の梗概――同じく大阪の與力ながら、東町奉行の大鹽平八郎は天晴れ一世の名與力と謳はれてゐたのに引きかへ、西町奉行の弓削新左衛門は、とかく賄賂を貪り、依怙の沙汰に良民を苦める不埒な醜吏であつた。――事件は、この汚吏弓削が大鹽の名聲を妬むとともに、大鹽の烱眼に罪業の摘發さるゝを怖れ、刺客を放つて暗殺しようとしたに始まる。併し幾度か刺客を送つたが果せなかつた彼は、遂に女怪教者豊田貢等を操つて盛んに政治を紊す一方、巧みに權門に取り入つて大鹽の失脚を企てた。だが、ひるまざる大鹽の意氣と明智明略は、遂に豊田を自滅せしめ、弓削を捕縛するに至つて、玆に天道定つたかと思はれた。ところが意外にも、老獪なる弓削は密に時の老中水野越前守を動かして逃亡した許りか、その水野を使嗾して、突如、名奉行高井山城守を、自分と氣脈を通ずる跡部山城守に代らしむるに至つた。姦賊！ 逆政！ 例へやうなきこの暴狀に清節の大鹽は憤然として立つた。恰もよし、門弟の捕へ來つた駕籠屋により、弓削の潜伏先の手掛りを得るや、直ちに子息格之助愛弟子井上正一郎を從へて、その追捕に向つた。が、途中不意に暗闇より飛び來つた二筋の矢に案內の駕籠屋は殺されて了つた。――固よりそれは發覺を恐れた弓削一味の拔目なき仕業であつた。――無論のことに主從三人は疾風の如く闇を追うて難なく曲者の一人を組み伏せたが、何んたる意外ぞ！ それは大鹽の學塾洗心洞にゐた門弟の平山助次郎、實は同門の高弟宇津木矩之允と美女芳香を爭うて戀に破れた意恨から塾を逐電した卑劣漢であつた。

義双一閃

一

――その時、三つの黒い影は、本殿裏の境内を驅けぬけて、玉垣を乘り越え乍ら、必死と天滿橋の大通りめがけて、逃げ伸びようとしてゐるところでした。

『街場へ這入つたら事面倒ぢや！　手に餘つたら怪我させてもよいゆゑ、ひとりだけでも取つて押へろッ。』

下知し乍ら平八郎は、走り惡い雪駄を脱ぎ棄てると、自らもそのいち人を目ざして、懸命に追ひかけました。

しかし、惡い偶然です。玉垣を乘り越えて、左に突き當つた街角には、お倉屋敷の新築普請場があつたので、廣いその作事場に逃げ込んでいつたら、材木なぞが邪魔になつて、見失ひはしないだらうかと危んでゐましたが、對手もさる者、早くも屈強な逃げ場と知つたものか、果然三つの黒い影は、脱兎のやうに驅け込むと、三手に分れ乍ら積みあげてあつた材木の中に逃げ入りました。

『小癪なッ。背の高い奴が向ふへかくれたぞッ。格之助追ひかけろッ。正一郎は左を追跡せい！』

指圖し乍ら平八郎は、素早く小柄を抜きとると、必死に材木を乘り越えて、逃げ伸びようとしてゐた眞中の黒い影目さし乍ら、ハッシと手裏剣を打ち放ちました。

……たしかに太股のあたりへ、命中したらしい手應へがあつたのに、追ひかけていつた時は、どこへ逃げかくれたものか、煙のごとく消え失せたあとでした。しかも點々として、紛れなき血の滴りが見えるのに、天に驅けつたか地にもぐつたか、杳として姿が見えなかつたので、さすがの平八郎も、地團駄踏んでいぶかつてゐるとき、口惜しさうに齒ぎしり噛み乍ら姿を見せたのは、養嗣子格之助です。

『なに！　では、そちも取逃がしたか！』

『はつ。殘念で厶ります！　材木の陰へ逃げ這入つたところを、確かに見屆けましたが、いくら探しましても、見當らないのでござりまするよ！』

だがあとにはまだ荒門弟大井正一郎と言ふ、慓悍無頼の小氣味よい立役者が一枚控へてゐる筈です。よし猿は木から落ちることがあらうと、かう言ふ場合に於ける慓悍兒正一郎に、手抜かりがあらうとは思はれないことでしたので、多分の望みをかけ乍ら待つてゐるとき――、果しておぼろ闇の向ふから、手柄顏に呼び叫んだ快男兒の聲がありました。

『先生々々！　一匹締めあげましたぞッ。』

一緒に、どたりときこえた地響は、まさしく正一郎十八番の、岩石落しにでも掛けたらしい物音です。

『どこぢや！　どつちぢや！』

『ここで厶りまするよ！　この石垣の下で厶りまするよ！』

『さうか！　大切な囮ぢや。殺すでないぞ！』
材木の山を躍り越えて馳け近づくと、馬乘り締めに正一郎が押へ取つてゐる對手の顏をぐいとねぢ向けて、その覆面を剝ぎとりました。
しかしそれと同時に平八郎は、思はず驚きの聲をあげました。
『よよッ。そちは、そちは、平山でないか！』
何たる奇怪！　首改めをしたその覆面奴は、いつぞや風のごとくに洗心洞から姿を消した、股肱の同心のあの平山助次郎だつたからです。と知つて、格之助もぎよつと打ち驚きましたが、より驚いたのは、當の手柄を立てた正一郎でした。
『大恩ある先生に向つて、弓引くとはまた何としたことでムります！　あなたには人の血が通つてをりませぬか！』
襟髮取つて、小突き廻はすやうに引き据ゑると、痛烈に面罵を加へました。然るに助次郎はむしろ不埒でした。
『何を手荒なこと致されるかッ。手前先生になぞお刄向ひした覺えムらぬわッ。』
奇怪千萬にも抗辯したので、多血兒正一郎が激怒したのは當り前です。
『猛け〴〵しいことを申されますなッ。黑を白と言ひくるめましても、先生のお目を掠めることはなりませぬぞッ。身に覺えのないものがなにゆゑお逃げなされました！』
『知らぬ！　知らぬ！　何と言はれようとうしろ暗い事など一つもないわ。所用あつて、あの境内まで行き會はせたら、不意に騷がしう追ひかけて來る足音があつたゆゑ、關りあつたら迷惑と逃げたのぢや。いか程責められようと、覺えのないものは覺えないわ！』
懸命に言ひ爭つてゐるのを、傍でぢつと見守つてゐましたが、
『よし、退け。わしが聞いて遣はさう――。』
去らして、自ら平八郎が取つて代ると、峻烈に急所を衝き抉ぐりました。



『その所用とは何ぢや?!　疚ましい用でなかつたならば、人の怪しむ覆面なぞせいでもよい筈――。何用あつて今頃あのやうなところをうろうろ致しをつた?!』
『それはその……。』
『それはそのが何ぢや?!』



『いいえ、滅、滅相もムりませぬ！ 滅相もムりませぬ！ 實は、先生さへお許し下さいましたら、從前通りに今一度御門人の端にお加へ願はうと存じまして、ひと目を忍び忍びあれまで參りましたが、やつぱり敷居が高うムりましたゆゑ、とつおいつ思案に耽つてをりましたところ、矢庭とけたたましい物音がムりましたゆゑ、見咎められたら面倒と存じまして、何かは知らず夢中でこれまで逃げ走つたのでムります。』

『なに！ 今一度歸參したいとな！ ――ふうむ！ さうか！ では、飽まで今逃げ走つていつたあの二人とは、關はりないと言ふのぢやな！』

『ムりませぬ！ ムりませねばこそ、先程から正一郎どのにもそのこと、口くどう申上げてゐるのでムります。』

『しかと間違ひないな！』

『手前も先生のお教へうけた助次郎めにムります。いいえ、その御仁德を慕ひますればこそ、かうしてまた恥もなくお願ひに參つたわたくしめにムります。誓つて僞りムりませぬ！』

眞か、僞か、悪びれずに申立てた助次郎のその言葉をきくや同時でした

『よし。ではもう深く咎めまい。正一郎、格之助、參らうぞよ。助次郎もそのつもりならば、今宵からなりと歸參致せ。』

充分疑ふべき節々がまだ殘つてゐる筈なのに、何思つたか、ふいつと温顔に返へつたので、慓悍兒は呆つ氣にとられた面持でしたが、しかし平八郎は至つて靜かでした。

『可哀さうな駕籠かき共は、どこぞ最寄りの同心屋敷へ知らして、懇ろに弔ふやう、言ひおいて參れよ。』

正一郎に命じておくと、何ごともなかつたやうな足取りで、弓削追跡すらもそのまゝ打ち切り乍ら、助次郎共々屋敷に引揚げました。

二

いかにもその態度が不審でしたので、息ばみ乍ら正一郎が、ひと足おくれて駈け戻つて來ると、構はずにづか／＼と書院へ押し入り乍ら、不平さうに打ちまけました。

『先生としたことがまた何としたので厶ります?! 何から何までが怪しい節ばかりで厶りますのに、このまゝお差し許しなさりますとは、お目が狂ひまして厶りまするか！』

『叱ッ。聲が高い！　控へろ！』



『大丈夫で厶りますよ！　大丈夫で厶りますよ！　平山樣なら只今門人部屋の方へ参りましたゆゑ心配厶りませぬよ。どう考へましても、あの曲者達とは同じ穴の貉だと思はれますのに、一體何としたので厶ります!!　まことしやかなあの佞辯に誑らかされましたので厶りまするか！』

つけ〳〵と言ひ詰じつたのを聞き流し乍ら立ち上ると、でももしや、と言ふやうに書院の外を見撿べてゐましたが、明智つねに鏡のごとく、慧眼一度として狂つたことのない平八郎です。いかで助次郎ごときに誑らかされてなりませうぞ！　莞爾として笑みを見せると、事もなげに言ひました。

『平八郎の目はまだ黒いつもりぢやわ。これしきのこと、見透しがつかいで何とするか。同じ穴の貉と睨んだればこそ、わざと化かされたのぢや。』

ずばりと言ふと、しかも不意でした。

『ちと新手を工夫せねばならぬ。芳音どのがゐたら、こつそり呼んで参れ。』

『お待ち下されませ。お待ち下されませ。呼んで來るはよろしう厶りまするが、では、何で厶りまするか。何もかも御承知の上で、お歸参許しましたので厶りまするか。』

『念もないわ。弓削の破牢を手引したのも助次郎なら、半弓放つて寄來した小人共を案内したのも同じあ奴ぢや。いやそればかりではない。白々しう歸参を願うて來たのは、この洗心洞に入込で、平八郎の動静探らうとの間諜に相違ないわ。それと知りつゝ申したは、毒を以つて毒を制しようと、孫呉の兵法を真似たのぢや。さればこそちと奇策を用ひねばならぬゆゑ、お手すきだつたら、内密にお頼みしたいことがあるからと申して、門人共にも誰にも氣どられぬやう、こつそり芳音どのを呼んで参れ。』

命ずると、胸中すでに成算あるかのごとく、静かに芳音の來るのを待ちました。――やがてのことに、

『芳音、控へまして厶ります。』

爽やかな聲と一緒に三つ指つき乍ら、清楚な姿をそこの廊下先に見せたのは、待たれたその芳音です。黒色づくめの薄物が、心憎い程までにしつくりと、﨟々しげな面差しに映り榮えて、なだらかに引かれた肩の線。ふつくりとふくよかな胸のふくらみ――。そして眥しらにぱつちりと見開かれた双の瞳は、日毎に氣高さを増したのではないかと思はれる犯し難い氣品を漂はせて、さすがは繪筆とる女性と肯かれる程の美しさでした。

その叡智そのもののやうな美しい姿を静かに見迎へ乍ら、

『聞かれてはならぬ。念のために正一郎張り番いたせ。』

見張りに立たせて、こちらへ――、と言ふやうに芳音を目顔で誘なふと、眞に唐突でした。

『そなたのお命、平八郎にお預け下さらぬか。』

『えッ……？』

『なりませぬか。』

『…………?!』

ずばりと言つた言葉の謎を讀まうとするやうに、ぢツと暫く平八郎の面を見守つてゐましたが、さすがに芳音は天晴れな賢女です。

『預けよと仰有いますのは、命すてる覺悟で、わたくしめにお手傳ひせよとの御謎で厶りまするか。』

『左樣ぢや。お覺悟ついて厶るか。』

『つかいでどうなりませう！　御恩報じとなりますことなら、いつからなりと、どのやうなお手傳ひでも致しまするで厶ります！』

聰明そのもののやうな明眸に、凜とした決意の強さを現はし乍ら、聊かの躊らひもなく言ひ切つたので、平八郎は滿足げに肯くと、傍の硯、料紙を取寄せて、そもいかなる奇策に出ようと言ふのか、意外にも奉行高井山城守に宛て乍ら、立ちどころにすらすらと、次のごとき一文を書きしたためました。

『――先程はお取込のところ御邪魔仕り失禮致し候。その節御内命に依れば、水戸烈公のお力を借り受け、將軍家に御上申奉つて、當大阪表に於ける米價吊り上げの不埓なる奸賊を一網打盡に糾彈するやう、然るべく密々に手配致せよとの御諚に候ひしが、歸邸以來平八郎篤と熟考仕り候ところ、奸賊共の背後にはどうやら容易ならざる黑幕の人、介在致すらしき節々判明致し候まゝ、御内命の趣きこの際の處置として至極當を得たる上乘の策と決斷相つき候ゆゑ、仰せを畏み江戸表へ兩名、水府へ同じく兩名、只今門生中より屈強な密使選み出し、御下命の條々しかと申含め、密々にて出立致させ候間よろしく御安堵被遊度、さる上は遲くもこの月末あたり迄には、水府公より何分の御沙汰有之べき事必定に候まゝ、それ迄は御前におかせられても萬難を排し當地に御滯留被遊、奸賊共糾彈にお力お貸し賜はり度、序で乍ら右懇願奉り置き候。詳しくは拜眉の折に讓り度。

平八郎　頓首再拜。』

しかもそのいぶかしい一文を書き終ると、嚴封でも施すかと思ひのほかに、至つて不安心な文筥に入れ乍ら、

『芳音どの暫く座をおはづし下さらぬか。』

去らしておいて、正一郎に愈々不審な命令を與へました。

『至急に助次郎を呼んで參れ。』

『…………?!』

『何をぱちくりやつてゐるのぢや。連れて參らばよいわ。早う呼べツ。』

のみならずその助次郎が伴はれて來たのを見ると、さらにいぶかしくも謎のやうな命令を與へました。

『早速ぢやが、この文筥を今すぐに高井山城守樣へ屆けて呉れぬか。弓削めを取つて押へる手管書いた大切な密書ゆゑ、開封してはならぬぞ。よいか、途中も抜かるなよ。』

命じ作ら助次郎の擧動をぢッと見詰めてゐましたが、大切な密書と言つた一語に怪しく目を光らし作ら、そそくさとして立去つたのを見送ると、すでに事半ば成れりと言ひたげに會心の笑み打ち洩らし作ら、平八郎のさしまねいたのは、誰ならぬ賢女芳音です。

『頼みはあれぢや。見つからぬやう、すぐさま助次郎のあとおつけ下されよ。』

『分りました！　では、あの、もしや不審なことが厶りましたら――？』

『念もない！　おしらせ下さらば、すぐさま押へに參りまするわ。』

『心得まして厶ります！　では、いづれのちほど……。』

頼むだ者もまことに大膽、頼まれた芳音もまたまことに不敵。實に平八郎が賢女芳音に、命賭けてくれぬかと言つたあの謎の眞意は、助次郎尾行の驚くべき大任なのでした。しかも、か弱い女の身一つで追跡させたので、慓悍兒正一郎が目を丸くしたのは尤も至極です。

『いぶかしい事ばかりなさいましたが、あの文筥は一體何のお禁厭で厶ります?!』

『合點行かぬか。』

『…………?!』

『血のめぐりの鈍な奴よ喃。あれこそは弓削めの在所を探り出す大切な餌ぢやわ。わざと不要心な文筥に入れてやつたは助次郎に中を讀ませるためぢや。密書ゆゑ讀むなと言へば、讀みたうなるが人のつね。讀まば事重大とばかり弓削めの潜伏先へ密告するは必定ゆゑ、芳音どのに尾行させたのぢや。今頃は助次郎めがあれを開いて、狼狽してゐるぞ。』

『なら――。』

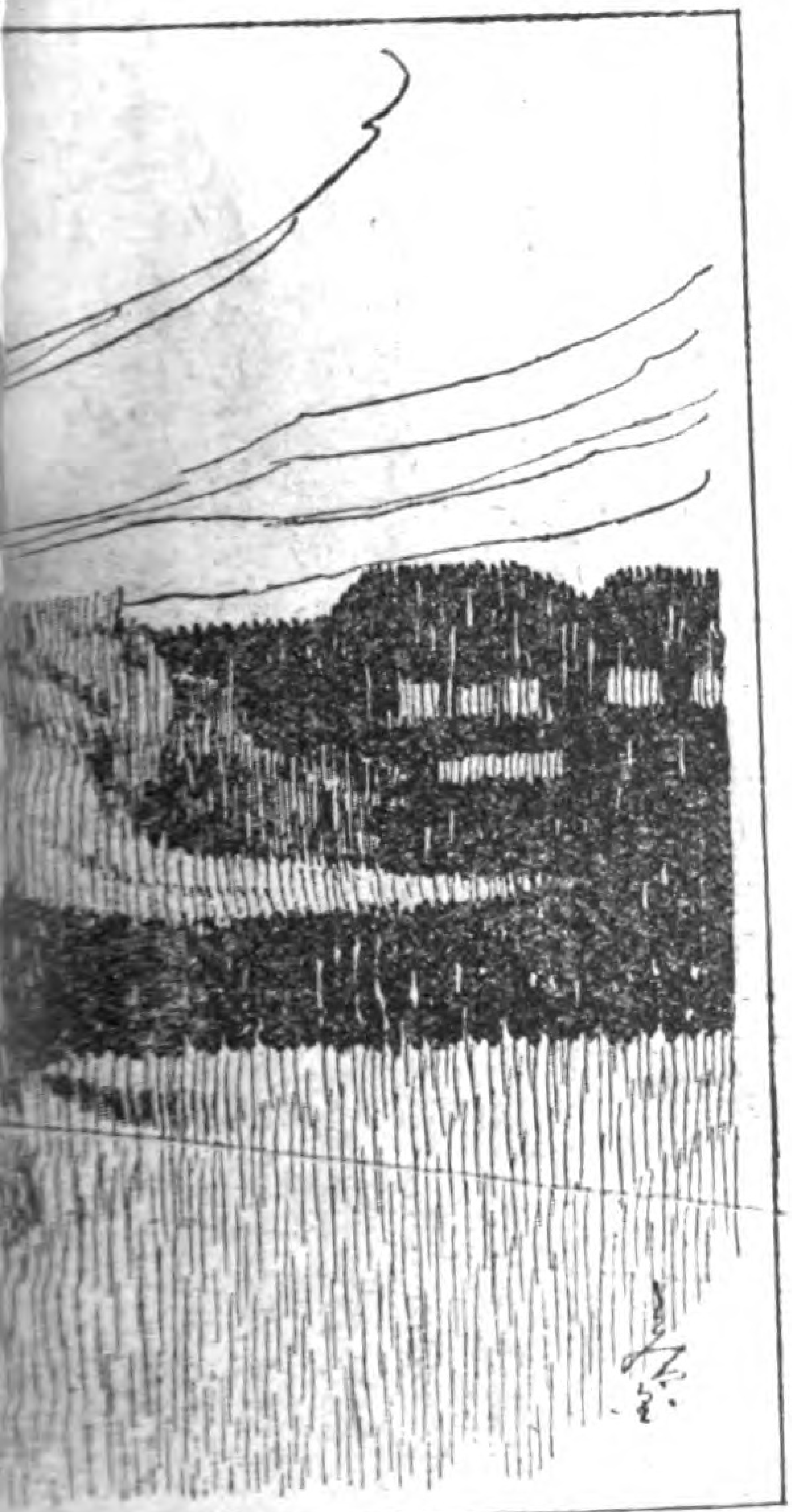
『何ぢや。』

『手前にこそ尾行の役目お命じ下さればよろしう厶りましたの

に、芳音様へお言ひつけとはまた何としたことでムります?!小人乍ら助次郎様もなかなかの手練れ者でムりますゆゑ、心元ないではムりませぬか!』

『分らぬ奴よ喃。對手が手練れ者なればこそ、細心機敏な芳音どのを特に使うたのぢや。洗心洞にも塾生共は澤山ゐるが、芳音どのにまさる賢い者はひとりもゐぬわ。それに芳音どのならよし氣づかれたにしても、あの通り戀慕の弱味ある助次郎ぢや。愈々となつたら弱味につけ入つてなりと、助次郎めをとりこに致して、今に必ず芳音どのらしい機敏な吉報届けて參るに相違ないゆゑ、報らせが參らばいつ何時なりと驅けつけられるやう、馬の用意でもせい!』

事もなげに正一郎の不安を拂ひのけておくと、靜かに刀架の大刀拔き放つて、斬れ味いかにと言はぬばかりに、ぢいツと見入つてゐましたが、不審とも不審! 不氣味とも不氣味! 平八郎はさらにいぶかしい品物の用意を



ました。

『格之助!——格之助はいづれぢや。ゐたら三寶と首桶を調へい!』

三

そのまにも時は次第に經つて、暗からず、明るすぎず、追跡尾行するには絶好なおぼろ闇の秋の夜は、死のやうな靜寂と共に刻一刻とふけ渡り乍ら、やがてのことに初更を告げる鐘の音が、大川越えていんいんと響き傳はりました。

正面正座に平八郎、右に養嗣子格之助、左に慓悍兒正一郎。——その中央に三寶へのせた不氣味な首桶を打ち据ゑ乍ら、三人は緊張に青まつた三つの面を、明滅する短檠の灯影に集めて、いづれも元より無言、しはぶき一つ洩らさずに、張りつめた沈默をつゞけ乍ら、今か今かと芳音からの報らせを待ちわびました。

と——、啼きすだいてゐた虫の音がピタリと止まるや同時に、

吉か!?——。

凶か!?——。

表の方に當つて、突如、けたゝましく言ひ叫んだ聲がきかれました。

音様と仰有つたから、火急の使者に厶ります！』

『それ参つた！ 早う行けッ。』

慓悍児また何の躊躇がありませうぞ！ 立ち上る、馳け出す、馳け戻る、殆んど一瞬でした。矢玉のやうな早さで戻つて來ると、だが、使ひの者から受け取つて來たその品は、奇にしてすこぶる妙妙！ 書面ででもあるかと思ひのほかに、只の半紙へひねつた一ひねりの米粒でした。しかもその米の數はたつた六ッ！

『よッ。』



『何でムりませう！』

『…………?!』

『何の謎でムりませう?!』

怪しみいぶかつて、左右から格之助正一郎の二人がきゝ尋ねたのを、平八郎は默然としてやゝ暫し打ち案じてゐましたが、送つた芳音も一代の賢女なら、これを解く天満の棟領もまた一世の賢人でした。會心さうに莞爾として打ち笑むや、ずばりと言ひ放ちました。

『さても見あげた賢しさぢや。このやうな賢女想ひ人に持つた知之丞が羨やましい位ぢやわ。弓削めの潜伏先は堂島問屋の六軒目と決つたぞ！』

『えッ。すりやまたどうしてお分りにムります?! どこにそのやうな證據ムります?!』

『これしきのこと、合點行かいで何とするか！ 米が證據ぢや。數が證據ぢや。米に縁あるところと言はゞ、江戸なら蠣殼町、浪花ならば堂島と人の口の端にものる位でないか。六粒はその六軒目との謎に相違ないわ。早う馬曳けッ。』



命じて、三寶首桶を自ら抱へ持ち乍ら、ひらり馬上の人となると、

『おくれずつゞけッ。』

そして一鞭。正一郎格之助兩人を打隨へ乍ら、たゞちに堂島目ざしました。戞つ、戞つと、馬蹄はおぼろ闇に冴えまさつて、つゞく正一郎格之助の額に散る前髪は、勇ましいと言ふよりもむしろ美しい位でした。

かくして走りつけた時は丁度五ツ下り。名にし負ふ堂島の米問屋町は、軒ごとにもう大戸を下して、晝の繁華も忘れ顔に、ひつそりと灯りも洩れぬ靜けさでした。平八郎また細心です。物々しい蹄の音に、起き出して騷がれてはと、そこの通り角で馬を乘り棄てると、一軒、二軒、三軒――數へ乍ら首桶抱へもつて、足音殺し〳〵行き近づきました。

と――、果然、平八郎の推斷は的中いたしました。目ざとくも三人の影を認めたと見えて、數へていつたその第六軒目の、特別大構へな店先の積みあげた天水桶の陰か

紛れなき芳音です。
『お！　大任御苦勞でムつた。助次郎めの容子はどんなでムりました?!　見咎められは致しませなんだか。』
『は。ほんとに天祐でムりました。お屋敷を出ると、すぐにあの文筥を開いて、こつそりお讀みのやうでムりましたが、何やら大變うろたへ乍ら、夢中の容子でこちらへやつて參りましたゆゑ、幸ひ見咎められずに、大切な役目果すこと出來ましたのでムります。』
『では、きやつもこの屋のうちに一緒でムりまするな。』
『いいえ、ほんの今少し前、また大急ぎであの文筥抱へ乍ら、御番所の方へ行つた容子でムります。』



ちや。では正一郎、あそこの忍び窓へし乘り越えて、中から庭戸をあけろ。物音立てたら感づいてまた逐電するやも知れぬゆゑ拔かるなよ！』
かくならば、すべてこれ慓悍兒正一郎の獨擅上です。身輕に乘り越えたかと見るまにそこのくぐり戸が手もなく口を開けたので、萬一亂鬪になつた場合の危險を避けさせるために、殊勲者芳音を安全な物陰に忍ばせておくと、三寶に打ちのせた首桶抱へもち乍ら、平八郎はたゞちに奥庭へ押し入りました。
と一緒に、主從三人の目を等しく射たものは、そこの奥座敷らしいひと間の障子にぽつかりと映つて見えるいくつかの黒い影法師です。
數は都合四つ——。
右の二つは、凡らくそ奴等が不埒な米價吊り上げのからくり

探つてゐる奸商共に相違ない町人髷でした。

それから眞中にでつぷりと肥つたうしろ姿をうつしてゐるのは、紛ふかたなき仇敵弓削新左衛門です。

しかし、その左隣の、床前らしい位置から、ひと際はつきり濃い影を映つして見える姿が、少しばかり奇怪でした。かやうなよからぬ會合に、參畫してはならぬ高い身分と公職をでも持つてゐるのか、ひと目を憚るかのごとくにすつぽりと宗十郎頭巾で面をかくしてゐる黒い影がありありと映つてゐたので、何者か？――期せずして正一郎格之助の兩名が、いぶかり乍ら色めき立つたのを、

『騒ぐな！　騒ぐな！』

目交ぜで制し乍ら、ぢッと見定めてゐましたが、元より烱眼の平八郎、推斷また神速でした。

『怪しからぬ！　睨んだ通りぢやわ。同じ山城守でも高井の御前とこちらとは雲と墨の相違ぢや。まさしくあの影法師こそは、今度お新任の御奉行跡部山城守殿に相違ないぞ！』

『えツ――。それなら?!』

『誰であらうとよからぬ策謀にふけつてゐるのを目撃しては恐るゝに足らぬ。しかしそち達には憚りあるお方ぢや。押し入つては相成らんぞ！』

二人の者を押へておくと、首桶抱へ持ち乍ら、單身怯む色なく靜かに障子をあけて、無言のまゝずいと密議の席に押し入りました。



同時に、居合はした四人の面々が、一齊にぎよツとなつたのは言ふまでもないことでした。殊に新奉行跡部山城守の、頭巾からのぞかせてゐる面上には、さツとけはしい色が散りました。弓削また然り！

けれどもそれは一瞬のことです。恐るべき平八郎が、首桶抱へ持つて面前に姿を見せたので、當然うろたへ乍ら、逃げ走りでもするだらうとは思はれたのに、弓削新左衞門は不埒と言ふよりもむしろ不敵でした。三日のちには平八郎の上役ともなるべき、新奉行山城守の權勢にかくれてゐたら、よもや平八郎も手出しなるまいと思ひ上つたものか、狼狽をかくし乍ら、憎々しげに嘲り笑ふと、言はずもがなの憎たれ口を利きました。

『その首桶は、わしの首を入れようと言ふのか、それともおぬしの首を入れるつもりか！　今までの弓削ぢやと思ふとあてが違ふぞ！』

しかし天滿の棟領は不氣味なほど靜かでした。無言のまゝ首桶を三寶の上にのせて、膝に打ちすゑると、何たる森嚴さであつたか！　襟を正し乍ら默つて頭巾姿の跡部山城守に一禮するや、じり、じりと新左衞門の方を向き直ると、恐るべきあの眼です！　冷たく氷のやうに鋭いあの眼です！　脊の筋までも寒くなるやうな、鋭いそのまなざしで、無言のまゝぢッと新左衞門を見据ゑてゐましたが、――刹那！　われらの傑平八郎の右手がその腰なる天明行廣にかゝつたかと見るまに、エッ！　――あざやかと言ふも愚かな一閃でした。汚人、奸賊、不潔不逞のしれ者弓削新左衞門のそッ首は、義人大鹽中齋の神道無念流は奥義の秘手なる居合斬りの一閃にかゝつて、ぽろりと飛び散りました。



『よッ、――。』

『……。』

『まてッ。』

『……………。』

『またぬかッ。』

愕然とし乍ら、鋭く跡部山城守が呼び止めたのを、平八郎は無言でした。そして林のやうな靜けさでした。汚血に穢れた行廣を靜かに懐紙で拭ひ乍ら、靜かに鞘へ納めると、天誅加へた新左衛門の生首を、默々と用意の首桶へ入れて、騒がず、迫らず、頭巾姿の山城守に默禮し乍ら、すうと表の方に立ち去りました。しかもなほ林のやうな靜かさでした。

『馬曳けッ。』

そして首桶三寶抱へもつたまゝ打ち跨ると、トウトウ、トウトウと、冴えまさつた蹄の音を、しつとり垂れたおぼろ闇の秋の夜の街々に殘し乍ら、たゞちに高井山城守のお役宅に驅け向ひました。

四

『御前!』

『……………。』

『高井の御前!』

同じ山城守でも、雪と墨の相違ありと平八郎が斷じたその高井山城守は、その時、お役宅奥書院の廣やかな濡れ縁ぎはに、只御いち人、寂然として打ち佇まれて、庭前の楓に動く秋の夜風をきゝ入り乍ら、靜かに秋思の詩を口ずさんでゐられるところでした。

夜深月桂孤輪影。
秋淺風槐一葉聲。

詩は誰の詠じたものか聞くだに寂しく、聲また朗々として胸を打つ寂しさがあつたので、やゝ暫し平八郎はためらひましたが、思ひ切つてまた呼びかけました。

『御前!』

『おゝ!』

『……………。』

座に就かれるのを待ちうけ乍ら、膝をすゝめると、平八郎は小脇にしてゐた首桶を三寶に打ちのせ乍ら、默つて御奉行の面前にさし出しました。

『なに! では……。』

『御餞別に厶ります。』

『ふうむ! さうか! 誰の首ぢや!』

『お檢め下さりませ。』

『…………。』

『…………。』

『よッ。――ふうむ! こやつか! とうと天誅加へたな!』

『はつ……。』

『では……。』

『お推しの通りよからぬ人の影が黑幕に動いて厶りまするぞ。』

『あれか!』

『はつ。まさしく跡部樣が、――いや、申しますまい。そのお方の御面前で、これなる奴、首にしまして厶りまするわ。』

『なに！　さうか！　そちらしいきびしさぢやな。では――。』

『平八郎の身邊にも後難がふりかゝるぢやらうとの御懸念に厶りまするか。』

『うむ。いかゞ致す覺悟ぢや。』

『萬事はここに厶ります！』

凛として言ひ乍ら、強く大きくその胸を叩いたとき！――。

突！　何たる奇怪ぞ！　打つたは誰か！　何人か！

開け放たれた庭先から、音もなく一本の手裏劍が飛來すると、プツリ、首桶に突き刺さりました。

しかもその柄頭には、次のごとき威嚇の文字がかゝれた紙片が結びつけられてありました。

『――平八郎とて容赦はせぬぞ。汝自らの墓穴を掘るやうなものぢや。篤と考慮いたせ。』

（つゞく）

私の大きな期待

中村武羅夫

風雲天滿双紙――その書き出しの巧さなど、まさに天下一品！　それに事件は目まぐるしく轉廻し新たな場面から場面へと、急テムポに變化して行くのである、讀者は息を吐く暇もなく、忙しく、次ぎから次ぎへと、追うて行かなくてはならない。眞に息苦しくなるやうな緊張感だ。

天保の快傑大鹽平八郎を描くのに、作者は渾身の努力を傾けてゐる。この熱と、力とが、先づ、讀者の胸を、ぎゆつと摑んで放さない。作家が創作の筆を執る場合、技はもちろん大切であることは言ふまでもないが、技よりも更に大切なものは熱である。技は衣であり、裝ひであるに過ぎないが、熱は血であり、肉であり、魂である。しかも、技に秀でて、これに熱の伴はない作家が多い中に、この作者は、あり餘るほどの熱を持つてゐる。「風雲天滿双紙」の一篇が、生きて躍つてゐる所以である。

これから、どう發展して行くか？　熱で大鹽を摑んだ作者が、技を以て、どれだけにこなして行くか？　これが、この小說につながる私の大きな期待と興味とだ。

ふらんす土産

藤田嗣治



藤田畫伯の自畫像

一九一六年頃、自分は自分のすべての、謂ゆる世間體の財産は悉く賣りつくして、それこそ本當に洋服のポケットのやうな小さな部屋で、破れた毛布を床板に敷いて寢てゐた。窓の硝子の破れには新聞紙をはつて孔をふさいだり、ランプには石油もなくて隣の燈火を利用したりしてゐた。寒い冬の夜を凌めるために、机も椅子もカバンも燃してしまつた。この上は借家の根太を剝がしてゆくより外のものはなかつた。事實、自分には自分の身體と力の外に何もなかつた。しかし、自分は些しも悲觀はしなかつた。蝸牛のやうに小さな殼を脊負つて不自由な思ひをするより、自分は裸一貫の殼なし蝸牛でこれからやつて行かうと考へて、非常に愉快であつた。

○

佛蘭西の藝術家や學者は、皆自分と同じやうに苦しんで來てゐる。自分の先輩や友人も皆悲慘な勉强を共にして來た。中にも或る畫家などは、不幸があまり長くつゞいたので、一躍成功して豫期しない大金がはいつたために發狂した友人もある。また或は、不意の收入に驚いて、山と積んだ金貨の中に坐り込み、部屋中四方八方に金貨を投げ散らし、その黃金の雨に叩かれたものもある。つまり、あまりにも苦しめられた金に身體中を觸れてみたかつたのである。彼等は金が出來て却つて不幸を見るやうな悲慘な結果を來すほどに貧苦に責め呵まれたのである。

○

巴里といふ所は、金がいくらあつても足りない所だし、また無くても堂々と威張つてゐられる所だ。人々は皆めい〳〵自分のために生きてゐて、ひとのために生きてをらぬ。つまり見榮坊でない。

それから吾々の大いに學ぶべき點は、根氣が非常に強いといふことである。飽くまで一つの事に一貫して倦まず撓まずやつてゆく。兄弟の學者が、十八年もかゝつて、埃及の古代

文字を研究し、たうとうそれを讀み得るやうになつた。ところが、あまりの嬉しさに卒倒して、三日間眼が醒めなかつたといふ話もある。

つまらぬ事のやうだが、四十何日間斷食したとか、四十八時間踊りぬいたとか、六日間も晝夜打つ通しで自轉車を走しらせたとか、さういふ事を歐米人はよくやる。つまり根氣が強いのである。

○

それから佛蘭西人は、時間の浪費を非常に惜しむ風がある。前首相ポアンカレーとか外相ブリアンとか、さういふ人は、僅か三時間か四時間しか睡眠をとらないで自宅にまで澤山の仕事を持つて歸つてやつてをる。かうして自分がそれだけ仕事をすれば、國のためにもなり、また自分の爲めにもなるといふ。仕事に對する慾が大變多い。これはひとり政治家に限らない。文學者でも音樂家でも、舞踊家、畫家皆然りで、少くとも八時間から十時間、或は十六時間十七時間の勉強をしてゐる人が少くない。



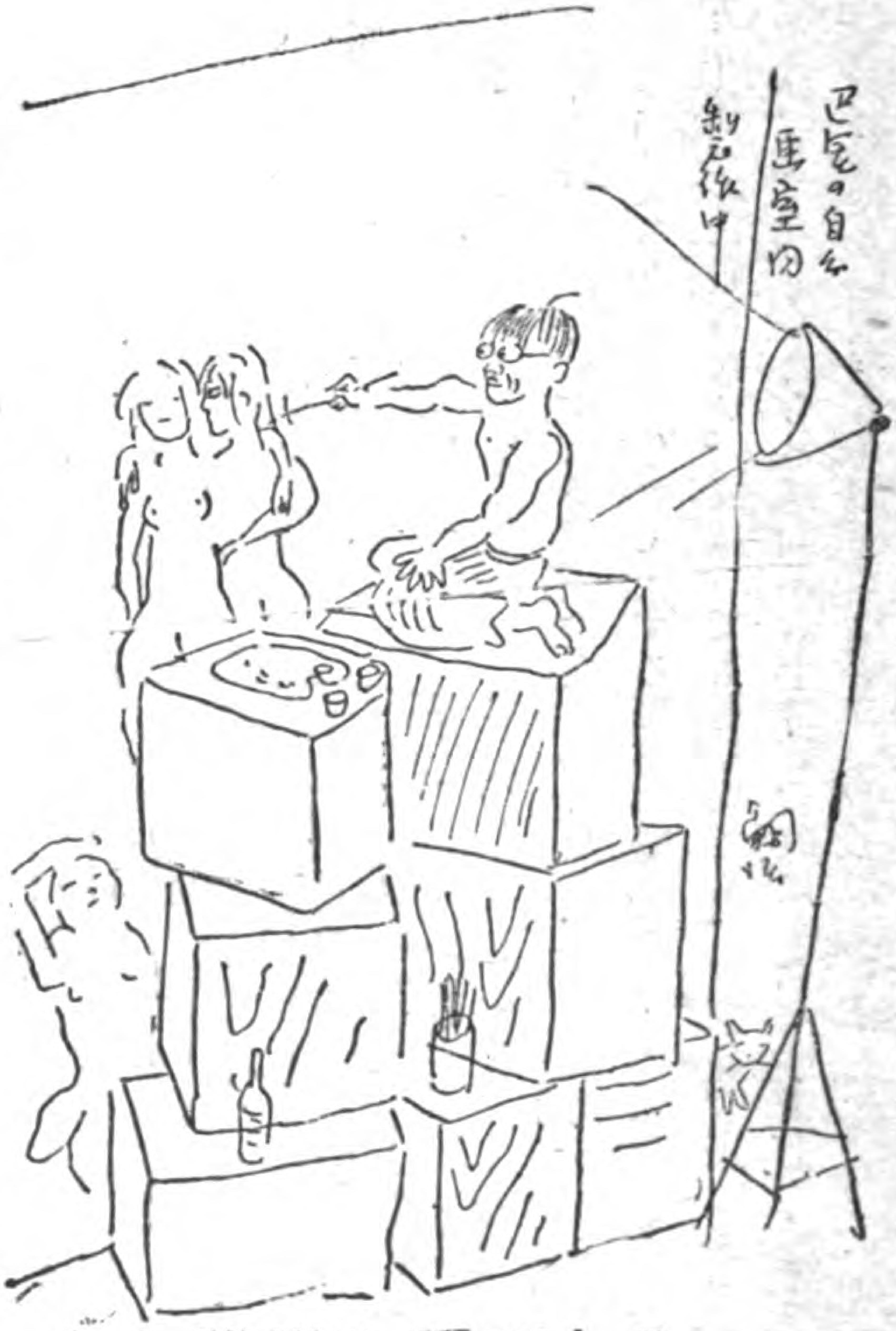
○

日本では家名といふものを無意味に重んじ過ぎてゐるが、佛蘭西ではそれにあまり執着をしない。親は財産を何れの子にも平等に分配してやる。養子婿取りなどいふ事は殆ど無い。個人として成功すれば、一家の名も從つて揚がるわけだが、その家名が續かうが續くまいが、大して問題にしない。ナポレオン家はナポレオン一世によつて歴史上に殘つてゐるだけである。子孫につまらぬ者が出來て、先祖の名を汚すよりも、却つて家名の續かぬ方がよい。あまり大きな家を立てて、子供にそれを維持する力がなくて潰してしまふといふやうな例は、日本などにはいくらもある。

○

百萬の富を持ちながら、息子にはかつくの學費しか與へないで、可なり息子を苦しめてゐる人が少くない。或は三十四十になつて、親父が死んだために、遺産によつて一躍富豪になつたといふやうなのが隨分ある。生前には、子供は親の財産の恩典には浴さなかつたのである。

結婚の如きも、息子は自分で自分の將來の配偶者を見出



し、互に交際をして、意見を戰はせたりしながら、よく相手を吟味した上で、初めて結婚をする。結婚といふことを忽せにはしない。親が指圖をしたり、寫眞結婚をしたりするやうな事は殆どない。

結婚しても、無暗に子供をこしらへるやうなことをしない。子供をこしらへる以上、親たる義務を果たさなければならぬことは勿論だが、さりとて將來子供にたよるといふやうな考へがなく、自分は自分を生かしてゆくといふ考へが強いから、親は親、子は子といふ風になる。況して息子の愛人とかいふものには、親は殆ど口を出す權利もない。

○

佛蘭西では、今のところ男一人に女六人ぐらゐの割合だ。かやうに女の數が多いから、女は皆自分の特長をよく知つてゐて、化粧の仕方なども自分に最も適する樣に工夫を凝らす。

頭の髮の黑い女は、茶褐色の肌の色を自慢にするとか、頭の髮の黃金色の女は、透明な白い肌の色を誇るとかいふ風である。尤も中には肌の白い女が、黃い白粉をつけて、髮の色を黑く染め、南方の温かい國の女のやうにして喜んでゐるものもある。だが、黑つぽい肌の女は、白粉をつけてもうまく行かないから、決して白粉などつけない。

日本に歸つて一番驚いたのは、白粉の塗り方が非常に下手なことである。白粉を頸の方までつけて、そこが紫色に見えたりする。殊に洋服を着た時のお化粧法は、日本のお化粧法では全然駄目だ。お化粧といふ事は、自分の肌の色を殘しておいて、それを手傳つて美しく見せるといふのが本當なので、全然肌の色を變へるといふのはうそだ。

○

佛蘭西の女は、めい〳〵自分の境遇、自分の家庭、自分の能力といふものを自覺してゐて、身分相應なことをして樂しんでゐる。玉の輿に乘るといふやうな途方もない事を考へるものはない。非常に怜悧な女で、時にはさういふ事もあるが、出

世をするにしても、多年の苦心が酬いられるといふ事に歸る。だから役者のやうなものでも、四十五十になつて、初めて成功する。三十頃で名を賣るといふやうな人は、非常に少い。

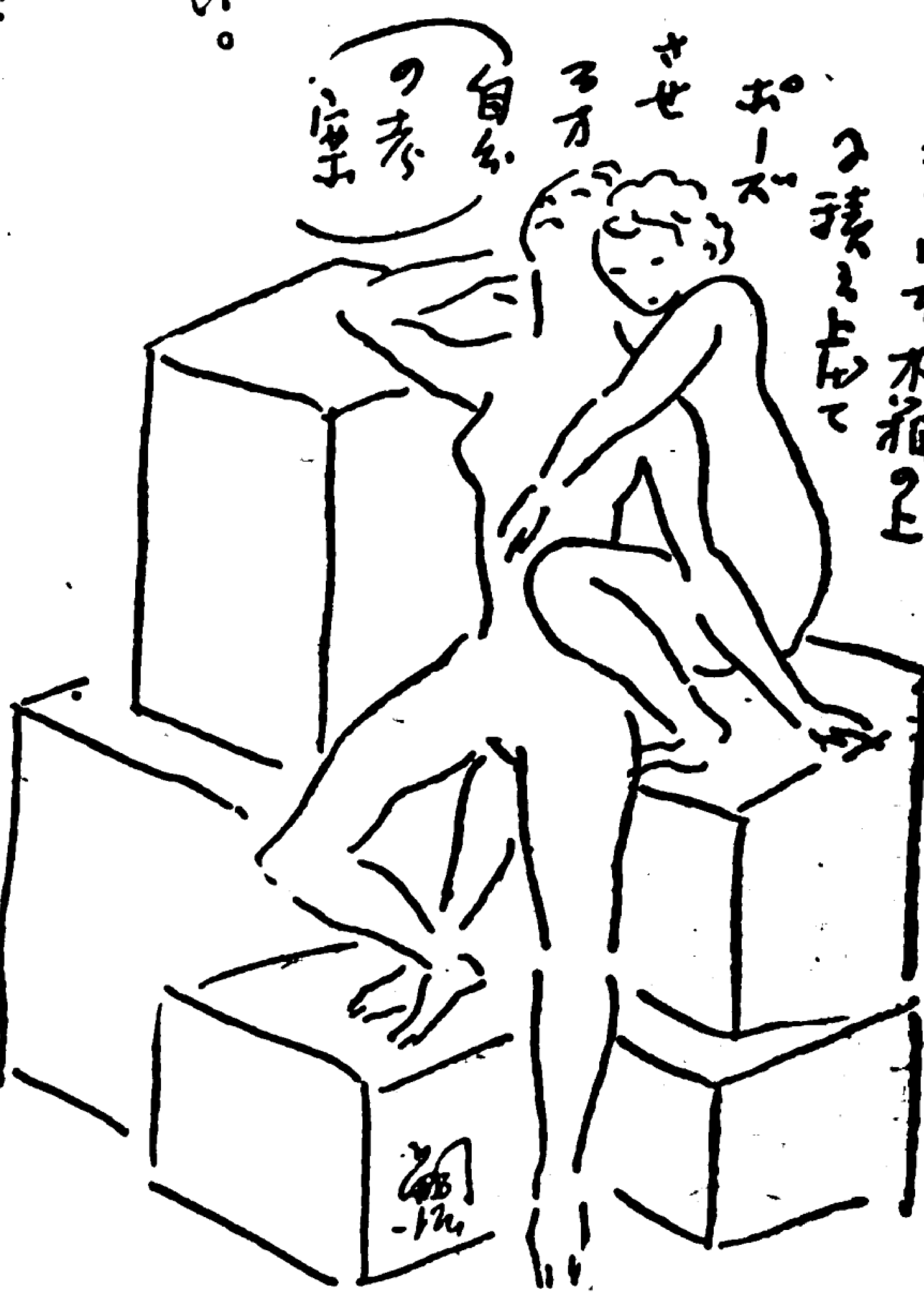
○

就職難は日本のやうに激しくない。それは土地が廣くて、人口が少いからだ。田舍へ行つても、日本だと直ぐ人家が見えるが、佛蘭西では二時間位自動車を走らせても人家の見えない事がある。二十哩三十哩を走つても家が見えない。それほど土地の割合に人口が少い。人間の働く餘地があるわけだ。

○

佛蘭西の學生は、皆非常に節約をして勉強をしてゐる。しかし金は無くとも、思ひ切つて遊ぶことを知つてゐる。日本もスポーツは盛なやうだが、佛蘭西の學生は體格もよし、元氣も潑剌として、よく遊んでゐる。

日本の學生は知る事に一生懸命になつてゐる。これは良いことゝは思ふが、少し餘裕がなさ過ぎはせぬか。向ふの學生はあまりあせらないで、ゆつくりやる。そこに多少の餘裕があつて子供のやうなことにも非常に喜ぶといつた風がある。



○

今まで佛蘭西人は、日本人に對しては、殆ど支那人と同じやうに取扱つてゐた。日本人は支那人同樣猿のやうな狡猾な人種で、白色人種よりは一段落ちたものゝやうに思つて、輕蔑されてゐた。僕の展覽會の時も僕の繪の批評をせずに、人種的の攻擊をされたものだ。それを長い間かゝつて、やうやう佛蘭西の大家の中に日本人の名前が出るやうにしたのは、自分がたゞ先鞭を着けたといふに止まるけれども、これからの人は樂に行けるといふことだけは言へると思ふ。とにかく、日本人でも努力すれば、歐洲人と同じやうな仕事も出來るといふやうな印象を與へたわけで、それには自分の非常な苦心努力が、少くとも與つてゐると思ふし、これからも一生懸命にやるつもりだが、今後日本の若い人は、僕の十倍も二十倍も偉くなつて、完成して欲しいものである。



人の一心物語

悲絶だ！壮絶だ！人間業ではない、全く神業だ！而もそれは可憐なる一少女の鐵石の如き一念に依つて完全に達成された！

池田宣政

さしゑ　蕗谷虹兒

1

露帝アレキサンデル三世の侍從武官として皇帝と皇后から破格の信任を被つて居た騎兵大佐ロプーロフ子爵は、其の榮達を妬む同僚のために讒せられて遠いシベリヤの荒野に流謫の身となつた。

罪なくして配所の月を見る。怨み深き極みである。けれども、陰謀と秘密を以て泥のやうに汚されて居た當時の露國宮廷ではロプーロフ子爵のやうに無實の罪に押し落される宮廷軍人の數は月々に絕えることゝて無いのであつた。

讒者の毒舌は利刄のやうに鋭かつた。昨日まで厚い信任を贈つた皇帝からも皇后からも特赦の恩典は與へられなかつた。

身に露ほども覺えのない罪を抱いてロプーロフ子爵はセント・ピータースブルグの石牢に幽囚の身となつたが、やがて型ばかりの裁判の結果、世にも恐ろしい國事犯の罪名を得て、家財沒收シベリヤ追放の宣告を受けた。

五月なかば、春とはいへど北ロシヤの空は暗かつた。武裝嚴しいコザック騎兵の一隊に前後を護られた五六臺の囚人馬車が、石疊の上を行く車輪の響も重々しく、セント・ピータースブルグの城門から走り出した。

馬車の内には、強盜、殺人犯、放火犯などの重罪犯人が獰猛な容子をしてまじまじとお互ひの顏を見合ひながら坐つて居た。皆シベリヤに追放される人々である。其の中にロプーロフ子爵も居た。

子爵は、生まれて半年に足りない女の子を胸に犇と抱きしめた若い妻の手をや

さしく觸りながら、深い〳〵悲しみと絶望に悶え泣く妻を慰め勵まして居た。

世にも悲しいのは、この囚人馬車である。一度シベリヤの雪と氷の中に追放されたなら、生きて二度と故郷を見ることは出來ないのだ。いや、死んでも故郷には歸れない。不幸な白人達の白骨は氷雪の下深く怨みと共に殘されるのだ。

流石兇惡な重罪犯人達もたゞ悄然と首垂れて口をきく者は誰もない。馬車は雪解の泥道を走つた。凸凹の道で馬車が激しく揺れる度に囚人の頭は低い天井にぶつかつた。けれども誰も其の鼻面をしかめる者もない。皆、ひどく落膽して痛さも寒さも感じないのだつた。

荒らくれ男共でさへさうだもの僅か二十一歳の若い子爵夫人アンナが悶え泣くも無理はない。

『ね、アンナ、元氣お出し、向ふへ着いたら僕も一度皇帝陛下に嘆願狀を差上げる。無實の罪はきつと晴れる。ね、しばらくの辛棒だ。親子三人一緒に居られるのが神樣のお惠みだと考へて元氣お出し。ね、アンナ』

ロプーロフ子爵の勵ます言葉にアンナは靜に目をあげて夫の顏を見た。そして無理につこり微笑んだが、其の微笑は淋しかつた。アンナは直ぐに目を閉ぢたが、其の金色の長い睫毛の間から眞珠色の涙が霰のやうに留度なく散つた。可哀さうに、一月前までは世に時めくロプーロフ子爵夫人として特別に皇后から鍾愛された上宮廷の花、社交界の女王と崇め讚へられて華やかな日を送つて來たのも槿花一朝の夢、果敢なく囚人馬車に揺られる身となつたのだ。



子爵は言葉もなく、妻の顫へる肩をやさしく撫でて居た。と、不意に赤ん坊が大きく目を開いてにこ〳〵と笑ひ出した。

朗らかな明るい笑ひ。子爵も思はずにつこりとしたが、次の瞬間には子爵の男らしい頰にも涙が糸を引いて流れ落ちた。

『可哀さうに……この子も荒野の子となるのか』

子爵は悲しく呟いた。

馬車は白樺の林の間を行く。破れ雲の間から射す陽の光にコザツク兵の槍が銀色に光つて居た。

2

悲しみの旅は何日も續いた。やがて囚人馬車がトボルスクに着いた時罪人達はそれ〴〵の土地に散り散りに別けられた。ロプーロフ子爵の一家は其所から三百露里離れたイルチムの村に送られた。

イルチムの村で馬車から降された子爵一家は翼をもがれた鳥と同じだつた。金もない、家財道具もない。どうして雪深い其地で生きて居られよう。

子爵も夫人も遠ざかつて行く馬車とコザツク騎兵の後ろ姿を見送りながら降り積む雪の中にしよんぼりと立つて居た。

幸ひ村の農奴達は木訥で親切だつた。子爵一家は其夜は村の小さな禮拜堂の片隅に冷い夢を結んだ。そして翌日からお人好しの農奴達に手傳けされ勵まされながら子爵は慣れぬ手に斧を握つて小屋を建てるために雪中に汗をしぼるのであつた。

シベリヤの農家特有の太い丸木を横に積み重ねた丸木小屋がやがて建てられた。其中で子爵一家の悲しい生活がはじまつた。

來る日も來る日も淋しかつた。子爵は露帝の便のある度に露帝に歎願書を奉つた。けれども子爵の血と涙で書かれた歎願書は姦臣の手に破られて露帝の目に入らなかつた。

アンナ夫人も朝に夕にキリストの聖像の前に跪いて無實の罪の晴れる日の早かれかしと禱つた。けれども何の驗もない。

『あゝ、とう〴〵我々の運命は定まつた。生ける屍となつてしまつたのだ』

子爵は絶望して叫んだ。

其の子爵夫妻の暗い心に僅に光を投げるのは一人娘プラスコビーだつた。

プラスコビーは二人の手の中に殘された唯一の寶玉だつた。いや二人の生命よりも尊く大切だつた。其のプラスコビーが日に月に育つて可愛いくなつて行くのが二人を樂しませた。

一年、二年、三年、五年。プラスコビーはすく〴〵と育つて行つた。それは全く雪中の花だつた。貴族の血を引いたその美はしい顔貌。すんなりと伸びた手足。母親に似た黒い瞳。薔薇色の頰の色。十二三歳

泰西逸話挿話

◇戰場の赤ん坊

歐洲大戰の時の事である。

夜はしら〴〵と明けはなれて行つた。しかしひどい霧で二三間先はもう見えない。

やがて太陽がのぼつた。その頃から、次第に視界がひらけ出した。そこは牧場であつた。中に一軒の百姓家がある。それをさしはさんで敵と味方とが相對してゐるのがはつきりとわかつた。と忽ち双方から射擊がはじまつた。

しかし、それも束の間であつた。ふつと銃火が止んだ。これは一體どうしたことだらう。

見ると牧場一面に咲きつゞいてゐるクローバーの花の中に、赤ん坊がたつた一人で匍つてゐた。それがまた不思議も不思議、泣きも何ともしないで、クローバーの花を摑んでは無心に笑つてゐるのだ。

の時にはプラスコピーは村中の評判娘だつた。

もう其時分には父の子爵も永い間の勞働のおかげで僅かばかりの山畑を私有することも出來、二軒續きの丸木小屋の片隅の暖爐の上には銀色に磨きあげた湯沸しが一日中、しん〳〵と湯を沸ぎらせて居るやうになつて居たので小さいプラスコピーは身に覺える程の不自由もなく村の小學校へ通つて居るのだつた。

『あゝ都を離れてもう十三年、私達はすつかり農奴になり下つてしまつた。けど、あの娘だけには昔しの貴族らしい修養を忘れまい』

アンナ夫人はさう考へてプラスコピーにフランス語を教へた。暗い夜更け、暖爐にくべた白樺の皮の燃え上る炎に片頬を赤く染めながら美しい發音でなめらかなフランス語を娘に教へる時、アンナ夫人の目の前には華やかだつた過去の宮廷生活が幻のやうに浮ぶのであつた。

兩親の愛を一身に集めたプラスコピーは幸福だつた。が、其の平和な心の中に、今まで夢にも知らなかつた一家の悲運が晴天の霹靂のやうに聞えて來た。

それはプラスコピーが十五の春であつた。夜半、不圖目醒めたプラスコピーは、ひそひそと語り合つては忍び泣く兩親の言葉を聞いてしまつたのだつた。

讒言―國事犯―流刑―生ける屍―嘆願狀―

途切れ途切れに聞えて來る言葉にプラスコピーは身を震はした。冷汗がびつしよりと出た。あやふく叫ぼうとしてしつかり枕に噛みついて心の激動を靜めようとした。

『あゝ、そんなに私達は不幸だつたのか』

プラスコピーは其夜まんじりともしなかつた。

3

其翌日からプラスコピーは考へに沈む子となつた。小さい胸の中に色々の考へが雲のやうに湧いた。考へて考へて考へ拔いた末に、大きな決心がプラスコピーの心に強く根を張つた。

『さうだ、私は行く。此處からセント・

敵も味方もこの赤ん坊が目にとまつたので、それで一齊に鳴をしづめたのであつた。近くの戰線では分一分銃火は烈しさをまして行く。それなのに此處の一區域丈は平和の靜けさである。



そのうち一人の兵士が佛蘭西軍の塹壕から這ひ出した。それはどちらの方でも誰か出かけるだらうと豫期してゐたことであつた。

這ひ出した兵士は飛ぶやうに走つて赤ん坊に近づき、しづかに抱へ上げると再び走つて物蔭につれて來た。

敵も味方もわつとばかり拍手喝采した。それは赤ん坊が救はれたのを喜ぶ聲であつた。赤ん坊が大丈夫危險からのがれたと見るや否や、一時に双方から火蓋を切り再び修羅の戰ひがくりひろげられて行つた。

◇少しの糊

米國ボストンの或る實業家のところへ

ピータースブルグまで何千露里あるか知らぬ。けれど私は行く。行つて皇帝陛下に歎願するのだ』

勿論、父母に話して許される筈はない。プラスコビーは唯一人でこの企を實行しようとした。國事犯の娘は旅行査證を受けることも驛傳馬車に乗ることも出來ないのだ。プラスコビーは徒歩で雪のシベリヤを突破しようと決心したのだつた。

けれども、それは何と云ふ困難なことだらう。十五六の少女には無謀極まる考へであつた。殊に弱いプラスコビーは十露里と行かない中に凍死してしまふのは火を睹るよりも明かであつた。

年よりも賢いプラスコビーに其の道理の解らぬ筈はなかつた。考へ深いプラスコビーは自分の計畫を直ぐに實行することの不可能を知り過ぎる程知つて居た。彼女は先第一に其の計畫の準備に專心しようとした。



準備とは？　金を蓄へることでもなかつた。荷物を集めることでもなかつた。たゞ彼女は自分の身心をこの大冒險を遂行するに足る程に鍛錬しようとした。

少女ながら、何と遠大な計畫だらう。い

救濟事業の寄附を頼みに行つた人があつた。

その時、實業家は店員の一人に對し、

『ほんの少し使へばすむものを何故こんなに澤山使つたのか』

と云つて頻りに叱つて居た。悪い所へ來合せたものだと思ひながら、なほも聞いて居ると、使つたと云ふのは糊のことらしかつた。



この調子ではとても金なぞは出してくれまいとがつかりしたが、併し折角來たのに用向を話さぬわけには行かぬ。そこでおづ〳〵乍ら寄附金のことを持出すと主人は即座に、

『結構なことです。では取敢へず五百弗寄附いたしませう』

事の意外なのに吃驚してゐると、主人は、

『私は平生少しの糊でも無駄をせぬやうに心掛けて居るので、かうした寄附も出來るわけです』

かにも重厚で辛棒強いロシヤ貴族の子らしい考へ方でないか。プラスコビーはその準備のために二年三年は惜しまない覺悟だつた。

彼女は先第一に寒氣に堪へる力を習はうとした。夜の寢床の毛布を一枚減らして見た。最初の夜は睡れなかつた。が、二晩三晩と續く中に毛布の減つたことは感じなくなつた。其時又一枚減らした。氣永な鍛錬である。氣短な國民には眞似の出來ない準備法である。

其の間、プラスコビーは冷水で顏を洗ふ習慣をつけた。氷點下何度の酷烈な寒氣の土地で、それは隨分六ケ敷いことだつた。最初彼女は微溫湯を用ひた。それに慣れると冷水を用ひた。顏を冷水に慣らした彼女は次に頸條まで冷水摩擦を行つた。それから肩先まで、胸までと、次第に身體を冷水に慣らして來た。

其間何度も失敗して凍傷に苦しめられた。けれど屈しないプラスコビーは焦らずたゆまなかつた。

十八ケ月も掛つて、やうやく全身に冷水を浴びても苦痛を感じないまでに皮膚を鍛錬した時に彼女は毛布一枚掛けない寢床の上に安々と睡れるまでになつた。

プラスコビーは次に空腹に堪へる力を養はうとした。三度の食事を次第に減じて、遂には三日四日の絕食には少しも苦しまないまでになつた。

次に彼女の試みたのは體力の增進だつた。荒野を足に任せて馳驅したり、白樺の森林を縱横に步き廻つたりした。重い材木も背負つて見た、荒馬の手綱もとつて見た。

がらりと變つた娘の樣子にアンナ夫人はたゞ驚いた。

『どうしてあんな荒々しい娘になつたものでせう。女らしくもない……』

さう呟く妻を振り返つたロプーロフ子爵は、

『ハツハツハツハ、いや、それでいゝのだ。あの娘の血管には武人のわしの熱血が流れて居る。わしは生ける屍だ。せめてあの娘が男だつたらと殘念に思はない日はない。それがあの通り勇ましい娘になつた。

と云つた。

◇主人に感化された馬

波蘭土の志士コスチウスコは勇氣ある半面に非常に愛情の深い人であつた。

或る時、隣り村の牧師の許へ、葡萄酒を贈るため、その使ひを馬丁にいひつけた。馬丁は品物を馬の背に載せ、自分も一緒に乘つて行くうち、とある街角から一人の乞食があらはれて、じきりに馬丁に向つて施しを乞うた、馬丁は素知らぬ顏をしてゆき過ぎようとした。ところが、馬はそこに立留つたまゝ一步も進まうとしない。



馬丁は仕方なく財布から金を出して乞食に與へた。と馬は今度はひとりでに步き出した。

これはコスチウスコが外出するたびに乞食に物を施すことにしてゐたから、馬にも感化されてゐたのであつた。

いや、愉快だ。其中に狼狩りでも一所にして、この不平の充ち充ちた胸のわだかまりを消して見ようよ」

まだ五十を越したばかりなのに積る惱苦に白髪の多い頬髯を搔きながら子爵はかう云つて笑ふのであつた。

兩親共、娘の胸中に秘められた計畫を神ならぬ身の知る由もないのであつた。

4

親を想ふ一心、一家の名譽を尊ぶ一心は、孱弱い少女プラスコビーを雄々しい娘と化した。鐵のやうな骨組み、日焦けした頬の血の色。ロシヤ貴族特有の沈鬱な光をたゝへて深い沼のやうに靜な黒い瞳の奥には溢れるばかりの精力が燃えて居た。

三年の間、餓饉に餓饉した心身は、如何なる困苦缺乏にも堪へられるまでになつた。

プラスコビーは遂に家を忍び出た。兩親が其の寄留を探し出した時分彼女はもう五十露里先の沼地を西へ西へと雄々しく歩いてゐた。

折柄、季節は雪解の時だつた。寒氣はやや游らいだが道は泥の海だつた。用意周到なプラスコビーが何故そんな時季を選んだか？ それは何よりも恐ろしい餓狼の害を



おもしろい百人一首福引

×大江山いくのゝ道の遠ければ
簪立（まだふみもみず天の橋立）

×鵲の渡せる橋におく霜の
炭團（白きをみれば夜ぞ更けにける）

×瀬を早み岩にせかるゝ川川の
割箸（割れても末に合はんとかぞ思ふ）

×たち分れいなばの山の峰におふる
往復葉書（待とし聞かば今歸り來ん）

×天つ風雲の通ひ路吹きとぢよ
白粉（乙女の姿しばしとゞめん）

×花誘ふあらしの庭の雪ならで
ステツキ（ふりゆくものは我身なりけり）

×御垣守ゑじの焚く火の夜は燃えて
庭球（晝は消えつゝ物をこそ思へ）

逃れるためだつた。積雪中は狼の大群が森林から溢れ出して驛傳の橇さへも襲はれて馬も人も其の餌食となるのが常だつた。が、雪解となれば狼は食を求めて山奥へ歸るのであつた。

プラスコビーの前途には何千露里の荒野が擴がつて居た。名だたるウラルの山脈も越えなければならない。ヴオルガの急流も雪解の水で水容はいよ〳〵増したことだらう。



けれどもプラスコビーは急がずあせらない。準備のために三年を惜しまなかつた彼女は旅行のために一年二年を費やすものと覺悟して居た。

一歩一歩、踏みしめる足に力があつた。一露里毎にセント・ピーターズブルグに近づきつゝあるのだと考へれば希望が洋々と其の雄々しい胸に湧き上つた。

懐中には僅か千二百コペツク（十二圓）の金があつた。其の金で彼女は一年八ケ月の旅行を仕遂げたのであつた。

途中、情ある農奴の女房達から何度温い雜炊と慰めの言葉を貰つたことだらう。寒い夜、やうやくたどりついた村の教會堂の聖像の前で明けるまで祈禱しつゞけたこともあつた。

雄々しいとは云へ十八歳の少女である。父を想ひ母を想ふ度に何度暗涙にむせんだ

今はたゞ思ひ絶えなんとばかりを
郵便切手、封筒、紙、鉛筆（人づてならでいふよしもがな）

×

長からむ心も知らず黒髪の
櫛（みだれて今朝は物をこそ思へ）

×

我袖は汐干に見えぬ沖の石の
たはし（人こそ知らね乾く間もなし）

×

來ぬ人を松帆の浦の夕凪に
網金（燒くやもしほの身も焦れつゝ）

×

有明のつれなく見えし別れより
垢すり（あかつきばかり憂きものはなし）

×

かくとだに得やは伊吹のさしもぐさ
蠟燭（さしも知らじな燃ゆる思ひを）

×

思ひ佗びさても命はあるものを
ハンカチ（憂きに堪へぬは涙なりけり）

×

風そよぐ奈良の小川の夕暮は
扇子（みそぎぞ夏のしるしなりける）

ことだらう。

『でも、も少しの辛棒だ。私きつと／＼皇帝陛下のお宥しを受けて來る』

さう心に繰りかへして自ら慰め勵ますのであつた。

雪道に惱む彼女を見兼ねて馬車に乘せて吳れた親切な驛傳の御者もあつた。けども村の家根が見えると見咎められないやう大急ぎで彼女を降して馬に鞭を加へるのであつた。

ウラルの山中では賊の棲家に泊つたことがあつた。其時彼女の身の上話を聞いた强盜夫婦が思はず鬼の眼に淚を浮べて、自分達が奪はうとした彼女の八十コペック入の金袋に四十コペックをそつと入れてくれたことさへあつた。

そして最後にはヴォルガの渡船が轉覆して急流に流されたプラスコビーは岸の修道院の尼僧の手に救はれたのであつた。

旅に出て一年の後、彼女ははじめてこの僧院であたゝかい寢臺の上に寢た。

ひどく水を吞んだ上に、あまりに激しい旅の艱苦に流石鍛へ上げた身體も疲れ果てて彼女は三月の間寢臺から立てなかつた。

尼僧の親切な看護。彼女はやうやく起き上ることが出來ると引留める尼僧達の手を振り切つて直ぐに出發した。

健氣な少女の後姿を見送つた尼僧達の眼は淚で一ぱいだつた。淸淨な白い衣を身に着けた尼僧達は僧院の門に立つて、雪の丘の向ふに振り返り／＼しよんぼりと消えて行く少女の姿の見えなくなるまで手を振つた。

5

セント・ピーターースブルグに入つた時のプラスコビーは全くの乞食娘だつた。亂れた髮、身に捲きつけたぼろ／＼の着物。ただ其の顏色は日に焦けても隱しきれない貴族的の風韻が忍ばれた。

考へ深いプラスコビーは其の風體で役所に出頭することの出來ないことは知り拔いて居た。又役所に訴へ出ても握りつぶされることは解つて居た。彼女に皇帝か皇后に直訴しようと考へて居た。

珍聞奇聞 話の種

○もし／＼の始まり

電話をかける時呼びかける『もしもし』といふあの言葉は、エヂソンが公園を歩いて居る時一人の乞食から『もしもし旦那、もしもし』と呼びかけられ、『ウムそれは簡單でハッキリした面白い言葉だ』と、使ひはじめたのがそも／＼の始まり。

○十億燭光の燈臺

南フランスのアフリカ山上に、佛國政府がすゑつけた燈臺は、素晴しく巨大なもので、十億燭光といふ明るさ。三百哩四方を照らし、海の船舶と空の航空機の



兩方に役立つ。

○洋食店の開祖

明治二年八月、横濱姿見町三丁目の谷

日曜日毎に兩陛下が宮殿から敎會堂に行幸啓せらるゝことを知つたプラスコビーは敎會堂の扉口の階段下に群れて居る乞食に混つて機をうかゞつて居た。

時は來た。珍らしい秋晴の朝であつた。禮拜を終つたアレキサンデル三世は靜に敎會堂の扉口に現はれた。

氣輕な皇帝はいつも侍從の手を借りずに自分の厚い外套のポケットから銀貨銅貨を階段下の乞食に與へるのを樂しみとして居たが其日もにこやかに一人一人の差出す手の上に新しい貨幣を載せてやつて居た。

やがて皇帝が彼女の手にも小さな銀貨を置いた時、プラスコビーは朗かなフランス語で叫んだ。

『皇帝陛下、私はもつと大きな、お惠みを頂きたいので御座います』

皇帝ははつと驚いて目を上げた。乞食娘の唇から美しいフランス語。侍從の人々もざわ〳〵と私語き合つた。

『何？ 何？ もつと大きな惠みぢやと？ 何を望むのぢやな』

皇帝も重々しいフランス語で尋ねた。

『元の侍從武官ロプーハフ子爵の名譽で御座います』



藏といふ者日本で初めて西洋料理店を開業した。しかし當時は日本人で洋食を食べる者なく、西洋人ばかりを顧客としてをつたのである。明治四年淺草の駒形町代地に開陽亭といふ洋食店が出來た。此頃から諸所に開業する者多く、日本人の間にも洋食がぼつ〳〵流行つて來た。



○偉大なる齒と顎の力

米國海軍の水兵ワシントン州生れのジム・ホワイトと云ふ男は、十四人乘りの自動車に人を滿載し、その綱を口にくはへて引つ張つて步くといふ。恐らく世界一の齒と顎の強い男に違ひない。



○カフエーの始まり

明治二十一年四月十三日下谷黑門町に可否茶館といふのが開業した。これ珈琲店の元祖である。

『え、え、ロプーロフ子爵？　あの、あの若い騎兵大佐のロプーロフか？』

國事犯とは云へ、特別に鍾愛して居た侍従武官の名を十八年振りに聞いた露帝の心にはやさしい思ひ出が靜に湧き上つた。

と、其時である。後れて扉口に現はれた皇后がロプーロフの名を耳にすると、つと階段を駈け降りてプラスコビーの前に立つたが、

『お、そちは？……あ……何とアンナ夫人に生き寫しの……』

激しい感動に言葉も途切れて立つた皇后の前にプラスコビーは跪いた。そして母から聞いてゐた當時の宮廷の風習に從つて恭しく其の飾り靴に接吻した。

乞食娘が貴婦人も及ばぬ優雅な禮儀に徒從の男女はかすかに驚きの聲をあげた。皇后はにこやかに微笑んで居たが其の目蓋には押へきれない思ひ出の涙が溢れて居た。



6

可憐な少女の直訴は効を奏した。寵愛の舊臣の一人娘が父母の名譽のために生命を的に何千露里の荒野を横つて來たことが深く深く皇帝、皇后の心を動かした。

『むう、たとへ子爵が、まこと有罪だつたとするも、この健氣な娘のために赦免せずには居られぬわい』

皇帝がしみ〴〵とさう云ふ程である。讃

頓智二題

○謡ひ初め

二代將軍秀忠は或る年の謡初めに、歯の落ちた夢を見て、殊のほか氣に病んでゐられた。すると觀世左近、

『さて〳〵おめでたいお夢でございまする』と言上しやがて朗々と謡ひ出したのは謡曲高砂の一節、

『所は高砂の〳〵、尾上松もとしふりく、老の波もよりてるや、木の下蔭のおちばかくまで命ながらへて、なほいつまでかいきの松、それも久しき名所かな』

と祝ひ、更に

『それも久しき名將かな』と收めたので、將軍は機嫌斜めならず、肩衣をすらりと脱いで、

『よくぞ作つた』と褒美に下された。並居る大名もわれも〳〵と肩衣をぬいで左



者の毒舌も今は甲斐がなかつた。

數日の後、赦免狀は少女の手に渡された。

狂喜した彼女は一日も早く兩親に吉報を齎すために皇帝から賜はつた橇に乘つた。其の橇には皇后がアンナ夫人へ心づくしの贈り物が積み込まれて居た。そして其の前後をコザック騎兵が守護して居た。

健氣な少女の噂は都中に廣がつて居た。其の晴れの首途を見送らうと人々は城門に集つた。

秋の大空は瑠璃色に澄んで居た。小鳥が木の間に聲高く鳴き續けた。

人々の笑顏に見送られ、橇は薄雪を蹴立てゝ滑つた。橇鈴が銀色の音も朗らかに絕え間なく鳴つた。

あゝ、喜びの旅の首途。プラスコビーは振り返つて町の人々に手を振つた。それから眼をあげて前方を見た。灰色の道が白い雪の上に何所までも〳〵續いて居た。



十八年前に絕望と悲痛に忍び泣いた母親の胸に抱かれて居たプラスコビーは、今、溢れるばかりの希望と歡喜に胸を張りながら橇の上でうつとりとして居た。

絕間なしに鳴る銀の橇鈴。蹄の音も輕く馳ける橇馬の栗毛が陽に輝いた。——

——餘りに美はしい話として、フランスでは、教科書にまで入れてある事實談である。

（終）

近に與へた。これ以後諸大名みな肩衣を脫ぐ習慣となつた。

○落ちた首飾り

スキスの或る山の中の古井戸に、ある日見物に來た貴婦人が、誤つて二萬圓もする首飾りを落した。

處が、其の井戸は一滴も水がなく長い間涸れてゐたので炭酸ガスが充ちてゐて燈火は消え生物は窒息して死ぬと言ふ怖ろしい井戸だつた。貴婦人の歎きや推して知るべしである。



此の時見物人中の一靑年が何を思つたのか、大ぜいの者に加勢さしてドンドと井戸の中に水を注いだ。そして四五尺も井戸の底に水を溜め、その翌日燈火を手にして井戸の底に下り無事に首飾りを拾ひあげた。

——廢坑や古井戸の底に水があれば、炭酸瓦斯中毒になる事は殆どない。炭酸瓦斯は水に吸收されるからである。

奇技な名人・意外の妙技

お天氣博士尻尾を捲く

——天氣豫報の名人——



鈴木毅君

當りさうで當らぬのは、昔から八卦と相場が決まつてゐたが、近頃某所で募集した『ものは附』の同案最多數を占めたのが天氣豫報、それ程當にならぬものにされてる天氣豫報を百發百中、ピタリと言ひあてる人がゐるから世の中は面白い。

遞信省内では、やがて二十年も氣象臺の天氣豫報なぞをあてにせずに仕事をして來てゐるが、それは省内の工務局電信課に、觀測と綽名されてゐる鈴木毅といふ豫報の名人がゐるからで、ひとり遞信省ばかりでなく、宮内省でも、觀櫻會、觀菊會等の折には、きつと同君に問ひ合せて來る。



この鈴木觀測君が氣象の觀測に從事するやうになつた抑ゝの動機は、嚴父の植木いぢりの手傳ひしてゐる裡に、それに非常に密接な關係のある天候の變化に興味をそゝられた爲めで、氣象臺の豫報は、例によつて見事外れたのに、同君はピタリと言ひあてたので、伊東巳代治伯にウンと褒められたのが、いはゞ同君の豫報出世作で、有馬伯母堂の葬式の折などは、降雨の時刻まで、三日も前にきツぱりと言ひあてたので、『殆ど人事と云ひ難く』云々の謝狀に添へて金百圓を贈られたさうである。それで東京の大相撲が、まだ小屋掛けで興行してる時代には我觀測君はお天氣の相談役となつてゐたが、一日として觀測を誤まつたことがなく、そんな關係から、今でも木戸御免ださうな。

仲小路廉さんが遞相時代、この觀測君の神技を大いに買つて淨財四百餘圓を募り、種々の觀測用器械を買つてやつたが、大震災でみな燒けてしまひ、觀測を一時中止せねばならぬことになつた。ところが、例の熱心な統計研究者の柳澤保

惠伯が、永いこと同君の天氣豫報の的中率を密かに統計にとつてゐたのだが、百發百中なので、神か人かと大いに驚嘆してゐたところ、震災後パッタリと止んだので、怪しんでさぐらせたら、器械を失したことが知れた、伯は觀測君に自邸の一室を宛がひそこへ器械を据ゑ附けて、またまた豫報をやらせることにした。

然し器械といつても、玩具のやうな乾溫計、最高と最低の寒暖計二個、晴雨計及び氣象計、この五つだけしかないのに、しかも中ること〳〵、まつたく不思議な位だ。だから、時の氣象臺長岡田博士も呆れ返つて『奇蹟奇蹟』と尻尾を卷いたといふ。

飛ぶ鳥を吹き落す

——鳥落しの名人——



村上清太郎氏及豐房君

和歌山市橋田町の一角に、『鳥清』といふ大きな鳥店があるが、そこの主人村上清太郎及び子息豐房の兩君が、卽ち『飛ぶ鳥を笛で呼び落す名人』なんだから面白い。

同家の祖先はもと越後の豪族だつたが、戰國時代武田に亡ぼされ、浪々中、獵などして暮してゐたのを、偶々德川家宣に見出され紀州入りに隨つて和歌山へ來たもので、爾來長く餌差町に住居して、主君の獵のお供をしてゐた家柄だが、そんな關係で飛ぶ鳥を笛で呼び落す術は、實は、同家代々の秘傳となつてゐたものだらうな



その方法は、先づ最も適當な所を選んで地上三尺位の高さに霞網を張つておき、さて鳥群の飛んで來るのを認めると、その先頭を切つて來る鳥の目の前へ約一寸徑位の長さ一尺、幅一寸ばかりの紙片をくつつけたつぶしといふ物を投げ上げると、丁度鷹の羽搏きかなんかのやうな音がするが、その時隙かさず、口中の小笛をば吹き立てるのだ、これは其等の小禽仲間の危險を知らせる啼聲を眞似たものである。で、小禽はびつくり仰天、もう無我夢中に、信號のおつた地上へ落ちて來る。そこで更に、右よせとか、左よせとかの信號を吹くと、彼等は、此方の思ふ通りに動き、やがてマンマと網にかかつてしまふのだ。つまり、これは『つぶし』と、笛の吹き方

で、鳥に一種の催眠術をかけるやうなものだが、その日の天候、風の方向などによつて、手心が要る。そこに難しい秘法があるのは勿論だ。――かうして獲る小禽の數は、多い時には、一時間三百羽はあるといふ。この猟法も、同家では『追鳥』といつてゐるが、害蟲驅除に應用してもすばらしい効果があるとのことだ。

鼠に澁川流の柔術
―鼠捕りの名人―

大阪府衛生課に『猫いらずの神野さん』で通つて居る鼠捕りの名人がある。同氏は『猫いらず……』と呼ばれる通り、その捕鼠技能たるや正に天下一品で、鼠の啼聲によつて雌雄大小を察するばかりでなく、嗅覺が鋭敏なのか、視力考察力が優れてゐるのか、一見その塒その通路を探知するには驚く外はない。しかも、澁川流の柔術を應用して鼠を捕へるのだから甚だ奇抜だ。

私は昨春四月、大阪港の某會社倉庫で、同氏の妙技を拜見するの光榮に浴したが、その日、神野氏は部下兩三名を引き具して、先づ倉庫の内外を注意深くグルグル歩き廻つて、塒の所在と通路とをさぐり、それから通路のすべてを閉塞して、僅か一つだけのこした、そして、その殘つた口から硫黄を燒いて臭い臭い瓦斯をドンドン中へ送つたものである。



硫黄瓦斯にかゝつては、御同様人間だつて堪つたものではない。鼠共にとつては正に驚天動地の大難だ。慌てふためいて飛び出して來るが、出口がない。そこであちらをウロウロ、此方をウロウロ、その裡に呼吸は益々苦しくなつて來る。頃を見計つて神野氏は、更に一方に口を開く。そして上衣を脱いで『寄らは斬るぞ!!』といふやうな恰好で待ち構へてゐると、逃げ路を探してゐた鼠は『それッ……』とばかりに群をなして飛び出して來た。と見るや神野氏は『ウ……ウム……ウム、ウム、……ウム、』と小さくうなる様に掛聲しながら、すばやく捕へて『バタッ!』と地上へたたき付けるのである。

出るわ……出るわ――。投げるわ……投げるわ――。一匹だつて逃がさない。しかも投げつけられた奴は一度に往生を遂げて、『チュウ』とも言はない。恐ろしい痛快な、息づまる様な戰である。

『もう居まいなあ』

やがて、神野氏は誰に言ふともなく、呟き乍ら、寄せ集められた夥しい蟋蟀に眼を落した。

『數へて見たろか……』

もの好きな一人が、オヅオヅした手つきで數へると、無慮二百八十有餘匹。然して所要時間は僅かに三十分餘であつた。

米粒に六百字

—細字の名人—



芹澤秀行君

細字といつても、普通の視力で見えるやうな、ケチな細字ぢやない。米粒へなら、假名では六百、漢字では三百五、六十字を認めるといふんだから、ナミの人間の、二つの眼玉では、無論讀めやしないが、然し、此れに擴大鏡をあてがつて見ると、吾々が普通の大きさに書く以上にいとも鮮明に、しかも筆勢も美事に書かれてあるので、何人でもびつくりするといふ程の、驚くべき細字の名人がゐる、それは、東京府北多摩郡府中町の郵便局長芹澤朝治郎氏の長男秀行君といふ、今年三十一歳の青年だ。

なぜそんな小ツぽけな文字を書くやうになつたかといふと、同君は元來極度の近視で、眼鏡をはづしては一足も歩けない人でありながら、しかも、物を書く時は、ヘンに其れが氣になつて、きツとはづす癖があり、自然書き上つたものは、自分では、そんなに小さいとは思ひもしないが、とても細かいものになるので、不圖、それに興を覺えて、自製の爪楊枝の尖端位の筆で、出來る限りの細字を書いて練習したのが因だといふ、その中に、米粒などは、ピンセットかなんかに挾んで、しつかり左手に握りしめつゝ、前述の如く六百字も、しかも右文字でも左文字でも自由に書けるやうになつたのださうな。（をはり）

短篇落語選

〇こいつはいゝ

ニコ〳〵する癖は結構でございますが、中にはニコ〳〵しながら手を叩いて『こいつはいゝ』なんといふ景氣のいい癖もあります〇『久しく會はなかつたねえ』△『こいつはいゝ』〇『こいつは宜くはないけれどもね、けれどもこゝの所仕事が半チクでね』△『ウムこいつはいゝ』〇『宜くはないんだよ、親分の所へ行つたんだ』△『ウムこいつはいゝ』〇『さうすると親方の内儀さんがね』△『こいつはいゝ』〇『思つてるんだよ』△『こいつはいゝ』



〇土つかず

しよつちう負けつゞけてゐる團子山を訪れて、〇『關取、此間の場所はどうでした。』關『イヤー今度は土附かずぢや』〇『ヘエ、凄い出來ですな、丸きり土附かずで……』關『ア、風邪を引いて寢てゐやした』

〇泥棒除け

諷刺小説

投げたバナヽ

川上三太郎

さしゑ　寺内萬治郎

―(A)―

『あれお孃さま、申譯御座いません。そんな悪いバナヽがありまして……』

『だつて梅や、お前の故ぢやないことよ。けれど歸つたらお臺所の者によく注意して置く方がいゝわね』

『はい。何うぞ召し上がりませんやうに――』

『ほゝほゝほ。まさかこれを喰べやしないことよ。大丈夫！』

令孃は朗かに笑つて手にしてゐた少し熟し過ぎたバナヽを、その儘矢のやうに走つてゐる汽車の窓から線路の外へポンと投げた。それを見て梅やはまたハッとした。

と言ふのは先刻お孃さまから買つて頂いた驛のお辨當の包紙に、

> **お願ひ**
> 人が怪我をしますから汽車の窓から物を投げないで下さい

と書いてあつたのを思ひ出したからである。

彼女は慌てゝ窓の外を見た。然しそこには好い鹽梅に誰も居なかつた。此の頃では珍らしい暖かい陽が、秋の田や畑をホカ〳〵照して居るばかりだつた。梅やは、

『まあよかつた』

と安心した。お孃さまは無論そんな事は氣がつかず、また氣がついたにしたところで問題にはする筈もない、一心に讀

或家の門口へ柔道、劍道指南所といふ大きな看板が下つて居ります。町内の若い者が集つて』○『お前柔道をやらうか、俺ア劍道をやらうと思ふんだ……御免下さい』『主』ヤーお來で』○『一つお稽古が願ひたいですが』『主』ナニ』○『表に出してありますあの看板の通り、撃劍と柔道をおやりになる人で』『主』イヤーあれは泥棒よけだ』

○疊をむしる

疊をむしるといふ癖があります○『今日は』△『サアお這入りなさい』○『どうも伺はうと思つたんですけれども御無沙汰勝でございまして、何となく仕事が一寸こゝの所手が放せないものでございまして、マアどうにかして伺はうくと思つて居たんですけれども……』△『モシく、貴方のお詫はどうでも宜うございますけれども、疊のけばを挘しつちやアいけませんな、昨日疊替をしたばかりですよ』○『ア、さうですか、道理で挘りにくいと思つた。』



みかけの雜誌の連載小說のページを追つて居た。

やがて梅やもそンな事は忘れてしまつた。今や彼女の眼には目的地たるO驛にある別莊——そこにはお孃さまのお父さまが何んなにお孃さまのお着きになるのを待ち兼ねて被居るか。さうしてそのお供を仰せつかつた自分を沁々幸福だと思つた。

——（B）——

『ぢや失敬！　また明日ね』

少年は元氣よく學友と別れて、線路傳ひに我が家へ急いだ。學校で散々暴れたので正午のお辨當なンか何處かへ行つてしまつて、腹はもうペコくだ。背中の鞄が荷になつて仕方がない。だがそれをガチヤくいはせながら逸散に駈け出した。然し途中でフッと彼の目に入つたものがある。

『おや何だ？』



見ればバナヽだ。彼はヅカくと近寄つて取り上げた。麵麭や菓子と違つて果物が地上にある事は、落ちて居る物のやうな氣がしない。だから彼は思はず拾ひ上げたのだ。

『何うしたんだらう』

彼は四邊を見廻した。だが誰も居な

笑話　大笑ひ小笑ひ

◇値上せぬ譯

亭主『旦那、私の店ぢやこの不景氣にうどんの値をちつとも上げないんですぜ。お客が大切ですからな。』
客『そりやえらい。だが、よくやつて行けるね。』
亭主『なに盛をみんな半分にしてますからね。』

〇百足ぢやない

自動車でひいた脚の治療代を請求された男『何んだ、五百圓？　とんでもない。百萬長者ぢやあるまいし。』
脚をひかれた男『俺だつて、百足ぢやないぞ。』

◇助け合ひ

二人の窃盜が捕つた場合にはお互ひに助け合はうと約束したが、或日その一人の男が鵞鳥を盜んで捕つた。愈々訊問に問はれようとし

い。バナヽは何時か彼の口へ這入つて居た。『美味い〳〵。バナヽは美味いな。僕は大好きだ』

そして又鞄を鳴らせながら一散に家へ駈けて歸つた。ところが、その夜、十一時頃になつて突然彼は苦しみ出した。吐く、瀉す。見る〳〵眼も頰も落ち込んで、熱は高く時々痙攣すら起した。

父も母も姉も眞靑になつて醫者よ藥よと手當をした。間もなく隣り村から醫者が來た。彼は取り敢へず注射をして、明日にならなければ經過は解らないと言つて歸つた。此の時フト母は思ひ出した事がある。

『お父さん。お前さん、今夜山小屋へ監督に行かなくちや不可なかつたンだよ』

父は苦い顏をしてうなづいた。

『そりや俺も氣がついて居たンだ。けれ共此の急病人を置いちや行かれねエ』

『然し山小屋は貴郎が監督に行かないと、あとはみンな亂暴男ばかりだもの、喧嘩でもしなけりやいゝがねえ』

『たツた一晩だ。大丈夫だらう！』

父は斯う言つて、今は全く昏睡狀態にある我が子の顏を憂はしげに見入つた。

外は何うやら風が出て來た。颯々と物凄い音を立てゝ樹々を顫はした。

——(C)——





た時、片方の男が證人になつて救つてくれた。

『この鵞鳥はこの男のです。鐵砲の時分からこの男のだつたのです。』

暫らくして、こんどは救つた方の男が捕まつた、盗んだのは鐵砲である。で、又約束通り片方の男が證人席へ立つた。

『この鐵砲はこの男のです。ピストルの時分からこの男のだつたのです。』

○與へよ

校長『人は他人に物を與へるやうにならなければ不可ません。』

生徒『ぢや僕のお父さんのやうだナ。』

校長『君のお父さんは？』

生徒『活動のビラ撒き……』

◇商賣柄

醫者『過勞か、神經衰弱か、兎も角頭の仕事は一切お止しなさい。』

患者『そいつあ困りましたな。實は商賣が床屋なんですが。』

鬼兒の父は山小屋の監督だつた。山小屋といふのは嘗て計畫されたA製材株式會社の第一期事業たる此の山の伐材に雇はれて居る木挽たちが居る小屋の事であつた。何れも荒くれた男許りだつたが、流石に猛獸のやうな連中も此の監督には威壓されて居た。彼が小屋を監督して居る以上、みンな猫のやうに縮み上つて居た。ところが今夜は何うしたのかその鬼監督が家へ行つた儘小屋へ戻つて來ないのだ。猛獸連中秘かに歡聲を上げ始めた。

『久し振りで女房の晩酌に酔ひ倒れたンだツペ』

『さうかもしれん』

やがて彼等には日常茶飯事の賭博が始まつた。秘密に貯はへてある強烈な焼酎のコップは公然と彼等の間を往來した。猛獸に酒が廻つたのだ。始めは唄ふ聲、笑ふ聲のみだつたが、その中それが口論となり、叫び聲となつた。その中賭博をやつて居た一團が何うした爭からか、突然總立ちになつて猛烈な格鬪を始めた。

打つ、毆る、蹴る、掴み合ふ——その聲、その物音——小屋は破れんばかりの騷ぎになつた。その中誰か突然吊るしてあつた大きなランプを打破つた。四邊は忽ち暗黑！

だがそれも一瞬の事で、忽ち流れ出た石油へ火が惡魔のやうに傳はつて、見る



○近視眼



主人『如何です、やうやく泉水が出來上つて庭らしくなりましたよ、まだ……』

お客『全く立派なもので御座いますね、それにお宅の水の綺麗さと云つたら、同じ泉水を造るならこれでないといけませんね、ホントに泉水の底が透いて見えるやうで……』

主人『いや、まだ水は引いてありませんので……』

◇御飯の味

乞食『もう、この一個月ばかりは、お飯の味も知らないのでございます』

皮肉家『前と味に變りはないよ』

○卵も二つ

四人の子供たちのお母さんが、朝のお膳の時に、『ジョニーや、今日はお父さんが留守だから、お前がお父さんの席に着いてお

見る一團の火焔が捲き上つた。

『あ、火事だ！』

『火事だ！』

『火事だ！　火事だ！』

小屋の外は狂風が荒れ廻つて居た。火焔は此の狂風を得て素晴しい勢ひで忽ち小屋を嘗め盡し、やがて附近の伐り取つた木材へ移つた。さうしてそれがまた這ふやうに走つて、まだ斧を入れぬ樹林を襲つたのだつた。

『大變だ！　山火事だ！』

斯くして監督者のなかつた木挽たちの過失から、今は全山火の海と化して、全く收拾すべからざる狀態に陷つてしまつたのである。



――（D）――

令孃が梅やを連れて買物に行く別莊の門を出ようとする途端、彼女はパッタリ顏色青さめた父と出會つた。

『まあお父さま、何う遊ばしたの、お顏の色は眞青よ』



祈りをするのですよ』
といふと、ジョニー『僕、お父さんになるのなら、卵も二つなけりや……』

○廣　告

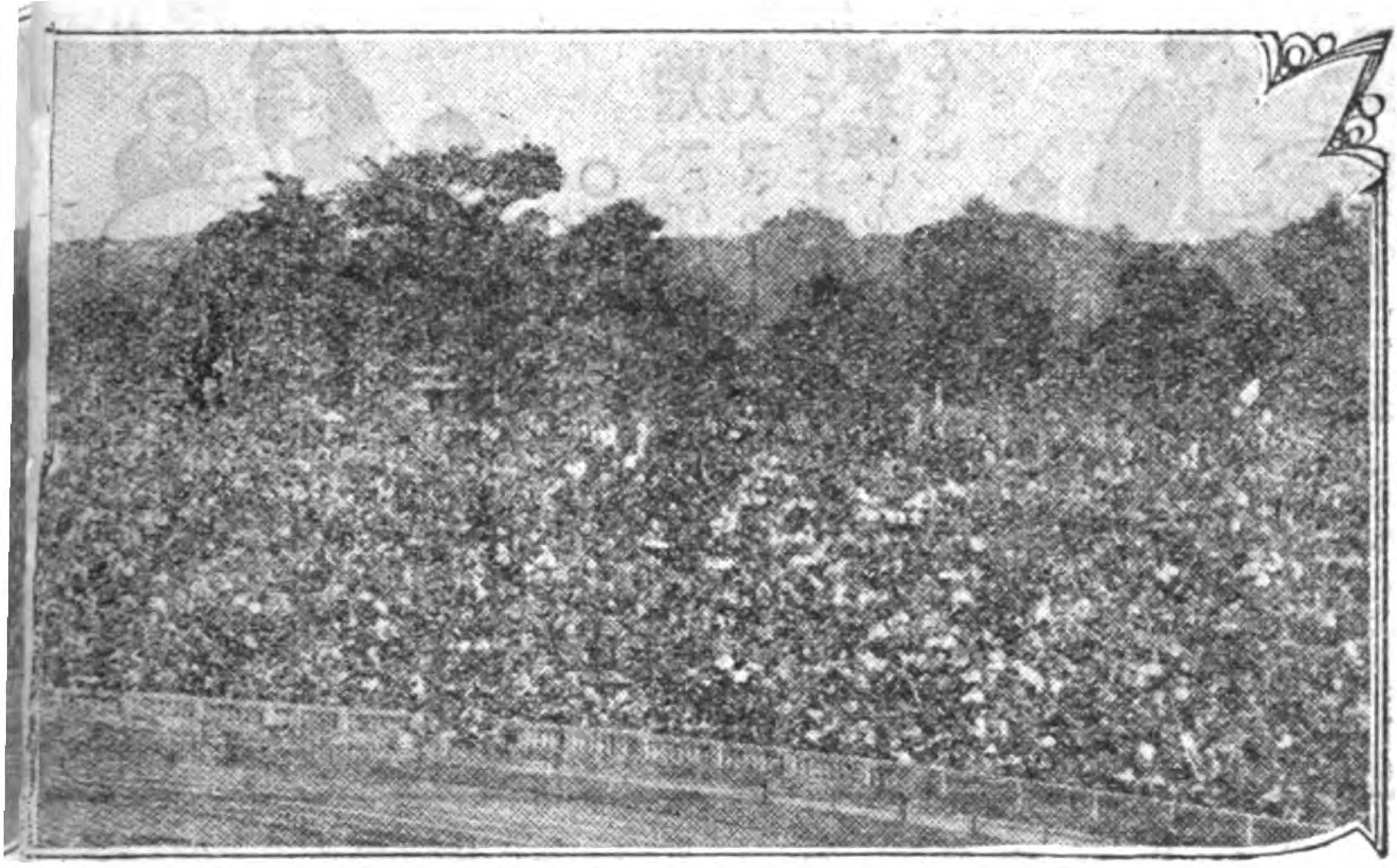
旅人『この村は汽車の便はどうです？』
村人『さあ――一日四回發着するつて廣告はしてますがねえ。御存じの通り、廣告なんて嘘が多いんですから、全くあてにはなりませんよ。』

◇心配御無用



傭主『あんたを使ふにしても、掛け時計ばかし眺めてるやうぢや困るんだ』
タイピスト『いゝえ、その御心配はいりませんわ。私、腕時計をはめてますから』

『あゝ、お前一寸、私の部屋まで來てお呉れ』
彼女は慌てゝ父の居間へ引返した。見るとそこには會社の支配人が、これも矢張り青くなつて控へて居た。彼は令孃の父を見ると立ち上つて言つた。
『社長如何でした』
『矢張り駄目だつた。會社の所有の木材は全部、跡方もなくなつてしまつたよ』
令孃は何となく胸をつかれた。
『お父さま――』
A製材株式會社の社長であるところの父は彼女に言つた。
『昨夜會社の山から突然火事が起つてね、山は丸燒けになつてしまつたのだ。折角會社が苦心慘憺して漸く第一期の實行期に這入つた許りのところで此の不幸だ。會社はもう迚も再び起つ事は出來ない！』
令孃はフラ〱となつた。
『まあお父さま、何だつてそんな火事なんぞ……』
『原因は木挽の過失らしいが、不行屆だと言つてその木挽の監督を責めたところで、もう後の祭りで何うする事も出來ない。もう此の別莊も今年で見納めだよ』
令孃は父の居間からよろめいて自分の居間へ戻つた。
『まあ飛んでもない事に……』
だが何うして斯んな不幸が自分たちを襲つたのだらう。彼女には何うしても解らなかつた。
『まあお氣の毒なお孃さま！』
部屋の外では婆やも貰ひ泣きをして居た。然し婆やの胸には何うしても、此の間汽車の中でフトお辨當の包紙で讀んだ文句、『お願ひ――人が怪我をしますから汽車の窓から物を投げないで下さい』といふ言葉が思ひ出される筈はなかつた。さうして只令孃の痛はしさに同情する許りだつたのである。
汽車の窓から棄てたバナヽ――それは本當に人を傷け、遂には自分も亦それに傷いた。
――人が怪我をしますから汽車の窓から物を投げないで下さい――
（終）



日獨競技　五千メートルの大熱戰

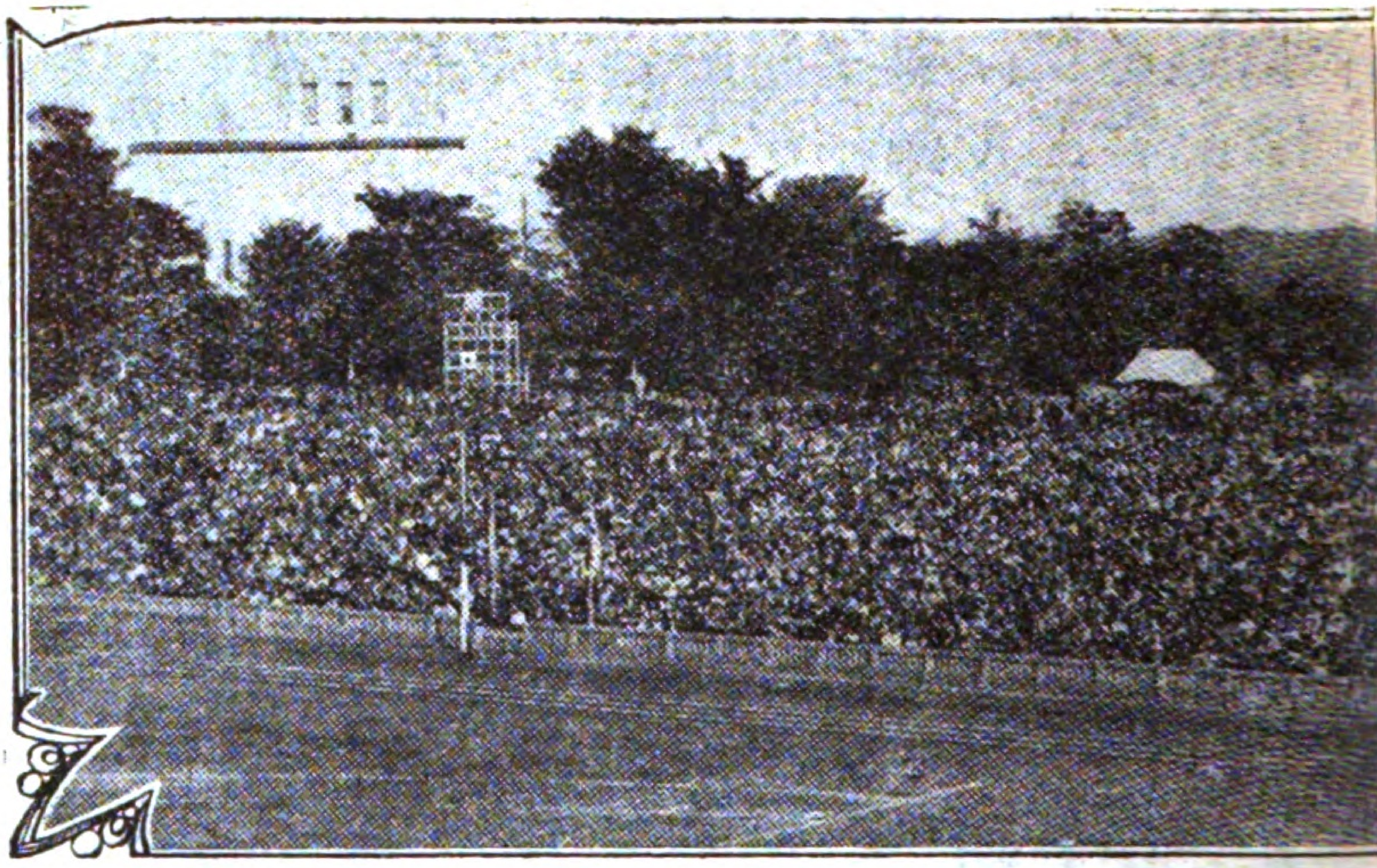
鳴弦樓主人

この意氣！　この熱魂！

昭和四年十月五、六兩日は、我が陸上競技にとつて記念すべき日である！否、ひとり、陸上競技のみにとゞまらず、全日本スポーツのために、記念すべき日なのである。

實に、この日ぞ、わが陸上競技界に一新紀元を劃すべき日獨對抗競技大會の開催——天高く氣澄める神宮競技場に於て、颯々たる金風裡、兩軍必死の大接戰は展開されたのであつた。

而して、天もこの壯擧を祝してや、連日の雨まつたく晴れ、この日絶好のスポーツ日和——強豪ドイツ軍は、一昨年、アムステルダムの世界オリンピツク大會に於て、米國、芬蘭に次いで世界第三位の戰績を得たる自信と、日本來朝前、既に英國、フランスを一蹴し去つたるいつぱいの意氣と、更にまたヒンデンブルグ大統領の熱烈なる激勵とを負うて一擧にわが軍を破らんとし、わが軍はまた、一昨年のオリンピツク大會に、世界第八位を得て、爾來いよ〳〵熱錬熱鍛、同じくオリンピツクに世界第七位なりしフランス軍を迎へて、所謂一昨年の日佛對抗競技となり、一擧忽ち彼れを擊滅して意氣いやが上に揚り、勇躍更に今世界第三位の獨軍を迎へて、日に月にあらはれ行くわが競技の進境の程を示さんとしてゐる



見よ！　潮の如き大觀衆
白線あざやかにトラックを染め、戰ひいまや開始されんとす!!

のだ。

勿論、オリンピック大會の戰績からすれば、彼れドイツ軍は第三位であり、わが日本は第八位、更にまた最近の記録から見ても、順當に行けば、ドイツは斷然わが軍を粉碎するであらう、併し、世の中は二プラス二、イークオル四の理窟一遍には參らない、況んや、その後の進境メキ〳〵たる日本選手の、戰となれば忽ち熱情カッ！　と全涌し、觸るゝものみな燒きつくさずんばやまぬ意氣熱塊を以てブッカッて行くのだ。どうなるかわからぬ。――茲に試合の興味がある。

日本獨特の運動精神

果然、競技は、火の出るやうな大接戰とはなつた。

先づその第一日、劈頭百十メートル高障害に於ては、日本軍一等三等を占め、ドイツは二等四等を得て、日本軍ドッと凱歌をあぐれば、その第二、砲丸投に於て、ドイツ憤然これに酬い、一等二等、共に彼の占むるところとなつて盛返し、その第三、二百メートルに於ては危いところで、彼の勝となり、その第四、棒高跳に於ては、わが軍力戰してつひに彼れをハネ返した。實に一勝一敗、追ひつ追はれつ、戰勢全く豫測すべからざる狀態を以て進んだが、ついで行はれたる八百メートルに於ては、力戰及ばず、またしても、その一二等を彼れに獨占され、ここに競技は第六、五千メートル競走に入つたのであつた。然るにこの五千メートル競走たる――自分は、こゝに正しく日本選手の意氣を見た！　世界に冠絶せる日本精神の發現を見た！　世界スポーツのどこをたづねても、到底發見し得ない日本獨特の運動精神を見た、自分は嬉しかつたといふよりは感激其のものだつたのだ。

『これだ！　これだ！　これあつてこそ日本の運動なんだ。日本の選手なんだ。

そしてただこの一事でも充分、たとへ競技のすべてに破れても、この一事あれば、日本のスポーツは、必ず今に世界を風靡する。よし、體力の差ありとするも、體力の差、それ、何するものぞ。わが日本の獨特の運動精神は、必ずこれを突破してあまりある！』

筆者は、この感激を、胸底深く刻みつけられたのである。そも、筆者の謂ふ、日本獨特の運動精神とは如何なるものなのか？

乞ふ、しばらく筆者をしてかの五千メートル競走について語らしめよ。

見よ！　スタートを切つた！

正面貴賓席には、高松宮殿下、今大會總裁賀陽宮殿下、朝香宮殿下、竹田宮禮子女王殿下、東久邇宮盛厚王、彰常王の兩若宮殿下の六皇族方御熱心の御觀覽、獨逸大使はそのかたはらにあつて祖國選手の戰績や如何にと、彼等の一擧一動にも異常の注意を拂つてゐる。

いま八百メートル競走は、斷然獨逸軍の勝利に歸し、中央スタンドに陣取つた獨逸應援團は極度に熱狂した。

見渡せば、楕圓形の競技場をめぐる觀覽席は無慮七萬の觀衆を以て埋まり、その楕圓形の眞黑に太い一線をなせる觀衆席と中央淡綠色の芝生のフイールドをクッキリと劃して、一周四百メートルのトラックは濃いセピア色の地肌に輝き、そのセピア色のトラックを縫ふ四條の銀線は、いまはじまらんとする五千メートルの四選手を飽迄冷嚴に迎へんとしてゐるのだ。

『五千メートル競走に移ります、コース順――一のコース、日本北本君、二のコース、獨逸ボルツエ君、三のコース、日本津田君、四のコース、獨逸デイクマン君』コースナンバーは呼びあげられた。

四人の選手は出場した。勿論五千メートル競走に於ては、コースはただ出發と決勝の時だけの要、あとはコースによつて走るのではない。

出發點は、正面スタンドからフイールドをよこぎつた向ひ側、決勝點は、正面スタンドの眞下である。五千メートルと云へば、このトラックを十二周半だ。

と見る、今出場したる四人の選手――ドイツ側は、白に太く赤線あるシャツ、細き二本の赤線あるパンツ、胸間赤線の中央なる白圓には黑色の鷲が傲然と刻まれてあり、日本側は、黑のシャツ、純白のパンツ、胸間なゝめに描く日章旗、夕陽に映えて一段と目をひく、この鷲とこの日の丸と、二つの鷲と二つの日の丸は、いまこの十二周半をめぐつて勝敗を決しようと云ふのだ。鷲が日の丸を拔くか、日の丸が鷲を追ふか？

觀衆の豫想果して如何？

『どうだ、あのボルツエの體格は……デイクマンに比べて丈は少し足りないが、實に理想的の筋骨だ。十五分九秒といふ記錄を持つとる』

『しかし今度は、盲腸炎をやつて元氣がないさうだぞ』

『併し、今更らしく云ふんぢやないが、見ろ、あの並んだところを……彼等まるで身體が違ふなア。日本軍は子供のやうだ』

『ソレだ、全くさうだ。それに彼等はまるで走る機械のやうな身體だ。重心が高く、フハフハして、見るから輕さうだ。日本人は、……いかんなア、北本も津田も、重心が低くて、如何にも身體が重さうぢやないか、えーい。北本、津田、しつかり頼むぞ、大丈夫か、北本、頼むぞ津田』

『イヤ大丈夫。北本の元氣と云つたら素晴らしい。身體がなんだい！重心が何だい！しつかり行け、北本、しつかりだぞ、津田、戰ひは意氣だ。恐れるな！』

『オイ、君、津田はどうなんだ？少し元氣がないと聞いたが』



寫眞は（上段右）北本選手・（左）ディクマン
（下段右）津田選手・（左）ボルツエ

『イヤ大丈夫、元氣全く回復した。日獨競技の意氣で行くだらう』

『でも、先日の日獨競技豫選の五千では、北本が津田を破つてるな』

『違ふ、あの時は津田は、練習過度で元氣がなかつたのだ。今度は元氣いつぱいだ』

『イヤ〳〵さう單純には行くまいぞ。ディクマンは何しろ今年十五分七秒二で走つてる』

『イヤそれは地面の堅いところでの記錄なんだ。地面の軟い日本では、迚もそんな時間では走れない。それにドイツ軍は千

五百までは、素晴しく強いが、それ以上になれば、恐れるに足らんと思ふ。何しろ日本人には負けじ魂が張り切つてゐる。そこが唯一の頼みなんだ。津田！　北本！　しつかり行けツ』

『頑張つてくれ、此處で負けたら、餘りに差が大きくなるぞ。北本、津田、二人とも頑張つてくれ！　頼んだぞ！』

息づまるやうな緊張のうちにも、觀衆は、叱るやうな、勵ますやうな、また不安に堪へぬやうな言葉を叩きつけるやうに送つてゐる。

四人の選手は、各自のコースについた。北本は例の如く豆しぼりの鉢卷をキツと後ろに結んで眉宇に精悍の氣魄を刻み、津田は、勝算胸に秘めて、しづかに出發の期を待つてゐるものゝやうだ。彼れはオリンピツクマラソン第六着の勇者なのだ。

時に鳴る、合圖の笛！　選手の身構へ！　場内七萬の觀衆ハツと鳴りを鎭めてのりだした。

途端響く銃聲一發！　四人はパツとスタートした。

陸の四勇者は、ネヂを離れた機械のやうに走り出した。

おゝ、戰ははじまつたのだ。

滿場總立！　熱狂！　亂舞！

走り行く……走つて來る……走り行く……先頭はボルツエ、つゞいて北本、津田、デイクマンの順序、各自二三メートルの間隔をおいて、心なしかドイツ側は如何にも自信に滿ち滿ちてゐるやうに思はれてならない。落ちるかな？　不安だ、何としても不安だ。

第一周は終つた。

第二周も終つた。ボルツエ――北本――津田……デイクマンの順序だ。

『今度は？』

と第三周目を見れば、依然としてボルツエを先頭に、北本、津田、デイクマンの順、さながら、その順序に走るべく拵へられた走り人形のやうに、依然として同じ形勢だ。

『北本！　北本！』

觀衆は、この不思議に依然たる順位に、『北本、津田、どうした？　え？　どうしたんだ？　滿を持してゐるのか？　それとも、それつきりしか走れないのか!?』と懸念に堪へず、『キタモト』『ツダ』『大丈夫か』『これでいゝのか！』と云ふやうに連呼する。

第三周も終つた。

『偵察戰が終つたぞ、サ、これからだ』

と云ふ聲も聞える。

然るに、第四周のはじめだ！　依然、機械のやうに整つた今までの順序がパツと狂つて來た。

『ア！　拔かれる！』

觀衆ハツと驚く時、最後に走つてゐたデイクマンの歩はのびた、そしてピツチは早くなつた、津田は追はれた、忽ち拔かれた。北本は？　ア！　これも追越される……

デイクマンと北本と……走る！　走る！　[illegible]に……一は追はんとし、一は拔く迄引離さんとする。

『北本釣られるな！』

『まだ早い！　まだそんなに走つちやいかん』

果してデイクマンは北本を拔いた、同時にボルツエは、デと北本の二人に拔かれた、ここに於て先頭デイクマン、北本、ボルツエ、津田、の順序とはなつた。と思つたも數瞬、北本スピードを出して先頭を追ひ、力走忽ちこれを拔いて、北本、デイクマン、ボルツエの順……。もう五周目だ！

『お〻北本！』

『あせるな！』

『なぜあせる？　まだ早いといふのに！』

觀衆はもうヂッとしてゐられなくなつた。顏は熱し、口はかわき、眼は險しく血走つて、その握りしめた拳骨の中には、汗がいつぱいに溜つてゐる、恐らく此の拳骨でわれにもなくウンウン押す彼等の腿には、眞赤な圓が描かれてゐるには相違ないのだ。

息がつまる！　息がつまる！

果然第六周の半から、第七周へかけて、火のやうな接戰は開始された。

『もうこ〻だ！』

『この邊で！』

彼等はみなこの六七八回を勝敗の岐點としたに相違ない、彼[illegible]にたつた。餘裕あるものは、こゝに全力をあげて[illegible]さんとし、疲れしものは、こゝで頑張りさへすれば、もう大丈夫と、こゝを先途と力走する。

中にも津田は、デイクマンが、先頭北本を追ひつめんとするを見て、かくてはならじ、我これを牽制して、北本を心おきなく走らしめんと、歩を早め、先づボルツエを押へ、餘勢忽ちデイツクマンをも拔いてしまつた。

『津田！　うまい！』

『牽制しろ、その調子だぞ！　先へ出すな！』

わが意を得たりといふやうに、觀衆は膝を打つて喜ぶ。

がデイクマンも負けてはゐない。こゝぞ勝敗の岐點と思へば、あの白い足の歩幅はグンとのびて、今おのれを拔いた津田にジリ〱肉迫すれば、津田も負けじと力走する、拔かんとする、拔かれまいとする、迫れば離し、離せば迫ふ。が、デイクマンは、……アッ！　津田を……つひに津田を拔いた。

『津田頑張れ！』

『北本をも拔く氣だぞ、津田押へろ、牽制しろ！』

滿場聲をからして連呼すれば、津田の神經はこの聲援に應じたか、その口邊ピリ〱と痙攣さへ見せて、あの眞黒な脛はグン〱〱スピードを出して來た。

『お〻！』

接戰だ！　デと津田と、肩を比べて、津田はこの機に拔かう

とする、デは何の！　と目をむいて走る！
『ウーム、もう一息だ！　津田！　踏張れ津田』
『ア！　ソコだ！　ソレ！　そのイキ！　ウッ！』
つひに津田の頑張りやまさりけん、その火と燃ゆる闘志や強かりけん、津田はデを抜いてスッスッスッスッ！　戦友北本如何にと見れば、見よ北本は決してあせつたのでもなかつた、早まつたのでもなかつた、彼のスピードは最初から殆ど變らず、津田とデが火の出るやうな接戦を演じてゐるときに、彼はグングン〳〵走りに走つた、たゞ無茶苦茶に韋駄天と走る、さながら、神がかりにでもなつたかのやうに、その吊し上つた眼と一文字の口に、鐵のやうな自信を見せて、些かの疲勞の色さへなく、今は津田を引離すこと七十メートル、而かも力走……いよいよスピードは加はつて來るばかりである。お丶此の火の玉のやうな男よ！
『倒れなければい丶が……』
『餘り走り過ぎる……』
『ドイツは最後で抜くのではないか』
が第八周目も……第九周目も、北本断然と先頭を占め、津田、デイクマン、ボルツエの順は狂はなかつた。イヤ、第十周も依然その順位、北本の快足は津田を引離すこと百メートル、デを抜くこと百二十メートルに及んで、こ丶にはじめて觀衆をホッとさせた。
『占めたぞ、占めたぞ、もう大丈夫だ、北本一着だ、から離れては抜かれつこない。津田、しつかり行け！　頑張るんだぞ！』
が津田は、デを押へ、北本をして心おきなく走らせようとした先刻の大接戦に疲れた。
それを見てか、デイクマン、第十一周に及ぶや、またもピッチをはやめて津田を追つた。
『それ津田、もう少しだ、もう一



時だ！』

『津田！』

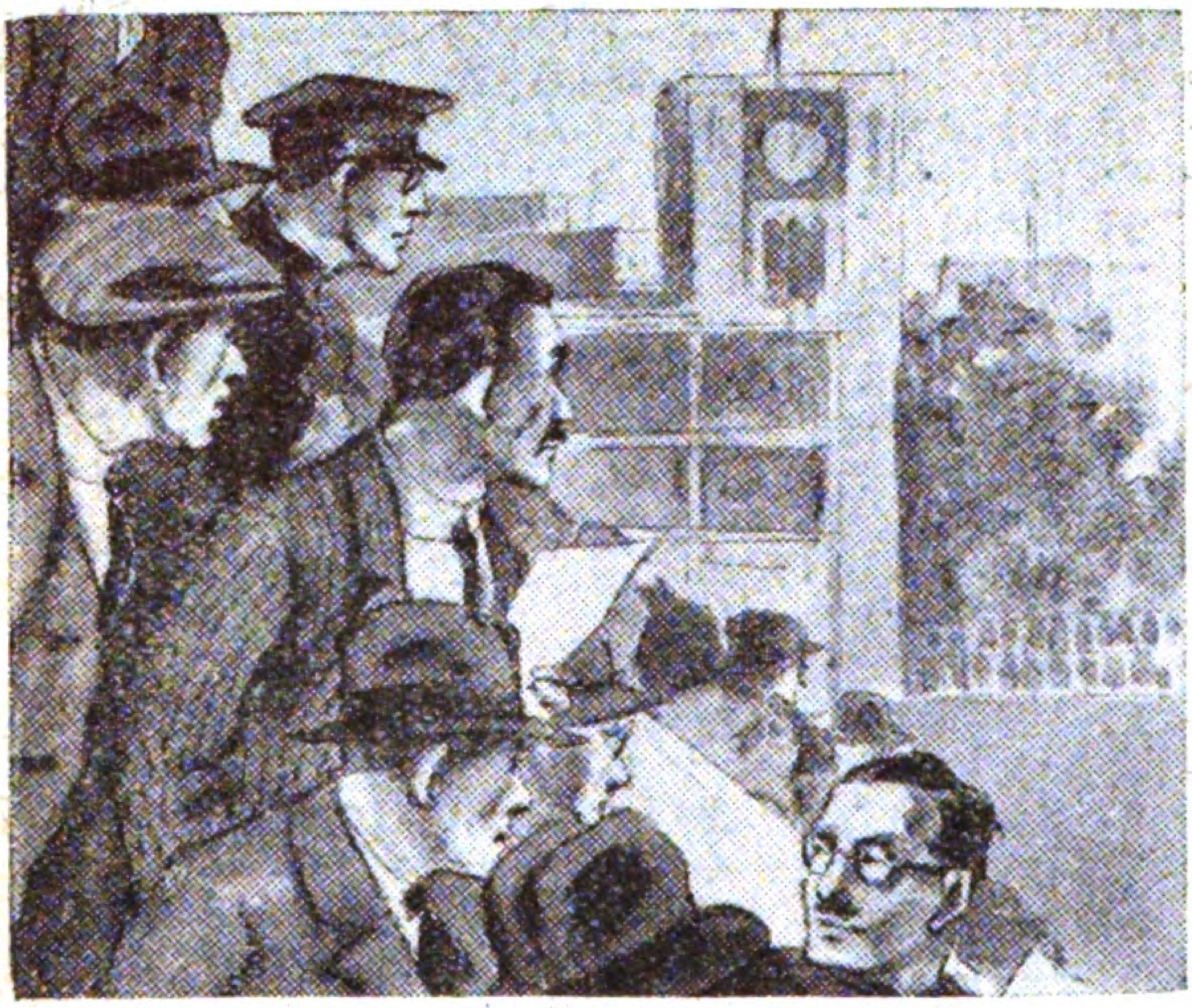
刻でデイクマンは津田に肉迫した。津田は齒を食ひしばつて抜かれまいとする。

『津田！』

『津田！』

『ツダァ！』

こゝに於て滿場總立ち、津田、踏張れ、疲れたらうが、頑張つてくれ、もう一息の辛抱だ！ 心と云ふ心は皆さうだつた。さう勵まさずにはゐられなかつた。彼等は『津田』『津田』を連呼して熱狂まさにその極に達した！



おゝ、津田よ！ この聲援に對しても走れ！ 走れ！ たふれても走れ！ が彼れは走つた、その足はもう地にはつかず、その進路は怪しく亂れ、その體は危ふくヨロメき倒れんとしながらも、なほ且つ彼れは夢中で走つた。夢中で驅けた。



『おゝ、その調子だぞ！ しつかりしろ！』

死力を盡す津田の力走、さしものデイクマンが必死の追走も今は及ばず、津田に離るゝこと二十米となつた、かくてや十二周目の半ば、北本が決勝點を過ぎる時、一發の銃聲、これなん『もう一回だ！』の合圖！ 走心いやが上にはやる北本は、こゝに及んで走力ます〳〵加はり、勇躍一番最後のスピードを以て、脫兎の如く決勝點のテープを切つた。

見よ！ 津田を抜く百五十メートル、デイクマンを抜く百八十、ボルツエを抜く實に二百五十メートル、タイム十五分三十

秒八、實にこれは、一九二五年、永谷選手が同じトラックで、十五分四十秒六の記錄を作つて以來、久しく破り得なかつた記錄なのである。而かも彼れは、餘裕綽々である。

かくて、一着北本、二着津田、三着デイクマン、四着ボルツエ――北本は十五分三十秒八といふ日本新記錄を出したのであつた。が、津田は決勝點に入るやバツタリ倒れた。ホツと氣がゆるんで倒れたのだ。

『おゝ、よく走つた、よくやつた!』

『二着だぞ、一着二着共に日本だ。よく走つてくれたなア、しつかりしてくれよ』

係員は、われにもなくさう云つて、倒れた彼れを抱き起した。津田は、その聲に、ハツと我れに返つた。『有難う!』その時津田のニツコリとした眼は、たしかにさう云つてゐた。やがて津田は手厚い介抱によつて漸くにして立上つた。

さるにても日本二選手の意氣の鋭どさ、不振のボルツエはしばらくおき、十五分七秒二といふ驚くべき今年度記錄を有つデイクマンを向ふにまはし、北本正路が從來彼れの最高記錄十五分五十二秒を斷然突破せる十五分三十秒八を出したると、津田が、文字通り、眞に文字通り死力をつくして、飽くまでデイクマンを押へ、北本を先に出したる決死的奮闘とは、日本人にしてはじめてよくなし得るところ、その戰ふにあたつてや、宛然火の玉のやうになつて鬪ふところ、まさしく、これ日本精神のあらはれである。さうだ、北本も津田も、その體力に於ても、その記錄に於ても、はたまたその走力に於ても、理窟から云へば、到底ドイツ側に敵し得べくもないのだが、彼等は體力や脚力で走つたのではなかつたのだ、魂で走つたのだ。火の玉のやうな魂で走り拔いたのだ。その極度に強靭な忍耐力、この極度に強烈な戰鬪力!これが日本獨特の運動精神


寫眞（右）北本選手の決勝線を切つた刹那と（左）熱狂せる大觀衆。

でなくて何であらう。

かくて翌六日、競技全く終り、夕陽將に西山に沒せんとする頃、五千メートル第一着にして日本新記錄を作つた大會切つての殊勳者北本正路は、七萬觀衆の送る萬雷の拍手裡、堀切東京市長トロフィーを受けて、誇らしくもまた輝かしき存在を日本運動史の上に刻したのであつた。



十月五、六兩日にわたる日獨對抗陸上競技大會は、その總點數に於ては、日本軍必死の力戰によつて、最後の一戰まで追ひつ追はれつ、字義通り、虛々實々の大接戰を演じたが、つひに最後の一戰に於て、引きはなされ、總得點に於ては、獨軍七十九點五對日軍七十一點五の戰績を以て、即ち八點の差を以て、つひに遠來の獨軍に名をなさしめて了つた。

しかし、總點數に於て破れたりとはいへ、如上五千メートルに於ける北本、津田兩選手に於て見た日本獨特の運動精神は、強弱の差こそあれ、他のいづれの競技にもあらはれてゐた、イヤ、それで滿足である、ただこの一事あらば、わがスポーツは、必ずや、近く世界を風靡する、自分は堅くそれを信じてゐる。

さしゑ　吉邨二郎

子供は愛するとゝもに敬せよ

衆議院議員　鶴見祐輔

英國の家庭は子供部屋を中心として建設せられる、とはよく言はれる言葉である。そこに英吉利人氣質がある。

それは英人は、民族愛のこゝろの強い國民だからである。

英國の詩人ウォーヅウォースの歌に、

『子供は成人の父なり』

といふ一句がある。

それは、子供が大きくなつて大人となるのであるから、成人のもとは子供だ、といふのである。まことに千古の名句である。

ゆゑに一國の偉大となるもならぬも、その國民が子供を大事にするかせぬかで定まるのである。古來雄大な國家を作つた民族は、みな子供を大事にした民族である。古代希臘の民族が子供を大切にしたのは、有名なことである。

それは子供は、たゞ年のゆかない頑是ない玩弄物として遊び戯れあまやかす相手なのではなく、將來の偉大なる民族的相續者として、嚴粛な氣持で敬ふべきものなのである。

この愛する外に、敬するといふ氣持が、我々の子供に對して持つべき大切な點である。たゞ老牛の犢を舐るごとく、他愛もなく可愛がるといふことは、本當に子供を大切にする所以ではない。

佛蘭西人の子供を愛する氣持と、英吉利人の子供を愛する氣持との差は、こゝにあると言はれてゐる。佛蘭西の母は、たゞ無性に可愛がつて、子供のいふことなら何でもきく、英吉利の母は、子供の大成を希ふがゆゑに、子供の故なき要求は叱正して決して、愛情に溺れない。

本當に子供を愛するのは、たゞ自分の子供として愛するのではなくて、偉大なる民族の相續者として敬するの心あつてのことである。

子供の質問に答へて、よい加減の嘘を敎へたり、子供は解らぬものと頭から決めてかゝつて無理を通させたりする心持は、本當に子供を尊敬せず、本當に民族を思はざる心である。

日本民族を、太平洋時代の希臘となし英吉利と爲すか否かは、我々が古代希臘人や近代英吉利人のやうな眞劍な氣持で子供に對するか否かできまるのである。



鶴見祐輔氏

今日の日本に取つて、最も大切なことは、我々が子供に對して、正しい態度を取ることである。それは、愛すると同時に敬するといふことである。

かゝる意味に於て、子供の精神的發達の資料たる讀書は、子供だけの問題でなくして親の問題であり、さらに民族全體の大問題である。

健全にして面白き讀物を子供に與へよ。

それが親としての大切な義務である。

私は少年倶樂部や少女倶樂部や幼年倶樂部が、この目的をもつて編輯せられつゝあることを喜ぶ。

どうか日本民族完成のために、健全にして面白いかゝる雑誌が、すべての家庭の中に入り、すべての子供さん達に讀まれて、偉大なる民族が作り上げられんことを祈る。

山上憶良

しろがねも　こがねもたまもなにせんに
まされるたから　子にしかめやも

奮闘美談 見ろ！村で成功して見せる

小木曾旭晃

友達の表彰

『あゝ、本當に梶田君は偉いな』

散會の人波に揉まれながら會場を出ると、梅村登君は、誰へ聞かすともなく、さもさも感に耐へたやうに呟いた。

その日土岐町（岐阜縣）で開かれた土岐郡の青年團總會で、郡長松尾國松氏は、梶田爲吉と云ふ一人の模範青年を表彰した。梶田君は梅村君と同じ土岐町字發堂に住む青年で、二人は年も同じ十八、小學校では同じ机に並んで授業を受けた親友である。

梅村君は親友のこの榮譽を我事のやうに喜び、誇さへ感じた。が、直ぐある淋しさの身に迫るのを覺えた。

（でも自分は、そんな立派な青年の友達として、恥しくない行ひをしてるだらうか）

梅村君は思はず赧くなつた。

『梅村君』

折柄肩を叩く者がある。

『や！　梶田君か、今日はお目出度う』

『有難う』

『君は偉いね、郡長さんは君のことを話す時、涙を流してゐたぜ』

『それを言はれちや穴があれば這入りたくなるよ。涙――といへば、君の孝行振りこそ本當に涙ぐましい。大酒飲みで酒亂のお父さんに惡い顔一つ見せないのだからな、いつか君のお父さんがお酒に醉つて馬車の上でぐつすり寢込み、車は馬の引くに任せて歸つたことがあつたね、あの時なんぞも、君は馬を音のせぬやうに外して厩に休ませ、お父さんをその儘置いて蒲團を掛け、安眠を妨げぬやう、風邪を引かぬやうにして置いて、醉ひの醒める迄傍で張番してゐたね、そしてお父さんが眼を醒したら、不平一つ言はずに、荷馬車を片付けてゐた、あんな眞似は僕等に出來ない、感心なのは君だよ』

やがて岐路へ出て二人は袂を分つた。ひとりになると梅村君の心はまた重くなつた。

（あゝは梶田君は言つてくれるが、人の子として親に孝行するのは當然なことだ、褒められることはありはしない、それより生活難に追はれて、人がましい行ひもせずに過して來たのが恥かしい。さうだ、これからでも遅くはない、名古屋に行かうか。東京へ出ようか、立身しようと思へば、こんな片田舍では駄

さう決心して梅村君は眉をあげて力んだが、間もなくまた項垂れて思ひ沈んだ。

『さうすると、働けぬ父に、弱い母、誰が七人の弟や妹の世話をするのだ』

心は暗くなるばかりだつた。

一輪の野菊

それからは野良へ出ても、梅村君の心は樂まなかつた。志を立てゝ決然出郷しようか、村に殘つて父母に仕へ弟妹を守り立てようか。

『一體、如何すればよいのだ』

立身か――愛か――

日々、毎日、梅村君は悶え惱んだ。

或日野良の歸りに、道傍に一もとの野菊の花を見出した。葉は莖は心なき者の足にかけられたのであらう、泥まみれになつてゐるけれども、清楚な花はそれにも拘はらず、堂々として高い香を放つてゐる。梅村君はガンと頭をどやされたやうに感じた。

『あゝ、これだ！　木の根草の根には邪魔せられ、人や馬に踏み蹂られても、ぢつと隱忍して遂に美しい清らかな花を咲かせる。この分を守る心こそ、世の中で一番尊いものでなからうか。よしツ、俺もお前のやうに村に留まらう、成功は村に居ても出來るのだ、きつと一花咲かして見せる』



梅村君は酪農業で奮鬪しようと決心した。然し、それには如何しても僅かばかりの耕地では駄目である。いろいろ考へた末、自宅から一里半ばかり離れた隣村大湫村の村有原野四町歩を借り入れて、十年計畫で開墾に着手した。時に十九歲。

四面楚歌の聲

だが、一口に開墾といつても、人手があるでなし、唯、裸一貫の體と鍬だけが資本である。それも貧乏な爲め、月の二十日を生計のため働き、後の十日で開墾するといふ心細さ。――でも人の一心は恐ろしい。初年は四畝歩、二年目には八畝歩程開墾した。

然し、この事業にはいろいろ金が要る、三年目には早くも三百圓の借金が出來た。家計は愈々益々窮迫する、だが、梅村君は屈しなかつた。

二十年の春、長島町からスヱ子を娶つた。女でも人手の殖えたのは何よりだ。それに力を得て愈々奮鬪したが、事業は

却々完成せぬ、二十五の時更に決心を堅めて、

『毎日一里半あるところを、辨當持で通ふのは大變だ、開墾地へ移らう』と其處へ掘立小屋を立てゝ引き移つた。

『見込みのない仕事に、あゝも力瘤を入れるとは、正氣の沙汰ではないな』

『でなければ、馬鹿か低能だ』

今は村人は誰一人相手にせぬ。親族の者さへ顔をそむけて物も言はぬ有様だ。

貧乏は愈ゝひどくなる、これでは木の見込みがないと思つたものか、或日、妻のスヱ子は、無斷で實家へ歸つたまゝウンともスンとも音沙汰ない。

巖をも通す力

他のことは兎も角として、妻に逃げられたには梅村君もすつかり屁古垂れた。が、こんなことで初一念を捨てる氣にはなれぬ。そこで最初から自分の心事を知つてくれる唯一人の人であり媒介者でもあるスヱ子の伯父を訪ねて率直に自分の決心を打明けた。

『スヱには未練がないから、良縁を求めて再嫁させて下さい。然し、貴君は私の事業に對する唯一人の理解者だ、スヱの縁が切れても、どうぞ今迄通り相談相手になつて下さい。貧乏な上に骨の折れる



郵製、スエの逃げたのも無理とは思はぬ。私は目的を貫徹する迄獨身で暮します』

その信念の堅さには、岩をも通す力があつた。伯父は何か肯いていつた。

『さうか、惡いやうにはせぬ』

それから數日後。

梅村君が夕方自分の小屋へ戻つてくると、誰れも居らぬ筈の小屋から炊煙が立ち昇つてゐる、戸を開けると逃げた妻のスエ子がいそいそと夕餉の仕度をしてゐた。

『お前か？　如何したのだ』

『はい、申譯ありません、伯父にさとされて目が醒めました、その心算で働かせて下さい』

その答へには堅い堅い決心が見えてゐた。

梅村君は嬉しさに口も利けなかつた。唯妻の手を握つて、ハラハラと涙を溢した。

妻が理解して歸つて來れたのは、梅村君には千萬力だつた。それからは働いて働きぬいた。スエ子も若い女に似合はず享樂を求めず、三度三度牛味噌と麥飯の粗食にも耐へ、よく夫に仕へた。そして義理の弟が不治の病に罹つた際には、農事用の作業着一枚を除く外、悉く女の生命の着物を賣拂つて療養させてやつた程、いぢらしい迄の貞節を盡した。その甲斐あつて、當初から十年經つた

今は、二町ばかりの田畑を所有する身となり、その中水田が一町餘、他は桑園、蔬菜園、果樹園にあて、用水池には養魚をなし、雞豚も飼養して、天晴健實な青年篤農家としての、立派な地步を確保するに至つた。しかも、幸運は更に幸福を招來する。今は夫婦の中には二兒を得、父の酒癖も怡つて、和氣藹々たるものがある。かくて梅村君は、大正十二年、初めて土岐郡長から模範青年として表彰され、昭和二年には青年篤農家として、岐阜縣農會から農產增收研究委員に推され、昭和三年秋、御大典に際しては金澤岐阜縣知事から、農事改良の模範青年として表彰された。（終）





霧の中の曙

野村愛正

林唯一　畫

豪農和田泰造の令嬢陽子は、未來の博士大學教授が保證されてゐるほどの秀才酒見から求婚されて相談のために故郷に歸つて來た。村にはかつて幼時出水の際に生命を助けられたことのある精二といふ青年があつて、勤勉で、誠實で、その愛情は家畜から作物にまで及んで、一莖の花が開いたために全山驚しといふほどみんなから噂されてゐた。

この精二の妹のお妙は和田の上女中をしてゐたが、陽子の兄の辰郎に弄ばれて投身自殺して果てた。泰造は、家の名譽、息子の恥辱を考へて、原因を闇から闇に葬らうとして、亂暴にも遺書を破り棄てた上、兄としての切なる願ひも斥けてさまぐ\卑劣な壓迫を精二に加へた。

かうした父の不法を默つて眺めてゐた陽子は、平和を愛する精二が穩かに村を立去らうとした時――助けられた恩は一生忘れまいと繰返して自分に盟つて來た感情がいつのまにか潜熱的な愛となつてゐる。前途を暗示するやうな雨と風の中を、泣きながら後を追つて走つた……。

前號までの梗概

さらば故郷

前晩、徹夜で仕度を整へた精二は、夜明けを待たないで住み慣れた家を出た。東の空が曉の色に仄白む頃、先祖代々の墓地に立つて、父と妹の墓の前に跪いてゐた。逐はれて行くものは人目にかゝりたくなかつた。少數の人を除いては、默つて生れた村を立退いた。

停車場に行くみち〳〵、自分の作つてゐた田圃にも立寄つてみた。稻は、まだ全體の三分の一刈殘されてあつた。

『誰の手で刈取られるのかな。さよなら、さよならだよ！』

土よ、作物よ、牛の太郎よ、これから誰かまたお前達を愛し、この自分を愛してくれるのだ。精二は、生長を見ずして子供を人手に渡す親の心で永遠のわかれを告げた。

もとの老車夫、今では精二の斡旋で小學校の小使をしてゐる雅助爺さんがたゞ一人、さきまはりをして無理に停車場まで見送りに來てゐた。ほかにいろ〳〵世話になつたものも多いが、知らずにしまつたり、知つてゐても和田、つまり蘭子の父を憚つて知らぬ顔をしたりしてゐるので——これが、所謂蘭子に、一莖の花が開いたために全山が馨しく匂ふといふ諺を思はせた、野邊、家の中、人の心、一杯に滿溢れてゐた昔の、その故郷を出發する時のすべてゞあつた！

精二は、[illegible]溢して[illegible]の聲がると、

『なアに、なんでもないですよ。却つてこの方がいゝので……！』

實際、決心した今朝になつてみると、去りゆくものゝ離愁のほかには不平はなくなつてゐた。彼は、限りなく平和を愛してゐるが故に、村や、和田の一家や、母、兄のためにも自分が出て行くのは當然だと考へるやうになつてゐたのである——時間が迫つて、汽車の響きが遠くから聞えて來だした。精二は、カーキー色の青年團の洋服を着て、小さなバスケットをたゞ一つ持つて、雅助爺さんと一緒にプラットホームに出て行つた。濕ツぽい霧のやうな雨に、櫻の落葉が夥しく地に張附けられてゐた。まもなく列車は停つて、精二も乘込んだ——恰度、この時、靴の泥塗みれになつた、濡れそぼけた斷髮を振亂した洋裝の若い女性が、倒れさうになりながら停車場に驅込んで來た。蘭子である。彼女は眞直に切符賣場に行つて、

『T！』といつて赤い切符を買つた。

雅助爺さんは、窓に靠つた精二の前に立つてゐた。またしても煮締めたやうな手拭で瞼を拭つては、

『いつまでも無事で……わしらはこの老爺ですだ。生きてまた二度と會へるだか……一生懸命、早く偉くなれるのを祈つてを

りますだ！』と繰返していふ。
『あんたもお達者で！』といふ精二の眼にも涙があつた。
後部車掌が手を擧げて待つてゐた。最後に蘭子が、ちらと精二の方を見返つて、よろめきながら飛乗ると同時に、口にしてゐた笛を吹いた。
『左樣なら！』
『左樣なら……！』
汽笛が鳴つて、列車は徐々に動きだした。
さらば、故郷よ！
だん〳〵速力が加はつて、莊助爺さんも、村の小さな停車場も忽ち見えなくなつた。精二は腰を下して、窓ガラスに額をあてた――悲壯に見えるほど緊張しきつた樣子の蘭子が探しあてて來て、默つて空いてゐる前の座席に腰掛けた。精二も、半ば氣疎さうな、半ば驚いたやうな表情を浮べてその彼女を見上げたが、これも默つてまた窓に返つた。



霧のやうな雨は相變らず絶間なく流れて、あたりの村村や、森の姿を、灰色に、濃く、薄く、現はしたり消したりしてゐた。やうやく間にあッてほッとした蘭子は、

暫く息を吐いてから見るともなく見やると、精二は、あの八ツ手の葉のやうな手を額にあて、顔を隠すやうな恰好をしてやつぱり外に見入つてゐるが――いつのまにか、その陽に焦けた汚い頬を、涙が、蟲が匐ふやうに靜かに傳つて流れてゐる。サムソンの肩にも微かな喘ぎが見える……。

だが、それが精二の全部ではなかつた。込上げて來るもつともつとはげしい感情を、非常な努力によつて抑附けてゐるらへ



だといふことがよくわかる――蘭子の胸にも火が放けられた。と、見る／＼野火のやうに燃擴つて行つて、彼女は思はず兩手で顔を覆つた。

別離の情

『お孃さん、どこまでお越しになりますですか？』

氣が着いて反省するところがあつた。精二は自分に返つて聲をかけた――急がねばならぬ時である。蘭子も顔をあげて、

『いゝえ、あのう……あたくし、あなたをお引止めせうと思

つて……！』

『僕を、ですか？』

『精二さん、出發をもう二三日延して頂戴。もう一度引返して頂戴！』

『どうしてゞす？』と精二は眼を瞠つた。

『あなたをこのまゝ立たせてしまつては……いゝえ、永久にですわ。それでは父も、兄も救はれません。間違つてゐるところは、あたくし、どんなにでもしてお詫させます。行かないで頂戴！』

『お孃さん、僕は、何も、あなたのお父さんや、兄さんのことで……。』

『あゝ精二さん、あなたはあたくしにそれをいはせうとなさる。それでは、何があなたをこんなにさせましたの……？』蘭子は、悲痛にはげしく號泣して來て『あなたのなすつたことは正しかつた。みんな正しかつたのに、丸太棒のやうに根も、葉も、枝も捥取られて、一人ぱツちで村を逐はれて……あなたが行つておしまひになると、村の光が消えるのよ。そのためにも……でも、娘ですわ。誰がさうさせるか、あたくしの口からはこれ以上いはせないで……蘭子を信じて頂戴。どんなにでもします。是非……！』

感激の涙が精二の眼を潤ませた。深く幾度も〱頷いて、

『ですが、お孃さん、僕も惡かつたですよ。お妙があんまり不憫に思はれたので、なんとかして慰めてやることが出來たらと……全くあの時は前後の分別をなくしてゐたのでした。それであんな亂暴な、甚だ申譯けのないことをしたりして……今ではほんとに後悔してゐます。詫は幾重にも僕からすべきで、どうぞお父さんにもくれ〲よろしく仰有つて下さい……！』

嘘や、僞りではない。眞實、精二は、殊に證書一札のこともあつたりするので、自分の輕率だつたことを恥ぢて、責められてゐる。衷心から繰返していつて、

『それから、あなたのお父さんが後を引受けて下すつたので、どうやら母や、兄の身の上も立つて行けることになりました。これだけでも、僕は、厚くお禮を申上げねばならないことで……！』

感情的な縺れを棄てゝ考へる時、すべての行爲は美しく、端然としてのみ映る。精二は、いよ〱村を立去る決心をすると同時に、さつぱりと行きがかりを棄てた。最早、怨恨に似たやうな氣持は、故郷の地にはどこにも殘されてゐなかつた――打たれても、叩かれても、ちツとも怒つた様子がない。一體、この男は豚みたいに鈍感なのか？ 蘭子は、呆れて、暫くまじ〱と精二を瞶めてゐたが、

『それでは、あなたは、父や兄を宥して下すつたの？』とい

つかり『何がです？　怒すッ——……。』と、今度は糯二の方がわからない顔をして『僕、はじめから誰も非難してはをりません。みんな仕方のないことばかりで……！』

『だつて……。』といひかけたが、蘭子は、急に息苦しくなつてやめた。

豚のやうに鈍感かと思つた男が、忽ちにして巨人のやうな姿となつて彼女に襲ひかゝつて來たのだ。さうだ、屹然と聳える高い山にとつて、雨や、風や、さういふ些細な出來事がどれほど深く咎めなければならぬものであらう。彼は、はじめから行してゐる……！

たしてそれは愛があるからなのだ。偉大な愛たのだ！　だから、邪魔になるといつて突退けられゝば、默つて避ける。素直に立去つて行かうとしてゐるのもそれなのだ。

さうだ、これが彼なのだ！　蘭子は、花のやうに故郷の天地に豫しく滿溢れてゐた糯二といふ人物の眞價に、はじめて觸れたやうな氣持がした。彼女は、肉體的にも鞭打たれるほどに屈辱して、自然に頭が下ると同時に眼が熱くなつて來て、

『まア、ほんたうに……。』と、改めて深く息をひきながらいつて、繰返した。『有難うございます〳〵！』

赦されたものゝみが知る悦びだつた。父のため、兄のため、ひいては自分のためにも、思はず知らず感謝の言葉が溢れ出たのである——從つて、このまゝ彼を出發させるのは恥だ、恥辱だと思つたはじめの考へは急に一變した。もう引止めてはならない。無理に引止めるのは却つて煩はしさの中に引返させることにすぎないので、

『……よくわかりましてよ。もうお引止めはいたしません。その代りお見送りさせて頂きますわ！』と、やがて平靜に返つた蘭子は感情を縮めていつた。

だが、糯二は、この不和を、愛を、何物から得たのだらう？　さして學問があるといふでもない。してみると土からなのだ！　土から掴んだものに違ひないが——その土も今は棄てねばならなくなつた。かう考へて來ると、蘭子はまたしても胸一杯になつて、

『でもね、あんなに土を愛してゐらツしやつたのに、それをお棄てになる氣持は……どんなでせう……？』といつた。

『さうですな、可笑な氣持ですな。まるで胸に風穴でも開いたやうで……。』と、糯二は、例の八ツ手の葉のやうな掌でべろんと自分の顏を撫でて、また窓から外を見入りながら『その風穴に……冷い雨が慘酷に沁みますなア。』

『……………。』蘭子の瞼は、再び熱く、顫へだした。

『ですが、こいつは、別離といふものですよ……。』と、糯二は



附足した――半ば自分にいひ聞かせるやうに。『誰にもある、何物にもある、別離といふものにすぎないですよ！』

列車はTに着いた。こゝで乗替へて、上りを待つ間がちよツと一時間ある。二人はプラットホームのベンチに並んで腰を掛けた。

愛の自覺

切符もこゝまでである。蘭子は、

いよ〳〵こゝでわかれることにして、思ひ出して、

『さう〳〵、あたくし、まだお伺ひしてゐなかつたわ。どこまでいらッしやいますの？』と訊いた。

『さア、これといふ當もないですがな、すこし考へたこともあるし、とにかく東京に出て行つて見ようと思ひまして……。』

『さう、それでは、またあちらでお目にかゝれますわねえ。』

といつて、蘭子はポケットに手を入れた。

家を出る時、蘭子にも、精二はどうしても引返さないといふかも知れないことが考へられた。さうした場合にはせめてもの餞別に贈るほどの氣持で、取敢ず手許にあつたゞけ殘らず、百圓ばかりの金を持つて來てゐる。殊に理解しあふことが出來て、快く見送ることになつたので、それを出すつもりで手を入れたのだつたが――なんだかまだ物足りなく思はれてぐづ〳〵躊躇してゐると、ふと、右の中指に嵌めた大きいダイヤの指輪が眼に着いた。彼女は無意識にそれを拔取り、序に白金の腕時計も外した。そしてそれらのものを、紙入と一緒に、ポケットの中でそッと握緊めた。

だが、やつぱり出すことが出來なかつた。こんなことに氣を遣ふために落着きをなくしたのか、ひどくわく〳〵しだして――精二に話しかけられても返事が出來ない。だん〳〵深い沈默に落ちて行つてゐたが、やがて、

『いゝえ、こんなものを贈るものぢやない。それこそ失禮だわ！』と自分に呟いて、時計も、指輪も、再びもと〳〵どほりに嵌めてしまつた。

神聖そのものゝやうに思はれる精二に、そんな物質的な贈物がなんの價値があらう。却つて侮辱する同樣に考へられるからだつた。

それでは何を贈る？

精二は生命を助けられた恩人である。彼女は間もなく結婚する。東京では着々話がすゝんでゐる筈である。この後も顏を合せることはあるだらうが、今日とは違ふ。その意味では二人の永久のわかれなのだ。

樂々した氣持になつて結婚したいと思つて報恩の計畫も立てたのだつたが、それより早く破綻が來た。愛するものゝすべてを奪つた上に逐拂つたといふ始末である。今、その淸算を、永久のわかれに臨んだ彼女がしなければならないとすれば――恩人の彼に何を贈るか？

が、考へはない。汽車の時間が切迫するにつれて、蘭子は、たゞ〳〵枷で緊附けられるやうな全身的な悲しみと、立つてもゐてもゐられない苛立しさに驅られて來て、

『さうぢやないわ。贈物のことばかりぢやない。蘭子、ほんたうは……おわかれしたくないのよ。このまゝではどうした

つて……！』

　このまゝでわかれてしまつては胸が破れて死ぬかも知れない。それとなく二三日出發を延さないかともいつたが、精二は微笑して、

『さうですな。ですが……。』と答へた。

　それはさうなのだ。二三日延したところで仕方がない。やつぱりわかれずに濟むものではない！——お妙が思はれる。いゝ兄を持つてゐたことでは非常に幸福だつた。そのお妙なら一緒に行くこと出來るが、彼女は妹ではなかつた。代りたくも代られない。蘭子は泣きだしたくなつた。

　實際、せめて胸に縋つて泣くことでも出來たら、どんなにこの惱ましさも輕められるだらう。さう考へた次の瞬間、蘭子は、サツと眞赤になつて、ベンチの、精二の傍から周章て立上つた——昨晩、思はず知らず彼を抱擁して、迎へに來た父に引離されたことを思ひ出したのである。彼女は怒つたやうな樣子になつて、プラツトホームをはげしく行つたり來たりしだした。

　不意に、その蘭子がぎよツとしたやうに立停つた。惧れに滿ちたやうな瞳がおづ〳〵と見返つた——固く握緊めた兩手を開いた口に持つて行つた。胸も、肩も波打つやうに喘ぎだし、顏色もまるでなくなつた。

が、またすぐに精二から顏を背向けて、髪の間に指を突込み、途方に暮れたやうに立竦んでゐた。と、この時、上り列車が轟々と音を立てゝはひつて來た——蘭子は、呼びさまされたやうに愕然とあたりを見た。精二も立上つた。

『それはさうなの、たしかに……ちツとも知らなかつたけど……あたくし、この方を、愛してた……！』

咄嗟に身を飜して、蘭子は、ぱツと飛鳥のやうにプラツトホームを驅出して行つて、非常な勢ひで群集を掻分けて切符賣場に突進んだ。精二は飽氣にとられて見送つた。

最後の切札

　まもなくその蘭子が引返して來たので、精二は汽車に乘込んだ。すると、彼女もつゞいてはひつて來る——こゝでわかれる筈の精二は、可怪く思つたり、驚いたりして、

『お孃さん、どこまで？』といふ。

『もうすこし……。』

『お見送り下さるのなら、折角ですがもうそれに及びませんです！』

『…………。』が、蘭子は、唇を歪めたきりでそれには答へなかつた。

　かなり混んではゐたが、それでも二人はわづかに割込んで腰

掛けることが出來た。汽笛が鳴つて、汽車はTを發した。
『たうとう……火よ。旋風よ。蘭子が燒ける……！』蘭子は、上ずツた狂惱的な眼をあげて動きだした窓の外を見やつた。その左手には買つたばかりの乘車券をしつかりと握緊めて『でも、最後の切札はこゝにある。まだ開けられない。開けるまでは……！』

すぐ傍には他の乘客がゐるので、込入つた話は出來ない。時には話しかけてもみるが、上の空で碌々返事もしない。詮方なく精二も默つて樣子を見てゐると――蘭子は、まるで憑物でもしたやうな有樣である。眼を眇めるやうにしてまじ／＼と精二を瞶めてゐるかと思ふと、急にぶる／＼と衝動的に身震ひする。兩手で顏を覆ふ……。

この間に、蘭子は、家を出るまでは、汽車に乘るまでは、いなTに來るまでは思ひも及ばなかつた自分の運命について、凝視と檢討を重ねてゐたのである。彼女の胸の中では、今、暴風雨が吹捲り、怒濤が荒狂つてゐる。坩堝の中にゐるかと思ふと、突然、氷のやうに冷靜な理性も甦へつて來る。東京では最早結婚が取極められたに違ひないといふことも思ひ出して、
『あゝ酒見さん……！』

呼掛けてもみたが、なんの反響も、効果もなかつた。全身全靈が、たゞ一つのものゝみに向つて迸り、流れて行くのをどうすることも出來ない――かうして一時間ほど走つた。精二は非常な不安に驅られだして、
『お孃さん、ほんたうにどちらまで？』とまた訊いた。
『もうすこし……そこまで……！』

また一時間ばかり走つたが、彼女はやつぱり立上らうともしない。困つてしまつた精二は、手持無沙汰にバスケットの中から古びた一冊の書籍を取出して眼を晒しはじめた。暫く經つと、
『それ、なアに？』と蘭子が訊いた。
『數學の書籍です。』

名だけは知つてゐるが、覗いてみたこともないむづかしい高等數學である。蘭子は不思議になつて、
『精二さんにそれがお出來になつて？』
『えゝ……僕、變な癖がありましてな、數學が大好きなのです。どんなに氣の塞ぐ時でも數學をやれば明々して來ますので……なるべくむづかしいほどいゝのです。ですからもう……今度のことだつて、そろ／＼あの別離といふやつも忘れて來かかりましたよ。ご覽なさい、雨も霽りましたな。新しい生活への躍進、とでもいひますか、なんだか嬉しい前途のやうに思はれだして……！』

會話の緒口が切られて幾分氣も寛ろいだのであらう、精二は

朗かに笑つた——どんなに撓められてもすぐにぴンと撥返して行く若木の枝の勇氣を籠めて。

途端、蘭子にも急に勇氣が出て、

『蘭子、きまつた。もう決して、どんなことがあつても後悔しない！』と自分にいつて、異様に緊張してじッと精二の顔を瞶めて『あのう、あたくし、大切なお話がありますのよ。ブリッヂに來て下さらない？』

　精二は、蘭子の、その眞劍な表情を見た。快く頷いて立上つて、誰もゐないブリッヂに來ると、

『なんです？』とまたしても心配さうに振返つた。

　たうとう最後の切札を投出す時が來た。蘭子は、精二から眼も離さずに見上げながら、默つてそれまで握緊めてゐた乘車券を差出した——精二は、何心なく受取つてみて、吃驚して、

『東京へ？　おや、お孃さんも東京へおいでになるのですか？』と眼を丸くする。

『いゝえ、東京に行くのではありませんわ。あなたとご一



緒に……！』

『僕と一緒に……？』

『えゝ、地の涯までも！』

『わかりませんな？』

精二にはまだ解せない。狐にでも撮まれたやうな顔をしてゐる――蘭子は、ひとむきに思ひ詰めた樣子に、羞しさに赧くなり、激情に蒼くなりながら、

『あのう、あたくし……あなたをお慕ひ申上げてゐますの。愛してゐますの。お供をさせて頂戴……！』

心の經過

啞然となつた。精二は、暫く、まじ〱と穴の開くほど蘭子の顔を瞶めてゐたが――急に笑ひだして、

『ご冗談を……！』といつた。

蘭子は悲しげに、



『冗談だとお思ひになつて？　冗談でこんなことか申上げられるとお考へになつて？』と繰返した。

『そりやさうですが、僕、どうも……。』

訴へるやうなその蘭子の、潤んで燃える美しい眼には、愛

と、同情のほかには何物もない。無論、精二にもわからないではなかつたが――何しろモダンの先頭を切つてゐるやうな、而も地位も名譽もある資産家の令孃である。さうした彼女が、百姓の、無一物の自分を愛する？ 故郷を逐はれた、青年團の服を着た自分と一緒に行く？ なんといふ可怪なことだ。嘘ではないとしても、思ひがけもしなかつた。どうしても俄かに信ずることは出來ないのだつた。

無理はないと思つても、蘭子は遣瀬なかつた。殊に汽車のはげしい騒音がともすれば聲を奪ふので、

『これではお話も出來ませんわ。ともかくもご迷惑でも、次の停車場で一應降りて下さらない？』といつた。

『承知しました。』

精二も、そのまゝでは行かれない。早速承諾して――三十分の後には、二人は、小さな漁師町の、漁船のぎツしり並んだ渚を歩いてゐた。紺碧に澄んだ秋の海が、松を持つた小島に穩かな戯れを挑んでゐるほかには、幸ひ人影も尠かつた。

二人はそこまで默つて來た。そのうち蘭子が、今度は、いくらか妹が兄に甘えるやうな調子になつて、

『でも、あたくし、あなたに生命を助けて頂いたことがありますわ！』と、前々からの話のつゞきを受けていひだした。

精二も、すつかり忘れてゐたことを思ひ出して微笑して、

『さう／＼、そんなことがありましたツけ。隨分昔の話だ…………！』

それと、當面の問題と、どれほどのかゝはりがあるだらう。精二が不思議さうな顏をすると、蘭子はつゞけて、

『あの時、あたくし、助けられたことは無論ですが、怖くて怖くて泣いてばかりゐたのを、あんなにやさしく／＼慰めて頂いて、それが何より嬉しくて、このご恩は、一生、死んでも忘れてはならないし、忘れまいと思ひました。その後も、ずうツとさう思ひつゞけて、蘭子の身體はいはゞあなたのものだ、あなたに預けられてゐるのだといふやうな考へを持つやうになりました。この、恩だ、恩だと思つて來たのが、いつのまにかお慕ひすることに……。』

今になつてみると、蘭子が、度々起つた縁談に對してひどく冷淡だつたり、無關心だつたりしたのも、原因はこゝにあつたといつていゝ。が、彼女自身も、數時間前まではちツとも氣が着かなかつたので――それもその筈である。趣味も、感覺も、すつかり東京化した、モダンな女性に、どうして八ツ手の葉のやうな掌をした田舍の青年を愛してゐる、などいふことが考へられたらう……！

蘭子は、もうかなり落着きも取返した。深く自分を省みながらしみ／＼した調子で、

『……いゝえ、でも、はじめからですわ。助けられたのは十三、まだ何もわかる年齢ではありませんでしたけれど、慰めて頂いたおやさしさが永久に胸に殘されたのです。それから後も、お噂を聞く度、こと〴〵に感激させられることばかりでしたし……。』

かうして彼女の戀は、知らぬ間に芽生え、生長して、永久のわかれだといふ悲しみの中からはじめて花を開いた。それと自覺した時の蘭子の驚きはどんなであつたらう！　なんだか自分で助からないやうにも思つたが――嬉しかつた。さうあることが當然のやうとも考へた。

同時に、蘭子には、酒見と結婚といふ問題が控へてゐる。そのまゝ精二とわかれてしまつては、愛を永遠に失ふことになる。それではあまりに果敢なく、自分がかあいさうだ。そこで咄嗟に決心して、取敢へず東京までの切符を買つた――蘭子は、心の經過を詳しく語つて、

『……Tまでお見送りするつもりでしたのに、急にご一緒に、と申上げますと、ほんたうに輕率で、淺果敢な娘だとお思ひになるでせう。ご無理はありませんけど、今のあたくしとしては、もうかうするよりほかは……それに、もう一つ、あなたは廣いお心で宥してゐて下さいますが、なんと仰有つても父と兄があなたをこんなにさせたのですわ。心に咎められて、あたくし、苦しくつて〳〵默つてをられませんでしたのに……お慕ひしてゐたことがはつきりわかつてみれば、蘭子の行く路もきまりました。父と兄との償ひをさせて頂くことです。亡つた妙ちやんに代ることです。さうすることが蘭子の義務でもあり、嬉しいのですわ。預つてゐるものをお返しする、運命もはじめからちやんときまつてゐましたし……どうぞ蘭子の最後の贈物を受けて頂戴！　ご迷惑でもお連れして頂戴……！』

全身全靈、愛と肉體の贈物、これ以上の贈物のある筈はない。蘭子はそれをせうといふのだつた。

二人の立場

最早疑ふどころではない。默つて聞いてゐた精二は、その眞劍な眞情にはげしく打たれて、思はず涙含んだ。

世界中でたつた一人の眞の理解者よ！　すべての人々から見棄てられたやうな寂しさを心の底に抱いて故鄕を去つた彼にとつて、なんといふ強い慰めであり悦びでありしたことだらう。精二の胸にも、死も辭せないほどの、全人類を敵としてゞも戰へるほどの愛情が炎のやうに燃上つて來たが――しかし世の中は、その蘭子をそのまゝ受入れられるほど單純ではないのだ。じツと腕を組んで考へ込んでゐたが、やがて深い溜息を吐いて、

『お孃さん、よくわかりました。僕一個の立場としては、申上

げやうもない有難い氣持もしますが……もつとよく周圍のことも考へてみませう。第一は、お孃さんのご兩親です。どうお思ひになるでせう？』

一番痛い傷に觸れた。蘭子は青くなつて、

『そりやア……怒りませう。悲しがるでせう……！』

といつて全身を震はせた。

『それからお家や、ご兩親や、お孃さんご自身の名譽といふこともお



考へにならねばなりません……！』

『名譽ですつて？』と、蘭子は反射的にいつた——父の口癖を思ひ出しながら。『では、あなたや、妙ちやんの名譽は？』

『話が違ひますな。僕達みたいなものには、はじめからそんなものはありませんよ！』

『それなら猶更、誰にもない。蘭子にも……家にあつたとしても、父が、あなたや妙ちやんにとつた態度で、自分で毀してしまひました。あたくしこそ、その名譽を恢復するのだと思ひますわ！』

『さア、さうでせうか？……が、何より大切なのは、お孃さんの將來のご幸福といふことです。僕は、學問も、財産もない世間知らずの男で、これからどうなるか、勞働でもするほかに……。』

『精二さん……！』と、蘭子は、世にも情けないことを聞くやうにはげしい調子で遮つて『そんなことを仰有るのは、あなたご自身を輕蔑し、あたくしを輕蔑なさることですわ。あたくし、恩も恩ですが、あなたのお持ちになつてゐる博い〳〵愛、おやさしさに動かされたと申上げた筈ですわ。勞働なさらうと、どうせうと……立派ぢやありませんの。たとひどんなに物質的に困るとしても、たゞ〳〵あなたの眞情に惠まれて行くことさへ出來たら……蘭子の願ひはそれだけですのに、ほかにまだ幸福といふものがあるでせうか？　それが幸福といふものではないでせうか？』

新しい苦悶の影が眉を掠めた。精二は窮したやうに眼を海にやつたが、海は何等の救助も呼ばない。だん〳〵立つてゐる足許の砂が崩れて、見る〳〵燃上る愛の渦卷の中に卷込まれて行きさうになつたが——もう一度踏みとまつた。深く眼を下げて、

『お孃さん、それでも決して幸福ではありません。何よりご兩親をお棄になるといふことが……。』と、半ば獨言のやうにいつた。

『あゝ……いゝえ、棄てません。棄てられるものですか！』と蘭子は昂奮して來て『言葉の上ではなんとでもいへるでせうけれど、親と子、この關係は、どんなことがあつても消えるものではありませんわ。それは、當分は、兩親は宥さないでせう。いゝえ、返つて行けばあたくしだけは悦んで宥しませう。けれど……お氣の毒に、兩親は、自分の子供と同じやうに他人の子供を愛することが出來ないのです。でも、いつかはそれがわかつて下さいます。それまでは……辛いことでも忍んで頂くのですわ。さうして……あなたもさつき、汽車の中で仰有いました。新しい生活への首途だ、躍進だと。蘭子にもそれを分けて下さい。あたくしも働きます。あなたはきつと何かなさる方で

す。蘭子の選んだことに決して間違ひがなかつたと、世間の人からも、兩親からもいはれますやうに……あたくし、一生懸命、妙ちやんに代つて、あなたの心を慰めて行く小鳥の役もいたしませう。早く立派に成功して頂いて、今日の日を、今日といふ日をあたくし達の記念日に、ほんたうに決心してよかつたといつまでも心から悦べますやうに……どうぞ、こゝまで來た蘭子を殺さないで頂戴！　犬死させないで頂戴！』

薄陽が海を靜かに眞上から照してゐた。二人は、いつのまにか砂の上に並んで腰を下してゐたが、精二は答へない――蘭子はだんだんはげしい焦燥に身を揉みだして、

『それに、もうあたくし達、ぐづ／＼してはゐられませんのよ。そろ／＼氣が着いて、大騷ぎをして、京都の親類あたりには電報が飛んでゐるでせう。眞直に行けばすぐに捕つて引戻されてしまひます。着物も變へねばならず……お願ひです、路を變へて下さい。一應神戸か大阪をまはつて下さい……！』

（つゞく）

歡迎される理由、感動せしむる原因

貴司山治

最近野村氏と同じ町に住むやうになつて始めてお目にかゝつた。溫厚で、感じの細かさうな人で、しかもどこか田園的な香氣を持つた人である。田舍の空氣や事件人物などを巧みにとり入れられるすぐれた味はひは野村氏の創作の特徴である。それは會つた時にその人柄によつてもしのばれた。

その野村氏が今度『霧の中の曙』といふ長篇を書いた。私は半分ばかり拜讀したばかりだが、この創作には今いふやうな氏の特色がイカンなくよく現はれてゐる。

野村氏は都會よりも田舍を愛する人らしい。だから氏のたいていの作中には田舍の朴訥、質實、剛健、正直、純美が强調されてゐる。それらが都會の浮華、輕薄、不純、虛僞等に相對して描かれる時、氏の筆端は非常な熱をおびて、讀者に迫る力をあらはすのである。

こゝに氏の小說が、いつ迄も讀者に歡迎される理由がある。又いつ迄も人を敎へ、感動せしめる原因がある。『霧の中の曙』もやはり十年前の傑作『明けゆく路』の如く、いつ迄もほろびぬ如上の如き構想と、力と、美とに滿ちた稀らしい作品である。

讀者の聲

▽素晴しい「霧の中の曙」！　おゝ何といふ純眞な作であらう！　模範的俠青年精二と純情花の如き近代的美少女蘭子！　この兩人の運命は果してどうなるであらうか？　それにしても次回の待たれる事よ……（水戶　一讀者）

▽精二さんはおかはいさうです。蘭子さんの心境にもわたしスツカリ同情してしまひましたわ。キングが來てまつ先に飛ついて見るのはこの小說です。あとが待遠しくてなりません。（兵庫　高山妙子）

▽素敵だ！素敵だ！「霧の中の曙」は實に面白い。野村先生一層の御努力を御期待いたします。（名古屋岡本一男）

記憶和歌。重ね言葉和歌番附

横綱　已。己。巳。
已になかば己は下に附きにけり 巳は皆つきて已己巳とぞよむ。

大關　誰。錐。推。椎。稚。
言ふは誰、金は錐なり手にて推す 木は椎なるぞ禾は稚し。

關脇　栽。裁。戴。載。
木はうゑる、衣たつなり、異るは いただくなれば車載すなり。

小結　末。未。賣。買。
末は上、未は下の長きなり 有るは賣るなり無きは買ふなり。

前頭　地圖の見方
上は北、下は南で右東 左が西と心得て居よ。

同　一年の日數
一年は三百六十五日五時間と 四十八分、四十六秒。

前頭　月と潮
月の出と入りと汐はひくものぞ その中間はいつも滿潮。

同　運算の仕方
左から乘除すませて加減せよ 括弧の中を先にして置き。

同　哩の換算
陸でいふマイルは十四町 四十五間と一尺にこそ。

同　攝氏と華氏
攝氏のに九をかけそれを五にて割り 三十二たせば華氏の度となる。

同　月の大小
一三五・七八十や十二月 小は二四六九士と知れ。

同　空氣の壓力
空氣にて地面一寸平方を 壓する力二貫五百匁。

行司
堪忍のなる堪忍が堪忍か ならぬ堪忍するが堪忍。
心して爲さばなるべし何事も 成らぬは人の爲さぬなりけり。

年寄
（春の七草）
芹、なづな、ごぎやう、はこべら、佛の座、すゞな、すゞしろ、春の七草。
（秋の七草）
萩、桔梗、葛、藤袴、女郎花、尾花、撫子、秋の七草。

勸進元　キング

横綱
人多き人の中にも人ぞなき 人になれ人、人になせ人。

大關
心こそ心迷はす心なれ 心に心、心ゆるすな。

關脇
瓜賣が瓜賣に來て賣殘し 賣々かへる瓜賣の瓜。

小結
さしかゝる來かゝる足に水かゝる 足輕おこるお輕こはがる。

前頭
佇むな、行くな、戻るな、居坐るな 寢るな起きるな立つな坐るな。

同
月々に月見る月は多けれど 月見る月はこの月の月。

前頭
人にして人を知らざる人多し 人のことをば學べ人々。

同
さくら咲く櫻の山の櫻花 咲くさくらあり散るさくらあり。

同
赤坊主、青野ヶ原で黄いな聲 くろうとめいて素人淨瑠璃。

同
住吉の隅に雀が巣をくつて すはや雀が巣立ちするらむ。

同
聲黄色、合羽は黑し雪白し こゝは赤坂、青山へ行く。

同
面見ればまぬけた面にひげ面に 赤づら、かづら、馬づら小づら。

鏡本 杉山武夫作



武勇講談

三家三勇士

大島伯鶴
井川洗厓畫

義兄弟の縁

水戸の藩士で、天和貞享の頃ほひ、大いに武名を輝かせた和田庄次郎政直、主君光圀公の内命によりはるぐ\周防岩國へ罷越し、こゝで其頃名代の國次惣左衛門より八重垣小太刀の秘法を會得いたして、ますぐ\武藝の奥義に達し、これより歸途京都へ立寄りましたが、折柄紀州藩士の和佐大八郎なるもの、未だ若年ながら弓術に達し、かの有名な三十三間堂の通し矢を試みて日本一の額を掲げましたるは天晴れ、これを庄次郎見てつくづく感じ入り『紀州家には立派な家來を持たれしよ』と、覺えず嘆聲を洩らしましたが、その夜同じ宿に泊り合はせた和佐の一行が祝宴の砌、酒亂の癖ある紀州の一藩士、隣座敷に在つた庄次郎に無禮の振舞があつたといふので、遂に双方武士の意氣地よりして、こゝに和田庄次郎及び和佐大八郎の兩人、四條河原に於て眞劍勝負を決することに相成りました。ところが、いつか此事を聞き傳へたとみえて、踵を接して集まり來つた群衆、黒山をなして、この勝負いかゞ相成るかと、手に汗を握り固唾を呑んで見てをりまする。庄次郎政直は、備前兼光の脇差をギラリと拔いたが、中段眞の位につけて『エイヤツ』と氣合を掛け、

庄『いざ、見ン事一矢賜はりたし』と呼ばはりますると、『オ、ツ』と應へて滿月の如くに彎きしぼつたる和佐大八郎、庄次郎政直の胸板へ狙ひをつけ、あはや切つて放たんといたしたが、――こゝでちよつと躊躇をいたしました。といふのは――よく申します龜の甲より年の劫、庄次郎政直が東側を背にしたのは胸に一物、それが謂ゆる經驗の力でございませう。和佐大八郎が四條の橋を下り立つて河原に來て見ると、東側に庄次郎がをりますから、自然西側に對陣しましたが、さて矢を一ぱいにひきし

ぼつて狙ひをつけて見ましたが狙ひがつきませぬ。『蒲團着て寢たる姿や東山』句にもあります通り、東山は京都の名物の山、さして高くはないが何ともいへない結構な山でございます。今しもその山の端を離れた太陽が煌々として立ち昇る。一ぱいに引いた鏃は銀杏穂にして、穂の長さ一寸二三分、鏡の如くに砥ぎすましてある。その鏃に太陽の光が映じますので、ギラ〳〵ギラギラ光るために眩くて狙ひが定まりませぬ。弓術の素養の在らせられる方は申すまでもなく御承知でございませうが、五分以下の弓ならば、一ぱいに引いて五分でも十分でもためてゐられまする。しかしもう荒弓六分以上の弓となつたら、彎いて來るのは術で彎きまするが、ためるといふのは力でございます。僅かに親指と人さし指でそれを支へてをります爲め、この支へる力といふものが、何秒支へて居られるかといふことが問題、まづ物の十秒と支へ得るものはございませぬ。政直は腹の中で〆めたぞと思つたが、これは無理はない。何も命の遣り取りを望む譯ではない。苟且にも三十三間堂に於て八千八百七十八本の矢を通し、天下一の額を上げた、和佐大八郎如き弓取りを相手の試合は後世にその名も殘り、又江戸表への土産話にもならうといふもの。それゆゑ成るべく矢の中らぬ事を望むといふのは當然でございます。

政『和佐氏、何を躊躇なさるゝぞ。見事一矢の下に射止めたまへ』と、二度目に聲を丁と叩かれた時に、大八郎正純『あゝ天命である。これ迄なり』と、矢を十分にひつたくらべ、よつぴき兵と切つて放てば、矢は唸りを生じ風を捲いて飛んで行く。あはや政直の胸板を射碎いたるかと思ひきや、心得たりと身を開き、『エイッ』と持つたる脇差を以て見事に矢を切つて落す。されば矢は二つとなつて、ヒラ〳〵ザンブと加茂の流れに落ちて流れる。ビューッと二度目に飛び來たつた乙矢、政直ほどの人物も身をかはしてその矢を切つて落すの餘裕がございませぬ。飛び來たつた矢のために髷つ節の元結を射削られ、ハッと思ふうちに、矢は唸りを生じてうしろにビューッと飛んで行く。二筋共に庄次郎に中らないのですから、大八郎は持つたる弓をガラリと投げ捨て、

大『參つた！』と、河原に手をついた。この時庄次郎も持つたる刀をガラリと投げ捨て……と、普通には申すところでございますが、どうも私は是れだけは訂正をいたします。拔身の刀を石の河原に投げ出だせば刃がこぼれます。これはそつと置いたに相違ございませぬ。

政『參つたッ』と、政直も聲をかけた。さアかうなると、見物には分らない。

○『どつちが參つたんや。兩方で參つたでは勝負がつきやアへんがな。まいた〳〵は、楠屋まいたで、井戸替へやがな』

△『なに云うてゐんのや……どつちが参つたのやーい』ワイワイ騒いでゐる。和佐大八郎、徐ろに口を開き、

大『これは和田先生、甲乙ともに受け止め給ひたる以上には、それがしの負けといふことは明かでござる。早や疾く首を打ち落し候へ』

これを聞くと、庄次郎政直、ニツコリ笑つて、

庄『和佐氏、何言を仰せらるるぞ。いかさま甲矢はそれがし手練を以て切つて落したれど、乙の矢は御身武士の情を重んぜられ、それがしの胸板を射砕くは易けれど、御覧の如く髷節の元結を射放してござる。これ和佐氏が弓術の玄妙の致すところ。されば今日の勝負はそれがしの負けでござる』

と云つたが、これは庄次郎政直が和佐大八郎に花を持たせたのでございます。互に無瑕で終ればこんな結構な事はない。たゞ江戸への土産話にしたいだけのこと。八千八百七十八本の矢を通し天下一の額を上げた名人の名譽をことさら傷けるにも及びませぬから、そこは武士の情、花を持たせて、庄次郎かく申したのでございます。こ



れを兩手を組んで見聞してをりましたのが、大八郎の介添役として紀州から出てまゐつてゐた小笠原備後老人、ツカ／＼と前へ出て扇面を打ち開き、

備『あゝ恐れ入つた。今日の勝負はこの老人にお預け下さい。恐れ入つてござる。今日の此勝負は勝ちもなし負けもなし、互角、互角』と云つたが、無論庄次郎政直が勝つてゐることは、小笠原備後にもよく分つてをります。しかし、花をもたせたその志に感じて、備後が仲に立つて仲裁をしたのでございます。

備『和田先生、花も實もある其許の御心掛け、何と御禮の申さうやうもござらぬ。長生すれば恥多しと申するが、かく云ふ備後は長生いたしたお蔭を以て、全く武士らしき行ひ、花も實もあるかゝる勝負を拝見いたし、何とも嬉しく存じ申す。時に和田先生、この老人より切に御願ひがござるが、御聽屆け下さるか』

庄『これはしたり、御老先生、何事でござる』

備『かく云ふ老人が仲人役を勸めますれば、何卒和佐大八郎は若年者、彼れを弟とし、貴殿兄となられ、義兄弟の縁を結んでは下さろまいか』

庄『これはしたり、以ての外のこと。それがしことは身分低き者……』

備『いや、決してその御斟酌には及び申さぬ。和佐大八郎、決し



て異存はござらぬ』
庄『然らば、御老體に御任せ申す』
そこで早速宿屋から取寄せました銚子土器、これをもつて今迄は危く命の遣り取りをしようとした兩勇士が、大風一過して光風霽月、生れる時は別々なれど、死ぬる時は同日同刻と、ここに互に盃を酌み交はして『あら目出度やな』と、謠をうたひ、手拍子打つて、心地快げに義兄弟の緣を結びました。實にこれ後世に殘る武士道の鑑とも謂ひませうか。和田庄次郎は豫て期したる如く、こゝに江戸への立派な土産話も出來ましたから、別れは惜しいが大八郎に暇を告げ、これより後を約して京都を出立に及びまする。

秋葉山の山賊

さて京都をあとにいたした和田庄次郎政直、それより伊勢の津へまゐり、宇治山田へ向つて太神宮を參拜いたし、四日市、桑名、こゝから船に乘りましたが、これが宮まで七里の渡船、昔は京都から東海道はかう出るのが道の順序。今日では京都から大津へ出て彦根米原と鐵路急行で十二三時間、飛行機ならば二時間半三時間足らずで飛んで來てしまひますが、その昔のことで斯ういふ迂遠な道中をしたものでございます。ところでこの渡船といふものは、諸國の人が乘合はせて、いろ〳〵話に花が咲き、なか〳〵興の多いものださうでございます。この七里の渡し賃が一人六十八文、荷物が一荷六十八文、駕が二百十二文、乘物が二百八十文とちやんと極まつてゐたものださうで……。庄次郎は無事に宮へ着き、遙かに熱田の宮を拜し、それより江戸をさして來る。途中秋葉山へさしかゝつてまゐりましたが、この秋葉山はなか〳〵の難所でございました。庄次郎政直、この山へかゝつたのは日の八つ頃ほひ、今日の午後二時頃でございます。何か物に中つたか、頻りに腹痛がいたしますから、あゝ困つたものだと思ひながら來た山の中腹。何分にも痛みがひどい。一つの觀音堂がございましたから、これ幸ひと木連格子を開き、
『南無觀世音菩薩、水戸の家臣和田庄次郎政直、腹痛にて難儀をいたしまする。暫し御前を借用いたす』と、一禮なして中へはいりましたが、昔の人は義理が堅うございます。山中にある觀音堂へでも默つては入らない、ちやんと斷つてはいる。それだけ人間が質朴でしたが、今日は人のゐる所へでも、ズン〳〵入つて來て、懇々と話をして金を盜んで行く。それは說敎强盜でございますけれども……さて庄次郎政直、用意の藥を取出して之を服み、暫らく休んでをりまするうちに、痛みも遠のいたので、うと〳〵いたしてをりますと、ボン〳〵といふ柏手を打つ音がする。氣がついて見ると、年頃三十五六になる女が、中

に庄次郎のゐることには氣もつかぬか、

女『何卒觀世音の御利益を以ちまして、お孃樣の御命に何事もなく、賊の手から遁れて無事お戻りになるやうお願ひ申上げまする』頻りに手を合せて祈つてをりまする樣子。すつくと立上つた庄次郎。

庄『ア、これ〳〵女中』

女『アレツ……』と、聲を立てる。

不意に聲を掛けられて、びつくりした女。

庄『アツ、これ〳〵左樣に驚くには及ばぬ。拙者は怪しい者ではない。道中の者である』

女『はい……』

庄『只今承れば、何か賊の手から遁れて無事戻るやうにと願つてをるやうであつたが、聞捨てならぬこと。どういふ仔細か、話をいたして聞かしてはどうぢや』

女『はい……』

女中が庄次郎を見ると、年の若い立派な武士。安心をしたものと見えて、

女『はい、恐れ入りましてございます。それではお話し申しまするが、私は木下村に住んでをりまする岡村十兵衞と申しまする者の召使、たつと申す者でございますが、主人の娘がこの山にをりまする山賊に誘拐されましてございます』

庄『なにツ、山賊……この山中に山賊がゐると申すか』

女『はい、夜叉五郎といふ大賊で、手下の者も三四十人をるさうでございます。その夜叉五郎のために、お嬢様のおさく様といふのが誘拐されて今日で二日になります。御主人はお身體がお悪いので、その賊を退治して、お嬢様を取返して來ることも出來ず、殘念ぢやがというて、泣いて口惜しがつてお在でゝございます』

庄『ウーム』

女『この上は神や佛の御利益で、お嬢様が御無事にお戻りになるやう、武藝の出來る方にでもお目にかゝつて、その賊を退治出來ますやうにと、朝夕かうして觀音様をお祈り申してをるのでございます』

庄『ウーム、それは定めし心配のことであらう。憎くき山賊共、よし〳〵、拙者もこの觀音堂に休息いたし、其方に逢ふといふのも何かの縁。拙者がその夜叉五郎とか申す賊を退治いたし、主人の娘を助けて遣はさう』

女『オヽツ、貴方がお助け下さいまするか。えーい、有難う存じます。これと申すもお願ひ申した觀音様の御利益。何分ともにお願ひ申しまする』

庄『心配いたすな。その山賊はどの邊に居るか、其方存じてゐるか』

女『何でもこれから三町ほど參りますると、二股の大きな榎がございまして、それから左が松並木、その奥に住んでゐるとのことでございます』

庄『それさへ分つてをれば宜しい。必らず娘を助けて連れて參るから、其方はこの所に相待つてをれ』

女『はい有難う存じまする』

幸ひ腹痛もなほりましたから、喜ぶ女をあとに、庄次郎はそのまゝ觀音堂を立出でまして、女に教へられた通り三町ほど入りますると、成程二股の大きな榎がある。それから左がズーッと



松並木になつてをりますから、その間を通つて來ると、突當りに一軒の茅屋があつて、軒の間から煙が立昇つてをります。さてはあれが賊の住居であるかと、庄次郎はヅカ〱ッと入つて來て見ると、年頃六十餘りの白髮の婆、色は黑く、眼は凹のやう、頰骨の出た、見ぬ閻魔の廳の葬頭河の婆もかくやと思ふばかり。尙、よく見ると、前の柱に後手に括られてゐる一人の娘、十七八にならう、鄙には珍らしい美人。その前に松の生枝を積み重ね、それに火を放つて、件の老婆が團扇で頻りにそれを煽ぎ立てゝゐる。その黑煙が娘の顏に吹き付けるので、娘は島田の髷を振り立てゝ苦しんでゐる樣子。



婆『これ苦しいか。苦しければお頭の言ふことをお聽きよ。厭だと云やア仕方がない。松

葉燻しで燻し殺してしまふ。どうだい、キリ〳〵返事をおしよ』

娘『厭でございます。厭でございます』

婆『なに、厭だ。どうしても言ふことを聴かないといふのかい。それぢやア仕方がない。燻し殺すから覺悟をおし』前にあつた松の生枝を引つ摑み、燃えてゐる火の上へ載せましたが、生ですから決して燃えませぬ。火が移つたと思ふと、たゞ黑い煙がボー〳〵と昇がるばかり。その煙を婆が團扇で娘の顏の方へ煽ぎ付けるから、その苦しいこと。娘はヒーツヒーツと悲鳴をあげてをります。これを見るより、和田庄次郎、バラ〳〵ツと駈けて來ると、

庄『何をするツ』聲掛けられて振返つた鬼婆。

婆『ヤアお前さんは武士だね。何だつてこんな所へ來たんだい』

庄『汝等山賊を退治にまゐつた。汝も山賊の一類と見える。若い娘を煙責めにいたすとは、言はうやうなき惡業婆ア』

婆『何を云ひやがるんだい……、オーイみんな、出て來ておくれよ。邪魔な武士が來やがつた』聲をあげると、オヽツと答へてバラ〳〵バラツと奥から出て來た四五人の荒くれ男。

○『ヤアこの武士、何所から來やがつたか。仕事の邪魔をしやアがるか』と、左右から山刀を引拔いて斬つてかゝるを、心得たりと柄に手のかゝつた一刀、ギラリと引拔いたかと思ふと、忽ち左右にバラリズンと切つて落す。

△『ヤア手强いぞ。皆の衆に加勢をたのむわ』云ひつゝ、一人奥へ飛んで行く。鬼婆は傍にあつた鎌を手に取り上げ、『この武士め』と、後方から首筋狙つて切つてかゝるをヒラリ體をかはすが早いか、横に拂つた一文字、老婆は脇腹深く斬込まれて、アツと叫んでどうと倒れる。手早く娘の括られてゐる繩を切つ拂つたから、繩はバラリと解けて、娘はそれへ覺えずもドタリと倒れた。

庄『これ、怪我をいたすな。何所にも行かず、其所にをれ』云ひ捨てゝ、庄次郎は奥の方へと追うて行く。

危機一發

『ヤア來やがつた〳〵。それツ、やつちまへ』

注進によつて得物々々を携へて集つた山賊三四十人、前後左右から切つてかゝるを、心得たりと庄次郎、當るを幸ひ、バツタバタ〳〵切り倒す。その勢ひのすさまじいこと。

『ヤア强いぞ〳〵。逃げろ〳〵』殘つた奴はバラ〳〵バラ〳〵逃げて行く。それを追つて、庄次郎、尙ほも奥の方へ來たつて見ると、こゝは一段と廣い座敷、正面に突立つてゐるのは年の頃四十前後、身の丈拔群にして、色あくまで黑く、兩眼鏡のやうに鋭い大男、銀の蛭卷なしたる大薙刀を小脇にかい込んでゐ

る。これぞ山賊の張本夜叉五郎。

五『やい此奴等、何をジタバタ騒ぎやアがる。たつた一人の武士に、そんなに驚くことはねえ。静かにしろ……これやい武士、よく來た。乃公の住居へ來た上は、身ぐるみ大小取つた上、命は賽の目に切つてしまふが、こゝの掟だ。それとも兩手をついて詫びた上、乃公の手下になるといふならよし。さもなければ命はねえと覺悟をしろ』

庄『やア憎くき山賊、汝等を退治のために參つたのだ。片ッ端から鏖殺にしてくれる。觀念いたせ』

五『やア吐くな。いで、其儀ならば……』と、リウ〳〵と薙刀を打振つて斬つてかゝる。心得たりと庄次郎、エイヤッと身構へたが、心中に驚いた。この夜叉五郎の腕前、なか〳〵どうして尋常でない。何者の成れの果か。その手振りの鮮かさ恐るゝばかり。流石の庄次郎も手に餘るくらゐでございます。大勢の手下は、何れも山刀を拔いて、隙があつたら頭の助太刀をしようと身構へてゐる。庄次郎も迂濶には手が出せませぬ。一刀を中段につけたまゝ、ぢつと相手の樣子を窺つてゐる。すると、何處からともなくプーンといふ火繩の臭ひ。さてはと庄次郎、向ふを見ると、夜叉五郎の背後の方に立つて、右の手に短銃を持ち、筒口を自分の方に向けて狙ひを定めてゐる一人の女がございます。それを見ると、さしもの庄次郎政直、ハッと驚いたも道理。その女が先刻觀音堂で娘の助かるやうにと拜んでゐた女ですから、物騷千萬。

庄『やッ貴樣は先刻の女だな』

女『お武士、分つたかい。いえさ、驚いたかい』

庄『ウームさては汝は賊の同類であつたのか』

女『お頭とは兄妹分の茨木おたつといふお泥棒さまさ』

庄『やアさては事を構へて身共を欺き、この所へ誘き寄せたのだな』

女『お察しの通りさ。大小衣服も滿更でなし、金も幾らか持つてゐると睨んだから、觀音堂へはいつたを幸ひ、信心と見せかけて、この所へ誘ひ出したのさ。さアかうなつては百年目、お頭の手をかりるまでもない、お氣の毒だがこの茨木が、擊ち殺してしまふから、念佛唱へて覺悟をおし』

庄『ウーム、憎くき女め。汝れツ……』僞られたかと、庄次郎、切齒はするが、相手は强の者、殊に大勢、それを相手にすれば鐵砲の彈が飛んで來る。いくら庄次郎が劍術の名人でも、鐵砲といふ剽輕者には油斷が出來ませぬ。如何はせんと躊踏ふ樣子を見て、ニツコリ笑つた茨木おたつ。

女『さアお武士、もうジタバタしたつてしやうがない。惡かつたと兩手を仕いて手下になるか。四の五の云やア一擊だよ』取り直した短銃、あはや引金を引かうとした一刹那、『エイツ』とい



ふ氣合の聲諸共、ピューッと風を切つて飛んで來た小柄、狙ひは違はず茨木おたつの眉間へグサと刺さつたから、『アッ』といつてタジタジと退がる途端に、ドーン彈丸は天井へ飛んでしまふ。

これに氣を取られて夜叉五郎の身體に隙の出た所を、『エイッ』と一聲切り込んだ一刀、さしつたりと受け流さうとしたが遲かつた。雉刀の柄を二つに切つて、餘れる尖先きに五郎の眉間から鼻柱まで切下げたから、『アッ』と叫んで血煙諸共どうと倒れる。『やア頭がやられた。頭の敵』と、手下の者共左右から斬つてかゝりましたが、大將討たれて殘兵完からず、强の者の夜叉五郎は切つてしまつたし、飛道具を持つてゐた女賊は倒れてゐるから、庄次郎の方は一段の勢力、斬つてかゝる奴を、眞向梨子割唐竹割、或は胴切、車切羊羹屑や切山椒、霰賽の目千六本と、當るを幸ひバッタバタバタ切り倒し、こゝに殘らず山賊を鏖殺しにしてしまひました。爲めに庄次郎は、返り血を浴びて全身紅の甕を浴びたる如き有樣。そこで刀の血を拭つて鞘に納め、元の所へ來て見ると、娘はその所にゐずくまつたまゝ、ブルブル慄へてをりまする樣子。ここで段々樣子を聞いて見ると、これが秋葉山の麓木下村の鄕士岡村十兵衞の娘おきくといふ者。そこで娘を連れて岡村力へ來る。十兵衞夫婦の喜びは一方でございませぬ。その夜は岡村力へ泊りましたが、情は人の爲めならず、この時に娘を助けたのが後に報いられるやうな事が出來る。それは後の話。



おやまア　あらまア

翌日、一同に別れて木下村を立ち出でました和田庄次郎、東海道も無事に江戸表へ立歸りましたが、まづ第一の目指すは小石川の水戸家のお屋敷。來つて見ると、流石は三十五萬石天下副將軍の御屋形。庄次郎政直初めて見るお屋敷のことでございますから、目を驚かすばかり。やがて通用門へと掛つて參りました。門をはいらうとすると、門番の足輕が、

門『あいや、お待ちなさい。何れから何れへ通られるか。御姓名は何と仰せられる』咎められて、庄次郎小腰を屈め、

庄『それがしことは亡き和田平助政勝の一子庄次郎政直、諸岡彌三右衛門殿お小屋へ罷り通ります』

門『オ、さては和田大先生の若先生でいらせられますか。いやこれは〳〵。手前は御先代樣御存生中一方ならぬ御贔屓をいただきました杉崎吉兵衛と申する足輕めにございます。あゝ御立派にお成り遊ばしましたな。國表にをりましたる節、時々お見受けいたしましたが、まだその時はお身小さくいらせられましたに、早やかくはお立派なお武家にお成り遊ばしましたな』

庄『さては先代から御存じでござつたか。庄次郎政直、武術修業成つて、只今歸國いたしてござる。母親また妹も多分諸岡氏の許にて御厄介になりをる筈でござるが……』

門『いかにも、仰せの如く、御隱居樣とお妹御樣も御無事にお暮しでございますから、御安心なさいまし』

庄『それ承つて安堵いたしてござる。然らば諸岡氏お小屋までちよつと御案内を……』

門『委細承知いたしました……おい御同役、御身等はまだ日が淺いから御存じなからうが、このお方の御先代は和田平助政勝と仰せられて、太刀を取つては天下の名人、御當家樣御指南番、その若先生だ。今後御贔屓をいたゞかなければならぬから、御挨拶を申上げたらよからう』

杉崎といふ足輕、如才ない男で、同僚の足輕にかくと告げましたから、同僚も頭をぴよこつかせて挨拶をする。これより杉崎吉兵衛の案内で、やつてまゐりました諸岡彌三右衛門方の玄關口。庄『お頼み申す。お頼み申す』

『ドーレ……』ドーレといふ聲は諸岡の奥樣。お臺所で女中を相手に何か水仕事をしてをりましたが、玄關へ取次に出るのに前垂掛けは失禮と、前垂で手を拭いてちよいと傍に挾みますると、疊の縁を履まぬやう、つッ、つッ、つッ、つッと行儀正しく出てまゐりましたが、髷はといふと鍋町の一番形といふデコデコ、目方三十八貫目あらうといふ大丸髷の奥樣、それへ叮嚀に兩手をついた。

妻『何れからお越しにございまするか』

庄『オヽツこれは諸岡の小母上ではござらぬか』

妻『誰方樣で……』

庄『前年君公の仰せを受け、周防岩國へ武術修業に參りました和田庄次郎平政直、只今歸國いたしてござる』

妻『あれまア、おやまア誰方かと存じましたら、和田の若先生でいらせられましたか。おやまア、あらまア……』

大變な騷ぎ。『まアお待ち遊ばせ』と、奥へ飛込んで參りますると、丁度諸岡は非番でございましたから、机に向つて何か書き物をしてゐる。

妻『貴下ッ』

彌『これッ、何を粗相なことをなさる。見なさい、輪を二つ書いてしまつたではないか』

妻『はい、何とも恐れ入りました。貴下が慌てゝ……』

彌『何を申す。お前が慌てゝゐるのだ。どうしたのぢや』

妻『あの和田の若先生がお歸りで……』

彌『エ、ツ、あの庄次郎殿が……アツ、これはいかぬ。硯箱を引ツくり返してしまつた。跡を拭いておきなさい。慌てゝはいけないぞ』

妻『貴下こそ慌てゝおいでなさるので……』

彌『あゝ昨夜妙な夢を見た。若先生も、もうそろ／＼御修行が成つて御歸國の時分であらうが、その後何の音信もなく、どうなされたことかと、常にそれのみ心にかけてをりしため、かういふ夢を見るのかと存じてをつたが、いかさまあれは正夢であつたか。これ御隱居所へ早く御知らせ申せ、……これ／＼なぜ早く墨を拭かぬのだ』

妻『はい』

彌『これ／＼早く御隱居所へお知らせ申せ』

妻『まア貴下、兩方は出來ないではございませぬか』

これがほんたうの上を下への喜びと申しませうか。諸岡彌三右衛門、氣もいそ／＼と玄關へ出て來て見ると、色も黒くなり、筋骨逞ましき立派な武士になつてをりまするから、その滿足は一通りではございませぬ。

彌『オ、ツ、これは若先生』

庄『オ、ツ諸岡氏、只今、庄次郎政直、立歸つてござる』

彌『お變りもなく何より重疊』

庄『御身もお變りなくて……』と、ツカ〳〵と近寄つて堅く手を取合つたのは、今日でいふ握手でございませう。

知らせを聞いて母親と妹、これはまた一段の喜び、氣もそゞろにはく〳〵と玄關へ駈けて參りましたが、庄次郎の顏を見るより先立つものは嬉し涙。成人して來ると今は亡き良人平助政勝に生寫しなのも頼もしい限りでございます。

母『オ、悴、よう無事に戻つたなう』

庄『オ、ツ母上樣か』傍らから妹が、

妹『兄樣、御機嫌よう』と、袴腰へ縋られた時には、流石に猛き丈夫も、ホロリとこぼす一雫……。



不意の一撃

庄『妹、永の年月、音信もいたさずにをつたが、其方がお年寄の御介抱また心づくし、兄は喜ばしく禮をいふぞ……さて諸岡氏、永らくの間母や妹が何かと厚き御世話に相成り、御禮は言葉に盡されませぬ』

彌『いや〳〵、若先生、立派になつてお歸りなされ、彌三右衞門この上の喜びはござらぬ』

母『悴、まア明けても暮れても其方の噂ばかり。只の一度も便りはなしどうしたことやら、なまじ便りなどしては修行の妨げと、それ等を思うて音信のないことかと思うてゐましたが、よう無事に戻つてくれました。さア草鞋を解いて……』

彌『あゝいや御母堂、若先生の草鞋をお解きなさることは、ちよつとお止まりが願ひたい』

母『諸岡樣、悴を上へあげてはなりませぬか』

彌『なりませぬ』

一同はもとより庄次郎も怪訝な顏をして、彌三右衞門の顏を視めてをりまする と、彌三右衞門は徐ろて言葉をついで、

彌『若先生、申すまでもなく、御尊父は武術に慢心して御發狂、その病氣御全快も束の間、君公へ申譯なしと、武士の面目、天和の三年九月十九日、仙波ヶ原に腹一文字にかつ捌いて相果てられてこの方、和田の家は斷絶いたしてをります。それを貴下が武術修行をなされ、一廉の腕前とならば和田の家相續を許すと光圀公の御仰せ。それがしは亡き恩師政勝先生の御教導を受け、田宮流は極意を譲られてござるが、正しく和田家を御相續なさるゝだけの御腕前になられたか、それを拝見いたさぬうちは、草鞋を解くことはお許し申さぬ。失禮御免』といふかと思へば、何時の間に隠しておいたものか、袋竹刀を取つて『ヤツ』といふ聲諸共打つてかゝつた。腦天眞向を打たれたかと思ひきや、ヒラリ體をかはして後へさがつた庄次郎政直、右手に持つたる鐵扇を以てピタリと構へた片手正眼、八重垣流の極意半身入身の構へでございます。

庄『諸岡氏、いかにも仰せの如く、和田の家を立てると立てざるの境、それがし周防國へ罷り越し、艱難辛苦の末會得いたした八重垣小太刀半身入身の構へ、これぞ即ち八重垣流の極意でござる。隙もあらばお打ちあれ』



彌『言ふにや及ぶ』

互ひにピタリと付けて、相手の様子を窺つてをります。かうなると、庄次郎の母と妹は心配でなりませぬ。

母『悴、和田の家が立つと立たざるの境なるぞ。永の年月私や娘が御恩になつた諸岡様とて、必らず遠慮をするでないぞ。隙もあらば打ちを入れ、勝ちを取らねば和田の家は立ちませぬ。しつかりいたせ』妹は妹で、妹『兄様、お負け遊ばしますな。しつかりお勝ち遊ばしませ』と聲援する。諸岡の奥様は、どうしていゝか分らず、たゞ、

奥『貴下、お止し遊ばせ。貴下お止し遊ばせ』を連呼する。

彌『えゝい煩い。エイッ』庄『ヤッ』

互ひに睨み合つてをりましたが、諸岡彌三右衛門、一聲叫んで拜み打ち、勢鋭く打込んで來るのを心得たりとヒラリ體を開いた庄次郎、飛込んで行つて鐵扇をもつて諸岡を打つことは知つてをりますが、足掛け四年間母親と妹が世話になつてゐる恩人を毆るといふ譯にもまゐりませぬ。『ヤッ』といふ聲諸共、手許へ飛込んだと思ふと、持つたる鐵扇サラリと開いて、彌三右衛門の頭へピタリと載せた。

彌『參つたッ』いやな負け方があるもので。

彌『いや、參りました。あゝ恐れ入つたる御上達。亡き政勝先生に優ればとて劣らざる適れの腕前、ほとほと感心いたした。さアどうぞ此方へおあがり』と、手を取らんとすれば和田の母、

母『いえ、これは私の悴でございますから、どうぞお構ひ下さるな。千代や、お前はそちらの紐をお解きなさい。私は此方を……』と、阿母さんと妹が左右から庄次郎の草鞋を解いてゐる其の睦まじい有様は、涙がこぼれるやうでございます。庄次郎はやうやう草鞋を解いて上へあがり、さて一間へ通りますると、早速盃の用意。何から話をしていゝか分りませぬ。何年となく別れてゐたのが久しぶりで會つたのでございますから、話は前後になるのも無理はない。旅から戻つて來た心持の句に「飯一口話一口旅がへり」といふのがございます穿つたものではございませんか。

庄次郎は、二日ほど休養をいたして、中納言殿に御屆けをすると、光圀公から早速庄次郎へ罷り出ろといふ仰せ。御殿へ出ますると、久々にて殿樣の御顏を拜する庄次郎、思はず嬉し涙……。

光『オ、庄次郎、國表出立の時から見れば、いかう大人びたなう』

庄『ハ、ッ、暫し御目通り仕りませぬうち、我君樣のお頭も大分白くおなり遊ばしました』

光『アハヽヽヽ、汝等がかく立派な武士になつたのぢや。わしの頭の白髪になるも無理はあるまい。アハヽヽヽ、彌三右衛門より承はれば、雨降り風間、修行にうき身を窶したりとのこと、定めし苦勞なことであつたらう。此度の功により、三百石を宛行ひ、父平助の名をそのまゝ繼ぎ、二代目の和田平助平政直と名乗るがよい』

まことに有難きお言葉。和田一族の面目は此上もございませぬ。これより庄次郎の平助は、江戸表の御指南役となり、數多の門人を養成することに相成りましたが、そこへ紀州の和佐大八郎が乘込んで來る。折しも尾州の家臣星野勘左衛門が和田庄次郎に對して他流仕合を申込んでまゐり、こゝに三勇士三つ巴になつて面白い場面が展かれ、圖らずも三人が兄弟の義を結ぶに至るといふ、いよいよ三家三勇士が入り亂れての大活動。お話もいよいよ佳境に入つて參ります。(つゞく)

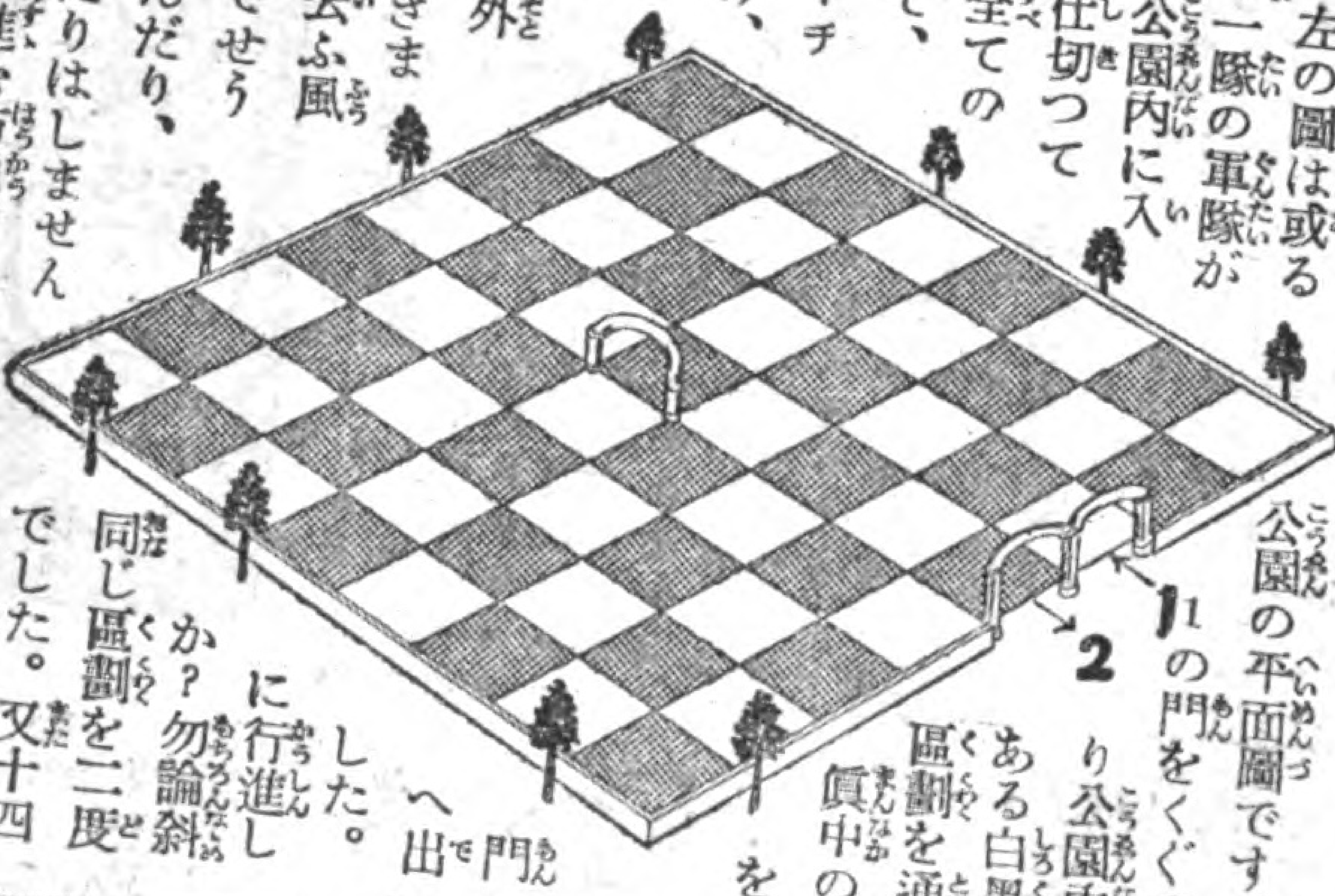
面白い『犯人探し』大懸賞!

珍らしい企て、四〇七頁をごらん下さい!!

萬人熱狂 新案智慧くらべ

（一）軍隊行進

左の圖は或る公園の平面圖です。今一隊の軍隊が1の門をくぐつて公園内に入り公園内に仕切つてある白黒の全ての區劃を通つて、眞中のアーチを拔け、2の門から外へ出て行きました。どう云ふ風に行進したのでせうか？　勿論斜に進んだり、同じ區劃を二度通つたりはしませんでした。又十四回以上進む方向をかへてはいけません。

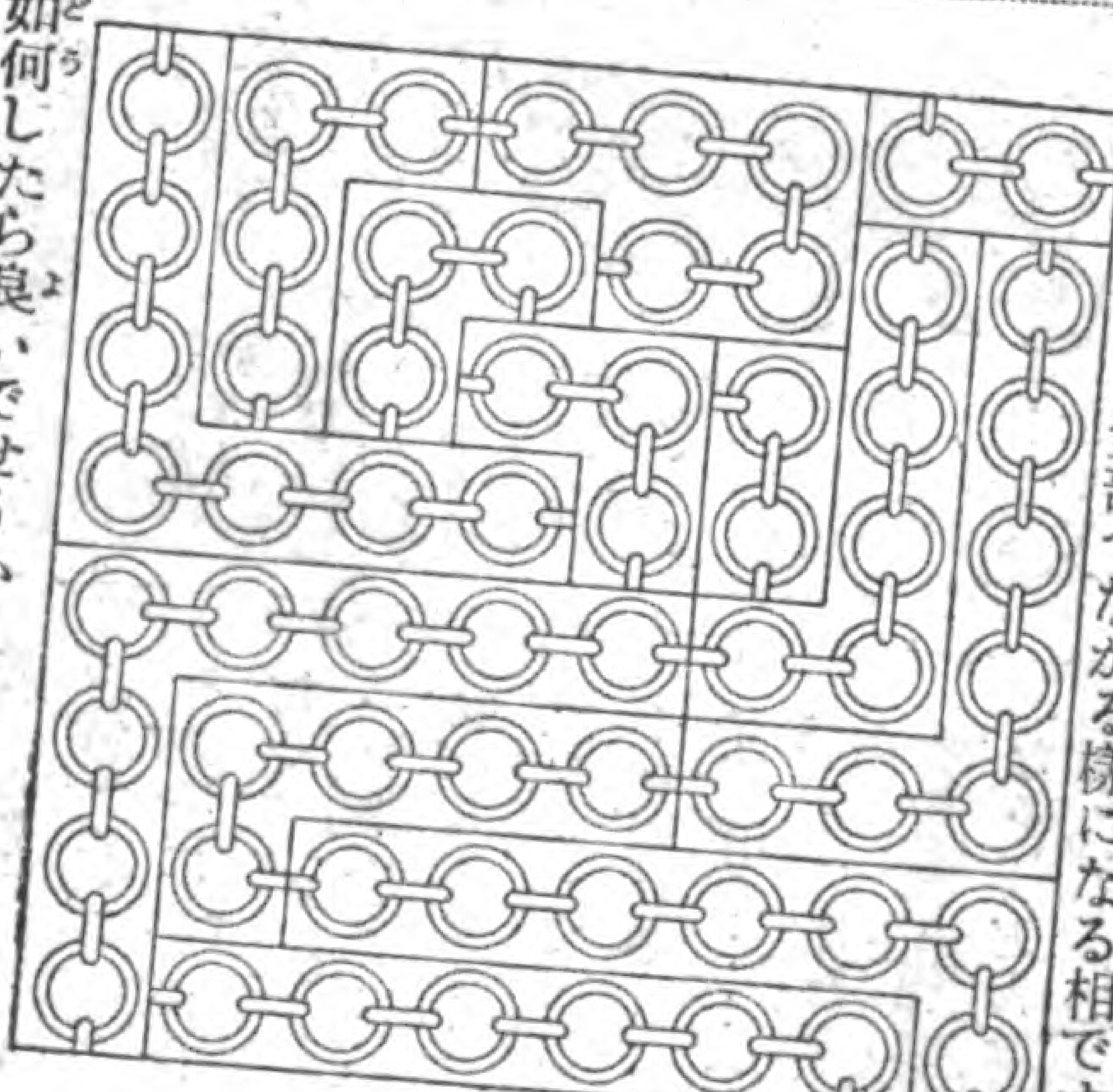


（二）酒と水

ここに甲乙二つの瓶があつて、甲には半分酒が入れてあり、乙には半分水が入れてあります。今、甲から酒を茶匙一杯酌んで乙に入れ、次に乙からその混合液を茶匙一杯甲に入れたとしますと、甲からとつた酒の量と乙からとつた水の量とは何れが多いでせうか？

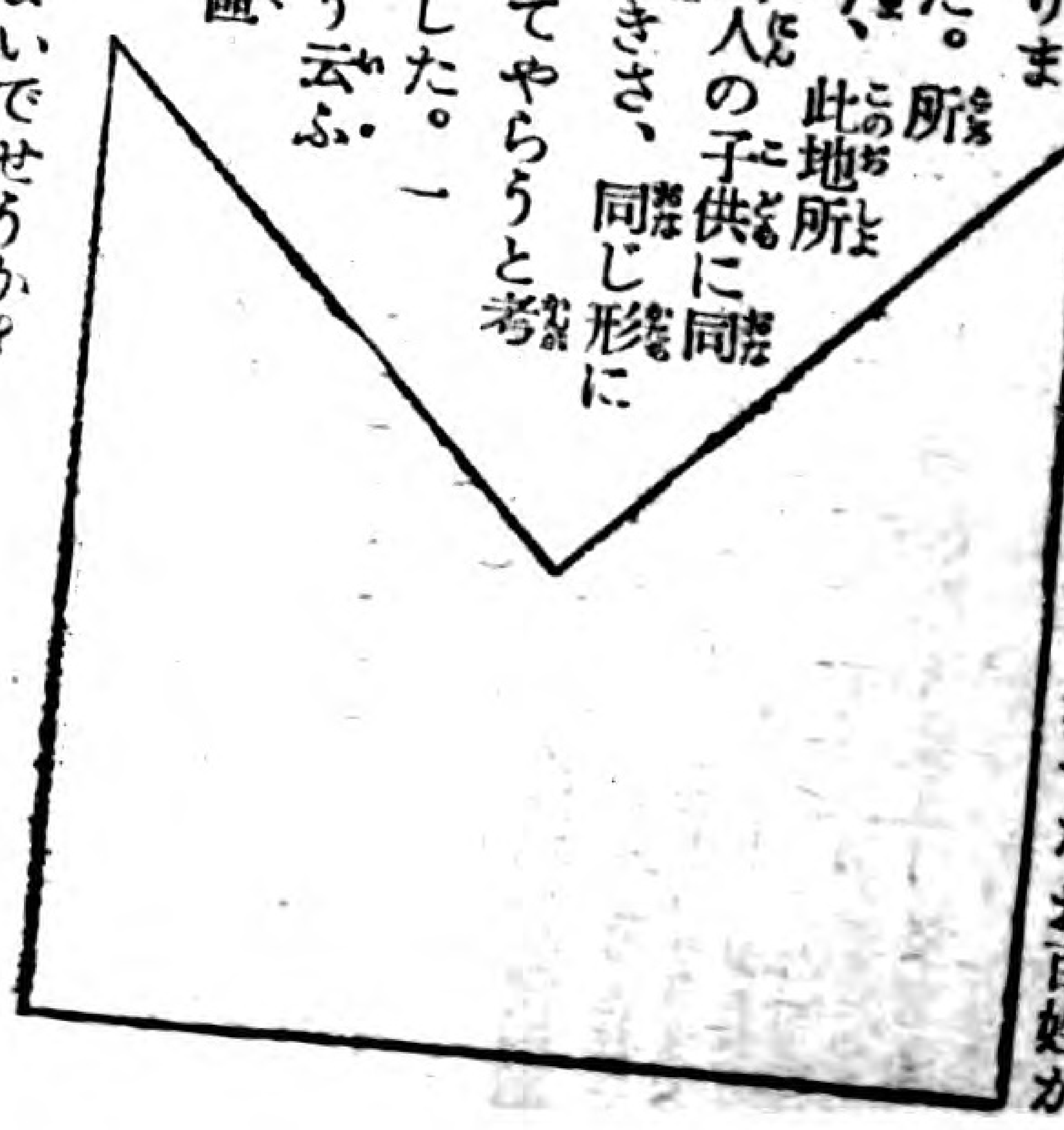
（三）鎖繼ぎ

圖の樣な鎖がありますが、御覽の通り全部はつながつて居りません。この圖の鎖の組合せ方を直すと全部つながる樣になる相ですが如何したら良いでせうか？



（四）地所の分配

圖の妙な形の地所を持つたお百姓がありました。所で今、此地所を四人の子供に同じ大きさ、同じ形に分けてやらうと考へました。一體どう云ふ風に區分したらよいでせうか？

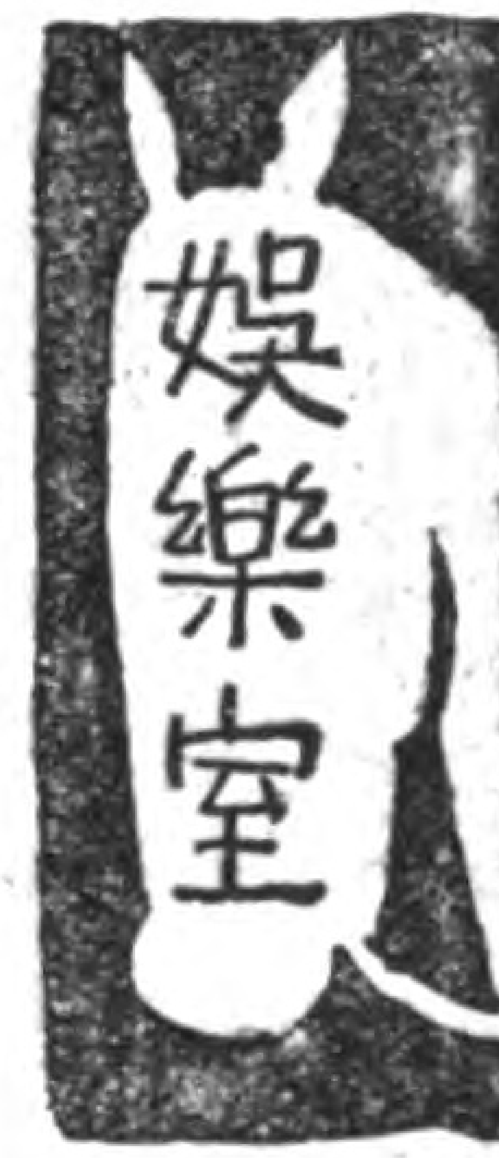


（五）マッチ遊び

(1) 此の八本のマッチを使つて正方形二つと三角形四つとを作つて見度いと思ふのですが、どう云ふ風に並べたらよいでせうか？　正方形は同じ大きさでなくても結構です。但しマッチの棒を折つてはいけません。



（本欄解答は四二一に頁あります）



○狂歌の春

○うの毛にてついたる程もきずなきは君が八千代の玉の春哉。

○光陰の矢庭に消えぬ弓となる竹にはつるをはるの淡雪。

○春風に山高々と笑うてか土のくぼに殘る白雪。

○滑稽語呂合せ

天知る地知る――ペンシル削る。

褒るに咎なし――綻びに絲無し。

登るに道あり――幟が三つある。

苦勞は藥――黒いは硯。

せかず、あせらず――性急汗出す。

腹八分目――あら鉢踏んだ。

○十二支讀み

歌人宗祇、一日田舍途をぶらついてゐたが、大そう足が疲れたので、道の傍らに草を喰つてゐた牛の背に乘つた。そして更に牛の歩むがまゝにまかせてゐた。牛を見失つた飼主の百姓は大いに驚き、八方馳け歩いて探した揚句、薄きたない老人の乘つてゐるのを見付けて漸く捕へた。



そして宗祇の謝るのも聽かないで奉行所へ引立てた。奉行は『その方和歌の宗匠とあれば謝罪の歌に十二支を讀み込んでみよ』と云ふ。宗祇畏まつて暫らく考へてゐたが、やがて左の如く讀んだ。

うまひつじさるとりいぬも
いなばいね
うしとらぬさへうきなたつみに

奉行はその歌才に感嘆し、直ちに罪を赦した。

○妙々算術

どんな數でもよろしい。……二十（假りに）

それに二をかける……四十となる。

一を加へる……四十一となる。

五を乘ける……二百〇五となる。

五を加へる……二百十となる。

十を乘ける……二千一百となる。

百を引く……二千となる。

終の二けたを取り去れば……最初の數が出て來る。（即ち二十となる）どんな數でも宜しいから前のやうにして試みて下さい。（落合忠治）

○小咄（昔の笑話）



◇仙人

『仙人は、昔から三人に限つてゐる』

『いや、五人ある、ソレ、くめの仙人、てつかい仙人、がま仙人、仙人……』

『フム、フム、して、あとの二人は？』

○詰將棋新題

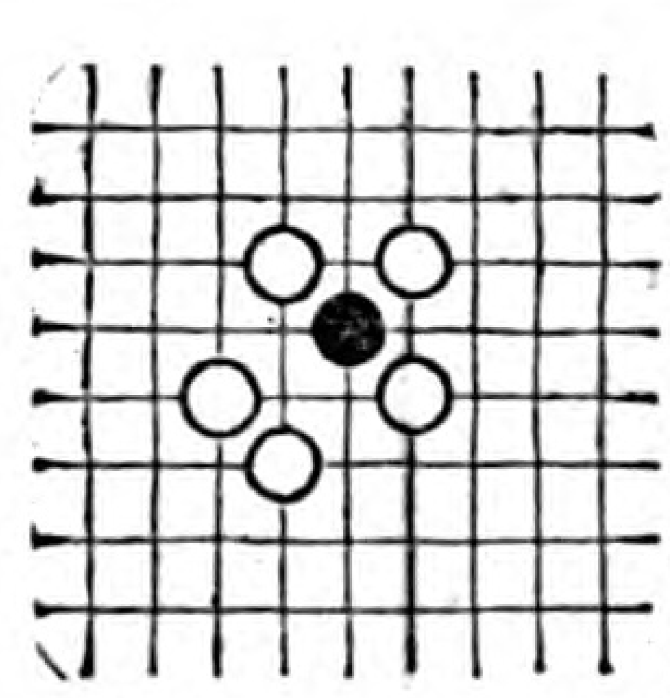
八段　金易二郎出題



持駒　桂

○詰碁新題

七段　瀬越憲作出題



黒先にて白の圍中にある黒が脱出す手順を問ふ

○聯珠新題

珠叟　清水吾石出題



最近の實戰に表はれた局面。白（十四）と打つて四三を見せたので黒は（い）に止めた。すると白が（イ）に三々を打つたので防ぎ手なしと黒は投げたが、黒は（十五）の手で（い）に止めずとも既に勝つて居る。それはどこ？

本欄解答は三三三頁にあり

ベル廻し競技盤





お正月の室内遊戯 ベル廻し遊び

まづこの競技盤とベルの繪を切りぬいて厚紙に貼り付けます。次に三つの鐘の眞ん中も切りぬき、盤の繪の眞中へピンをさし、鐘の切りぬいたのをピンの上から落して、左手に持ち、右手で鐘を強く廻しながら机の上へ落し、鐘の舌が止まつたところの數字を三つ合せながら記錄してゆきます。かうして早く百以上になつた人が勝ちです。



『ハテ知れたこと、あとの二人は盲千人、目明き千人』



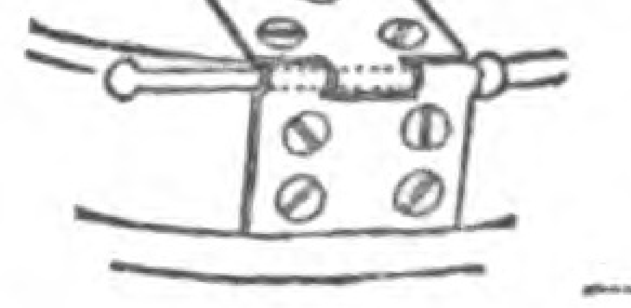
◇吝い親爺

吝い親爺が臨終の遺言に『必らず物入すな。夜のうちに寺へやつてくれ』といふ。親類集り、さうはなるまい、かうはなるまいと言へば、親爺起き直り『そんならもう死なぬ死なぬ』

大魔術 樽抜けの美人

念のため樽は中を改めます。さて、お目通り控へさせました一人の美人、此の美人を只今樽詰めにいたします。どなたか錠をおろして頂きたう存じます。(觀客の一人が舞臺へ上つて錠をおろし、更に錠を蠟で封をする) これなる樽を暫時カーテンの蔭に入れますれば、如何相なりませうか。中なる美人は首尾よく目的を遂げましたなら、お手拍ち御喝采の程を。(そこで樽をカーテンの蔭に入れると、次ぎの瞬間、ピストルの音がして、サツとカーテンが開く。見ると美人が見事樽を抜け、ピストルを持つて立つてゐる。樽を調べて見ると錠にも封蠟にも異狀がないので大喝采)





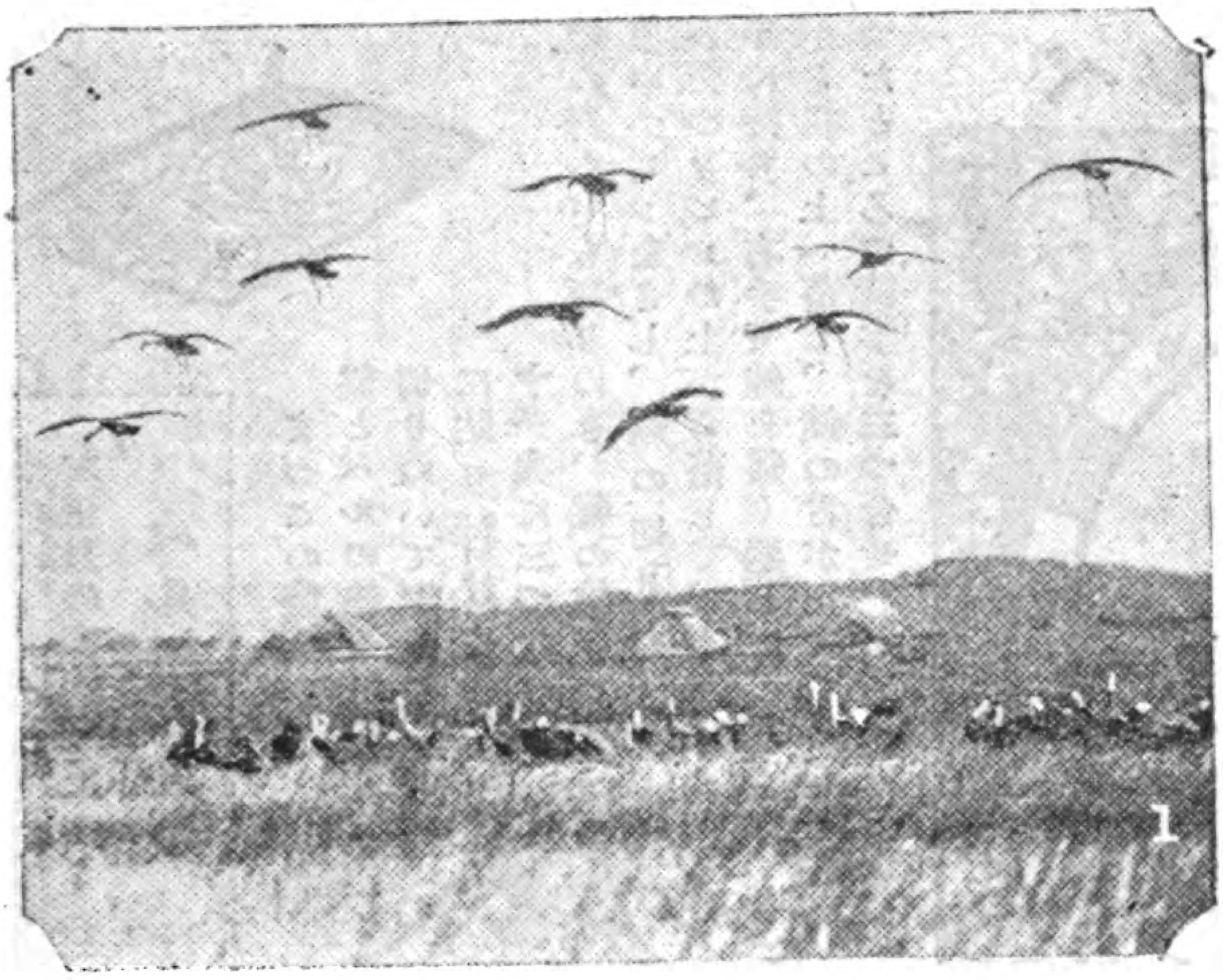


【種明し】樽には圖の如き仕掛けの蝶番が捻釘で留めてある。そして横に鐵棒が差してあるので一見丈夫さうに見えるが、實は此の横棒は直ぐ抜ける樣になつてゐる。そこで美人の入つた樽をカーテンの蔭に運ぶ時、助手が素早く横棒を抜取つて掌中に隠してしまふ。横棒さへ抜取つておけば、樽の蓋は、中から押せば直ぐ開く。美人は樽がカーテンの蔭に運ばれた瞬間、飛鳥の樣に樽から飛び出し、直ちに、別に用意して持つてゐた鐵棒を蝶番に差し込むと同時にピストルを打てばよい。聞いて見れば、何アんだと思ふのが大魔術の種である。

天然記念物 珍鳥奇鳥畫報

農學博士 内田清之助

天然記念物としての鳥獸は徹底的な保護を受けてゐる。例へば、蕃殖地附近では他動物の狩獵や伐木或は又土壤を崩壞して蕃殖を防害する等の行爲は絕對に禁じて種族の絕滅や減少を保護してゐる。爰に集めたものは、我國各地の天然記念物の重なるもの。益鳥あり奇鳥あり珍鳥あり、宛然たる珍奇鳥類館の觀がある。



① 鶴

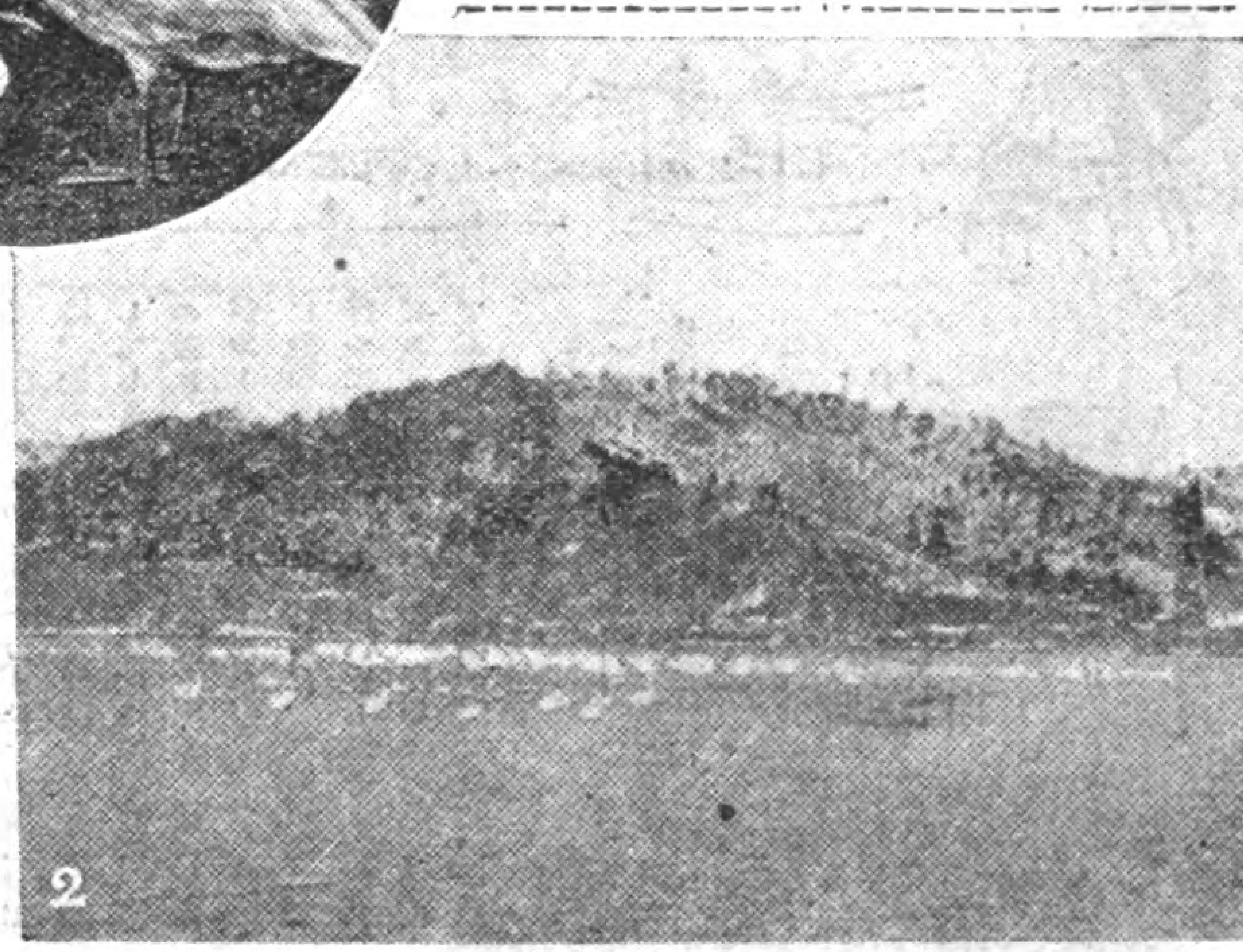
昔は、江戸市内でも、時々鶴が舞ひ降りたものだが、維新後は全く姿を消して、本邦内地では容易に見られない。唯、僅かに三ケ所、鶴の渡來地が現存する。北海道の釧路、山口縣の八代村、それに鹿兒島縣出水郡荒崎だ。荒崎には、眞那鶴と鍋鶴が、三百羽位渡來して、冬を越す。

（寫眞❶は、荒崎に渡來した鶴の群。）



②③ 白鳥

白鳥と言へば、昔は本邦の北部地方には澤山渡來したが、今日では野生のものは殆んど見られない。只青森縣津輕郡小湊に、冬期、五六百羽の大群が渡來する。この小湊に雷電神社といふお宮がある。この神社の御使が白鳥だと、古來信仰されてゐた。故に土地の者は、この白鳥は決して捕ら



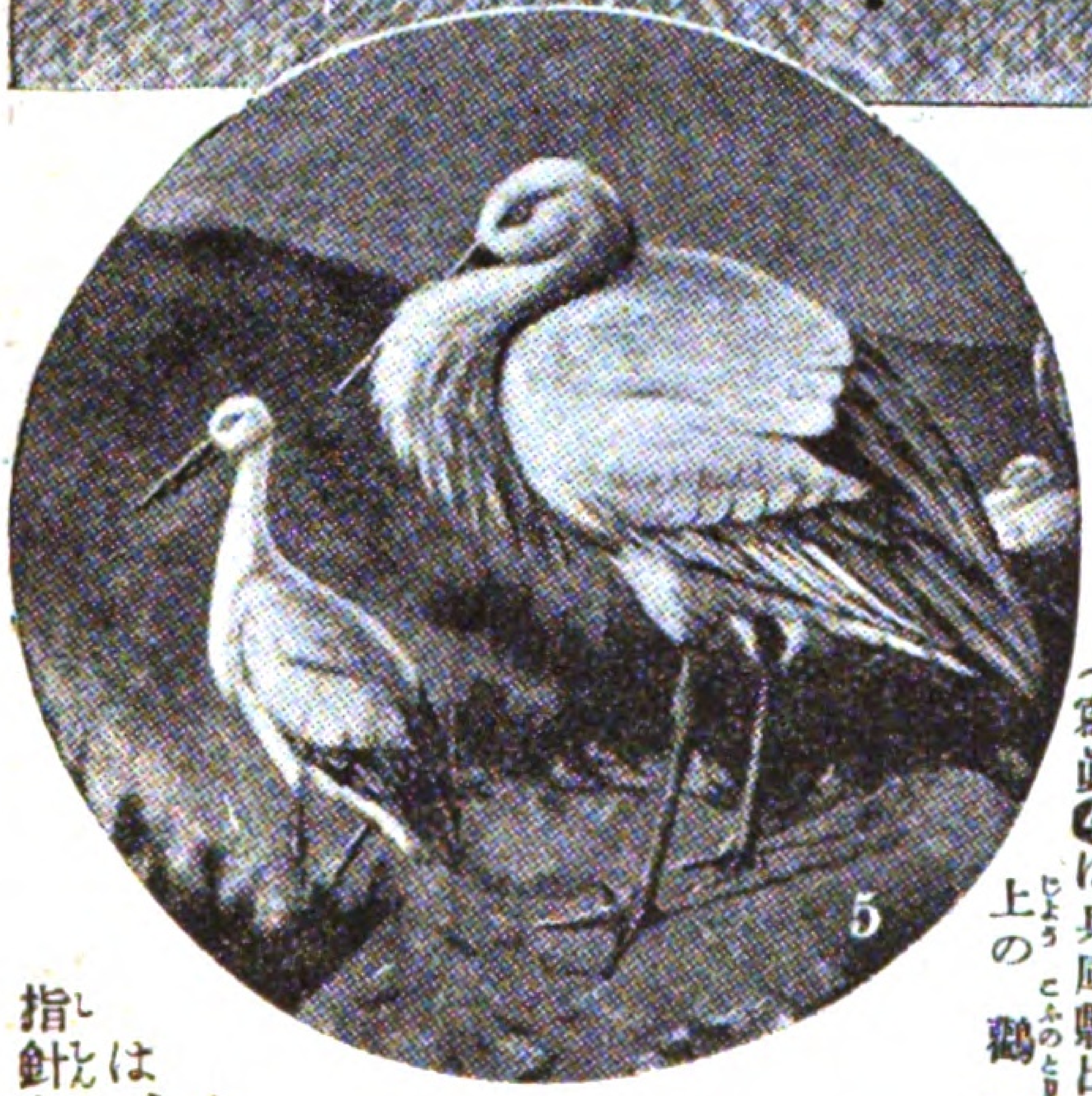
ぬ。偶〻他國の者が知らずして捕獲しても、村中總出でその神の冒瀆者を罰した。迷信と言へば迷信だが、白鳥にとつては有難い絶對安全地帶で、今に至るまで、此處だけは安心して年々渡來してゐる。

（寫眞❷は小湊とそこに集る白鳥の群を遠くから眺めたものである。❸は白鳥。）

④⑤　鸛

鸛も、鶴と同じく維新前は、到る處にゐたものだが、今では僅かに一箇所、但馬の國出石の鶴山にしか渡來しない。こゝでは、夏になると十五六番が、松の木の上に巣を造つて蕃殖をする。一體、日本の鸛は、二種類ある。鸛と鍋鸛とだ。鍋鸛は、羽色が黑いのでその名を得た、面白いことには、鶴の渡來地たる荒崎へ、二三年前から、この鍋鸛が混つて來始めたことだ。これは珍らしいことで世人の注意を引いてゐる。





（寫眞❹は兵庫縣出石郡鶴山の全景。❺は松上の鸛）

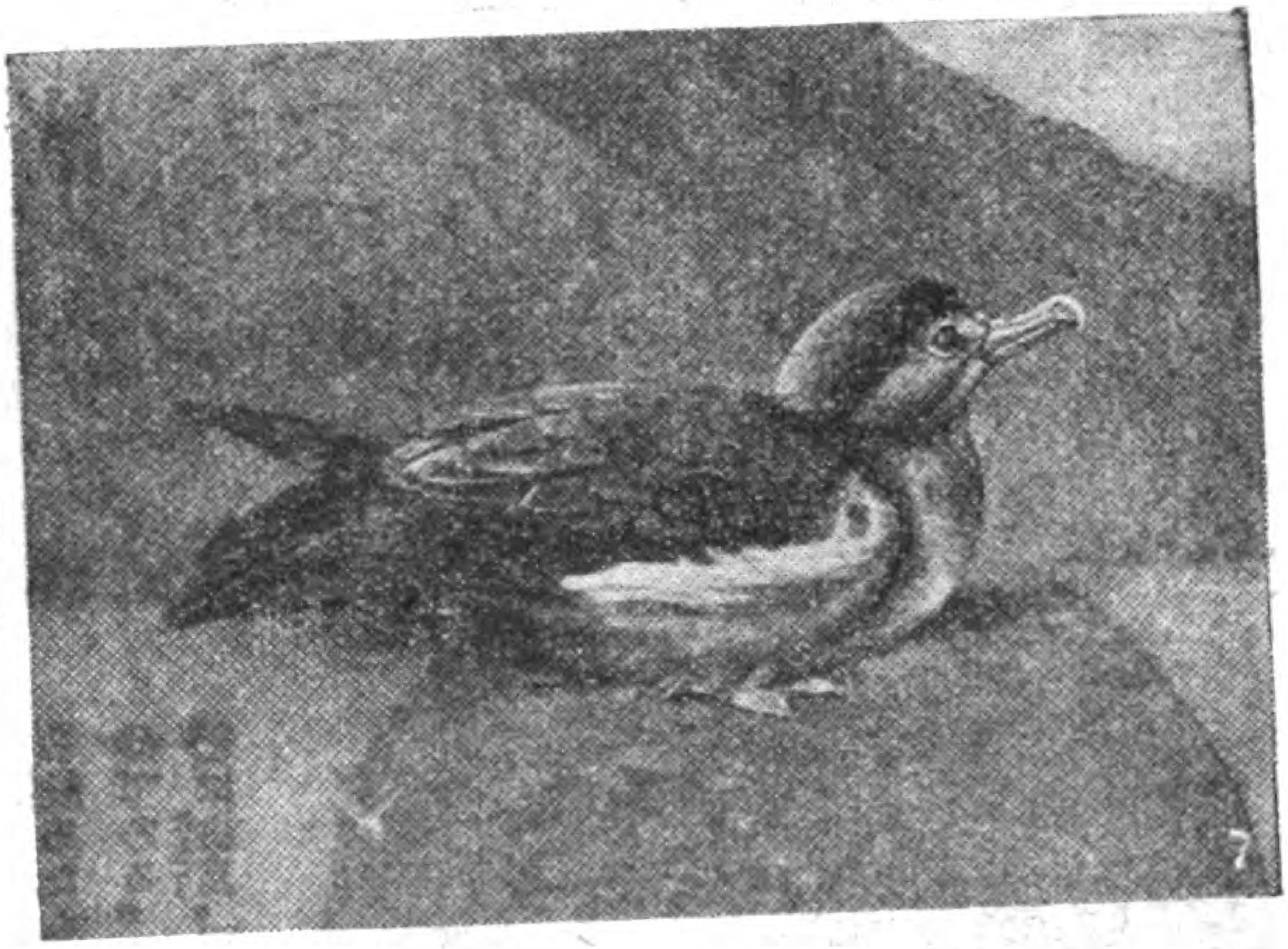
⑥　鷗

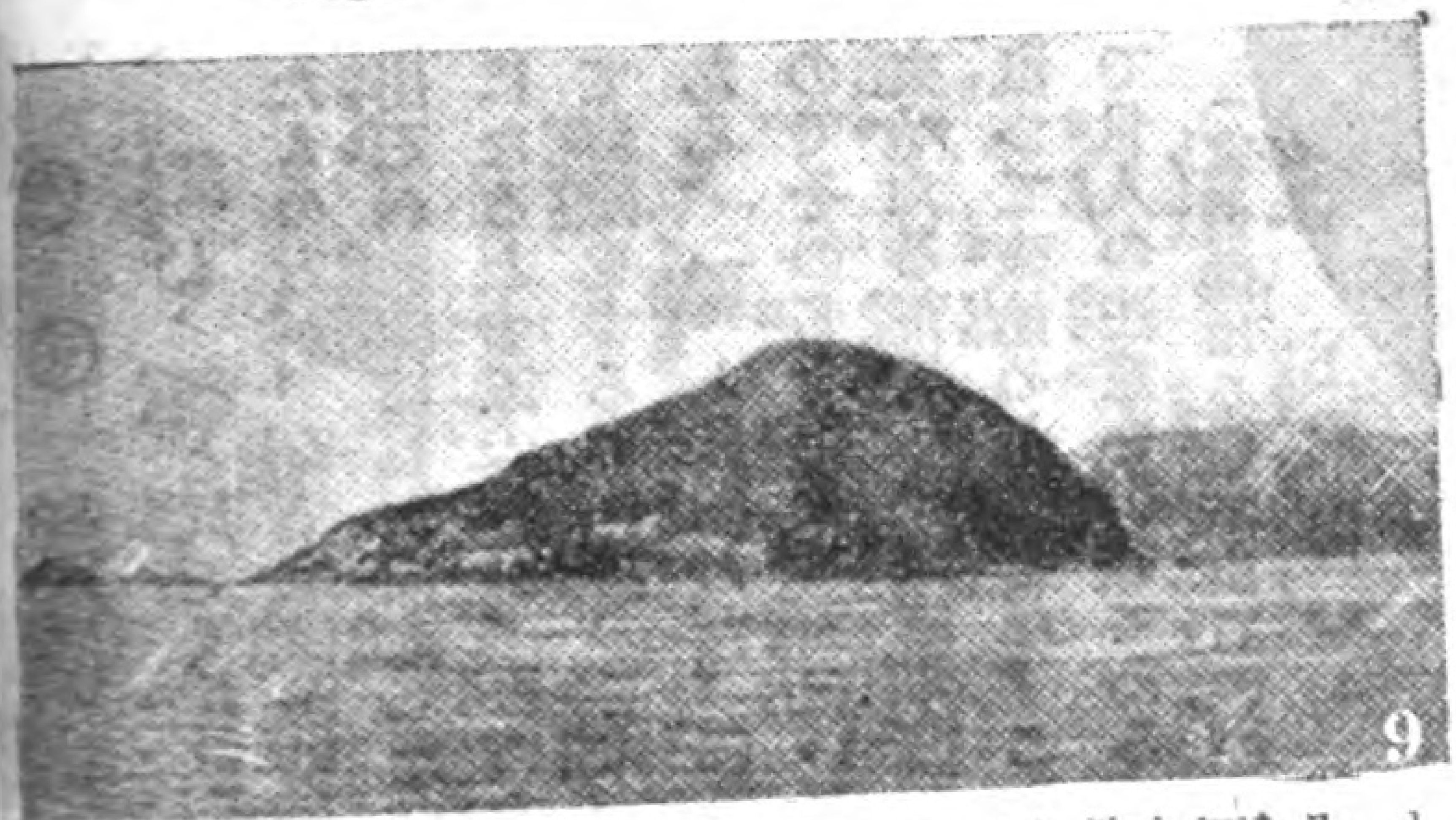
鷗は、漁師の大恩人だ。鷗の集る所必ず魚群あり、またその集合飛散の狀態を見ると、魚群の種類、潮流の關係等を知ることさへ能きる。故に、鷗は、漁家にとつては、出漁の指針ともいふべきである。しかも到る處の海上に、その純白の姿を見せてゐるが、蕃殖地としては、青森縣三戶郡の蕪島と島根縣の經島とが、その重なるものだ。蕪島は、蕪と稱する（所謂蕪ではない）一種の野生植物が黃色い花を咲かすので、名所となつてゐる。全島黃色い花の咲き亂れた中に、純白な鷗が群をなせる有樣は、一種の偉觀である。



（寫眞❻は、蕪島に集る鷗群。）







⑦⑧⑨　大水凪鳥

大水凪鳥は、海鳥の一種だ。鷗の如く魚群を追つて生活する。高知縣の南西端蒲葵島は、有名なこの鳥の蕃殖地だ。面白いのは、此鳥が、深さ三四尺乃至一間の穴を掘つて、その中で産卵することだ。蒲葵島に行くと、島の半分位は、この鳥の穴だらけで、うかうか歩くと足が埋つてしまふ。その穴から蝙蝠の如く、朝夕海上目懸けて飛び出すのは一種の奇觀である。

（寫眞❼は大水凪鳥、色は褐色で頭や額は白に褐色の斑點がある。❽は大水凪鳥の巣。❾は蒲葵島の遠望。）



⑩　鵲

七夕の夜、牽牛と織女が會合する際、羽を並べて橋を架けるといはれ、和歌にも詠まれて有名な鵲は、そんな粹鳥か否か！日本には今、北九州の一部にしか棲んでゐないが、本家は朝鮮らしい。昔太閤が朝鮮征伐の際持歸つたものか、九州の一部に蕃殖したといはれ、この地方では別名勝鴉と言つてゐる。形は普通の鴉よりも小さく、背に白斑がある。武勇と戀を表象する、中世騎士の如き鳥として珍鳥とされてゐる。

（寫眞⑩は鵲とその巣。）

⑪ 瑠璃かけす

鹿兒島縣奄美大島にのみ棲む瑠璃かけすはかけすの類だが、かけすと違つて美麗な鳥、その名の示す如く瑠璃色の燦々たる羽毛の持主だ。西洋人は好んでこの羽を帽子の飾りに用ひるので、一時は、どし〳〵輸出された。ために、種族の絶滅を怖れたが、幸ひ保護されてこれも天然記念物。

この鳥は、珍奇なばかりでなく、學術上にも重要な鳥だ。即ち、動物分布の上からいふと、この奄美大島を境界に、北には溫帶動物、南には熱帶動物が棲息する。そして、その境界線上に棲むのが、この鳥だ。他に類のない珍鳥たるも當然である。

（寫眞⑪は瑠璃かけす。）



⑫ 木叩

木叩は、木突の一種で、形は鴉より稍小さい。鳥冠と頰に赤い羽毛が生えてゐる。對馬のある森の中にしかゐない珍鳥だ。併し、今では、それも僅かに五六羽か、或は十數羽しかゐないから、幾ら天然記念物として保護しても、恐らく絶滅する事だらう。極めて珍らしい鳥だが惜しいものだ。

（寫眞⑫は、木叩。木を攀ぢ登る奇觀を御覽下さい。）





⑬ 雷鳥

雷鳥は、日本アルプス一帶の高山地方に棲息し、海拔二千四百米突内外より上部の、ハイマツや灌木の蔭に生活してゐる。荒天を前以て知り、嵐に先立つて附近を步き廻り、餌を求める習性がある。登山者は、多く斯樣な時に目擊する。從つて、これを驚かしたり、或は捕獲すると、山が荒れると昔からいはれてゐる。この鳥は、保護色や鳥の渡りの研究上、學術上にも貴重な鳥であるから、登山者は、これを捕獲したり、卵を捕つたりして、種族を絶滅させぬやうにせられたいものだ。

（寫眞⑬は、白雪中の雷鳥。）



キング講座

陶器の知識と面白いロマンス

鹽田力藏

五郎八茶碗の由來

三千五百萬圓——と藪から棒では、何のことかおわかりになりますまいが、これが昭和三年に於ける、わが陶磁器の輸出額であると申しましたら、誰方も一寸意外に感ぜられることでせう。

實際これ丈けあれば、商工省全體の經費が、三年分位は間に合ひます。高が茶碗や花瓶のやうでも、最近の海外貿易に、第五位を占めるとは大したものです。一體陶磁器はいつの頃から作られるやうになつたものでせう？

古川柳に『澁茶には五郎八、薄茶には五郎大夫』といふのがあります。これは澁茶を呑む時には大振りな五郎八茶碗がよく、薄茶（煎茶）には五郎大夫のつくつた磁器の茶碗がよろしいといふ何の變哲もないものですが、一面、陶器の歴史とか、地理的分布を雄辯に物語つて居ります。

五郎八といふのは高原五郎七（父は鮮人、五郎八は誤りとの説があります）の事で、お芝居や物語で有名な名工柿右衛門も、此の五郎七に親しく師事いたしました。五郎七は今から約三百年前の人で、豊臣方の保護の下に陶器の製作をいたして居りましたが、大阪落城後、肥前の南河原に窯場を造りました。又五郎大夫といふのは祥瑞五郎大夫のことで、その事蹟はつまびらかでありませんが約四百年前即ち永正の頃支那に渡つて、磁器の製法を學び、歸朝してから肥前の伊萬里その他で磁器を燒いたとかいふ噂も殘つてゐます。

即ちこれによつて第一に頭に浮んで來ますのは、今日見るやうな陶器は、大體三四百年前、支那朝鮮より傳はり、そして關西又は九州が本場であつたといふ事であります。

茶碗一つが十七萬圓

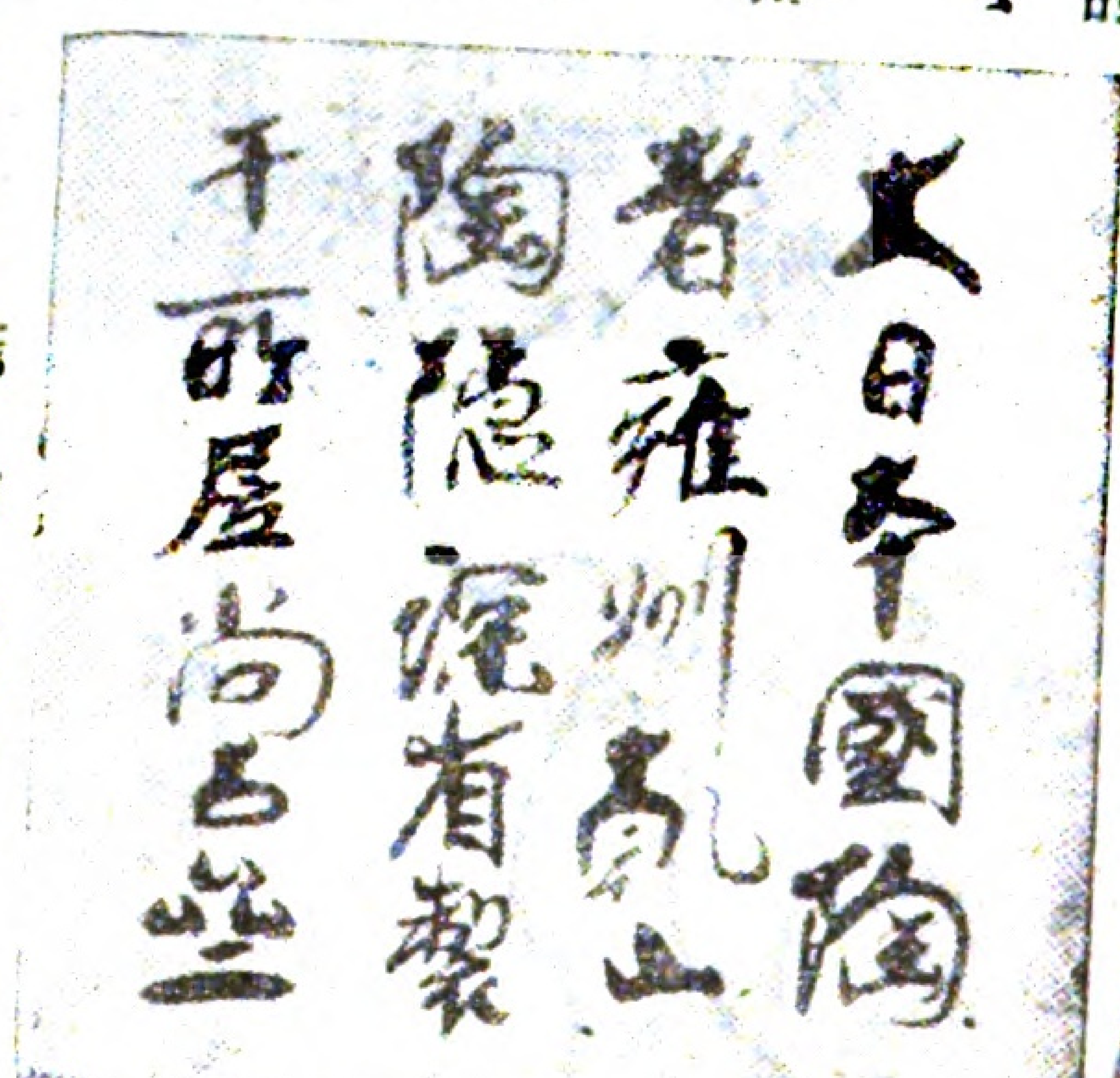
今日どんな家庭でも、茶碗の二つや三つ無いところはありま

[illegible]がありますが通り、[illegible]でも[illegible]へば、[illegible]と茶碗を割る位は、別に珍らしくもない事でせう。ところが茶碗一つでも、フォードの自動車百臺分に相當する値段のものがあるとしたら、滅多に壊されるものではありません。

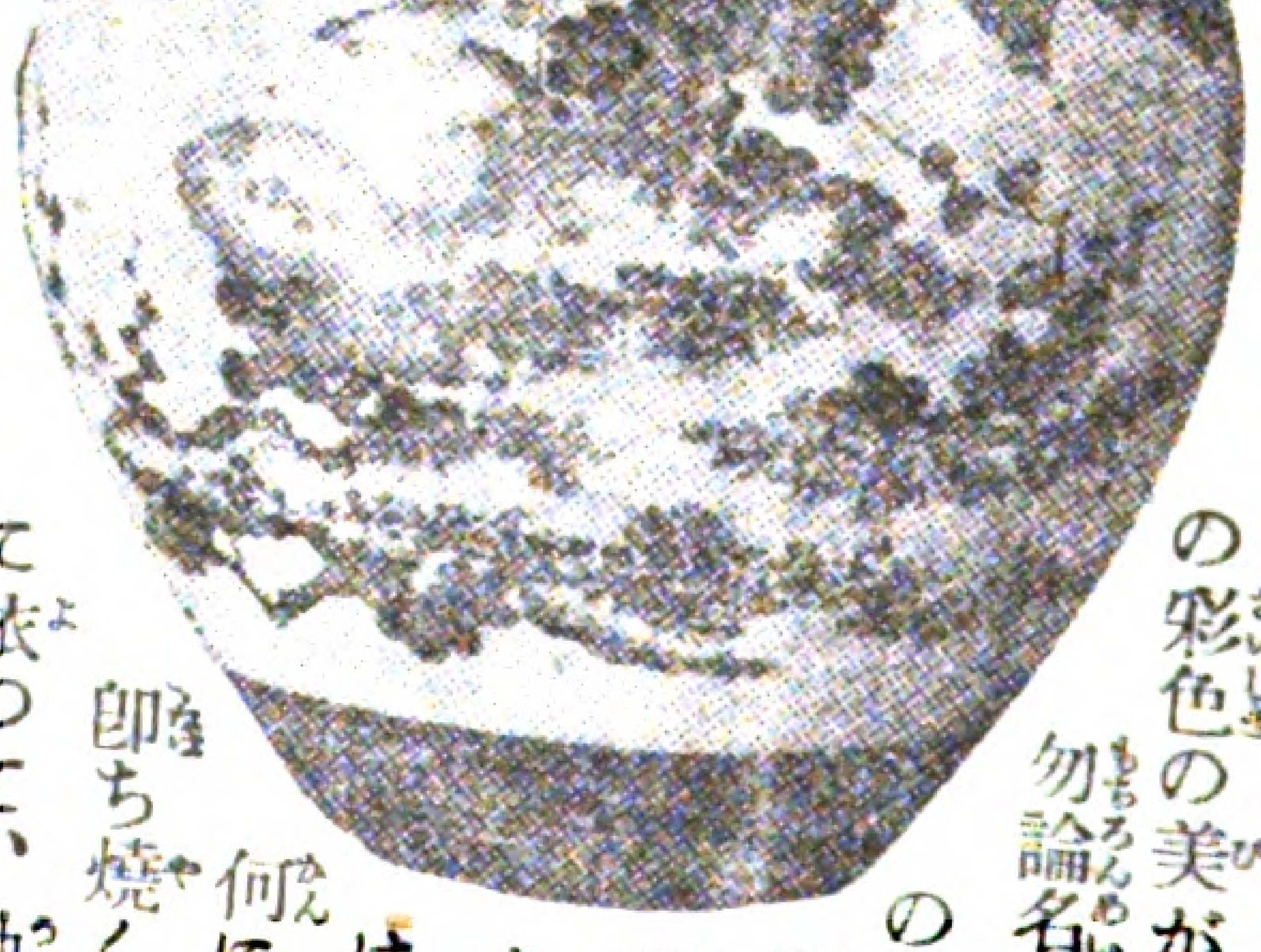
これは歐洲戰爭當時の事ですが、支那の油滴（油を垂らしたやうの紋樣あるもの）の天目茶碗が、東京で十六萬八千餘圓で落札されたといふ嘘のやうな本當の話があります。つまり陶器は單に重要な貿易品であるばかりでなく、藝術品、骨董品としても好事家の垂涎をそゝつてゐます。

例へば現在帝室博物館に在る、野々村仁清作の茶碗は、早い頃から十萬圓以上と云はれ、同じく尾形乾山、光琳合作の角皿や、木米作の土瓶などは、いづれもその價數萬圓と云はれて居ります。

それから國寶となつてゐるものでは、藤四郎（本名加藤四郎左衞門）作狛犬（尾張瀬戸同業組合保管）と、後藤才次郎作金剛童子（加賀山中温泉醫王寺藏）その他二三點であります。







（上）光琳、乾山合作の角皿。（右）木米作土瓶。（下）仁清作茶壺。何れも帝室博物館所藏

趣味の陶器

一體陶器は、樣々の見方がありますが、大體二つの方面から鑑賞する事が出來ます。

その第一は、寂味乃至澁味であります。第二は絢爛華麗の趣であります。古瀬戸、唐津、遠州ものなどには、前者の奥床しさがあり、九谷、伊萬里、薩摩あたりには後者の彩色の美があります。

勿論名器、逸品と名のつくものは、名工の妙技に俟たねばなりませんが、要は仕上りの如何にあります。即ち燒く時の火加減に依つて、釉藥に多種多樣の色彩の變化が出來たり、又は遠山の黛色を味ふやうな鮮かな藍色を呈したりするのであります。

此の釉藥の雅致に就て思出さるゝのは、かの大盗石川五右衞門が、秘術を盡して盗まんとした千鳥の香爐であります。これ

は支那の明代のものですが、足利時代に日本に傳はつて珍重され、更に太閤に傳はつたものでありまして、名は千鳥の香爐でも、決して千鳥の形をしてゐるわけではありません。單に青磁色(海緑)な稍大振りの香爐にすぎませんが、問題はその青磁色にあります。

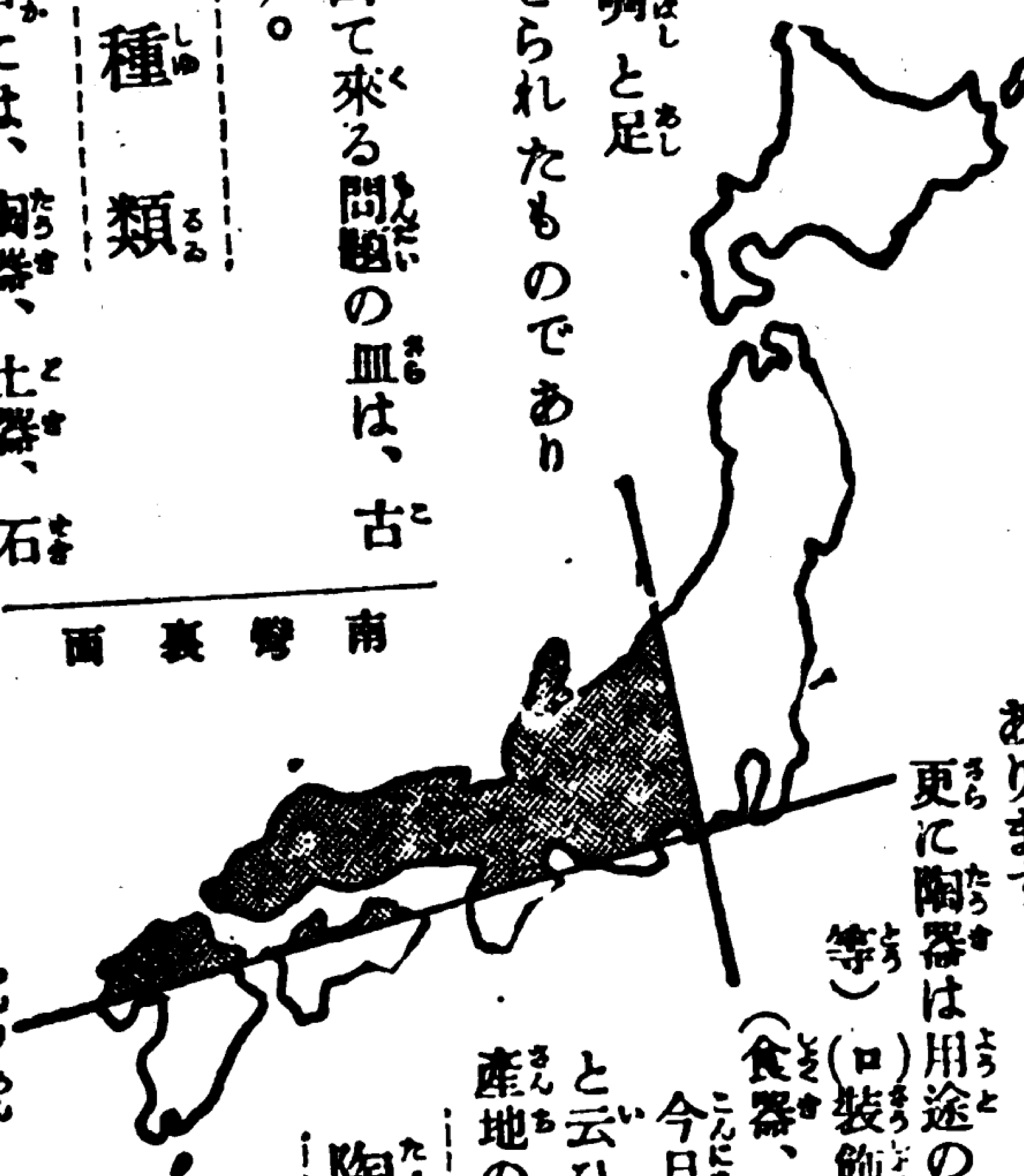
支那では紫口鐵足といふ言葉があります。紫も鐵も略ゝ赤味がかつた色をさしてゐるさうですが、此の香爐の仕上りは、恰も紫口鐵足に相當してゐたのであります。即ち香爐の縁と足が、共に釉藥の加減で多少赤味を帶びてゐたため、嘴と足の赤い千鳥に倣へて此の名が冠せられたものであります。

又芝居でお馴染の番町皿屋敷に出て來る問題の皿は、古伊萬里の彩色見事なものであります。

陶器の種類

普通一口に陶器と呼ばれてゐる中には、陶器、土器、石器、磁器の四種があります。

土器は神代器とも云ひ、御承知の通り素燒のまゝ。陶器(狹義の)は土燒とも云ひ、上等粘土を材料として作り、釉藥をかけたものであります。石器はその質が陶器と磁器の中間のもの [illegible]



南嚮裏面

石燒とも云ひ、石英粗面岩や、磁土、長石、硅石等を調合して作つた質の硬いものであります。磁器は徳川初期より中葉にかけて完成されました。

これより先、鎌倉時代に陶工として藤四郎がありましたが、兎に角、以上の陶器、石器、磁器の著しく發達したのは、秀吉が朝鮮征伐の際、朝鮮から澤山の陶工が渡來してからの事であります。

更に陶器は用途の方面から、(イ)茶用陶器(茶入、茶碗、水差等)(ロ)裝飾用陶器(花生、香爐、置物等)(ハ)實用陶器(食器、雜器等)に分けることが出來ます。

今日陶器のことを、中國以西の地では『唐津』と云ひ、その他では『瀬戸もの』といふのも畢竟產地の名から轉稱したものであります。

陶器の產地

陶器は何處でゝも出來るかと申しますと、中々さう簡單には參りません。

古來陶器の集中してゐるのは、地質學上南嚮裏面と云つて、日本を四分した西南の地方であります。(挿縮參照)

それには大體次の樣な理由があります。

(一)地質——陶器の材料となる粘土、磁土、長石等の多い地方

(二)氣候――乾燥して温い地方がよろしいこと、

(三)燃料――燃料となる黒松の多い地方がよろしいこと、

(四)環境――陶器を發達せしむる樣々の條件を備へてゐること、例へば漆器の盛んでない地方、陶器が茶器に使用される關係上お茶の出來る地方等、

尤も最近製陶法の變化と交通機關が發達するにつけ、これらの原則は緩和されて參りました。しかし何と云つても陶器の主要産地は、尾張、肥前、京都、加賀を中心とした地方で、これらは窯業界に於ける日本の四天王といふ事が出來ませう。

尾張ものは純白で實用陶器に勢力があり、肥前ものは質が丈夫の特長を有し、京都ものは美術品に頭角を現し、加賀ものは彩色に於て優れて居ります。

尚昔から陶器の産地として聞えてゐる處は、

(1)尾張を中心として。尾張の瀬戸、犬山、常滑。美濃の多治見。伊賀の丸柱。伊勢の萬古。常陸の笠間。下野の益子。磐城の相馬。岩代の會津等。

(2)肥前を中心として。肥前の有田(普通伊萬里と呼ぶ)大河内、三河内、唐津。筑前の高取。薩摩の苗代川。肥後の八代。豐前の上野等。

(3)京都を中心として。京都清水、粟田、朝日。近江の信樂。出雲の布志名。但馬の出石。長門の萩。伊豫の砥部。備前の伊部。紀州の御庭。淡路の珉平。攝津の三田。大和の赤膚山。丹波の立杭等。

(4)加賀を中心として。加賀の九谷、大樋。越中の越中瀬戸。佐渡の常山。羽前の平清水等。

右の内今はたゞ殘影丈け止めてゐる處もあり、又工業用品例へば電氣器具、土管、瓦、タイル等の製造に轉換されたところもあります。



古今の名工

昔から陶器の名人と稱へられる人は、數多くあります。今その主なる人を舉げれば、

瀬戸――藤四郎。加藤春岱。

伊萬里――高原五郎七。酒井田柿右衞門。

京都――野々村仁清。尾形乾山。仁阿彌道八。木米。

九谷――後藤才次郎。

此の外出雲の布志名權兵衞。萩の高麗左衞門。上野の尊楷。淡路の珉平。常滑の赤井陶然。萬古の沼波弄山。赤膚山の木白





(上)國寶金剛童子(後藤才次郎作)(左)日本で始めて彩色模様入りの陶器を作つた柿右衛門の作菊孔雀の壺

等も有名であります。此の外茶用陶器の方面でも名人が多くありました。

明治年間に入つては、京都の清風與兵衛、三浦竹泉、諏訪蘇山等が聞えてゐます。又現代著名の製陶家としては板谷波山、富本憲吉、日野厚、清水六兵衛、河井寛次郎、小森忍、石野龍山等の諸氏であります。

陶界秘聞

昔から陶器の製法は、極秘中の極秘とされて居ました。從つて名工の秘法を探るには、實に千辛萬苦、戯曲めいた話が隨分殘つて居ります。

それは全く陶工が他國に出る事も、他國より弟子を取る事も嚴禁されてゐた結果であります。この嚴禁を[illegible]首を斬られたり、追放されたりしました。

例へば瀬戸の民吉に就てもこんな噂が傳はつてゐます。即ち民吉は磁器の製法を學ぶために肥前の佐佐に赴きました。そして或る窯場で忠實に働いて大いに信用を得、遂に婿養子になりました。ところが兎角してゐるうちに養父から製法の秘訣を會得するや、忽ち妻子を棄て、脫兎の如く故郷に逃げ歸つて了つたのです。サア怒つたのは佐佐の人々。民吉を憎むの餘り、毎年お祭の日には民吉人形と稱する藁人形を作つて、突刺したなどとさへ云はれてゐます。

又京都の仁清は「椀久物語」で有名であります。即ち仁清は椀屋久兵衛の保護を受けて、陶器の製作に從事して居ました。或る時、有田の磁器商人青山幸右衛門が取引の用で椀久を訪れた事がありました。仁清は好機逸すべからずとなし、椀久を唆して幸右衛門から秘傳を知らせて貰つたのであります。

此の事がどうして解つたか、肥前の佐賀藩に聞えたからサア大變です。氣の毒な事に幸右衛門は斬首を恐れるの餘り、神經衰弱になつて切腹し、椀久も自責の念にかられて到頭發狂して

こういふ事情でまだ困難であります。

この傳統的の雰圍氣を破つて、日本の製陶法を科學的に組織だて、普及に預つて力あつた人は、明治元年に來朝した獨逸人ワグネルであります。

貿易から見た陶器

現在わが國の陶磁器は年産額約五千萬圓に達し、外國貿易に於ても大切なものゝ一つであります。

今から十年前には一年の輸出額が、約二千萬圓内外でありましたが、昭和元年には三千三百萬圓、同二年には三千萬圓、同三年には三千四百六十二萬圓といふ數字を示して居ります。

その輸出先は米國の一千三百八十萬圓（昭和三年）が筆頭で、それにつぐものは蘭領印度、英領印度、支那、カナダ等の順であります。これ等は主に愛知縣、福岡縣の産で、彩色模樣入りの洋風食器が、その大部分であります。

陶器生れて貧乏徳利となる勿れ！

胃腸病、結核病、神經衰弱、脚氣をはじめ

多數の難症慢性病者が何故救はれたか

＝醫學界を驚かした澤村東京帝國大學名譽教授の大功績＝

一記者

◇世界を驚かした不老長生藥

世界醫學界の大家、ワイカルト、フエルネルなどの諸博士によつて、現代醫學が許し得る不老長生藥の理想にもつとも近い事が明かとされた稀有の有益菌ヘーフエの全成分と、我國固有の食品としてもつとも貴重の榮養素に富む米胚の有効成分とを基礎とした世界的の新榮養劑「若素」が、わが國榮養學の第一人者、澤村眞博士の多年の苦心によつて發見せられました事は、本誌十月號誌上で取敢へず報道いたしましたが、實際その効能の卓絶してゐるのは驚くばかりで、胃腸病、結核、神經衰弱、脚氣その他、今まで種々の藥や療法に手を盡したが癒らなかつた、重い難症、慢性病の方々が、「若素」の服用を始めると急に吃驚する程榮養がよくなり、諸器官の機能が旺盛になつて、どん〳〵健康に向つたといふ實話が、毎日の様に方々から傳はります。

◇二十年苦しみ抜いた胃腸病

兵庫縣の山本といへば我國でも有名な園藝植物の栽培地ですが、そこに大きな種苗場を經營せられる坂川義忠氏は、本年四十九歳、極めて頑固な胃腸病で二十年の永き間惱み續け、有らゆる醫藥を試みましたが何等効驗なく、つひに絶望の裡に落ちてゐられました。ところが七月の始め婦人倶樂部で「若素」のことを知り、之れある哉と早速取寄せて服用を始めますと、僅か一ヶ月も經たぬ中に今までに覺えなかつたほど身體の具合がよくなり『殊に本年は未曾有の旱天續きで、未だ一度も本年位暑い夏に遭遇した經驗がありませぬが、それに一回の腹痛も覺えず、頭は明瞭になるし、身體は輕くなるし、仕事はドン〳〵進捗するし、何といふ有難い仕合せであるかと、日夜澤村先生を心の中で拜して居ります。』と滿腔の感謝をこめた長いお手紙を寄せられました。

◇更に一つの不思議を加ふ

しかも坂川氏が「若素」より受けられた幸福はそれに止りませんでした。この夏男兒をお儲けになりましたが、如何したものか非常に發育が惡く、『全く骨と皮のみで、一週間の

命も覺束なからうと轉た悲歎にくれて居りました。妻は産前より脚氣にて醫者の手當を受けて居り、一滴の母乳を飲ますことならず、そこで私は何でも若素によつて救つてやらねばならぬと、牛乳の中に若素一錠づつ混和して與へましたところ、そんな弱い赤子がこれも無事に夏を越しまして、今日まで一度の心配事もなく丈夫に育つて參りましたので又々一つの不思議を加へた次第でございます。』とお手紙に記されてあります。

不思議と申せば不思議ですが「若素」の成分から考へれば實は當然過ぎるほど當然なことであります。たゞ殘念に耐へませんのは、夫人も産前から「若素」をお服みになつてゐましたら、恐らくさういふ重い脚氣でお難儀をなさらずとも濟んだであらうといふ事であります。「若素」を組成するヘーフエと米胚は、ヴイタミンBの含量最高位にあるもので、脚氣衰弱に對する榮養的効果は非凡であります。



脚氣に罹つた瀕死の鷄に少量のヘーフエを與へると三時間で恢復します（宮島軍醫正實驗）

◇肺病と便祕が急に輕快

北海道某地に勤務せらるゝ鐵道官吏の高木五郎氏は、大正十五年十一月突然喀血し、右肺全部浸潤と診斷され、爾來發熱三十八度内外、痰咳頻出、胸痛、盗汗、食慾不振、不眠、消化不良等の症狀にて體力は衰弱の一方なるに加へ、常習便秘のため裂痔及びいぼ痔の發病に二重の苦痛を嘗め、あらゆる療法も効なく、途方に暮れて居られましたが、「若素」を知つて服用を始めましたところ、『半月位にて胃腸の具合よく、胸焦、胃部膨滿の感薄らぎ、さしも永年の常習便秘も快通を見るやうになりて、痔痛の惱みも忘れ、次第に食慾増進し、何を食しても皆血となり肉となる樣感ぜられ、發病後十三貫弱に減少せる體重も、服用後僅かに三ケ月餘にして十五貫を越え、此分では病前以上の體重になるやも知れずと存じ居り、胸部の病狀も漸次に輕快し盗汗の消失、胸痛消退、痰咳の減少等々の奏効に再生の喜を得て、勇氣百倍、目下全快に向つて努力靜養して居ります。』と、これも長文の手紙を送られました。

◇「若素」の生命茲にあり

ヘーフエ中には盗汗不眠に効あるグリコーゲン・肺結核に用ひられるヌクレイン酸など……はフイチンや中性脂肪がヘーフエ中にも米胚中にも澤山あり、食慾增進の作用は碩學ボアスをして「食慾素なり」と叫ばしめたインシユリンもあり、其他腦神經の榮養成分たる燐酸、レチチン、體重增加、血液新生等の作用ある種々のアミノ酸、アミラーゼ、プロテアーゼを始め十餘種の消化酵素等、實に數々の成分を含んで居ります。

しかし「若素」が坂川、高木兩氏の例をはじめ、殆んどあらゆる病氣衰弱者に對して、驚くべく急速に健康恢復の途を辿るに到らしめたもつとも大きな理由は、在來の榮養劑には決して見られない細胞原形質賦活作用と呼ばれる特殊な働きを行ふ强力な一種の酵素があつて、**直接細胞に活力を與へて、諸器官の機能を旺盛にし、榮養狀態を一變して、病氣に對する抵抗力を增强する**比類なき作用があるからで、「若素」が世界凡百の榮養劑の上に濶歩する所以は實に茲に在るのであります

キングポスト

□年頭の辭

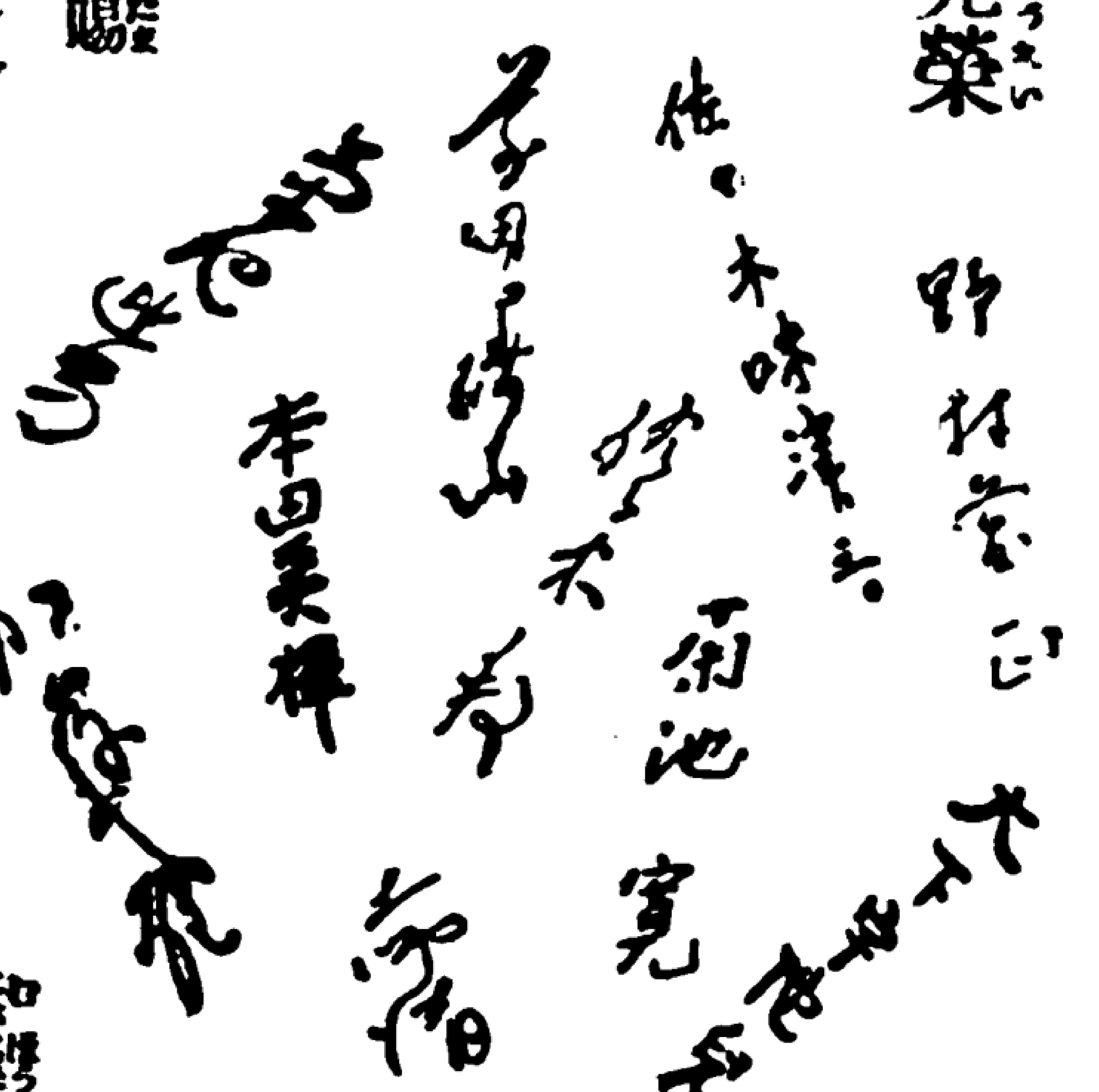
芽出度く昭和五年の春を迎へ御同慶に堪へません。本年も相變らず多大の御聲援を賜らんことを偏に願ひ上げます。

今年は午年、本誌も雄飛して內容は御覽のとほり馬ならば正に天馬空を行くの勢ひ、然も悉く大家名家の名篇傑作揃ひで、その何れを取つても無限の感興、無限の味がふくまれてゐます。尚、別册二大附録の素晴らしさは何と云つてもキング獨特、絕對に他誌の追隨を許さぬ犧牲出版！必ずや讀者諸賢の御期待に背かなかつたこと、信じます。とにかく今や茲に颯爽たるキング新年號を讀者諸君の前に捧げ得たことは吾等一同の欣懐措く能はざるところで、どうか隅から隅までお見落しなく十二分に御味讀下さるやう切に切に熱望いたします。

□本誌の光榮

○本號の卷頭を飾る高等女官の撮影に關しては宮內省より破格の便宜を賜はりました。キングならでは夢にだに望まれぬこと、たゞ感激の二字あるのみです。

長篇小說作家の筆蹟



○「心の日月」の挿畫を執筆された結城素明先生は美術學校の教授であり、帝展第一部日本畫及び第四部工藝品の審査員として、世に時めく現畫壇の重鎮であることは皆樣熟知の筈です、本誌が此の大畫伯を煩はして誌上更に一光彩を加へたことは甚だ欣快に堪へない次第です。そも〳〵先生が、連載小說に挿繪を畫かれたことは、實に今度が始めてのことであり、畫壇各方面でも大變な評判となつてゐます。先生の天衣無縫の靈筆は此の名小說と相俟つて限りなく讀者諸君の興趣を湧かすことでせう。御期待下さい。

□名士の談話室

□編輯小僧の日記

△新年號の〆切り前日の忙しさ！さながらに激戰場である。早朝から諸先生達は電話の爭奪に大童だ。さつきからT先生O先生U先生が卓上電話を獨占して離さないので、遂々癇癪を起したF先生、『勝手にしろッ、俺が自動車を獨占してやる』と帽子を鷲掴みにして憤然と飛び出して行かれる。忙がしさ熱心さの餘り、根もない斯うした內輪喧嘩の起るのも面白い情景だ。

マ一としきり大騷ぎした電話の爭奪戰が終つて、諸先生がそれ〲實戰に出掛けられた後の作戰本部は、ホッと洪水の跡かと思へば、相變らず電話のベルが鳴り續く。校正をやつてゐられるW先生、目の前でヂン〲頻りに鳴るので『五月蠅いなア』と悲鳴を上げれば溫厚なC先生『今日は僕が電話掛りをやらう』と三本の卓上電話を自席に並べて交換手を勤められ

○
清浦奎吾伯は大の蘭好きで、邸内には數多い蘭が見事に培養されてゐる。清廉潔白の伯と蘭との對照は至極相應しい。談偶々蘭の培養に及んだとき、伯は『全て蘭は良種ほどその培養が困難である。が、劣等種は簡單で放つて置いても育つ。人の世もこれと同じで善人に育て上げるはなか／＼六ヶ敷く、惡人はこれに反すぢや、誠に困つたものぢや喃。キングこそ折角と善人培養に努めて欲しい』——記者は思はず襟を正した。

○
政友會の闘將原惣兵衞氏曰く、『君、一體キングは幾百萬出てゐるんかネ。山間僻地まで實によく行き渡つてゐるのに驚いてゐる。五月號に僕の變な寫眞を出したもんだから、遊說に歩く先々到るところでいろんな人々から「キングに出てゐた寫眞を見ましたヨ」と冷かされ通しだヨ。偉い勢ひだ。キングへだけはウカ／＼下手を喋つたり、尻ッ尾を掴まらんやうに要心せにゃならんなア、ハヽヽヽ、何故ッて、新聞の記事は世間で信用しないが、キングとなると絶對に信用してるからネ、怖いよハヽヽヽ』

長篇小說畫家の自畫像



（上段右より）山川秀峰氏、細木原青起氏、尾竹竹坡氏。齋藤五百枚氏。（中段右より）岩田專太郎氏、織田長秋氏。林唯一氏。（下段右より）小早川清氏、田中比左良氏、小田富彌氏。

□文壇畫壇

○
加藤武雄氏が滿鐵會社の招聘で滿鮮視察に出掛けられた時のこと。馬に得意の先生、一行九名の先頭を切つて堂々と蒙古の天地を馬蹄に踏みにじつて、と云へば如何にも颯爽たるものであるが、何にせ永い旅で、皆んなの髭は伸び放題、垢面蓬々だつたので、馬賊と間違へられ、支那官憲隊からピストルの包圍攻撃を喰つたものだ。流石の氏もこれには、いやといふ程度膽を拔かれ、慄へながらハンヅアップしたが、辛うじて日本

I先生も今日はウンとも聲を出さず默々と執筆。病み上りのY先生のお疲れの姿に引きかへ隣りのK先生は鉢巻凛々しく目次の作製に懸命だ。F主任は、ひつきりなしの訪客攻めで應接間通ひ。電話のかゝる度に呼び戻されて轉手古舞ひ、口繪を片づけて忙中閑ありと行く雲を眺めてゐるH先生の肩を叩いて『君が羨ましいヨ』

△——混然、雜然。たゞ忙がしく勿論給仕たる僕は燕の如く一番忙がしく立廻つて、夕刻は來た。實戰に出た諸先生が續々歸つて見えると、疲れ切つてゐた樣な本部はまた賑ひかへる。『困つたワ、駄目なのヨ』と仰有る局内の紅一點N女史の悠然たる顏『トン／＼運んだヨ、荷が下りた、飲める』と哄笑される快男子T先生の破顏。皮肉な對照である。——入浴。食事。——かくて七時から別室で會議が始まつた。——おゝ今日もまた十二時過ぎになるのかなア……室に獨り取り殘された僕の口から嘆聲と欠伸が一時に漏れて出た。

人であることが通じて放免されたさうな。

『驚いたでせうね』と聞けば、あの大きな體軀を搖り動かして、『いや、實に心臟を寒うしましたよ』

○

菊池寛氏は、人一倍の子煩惱である。嘗て文壇の某作家が愛兒を疫痢で亡くされた時、『君はヒマシ油を始終家に用意してゐたかね、何ッ、持たない？　子供を持つてヒマシ油を平常用意して居らぬといふそんな親があるものか、さういふ不心得だから、可愛い子供をとられたのだ。君の責任だよ』と、大叱りに叱られたさうだ。氏に明けて八ッになる英樹君がある。勿論トテモな可愛がりやうである。だから英樹君には天下の菊池寛だつて、偉くも何んともない。」

『お父ちやん、おん馬になつてよ』

『うん、やらうか』

『下手だァ書生の方が巧いや』



○

挿繪界の流行兒、岩田專太郎畫伯の玄關の格子を開けて入つたＡ記者、

『近來スッカリ健康を損じ神經衰弱に苦しめられて思ふやう筆動かず甚だ勝手乍ら當分面會謝絕致します』

と、障子の眞中に貼紙してあつた。Ａ記者、一寸躊躇をしたが、

『御迷惑でもぜひお目にかかりたい件がありまして：

□作家の言葉





○　土師清二

私は『血ろくろ傳奇』に何を書かうとしたか。先づ第一には人間の心の深さ。それから人それ〴〵が背負つてゐる運命、――いや、かういふことは云はなくてもよいのです。作者としての私は唯懸命に書けばよいのです。

○　菊池幽芳

久し振りにキングの讀者諸君にお目にかゝります。この小說は、聰明で、勝氣で、情熱な女流聲樂家惠美子を主人公とした戀の大葛藤の物語ではありますが、その根本は千古に貫く不滅の愛を謳ひたいと思ひます。

□讀者ニュース

◇拜啓（前略）――私宅は農家で高田町を二里も離れて居りますので、毎月遙々キング買ひに出かけねばならぬのが隨分厄介でなりません。先月のごときは出掛けるのが後れたため、舟石屋書店では既に賣り切れて仕舞ひ、買ふことが出來ず困りましたが、こんな田舍にゐても早く樂に買ふ何か方法がありませうか、（後略）敬具。（福島縣大沼郡東尾岐村　武内金二）

態々二里もお出掛けになつたとは大變なことでした。いろ〳〵便宜な方法は本誌四五二頁に御座います。御覽下さい。――記者

◇私は大のキング最屓です。軍隊に居た時も休日や祭日を利用して愛讀して來ました。すべてに嚴格な軍隊でもキングだけは特に御許しがあつたばかりでなく上官は立派な修養書だと賞めて居られました。私は幸ひに四人の新キング讀者を勸誘致しました。今後も

……」と、女中に取り次ぎを強要して、さて、書斎に通つて見れば、何アんのこつたい……實は、A記者が催促に來た『血ろくろ傳奇』の挿繪の爲に人除けしてゐるんだと知れて、大笑ひ！

□樂屋ばなし

○本誌のメ切りを明日に控へた最高潮のその晩も遅くなつて、突然依頼中の某畫伯にのつぴきならぬ事故が生じて、繪が出來ぬと斷りを受けた。サア大變である。他の畫伯を煩すにしても明日といふ急に迫つてゐる今、どうしたものか、局員全部歸りもやらず思案投げ首の折柄、突然机を叩いて立ち上つたのは局内一の熱血漢T記者。「諸君、考へて居たつて始まるまい、要は實行にある。不肖ながら僕が此の一大危機を買つて出よう、難關に逢うて屁古垂れず誠と熱を以て突き進むのがキング魂である……」と演説一番、一同に蘇生の息を吹つかけて飛び出して行つたのは、既に十二時近くであつた。――T記者の熱と意氣は――キングの寶である。

○秋の大學リーグ戰が滿都の人氣を煽つてゐた頃の事、野球など問題にしさうもない詩人肌で勤儉なM記者、遂には堪りかねて傍らのU記者と野球見物をと秘かに約束したが、一日は一日と忙しくなるばかり、そのうちリーグ戰も終つて素敵な快晴の朝、何も知らないM記者『今日はぜひ行きませう』にU記者情無さげに『アーン』は嘘のやうな話。



大下宇陀兒

○大正十四年、私が處女作を世に發表して以來今日に至るまで、常に頭の中にあつた一の材料、それが五年かゝつて苦心漸く醱酵して『宙に浮く首』となつたのである。筋の面白さが主眼である。



佐々木邦

○『よくそれからそれと材料がありますネ』なぞと感心してくれる人があるが、それは大きな見當違ひだ。材料で書く作者は小説家ではなく事務家だ。生命は材料と共につきる。私は頭で書く、頭の丈夫な間は幾らでも書けさうだ。

益々開拓に努めて記者先生の御奮鬪にお酬いしたい考へです。（鳥取縣西伯郡光德村　國本俊夫）

御芳情有難く一同感佩して居ります――記者

◇キングを愛讀してより二ケ年になりますが、毎號、素晴らしい大發展を見てゐるのは實に愉快でなりません。これ皆、諸先生方の不撓の御奮鬪の賜と深く感謝して居ります。夜叉王の面白さ。春遠からずの哀れさ。大醜女物語もよい。殊に血を湧かせ肉を躍らせるのは風雲天滿双紙の痛快さだ。新年からは又々素敵な新小説が載ることでせう。期待して居ります。（愛知縣高濱町高取　神谷藤雄）



親愛なる同胞

大懸賞！「健全なる歌」大募集

社會の淨化は先づ流行歌より

詩歌ほど人の氣を移し、人の心を養ふものはない。國家の興廢はその流行歌の傾向に見て之を知るといつても過言ではない。然るに近來世に唄はるゝ流行歌たるや、輕佻浮華、俗惡野卑、心ある者の顰蹙に堪へざるところ、況や國家の中堅たる青年男女が路上之を高唱し、頑是なき小兒までが、家庭に之を口眞似するに至つては、眞に痛歎此事であります。

今や、我國は重大なる難局に際會し、國民一齊に奮起すべき時である。仍ち、先づ以て國民精神振興のため特にこゝに健全なる歌を募集いたします。

行住之を口誦めば心自ら淨く、勇氣が起り、人生が愉快になるやうな歌。家庭に之を歌へば、家庭明るくなり、工場に之を唄へば

諸君に檄す！

工場樂しくなり、到る處に愛と幸福を生むやうな歌。學校や、青年團や處女會や其他集會等で之を歌へば、意氣揚り、興國の精神を奮ひ起すやうな歌。

例へば、

○國民歌
○家庭の歌、工場の歌、田園の歌
○勞働の歌、勉學の歌、努力の歌
○誕生の歌、新婚の歌
○青年の歌、處女の歌
○娘の歌、妻の歌、母の歌
○軍歌、青年團歌、處女會歌
○朝の祈りの歌、夕の祈りの歌
○海外發展の歌
○日本の歌、日本男兒の歌、日本婦人の歌
○武道の歌、運動の歌
○等、等、等、數へ歌でも結構　都々逸、大島節、安來節、何でも以て本趣旨に副ふものならば結構。

題名、形式の如何を問はず、國民の精神を養ふあらゆる愉快な歌、明るい歌、元氣ある歌を歡迎

投稿規定

○誰にもわかりよい文句であること
○誰にも面白い、誰でも歌はずには居られぬやうなもの
○流行歌として流行性あるもの、民謠的の極くだけたものでも結構、或は既にある各種の歌なり民謠のかへ歌でも結構。
○儀式で歌ふもの、行軍で歌ふもの、働きながら歌ふもの、會合で歌ふものの何れでも結構。
○長さは……短きものでも多少長きものでも結構、但し長きも五節以内。誰でも暗記し得る範圍たること。
○締　切……昭和五年一月二十日
○發　表……本社發行雜誌五月號（昭和五年）
○當選篇の著作權は本社に歸屬す。（原稿は一切返戻せず）
○一人にて何篇投稿さるゝも可。但し一篇宛別綴のこと。

賞金

あらゆる種類の歌を通じ優秀なるものに左の賞金を贈呈

一等	壹千圓	（貳百圓宛五人）
二等	壹千圓	（百圓宛十人）
三等	壹千圓	（貳拾圓宛五十人）
四等	壹千圓	（五圓宛貳百人）
五等	壹千圓	（壹圓圖書切符千人）

宛名　東京・本郷

大日本雄辯會講談社懸賞部



闘錢術

自然に金の貯まる法

谷孫六
さしゑ 的場朝二

○節約の鰻丼

喫煙室のストーブは眞ッ赤に燒けて居た。

恰度晝休みの時間である。用度係の黑眼鏡と、霜降りの脊廣を着た出納係が、其前に立はだかつて、紫の藥罐から噴きこぼれる湯玉を面白さうに眺めて居た。

『早いね、君達は……もう濟んだのか……』

變りチョッキの工務係が小楊枝で齒をせゝりながら這入つて來た。

『節約勵行簡易食だからね』と黑眼鏡は云つた。

『簡易食つて何だい』と變りチョッキはストーブへ手を翳した。

『うどんかけ二つ……』と黑眼鏡は答へた。

『俺はバタ麵麭四半斤と牛乳一合だ』と霜降りが云つた。

『なるほど』と變りチョッキは感興の無い顔をした。

『うどんかけ二つとバタ麵麭とはどちらが營養に適すると思ふね』と霜降りは椅子を足で引摺つて來て腰を下ろした。

『營養なんか論ずる價値はないさ』と黑眼鏡も腰をかけた。

『いや、ある、大いにある、僕は何故バタぱんにするかと云ふと、第一バタにはヴエタミンAがある。パンにはヴエタミンBがある、牛乳にはカルシームがある。人體には缺くべからざる營養のみに依つて組立てられてある』と、得意な顔をした。

『君は……？』黑眼鏡は變りチョッキの顔を見上げた。

『僕は鰻丼だ、營養の方から論ずれば滿足だね』と變りチョッキは少し反つた。

『ほう、時節柄これは問題だね』と霜降りは大袈裟な顔をした。

『何故……？』と變りチョッキは云

つた。

『だつて君、我々は如何にして安價に尙且つ營養の高きものを取らうかと考へて居るんだ。それを重役連と軌を一にする鰻丼とは僭上の沙汰だ』と黑眼鏡は聊か昂奮した。

『あツはツはツは、それは違ふよ君、安價と節約とは別問題だよ、僕だつて決して豪奢な生活を高調する爲めに鰻丼を食つて居るんぢやない、目的は節約なんだ』

『なにツ、節約の爲めの鰻丼だつて……それは少しロヂツクに合はんぞ』と霜降りは怪訝な顔をした。

『合ふさ、僕は常に精力の貯蓄と云ふものを忘れないんだ、僕の健康は僕一家族の死命に關するんだからね』

『それは誰だつてさ、月給取の家庭なんてものは、働く主人が唯一の米櫃なんだもの』と霜降りは燐寸の棒を細かに折つては捨てゝ居た。

『そこで僕の鰻丼を釋明する必要があるんだ、僕は君達と違つて頗る家族が多いんだよ、五人の子供と母が一人、家内と僕で八人家族なんだ、鰻丼一個だけの營養を家族で攝るとすると大へんなことになる。いくら働くからと云つて僕一人で御馳走を食べると云ふ譯には行かんし、それかと云つて家族一同が鰻丼を食ふとしたら一回に四圓づつかゝつてしまふ。僕の晝飯が鰻丼なる所以はそこにあるんだ』



『なるほど』黑眼鏡は首を曲げた。

『しかしそれは少し詭辯らしいぞ』と霜降りは大した反對もない顔をした。

『いやあ、相變らず緊縮氣分だね』簿記係の事務服と、文書係の赤ネクタイが這入つて來た。みんなは目で挨拶した。

『近頃は寄るとさはると節約を挨拶のやうにして居るが、僕等には少し耳觸りだね』と赤ネクタイが云つた。

『さうだらう、君等のやうなモダンボーイには陰氣臭くつて不向きだらう、しかし不景氣と云ふ奴が餘儀なくさせる節約なんだから、已むを得ないさ』と黑眼鏡が云つた。

『それは事實だ、しかし僕等には其餘地がないんだよ、此上節約するには食ふことを廢めなければならないんだ』と赤ネクタイは云つた。

『その通り、我々は節約を極端にして尙且つマイナスだ、大臣が自動車を廢したつて、重役が嗇むすびを持つて來たつて恩に着る譯には行かんよ』と事務服が共鳴した。

『それは君達の平素の心掛けが悪いからだ、月給を以つて一ケ月の生計を建てよ

うとするから無理が出來る』と黒眼鏡が云つた。

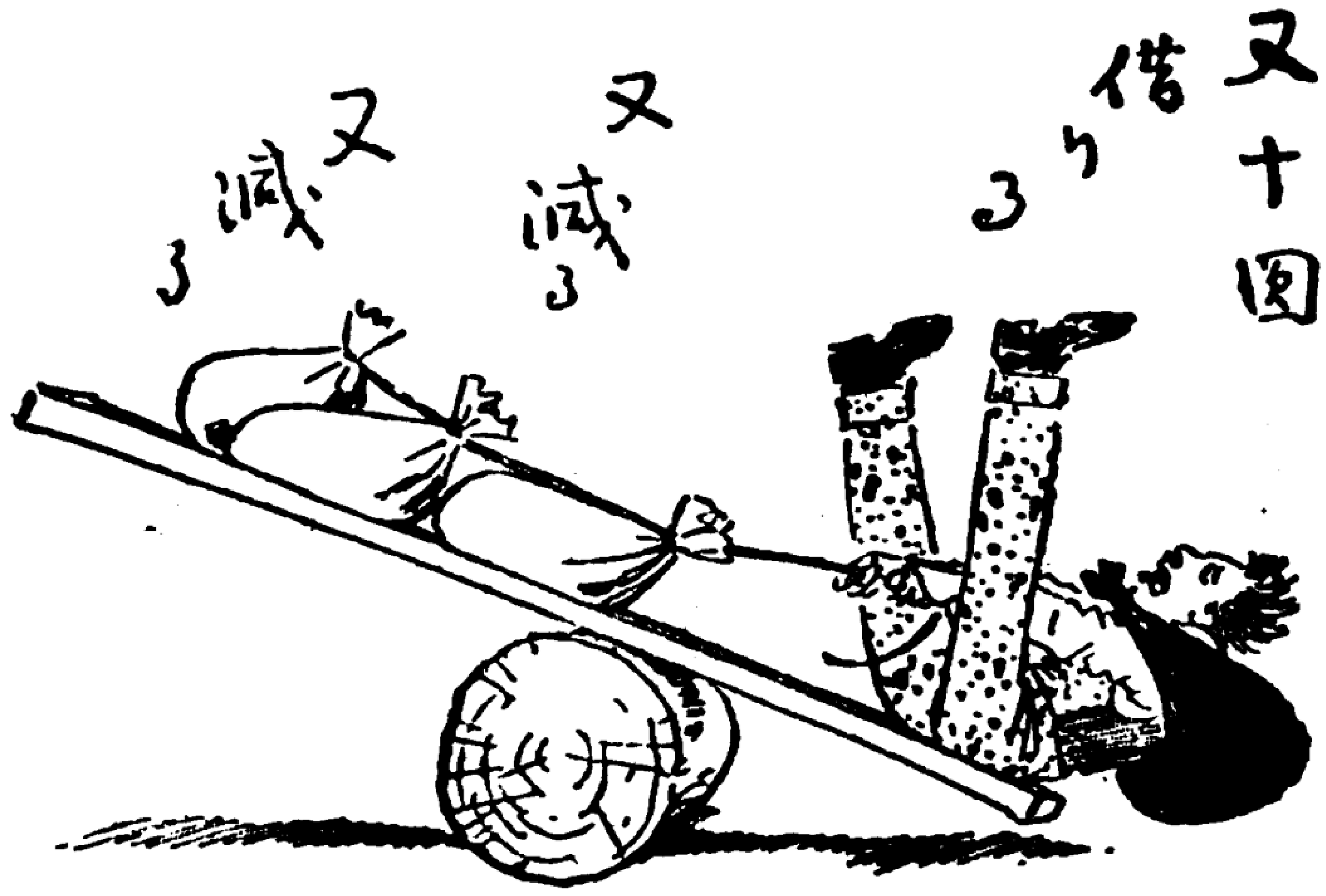
『だつて月給は生活の對照ぢやないか』

『さうだ、けれども月給を年俸に引直すと君達が心配して居る、マイナスがプラスになるんだ』と黒眼鏡は藥罐の葢を取つた。

○月給の割出し

『うふゝゝ、用度係らしいことを云ふね、どつちにしたつて同じぢやないか』と赤ネクタイは云つた。

『いや違ふ。月給と年俸とは違ふよ、君の月給が假りに八十圓とするね、さうすると一ケ年九百六十圓だ、それに年二期の賞與がある、これを一ケ月半づつとして三ケ月二百四十圓、これを合せると千二百圓になる。それを十三に割るんだ』と黒眼鏡は算盤を欲しいやうな顔をしたが、結局胸算用の眼をつぶつて、



『さうすると、一ケ月九十二圓三十錢餘りになる。それを三ケ月分合せて二百七十六圓九十錢になる。更にそれを四で割るんだ』

『恐ろしくやゝこしいんだね』と事務服が口を出した。黒眼鏡は熱心である。

『まあ默つて聞けよ。そこで約七十圓と云ふ數字が出て來るだらう、それが君の月給なんだ、七十圓の月給取りが八十圓の生活をすれば十圓足りなくなるのは當りまへのことさ』

『なるほどね』と赤ネクタイは首を曲げた。

『つまり包み紙が重たい爲めに運賃を多く拂はねばならないやうな荷造りをして居るのと同じなんだね』と黒眼鏡は冷笑するやうに反り返つた。

『しかし何の爲めに十三に割つたり四で割つたりするんだね』と事務服は疑義を挾んだ。黒眼鏡は待つてたと云ふやうな顔をして、

『それが即ち危險分散の法則と云ふ奴で、人間は何時どんな災難に逢はないとは限らない、そこで最初の十三に割つた一つは生命保險へ入る。四で割つた一つは積立てゝ置いて病氣や不時の出來ごとに備へる。もし無事に行つたら後日の活躍へ蓄積される資本だ、これさへ守れば其範圍内の生活なら、どんな贅澤をしたつて節儉貯蓄の道には叶つて居る筈だ、カフエーへも行くが宜い、晩酌もやるが宜い』と大袈裟に話した。

『チエツ、七十圓でそんな贅澤が出來ると思ふかね……しかしうまい割出しだね』と事務服は石炭を焚べた。

『ところで差當りそれをやるとして、プラスマイナスを合せる方法に困るね、洋服屋の月賦はある、取つてしまつた無盡

の掛け殘りがあるし、前借の割賦はあるし、この整理案にうまい方法はないものかしら……』と赤ネクタイは痛切なこと云つた。

『それは何でも無いさ』と今まで默つて居た霜降りが口を出した。みんなは一齊にその方へ目をやつた。霜降りは半分になつたバットを指の先で揉み消して耳へはさんだ。

『いくら働いても、年の暮になつて困るやうでは何にもならない。行詰つてしまつてから氣がついて儉約を初めたんでは、貧乏の力の方に引戻されて、しまひには自棄になつてしまふが落ちだ。生活は常に蟇口を持つて旅して居るものと考へなければならない。欲しいものがあつても無ければ買へない旅の事だ、借りて食ふことの出來ない世間だと思つて暮すが良い、ところが人間は大抵見榮坊なものだ、例へば百圓の月給取りが、突然九十圓の月給取りになつたとする。すると最初の月は足りない十圓を借りるか拂ふべきものを拂はずに百圓だけの生活をしてしまふ。其翌月になると借りた十圓は返へさなければならないから、結局九十圓の月給は八十圓の金になつてしまふ、又十圓借りる、又足りない、茲で初めて氣がついて儉約を初め、九十圓で暮らすやうに改める。今度は十圓の疵があるから八十圓になる、そこで十圓借りると次の月は七十圓になる。又改革して八十圓で暮らすやうにする。又減る、又減る、遂には借金の淵へ身投げをしなければならない。だからそんな時は百圓の收入が九十圓に減つたら、いきなり八十圓で暮らすやうに生活樣式を替へるんだ、さうすれば減る力が一の時に殖える力が一で押して行く』と腕を組んだ。

○借金の解決

『なるほど名言だね』と黒眼鏡は感服した。

『世間でもよくある奴さ、不景氣だから社員を減す、と云ふやうな簡單な考へで、一割減じて何千圓の金が浮くと云ふやうな計算を樹て、ポツ〳〵やり出す會社なんかどあるやうだが、これなどは差し汐に後すざりをするやうなもので、退けば又追かけて來る波だ、又後へさがる、又來る。結局果てしのない退步だ、社員は不安で仕事が手につかない、能率が減る、さうなると波の方は遠慮がないからね』

『この不景氣では俺達にもその波が來るんぢやないかな』と赤ネクタイは云つた。

『どうかも知れない……しかし斯樣な場合は、當事者たるもの須らく善處し、一時たりとも社員に不安の念を抱かしめざるやう心掛けねばならんね』と事務服は軒昂な肩を聳やかして鼻の下を撫で廻

した。

『いよう、課長そつくりだぞ』と赤ネクタイはまぜつ返した。

『いや、冗談ぢやないよ、節約、緊縮も必要だが、實際問題とすれば、首問題の方が痛切ぢやないか、明日より出社に及ばず候と書留速達かなんかで舞込まれた日には、あたら有能の士も臺なしだ……』と事務服は憮然とした。

『心配するなよ、誠實に働いて居るものに、簡單な理由でバッサリ來る筈はないよ』と黑眼鏡が云つた。

『しかし資本家には「都合」と云ふ好餌柄があるからね』と赤ネクタイは歩きながら云つた。

『そんな馬鹿なことがあるものか、よしんばさうなつたつて、誠實と努力があれば心配することは無いぢやないか、七千萬八千萬と殖えて來た人間が食へなくつて死んだと云ふ話は未だ曾て聞いたことが無いだらう。そんなことよりか、當面の問題は、君達の借金の整理だ、洋服屋の月賦を如何にすべきか、一ケ月溜まつた家賃をどうするかと云ふのぢやないか』と霜降りが云つた。

『無論さうだ、何か名案があるんだつたね』と赤ネクタイはくるりと踵を廻した。

『先づ一つに固めるんだね』と霜降りは、耳からバットの吸ひかけを出して火を點けた。



『と云ふと……』

事務服はストーブへ尻を向けて、首だけ霜降りの方へ廻はした。

『機會はボーナスの時が一番宜いね、ボーナスは借金の卵だと云ふ譬があるが、女房や子供は三月も前から覘ひをつけて居るんだから堪らないね』

『さう／＼、僕んとこの奴なんか、帶の片側と、フエルトの草履と、歌舞伎座の切符と、子供のセーターと靴と、そして尚餘剩があればフライパンと洋食皿へまでも及ぼさうとして居るんだ』と赤ネクタイは同感した。

『しかし指環や帶止めを諦めて居るなんか流石に緊縮氣分だね』と事務服は向き直つた。

『それは君達が惡いんだ、嘘も方便だ、今年は會社の成績も思はしくないから出るか出ないか判らない、と云ふやうな悲觀説で空氣を作つて置き、出た時に、漸くこれだけだと、ほんの一部分を提供する、さうすれば出ないと思つたものが出たんだから、喜ぶ方が多くなる』と霜降は說明した。

『つまり節約は技巧だね』と事務服は笑つた。

『さう／＼其方は若い君達の方がうまい

よ、そこで小さな借金を拂つて大きい方を殘す、……無論みんな拂つてしまへればこれに越したことは無いが……』

『大きいのを殘すつて……？　承知するかね』

『さあそれは君の腕だ、大きい方が一つなら借金と云ふものは樂なものだ、筋道さへ立てば待つて與れる、小さい奴は却却さう云ふ譯に行かんものさ、二宮金次郎と云ふ人はうまいことを云つ



て居るね、凡そ土地を開墾するに當つては、大きなる根株は後廻しにすべし、小さき方を掘り取るは容易なれども、大きなるに懸命の努力をなすは無駄なり、二年も打捨て置かば、女の力にても徐々に切り崩せるものなり、と』と霜降りは面白く節をつけて云つた。

『なるほど、これは理窟だ、二年も待つて貰へれば、樂だね』と赤ネクタイは感服した。そこへ幅廣なスコッチの洋服を着た會計課長と調査部長とが、何か話しながら這入つて來た。

○勞働者と紳士

『大分賑やかだね』と會計課長は腰を下ろした。

『まるで景氣立直し漫談會だね』と調査部長も薦められる椅子へ腰をかけた。今までの雄議は上役の手前、孰れも口の端を拭つてしまつた。群雀の中へ下りた二羽の鳥は少し手持無沙汰であつた。

『君達の惱んで居る問題の解決は、嘗てスマイルスが其勤儉論の中に於て云つて居る。經濟は人類の天性に依つて作り出されるものでない。經濟は先例と遠慮との成果で、又教育と知識との結果である。卽ち我々が知識と思想とに發達した

時、初めて勤儉となるものだ、だから勤儉なる男女を作るの最良の方法は、人を賢明ならしむることである。と云つて居る』と會計課長は云つた。

『その通りだ、僕は今の勞働者が何故賢明になり得ないかと云ふことを疑ふね。先づ彼等の收入を調べて見ると、立派な紳士として充分なのに、自ら俺は勞働者だと卑下して、右から左へ無頓着に散財してしまふ。實に惜しいやうな氣がするね、第一勞銀で一番多く取るのは機械の仕上工で、日給五圓二十八錢と云ふ標準になつて居るから、月給に直すと四日の休みを見ても二十六日間で百三十七圓二十八錢になる。さうすると專門學校や私立大學を出た人の初任給の倍にもなつて居るぢやないか。其次は旋盤工の五圓十九錢、木型工の四圓七十五錢、鍛冶工の四圓八十二錢、鑄造工の三圓八十二錢と概して機械工業の方は宜い、次に活版植字工などは三圓二十八錢と云ふ標準だから三十日として（公休支給と見て）九十八圓四十錢の月收だ、大學を出た醫學士の初任給より八圓四十錢も多い。製本工の二圓五十錢は月給にして七十五圓、市吏員と同じ資格がある。大工の九十三圓は帝大を出た技術家の初任給より十三圓も多い。石工の四圓三錢は百二十餘圓になるから、三井物產あたりで五年も勤續した帝大出の秀才でなければ取れない。莫大小の女工だつたら日給一圓二十六錢だから三十七圓八十錢になる。して見ると中學を出て三菱へ入社する人より七圓八十錢も上だ、で、生活態度を少し考慮すりや世の中は益々明るくなるだらう』と調査部長は云つた。



『しかしそれはさう一概には云へないよ、此社に其模範として立派な職工が居る、僕はいつも一つの例として話すことだが、此男の前身と來たら呑んだくれで、だらしが無くつて、何處へ行つても勤まらない、仕末に行かん奴だつた、それが今日では立派なもんだぜ』と工務係は話し初めた。

○思はぬ貯金

『其男の初任給は卅六圓だと思つた却々機敏な奴だつたが、如何せん金遣ひが荒い、卅六圓位の金は荒くなくとも直ぐなくなつてしまふ。腕もあり勉强もする男だが惜しいものだと思つて、或る日のこと僕の室へ呼んで懇々と說諭してやつた。今はそれでもよいかも知れんが、家を持ち女房を貰ひ、子供でも出來るやうになつたらどうする、それればかりでは無い若しか病氣にでもなつたら、お前は金が取れずに遣はなくてはならない。何と

かして貯金する工夫は無いかと心から心配してやつた。ところが根が賢い男だ、暫く考へて居たが、どうも私には工夫が立ちません、課長さんに名案があつたら教へて下さいと云ふんだ』

『へえ、温順しい男でしたな』

『そこで、別に名案も無いが、お前は獨身だから卅圓で生活を立て〻見ろ、それとも茲へ卅圓の月給で雇はれたと思つて一生懸命働け、と云つてやつた。前身が前身だけに、暫く考へて居たつたが、しまひには出來るか出來ぬかやつて見ませうと快諾した。結構なことだ、お前の努力が見えた時は又適宜に昇給さしてやる、とまで附加へて話してやると、彼は喜んで其日から熱心に働き初めた』

『なるほど、張合がつくんですね』と誰かゞ感服した。

『暫くして月額三圓増俸となつた。そこでそれを知らせる前に彼を招んで、お前は昨日と今日と何か身の上に變つたことが無いかと訊ねると、何もないと云ふ、よし變りがなければ話してやるが、實はお前の給料は今月から三圓上つたんだぞ、變りが無ければ矢張り三十圓で宜いだらう、と云つて今度は六圓に三圓、九圓づつの貯金をさせた。それからまた五圓上つた、其時も別に變りはないと云ふので毎月十四圓の貯金をさせた。それからまた五圓上つた、今度は十九圓の貯金になる。もうそろそろ解放してやつても宜い頃だと思つて、本人を招んで話して見ると、彼は今更ながら驚いたやうな顔をして、素晴らしいものですな、甚だ恐れ入りますが、もう暫く御面倒を願へますまいか、今度は先方から頼むやうにして彼の貯金を僕に管理さした、其後五年の後、妻を貰つたので半期毎に昇給額は本人に渡すやうになつたが、貯金は依然として續けて居る。この貯金が七年後の今日、いくらになつて居ると思つて居る』と工務係は自分のことのやうに、

『五千圓餘りだぜ……驚いたもんだね』

と附け足した。

『五千圓と云ふと立派な資本だね』と事務服は羨ましさうに云つた。

『そこで彼は禮に來たよ、そして其云ひ草が面白いぢやないか。あなたのお蔭で五千圓の貯金は公債や社債に變つて年六部の利子を産んで呉れます、月給はお蔭樣で八十圓に昇進しました、けれども今から七年前にあなたが私へ二十五圓の月給を上げて置いて下すつたと思つて居ます。年額三百圓の利子は一ヶ月廿五圓に當りますから……と云ふのさ』と工務係は見せびらかすやうに左右を見廻しながら云つた。

『い〻話だね……』と調査部長は眞面目に云つた。

『出發點でさう云ふ風に支持して下さる方があると宜いんだが、我々のやうに悲

運の過渡期に居るやうな奴は、何時まで經つても浮ばれないね』と赤ネクタイは獨り言のやうに云つた。

そこへ床屋へでも行つて來たのか、頭髮を奇麗に分けた局長が、ニコ〳〵した顏をしてやつて來た。一同はみんな起ち上つて敬意を表した。

○借金濟貯金

『お揃ひだね、何です話題は……』と局長は正面の椅子へ腰をかけて、銀のケースからオツク スホードを出して吸ひ初めた。

『時節柄の問題で、貯金研究です』と會計課長が答へた。

『いや、好題目だね、貯金大いに賛成だ、時に諸君の貯金はどの位溜つたかね』と局長は反つた。一同は顏を見合して苦笑したり顏を撫でたりした。

『さう〳〵先達僕の所へ來た妙な手紙があるよ、貯金を心懸けるものは先づ借金せよ、と云ふんだ、おい給仕茶を一杯呉れ……』と局長は股を擴げて、ストーブへ遠く手を翳した。

『へえ……？借金をして貯金をするんですか……』と調査部長は腰をかけ直した。

『さうだ、しかし此方法は其男一流の哲學でね、宜いか惡いかは判らないが、借金濟貯金と云ふのださうな、何でも其奴は八十圓か九十圓の月給を取つて居た筈だ、其奴のやり方は年一割二分で三百圓ばかりの金を借りるんだ、此頃はだんだん馴れて來て七分か八分で借りるさうだがね』と給仕が持つて來た茶を受取つて一口つけた。

『へえ……？よくそんなに安く貸す人があるものですね』と會計課長は首を曲げた。

『そりやあ貸すよ、擔保があるんだもの、しかも立派な擔保だ』

『地所ですか、家屋ですか……』と霜降りは石炭を燻べた。

『いや〳〵、そんなものぢやない。郵便貯金三百圓預入れの通帳だ、三年据置きのね……』と云つて局長は時計を出して見ながら、

『さうすると貯金の利子は五分四毛だから、八分で借りたとしても、差引二分九厘六毛と云ふ損が立つ、その損は貯金税だと云つて、時間外の努力で埋めると云ふ方針なんだ、一ヶ年に七圓四十七錢の貯金税だから一ヶ月分約六十二錢、一日分二錢强だから、今日流行の貯金玉でも間に合ふ程だ。それも二年目三年目には掛金で減つて行くからもつと少くなる。さうして此男は三年間に此三百圓を返濟すべく努力する。借りたものは返へさなければならないと云ふ心理を巧みに應用して居るんだね、三百圓を三年に返へすとすれば一ヶ年に百圓、一ヶ月八圓三十三錢だ、一日が二十七錢七厘、それへ利息を二錢と見て加へると約三十錢になる。この三十錢の捻出法だ。現に仕事を持つて居る人で、月に八圓や九圓の貯金が出來ない筈はない、と云ふのが其男の持論でね、兎に角やり通して來て居る人だから、誰にもやつて出來ないことは無いと思ふんだ』

『例の住宅組合の低利資金のやうなものですな』と霜降りは云つた。

『さう〱、あいつを現金で行つたんだ、住宅の建築などと云ふものは、五年六年のうちに境遇の變り易い月給取りには引合はんさ、最初滿足して居ても、少し出世すると其家が小さくなる。もしかの事があれば大き過ぎる。不自由なもんだ、それより現金で持つて居る方が安全だよ、何時でも役に立つんだからな…』と、しみ〲らしく云つて一同を見廻した。みんなも成程らしい顔をして目をパチ〱さした。

○物の貯蓄

『ところで諸君、貯金非なり、と云ふ問題に逢着したんだ』と局長はダイナマイトへ火を點けるやうな顔をした。



『何故ですか…』調査部長は云つた。

『いや、いま政府が夢中になつて消費節約なるものを宣傳して居るが、これは何時の時代でもやらねばならぬ生活道德なんだ。何も改まつて吹聽するには當らない。只金解禁と云ふ大仕事があるから、大いに褌を締めてかゝらなければならないと云ふので緊縮政策を眞向から振りかぶつた譯なんだ。茲に我々は活眼を開かなければならない』と、椅子を少し後へ退らして股を大きく擴げた。

『何かうまい方法があるんですか』と事務服は中腰になつた。

『そこだ、緊縮政策と云ふことは今に初

めたことではない。むかし白河樂翁、水野越前などと云ふ人が大臣になつてやつたこともある。しかし孰れも失敗に終つた。だから二宮尊德翁はうまいことを云つて居たね。たとへどんなに苦しくとも、饑饉でない限りは、五合の食を三合につめて働くべからず、食は充分に與へて六合の働きをなすべし。五合を三合につめれば、二合は殘るべけれど、人間は何かのはずみに二合以上の費えをなすものなり、とさ」

『同感ですな。バアナアドショーも云つて居ましたね、貧乏人に貯金しろつたつて出來るものぢやない、第一貯金しようと思ふことさへ大へんな過りである。つかつてしまふことが必要だ、いや、むしろ義務だ、十中の八九人までは、自分や家族やを養ふに足りるだけの金錢を持たず、彼等に貯蓄せよと說教するのは愚の骨頂だ』と赤ネクタイは云つた。

『同感だね』と事務服が云つた。

『それも一理ある』と局長は大きく點頭いて、

『ところで我々が學校時代に教はつた經濟學に、こんなことがあつたと思ふね、物價が安くなれば、金が高くなる。金が高くなれば物價が安くなる……と』

『さう／＼、それは經濟の原則だと教はりましたな』

と霜降りが云つた。

『そこで考へて見ると、經濟學は此處までなんだ、これから先は我々の工夫だ、物價が安くなつたら金が高くなるんだから、其高い金と安い物とを取かへて置けば、この次に金が安くなつて物價が高くなつた時、改めて金に取かへれば、必然的に金が殖えると云ふ結果になりはしないかな』と、みんなの顏を見廻した。

『經濟學の實際化ですな』と黑眼鏡は鼻の下をこすつた。

『さう／＼、つまり結論は貯蓄に近いものになるんだが、ひながら金を殖す法とでも云ふかな』

『なるほど……』みんなは感心した。

『つまり世の中のことは知れ切つた問題ほど判らないものなんだね』と、局長は時計を出して見た。そして又一同に、

『時に明後日の日本會館はどうだ、錢の研究會と云ふので、いろ／＼な階級の人がやるんださうだ。百萬の財產を作りたき人は來れ！と云ふビラを撒いて居たぜ！』といつた。

『百萬の財產…？』

赤ネクタイは目を丸くした。

『どうだ、みんなで行つて見ようか…』

局長は椅子を立つて、もう一度時計を出して見た。（をはり）

次號豫告

金儲け一筋道

懷ろ手で金の儲かる世界は何處にも無い。儲けるには自ら道がある。あの果しなき大海にも、鯨の通る道と、鰯の通る道があるやうに、鯨の道を鰯が通れば呑まれてしまふ虞れがある。鰯の道を鯨が通れば壞てしまふ。金儲けにも此の二つの常道がある。追分けへ立つたら右と左の指導標をはつきり見ることだ。道を失つて迷路へ辷り込んだ時、失意が生れ、失望が生ずる。それを明確に指示するのが金儲け一筋道である。

數の驚異

神代種亮

□

二十七桁の算盤があつて、全部の珠が一杯になるまで一を寄せるには何程の時間がかかるだらうか？　五日位だらうか？　假りに一珠を彈くのに一秒間かゝるとして、二十七桁目の一の珠だけを動かす時間を測つて見ると、一秒の下に零が二十六附く程の秒間かゝる。然るに一分が六十秒で、一時間が三千六百秒、一日が八萬六千四百秒、一年が



三千百五十三萬六千秒だから、其れで割ると三一七八九八四九〇六一二九三〇二一一年二二二日一九時二八秒かゝる。

何と驚くべき年數ではないか！　二十七桁目の一の珠だけに是れ程の時間がかゝるとすると、全體の珠を動かす年數は兆や億では數へられぬ程の大數となる。

□

日本一の富豪岩崎家の資産は六億圓であると云ふ。是れだけの金を五十錢銀貨で渡すから一人で數へた上で持つて歸れと言はれたら、どうだらう？



假りに一秒時間に五枚平均數へられるとして、一分間に三百枚、一時間に一萬八千枚、毎日八時間づつ數へるとして一日に十四萬四千枚だから、全部を終るには八千三百三十三日、即ち二十二年十個月三日かゝる。又、五十錢一枚は一匁三二あるから全體では百五十八萬四千貫あつて、一回に十貫目づつ一日に十回運ぶとすれば、一萬五千八百四十日即ち三十四年三個月二十五日かかる。併せて六十六年四個月二十八日、しつかり人間一生以上かゝるから、まづまづ辭退した方がよささうだ。

□

一秒間に三億メートル（三十萬キロメートル）を走る光が地球から太陽までの距離一億四千九百五十萬キロメートル（三千八百萬里）を走るのに八分十八秒三かゝる。其の光が三百六十五日間に達する距離（一光年）を單位として、天文學者の説く『大宇宙』の直徑は千八百億光年で、其の中央に我が太陽系が在るのだとすると、天の最も遠い所に在る星が今忽然光を失つたとして何年後に地球上の人類が之を知るだらうか？



1800億光年÷2=900億光年

即ち九百億光年の後に初めて分かるのである。眞に言語道斷のものは天地の廣大である。同様に偉大なるものは、科學者の頭である。

美談の華逸話の泉

慈愛の答

英國の名牧師ウエスレイが、或日某家の晩餐に招待された。何心なく弟子の一人を連れたが、此男は頗ぶる粗野な男で、恰も食卓で隣り合せて坐つた其家の娘の手に幾つかの指輪が輝やいてゐるのを見つけ、矢庭に娘の手をグイと握つて、それをウエスレイの方へさし上げて『先生、嚴粛なメソヂスト教徒の立場から見てこの手をどうお考へです。』



とやつたから堪らない、娘は眞つ赤になつた。場所が場所、虚飾を嫌ふウエスレイには迷惑千萬な質問である。が、そこは名牧師、素早く靜に微笑を浮べて云つた。『随分美しいお手ですな。』

しばらくしてから再びウエスレイの前に現はれた娘の美しい手には、自然の賦與してくれたもの以外、何の装飾も見受けられなかつた。

肩の瘤

水戸光圀に仕へた熊谷宮内は、明智光秀の臣熊谷宅右衛門の子で天性、能の名人であるが、光圀が能を所望すると何時も病氣といひ立てゝ一度も勤めない。

或日小石川の屋敷に來客があつたので『是非明日は能を一番御覧に供せよ。』と命じると、宮内何と思つたか今度は素直にお受けした。光圀、明日になつてまた作病を申立てねばよいがと思つてゐると、翌日、宮内は滿座の者が恍惚とする程美事に演つてのけた。が、今度は樂屋に入つてから病氣といつて、その後五十日餘り出仕しなかつた。

（はゝあ、そうか。）光圀は何事かを感じて、その後間もなく宮内に足輕を預け、鷹狩などには何時も召伴れた。

『そちは何故、能をせよと命じると病氣になるのぢや。』

ある時光圀が尋ねた。



『はい、武士が表藝を外にして、遊藝で君のお召に與つて居りますると、丁度肩の瘤が首を押退けたやうに心苦しく、私は能と仰せられると病氣になるのでございます。』

と答へた。

光圀ハタと膝を打ち、『ふむ流石宅右衛

門の子ぢや。』と感嘆時を久しうした。

奉行と唐崎の松

本多佐渡守、三州奉行を勤めたころの歌に、

『唐崎の松は、奉行に、さも似たり、すぐなやうでも、曲らぬはなし。』

自ら職務上の誤なからんことを戒しめたといふ。

伊藤二等卒の死

千葉縣の習志野に在る騎兵第十五聯隊に入營した二等卒伊藤均君は、最初から勤勉な模範兵として、上官に注目されてゐたが、不幸にも急性の盲腸炎に罹つて、習志野衞戍病院へ入院を命じられた。

伊藤君の殘念さは、どんなであつたらう。病院附の軍醫は時を移さず、伊藤君の右腹部を切開して、膿みたゞれてる盲腸を除き去つた。手術は終つた。が、惜しくも既に手遲れであつた。

軍醫は幾度か注射したが、何等の効がない。遂に絶望と見るほかはなかつた。

この時、奄々と斷末魔の苦しみに喘いでゐた伊藤君は、スツクと起上ると寢臺の側に直立不動の姿勢を取つた。

『伊藤、伊藤、何をする。』

『今が大事なんだ、伊藤、どうした。』

と、驚き止める軍醫や中隊附上官、戰友たちの間に立つて、今や臨終の伊藤均君の唇を衝いて出た言葉は、



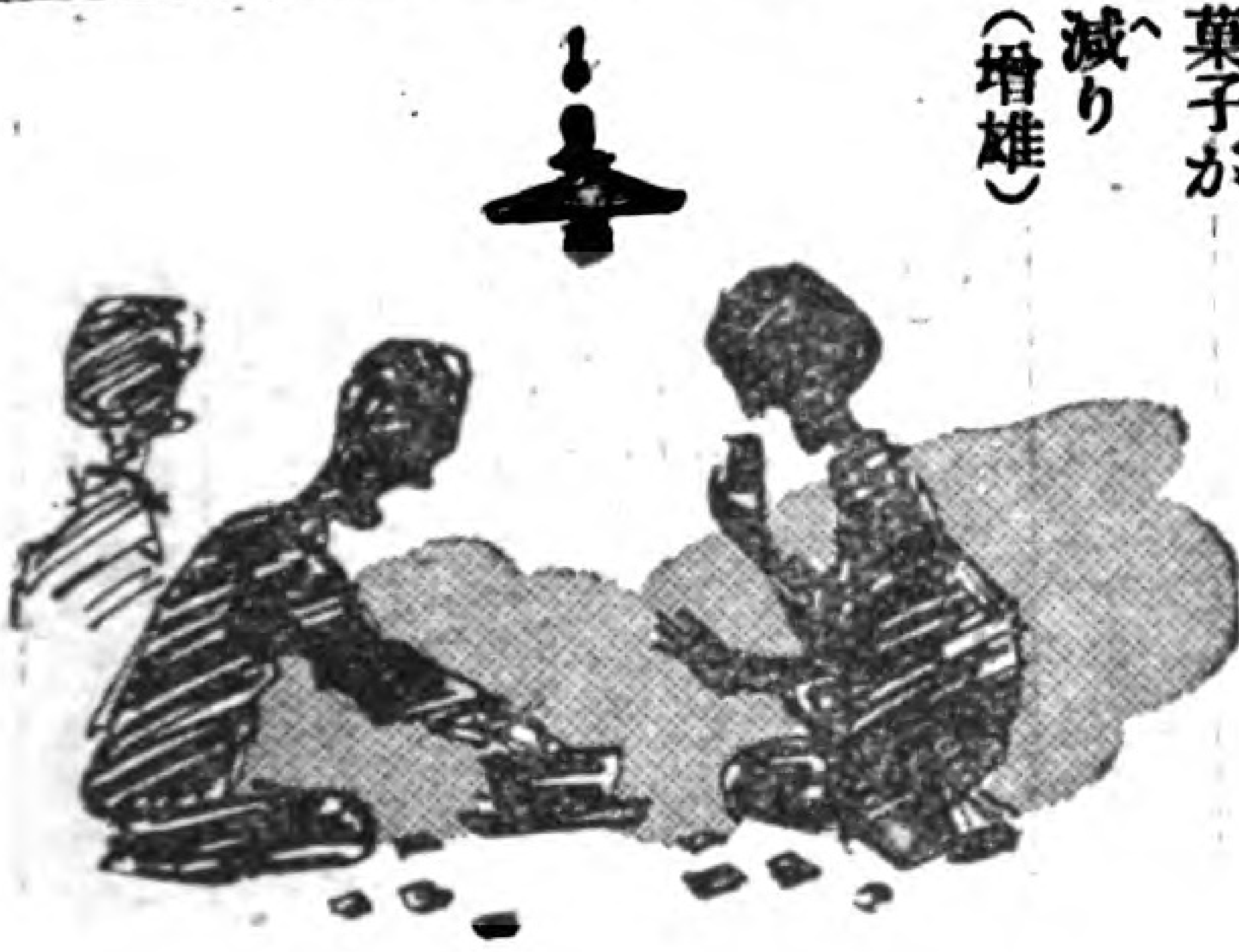
『一、軍人は忠節を盡すを本分とすべし。』

と、畏くも、軍人勅諭の第一條であつた。

はつきりと、朗々と、勅諭の第一條を諳誦した伊藤君は、やがて細り行く聲と共に、『君が代』を唱へ、唱へ終ると共に息絶えて眠るが如く此の世に告別した。我が伊藤均君の護國の精神は、眞に帝國軍人の龜鑑であらう。



仕合せを朝日へ
拝む共稼ぎ
（紫吻）



歌留多會
停電の間に
菓子が
減り
（増雄）



姉となる力
乳母車
が動き
（紫吻）



人雪崩れ
子が居ます
よと必死なり
（櫻月）



路地の暗
窓明けて
やる落し物
（初太郎）



松の内犬
に吠えられ
獅子は
逃げ
（清）



ソラ御出
で子は家
中を綱渡
り
（花笑）



慾ばつた
お雑煮咽
喉で
スト
ップ
し
（青柿）

川柳漫畫　素文



勝角力倒れた敵を引起し（公雄）



金的を當てた大弓反り返り（正治）



股倉火もう直せない裾が焼け（吐雲坊）



注意され生徒揃うて鼻すゝり（幾之助）



花嫁は先づ智慧よりも顏見られ（臥龍）



魚釣りを覗けば叱る空バケツ（呑天坊）



髪がよく出來てお辭儀を腰でする（たけじ）



百打てば御褒美の出る父の肩（天命）



聽け！彼の聲は天の聲だ、見よ！彼の事業は神の事業だ。これこそ眞に萬人の胸を打つ活物語！天下悉く來つてこれを讀め！

二宮尊德

武者小路實篤
尾竹竹坡畫

之はたゞごとではない

それから二年たつた。

彼はその間にも方々からたのまれて個人の家や、村のために働いた。又どうすればいゝか相談にもなり、金の融通もして助けられるものは助けた。目醫者には目のわるいものがおしよせ、齒醫者には齒のわるいものが集るやうに、彼の處にはつぶれかけた家の人や、村の人がやつて來た。よその藩主からもたのまれた。彼はさう云ふ時、出來るだけそれ等を助けるために骨折つた。彼の診斷はいつも正確だつた。どんな名醫よりもはつ切り彼は病源を知り、養生の仕方を知つてゐた。病人が不養生せずに彼の云ふ通り努力を惜まなかつたら、必ず病人はなほつた。

天保四年の夏の始め、彼が四十七の時、宇都宮で食事をしてゐた。そして彼はお膳につけてある茄子をたべた。彼は之は不思議だと思つた。初夏の茄子なのに秋茄子の味がする。之は一通りのことではない。

その時分は天候不順であり、よく雨がふつた。しかし彼は今迄に初夏の茄子の味が、秋茄子の味がするなぞと云ふことは聞いたこともなかつた。之には何か理由があるにちがひないと思つた。

彼は考へることの好きな男だ、之はもう夏がすぎて秋が來たにちがひない。人間は氣がつかないが、草木はそれを知つてゐるにちがひない。彼はすぐ家をとび出した。そして田圃に出て稻をしらべたり、道傍にある草をぬいて見たりした。彼はどの草も稻も同じやうに葉のさきがおとろへてゐるのに氣がついた。根はあたりまへだつた。

彼はそこでかう思つた。

土のなかはまだ夏だが、地上にはもう秋が來てゐるのだ。之はたゞごとではない。必ず彼がいつも恐れてゐた、饑饉がやつてくるにちがひない。そしてそれにはどうしたらいゝか。地下はまだ平年と同じだ。地下で出來るものをつくるより仕方がない。

それで彼は彼の知つてゐる人人に饑饉のくる恐れがあることを知らせ、芋、大根、蕪青なぞをつくらせ、毎戸に一段歩の稗をゆるして、稗を蒔くことをすゝめた。

人々はそれを聞いて、

『金次郎はとう／＼氣がちがつた』と思つた。

『そんなことがわかるわけはない。しかし税がゆるされ、背くと又怒られるから、仕方がないから稗をつくつてやれ』

と云ふので三村の人々は嘲笑しながらもやむを得ず、金次郎

二宮尊德を讃す

復興局長官　中川　望

二宮翁の報德の教は、所謂興國安民の大法で、道德と經濟との調和を實踐的に祖述した眞に獨創的の哲學であり、單に一時代の產物でなく永遠の生命ある哲理の唱道である。さればこそ翁の教は廣く世界的に研究せられ、近時はロータリアンの間にも論議せらるゝに至つた。翁の地位は、今や小田原在の一寒村から一躍世界歷史の檜舞臺に登場したのである。而して翁の一生は、實に平民的な日本人として極めて筆太に力強く描かれた偉大なる印象であり深甚な感激である。

武者小路氏が夙に翁に心服し、こゝに『二宮尊德』を稿するに至つたのは洵に其人を得たるもので、恰も名優が其妙技を舞臺に演ずるが如く、氏の面目紙上に躍如たるものあるは眞に痛快に堪へない。世の青年子女は固より一般世人を動かす事極めて大なるものあるを信ずる。予は氏の勞を謝すると共に、切に其大成を祈つて止まぬものである。

の云ふことをきいた。

處が、天候は金次郎の思ふ通りだつた。夏の盛りでも雨が多く秋らしい冷しさが早く來た。關東と奧州の一帶に飢ゑた者は多かつたが三村では稗をつくつたので誰も飢ゑたものはなかつた。人々はあとになつて驚いた。しかし二宮金次郎は得意にはならなかつた。彼は自分の恐れてゐる饑饉はまだ來なかつたことを知つてゐた。今年この位なら來年は又もつとひどい饑饉がくるかも知れないと思つた。彼は天運がめぐつてくることを知つてゐた。饑饉がくるにも時があることを知つてゐた、遲くも五六十年に早くば三四十年で饑饉がやつてくるのが例であることを知つてゐた。

それで彼は人々に云つた。

『今年は思つた程ひどくなかつた、だから近い内にもつとひどいのがくるであらう。だから今年から三年の間畠の稅は一切許すから、稗をつくるやうにするがい〻』

人々は金次郎を信じてゐた。それで稗をつくることに骨折つた。三年に數千石稗がとれた。

金次郎はよろこんでそれを饑饉の用意にたくはへさした。



人々は饑饉がやつて來ないので、金次郎を再び疑ひ出した。饑饉は來ないですみさうに見えた。だが四年目になつて、恐ろしい饑饉がやつて來た。

五月から八月の間、北風が吹きすさみ、膚を切るやうで、皆厚着して夏をすごした。雨もよく降つた。餓死にするものが方々に出て死骸が道に横はつた。しかし三村は、金次郎が云ふことを聞いたので用意が出來てゐた。金次郎は立ち上つた。そして三村の內を一軒ごとに調べて步き、そして無難のものと、中難のものと、極難ものの三つにわけて、老少男女の區別なく一人あて雜穀を交へて五俵づつとなし、その數に滿たない者は之を補なつた。だから貧者は豐年の時よりも、なほ安心して食ふことが出來た。

しかし金次郎はそれだけで滿足しなかつた。『今年の饑饉では數萬人が餓死



した。君達は一人も飢ゑる心配がない。しかしたゞあんかんと食べるのでは冥罰が恐ろしい。だから朝は未明から起き、繩を索ひ、田畠に力をつくして來年のための用意をし、夜はまた繩をなつたり、筵打つたりして、來年は一層働けるやうに骨折らなければならない。飢ゑ死にしたことを思へばその位ゐなことはなんでもないことだ』

金次郎の云ふ言葉には權威があつた。人々は生命の恩人の云ふことをきいて、働んだ。そして背て日本でも一番貧乏な村だつた處が、今は一番安心な村になつた。一人の人の力もつよいものではないか。日本全國が金次郎の云ふことをきいたら、饑饉もこはくなかつたにちがひない。實に徹底した饑饉のすくひ方である。村全體が生るやり方だ。誰も感心しないわけにはゆかなかつた。



便所

又或る日二宮の僕が物井村に使ひにいつた時、途中で大便がしたくなつた。それで近くの農家の某の便所をかりた。處がその便所がすばらしい便所で竹でさゝへられてやつとくづれないやうになつてゐた。それを知らずに二宮の僕がその竹にさはると、倒れて家根がおちた。

その家の主人の某は怒つて、

『よくも俺の便所をこはしたな、たゞはおかないぞ』と云つて棒をもつて僕を打たうとした。僕はおどろいて二宮の居る陣屋に逃げて來た。某はそれを逐つてやつて來て、

『ひとの便所をこはして逃げる奴は許してはおけない、出してくれ、思ひ知らせてやるから』

それで他の人がなだめようと思つて、

『あれは二宮樣の僕だから』

と云つたら、なほ怒つて、

『二宮の僕ならなほ承知は出來ない』と云つた。

某は前からならずもので、二宮にはよく思はれてゐなか

つた。某は酒のみで、怠けものだつた。
金次郎はそのさわぎをきいて、
『どうしたのだ』と言つた。
そしてその理由を知つたら、すぐその男に逢ひたいからつれて來てほしいと云つた。
某は怒つて金次郎の前に出た。
『あなたの僕のために便所をこはされたのです。どうしてくれます。あなたは私の所に便所がなくつてもいゝと思つて、わざとおこはさせになつたのですか』
金次郎は笑つて云つた。
『便所をこはしたのはたしかに、私がわるかつたのです。しかし一寸さはつたぐらゐで倒れる便所だつたら、本家も隨分いたんでゐるでせう』
『そんなことは云はなくたつてわかつてゐる。どうせ俺は貧乏人で、家なんかたてられる人間ぢやないのだから』
『よろしい。それなら一つ便所をなほすついでに本家もなほしてあげませう』
某はびつくりしてしまつた。
『いや家までなほして戴かないでもいゝのです』
『いや、ついでになほして上げませう』



某はもう腹をたてるわけにはゆかなかつた。彼はうれしくなつてしまつたのだ。
『さうして戴けば、こんなうれしいことはありません』
『さうなれば私の僕があなたの便所をこはしたこともわるくないことになるでせう』
『それはさうで御さいます』
『それではすぐ歸つて、家をたてる用意をしておきなさい』
某はうれしくなつて歸つて行つた。
それから間もなく金次郎が差圖して長さ八間横三間の新しい家がつくられた。某はすつかりうれしくなり、ありがたくなり、心がけをなほして働き出した。
そして一生、その話をしては涙をながした。
金次郎は家をなほしただけではなく、人間の心もなほしたのだつた。（つゞく）

お正月の縁起

神代種亮

□古人の心

正月の膳に上すものを一つ一つ數へて見ると、必ずしも味の勝れたものではない。素より珍奇なものでもない。

「數の子」も元は「かどの子」とも云つたもので「かど」は鯡の古名である。人生の生々發展を祝つて「數の子」と唱へて特に正月の祝儀に使ふのである。

煮豆も眞實健全の言葉に因んだものらしい。鯷の乾したものを「ごまめ」と呼ぶので、言葉の緣起から芽出度いものに數へるのであらう。農家で「ごまめ」を「田作り」と呼ぶのも、肥料にも用ゐる鰯だからなのであらう。



「煮豆」「ごまめ」「數の子」孰れも價低く、數の多いものであり、遠方へも運び易いものであり、腐敗し難いものであつて、交通不便であつた時代にも是等の食品ならば全國何處でも求め易くて、上下一同が之れを以て新年を祝はれるのである。斯う考へて來ると、正月の平凡な食品にも先人の深い心から此の貴い風習が形作られたのだと思ふのである。

お飾に橙の實を載せて「讓り葉」を敷くのは「代々を讓る」と云ふ緣起から出たものであるらしいが、「讓り葉」にしても「裏白の葉」にしても、又は總じて神前に立てる榊にしても、孰れも生活の實用には供し難い草木であつて、言はば「無用の物を有用に轉

◇正月字引

△松の內。門松は昔江戸では正月十四日まで立てゝ置いたのであるが、其の後七日の朝に取拂ふことになり、寛文以後は六日の夕方之を取拂つて其の跡の穴へ松の小枝を挿して置くやうになつたので、今では正月六日までを謂ふのである。

△屠蘇散。白朮、桔梗、山椒、防風、肉桂、大黃、小豆を刻み合せて紅絹の嚢に入れたもの。

△雜煮。昔は臟腑を保養するものと云ふので、昆布、打鮑、煎海鼠、牛蒡、栗、山薯、鯣、大根、ごまめ、いもし、らきな、其の他種々の物を入れたと云ふ。

△七草。芹、薺（さみせんぐさ）御行（はこぐさ）蘩蔞、佛座（かはらけな、又田平子）菘、蘿蔔（大根）の七種の菜。

△注連飾。飾繩とも云ふ。左繩に縒るのは左を清淨とする舊習に依るもので、端を切らないのは素直な心を示すものだと云ふ。

△蓬萊。一名を喰積とも云ふ。三方に似て四面に穴のある臺の四方に白紙を敷き、裏白、

ずる」所に古人の用意があるのかとも考へられる。

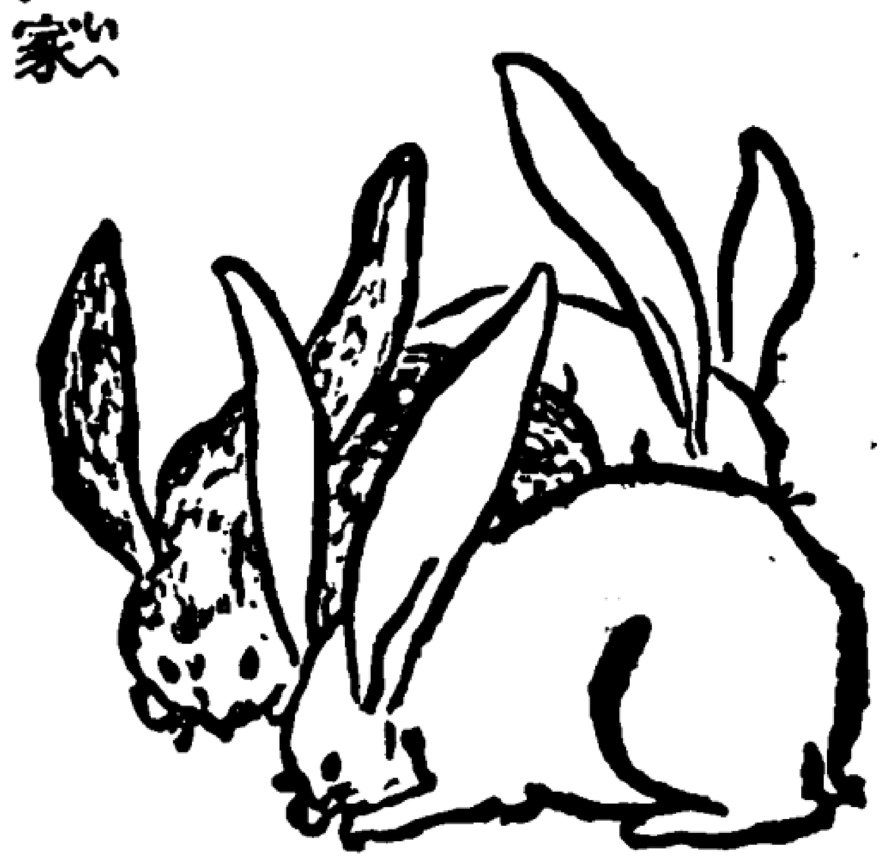
年中行事や風俗習慣を一々故事附けて解釋するにも及ばないけれども、良い意味を含ませて解釋することは大切であると思ふ。元日の來客に膳を出す時に「何處も同じまづい物ばかりで」と言つて挨拶するよりも「お芽出度いお膳を」と言ふ所に正月氣分が湧くのである。

□兎は鳥

農家では舊暦の八月朔日を八朔と唱へて其の年の出來秋を祝ふ習はしであるが、江戸では恰も天正十八年八月一日に家康が入國したので「權現樣御入國」の日として祝つてゐた。正月にも同じく徳川家と結び着いてゐるものに兎がある。

昔徳川家の先祖が上州世良田を出てから三河の國へ落ちつく間の事であるが、家康から何代か前の先祖が信州の山中で年越しをした。片田舍のことだから是ぞと云つて正月の肴に用ゐる物が無い。山にゐる鳥でもと思つて獵師に命じたけれども、生憎と鳥が捕れなくて、やつと兎が一つ獲られた。併し神事には四足と云つて獸を用ひぬのが古例である。乃で已むを得ず其の兎を鳥に見立てて正月の祝ひに用ゐたのが始まりで、後々まで徳川家では祖先の簡素な生活を記念する意も含めて兎を正月の膳に用ゐるのが例になつたさうである。一説には、徳川氏の先祖が凱旋の祝ひに兎を肴にしたのが起りだと言ふ。

兎は獸類の中でも肉味が淡泊であり、胸部の構造が鳥に近いと云ふので、今でも全國一樣に獵師仲間では一羽二羽と數へて、一匹二匹とは言はないのであるが、是も徳川家で鳥の仲間に扱つて來たのに由るのかも知れぬ。科學的でない所が傳説の面白い所である。



[illegible]を四隅へ出し、白米を盛り、中央の臺に水引で結はへた小松を立てゝ其の傍に伊勢海老を立てかけ、周りに馬尾藻、[illegible]、勝栗、野老、串柿、蜜柑、[illegible]、熨斗昆布などを飾つたもの。

△鏡餅。蓬萊の白米を二た重ねの餅に代へたやうなもの。昔は正月二十日、後世は正月十一日に之を庖刀で切らずに手で碎いて食つたものである。それを鏡開きと云ふ。

△左義長。「とんど」とも云ふ。正月十五日に門松や注連飾を燒くこと。

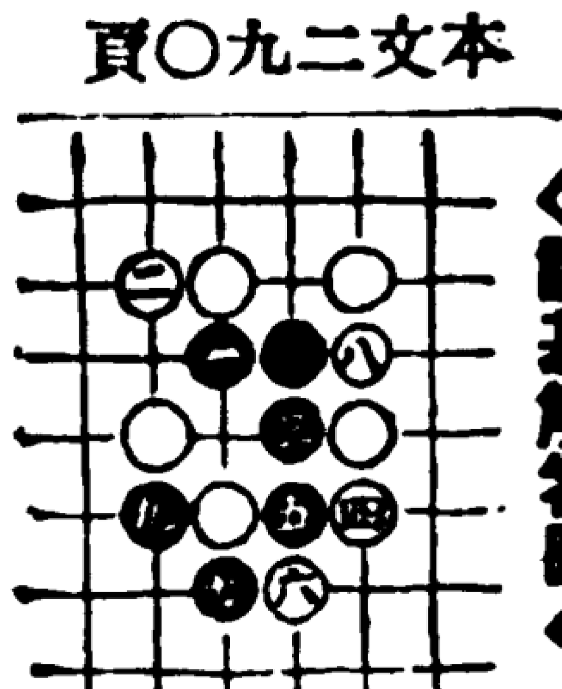
△藪入。勞働問題の起らなかつた以前は、正月十五日十六日は奉公人がお盆と併せて一年二度の公休日であつた。語源は「田舍へ歸省する」の意であらうか。

△小豆粥。關西では「餅の粥」とも云ふ。赤小豆に餅を入れた粥で、正月十五日辰の刻に食べると年中の邪氣を除くと云ふ。

娯樂室解答

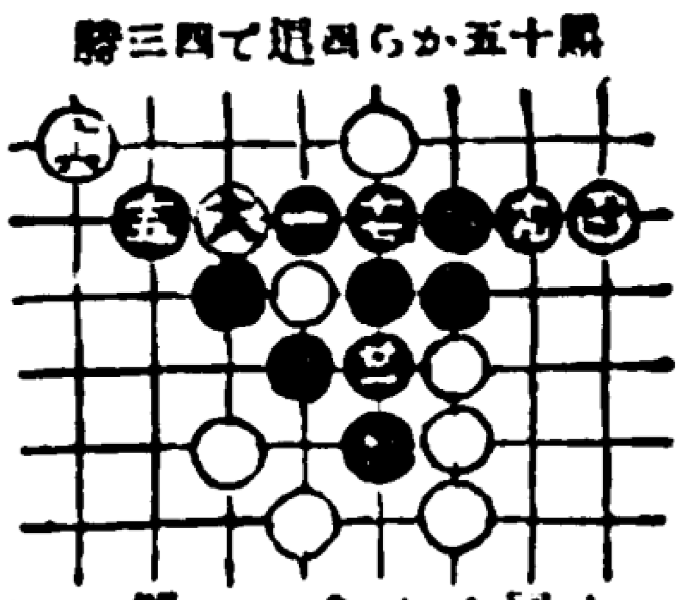
本文二九〇頁

◇詰碁解答圖◇



◇聯珠解答五◇

黒十五から四追て四三勝

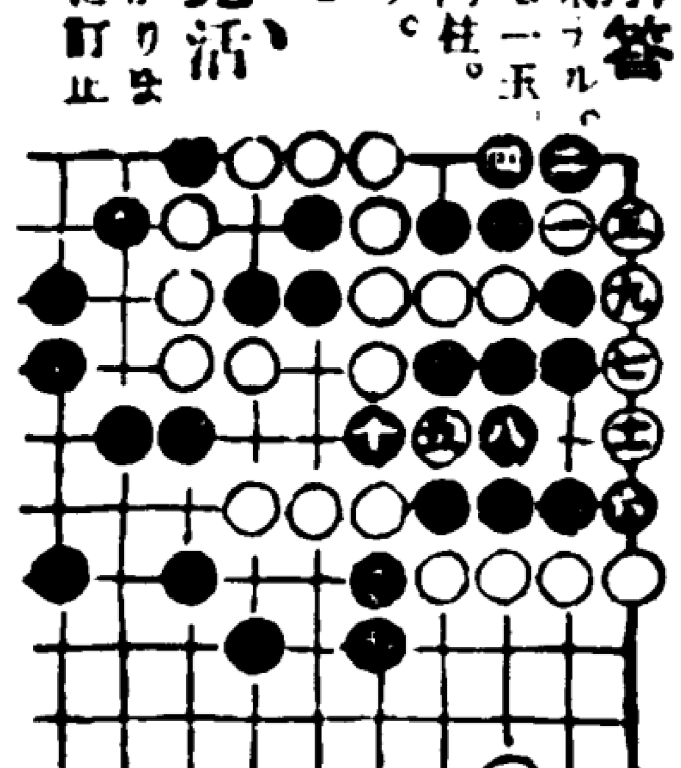


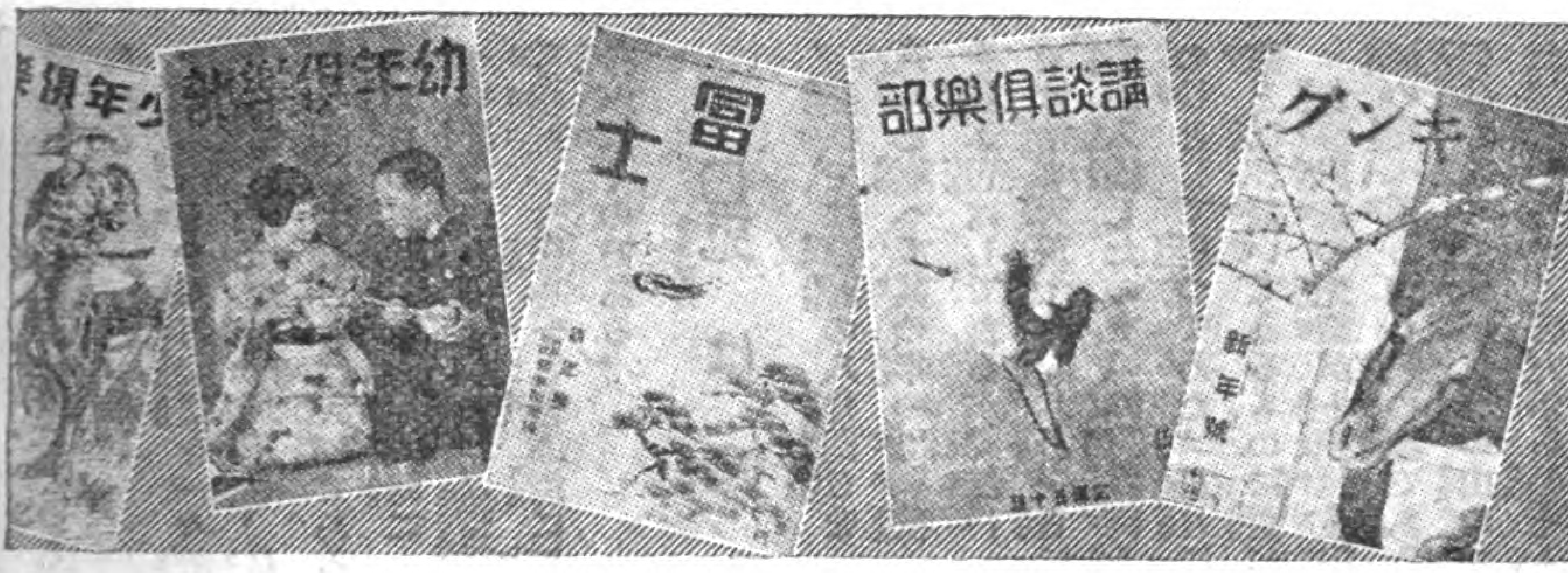
◇詰將棋解答

六一銀、同角、八二飛ナル、同玉、七四桂上ル、七一玉、六三桂打、同角、同桂、七二玉、八一角マデ。

◇十一月號の詰碁は白先活

解答圖に不備の點がりましたので本圖の樣に訂正いたします。





親愛なる愛讀者皆々樣へ

過去一年、本社の業績を報告し
併せて、滿天下のお教へを仰ぐ

本誌記者一同

親愛なる愛讀者皆々樣。昭和五年の新春を迎ふるに際し、こゝに渾身の熱誠を以て、過去一年に於ける小社の業績の大要を報告すると同時に、更に將來の抱負計畫を披瀝して皆々樣の御贊同御助援を仰ぎたいと存じます。

九大雜誌新年號、四百八十萬部

お蔭樣、全く御蔭樣です。滿天下本社愛讀者皆々樣、各方面識者文豪諸名士、國を擧げての熱烈の御援助により、本社の諸事業はいよ〳〵隆盛に隆盛を加へて參りました。

世は不景氣の聲に終始した昭和四年度に於て、本社の雜誌は相變らずめき〳〵と伸びて參りました。去る八九十月號邊りは、增刷しても〳〵尙大不足、愛讀者から、全國書店から大變なお小言を頂戴したやうな次第でした。

昭和四年度の新年號は四百二十三萬部。之を積めば富士山の三十二倍、之を並ぶれば下關から、



仙臺の先まで届くといふ世間驚嘆の大部數でありましたが、昭和五年度の新年號は、更にこれに約六十萬部を加へて四百八十萬部といふ凄まじい大部數となりました。高さはやがて富士山の四十倍にも達すべく、汽車は仙臺より更に伸びて盛岡を越ゆるの有樣であります。

顧みて、本社創業の年、明治四十三年二月、雄辯創刊號一萬三千部が賣切れて狂喜した時、更にこれに引續く幾年か、不況＊のドン底に血みどろになつて、難戰苦闘をつゞけて居つたあの時に比ぶれば、今昔、眞に感慨に堪へぬものがあります。



最近の野間本社々長

目覺ましき出版部の大活動

雜誌ばかりではない、單行本に於ても異數の活動を致しました。東京四大元取次店の聲を聞くに、昭和四年度に於て、今日（十一月五日）までに最もよく賣れた單行本は

第一、鶴見祐輔氏の『母』。第二、谷孫六氏の『岡辰押切帳』。第三、澤田謙氏の『エヂソン傳』といふことでありますが、右の各著悉く本社の出版で、何れも御承知のやうな大盛況、『母』の如きは七月發賣以來既に三百二十版を越ゆるといふ騷ぎ！　而して之に引續き發賣目下大賣行中の鶴見氏の小說第二作『最後の舞踏』これ亦大好評にて或は前三者の壘を摩するに至るかも知れません。



右第一編輯室、左第二編輯室の一部

右の外、佐々木邦氏の『脱線息子』佐々木味津三氏の『右門捕物帖』等を始め快著十幾種、悉く大歡迎を受け、更に新春早々、又々一大名著の大提供を準備して居ります。

光榮に輝く全集部の大事業

更に全集部――御大典記念として始めた三大全集『大日本史』十七卷、『修養全集』十二卷、『講談全集』十二卷、何れも號一號と善美を加へ終始大好評裡に配本完了のことは既報の通りでありますが、驚くべきことには、現今全集界の例を破つて、殆ど解約者の例を見なかつたばかりでなく、その古本は既にプレミアムをつけられ、大日本史の如きは、豫約價三十五圓のもの今や到る處五十圓以上の値を稱へらるゝに至つて居ります。斯の如きは、眞に本社の奉仕的精神が具體的に世に認められた一例として一同私に欣快とするところであります。

かくて、本社の全集には既に絶大の信用が置かれ、『講談全集』の姉妹全集として募集した『落語全集』の如きも、宣傳等は極めて控へ目に致しましたにも拘らず、申込殺到、之亦、昭和四年度全集界に於て飛び抜けて第一位の大部數を得ましたこと書店の異口同音に證する所であります。

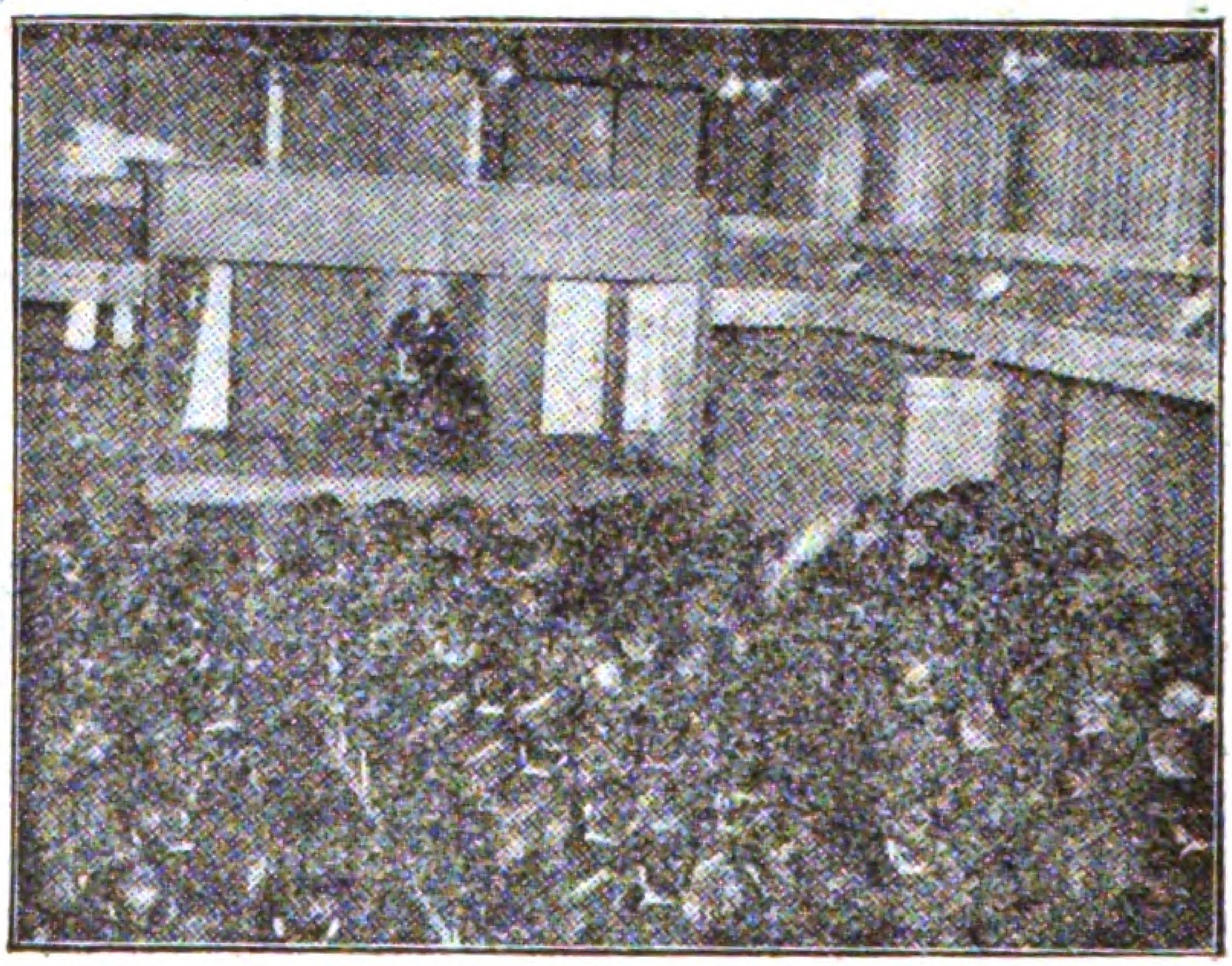
代理部の發展

雜誌に於て第一、單行本に於て第一、全集に於て第一――私共は徒に第一を誇らうといふやうな考へは毛頭ありません。只私共の赤誠が世に容れられ幸にここまで達し得たことを喜ぶのであります。



右、宣傳營業室、左、會計室の一部

更にもう一つの私共の事業たる代理部——小社が代理部を設けたのは比較的近年の事に屬しますが、之は本社が愛讀者皆々様に代つて、本當によい品、御重寶の品を選定し、お取次をいたしました結果、之れ亦皆々様より絶大の信用を博し、その取扱個數の如きも年々に激増、大正十年二萬二千五百九十七個、昭和元年度三十五萬一千二百五十六個、昭和四年度は六十八萬個以上に達する見込であります。素より、代理部は私共にとつては副業ではありますが、幸に雜誌を通じて讀者皆々様の御便宜を圖ることが出來るのは、私共の衷心の悅びとするところであつて、いよ〳〵この*方面にも力を注ぎ、皆々様の御利用を願ひたいと思つて居ります。



帝國ホテルに於ける社員大會の一景

世の中の建て直しに

かくして年々歳々、發展又發展、今年度に於ては更に一段の大活躍をと願つて居ります。

申す迄もなく日本は今大切の時、この時この際、私共雜誌の使命は一層重大なるを覺えます。

及ばず乍ら、九大雜誌を通じ、いよ〳〵道徳を興し、いよ〳〵知識を廣め、或は希望の光となり、或は激勵の力となり、人といふ人悉く立派になり、家といふ家悉く幸福になるやう、あらん限りの努力を傾け盡したいと期して居ります。



右、少年部劍道・左、寄宿舍の一部

明治維新に際し、頼山陽の日本外史がいかに志士の力となつたことでせう。我等微力ではありますが、わが九大雜誌を中心とし、洽く天下の志士仁人諸賢の御援助を得て眞劍熱烈、この事に當るならば、國難打開は困難にあらず、日本の前途洋々として彌ゝ光明に輝くでありませう。

先づその一端として、この新年號より、本社九大雜誌くつわを揃へ『眞劍宣傳』を致し、更に、大懸賞を以て『健全なる歌』の大募集を開始いたしました。冀くは愛讀者諸君、皇國の爲、同胞の爲、滿天下に良風美俗を興すべく、一肌拔いで御俠援、切願に堪へない次第であります。

尚又、昨年本社創立二十週年記念社會奉仕事業として開設いたしました『巡回雄辯法講座』並に『巡回修養講座』の二講座は、お蔭樣で到る處大歡迎、本年度に入り更に大活動を期して居ります。

ぼろ社屋――團子坂の不夜城

社員の數も漸次增加して參りました。現在總數五百六十二名、多しとはいへないが、これ悉く雜誌報國の戰士、『渾然一體』、『誠實勤勉』、『縱横考慮』の三大社是の下に、社長を始め社員一同、火のやうな活動をつゞけて居ります。

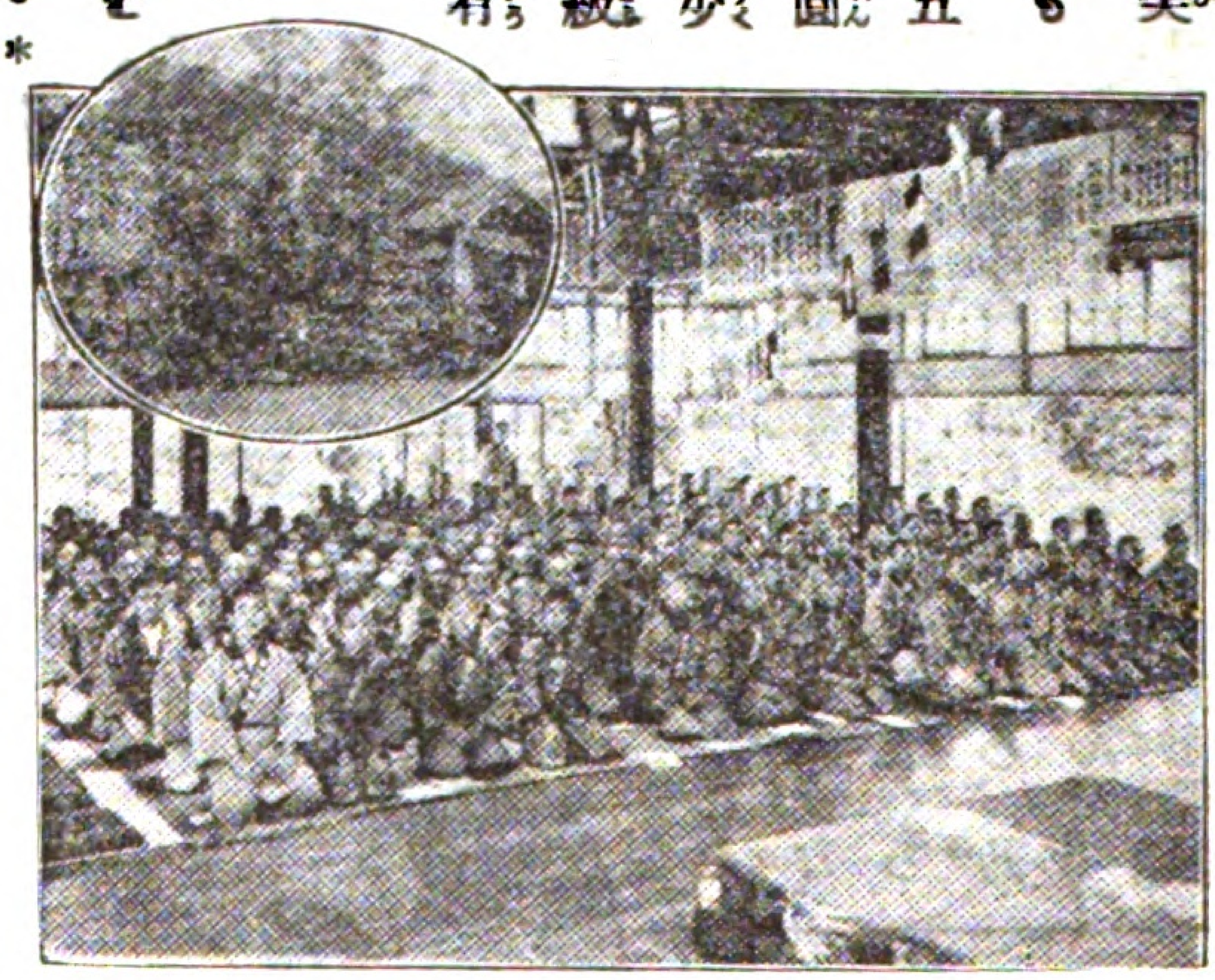
朝早いは七時から出勤。夜は十時十一時までやつてゐる。遲きは夜半を過ぐる一時二時、徹夜する者もある。日曜もなければ休日もない。あるものは只社業。只雜誌。團子坂の一隅、年々の增築又增築で、凸凹した三階建の古社屋、ツギハギと凸凹の點に於て之も日本一だらうなぞと冷笑されて居りますが、電燈だけはいつも煌々と輝いてゐますので團子坂の不夜城だと威張りきつて居ります。

少年部の總數二百二十四名。野間社長が、人物養成の目的を以て特設した實學修養團です。



右、少年部社業手傳。左、農作

社業の手傳をやり、或は畑の耕作をやり、或は劍道をやり、或は修養會をやり、身體を鍛へ精神を練つて居ります。多くは小學校の卒業者ですが、めき〳〵と上達し、その幹部のものは實力に於て大學卒業以上と稱せられ、既に社員に登用した者は二十六名、何れも社の重要なる任務に當り、中には若くして一部一雜誌の主任となつてゐる者もあります。給與等も實力に隨つて與へる方針であつて、旁々各自勤險の美風眞に賞すべきものあり、入社後五六年にして一千圓以上の貯金者も少なからず、幹部級には五六千圓を有する者もあります。將來この中から大人物の輩出を期して居ります。＊



晉羽社長邸間野道場に集つた少年部の一部

＊滿天下の御敎へを仰ぐ

顧みれば、小社創業以來、今年恰も二十一年目、今まではホンの創業時代、仕事はいよ〳〵是からです。一同及ばず乍ら眞劍努力、又眞劍努力、素志の貫徹に邁進したい考へであります。

雜誌もいよ〳〵良くしたい、雜誌の數も加へたい。良い單行本全集も出したい。代理部はいよいよ皆々樣の良き手足として働かして頂きたい。

冀くはわが愛讀者諸賢の何かと御氣付のことは敎へて頂きたい。悪いところは叱つて頂きたい。私共は如何なる小言と雖も神の聲として之を聞き、愼重審議、研究に研究を重ね、御國の爲、同胞の爲微力を捧げたい念願、是非々々此上とも御同情御援助呉々も御願申上げます。

落語 二人癖

春風亭柳橋
桂小文治 共演

相變らずお笑ひを伺ひます。十人寄れば氣は十色とか、御氣性といふものはめいめいに變るもので、從つてまたそれぞれお癖のあるものでございます。人として癖のないお方は御一名もありませんさうで。人毎に一ツの癖はあるものを、我にもゆるせ敷島の道。無くて七癖、有つて四十八癖なんてことを云ひます。手眞似をしなければ話が出來ないなんていふ方があるかと思ふと、また疊のケバをむしる。あるひは鼻糞を丸めて丸薬を製造するといふ、これはあまりいゝ癖ではごさいません。中にはまたお口にお癖のあるお方がございます。八『おい、そこへ行くのは熊ぢやアねえかい』熊『イヨー、どうしたい』八『久しく會はなかつたな。どうだ、雨で仕事は休みだし、久振りで顔を合はせたんだ。ちよいと新しい魚か何かで一杯飲みてえな』熊『何を言ひやアがるんだ、本當に。お前は何かといふと飲みてえといふけれどもね。何しろ、から景氣が悪くちやアつまらねえ』八『不景氣なことを言ふない。景氣が悪くてつまらねえなんと云つて、箆棒奴、此方は酒が無くちやアゐられねえんだからな。何しろ、乃公なんぞは肴なんぞは何でもいゝんだ。この間なんぞはちよいとね、乙な砂糖飴がありやがつたからな、それからまア、こいつで一つ飲んぢやつたが、一杯飲めるね』熊『下らねえことを言ふない。飴で一杯飲めるなんて、つまらねえことを言ふない』八『いやな野郎だな。手前は二言目にはつまらねえてえことを言ふが、いゝ癖ぢやアねえぜ』熊『だつて詰らねえから詰らねえてんだ。別に差支へねえぢやアねえか』八『それがいけねえてんだ』熊『併し、お前だつて人のことは言へねえぜ』八『何が』熊『お前は何ぢやアねえか、人の顔さへ見りやア飲めるくつていふぢやアねえか』八『景氣がよくつていゝぢやアねえか、一杯飲めるなんさア』熊『それがよくねえよ、耳障りだ



八「手を貸しな。手拍子三つだ……」
柳橋の八公
小文治の熊公

な』八『だが、お互ひに癖はよくねえな』熊『さうよ』八『ぢやアからしようぢやアねえか。お互ひに癖を矯すのに普通ぢやア矯せねえから、どうだい、一ツ五十錢の罰金てえことにしようぢやアねえか』熊『五十錢の罰金？』八『さうよ』熊『さうすると、どうなるんで』八『どうなるたつて、手前が詰らねえといへば乃公が五十錢貰ふんだ』熊『なる程、乃公が五十錢取られるんだな、詰らねえといへば』八『さうよ』熊『それやア詰らねえな……アッ危ねえな。今見たやうに喋れば取られるんだな』八『さうよ、それで五十錢。ちよつと一杯飲め……危ねえや。まア兎に角さう決めることにしようぢやアねえか』熊『ウム、決めよう』八『合圖をしなくちやアいけねえ。手を貸しな。手拍子三つだ。ヨイ、ヨイ、ヨイと。い〻か』熊『大丈夫だ』八『言ふな』熊『言はねえとも』八『ところで、腹はどうだい』熊『腹か。腹は、さうよなア、空つてるな』八『空つてるか。ウム、俺も空つてるんだがね。どだい、一つ何處かで、え〻、飯を食はうぢやアねえか』熊『さうよなア。食つてもい〻な』八『何處へ行くな』熊『何處でもい〻よ』八『ぢやアどうでえ、一つから、何ぢやアねえか、大いに一つ飲……いや、その



隱「どうだね澤庵大根の妙策は……」（小文治の隱居）八「あッなる程……」

やらうぢやアねえか』熊『さうよなア。やつてもい〻けれども、まア何だな、料理屋へ行つても詰……』八『何でい』熊『今日はよさう……オ、危ねえな』八『よすかい』熊『よすよ』八『ぢやア別れよう。又會ふことにしようぢやアねえか。い〻か、左樣なら……どうかしてあの野郎に、何だな、言はせてえもんだな。錢は兎に角一杯飲りてえもんだ。かういふ時には乃公の智慧ぢやア駄目だ。一つ横町の隱居のところへ行つて考へて貰はう……え〻、今日は。御隱居さん、お宅ですかい』隱『おや八ちやん、此方へお上んなさい。どうしなすつた』八『へえ、實は少しお願ひがあつて上りました』隱『ホホー、何だい』八『いえ、外の事ぢやアございませんがね。實は私の友達でね、熊てえ野郎があるんです』隱『へえ』八『その野郎がね、妙な癖があるんで。人の顏を見さへすれば詰らねえ〳〵てえことを言ふ。さうすると、まア私が飲める。こいつが私の癖でね』隱『フム』八『で、まアお互ひによくねえ、こいつを矯さうぢ

やアねえかてんで』隱『成程』八『たゞちやアいけねえから、何でも言うた奴は二分づつの罰金といふことにしましてね』隱『フム、面白いな』八『ところで、實は貴方に考へていたゞきてえといふのは、詰らねえと、かうあの野郎がいへば二分取れるんですがね』隱『だけれども、お前さんがお友達と賭をしたんだらう』八『え〻それはまアさうでござんす』隱『それぢやア お前さんが考へなくちやいけないな』八『ところが、わつしにやアい〻考へがねえんで。どうか、御隱居さん、考へて下さい』隱『それアまアお前さんとは懇意な仲だから考へて上げてもい〻が……』八『どうか一つお願ひ申します』隱『ぢやアかうしなさい。恰度服裝もそれでい〻が、成るべくならば、それに向ふ鉢巻して足袋はだし……』八『大變なことになりますね』隱『身體にから少し糊をつけてな。それでお前さんが向ふの家へ飛んで行く。トン〱とうまく喋らないといけないよ、悟られないやうにな。實は今家へ歸つたところが、練馬に伯母があつて、澤庵大根を百本貰つた。今年は出來がい〻んで馬鹿に太い。それでまア二階を捜したが……』八『え〻實は家に二階はねえんでがす』隱『あ〻さうか。



熊「どうしたい」八「どうしたつてお前、その練馬だい……」

ぢやア物置を……』八『物置もねえんで』隱『ぢやア家中捜したところが、生憎四斗樽がない。醬油樽が一本あつたが、その醬油樽に澤庵大根が百本詰らうか、聞きに來たと、かういつて見なさい。何しろ、澤庵大根が百本も醬油樽に詰まる譯がない。詰まるにも詰まらねえにも知れてるぢやアねえか。それア詰らない、かういふに違ひない』八『あッなる程、こいつは有難え。ぢやア早速やつて來ますからな』隱『うまくやりなさいよ。慌てちやアいけないよ』八『大丈夫でがす。湯を沸かして待つてゐておくんなさい。歸りに茶菓子を買つて來ますからね。左樣なら……お〻、兄弟、在宅か』熊『あ〻どうしたい。何しに來やがつた』八『今家へ歸つた所がな、大變な事になつちやつた』熊『どうしたい』八『どうしたつて、お前、何だ、え〻練馬だい』熊『練馬がどうしたい』八『練馬が何だい、そのトン〱トンだい』熊『何だい、トン〱トンといふのは』八『練馬の大根が今年は出來がよくてな。練馬の大根は太いだら

う』熊『太いとも』八『伯母が百本貰つたい』熊『何だ、伯母が百本貰つたといふのは』八『さうぢやアねえんだよ。練馬に伯母があつて、その伯母からおれが澤庵大根を百本貰つたんだい』熊『うまくやりやがつたな。どうだい、十本ばかり分けてくんねえ』八『餘計なことを言ふない。默つて聞いてろ。こゝがトン〱トンと言ふ所なんだ。ところが何だ、二階がねえんだ』熊『何を言つてやがるんだ』八『物置もねえがね。家中搜したところが、その四斗樽がなくて醤油樽が一本ありやがつたんだ。うまく醤油樽に百本の澤庵大根が詰まらうかな』熊『馬鹿野郎ッ、下らねえ事を訊きに來るない。詰まらうにも詰まらねえにも知れてるぢやアねえか。醤油樽はこれッぱかりだ。澤庵大根百本、どう考へたつて詰……』八『えゝ』熊『いやア、何だ……餘るな』八『あ、あまる？餘るかい。どうでえ、かう詰まらうかな』熊『いやア、はいり切れねえな』八『無理に入れたらどうでえ』熊『底が、ぬけるな』八『こん畜生、强情な野郎だな、この野郎。詰まらうかな』熊『泣き出しやアがつたな。アハヽヽ、もう駄目だい。手前の智慧ぢやアねえな。何處かでもつて入智慧されやアがつたな。エヘン、まアいいや。お前に構つちやアゐられねえんだ……ちよいと羽織を出してくんな。そこまで一緒に行かうぢやアねえか』八『何處へ行くんだい』熊『何處へ行くつたつて、横町の茶屋に伊勢六の若大將が來てゐるんだ。乃公の所へ迎へが來てるんだよ。止さうと思つたんだがね、あんまり向ふから寄越すから、ちよいと行つて來ようかと思ふんだ』八『畜生、うまくやりやがつて。若旦那の所で一杯飲めるな』熊『二分出せ』八『えッ』熊『二分出しなよ』八『何だ』熊『若旦那の所で一杯飲めるといつたらう』八『アッ成程、言つたか』熊『言つたよ。二分出しなよ。約束だよ』八『仕方がねえ、出すよ。これはえらい事になつたな。ぢやアお前、何だ、一人で出掛けて來ねえ』熊『おい、羽織をしまつてくんねえ』八『おや、お前何か、横町の茶屋へ行かねえのかい』熊『行かねえ』八『なぜ』熊『嘘だい』八『嘘ッ。嘘かい』熊『さうよ。手前、引掛つたんだ』八『おやおや、これはえらい事になつちやつたな』熊『練馬は駄目だよ。もう歸んなよ』八『これ



八「嘘かい」
熊「さうよ、手前引つ掛つたんだ」

アいけねえ。左様なら……御隱居さん、今行つて來ました』隱『うまく行つたかい。湯は沸いてるがな。何か貰つて來たかい』八『飛んでもねえ。うまくやられた』隱『うまくやられた、呆然してたんぢやアないかな。どうしたい』八『どうしたと云つて、貴君に教はつた通りやつたでがす。さうすると、詰まるにも詰まらぬにも知れてるぢやアねえか。醬油樽はこれッぱかりだ。澤庵大根百本つま……と來たんだ』隱『何だい、つま……といふのは』八『つま……といつたツきり、あと詰まらないとはいはねえんだ』隱『へえ』八『餘ると、かう云ひやアがる』隱『フム、それからどうしたい』八『そこを無理に入れたらどうだと、かう訊くと、底がぬけると云ひやアがる。どうしても言はねえんです』隱『へえ



熊「おや、手前に分るかい」
八「分らうと分るめえと大きにお世話だ」

八『それからしやうがねえから、此方が無理に突ッ込んでもどうしても言はねえ。しまひに羽織を出させやアがつて、何處かへ出掛けようとするから、何處へ行くと聞いたら、これ〳〵で横町の茶屋へ行くと云ひやがる。それでわつしもね、つい、うまくやりやアがつたな。若旦那の所で一杯飲める……てんで二分取られたんでがす』隱『おや〳〵、だらしがないな。お前さんが取られたのかい。成程、お前さんより向ふの方が役者が一枚上だな』八『いゝえ、向ふは役者ぢやアないんで、職人なんですがね』隱『さうぢやアないよ。お前さんより向ふの方が悧巧だてんだ』八『これは驚いたね、どうも。二分取られた上に馬鹿になれア世話アねえや』隱『しかし、私もだな、お前さんが氣の毒だ。どうかして復讐をさして上げたいな。好きなものには心を奪はれるとか云ふが、あの人の好きなものはないかい』八『えゝそれアもう好きなものはあるんでがす』隱『碁とか將棊とか』八『あの野郎、將棊が大好きで』隱『それア結構だ。お前さんは？』八『わつしはちつとも知らねんですが、列べ方ぐらゐ……』隱『列べ方は分るのかい。いや却つてその方がいゝだらう。今この五目並べ、或は詰將棊なんてものが流行してゐる。雜誌だの新聞に出てゐるだらう』八『へえ〳〵』隱『どうせお前さんの所に將棊盤は無いだらうから、私の家のを貸して上げよう。それで何だ、これは王を詰めるんだがね、金銀歩三ぺうで以て王を都詰めにするんだ』八『へえ、

金銀に歩三ぺうで王を都詰め……』隱『ウム、誰が考へたと云つたら、これは所澤の藤吉さんが考へた將棊だ。どんな事をしたつて詰まる譯がない。で、まアお前さんが何だな、熊さんの來る刻限を計つて、一人で考へてるんだな』八『成程、湯へ行く時には、屹度家へ寄るんですからな』隱『二三度聲を掛けられても、聞いて、聞えないふりをして、將棊に夢中になつてゐる樣子を見せるんだな』八『へえ、成程』隱『肩の一つも叩かれてから氣がつく。好きな道だから、何だそれはと訊くだらう。詰將棊だといふと一つ俺に貸しねえと、かういふに違えねえ。貸しなといつたら、よし、一つやつて見てくれと、駒を渡してしまふ。當人好きだから一生懸命考へるが、今も言つた通り、どう考へたつてこれは詰まる譯がない。そこで頃合をはかつて、どうだい、この將棊は詰まらうかなと訊けば、そこは將もあるから、これは詰らないと、かういふに違ひない。好きな道だから、ついうつかり言ふに違ひないよ』八『あゝ成程、これア面白うがすな。ぢやア早速やります。將、將棊盤を借りて行きますから――』隱『あゝ持つといで』……



八「さあ、言やあがつた、野郎」
熊「あゝ痛え、八公、手を放せよ」

八『有難え／＼。向ふからやつて來やがつたな。畜生奴、今度はのがさねえぞ。えゝと王の都詰と來やがらア……』熊『おうい、どうでえ、湯に行かねえか。えゝ、湯に行かねえかよウ』八『何を言つてやがるんだい……王を都詰と、……』熊『何か獨り言を言つてやがるな……オウ／＼、どうしたんだよ……おや、こん畜生、珍らしい事をしやがるな。詰將棊なんぞ、手前、分りやしねえぢやアねえか』八『分らうと分るめえと大きなお世話だ』熊『お世話だといつたつて……フム、これア面白い將棊だな。ちよいと駒を貸してみねえ。譯はねえ。俺に貸しなよ』八『お前、やるか』熊『やつてみらア。貸してみろ……駒はこれきりしか無えのか』八『それッきりしきやねえ』熊『へえ、金銀に歩三ぺうで王を都詰か。こいつは面白いな。これは何か、誰が考へたんだ』八『誰が考へたつて、所澤のその何だ、あれよ、所澤の十吉さんが考へたんだ』熊『所澤の十吉？藤吉ぢやアねえか』八『さうだ。十でも十でも同じだ』熊『理窟を言ふない。こいつは面白いが、駒が足りねえな。これはまだあるんだらう』八『駒は

何もねえんだ』熊『何もねえんだ？　フム、をかしいな』熊『どうでえ、詰まらうかな』八『まア待ちなよ。さうお前、早くは行かねえ、考へなきやア……かうやつて、かう行くと……』八『詰まらうかな』熊『うるせえな。默つてなよ。……かうやつて、かうと……こいつはどう考へても詰まらねえな』八『さア言ひやがつた。この野郎、畜生奴』熊『あゝ痛えく。ウーム、苦しい苦しい。喉を締めるな。喉を締めちやア駄目だ』八『こん畜生……ちよいと巡査さーん、來て下さアい。この野郎、言ひましたから……』熊『何を言つてやがるんだい。本當に、喉を締めちやア苦……あゝ驚いた。成程、これアやつたな。アハゝゝゝ、これアどうも違えねえ。適れだ。ウム、仕込みがうめえな。たうとう引掛つたよ。確かに言つたに違えねえ。よし、約束だ。これは二分だぞ』八『有難えな』熊『あんまりうまく出來たから一兩遣らア』八『こいつは有難え。一兩なら餘計飲めらア』熊『オツと、差引いておかう』（をはり）

八「一兩か……飲めらア」
熊「おつと、差引いておかう」



次號落語豫告

○一ッ目上り

春風亭柳橋演
清水對岳坊挿畫

愛讀者諸君にお願ひ

『眞劍』宣傳を全國的に徹底させる爲に左の樣な標語を入れた美しい小ポスターを二百萬枚作りました。之れを親愛なる諸君の手によつて、一齊に、なるべく大勢の目につく處へ貼つて頂きたいと存じます。

○一人の眞劍萬人を奮起せしむ。
○眞劍にやれば何でも出來る。
○熱だ！　誠だ！　眞劍だ！
○眞劍に働く者に不景氣なし。
○日本は今大切な時共々に眞劍に働きませう。
○眞劍は家を興し國を富ます。
○眞劍は實力を百倍す。
○顏に愛嬌、心に眞劍。

一、葉書で『本社眞劍宣傳係宛』お申込み下されば一人五十枚まですぐに送ります。
一、學校、會社、青年團等の團體は御希望により何枚でも都合のつく限り御送りします。
一、一枚でも無駄のない樣にお貼り下さい。

趣味と實益　日常生活虎の巻

いつも若々しく暮す法

先づ第一に自分の年を思はないこと、もう四十だな五十だななどと考へぬこと、起居動作のテキパキしてゐること、心配をせぬこと、歩くときには眞直に姿勢正しくすること、睡眠を十分に取ること、便秘しないやう注意すること、自分より若いものに常に接すること、先づこれだけで常に若々しさが保たれます。

老人を大切にしませう

▽電車や自動車に乗る時は、年寄を先へ乘せてあとから保護するやうに自分が乗り、降りる時は、自分が先へ降りてあとから降りる年寄を見守つて上げねばなりません。

▽年寄は同じお話を何度も話すものです。そんな時『あら此間お話なすつたんぢやありませんか』などとやり込める事は禁物です。何度目であらうとも面白さうに聞いて上げること。

▽年寄は若い者と何もかも一つ食物ではならぬものです。年寄の口に合ふやうなものをつとめて料理してすゝめること。

▽雜誌や新聞の面白い處は讀んで年寄に聞かせるなり話するなりして、自分ばかり讀耽らず、共に樂しみを分つやうにすること。

▽よそからの到來物のお菓子などあける場合一番先のおはつを年寄に上げてごらんなさい、年寄は滿足さうによろこばれます。

氣の持ち方で人相はよくなる

×むづかしい顔ばかりしてゐると、額に立皺がよる。氣のいらつく時でも眉をのんびりさせよ。

◇腹が立つたら一から百まで數へよ。

◇唇を噛みたい時に、微笑を作る習慣を養へ。

◇額に青筋が立ちさうになつたら、鏡に向つたつもりで、コメカミをもめ。

◇他人は自分の氣に入ることばかりしてくれないのが當然だと知れ。さうすれば、ひよつと氣に入ることをしてくれたとき感謝の念で一杯になれる。

◇有難いと思ふ心に神が宿る。打たれても怒られても、有難いと思ふまでの修養をつめ。

◇腹を平かにすれば顔も平和に光つてくる。



矯したい癖

『奥様お年はおいくつですか』『お嬢様御年はおいくつですか』などと、他人の年許り聞きたがる癖、いゝ癖ではない。

煙草を喫みながら茶を飲む、そのまゝ菓子をつまむ、今度は小指の爪で耳垢をほじくる中々忙しい變な癖、いゝ癖ではない。



なんと無作法な訪問客

(1)早朝や夜間又は食事時に訪問して、悠々と人の迷惑をも顧みないお客。(2)名前も告げずに取次ぎを頼むお客。(3)オーバーもコートも脱がずに客間まで上り込むお客。(4)幾度進めても座蒲團を疊の模様と心得てなかなか主人に氣を揉ませるお客。(5)暖かいものを冷くし、冷やしたものをぬるくして、折角の心づくしを無にするお客。(6)人と話もせずに好きなものばかりモクモクむさぼり食べるお客。(7)床の間の掛物や


(1)

(2)

(3)

(4)

(5)

盗難御用心

一、便所の汲取口は大きすぎぬやう、また便所の入口は外側から鍵のかゝるやうにすること。

二、塵箱などを足場にして、二階の窓に達し易いやうにしないこと。

三、雨戸の溝はふかくし、且つ雨戸と雨戸との間に錠又は釘などを用ゐて連續させること、また雨戸と閾とも同様にすつかりとめること。

四、雨戸のない硝子戸は、すべて厚い硝子と金網の二重にするか、

氣の利いた着物の着こなしと柄の選び方



◇**背の高い人は**横縞とか大柄の模様ものなどですらりとした姿を低く見せるかはりに、そのすらりとした特長の美を秀でさせ印象を強く殘すことが現代の清新な美容法ですから、横縞を着るのでしたら細い線が集つて一つとなつてゐるやうなのがよく、一體に上品で垢ぬけした柄が似合ひます。

◇**猫背と鳩胸の人**猫背の人は肌襦袢を着ましたら、その間へ綿を入れて胸をふつくりさせて、その上から着物を着ます。そうしますと着物の衿が自然に抜けますから形がつきます。帶は出來るだけ高く帶の結び目が丁度猫背になつてゐるところに來るやうに結びます。背負ひ上げは無論低いのを用ゐ、帶の體につくやうにします。

鳩胸の人は、襟はあまり強く合はせず胸元はゆつくり着るやうにします。後は衣紋を拔かず肌襦袢の衿も狹く作り胸のあたりも極く細く出るやうにします。帶は幾分下目に、ずり落ちぬやうに締めつけます。

◇**お腹の出た人、お尻の出た人**お腹の出てゐる人は直ぐ下前が崩れます。そこで腰紐を十分に結ぶ必要があります。紐は三廻り四廻りも廻るほど長い物を用ゐてしつかりと結ばねばなりません。モスリンの少し太い紐に限ります。それからおはしよりは多い目に出し

(二)手輕に出來る按摩術

按摩は誰でも出來るが、上手にやることは中々むづかしい。簡易なのはあり合せの藥瓶に湯を入れてそれで肩などをこすると凝つたのがとれて中々よい。お腹の上をこすつてもよいし背

また鍵を中央一個にせず、上下二個にすること。

五、湯殿や便所の窓格子は、必ず金屬棒にして、なるべく細かくふかく入れること。

六、引窓、揚板、臺所などの用心を殊に怠らないこと。

七、家中外出のときは、入口の見易いところに錠などおろさず内からすつかり戸締まりして、臺所口または座敷なりから外に出で、その出口を一寸分らないやうに五寸釘でとめておくこと。留守らしく見せないことが肝要。

八、隣家と相談して、相互に盜難呼鈴をつけておくこと。


(6)

(7)

(8)

(9)

(10)

(11)

生花置物を見るのに立つたまゝ見るお客。(8)家の内をぐるぐる見廻はすお客。(9)自分の云ふことばかり、口に泡を飛ばしてしやべり續けるお客。(10)弔問や病氣見舞に來て、大聲でしやべつたり、笑ひ聲を出すお客。(11)相手をかまはず、無闇に外國語を使ふお客。

見せるものです。帶はいくらか下目に結び、後の形はゆつたりとさせるとよろしいものです。お尻の出た人も同じ心得でありますが、お尻をかくすために伊達卷を卷いたあと、お尻の上に背負ひ上げを一つ入れて、その上に帶を締めますと、お尻の出たのが目立たなくなります。そうして帶はお尻をかくすやうに稍大き目に結びます。

着物のしまひ方

◘着物をしまふ時は天氣の好い日に限ります。雨の日、濕り氣多き日は避くべきです。

◘よい着物は着物の疊み目に新しな白紙を當てるとよい。

◘肌着、足袋、靴下の類と着物とは同じところにしまつてはなりません。一所にするといつかしら自然に他の着物を汚損することがあります。

◘着物を簞笥又は行李に入れる時には、着物と着物とをずつと重ねず、必ずその間には羽織のやうに小さい物を入れて、着物のふきを崩さぬやうにせねばなりません。

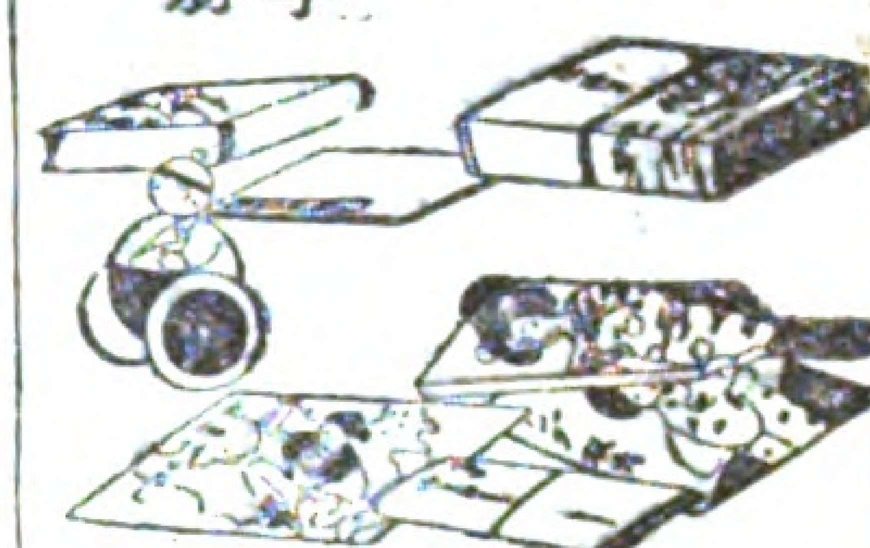
◘着物は一度火熨斗をあてて、少時空氣に曝してからしまふに限ります。夏物は殊に其の必要があります。

◘着物の蟲よけには樟腦もよろしいけれど、匂ひが高過ぎるので着物を變色させる事がありますから、樟腦の代りに丁字香を用ゐるのが一番安全です。但し毛織物の時は樟腦に限ります。

◘着物の蟲は印刷インキをきらひますから、簞笥の抽斗の底には新聞紙を二三枚入れてその上に白紙置き着物を入れるとよい。

中をこすつてもよい。又、お腹の痛い時にそれは湯タンポの代用にもなる。

たゞ使用の際、瓶はこはれない樣に瓶の栓がぬけぬ樣に、そして湯がこぼれてやけどをせぬ樣に氣をつけねばならない。



靴の保存法

靴を長くもたせるには極上等の豚脂に、パラフヰンを少し加へて火にかけ、よくとけたのを靴に塗つて常に革を軟くして置くことが必要です。雨に濡れた靴を日光に直接さらすと革がかたくなるから、先づ泥をよく落し、布で綺麗に拭きとつてから前の豚脂をぬるか靴墨をつけて柔軟を保たせ、黴の發生や、糸目が腐つたりする憂ひのないやうにあまり乾燥しすぎないところに置きます。尚二足の靴を交互に穿くやうにする

誰にもわかる　食料品の良否鑑別法

白米 粒の揃つたもの、縦筋の淺く、豐肥なもの、光澤があつて半透明に近いもの、白色で身の引締つたのは良品です。粒の不揃なのは大粒がまだ煮えないうちに小粒が煮過ぎるから味がおちるのです。

一粒指先にとつて揉んで御覧なさい。糠を取去つた時、芽の點が大きく黄色味を帶び、全體の色が薄白くて光澤のないのは極質の惡い米で、磨ぐ時碎け易く炊くとき割れ易いものです。

醬油 醬油を少し瓶に入れ日光にすかして御覧なさい、浮游物のあるのや青黒味がかつてゐるのは不良品です。透明なのは良品です。更に之を熱すると蛋白質は凝つて濁つて來ますが、何時迄も澄んでゐるのは透明でも不良品です。口に含んで徐々に甘味が出で、吐出してからも爽快な味の殘るのはよいが、不良品は直ぐ甘くなり舌を刺す味が强いものです。

鰹節 上等の鰹節は脂肪が少く、[illegible]

ら二本の節を叩き合せるとカンカンと冴えた音がします、赤黒味がかつた色で光澤がなく叩いても音の冴えぬのは劣等品です。小穴のあるのは削ると粉が多く、頭の方のカスカスしたのは古い證據です。削つてなめて酸味のあるもの、嚙みしめて風味のないものはもとより不良品です。

砂糖 澱粉や下等品を混ぜて不純にされた砂糖をよく見かけますが、よく見て結晶の粒の揃つてゐるのは混ぜてない證據で、手觸りがさら〳〵して雪白で光澤のあるのが上等品です。硝子コップに入れそれに湯を注いだ時、全く透明な液となるのは純粹品で、若し湯を靜かに流出して底に滓が殘り、之を指先で擦つて見て滑らかなのは混ぜた澱粉です。目方の割に容積の大きい輕いのは上等品です。

豆腐 豆腐は質が緻密で粘氣のあるものが良品です。粘氣がなくて柔い



どんなものでも役に立つ

◆そのまゝでは使へない毛糸の古物は、二本一緒にして鉤針で編みますと、暖かで、しかも相當に丈夫な座ぶとんの表などが出來ます。異つた色でも工夫して取合せますと尚更ら結構です。

◆メリンスの古布のあちこちいたんで何にもならぬやうなのは、六七分位の幅にして縦にすら〳〵と手で引き裂き短いものは成可く小さい結び目にむすんで長くし、三本を

帽子のしまひ方

帽子をしまふには箱に入れるのは無論であるが、それだけですと箱の中で帽子が動いて縁がよれたり曲つたりして型の崩れるものです。そこで箱の中へ固いボール紙で、二本のつゝかひ棒を作つて帽子の動かぬやうにすると宜しいものです。尚その上に帽子の中の周圍に丸きだけのボール紙を入れて置きますと絶對に型を崩すことはありません。しまふ時には能くブラシを掛け、場合によりブラシにベンヂンをつけてこすつて置きますと、來年出した時、新しいやうになつて居ります。



るのがよい品です。

パン　持つて見て輕く、酸い香のな

るもの。かんで見て歯に粘りつかず。切口の穴の非常に多い品は上等です。

品物はこの呼吸で買へば安く買へる

◎日用品は御用聞の手からお買ひになると、居ながら間に合つて一寸便利の様ですが、一國の經濟政策から見ましても、一家の經濟の上から見ましても共に百害あつて一利ないものです。許す限りは自分で買物に出かけることです。

◎店へ出かけて買ふ時も、行き當りバツタリでは駄目です。二三軒の店のを見て、品質と値段との兩方面から考へて買はねばなりません。

◎それにはふだん信用の置ける店を見つけて置く事も必要ですが、公設市場などを利用する事も便利です。

◎近頃商店も段々競爭するやうになりましたから、市場の近所などには却つて市場より安いよい物を賣る店なども時にある様です。

◎百貨店も、商品陳列場のつもりで見るやうに心掛けますと、色々有益な發見もあるものです。

◎尚入用の物をあわてゝ買はずに、前前から心掛けるやうにいたしますと、格安品を手に入れることが容易に出來るでせう。

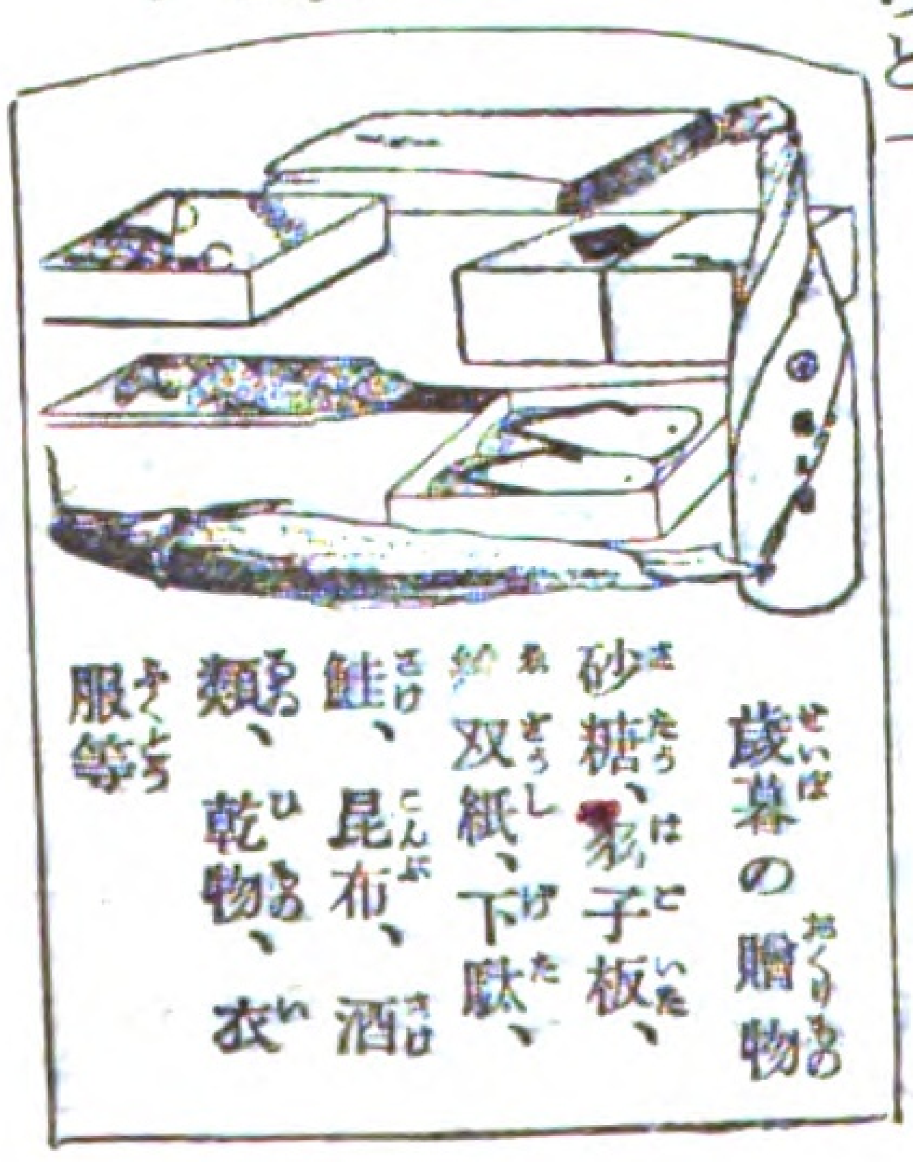
◎然し入用でない物を單に安いからといふ事だけで澤山に買ひ込むことは不經濟の極みであります。

洋服の保存法　洋服は洋服簞笥の中に釣して置くか、布を掛けて押入れに釣して置くのが一番よろしいものです。さういふことの出來ぬ場合は、クリーニングするか、又は自分でベンヂンのブラシ掛けを能くした後、樟腦をたんと入れて、新聞紙に包み、洋服屋のくれる箱に一つ／＼入れるやうにするのがよろしい。

を結くのにも便利です。

◎古カラーをよいほどの大きさに、鋏で切り荷札の代用として使ひます、表はつるつるして書きにくいから、裏へ宛名をかくとよろしうございます。別に又小さく梅、櫻、菊、星などの形に切り一方へ錐で穴をあけ赤い糸でも通すと、學校へ行く子の名札につかへます、傘、草履袋、お辨當、遠足袋、水筒など一人の子供に中々名札も入用です。

◎蜜柑の皮を陰干にして、よく乾いたものを袋に入れて吊して置き、蠅蚊やりに使ふと、最も効果があります。



食物の消化時間

食物	消化時間
牛乳(生) 	一時間半
生鮭(燒) 	一時間半
林檎(生) 	一時間半
葛湯 	二時間
鶏卵(生) 	二時

お正月の御料理さまざま

七草かゆの拵へ方

白米二合に水九合位入れ鍋を凡そ廿分間位かけて置きますとおかゆがフツクリと出來ます。そこへコーヒーさじ一杯位の鹽と、別に七草をさつと湯煮して出來るだけ庖丁で細かく切つてたゝいたものとを、おかゆの中へ入れこと〱と煮ます。其中へおもちを(但し水もちの方が軟かでよろしい)燒いて入れますと結構に出來上ります。

甘酒を即席に造る法

是は酒のかすにて造ります。お鍋に水を入れ、煮上りたる時に酒のかすを細かくちぎつて其中へ入れ、砂糖と鹽とを適度に混せてどろ〱位に煮ますと恰度甘酒のやうに出來上ります。其中へ生姜のしぼり汁を入れて出しますと申分がありません。

御存じですか

○お正月のお餅を切るとき庖丁の刄に餅がついて困ることがよくあります。そんな時に大根をそばに置いて切りながら、お餅を切ると庖丁に餅がつかなくてよろしい。

○御飯に心が出來たときは蒸し返す前に、先づお酒を少量パラ〱と撒いて、充分にむらして見て下さい。大抵の心ならばとれます。

○薄い絹物にミシンをかける時は用布の下に新聞紙を敷いて紙も一緒にミシンをかけあとで紙だけむし

簡單に出來る珍料理

宇治御飯　あたゝかき御飯をお茶碗に入れ、其上へウス茶を一面にふりかけ、其上へ鯛の造り身を置き、其上へ玉子の黄身を(生のまゝ)置き、あついだし汁をかけ、味の素を

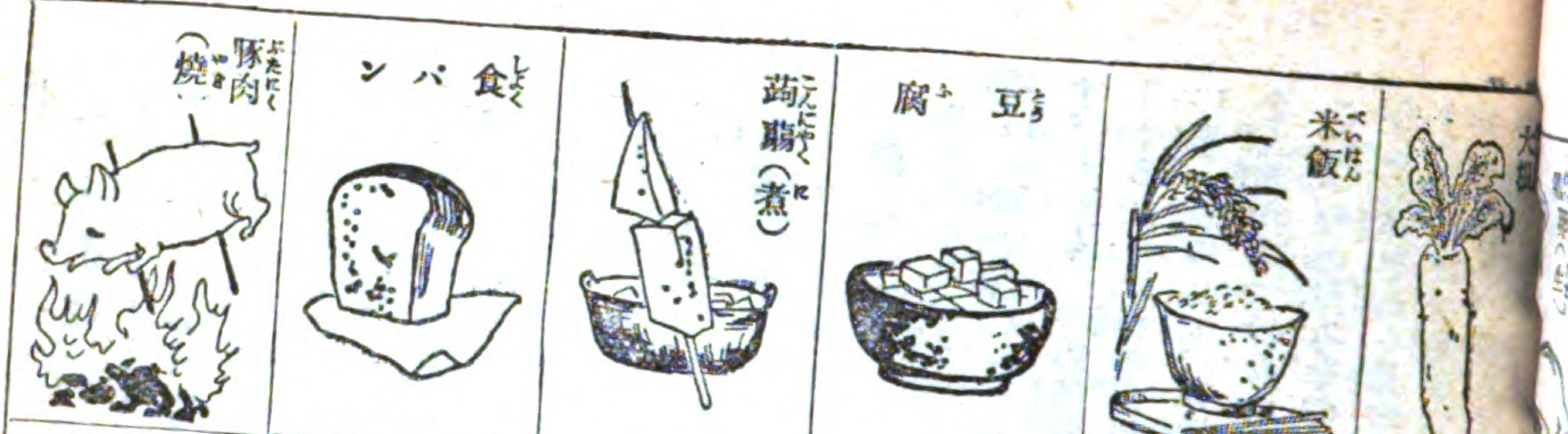
變つてゐて風流人には喜ばれます。

即席吸もの　玉子一個を割つて、丼に入れ其中へ車海老の皮を取り細かく切つたものを入れ、小松菜を生のまゝ二分位に切つて入れ、鹽と味の素とを少し入れてまぜ合せ、鍋にお湯の煮上つた中へかきまぜながら流し込みますと、一面に廣がつて浮きます。それを數個に切れば、數人に用ゐることも出來ます。其中へあたゝかきだし汁をかけますと、一寸何が何だかわからず大層美味なも

知らぬと大損　水道の使ひ方

水道を使ふには、最初水桶にでも澤山くみ置いてそれを使ふのが經濟的です。水の要る度毎に口を明けますとメートルが餘分に廻り非常に御損です。水を出します時には一時に口を全部開けずに靜に半分位開きます。そしてゆるりとひまの時くみおくやうにいたします。くみ置きの水がありますと火事等の急の場合にも助かります。





大根	米飯	豆腐	蒟蒻（煮）	食パン	豚肉（燒）
時間	二時間十五分	二時間十五分	三時間	三時間七分	五時間十五分

○雪の日には足駄の齒に蠟を塗つておくと雪がつきません。

○指輪は左手にはめるのが本當で、中指にはめるのは未婚者（婚約指輪も中指）、藥指は既婚者、但し結婚式の時花むこは花嫁の左手にはめる、小指にはめるのは一生獨身で暮すの意です。

○靴墨は指でつまんでこすつて見て、殆ど溶けてしまふのが一番よい。鼻をつくやうなテレビン油の臭のするのも良いし、またこれを皮にうすく塗つて、見てのびがよく、水をかけてもよく彈くのが最良品です。

干魚の煮付 川魚は淡白な味を賞味します。鮎や岩魚等の燒干にしたのを骨迄も柔かに煮るには、水一升に茶呑茶碗に一杯の酢を加へ、其中に一晩つけておき、翌朝更に酢を少しと煎茶二三滴をおとし、とろ火にかけ靜かに煮て汁が煮立つた時飴を少し加へ、醬油をやゝからい位に加へてなるべく早く煮上げると味よく

肉の燒き方 鮭を燒くには前以て脂を塗つて、强火で燒いた熱い網にかけるがよろしい。いきなり强く熱しますと、表面の蛋白質が急に固まり内部から營養分の多い肉汁や蛋白質が流れ出します。切身の魚は肉の方を先に燒いて皮の方を後にすると矢張り營養分が失はれません。こがさずに鮭の切身などを燒くには白紙に包んで火にかけるとよろしい。

手輕に出來るお菓子の製法

メリケン粉を大匙五杯と砂糖大匙二杯をよく混ぜ合せ、水大匙六七杯位を入れて溶き合せます、別に普通の小豆煉餡を大匙に半分位づつ取り分けて團子に丸めて置きます。右の用意が出來ましたら、燒板又は底の平な鐵鍋を火にかけ、熱しましたら、少量の胡麻油を引いて、その上に前のメリ

手に流して燒き、色の少しく變りました位に燒けましたら餡玉を中央に入れて包み殘りのはしをつまんで置きます。これを巾着燒と云ひます。

果物を美味しく食べる法

林檎を甘くさつと煮たのは大層美味なものです。先づ皮を剝き、それを四つ切として中の芯を取り、ひたひたの位の水のあるお鍋に入れ、上から砂糖をふりかけて、さつと煮ます。それを冷えてから召上ると大層美味です。

知らぬと大變 **瓦斯の使ひ方**

瓦斯の焔はよく見れば赤と青の二色になつてゐます。使用の際其の焔の出方を加減して青い焔の頭が鍋底の少し下にある位にすると熱効果は一番大です。鍋底と赤い焔とが接すると瓦斯から出る炭素の微粉と鍋底の金屬とが化合して鍋が非常に脆くなり穴のあく事がありますから注意せねばなりません。



お化粧はこの呼吸

ソバカス・ニキビのある人

ソバカス・ニキビのある人は下地にクリームをひいてから、頬紅を一面にひきますか、又は赤色の粉白粉を一面にはいて水刷毛をして、その上に普通の樣に白粉をつけると、幾分隱すことが出來ます。そうして鼻の白粉は白くして鼻を高く見せ、眉を濃く描いて人目に附かせる樣にします。洋髮ならば、ウエーブなどはかつきりつけた方がよろしい。

鼻の低い人

鼻の高くない人は、白粉を鼻の頭に一刷毛白くするのが普通です。それも一つの方法ですが、そうするよりは鼻の白粉は額より少し濃い目にして、小鼻の脇へ頬紅を人差指につけたので押へて、そこに一つの深みをつけた方が自然らしく鼻を高く見せることの出來るものです。額には白粉をつけないで、眉も稍ぼやけ氣味に描き、眼には頬紅をさしますと、四方から鼻を高く見せます。

凡て化粧での形の直し方は、その部分にばかり思ひを致さず、四方から自然にそう見せるやうに化粧するのをよしとします。

我家の緊縮・子供の躾け方

奧むめお

▽朝早く起きること、郊外散歩に握りめし持參のこと。

▽成るべく自然に伸び〳〵と育つてほしいと思ひ、遠まきの愛にて心使ひをして居ります。

白井喬二氏夫人 白井鶴子

▽家庭の緊縮は、先づ平等に行はなければならぬと存じますので、「一人一縮」といふ樣な事を考へて見ました。例へば主人は酒精分、私は服裝、子供は半紙類、女中には無駄使ひ禁止等。然し一方積極的な方法も必要だらうと存じまして、今度完全なる計量器を買込みまして、合理的經濟榮養料理を臺所に斷行する事に致しました。

▽人前で思ふ事をハッキリ言へるやうに躾けて居ります。

加藤武雄氏夫人 加藤花子

▽現在あるもので間に合せ新しく作らないこと。國產品を用ひること。形式だけの贈答をしないこと。

▽きまりの正しい生活。自分のことは自分ですること。やりつぱなしをしない、しだしたら終りまでずること。頭から駄目にしたり叱つたりしないで子供たちがどんな事でも相談出來るお友達のやうに見守つてやつて居ります。

知つて置きたい素人療法

齒ぎしりの治し方

夕食を輕くして就寢前清潔なガーゼを嚙みながら寢るやうにするとよい。これを二週間も續けてやれば完全に癒る事請合ひ。

火傷の手當

輕い程度の火傷には沃度丁幾をつけるとよい。表皮がはがれて火傷がひどい場合には硼酸軟膏を塗つて繃帶すると同時に醫者にかゝること。

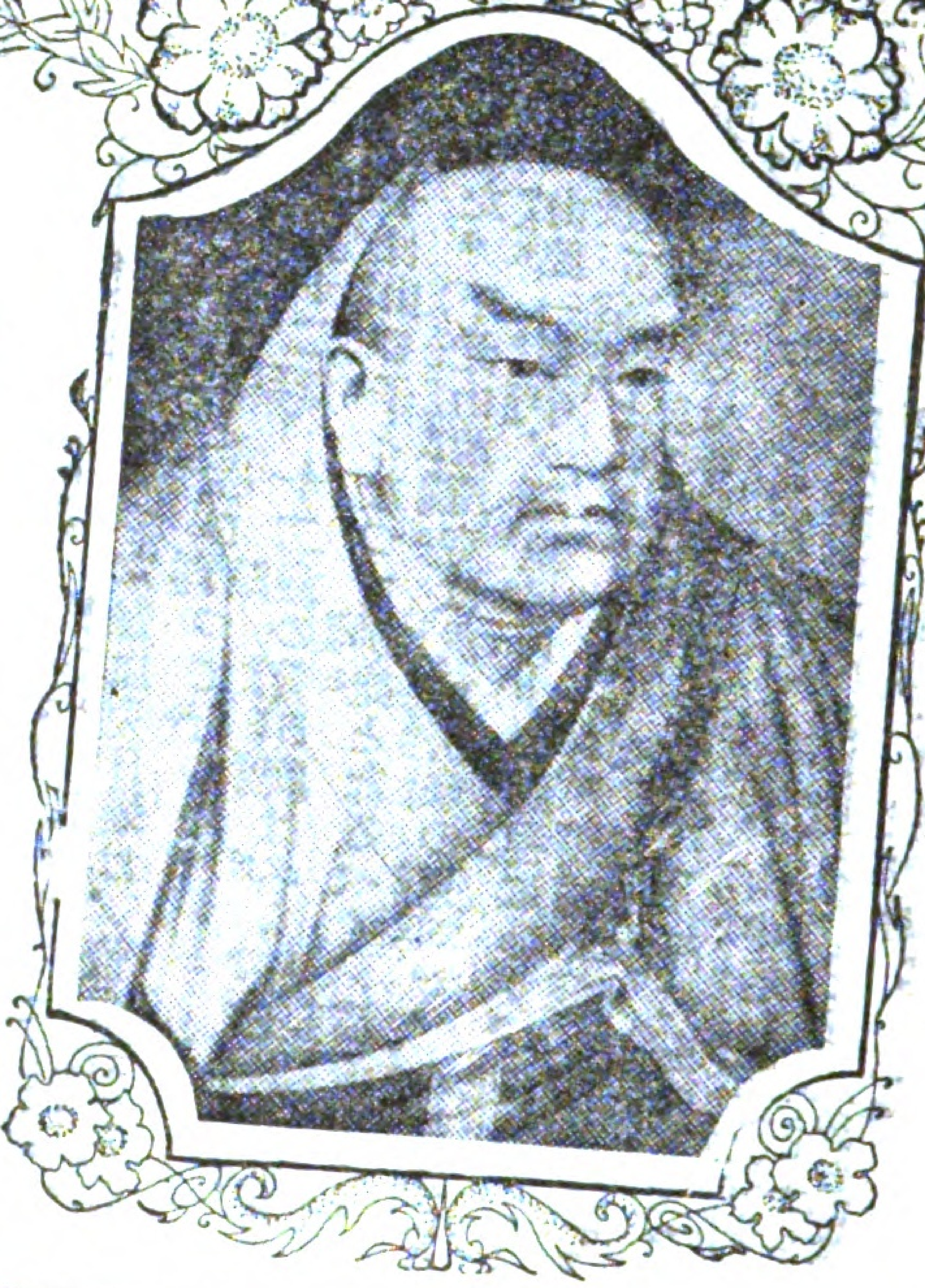
魚骨を咽に立てた時

眞綿を杉箸にまきつけて、骨のたつたあたりをこするととれることもあるが、これは危險も伴ふ故、御飯の塊を丸呑みにする法が安全で効果も多い。

目に異物の這入つた時

金盥に水を盛り、其中へ顔を浸してまばたきを二三度やると奇妙な位大抵のごみは

注意しませう戸締り火の元



日蓮宗管長大僧正酒井日慎猊下推奬

大聖日蓮

〔宗祖教祖列傳の一〕

磯村野風

鰭崎英朋畫

大きな謎

貞應元年壬午二月十六日の朝まだき、安房國長狹郡東條の郷小湊の浦に、一人の男の子が産聲雄雄しくも生れ出でた。これ即ち日蓮である。父の名を貫名次郎重忠、母の名を梅菊といつた。尤も父重忠に就ては、いろ／＼異説もあるが、時の幕府から罪を得て、遠州貫名の里から、この小湊へ配流された系圖正しい武士と云ふのが事實らしい。所領を奪はれて、知らぬ他國に流浪の身となつた重忠は卑しき里人の間に交つて、自ら漁り網曳く業をなすより外に生きて行く道はなかつた。何もかも承知の日蓮は、むしろ下賤の出を誇るかのやうに、『日蓮は海邊の海士が兒』と云ひ、『旃陀羅が家より出でたり』と傲語してゐるが、それは宗教が武力と權力と金力との外に超越して、只『信』の一事に頼るべきものであるといふことを高唱した一大見識の宣言に外ならなかつた。衆生濟度、立正安國、日本の柱を以つて自任しつゝある一大聖者が、漁夫の子よ、旃陀羅が子よと、自ら大音聲に名乗を揚げた所に、何とも言はれない痛快味があるではないか。されば

にや、日蓮の眼中には、王侯貴族なく、榮華富貴もなく、その志たるや火も燒くこと能はず、水も漂はすこと能はず、杖木瓦礫の雨何するものぞ。白刄の稻妻はおのづからに挫け散り、梵天帝釋惡鬼羅刹をも叱咤退散せしむる程の權威を以つて、遂によく日蓮法華宗を建設し得たのである。

太平洋の怒濤を朝夕に眺め、直射す太陽の光に五體を照されながら、幼名を善日麿といつた熱血兒日蓮は、恰も若竹の伸びるがやうに、すく／＼と生ひ育つて行つた。

天福元年五月十二日、十二歳の善日麿は名も藥王麿と改め、こゝに海の子は山の子となつて佛徒となるべく、清澄山へ上つたのであつた。千光山清澄寺は眞言密宗の巨刹で、小湊からは平地一里、山路一里半、三里足らずの道程にあり、海拔二千二百六十尺、敢て高山といふではないが、房總の間に聳立して、展望開闊、縹渺たる太平洋を眼下に見渡し、西に靈峰富士を指呼の間に眺めて、おのづからにして秀麗、山中老杉古松密生し、殊に櫻の多きは、我意を得たるが如き思ひがある。當時清澄寺の住職道善房は世に聞えたる學者で、名智識たるに恥ぢない高僧であつたらしい。一旦佛門に入つた藥王麿は、餓ゑたるものが食を求むるやうに、儒佛兩道の書をむさぼり讀んだ。十六歳で初めて正式に落髮して是生坊蓮長と名乘るやうになると、彼れの勉強心はいやが上に強盛になつて來た。しかし、人の力には限りがある。殊に難解とせられる三藏の大部を讀破せんとすれば從つて己が心身を苦しめずにはおかない。

『さうだ。この上は神佛の力を借りる外はない』

蓮長はかう思ひつくと、直ぐに境内に祀つてある虛空藏菩薩の事を思ひ出した。虛空藏像は開山不思議律師の彫刻で、清澄寺にとつては、唯一無二の靈寶である。蓮長は深夜人の寢鎭まるを待つて、三七日の間鬱蒼暗き老杉の間をくゞつて、只一人虛空藏堂へ參籠し、

『何卒、蓮長をして日本第一の智者となさしめ給へ』

と、一心不亂に祈つた。丁度三七滿願の曉であつた。蓮長は不思議な靈感を得て、歡喜勇躍、今しも階段を下つて、一歩本房へ歸らうとした時に、く、ぐつと胸元へ何やらこみ上げて來たかと思ふと、グワつと一塊の鮮血を吐いて、そのまゝ其場へ昏倒してしまつた。

丁度其時刻であつた。本房では兄弟子の淨顯が、

『蓮長は歸りがおそいが、どうかしたのではあるまいか？』

心配さうにさう云ひ出したものである。

『さア、わしも先刻から心配してゐた所だ。何しろ二十一日間の斷食で、身體が大分疲れて居るからなう』

から相槌を打つたのは、これも同じく兄弟子の義淨であつた。

『行つて見てやらうではないか？』

そこで二人が燭を取つて、虛空藏堂に行つて見ると蓮長は氣を失つて、血汐の中に倒れてゐるではないか。朱の飛沫は階下に鬱生してゐた樹の葉にまで、點々として飛散つてゐるのであ

る。今でも堂前に一叢茂つてゐる眞紅の斑紋のある笹を里人は『凡血の笹』と云つて、非常に尊んでゐる。そこで淨顯義淨の二人は、手擔きにしながら、人事不省に陷つた蓮長を扶け歸つた。無論間もなく正氣に歸つたことは云ふまでもないが、蓮長の日蓮の領會はこの事以來メキ〳〵と進んだ。

其頃にも蓮長の胸に二つの疑惑が湧いて起つた。一つは恐れ多いことではあるが、

一天萬乘の君が、一臣下の爲めに苦しませられ給うた事實である。

日本の歴史をひもといたほどのものは、人皇第八十一代安德天皇が源平の爭亂の爲めに、畏くも壇の浦に崩御ましまし給うたことと、第八十五代仲恭天皇の御時、御鳥羽、土御門、順德の三上皇が、時の執權、北條義時の爲めに、遠島の月を眺めさせられた事實、(所謂承久の亂)に驚愕の眼を見張つたに相違ない……日本人である以上、何人でも驚かずには居られないが、しかもその常時誰れ一人としてこゝに思ひをいたして、深く疑惑の眼をそゝいだものはなかつた。そこに慧くも眼を瞠つたのがわが沙門、蓮長であつた。日本は神國である。聖天子たるべきものが、一臣下のために、かほどまでに苦しませられ給うたといふことは、全く以て見過ごしならぬ忌々しい一大事でなくてはならぬ。殊に承久の常時は、京師の佛門悉く執權義時を佛の前に調伏すべく祈りながら、何等の效驗をも示し得なかつたといふことは、わが佛門の權威のために一大問題でなければならぬ。……蓮長は勇敢にも出家の立場として、先づ經典によつて、この正逆顚倒の謎を解かうと企てたのであつた。

最初の法難

蓮長を囚へた疑問はそればかりではなかつた。

『佛の說いた經說に、果して權實の差別があるであらうか。若しあるとすれば、身に三衣を帶した以上、是が非でもそれを探し出さねばならない』

これも亦大なる問題である。この二つの大問題を解決するには、限り有る人の力では望みがたい。すべからく神佛の力を借りて、先づ日本第一の智者にならなければならなかつた。

虛空藏の靈驗により、心境遂に開けた蓮長は、今迄にもまして、更に學問にいそしんだ。

……が、淸澄山には、もう讀むべき書籍は一冊も殘つてゐなかつた。

『いでさらば、今人智の中心鎌倉へ出向し、一段の修業を佛道に精進しよう』

そこで師の坊道善に乞うて、先づ鎌倉へ遊學したが、こゝでも尚足れりとせず、更に京都へ移り、進んで叡山に上つて、月雪花を他所に、ひねもすよもすがら佛教の研究に沒頭したのであるが、修業に專念の身には月日の經つも夢の如く、いつしか十二ケ年の春秋を重ね、淸澄山に於ける修學を算へて、實に前後二十ケ年の長きに及んだのであつた。學ぶべき事は學び盡し、

究むべき事は究めつくした日蓮にとつて、今や驚くべき結論が見出されたのである。一言にすれば、日本の佛法は悉く釋尊の本懷にもとり、日本國中の人々は、何れも信ずべからざる佛教を信じてゐたといふことになるのである。

日本國を否、世界一切の衆生を救ふべき佛法は、法華經を措いて外にはない——これが日蓮二十年の修業の總決算であつた。併し困つたことには、この法華經を弘通するもの、上には、必ずいろいろの迫害が起ると說いてあることである。言換へれば、この法華經は生命がけならでは弘められぬ法なのだ。一身の安穩を希ふならば、口をぬぐつて故鄕の清澄山に歸り、其所に安住の地を求むることが、最も賢い道であるかも知れなかつた。けれども、日蓮には正しく猛き信仰が燃えてゐた。それでは出家した甲斐がないではないか。佛弟子としての本分を盡したとはいへないのである。

『わが起つべきは今だ。生命がけで殉ひ起たねばならぬ。瓦となつて全からんよりは玉となつて潔く砕けよう……御經には「我れ身命を愛しまず、たゞ無上道を惜む」とある。臭き頭は法華經の御前に捧げ奉らう。二なき身命は大法の爲めに抛たう……同じ大法を說くとしたなら、先づ第一に產湯流した故鄕の地を選びたい。そこには生を受けた父母が在す。道を敎へてくれられた師の坊が在す。日本國の一切衆生にこの法華經を說く以前に、兩親に恩師に、まづこの御法を傳へよう……いや、それ以前に伊勢の大廟に詣でて、蓮長が決心を奏上し、法華經の法味を捧げ奉るべきである……』



かくて、蓮長は多くの道友に別れをつげ、生麻の法衣、同じ木蘭色の袈裟、天台笠を傾けて、踏む足さへも輕らかに、叡山をまつしぐらに下つた。そして伊勢國間の山常明寺に草鞋をぬいだ蓮長は、一七日間精進潔齋し

て、神風の伊勢の御廟を伏し拜み、心ゆくまで法華經を讀誦し、こゝに大法宣傳の加護を祈つたのであつた。

かくして十二年振りで故郷に歸つた蓮長は、兩親恩師は申すに及ばず、多くの道友、檀信徒、さては知る知らぬ數多の人から、多大の尊敬と渇仰を以つて迎へられた。其間に在つて禪定に入ること一七日。時はいつ建長の五年四月二十八日の拂曉、禪定を出た蓮長は、清澄山頭旭の森の一角に佇んだ。眼下には薄墨色の果てしらぬ太平洋、背後には老杉古松梢を列ね、天地寂として聲なく、乾坤完く鎭もりはてしその中に、只數珠する音のみさら／＼と聞え初めた。やがて東天かすかに白んだと思ふ間もなく、水平線上金色の榮光燦として八方に輝き、浪を破つて上り來る圓々たる旭日、洋上金波を散し、宇宙初めて物の色明かならんとした時、屹と閉ぢた蓮長の唇は遂に開いた。



南無妙法蓮華經
南無妙法蓮華經

題目を誦すること十數回。悠々せまらざるその音聲は、いみじくも四邊の靜寂を破つて、天地共に和するかと思はれた。

これ實に佛滅後二千二百二年、末法に入つて二百二年に當る、卯月下の八日の出來事で、是生坊蓮長は其朝から日蓮と改名したのである。

其日の正午頃から、日蓮は清澄山の南面堂で、四方から蝟集し來つた善男善女の爲めに、一席の說法を試みる事となつてゐた。山は青葉に包まれて、時鳥が啼かうと云ふ時節である、山を登るには持つて來いの時だ。清澄山麓の人々は老いも若きも打連れて、ゾロ／＼／＼上つて來て、若い新智識の說法に聽き耳を引立てた。打ち切つた大太鼓の音と共に、日蓮は威儀を正して高座に上つた。すんだ底力のある聲は、隅から隅まで心持

よく通る。正法の流布には先づ邪法を排せねばならない、邪法とは乃ち法華經以外の經法である。日蓮はおめず臆せず、聲高らかに叫んだ！

『念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊、諸宗は無得道墮地獄の根元。法華經獨り成佛の法でござる』

日蓮の結論が此所に到つた時、一座の人々蜂の巢を突ついた如くに騷ぎ出した。中にも地頭東條左衞門景信は烈火の如くに憤つた。

『憎くき日蓮、眞二つにして吳れようぞ』

から叫んで逸足早く山を下りた景信は、ひそかに刄を合せて、辻堂の小陰で日蓮の下山を待ちうけた。

法華經には『況滅度後』とある。如來現在する猶怨嫉多し、況んや滅度の後をやである。一切人類を救ふべく、こゝに始めて日蓮が說いた法華經……それを聽いて忽然として現はれたものは、味方でもなければ共鳴者でもなく、渴仰者でもなければ外護者でもなく、たゞ〳〵恐るべき敵であつた。實にそは外道の頭領であつたのである。

元より覺悟の日蓮は、この位のことにはびくともしなかつた。藁草履に九十折の山道を踏んで、靜かに下つて來ると、後から息せき切つて追かけて來たのは、淨顯義淨の二人であつた。

『その道を下つては危い危い。兎にも角にも、花房まで落延びるがよい』

二人は聲をそろへて遮り止めた。

『とは又、何故でござります？』

『ついこの下の辻堂裏に、地頭の東條殿が、そなたが來たら、眞二つにしてしまはうと、手具脛引いて待つてゐるとのことぢや』

淨顯について、義淨も言葉を添へた。

『この道を下りて行くのは、薪を背負つて火に近付くやうなものぢや。道は吾らが案內する。火急の場合ぢや。一刻の猶豫もならぬ……』

二人が手を取らんばかりにしながら、木樵も通はぬ岨路を通つて、花房の蓮華寺までやうやく辿りついた。

これが日蓮最初の法難であつた。弘めれば必ず怨嫉があると說いた法華經にいつはりはなかつた。

伊東の配流

豫言者は故鄕に容れられないのが世の常である。

正法の行者日蓮は、産湯流した故鄕を捨てなければならなくなつた。その場合にも、日蓮は兩親の事を忘れなかつた。一切衆生を敎化する以前に、重恩ある兩親をまづ濟度したのである。故鄕をこぞつて反對し、僧俗ともに憎んだ日蓮の敎義を、心から信じたものは、やはり兩親だつた。

『嬉しや〳〵。これにて思ひ殘す所はござりませぬ。さらば、これから星月夜鎌倉山に赴いて、死身弘法の實を上げるでござりませう』

若い法師は雀躍して、安房小湊を發足した。それを見送つたのは、やはり兩親の外にはなかつた。而かも小聲で題目を唱へながら……。

鎌倉に入つた日蓮は、名越のほとり松葉ケ谷に一草庵を構へて、しばし世の有樣を觀望してゐた。偶々この草庵を訪れた一人の僧侶があつた。日蓮と同じく叡山遊學中に、教學上の質疑を抱いて、解くに由なき悶々の日を送つてゐるうち、端なくも鎌倉に於ける日蓮の法名を聞いて、一氣に叡山を走せ下り、はるばる來り投じたのであつた。思はぬ同志を得た日蓮は、喜んでこれを迎へて、日昭の名を與へ、專ら內顧の事を司らしめることになつた。

日昭を得た日蓮は、さながら虎に翅が添へられた形で、いよいよ大法宣傳に着手する事になつたが、場所は人馬の往來織るが如き小町の辻、日蓮が扮裝は麻の法衣に麻の袈裟、左手に經卷右手に數珠、うしろには達筆に書き流した光明點將題目の旗一旒。身長六尺を超えた魁僧が、炬の如き双眼を見開き、朗々たる大音聲を張り上げて、說き去り說き來る雄辯八音には、道行く人々も足を留めずには居られなかつた。而もその辛辣骨を刺すが如き舌鋒には、むしろ惑耳驚心せざるを得なかつた。佛法と云ふものは、金色燦然たる寺院で色衣うつくしく着かざつた僧侶が說くべきものとのみ思つてゐた當時の人々は、最初はその餘りに殺風景なるに驚きながら、聽いてゐるうちに議論の正確なのに魂を消し、更に四箇格言の峻烈無比に顏色を失つた。

『阿彌陀如來の敵！』

『獅子身中の虫!!』

初めは問答法論で立向つたが、苦もなく言ひ伏せられたので、今度は惡口雜言と變つた。が、それには見向きもせず、折伏の舌端はいよ〳〵ます〳〵するどくなつた。かくして瓦石、杖木の雨は、日蓮の身に降りかゝつた。けれども日蓮は牛の角に蚊の留つた程にも思はなかつた。

今迄の型を破つた街頭布敎には、意外の收穫があつた。下總若宮の富木五郎胤繼を初めとし、四條金吾賴基兄弟、進士太郞、工藤左近丞吉隆、池上右衞門太夫宗仲、などと云ふ有力の幕府の武士達は、いづれも街頭の大獅子吼を聽いて、日蓮に歸依した人々であつた。

出でては小町の辻に說法を試みた日蓮は、入つては筆を執つて一篇の諫文を認め、文應元年七月、宿屋左衞門尉に由つて最明寺時賴にこれを進獻するに至つた。これぞ國諫第一の『立正安國論』である。時賴も驚ろいたが、それ以上に驚き騷いだのは、他宗の僧侶でなければならなかつた。

『あんな賣僧を生かして置いては、行末どんな大事を惹起すかも知れない。今のうちに燒き殺してしまへ』

から云つて猛り立つた他宗の亂暴者は、一味徒黨を狩集めて、文應元年八月廿七日の夜、どつとばかりに松葉ケ谷に押寄せ、八方から火を放つた。これより先き日蓮は、裏山に上つて

法華經を讀誦してゐると、不思議にも一匹の白猿が現はれ、法衣の袂に縋つて、切りに山奥の方へ導かうと云ふやうな素振りを示してやまないので、興深く覺えた日蓮は、曳かるゝまゝについて行くうち、ふと振りかへつてみると、己が草庵と思ぼしき方に當つて、瀧に立昇る炎々たる火柱、罵りわめく異様な人聲。

『オヽ、さては燒打？』

と、初めて猿の仕打を悟つたといふ。それより一兩日を山王の祠の内に身をひそめ、大小の猿が代るぐ〲持つて來る果實を食しながら飢を凌いでゐたが、不圖思ひ付いて、下總遊化の途に上り、諸所で數ケ月の時を過ごした。夜討をかけた他宗の輩は、いづれも日蓮は猛火の中に燒け死んだ事とのみ思ひ込んでゐると、年が改まると共に、思ひもそめない日蓮が、忽然として再び姿を鎌倉に現した。

『さても死太い奴』

『今度はどうして呉れよう』



種々評議の結果、幕府の力にすがつて、『流罪がよからう』と定まり、弘長の元年五月十二日、遂に日蓮は伊豆の國伊東の地へ流罪と云ふことになつた。

『すは！日蓮上人の御身の上の一大事である』

と、弟子檀那の輩は、色を失つて發船所の滑川の川口へ馳せ集つたが、番卒共は棒を振り手を遮つて近寄せなかつた。所へ狂人のやうになつて飛んで來たのは、師孝第一の日朗であつた。

『師匠日蓮と共に、私も流罪になされて下さりませ』

日朗は泣いて役人に賴んだ。

『ゑゝ、ならぬわならぬわ。退け退けッ』

番卒は日朗の胸を強く突いたので、よろよろとよろめいて、ばつたり纜綱の上に倒れた。

『御慈悲でござります。お情でござります』

日朗は前後を忘れて、纜綱に犇と取すがつた。

『ゑゝ、御用船の邪魔ひろぐかッ』

打下した櫂で、右の腕の付根を強かに打たれた日朗は、そのまま氣を失つて倒れてしまつた。

『あいや御折檻しばらく。その日朗は、幼なき折よりわれら膝元にあつて、まめやかに仕へくれしもの。一言別離の言葉が申述べたうござる……いかに日朗、いかに筑後房』

師日蓮の言葉に、いみじくも我れに歸つた日朗。

『おゝ、お師匠樣……』

日朗の眼からは涙が留度なく流れた。

『見苦しいぞ、日朗。今日のことは豫てより申聞かせおいたではないか。諸天善神は決して法華經の行者を見殺しにはなさらぬ。佛天を祈つて赦免の日を待て。よいか……徒らに別離をのみ悲しむは、大丈夫の本懷でないぞ。さらばぢや。堅固であれよ』



日蓮は船首に立つて、寶塔品の偈を唱へた。

『此の經は持ち難し。若し暫くも持つ者は、われ卽ち歡喜す……。諸佛も亦然なり。是の如きの人は……』

日蓮の聲は悠揚として四邊に響いた。

纜を解いた流人船は經文の調べと共にゆれにゆれて、次第次第に遠ざかつてゆく。

日朗をはじめ一同の歸依者は、涙と共に異口同音に、日蓮が讀誦の聲に和した。

沖はどんより曇つて、今にも五月雨が一降り來さうな空合であつた。

母梅菊の蘇生

果してポツリポツリと雨が降つて來た。かと思ふと、サツと吹いて來た西風は時を得顏に吹きつのり、船は上下に烈しく動

揺しながら、それでも海上恙もなく伊東近くの篠見が浦へ着いた。

『やよ日蓮、此所から伊東へは鳥つゞきぢや。徒歩でゆく方が、海路よりずつと氣易いわ』

舟夫共はさう云ひながら、とある岩の上へ日蓮を置きざりにしたまゝ、さつさと沖合さして漕ぎ出した。

降された岩は、俎岩と云つて、恐ろしい暗礁の一つであつた。此所へこのまゝ放つて置けば、厭でも應でも波に呑まれて死んでしまふであらう――それが當初からの謀計だつたのである。波が寄せては返した。と見るうちに、早や岩は僅かしか水上に浮んではゐなかつた。

『卑怯ものめ……さては計り居つたな』

日蓮は拳を握つて鎌倉の方をはつたと睨めつけたが、やがてのことに思ひ返して、

『いやいや、所詮は何處の涯なりと捨つる生命、この上は心ゆくまで題目を唱へて、靜かに往生を待つといたさう』

岩を嚙む浪の音さへおのづから鳴る天鼓の音と聞きなして、日蓮は徐ろに壽量品をよみ出した。日はいつか暮れはてゝ雨はいよ〳〵激しくなつた。潮はいつしか膝をぼつし、飛沫は高く襟にまで及んだが、日蓮は平然として讀經を續けた。

『其所に居るのは誰れだ？』

不思議にも聲がした。日蓮が目を移して見ると、それは今しも通りかゝつた一艘の漁船であつた。船からは暗をすかして此方をぢつと視つめてゐる樣子であつたが、岩上に人のあることを確めると、驚いて船を寄せ、みづから日蓮の手を取つて船中に扶け上げ、そのまゝ篠見ヶ浦の我家へと連れ歸つた。僅か一刻足らずの間ではあつたが、日蓮は早くもこの間に漁師を敎化して、正法を信ずる歸依者の一人とならしめたのである。

『此方の人か……心配してをりましたぞえ』

女房がいそいそ出迎へた。

『女房共か。かたじけない。今宵は母者人の十三回忌の逮夜、せめて今宵丈けは家にゐて、念佛の一遍なと唱へて呉れと云つたのを何の箆棒な、そんなことをしてゐたら、夫婦二人干物になつてしまふわと、中つ腹で漕ぎ出しては見たものゝ、雜魚の子一尾かゝり居らず。今日と云ふ今日は、時偶には女房の言ふ事もきくものだわいと、沁々思ひ乍ら戻つて來た……さア、御出家、遠慮はござんせん。汚い家ではございますが、ゆつくりと足腰を伸ばして休んで下さりませ』

『若し此方の人……そのお方は？』

『お可哀さうに、あの俎岩の上で、一人の御出家が危く浪にのまれさうになつてゐたのを、お助け申して來たのよ』

『それでは若しや鎌倉の、日蓮さまとやらではござんせぬか？』

『さうだ、いかにも鎌倉の日蓮だ』

『えつ』

女房は袖屏風でかくしてゐた燈火をふつと吹き消した。

『えい、何を覗すのぢやい。馬鹿めがッ』

『でも此方の人、その日蓮様は、お尋ねものでござんすぞえ。もしかくまふものがあつたらその者も同罪だとの厳しいお觸れ……さはらぬ神に祟なし。今の内に譯を話して、行つて貰つて下さんせ』

『うんにや、さうはいかねえ。一旦男が世話をすると云つた以上、生命にかゝはらうと屹度する』

『でも、此方の人、お前も同じ罪におちては……』

『喧しいわい。その同罪が恐ろしいくらゐなら、今の内にとつとと出て失せるがよいわ』

日蓮は見かねて仲へ入り、

『彌三郎どのとやら、吾等ゆゑに夫婦仲を割かれては迷惑。並並ならぬ今宵のお志、日蓮永く忘れ申さぬ。これから先きはわれら一人にて何とか分別も出來申さう……御健固で暮らされよ』

日蓮は言ひ捨てゝ、かすかに見える燈火を目あてに伊東の方を指して歩み出した。

『此方の人、これでやう〳〵安堵しましたわいの』

『お前は安堵したかは知らぬが、俺は男がすたつたわい。殊に今宵は母者の逮夜、御出家様を一人お助け申すといふのも、深い縁があらうといふもの。何もあのお方ぢやとて、何一つ悪いこともさつしやらぬに、おいたはしいことぢや』

『ほんにさういへば、これは母者の導きかも知れませぬわいの。では此方の人、あのお方は、悪人ではないのでござんすかえ』

『悪人どころか、善人も善人。いや〳〵、その善人どころではない。佛様見たいな、お情深いお方ぢやわい』

『そのお情深いお方が、どうしてまた？』

『さ、さ、その譯も先刻聞いたが、俺にはちよつくら話は出來ねえ』

『此方の人、さう聞けば、わたしも何とやら氣にかゝる。もう一度呼び戻しては下さんせぬかえ』

『誰れを？』

『日蓮様を……』

『同罪を承知の上でか』

『あい、夫につくが女房の常、わたしや喜んで同罪になりやすわいな』

『嬉しいぞ、女房』

彌三郎は櫂を放り出して、驅け出した……否む日蓮の手を無理にもとつて我家へ案内し、地頭伊東朝高の厳しい觸れをも怖れず、窮乏の内から、三十日間懇ろにかくまひ參らせた夫婦の眞情には、まことに涙ぐましいものがあつた。日蓮はその志に對して、

『日蓮が父母の伊豆の伊東川奈と云ふ所に生れ變り給ひしか』

と云つて、大いに之を徳とし、彌三郎には船守と云ふ號をお

くつたといふことである。伊東に在ること三年、其間つひに地頭朝高を敎化して本化の大法に歸順せしめ、三年二月、日蓮は赦されて再び鎌倉に歸つた。

日蓮が配流中、最も氣にやんでゐたのは、母梅菊の上であつた。

『久方振りで母君の御安否をお尋ね申さう』

日蓮は日朗、其他二三の弟子を從へて、幾年振りかで、懷しの故鄕を訪れた。山の容、海の色、眼に見るもの、耳に入るもの、何れも思ひ出の種ならざるものはなかつた。

『オヽ、日蓮どのか。遲かつた〳〵。母君はたつた今息を引きとらしやつたぞえ』

かけ出して來て、から知らしてくれたのは、顏馴染の近所の嫗であつた。

『何、母上が』

日蓮は草鞋の紐を引きちぎるやうにして、勝手知つたる奥の間へ驅け上つた。香煙しづかに流れて、悲しや慈母はもうこの世の人ではなかつた。日蓮は母の亡骸に抱き附いて、少時の間悲嘆の涙に暮れて居たが、

『いや〳〵、徒らに嘆き悲んでゐる場合でない。今一度蘇生の祈願をこめ申さうぞ』



サラ〳〵と認めた本尊を、軒先の松の小枝に打ちかけ、日蓮

『願くは佛天、今一度母の玉の緒を呼び返させ給へかし、敬つて祈り奉る』

火のやうな祈願が幾度か繰返された。至誠はよく大地を動かす。日蓮が至心熱情は遂に酬いられた。母梅菊は不思議にも蘇生したのである。この時認めた本尊は、今も猶小湊の誕生寺に殘つてゐる。

この奇蹟は、さすがに四隣の善男善女を動かさずにはゐなか

つた、日蓮の評判は忽ちにして四方を壓して、曾つては故郷を追はれた一貧僧も、今ではまるで生佛のやうに渇仰され出した。

八幡諫曉

文永元年十一月十一日、天津の豪族工藤吉隆は、禮を厚うして、日蓮を自邸へ屈請した。日蓮も亦快よく承諾して、鏡忍坊以下十餘人と共に、小松原へ差しかゝつた。薄ぐもりの空は、今にも雨になりさうな夕であつた。其時どつとをめいて、不意に立現れた數十人の伏兵、

『日蓮やるなッ』

と叫んで、八方から打つてかゝつた。

『さては伏勢、各々御油斷あるな』

豪勇無双の鏡忍坊は、側の松の木を引きぬき、日蓮の前へ立塞り近寄る者共を、ばつた〳〵と薙ぎ倒した。これに勢を得たその餘の人々、

『御法の爲めに死するは今ぞ……各々、御上人様に御怪我あらすな』

呼ばはり〳〵、此所を先途と防戰に努めた。

『手强し。遠矢に掛けろ』

下知の下に切つて放す矢は、板屋を走る玉霰にも似て、豪勇



鏡忍坊先づ傷き斃れ、乘觀、長英らも亂軍の内に倒れた。

天津の邸で急を聞いた吉隆は、馬をよんで眞一文字に小松原へ乘りつけた。見ると、眼前數十間の所で、東條景信が白刄を揮つて、日蓮に迫つてゐる。

『ヤア〳〵景信、工藤左近丞吉隆、日蓮大上人の御迎へとして參上致した。事を好まぬ吉隆ながら、正法護持には換へ難し。いざ參れ。』

『阿彌陀佛の怨敵日蓮を渇仰する愚かもの、彌陀の利劍の切れ

味を賞翫せよ』

景信は狂人の如くになつて斬つてかゝつた。『お上人様、此所に御座あつては心許なし。急ぎ大津へ御入りあれ。吉隆も後より見参いたす』

云ひも敢へず、大刀すらりと抜きそばめ、景信めがけて押しすゝむ。力戦数合、死身弘法の太刀先に、さしもの景信も斬り立てられ、後へ〳〵と退つて行く。主の大事と駆寄る下人雑を、えゝ面倒なりと右と左りに七八人斬つて落し、進んで景信に追すがらうとした折柄、兵と宙を切つて飛んで来た一條の征矢、無残にも吉隆の左の乳の下へぐさと立つた。さしもの吉隆、馬上に堪らずどうと落ちる。景信はそのまゝ馬を煽つて日蓮に追すがり、

『日蓮覚悟』と云ふより早く、馬上から拝み打ちに斬り下した一刀、日蓮は手首にかけた数珠を取直してがつちりと受け留めたが、親玉二つに裂けて、流れた刃は左の眉間へ三日月形に斬り込んだ。

『南無三、打ちもらしたか。さしつたり』

と、馬を乗り戻して再び取り直した强刀、二つになれと斬り下す。その時早く日蓮は『無礼もの、退れッ！』

と大喝、活と開いた両眼は烱々として、景信をハツタと睨めつけた。さしも不敵の景信も、日蓮が降魔の眼光に電氣にでも打たれたやう、全身びり〳〵と顫へをのゝき、我れにもあらず鐙をかへして、ドウとばかり眞逆さまに駒より落ちた。途端に一陣の風颯と吹き起つて、四方は一面の小霧に鎖された。日蓮は九死に一生を得て、其場を立退いたのであつた。

今も残る大津鏡忍寺は、吉隆の子日隆が開いた寺で、日蓮は吉隆に日玉と云ふ法號を贈り、同時に鏡忍坊の爲めに、墓石の附近に一本の松を植ゑて手向とした。

安房から三度び鎌倉の地を踏んだ日蓮の舌鋒は、いよ〳〵ますます熾烈を加へて諸宗に對し完膚なき迄に攻撃の矢を放つた。しかも安國論の豫言は見事的中して、再度にわたる蒙古の使節はいよ〳〵急を告げた。事態容易ならずと見た日蓮は、十一通の直諫状を認めて、執権時宗以下、建長寺、極樂寺等に送つたが、誰れ一人日蓮が矢面に立つて、之と爭はうとするものもなかつた。

然るに、文永八年六月に至つて、極樂寺良觀の雨乞祈禱と云ふ珍事が勃発した。良觀は後に忍性菩薩と謚されたくらゐの所謂名僧で、一生の間に寺を作ること七十九、塔を建つること二十、橋を架することと百八十……といはれた。ところが、この時引續く大旱魃は、いつしか雨乞祈禱の聲となり、差しづめ良觀に白羽の矢が立つた譯である。良觀自身もひそかに期するところあり、進んで祈禱壇上の人となつたのである。

日蓮は之を聞くと、直ちに一書を寄せて、良観に戦を挑んだ。お互に法力を比べ、何れにもせよ法力を現はし得た者の弟子となつて教へを乞はうといふのである。之を見ると、良觀は時こそ來つれと躍り上つて喜んだ。で、早速祈禱に取かゝつた

か、一七日經つても一滴の雨も降らなかつた。二七日經つても空は依然紺碧に晴れ渡つて、熱風が吹きつのる許りであつた。更に又一七日祈つたが、雨は愚か小霧さへも立たなかつた。生佛良觀の面目は十二分に打潰れた。日蓮は三度目の書を良觀に送つて、

『さらば法華經の法力をお眼にかけ申さう』

と、對手の良觀坊が數百人の大衆を率ゐ、祈禱壇まで築いて、仰々しく雨を祈つたに引替へ、日蓮は僅かに數人の弟子を從へたのみで、田邊ケ池の畔に立つて、極めて手輕に法華經を讀んだが、半刻經つか經たない内に、大雨沛然と到つて、鎌倉の天地は全く蘇生した。

かうなつて見ると、良觀一派はもう默つては居られなくなつた。あらゆる手段を講じて、時の幕府に向ひ、讒訴を試みた結果、遂に幕府を動かして、日蓮の罪狀赦し難し、斬罪に行ふべきものなりといふことになり、平ノ左衞門尉に命じて、日蓮を召捕らせ、恰も朝敵謀叛人でもあるかの如く、日中八谷七郷を引廻して、龍口へ曳き立てることになつた。

觀念の眼を閉ぢ、痩馬の脊にかきのせられた日蓮は、罵詈讒謗の中を、悠然として刑場に向つた。馬が鶴ケ岡の八幡社頭に掛つた時、日蓮は左右をかへりみて、

『やよ方々、日蓮一言八幡大菩薩に申すべき事のあり。少時待たせ給へ』と、馬から降りて、神前に進み寄り、

『いかに八幡大菩薩、御身は實の神か。日蓮は日本第一の法華經の行者である。日本國の一切衆生を助けんが爲めに法華經を說き參らせし罪により、今宵首切られる事となり申した。何故にとく〳〵出合せ給はぬぞ』

言葉するどく叱咤した。日蓮の風丰、今見る如き心地がするではないか。

これ、日蓮が第二の國諫である。

龍口から佐渡まで

日蓮を取りかこんだ一隊は、月かげを踏んで龍口へ急いだ。この時、突然人垣を押し分けて、行手に立つた者がある。これぞ四條金吾兄弟であつた。『御情なき御有樣かな。金吾兄弟、大上人に後れ參らせ、何の樂しみあつて生きながらへ申すべき。御馬前に於て腹かき切り、冥土三途の御先驅け仕らん』

既に腹切らうとしたのを、日蓮が、言葉を盡して諫めたので、兄弟も思ひ返して泣く泣く馬の口に取りすがり、刑場まで送つて行つた。一隊が着く前に、龍口は歸依不歸依二樣の人でいつぱいになつてゐた。當夜の劍手は、其頃聞えた武藝者、依智三郎直重であつた。抜けば玉散る二尺八寸、蛇胴の名劍を提げて、そゝいだ玉水をさつと拂ひ、日蓮の背後に廻つた時には、四條金吾をはじめ並居る弟子檀越は、何れも聲をしぼつて泣き悲しんだ。日蓮はこれを制して、

『不覺の殿原かな。これ程の喜びを笑へよかし』

胸を叩いて、カラ〳〵と笑つた。折しもあれ、江の島の方よ

り月の如き閃々たる一塊の火焔、空をかすめて立現はれ、轟然たる響と共に辰巳の方へ飛び去つた。三郎直重先づ氣を失つてのけぞれば、雜兵輩は怖ぢ恐れて、何れも一町餘りを逃げまどひ、あれよ〳〵と呆るゝばかり。此時、日蓮聲も荒らに、

『いかに殿原、何故に天下の罪人日蓮を捨て置いて、かくは退散召さるゝぞ。夜明けなば見苦しからん。急ぎ〳〵この素首打落されよ』

と、呼びかけたが、誰一人近寄るものもなかつた。左衛門頼綱はこれに恐れをなして、『日蓮の首、容易くは斬り難し』と書狀を認めて鎌倉へ急使を立てたが、これより早く一方鎌倉でも、遽かに幕議が變つて、『日蓮斬るべからず、猶豫然るべし』と云ふ急使を發したので、この使と使と途中で行會つたのが、今も名に殘る行合川。

日蓮は叉しても、九死に一生を得て、相模國愛甲郡下依智鄉本間六郞左衛門重連の館にお預けの身となつた。滯留三十日、明日はいよ〳〵佐渡へ遠流と決つた十月九日、日蓮は一書を認めて、折から松葉ケ谷の土牢の内にゐる弟子日朗に贈つた。

日蓮は明日佐渡國へまかるなり。今夜の寒きにつけても、牢の內のありさま、思ひやられて傷はしくこそ候へ……籠をば出でさせ給ひ候はゞ、とく〳〵來たり給へ。見たてまつらん云々

日朗はこの手紙を、幾十度となく押戴いて、涙と共に讀んだ。そして遂に思ひ餘つて、牢內の土くれを堅めて日蓮の像を作り、陰膳を据ゑて、師の安全を祈つた。ある日、牢番が橘の實を日朗に呉れたことがある。之を見た日朗は聲を放つて泣いた。橘は日蓮が何よりの嗜好物だつたのである。日朗の純情は、聞くほどの者をして感動せしめずにはゐなかつた。さすが心なの牢番も餘りのいぢらしさに、密かに旅裝を調へて、在牢中の日朗を、遙に佐渡へと出してやつた。日蓮が在島四年の間に、日朗は六度迄佐渡へ渡つたと云ひ傳へられてゐる。日朗の師孝、涙なくしては語り得ないものがある。



日蓮が最初に捨てられたのは、死人を捨てる塚原の三昧堂であつた。四面吹通しの破れ庵室、吹雪を避ける戸障子もなければ、五體を包む夜の物とてもない。況んや一粒の飯のあるべき筈はない。日蓮は雪を食して、僅かに露命をつなぎ、靜かに法華經を讀んだ。吹き込む雪は落花の如く、膝といはず肩胸にまでも降りかゝつた。



『鎌倉の悪僧日蓮坊が、佐渡へ流されて、三昧堂に捨てられたさうな』

『あれは阿彌陀佛の敵。安穩には置かれぬ奴ぢや』

『併し、なかなか口巧者な御坊ぢやげな。迂濶なことは言はれまいぞ』

『問答は無益ぢや。打放すが何よりぢやわ』

佐渡にも怨嫉の徒は充滿してゐた。

『ようし、拙者が斬つてくれよう』

自ら進んで出て來たものがある。承久三年七月、順德上皇に供奉して此島に移り住んだ遠藤左衛門爲盛がそれであつた。折からの吹雪を蓑笠に凌いで、三昧堂に來て見ると、成程寒さうな顔もせずに讀經してゐる。

『われら、恐れ多くも順德の帝に後れ參らせてより玆に三十年、年頃日頃念佛を唱へ、只御冥福をのみ祈り奉るもの。それになんぞや、御身は念佛は墮地獄の根元なりと罵るよし。言語道斷、奇つ怪至極、さ、さ、その仔細承らう』

雪靴を縁に踏んがけ、大刀の反を打たせて詰め寄つた。しかし、日蓮はいさゝか動じた樣もなく、笑を含んで、これより諄々と法華

經を說いた。

　文武兩道に通じてゐた爲盛は、日蓮の說法を聽いてゐるうちに、さすがにその偉大なる信仰に打たれずにはゐなかつた。彼れは覺えず飛び退つて雪の中にひざまづいた。そして己れの罪を謝した上、念佛の數珠を引きちぎつて門下の一人となり、これより己が女房と心を合せ、夜更けを待つて、衣食を運ぶこと一百日、眞情をこめて給仕奉公の道を盡した。日蓮は爲盛に阿佛房日得、女房には、その功德千日の供養に勝るとあつて、千日尼と云ふ名を贈つた。

　これで先づ餓死と凍死丈けは免れた譯である。法華經には、『則遣變化人、則變化の人を遣してこれが衞護となさん』と說かれてあるから、別に不思議でもない。遠藤爲盛の歸服に業を煮やした他宗徒は、雪解け頃を見計らつて、大擧して日蓮に問答をせまつた。つまり八方から笠にかかつて、日蓮をやり込めようと云ふのである。日蓮は別に躊躇の様子もなく直ちに引受けて、雨と降りかゝつた難問題を、片つ端から說破して、他宗人の心膽を寒からしめた。これが有名な塚原問答である。



　在島四年間の日蓮の仕事は、本間重連の說破、最蓮房、阿佛房夫妻の入信、開目鈔、本尊鈔の述作、本尊の奠定等がその主なるものであつた。

　文永十年も雪にくれて、十一年春二月十四日、日蓮はゆるされて、四度び鎌倉の地を踏むことになつた。其折赦免の使として渡島したのは、やはり師孝第一の日朗であつた。

　日蓮をゆるした幕府は、日蓮に對して、宗法の弘通を公許し、愛染堂の別當職に補して、一千町の良田を與へようとさへしたのである。

　建長五年四月廿八日に宗旨建立以來、伊東の流罪、松葉ケ谷の燒討小松原の刄難、龍口の大難、三

味堂の危難等、等、等、數へ來れば、恐ろしくなる程の半生だつた。其處へ思ひも寄らぬ愛染堂の別當、一千町の良田といふのであるから、普通の人間なら、眼の色を變へて飛付く所であらうが、日蓮はそんなものには眼もくれなかつた。

『守殿邪法を捨てたまはずば一切叶ふまじ……』から前置して、深刻なる諫曉を試みた。これが即ち第三の國諫である。

幕府のやり口にほと〳〵愛憎をつかした日蓮は、遂に身延入を決心した。



延山と池上

入山後の日蓮は只管著作と、子弟教養にはげんだ。

文永十二年の春のことであつた。小湊で取れた海苔を送つて寄越した人があつた。日蓮はその返事に、

古郷の事遙に思ひ忘れて候ひつるが、今此海苔を見候て、よしなき思ひ出發くつらし、片海市川小湊の磯の邊にて、昔見し海苔、色形味ひも變らざるが、など我父母替らせ給ひけんと、方違ひなる恨めしさに、涙も抑へ難し。

から記してゐる。この大孝は、即ち奥の院登詣となつて現れた。

奥の院は、五十丁登りの難道で、吾々に取つても決して樂な道ではない。五十三歳より六十一歳まで前後九ケ年、嚴寒氷雪にとぢられさる限り、日蓮は九十九折の岨道を登つて、遙に故郷の方を伏拜みながら、熱心に亡き双親の冥福を祈つた。後年深草の元政が、七十九歳の老母をつれて、この奥の院に詣で、

投ニ身湯鑊ニ拯ニ群毛ヲ一
終ニ向テ雲山深キ處ニ逃ル
宗祖九年猶忍レ苦ヲ
吾儕一日豈辭レ勞ヲ
若シ研テ蒼海ヲ記サバ鴻業ヲ一
欲下叅テ須彌ヲ爲サント兎毫ト上

別有風教可追慕　聯[illegible]父母陟祈高

同時に自分の黒髪をこの堂前に埋めて、

いたづらに身をはやぶらで法の爲
わが黒髪をすつるうれしさ

みづから碑を建てゝ、かう記した。

執權時宗を芥の如くに罵り日本國中の他宗教を相手にして、惡戰苦鬪した英雄僧にも、こんなさやしい半面はあつた。身延に登る人は必ず奥の院に參拜して、名も床しい思親閣に在りし日蓮の面影を偲び、この大偉人の大孝を禮讃せられたい。

親に孝であつた日蓮は、師匠に對しても、又孝であつた。師道善房は不幸にして公然法華經を信じ得られない人であつた。これが又日蓮に取つては、何よりも遺憾であつた。建治の二年夏の初め、身延で師道善の死をきいた日蓮は、哀慟抑へ難く、直ちに筆を執つて報恩鈔二卷をかき上げ、美音の所有者たる日向に命じて、遙々清澄山に登らせ、二遍まで繰返して舊師の墓前でよませたといふ。

『佛教を習はんもの、父母、師匠、國の恩を忘るべしや』

と書き出し、

『日蓮法華經の行者となつて善惡につけて、日蓮房々々とウタヘル、此の御恩サナガラ故師道善房の故に非ずや』

と云ひ、

『日蓮法華經を弘むる功德は、必ず道善坊の身に歸すべし』

と論じてゐる。

思ふに松籟颯々たる清澄山頭、日向が天にも響けと朗讀したこの報恩鈔の功德は、地の底深く眠つてゐる道善房の靈を、いしくも成佛させた事と信ずる。

日蓮はまた頗る馬を愛した。弘安五年、池上に赴いた時、愛馬栗鹿毛について波木井氏に一書を寄せ、

『常陸の湯へ曳かせ候はんと思ひ候が、若し人にも取られ候はん。又殊の外イタハシク覺え候はゞ、湯より歸り候はん程、上總の藻原の殿の木に預置き奉るべく候に、知らぬ舍人を付けて候ては覺束なく覺え候、歸り候はん迄此舍人を付け置き候はんと存じ候』

と記して、乘馬の上にまで心を配つてゐる。

馬にまでその愛を注いだ日蓮は、罪なくして斬られた蒙古の使者を憫んでゐる。建治元年と弘安四年の兩度、時宗は命を下して、蒙古の使者を斬らせた。使者に罪なし、何も首を刎ねるまでのことはなかつたであらう。

『科なき蒙古國の使の頭を刎ねられ候ひケル事こそ不便に候へ』

天涯孤里に使して、罪なくして斬られた蒙古の使者にも一掬の涙はをしむべきではあるまい。

それはそれとして、いよ〳〵蒙古來襲と聞いた日蓮は、病中をも厭はずに、蒙古調伏護國の大曼陀羅を認め、身延山上に諸天善神を勸請して、敵國調伏の祈を修された。

日蓮世壽六十一、餘命長からざるを察して、弘安五年九月八

日、療養入浴を名として、九ケ年住馴れた身延の嶺を立ち出でた。馬上ゆたかに秋草亂れさく甲斐路を過り、相模を越えて武藏野に出で、玉川の畔千東の郷なる池上右衞門宗仲の館に入つた。日蓮出山と聞いて、諸國の主なる歸依者は期せずして池上に集まつた。日蓮はそれらの人々に、立正安國論を講義し、法弟六人を選んで六老僧と定め、當年十三歳の經一麿を特に庵いて、帝都弘通の大任を付屬し、一切の後事を托し終つた末法の大導師は日昭が打鳴らす鐘の音、ともすれば亂れんとする弘安五年十月十三日の朝、大地六反に震動するのを合圖に、安詳として大涅槃に入つた。此の時池上の山の櫻と云ふ櫻は、一時に咲き初めて、寂光の春を表したと傳へる。如月の蓮華に生れて、神無月の櫻に死んだ日蓮の一生は、詩のそのもの〻やうであつた。かしくて日本の柱、日本の眼目、日本の大船たる如來の使者日蓮は、洎然として遷化したのである。(終)

又々大値下げ!!



讀者奉仕、大勇斷！新年號から五十錢!!
而も大奮發、別册附錄つき！天下を席捲する大活躍振！
見よ！新年號より新掲載の大雄篇、大傑作!!

◎時代小說 **珊瑚重太郎……白井喬二**
作者が十年秘愛の材料を持出し、熱血を注いで執筆された近來稀有の大讀物。神州日本の生んだ一大快傑珊瑚重太郎を中心にして、獨特の自由奔放な大構想、全くズバ拔けた面白さです。

◎現代小說 **火の翼……加藤武雄**
美しき女性が美しきが故に享ける幸福と、それ故に遭遇する種々な事件、本篇は作者が非常なる意氣込を以て執筆された多彩絢爛を極めた大小說で、滿天下の子女を悩殺し哀哭せしむる事必定。

◎諧謔小說 **負けない男……佐々木邦**
滑稽と皮肉と諧謔の總本家、哄笑微笑苦笑の大問屋たる佐々木先生が讀者殘らず思切り笑はせようと魂膽こらした快小說。家中を明るくし、誰も彼もの心臟を躍らす滅法界愉快な讀物です。

◎時代小說 **鼠小僧外傳……菊池寛**
俠盜か義賊か、目星しい大名屋敷を荒しては江戸中に薄氣味惡さを撒散してゐた鼠小僧次郎吉と淫逸驕奢な幕閣の重役と皮肉で我儘な名人彫刻師と此等を一の連鎖につなぐ迚も面白い木像事件

◎武勇講談 **尼子十勇士……一龍齋貞山**
信州葛尾藩中隨一の美男美女と云はれた相木森之助と更科の間に生れた不敵な豪傑山中鹿之助幸盛が、數多の勇士を配下に尼子家再興を企てる痛快無類の長篇講談！演者は斯界の第一人者！

講談倶樂部

別冊美本附錄

菊半截判極美裝



◎讀切戲曲 **生野の旗擧**……眞山青果

維新史を研究すること二十年、當代無比の史學者と云はれる眞山先生が最大の努力を傾けられた大戲曲。快傑平野國臣、西鄕南洲、僧月照等の活躍を描いた感銘深い物語である！

この外、吉川英治先生の『處女爪占師』、江戸川亂步先生の『蜘蛛男』、村上浪六先生の俠勇小說、內田良平先生の劍豪秘話を始め名篇大傑作、愉快痛快な特輯讀物山の如し。

開運出世の鍵！
秘訣何でも寶典

出世を希ふ人、幸福を希ふ人、常識を豊にしたい人は、是非この一本を座右に備へて下さい。

◎金持ちになる秘訣
◎商賣繁昌の秘訣
◎美人になる秘訣
◎戀愛に成功する秘訣
◎嫁選び婿選びの秘訣
◎良人操縱秘訣
◎細君操縱秘訣
◎嫁姑仲よくする秘訣
◎良い品を安く買ふ秘訣
◎圍碁上達の秘訣
◎將棊上達の秘訣
◎健康長壽の秘訣

＝この外何人も心得べき處世成功の秘訣滿載＝

この賞讚！飛ぶ如き賣行!! 萬人必讀すべき快著

澤田謙先生著「エヂソン傳」

私の感激したところ

山脇高女校長　山脇房子

私は平生、母の薫陶如何によつて子女の前途が決定されるものであるといふことを強く力說してゐたのでありますが、澤田氏の新著「エヂソン傳」を手にして、今更の如く偉人はその母親によるといふことを痛切に深く感じました。



新聞賣子時代のエヂソン

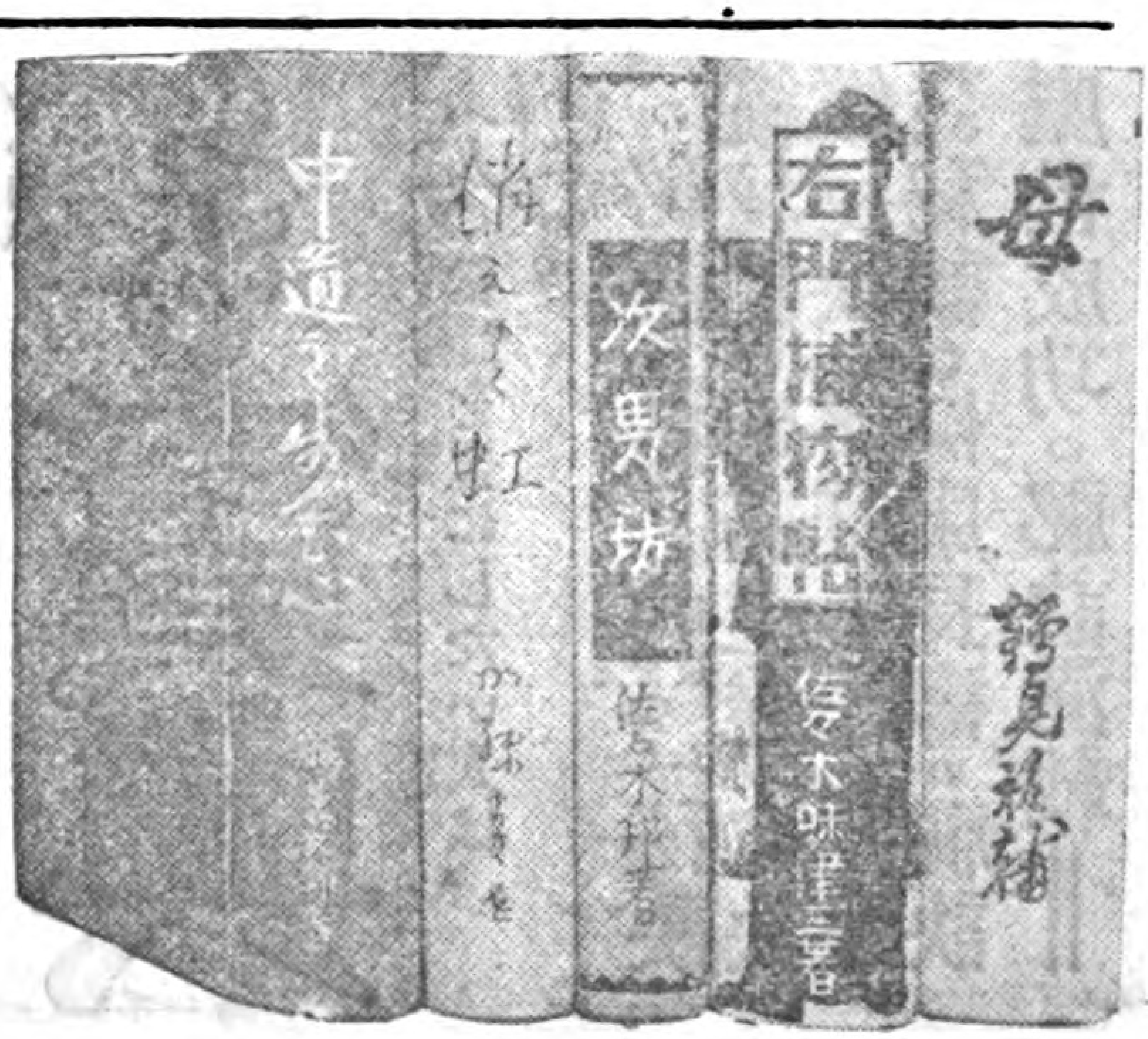
また、私は、エヂソンが所謂書齋流の發明家でなく、凡人以上に豐富な人間味のある發明家なのに非常な興味と尊敬を感じてゐたのですが、今度も、宛ら小說でも讀むやうな面白さと感激とを以て讀み終り、翁の功績に一層感謝の念を高めた譯であります。

私はこの書を、子を持つ親にも、青年男女にも是非おすゝめしたいと思ひます。

美觀遺憾なし

陸軍中將　堀内信水

エヂソン翁を單に電燈の神として祭るのみでなく、其雄大なる人格其超越せる哲理思想倒れても尚已まざる底の不撓不屈の大精神の發露等、翁の白熱電燈に由りて彩色さるゝ反映美觀を遺憾なく見らはし居るものは澤田君の著「エヂソン傳」である。文章の流暢なる



愈々好評の名著

左記の諸書、何れも目下大評判、重版また重版といふ素晴しい景況、長い冬の夜を樂しむに又となき心の糧、心の友。皆様も早く御一讀なさいますやうお薦め致します。

母

鶴見祐輔先生著

女として男として親として子として是非讀むべき名著（定價二圓送料十二錢本社發行）

特技に依りて一層エヂソン氏の大小二千有餘の發明特許が生れた程の妙味をも知ることが出來るので巻を開いて手を離す事が出來ず一氣に讀み了へたら夜半の電燈は一層光々として内外を照らして居た。

我が國にも出でよ

東京女高師教授　堀　七藏

大偉人エヂソンの人間としての大活動を叙述して遺憾がない。青少年少女の讀物として誠に優良なる著書たるを信ずると共に一般通俗讀物としても萬人均しく熟讀すべき近來の好讀物たるを疑はない。是非萬人擧つてこのエヂソン傳の熟讀されむことを熱望し以て我が國にも大小のエヂソンが續出することを期するものである。

海内第一の傳記作者

小說家　水守龜之助

エヂソン傳は中でも出色のものである。題材を十分こなした上で、新鮮で、明快で、流麗で、自由な筆を驅使するのだからたまらない。私は一氣に通讀して、而も深い感銘を覺えられ、小說よりも面白いといふのは、正にこのことだなと思つた。澤田君は傳記作者としては實に海内第一となつた。

× ×

數多いエヂソン傳の中で、面白い點からも爲めになるといふ點からも澤田謙先生の快著ほど優れたものはない。凡ゆる常識の的となり、全國津々浦々に至るまで愛讀熟讀されてゐるのも當然であります。「傳記は偉人を作る」といひますが本書を讀んで奮起しない者はないでせう。(定價一圓三十錢送料十二錢大日本雄辯會講談社發行)



不眠不休五晝夜蠟製圓壔型蓄音機を完成した時のエヂソン(一八八八年六月)



評判の小說・大衆文藝

著者	書名	摘要	定價 送料
鶴見祐輔	最後の舞踏	鶴見先生にして始めて出來た日本最初の國際小說。世界を知り時代の流れが分る	一、八〇 、一三
佐々木味津三	右門捕物帖	美男で俠氣の名同心右門の炯眼！怪奇艶麗可憐さまざまとても面白い名探偵物語	一、八〇 、一三
鶴見祐輔	母	薄倖なりし母君の弔合戰として著者が心血を籠め母の一生を描いた感激の名篇！	二、〇〇 、一三
佐々木邦	脫線息子	美しい令孃を見染めた新太郎君が結婚迄の苦心、脫線又脫線實に滑稽無類の物語	二、〇〇 、一三
加藤武雄	華鬘	媚婦妖婦と罵られ喜んで戀人の凶刃に倒れる美人房子の哀史、一讀何人も熱涙！	二、三〇 、一四

著者	書名	摘要	定價 送料
菊池幽芳	妖美人物語	妖艶な美人が自己の秘密の爲子に別れ戀を捨て數奇な生涯を終る深刻な運命悲劇	二、三〇 、一四
中村武羅夫	夜の潮	某上流家庭戀愛事件、糜爛せる肉慾生活から次第に目覺むる靈の曙光を描く！	二、七〇 、一四
岡田三郎	聖火	新しい感覺を以て、新しい男女の、奔放なるモダーン生活を描寫した逸品！	二、三〇 、一三
小杉天外	眞空鈴 前篇	妖婦の淫蕩生活が捲起した大悲劇、亂淫の罪惡が如何に深刻なるか驚くべき物語	二、三〇 、一三
小杉天外	眞空鈴 後篇	[illegible]の子と生れた美しき姉妹の盡くるなき業苦は波瀾又波瀾！實に先生畢世の力作	二、三〇 、一三
佐々木邦	次男坊	俠氣豪快頭がよくて金持の次男坊が、學校に戀に求職に痛快極まる大脫線大騷動	二、〇〇 、一三
佐藤紅綠	幸福物語	踏まれ乍らも花美しき月見草、悲慘な境遇の中に幸福を見出す一處女の奮鬪物語	二、三〇 、一三

著者	書名	内容	定價	送料
長田幹彦	波のうへ	[illegible]役に當る一美貌の哀艶悲話の運命物語　馬場孤蝶近松秋江諸氏激賞	二、三〇	、一二
加藤武雄	審判	兄弟と知らず熱愛する男女の悲戀、母の秘密が孕んだ深刻息づまる樣な事實物語	二、五〇	、一四
中村武羅夫	女王　前篇	一家再興のため奮闘する快青年を繞る美しき二人の處女の死よりも強き愛の力！孔雀の如き名家の令嬢、可憐な町娘、淋しき文士の妹の齎き戀悲しき熱烈な戀	二、五〇	、一四
中村武羅夫	女王　後篇		二、五〇	、一四
佐々木邦	世間相人間相	家庭に社會に路傍に人生の諸相、眞面目な樣で滑稽譚溢トテモ面白い諧謔小說集	二、三〇	、一三
渡邊霞亭	千鳥ケ淵	純な美少女が性に覺め行く青春の夢に筆を起し初戀より淪落の悲劇を描き泫潸然	二、〇〇	、一〇
佐々木邦	愚弟賢兄	愚直で無邪氣な貢二君の學校卒業前後から恥しい戀と其家庭生活、頗る面白い！	二、〇〇	、一三
中村武羅夫	處女	淋しくも淸く美しく逝きし一處女の生涯を寫し處女禮讃の讃歌を奏する一傑作！	二、三〇	、一三
小杉天外	蘖娘	才智容色世に優れた博士夫人が許されぬ戀に戀人を殺し自ら亦命を絶つ大悲劇！	二、三〇	、一三
佐々木邦	親鳥子鳥	哄笑微笑樣々な笑の中に美しい家庭情味と涙ぐましい母性愛を活寫して興味深し	二、〇〇	、一〇

著者	書名	内容	定價	送料
中村武羅夫	女人群像　前篇	[illegible]人として立つ美しき處女の自從戀愛等を赤裸々に描寫した萬人必讀の大快著	二、五〇	、一四
中村武羅夫	女人群像　後篇	一身の幸福を犧牲にして病父を養ひ、妹を扶けて働く職業婦人の血の涙の奮闘を見よ	二、五〇	、一四
岡本一平	人の一生	三百有餘の名漫畫が奇想天外の名漫文、笑ひ乍ら世態人情を知る面白い名著！	二、二〇	、一〇
佐々木邦	主權妻權	若い新婚者の戀愛生活家庭生活の描寫、何人も笑ひ出さずにはゐられない快讀物	二、二〇	、一〇
佐藤紅綠	第一歩	父の傲淫蕩な妖婦を殺した少年其他ドン底に蠢く人々を描寫し人の肺腑を抉ぐる	二、二〇	、一〇
村上浪六	妙法院勘八	由緒ある家に生れ乍ら伊達姿、劍を執ては無雙の快腕二人の美女の戀に板挾み！	二、二〇	、一〇
吉川英治	劍難女難	兄の仇を報いんとする美男妖婦あり美女あり戀と劍の大渦卷！手に汗握る面白さ	二、五〇	、一三
本田美禪	お洒落狂女　前篇	綺羅びやかに扮飾し嬌態の限りを盡して男といふ男を惱殺する狂美人を中心に、豪勇の美男智謀の高官好色の儒者勇み肌の江戸ッ兒等波瀾又波瀾！狂女の言動に閃く一脈の俠氣氣概、之を助くる疑問の怪人、縱横雄大興趣縱横！眞に大傑作！	一、八〇	、一三
本田美禪	お洒落狂女　中篇		二、五〇	、一四
本田美禪	お洒落狂女　後篇		二、五〇	、一四

江見水蔭	搦み蜘蛛	美貌の家庭教師と或青年の戀愛に貴公子痴漢毒婦等を配し戀と罪を抱いて恨長し	二、五〇 、一四
下村悦夫	悲願千人斬	土岐家の孤兒を守る豪僧白雲上人が義憤に燃ゆる千人斬、深刻極まる歴史小說！	二、四〇 、一四
前田曙山	大望	美貌の後室の執拗な戀と美男釆女——幕末の奥御殿に起つた戀と罪と復讐の物語	二、三〇 、一二
吉川英治	坂東俠客陣	念流極意の秘文を死守する美女を中心に怪盜劍客俠士美妓等入亂れ卍巴の大波瀾	二、四〇 、一四
本田美禪	血染の伽羅 前篇	元祿の大江戶、紅顏の若衆に仇と知りつゝ身を焦す美女あり、美婦を追ふ俠勇士	一、八〇 、一二
本田美禪	血染の伽羅 後篇	あり、忽然出沒する怪盜あり、波瀾又波瀾！面白い面白い哀戀濃艷の一大情史！	一、八〇 、一二
小泉長三	だゝつ兒羅漢	美男俠骨の家光の甥が、天下御免の大我儘に全國を股に不敵の大活躍！壯絕快絕	二、五〇 、一四
村上浪六	浪六名作選集	所謂浪六式の名篇中選りに選つた面白い傑作を收む意氣あり淚あり人情美の極致	二、三〇 、一二
筑波四郎	探偵十種	明治大正間の有名な事實譚軍旗の行方ピス强盜淸水定吉色仕掛美人の枕探し等々	二、〇〇 、一〇
筑波四郎	探偵事實奇譚	日英同盟の裏面、虛無黨の爆裂彈、カイゼルの密使等等々政治外交の祕密探偵譚	二、〇〇 、一〇

潮山長三	闇の森心中	美しき二人の姉妹の戀愛を中心に德川末期の時代相と肉慾生活の秘密を描寫す	二、〇〇 、一二
本田美禪	亂れ燒刃 後篇	道義より黃金、貞操より愛慾の大江戶に花の如き姉妹の戀の波瀾、繪卷物の如し	二、一〇 、一二
前田曙山	復讐 前篇	牢獄に呻吟廿年彼が脫獄以來の大冒險と血淚によつて決行する深刻なる大復讐譚	二、〇〇 、一二
福田琴月	靜御前	平家の沒落旭將軍の末路愛人義經の活躍佞人奸臣の懸策より生別死別の愛戀悲曲	二、五〇 、一二
奥野他見男	君は燃えたり火の如く	戀の美酒に醉ふ若き男女の囁き、有名な他見男先生の快筆紅き血汐は躍り立たん	二、〇〇 、〇八
窪田十一	肉の榮光	全身に燃えさかる情火の惱みの恐ろしい渦卷！美と淫蕩の甘泉に浸る肉の香り！	一、四〇 、〇六

政治・思想・隨筆・傳記其他

鶴見祐輔	中道を歩む心	我等は如何に生くべきか何を爲すべきか著者は赤心を披瀝して理想の境地を敍す	二、五〇 、一四
佐藤鐵太郎	新日本への道	熱血誠忠の著者が國體の眞髓を明かにし國民の行路を熟述、實に救世護國の快著	二、〇〇 、一二
鶴見祐輔原著 澤田謙譯	現代日本論	著者が米國大學に於て政治に思想に文藝に現日本を闡明し講述せる世界的の名著	一、六〇 、一〇

著者	書名	内容	定價	送料
林田龜太郎	日本政黨史 上卷	明治維新以來今日迄政黨の消長政局の變遷等波瀾萬丈の面白い我が憲政の活歷史	二、八〇	、一四
林田龜太郎	日本政黨史 下卷	著者は政界通の第一人者、政界に奮鬪した黨人志士の面目全卷に躍如たり。	二、五〇	、一四
久木獨石馬	人物 政界縱橫記	伊藤山縣西園寺始め現代政界の巨頭を物語り縱橫に解剖批評す、面白くて痛快！	二、二〇	、一二
林田龜太郎	政界側面史	明治以降政局の變轉大人物の活躍閥族葛藤の裏面等を如實に寫した面白い側面史	三、〇〇	、一六
日下部四郎太	二人行脚	博士の新著文書多日本見物記滑稽諧謔の中に人情風俗を知り學理と趣味の無盡藏！	三、五〇	、一四
鶴見祐輔	南洋遊記	椰子の葉蔭に涼風薫る全南洋の寶庫と樂園を叙す、高級觀光案内記としても上乘	六、〇〇	、一八
日下部四郎太	異國行脚	科學者の面白い世界見物記笑ひ乍ら世界の事情を探り自然と科學の謎を解た快著	二、八〇	、一四
鶴見祐輔	思想山水人物	世界の大人物を訪ひ思想を尋ね、詩想迸つては一木一草にも無限の感慨を托す。	二、五〇	、一二
松村松年	進化と思想	「自然は男性を虐待す」始め十三章、博士一流の生物學の蘊蓄と達識、緻細豐富	三、〇〇	、一六
丘淺次郎	煩悶と自由	生物學の見地から人類の退化說を斷言し文化を論じた有益で面白い人類の豫言。	上製 四、五〇 並製 二、八〇	、一六 、一四

著者	書名	内容	定價	送料
田山花袋	花袋行脚	旅行記物語としても面白い史蹟名勝を訪ねて歷遊せる	二、三〇	、一〇
鶴見祐輔	北米遊說記	單身米大陸に飛込んで彼地の名士民衆を相手に戰へる一年有半の熱血壯烈の手記	二、五〇	、一四
高島米峰	思ふまゝ	眞實銳鋒の筋線の下の力持等々人聞れば人を斬り馬聞れば馬を斬る痛快なる批判	二、三〇	、一二
松村松年	驚異と神秘の生物界	深く探れば探る程天理の神祕自然の靈妙驚くの外ない見よ世界學界評判の名著！	二、三〇	、一二
横山桐郎	蟲の世界を探ねて	蟲の世界にも熱烈な戀愛があり生活の問題があり爭闘もある著者一流輕妙の名文	二、二〇	、一二
服部純雄	[illegible] 雜草の花	理なる敏商家の純情熱涙迸つて、此の尊き人生記錄を爲す。無限の興味と感激！	一、八〇	、一二
佐藤紅綠	東西婦人觀	古今東西各地各界婦人の面白い有益な話　婦人問題重大な折、何人も必讀名著。	二、〇〇	、一二
澤田謙	エヂソン傳	傳記は面白い。殊にこの人間エヂソンの全面影を描いたこの書は實に面白い！	一、三〇	、一二
杉山茂丸	俗戰國策	伊藤山縣桂等の智囊として活躍した著者が公にした大事件の眞相小說以上面白し	二、五〇	、一六
鶴見祐輔	英雄待望論	世界の大偉人大政治家大思想家を熱血の筆にて描き讀者をして感奮興起せしむ。	、五〇	、〇八

著者	書名	内容	定價	送料
田中光顯伯	維新風雲回顧錄	幕末爭亂の間命を的に奔走した著者が當年の回顧錄、一讀血湧き肉躍る活歴史！	二、〇〇	一三
澤田謙	ムッソリニ傳	鍛冶屋の息子から出世した世界驚異の大英雄の面目躍如として小說よりも面白い	一、三〇	一三
本社編纂	明治大帝	大帝側近奉仕の顯官名士女官當時の事實を謹述し帝の御面影髣髴として感激無窮	五、〇〇	二四
ヘンリーフォード原著 加藤三郎譯	今日及び明日	一勞働者より自動車王となつたフォード氏が體驗より語る處世訓事業經營の要訣	二、二〇	一三
鶴見祐輔	壇上紙上街上の人	世界と日本各方面の人物の印象を語る。政治家文人女優等々各方面を網羅す。	二、七〇	一四
大瀧鞍馬	三井王國	巨人偉傑雲の如く活躍！今日の財界王國を現出せる眞相を描いて頗る面白い快著	二、〇〇	一〇
杉山茂丸	百魔	明治大正政界財界の裏面に重要な活動をした著者が遭遇せる有名無名の傑士を語る。	二、七〇	一四
杉山茂丸	百魔 續篇	痛快！驚くべき大事件の眞相巨人傑士の言動等目に見る如く快哉を極む	二、七〇	一四
北畠利男	歐米大人物立志傳	現代歐米の大實業家發明家等の苦心慘憺たる奮闘傳で全卷悉く血と汗と涙の記錄	一、八〇	一〇
大瀧鞍馬	三菱王國	奇略縱横大三菱を建設した快傑岩崎彌太郎氏の雄飛を描いて彼の面目躍如たり。	一、七〇	一〇
白雲樓學人	レーニン	彼の生ひ立ち思想交友嗜好革命運動の眞相等を赤裸々に解剖描寫した壯快な傑人傳	一、五〇	〇六
澤田撫松	大正婦人立志傳	我が婦人界に輝く十七婦人が有ゆる艱難誘惑に打克ち榮冠を得るに至る血涙記錄	一、八〇	一〇
後藤新平	英佛米首相官邸の姿鏡	ポアンカレー、ボールドウイン、アスキス其他歐米第一流人物に會見せる印象記	三、二〇	一〇
谷孫六	岡辰押切帳	岡辰老の金儲實際談、誰にも容易に實行出來る妙案續出！時節柄萬人必讀の名著	一、八〇	一三
井關十二郎	現代立身成功の近道	著者自身の體驗より偉人の名訓を引き興味ある實話を以て就職成功の要訣を說く	一、八〇	一三
安田與四郎	株式市場の表裏	著者は實際の財界通で加ふるに名文の人、何人も一讀忽ち株式必勝の法を知悉す	一、八〇	一〇
松枝保二	米國排日の實相	著者が親しく彼地にありて經驗せる排日の實狀八千萬國民への大檄文何人も讀め	一、五〇	〇六
本社編纂	大正大震災大火災	悽慘を極めたる大震災當時本社が危險を冒し撮影せる數百枚の寫眞と血涙の實記	一、五〇	一三
安藝愛山	家庭百話	お爺さんから女中さん迄誰にも面白い例話無限の教訓處女會等大部數の注文殺到	一、八〇	〇六
北原白秋編	現代民謡選集	民謡は民族の靈の詩である一度唄へば情緒纏綿綿々斷つ各地各流詩人十氏の傑作集	二、〇〇	一〇

白秋編 日本民謡作家集 …傑作を選んだ珠玉の名篇集 一、四…

近藤蕉雨 社會萬般番附大集 政治人事實業歷史文學滑稽俚諺洒落其他萬般何でも一目て役立つ未曾有の大寶典 三、〇〇 、一六

谷脇素文 川柳漫畫 うき世さまざま 名川柳一千句に獨特の名漫畫を配し世態人情を活寫し笑の中に教へらるる所多し 二、三〇 、一三

雄辯書類

本社編集 永井柳太郎氏大演說集 「西にレーニン東に原敬」始め有名な氏の代表的名演說集。眞に驚異の大雄辯。 一、五〇 、一〇

本社編集 鶴見祐輔氏大講演集 現代日本の有する世界的新人が世界の大勢文明の趨向偉人の面目を識る大雄辯。 二、二〇 、一三

本社編集 尾崎行雄氏大演說集 有名な桂公彈劾シーメンス事件間責普選の精神外氏一代の代表的演說を收む。 二、〇〇 、一〇

本社編集 賀川豐彥氏大講演集 弱き者の味方惱める者の助言者、見よ！火の如く燃えさかる人類救濟の大絕叫！！ 二、〇〇 、一三

本社編集 濱口雄幸氏大演說集 壯重の辯、堂々の識見、殊に氏の財政演說は天下無双金解禁近き今日萬人必讀！ 二、〇〇 、一〇

本社編集 犬養木堂氏大演說集 「無政府以上の惡政」「大臣責任論」を始め代表的の名演說集眞情切々人に迫る 二、〇〇 、一〇

… 大演說集 現代なる一大…

本社編集 高田早苗博士大講演集 大早稻田を建設せる教育界の先覺者、修養問題教育問題人生問題等眞に大識見！ 二、〇〇 、一三

本社編集 谷本富博士大講演集 時代を拔く大識見！世を恐れざる大情熱！戰爭を按じ英雄を論じ熱狂奮起せしむ 二、〇〇 、一〇

本社編集 加藤咄堂氏大講演集 通俗講演としては天下第一の人、何人にも面白く感激に富む。典型的大雄辯集。 二、〇〇 、一三

本社編集 中島德藏氏大講演集 高遠なる哲學倫理を俗に砕いて說く 滴瀝に思想に家庭に社會に舌端火の如し！ 二、〇〇 、一三

本社編集 下村宏博士大講演集 著者は我が新聞界の權威者國際、經濟、教育、婦人其他各種問題に一世の卓見！ 二、〇〇 、一三

本社編集 新井石禪師大講演集 參禪悟道の禪師が熱誠を傾けたる大講演集！禪機の妙諦、信仰の奧義を知らしむ 二、〇〇 、一三

本社編集 道重信教師大講演集 一世の高僧增上寺の貫主たる師が人生の惱を喝破し永遠の生命の爲所信を披瀝す 一、八〇 、一三

本社編集 模範的式辭挨拶五分間演說集 讀んで直ぐ役立つ現代名士の日常各種場合の名演說百數十篇社交禮法を附す。 一、八〇 、一〇

本社編集 テーブル・スピーチ あらゆる場合の卓上演說例を擧げ其要諦を會得せしむ活動せんとする現代人必讀 一、〇〇 、〇六

著者	書名	內容	定價	送料
本社編輯	（演說資料）逸話集	演說に座談に巧みに之を引用せば、對者に感動を與へ說話の効果を高からしむ	一、八〇	、〇六
本社編輯	青年雄辯集	鶴見祐輔森戸辰男其他現代に活躍する諸氏が青年時代の處女演說出世演說を收む	二、〇〇	、〇八
本社編輯	泰西雄辯集	デモステネスよりリンコルンに至る史上に輝く英傑の大獅子吼集何人も奮起熱狂	二、〇〇	、〇八
加藤咄堂	雄辯法講話	「雄辯家たらんとする者は本書によりて學べ」と小久保喜七氏が激賞せる名著	二、〇〇	、一四

少年少女讀物

著者	書名	內容	定價	送料
佐藤紅綠	あゝ玉杯に花うけて	豆腐を賣り乍らチビの少年千三が種々の困難と戰ひ大學を卒業する熱血湧く物語	一、五〇	、一二
佐藤紅綠	紅顏美談	少年の日の愉快友情冒險等を描いた熱血美談小說少年俱樂部で熱狂された大讀物	一、三〇	、一〇
西條八十	少年詩集	日夜之を愛誦して剛健なる志氣と美しき情操とを養ふ我が國最初の少年詩集！	一、五〇	、〇八
柚木卯馬	發明美談	あらゆる困難と戰つて人の爲世の爲立派な大發明を完成するまでの感心なお話！	一、三〇	、一〇
高垣眸	（海洋冒險）龍神丸	孤島に隱された秘寶を中心に勇俠の龍太郎少年が海賊 [illegible]	一、六〇	[illegible]
吉川英治	神州天馬俠 第一卷	織田德川の軍に滅びた武田の遺子伊那丸が富士の裾野に擧兵再擧を圖る壯烈な話	一、八〇	、一二
吉川英治	神州天馬俠 第二卷	伊那丸を守る鷲使ひの少年竹童荒法師忍劍二千の野武士を使ふ咲耶姬あり大活躍	一、八〇	、一二
吉川英治	神州天馬俠 第三卷	八犬傳も及ばぬ面白い讀物少年俱樂部に五年間連載し滿天下の少年熱狂の大傑作	一、五〇	、一二
高垣眸	豹の眼	インカ帝國の再興を計る杜夫少年が兇惡な怪賊と身の毛もよだつ大爭鬪の物語！	一、六〇	、一〇
行友李風	破軍星	幕末の騷がしい京都や大和路に出沒する巡禮姿の美しい娘の悲壯な物語	一、三〇	、〇八
大倉桃郎	少年戰線	貧家の一少年が働いて家計を助け不遇の友を救ひて向上の一路を進む感激の譚。	一、三〇	、〇八
大倉桃郎	曉の歌	父を失つた歐の少年が母に孝養しつゝ苦學し父不良少年を改悟させる感心な物語	一、三〇	、〇八
大山千代雄	プリユタータ英雄傳	ナポレオンも本書を讀んで偉くなつた。成功を欲する少年は皆讀め！	一、〇〇	、〇六
上井磯吉	健男兒	少年少女の涙を絞り心を美しくする物語集。世界的評判のクオレの飜譯。	、七〇	、〇六
宮尾[illegible]	[illegible]	可愛い弱い小動物の [illegible]	一、[illegible]	[illegible]

著者	書名	内容	定價・送料
宮尾しげを	輕飛輕助	體は小さいが强い〳〵[illegible]巨人島や小人島を征服するとても面白い〳〵滑稽物語	一、三〇 、〇八
水守龜之助	涙の握手	王子と生れ乍ら零落した美少年が苦難と戰ひつゝ仇を討ち國を興す涙の物語！	一、四〇 、一〇
宇野浩二	春を告げる鳥	面白い〳〵童話集、寺内萬治郎先生の美しい挿繪が澤山、子供さんだち大喜び！	一、五〇 、〇八
水谷まさる	薄れ行く月	妙へなる音樂を聞くやうな詩物語須藤しげる先生の挿繪と共に恍惚とさせられる	二、〇〇 、一〇
横山美智子	緋の光り	全校の誇りとなるやうな感心な少年健氣な少女の物語思はず涙ぐまれる實談小説	一、三〇 、〇八
吉屋信子	三つの花	父なき家の三人の姉妹が互に助け合ひつゝ立派になつてゆく面白い涙の美談小説	一、八〇 、一〇
加藤武雄	君よ知るや南の國	音樂家を父母に持つた美少女が孤兒となり艱難辛苦の末花形音樂家となつた物語	一、八〇 、一〇
片岡鐵兵	薔薇の戯れ	美しい文章で綴られた哀しい物語で全國の少年少女が大騒ぎの抒情小説集！	一、五〇 、〇八
平井晩村	涙の花	貧しい少女の初奉公、父なき少年の哀しみなど美しくも哀れな少年少女の小説！	一、二〇 、〇六
川島櫻一郎	血戰記	鎮西八郎爲朝、正成、義貞、謙信を始め國の爲命を惜まぬ日本男兒の感激深い物語	一、五〇 、一〇

著者	書名	内容	定價・送料
加藤まさを	消えゆく虹	秀江といふ少女の友愛、汎三少年の正義其他思はず泣かされる美しい繪入物語。	一、八〇 、一三
吉川英治	ひよどり草紙	逃げた秘鳥を尋ね父の命を救はんとする美しい少年と少女が惡人と戰ふ苦心物語	二、〇〇 、一〇
佐藤紅緑	毬の行方	美しい健氣な少女を中心に涙ぐましい友情愛を描いた物語、面白くて堪らない！	一、五〇 、一〇
宮田東峰	ハーモニカ奏法	樂器の持方から息の使ひ方ベースのつけ方其他本書を讀めば誰でも容易に上達す	一、三〇 、〇八
宮田東峰	ハーモニカ樂譜	少年少女が心ゆく迄吹く勇ましい曲戀しい曲日本西洋有名な曲は悉くあります。	二、〇〇 、一三

金言

書籍は今も尚奇蹟を行ふ、即ち人をして悟らしむるなり。

（カーライル）

〜〜〜◁御注文には▷〜〜〜

……以上の本は全國書店にあります、若し賣切の時は、御注文あれば書店は喜んで本社から取寄せて差上げる筈です。

……書店へ遠い方は直接本社へ御注文下さい。本社への御注文はすべて前金に願ひます。

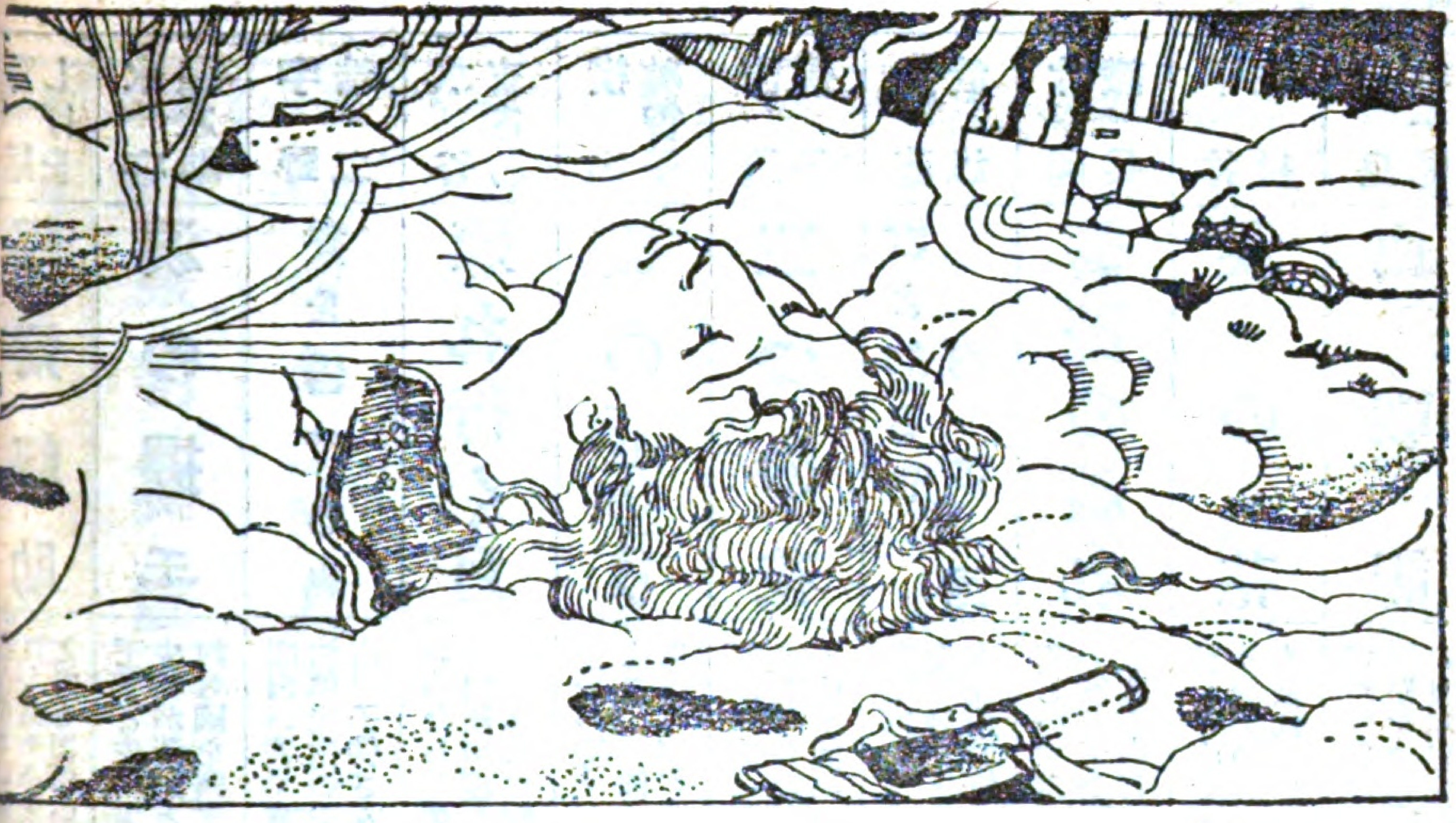
……御送金は振替貯金が最も安全且つ便利です。

振替口座　東京三九三〇番

大日本雄辯會講談社

……爲替や郵便切手の御送金は書留に願ひます。切手は成べく大きい金額のもので必ず一割増に願ひます。

……代金引換、集金郵便は本社では扱ひません。



—犯人探し大懸賞づき—

探偵小說

宙に浮く首

大下宇陀兒
齋藤五百枝畫

雪中の死美人

一

信濃の高原は、まだ深い雪の中に眠つてゐた。

そこは、諏訪湖から出た天龍川が兩岸に嶮しく迫つた山峽を拔けて、もの丶五六里程も奔り下つたところに當る、假名飯沼村といふ靜かな農村——。

前夜から曉へかけて三尺餘りも降り積つた雪を蹴立て丶、その日村の巡査駐在所へ、最初の發見者樋口敬三の馳け付けて來たのが、もう正午を少し過ぎた頃であつた。

『た、大變です！　人殺しです、妹が殺されました！』

敬三は、受附の窓口へ獅嚙みつくやうにして、息を切らし切らし叫んだのである。



折からその受附には、壁の柱時計がカチカチと眠たさうな音を刻み、二人の巡査が何を見るでもなく、ぼんやりと外面を眺めてゐた。いつたいが平穩な、餘りに平穩な村である。この十數年間といふもの、血腥い事件などは一度たりとも起つたことがなく、殊にその日は大雪のあとがカラリと晴れて、街には暖かい陽が眩しく照り、古びた家々の軒からは、解けかゝつた雪がズズッと辷つては落ちて來る、さうした長閑な村なのだつた。

『な、なに、人殺しだつて――？』

巡査が二人共、自分の耳を疑ふやうに、キョトンと眼を瞠つたのに無理はない。だが敬三は、顏色を草の葉のやうに蒼くして、すぐには次の言葉が出ない程に狼狽てゝゐた。

『そ、さうです、來て下さい、早く、早く！』

『場所はどこだ？』

『裏です、自宅の裏の空地です！』

『自宅といふと藤の湯だな？』

『そ、さうです、窯場の後でやられたんです。今、殺されてゐるのを見付けたんです！』

『よオし！』

巡査は、漸く眞劍な顏色になつた。一人が長靴へぐいと足を突込むのと、一人が壁の外套を引掴むのとが同時である。

敬三を先頭に、三人はバラ〳〵と駐在所を走り出した。

――事件の起つた現場は、樋口敬三の經營してゐる藤の湯といふ浴場の裏手。そ



こは、巾一間程の里道に沿つて、湯の落し水を流すための汚い溝に區切られた十五六坪の空地であるが、里道から見た左手の方には窯場があり、それと直角の位置に、燃料の薪を積み込んだ納家が見える。

その窯場と納家から各〻七八尺ばかり離れたところに、掻き退けられた雪の中から、ニユツと若い女の首が突き出してゐたのであつた。顔には、左程ひどい苦

創の痕はないが、田舎ながら近頃流行りのウエイブをかけた束髪が、ビッチヨリと雪に押し潰されて、美しい額にも四五本の髪の毛が粘りついてゐる。馳けつけた巡査が、注意深く首から下の雪を除けると、仰向けになつた胸が兩腋の方へ無殘にはだけて、然も、そのあたりの雪が、どす赤い血の色に染つてゐた。

後に現場へやつて來た警察醫ですらが、アツと顏を反向けたことには、その死體の胸に二つの致命傷がパクリと口を開いてゐたのである。(致命傷といへば、普通は只一つに限るものらしい。それを、二つの致命傷といふのもへんなものだが、しかし、事實であるから仕方がない。)

一つは左乳下を鋭い出刃樣のもので只一突きにした深い傷痕。

他の一つは、右乳下肋骨の外れから殆んど腹部へかけての、同じ刃物でやつたらしい大裂傷。

然もそれが殘忍にも、その右胸部肋骨下の大裂傷が、刃物で明かに數回抉つてある。

血と雪と、蒼ざめた肌と派手な着物と。

噂がパツと擴がつたと見え、そこへは村の誰彼が次第に蝟集して來たのであつたが、彼等もその凄慘な有樣を見るや否や、一樣にハツと顏を反向けて了つた――。

被害者の名は樋口妙子。年十九歲。樋口敬三の妹なのだつた。

一家は敬三と妙子と、もう一人半年程前に敬三が妻君として迎へた美代子といふ女との三人暮らしで、その美代子は、巡査より稍遲れてそこへ馳けつけて來た。恰度その日は、敬三一家の親戚に葬式があつて、美代子はその手傳ひに行つてゐたのである。彼女は歸つて來ると同時に、無殘な義妹の死體を見て、ガタガタと恐ろしさうに身顫ひした。

二

敬三に訊ねて見ると、彼が妹妙子の死を發見したのは、晝飯を濟ましたその直後のことであつた。

彼はボツボツ時間が來たので、晝飯後窯へ火を入れる仕度にとりかゝつて、納家へ薪を取りに行つたのである。そしてその時、ひよいと足を踏み損なつて、ひよろひよろと納家の前の雪の中へ蹣跚けて行つたが、ふとその足の下へ、何か妙に軟かいやうな硬いやうなものを踏み付けたと思つた。

『それでその、まさかこんなことになつてゐるとは思はずに、何氣なく雪を搔き退けて見たんです。――その前から、妹が家にゐないので、どうしたのかと思つてはゐましたけれど。』

その時のことを憶ひ出してか、かういつてゾツとしたやうに口を噤む敬三を眺めて、巡査は『フム』とばかり頷いた。

『ではナンだね、前々からこの殺された當人が、家にゐないことだけは不審に思つてゐたのだね？ いつたい、君が生前の當人を最後に見たのは何時なのだ。』

『はい、それが實は、昨夜の宵の口に、一寸妹と口を利いたきりなんです。それからこつち、到頭一度も妹の顔を見ませんでした。』

『昨夜の宵の口からといふと大分長い時間になる。同じ家に住んでゐながらどうしたわけだね？』

『昨夜は、女房の美代子と一緒に、親戚へお通夜に行つてをつたのです。それで、お通夜に出かける前、多分八時頃だつたかと思ひますが、湯の方は妙子に賴んで、番臺にも坐つて貰ふことにしました。私達はお通夜の方で昨夜一晩を明かして了ひ、美代子はそのまゝ手傳ひを續けることにして、私だけが今朝早く歸つて來たのです。』

『歸つて來た時、矢張り當人はゐなかつたのかね？』

『ゐませんでした。一寸妙なことだとは思ひましたが、何處かへ用達しに行つたのだらうと考へただけで、私は疲れてもゐましたし、歸つて來ると、すぐに炬燵へ入つてぐつすりと一眠りしたのです。』

『その眼が覺めた時にも、矢張り當人はゐなかつたわけだナ？』

『さうです。その時は私も大分不審に思ひました。晝飯の時刻ですし、何處へ行つたのか知らないが、もう歸つて來てもよささうなもんだ、とそんな風に思つたんです。――が、待つてゐてもいつ歸ることやら分らないし、それで一人きりで晝飯を濟まして、先刻申上げた通り、それから窯へ火を入れようかと思つたところなのです。』

敬三の申立には、大體に於て怪しいところはなかつた。後に調べたところによると、敬三夫妻が前夜親戚へお通夜に行つてゐたといふのも嘘ではない。只、敬三にしろ美代子にしろ、當夜果して四六時中その親戚にゐたか否か、その點だけが少しく曖昧であつた。といふのは、當夜お通夜の席上には、田舍のこととて、親戚ばかりでなく近所の人々が多勢詰めかけて來てゐて、そのため家の中は非常に混雜し、誰一人、敬三夫妻の行動を一々記憶してゐるものがなかつたのである。

『その混雜に紛れて、敬三なり美代子なりが、昨夜のうちに一度自宅藤の湯へ立戻り、さうして恐ろしい殺人を犯したのではあるまいか。』

少くとも巡査の一人は、ふと、そんな風にも考へて見た。無理もない。そこには嫁と小姑との間柄で、美代子と被害者妙子とが、あまり圓滿ではないなどといふ噂もあつたのだつた。

それは兎に角、かうして駐在所の巡査が一通りの取調べを進

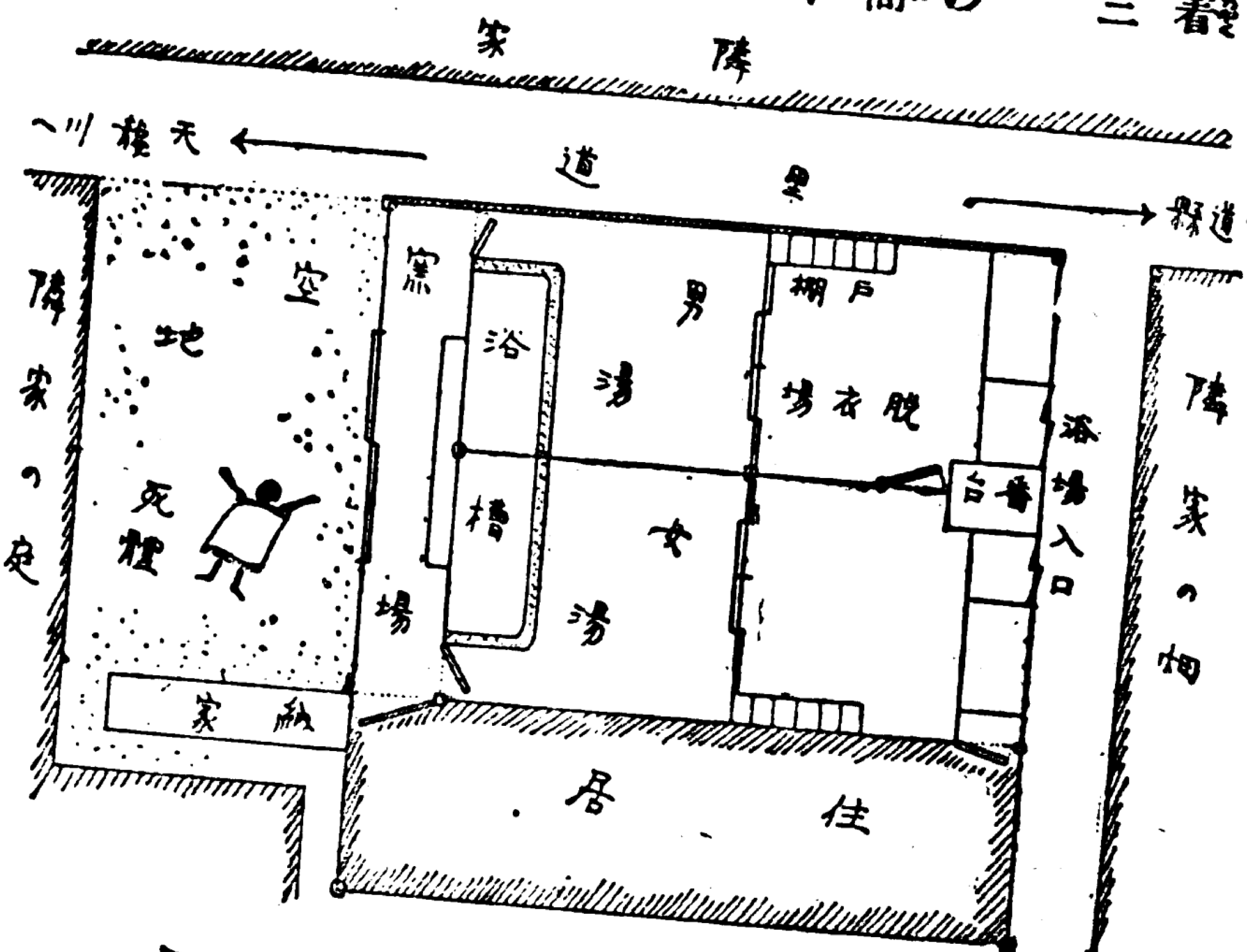
める間に、事件突發の報告は、無論所轄伊那町の警察へも達してゐた。署長以下数名の係官が、その中に敏腕の名を謳はれた警部補峯島司法主任をも加へて、物々しく現場へ到着したのは、その日も午後三時近い頃である。

その時は、先刻までの暖い陽射しが、いつの間にか薄れて來て、ピリ〳〵する高原特有の寒さのため、半分解けかゝつてゐた雪道も、もう固く〳〵凍てついてゐる。

長靴に雪の音を軋ませながら、係官達は間もなく現場の檢證に取りかゝつた。

『死後約十五時間經過、從つて犯行は前夜の午後十時より十二時まで。致命傷は左胸乳下の突き傷、他に、右胸部に致命傷以上の深手一ヶ所。』

警察醫の言葉につれて、同行の書記はそれを手早く手帳に寫し取つて行く。



樋口敬三方見取圖面

『現場附近には、被害者の所持品以外遺留品なし――』といふ刑事の報告。

やがて一行は、家人敬三と美代子とを再び訊問しようといふことになつた。そしてそれには、浴場の脱衣場を假の調所に當てることとなつた。

その調所へ、一行がドヤ〳〵と入つて行かうとした時である。

窯場の口、即ち藤の湯の裏手から、ひよいと顔を突き出した男があつた。

黒いソフトに暖かさうな毛皮の襟の二重廻しを着て、しかし、非常に上品な、お能の面にも似た容貌の持主である。

年頃は四十五六といふところでもあらうか。

『呀ッ！』

時も時、所も所である。一行中でも、殊に司法主任峯島警部補が、ハッと思つたのに無理はない。

だがその人物は、悠々と一同の傍へ歩み寄つて來た。そこには、屍體がまだ筵をかけたまゝで横たへてある。彼は無言の



ま〻、その席を剝がして、ちつと被害者の顏や胸の邊を覗き込んだのだつた。その態度には、四邊にゐる警察官達をまるで無視したやうなところがある。

『君、君はいつたい何者だ？』

峯島警部補は、最初一寸氣を呑まれた形だつたが、やがて鋭くかういつて叱りつけた。

『あ、私ですか。』

その男は平然と答へた。そして懷中から名刺を取出して警部補に渡した。

『村松俊太郎――？』

警部補は小聲にその名刺に書かれた名前を讀んで見たが、聞いたこともない名前である。名刺を手にしたま〻、猶も疑ひ深く對手の顏を眺めてゐると、その村松氏は口許にかすかな笑ひを浮べた。

『いや、私はこの村のものです。――私がこ〻へ出しやばつては、御迷惑になりますか。』

その態度には、どことなく不氣味なところがないでもない。その時、駐在所の巡査が一人、峯島警部補の耳に口を寄せていつた。

『峯島さん、これは村の資産家さんです。何か知つてゐることでもあるんぢアないでせうか。』

警部補は、再び村松氏の姿を見上げ見下した。

『あなたはナンですか、何かこの事件について、特別な關係でもあるのですか。』

『いや、關係などはありません。』と村松氏は答へた。『實は私は、かうした事件に非常な興味を有つてゐる男なんです。多少は御手傳ひになるかも知れませんし、いかゞです、御一緒に浴場の方を調べて見ませんか。』

警部補が何とも答へないうちに、村松氏は一人呑込で、先に立つて屋内脫衣場へ廻つた、不思議にも一行中、誰もそれを妨げようといふものがない。一種の眼に見えぬ力で引張られるかのやう、係官達はゾロ〱とその後へ從つた。

表から廻つて、番臺の横の硝子戸をガラリと開けると、その時村松氏は、脫衣場の薄べりの上へ四つん這ひにな



つて、もう頻りと何かを探してゐたところである。

『なんだ此奴は！　まるで下手な探偵のやうな男ぢやないか。』

ふと、峯島警部補はさう思つた。

彼はまだ村松氏に關して、何等の豫備知識をも有つてゐなかつたのだつた。

三

こゝで一寸村松俊太郎なる人物について說明して置く。

駐在所の巡査が警部補の耳へ囁いたやうに、氏はこの飯沼村でも屈指の資產家であつた。代々この土地に住んでゐたといふのではなく、十四五年前、何處か關西の方から移つて來た人である。事件の發生した藤の湯から三四町離れた小高い丘、その邊一帶の地所を買つて、村としては珍らしい赤煉瓦張りの洋館を建てた。村の人々とは餘り

交りを深くせず、いつもその洋館の奥深く住んでゐるので、最初はいろ／＼の噂があつた。元は關西で高利貸しをやつてゐたなどといふものもあれば、或は世に隱れた學者だなどといふものもある。が、そこで十四五年もそこに居付く間には次第に村の人の評判もよくなつた。村の自治問題に關しては殆んど口出をしないけれど、その辨天龍川の護岸工事や村道の修理などには充分な寄附を惜しまなかつた。結局、その素性に關する惡い噂は殆んど消えて、今では隱れた大學者であらうといふ說が有力である。といつて、ではどんな方面の學者であるのか、又いかなる研究をしてゐるのか、その點は一向に分らなかつたけれど、非常に隱遁的な人物で、いつも自邸の奥深く閉ぢ籠つてゐる。それで、多分讀書ばかりしてゐるのだらうと、そんな推測があつただけであつた。

兎に角、現場に居合せた係官達ばかりでなく、村の人達も村松氏の性格なり嗜好なりを餘り深くは知らなかつた。この平穩な村へ突然に起つた殺人事件へ、村松氏が自ら好んで乘出して來たのを、人々は皆不思議さうな眼で眺めたのである。

それを知つてか知らずにか、彼は脱衣場で熱心に何か探してゐる。

係官は互に眼を見合せた。そして峯島警部補は不機嫌にいつた。

『君、それではどうも困るぢやないか。何をする心算なのか知らないが、無關係な人がこゝにゐて呉れては困るのだよ。』

だが村松氏は、相變らずの微笑を警部補に向けた。

『矢張りお邪魔になりますか。はゝゝ、いや、甚だ御道理千萬です。では、私はこれで失禮を致しますが、しかしどうです、多分あなた方の方でも、昨夜この藤の湯へ入浴に來た人間を一々お調べになることでせう？』

いはれる迄もなく、その時は刑事の一人が、昨夜の入浴者を順々に手繰つてゐた時である。主人樋口敬三の言葉から、被害者が當夜浴場の番臺に坐つてゐたことは確かだつた。それならば、殺されたのが夜の十時から十二時までの間と見て、恰度その頃に入浴してゐた者を調べさへすれば、何かの手懸りを摑める筈なのだつた。

『御指圖は受けなくともよろしい。無論さういふことは當方で調べてゐます――』

警部補がいふと、村松氏は滿足さうに頷いた。

『いや、指圖すると思はれては迷惑です。が、そこで入浴者の名前はもうお分りですか。私はこれで、先刻からそれを調べにかゝつて、一寸閉口してゐるところなのです。何故といつて、昨夜は恰度九時頃から雪がひどく降り出したため、急に入浴者の足がバツタリと止まつて了ひました。尤も、九時半頃ま

十二月十八日

東京 發賣!!





婦人倶樂部は毎號飛ぶやうな賣行!
早く書店へお申込になれば賣切れても心配が御座いません

くる節を

▲名士名流婦人嫁づる婿づる物語（明るい賑やかな興味多い愉快な物語です。）

▲美人で評判の奥様の美容法座談會（評判美人の奥様方が打明けられた美容秘訣！）

▲明治大正十美人物語（名花中の名花十人のまだ世に知れぬ愛と涙の物語！花やかな生涯の中に秘められた謎の後日物語です。）

▲特別記事 昭和の孝子節婦物語

親に孝、夫に貞節、それは血と涙に彩られた物語です。特に昭和の御代のこの

では入浴者があつたやうです。そしてその頃は、あの被害者の娘さんがちやんと番臺にゐたらしいのです。が、殘念なことには、肝腎の十時頃から後、誰がこゝへ入浴しに來たのか分つてゐません。私は、今、そいつを探し出さうとして苦心してゐるわけなんですが、兎に角あなたは、一つこの手帳でも見てゐて下さい。』

村松氏が警部補の眼の前へ差出した手帳は、ポケット用の極めて小型のものだつたが、開いて見ると、表紙から五六枚目に、ずらりと人の名と時刻とが書き並べてある。

『昨夜の入浴者の名前ですよ。上に書込んであるのはその人間が入浴してゐた時刻でしてね、田舍のことですから、入浴者の數も少いし、それに、この邊の者はお互に顏見識りだから雜作ないです。宵の口の入浴者から順々に訊ね合せて行つて、兎に角、九時半までは調べましたよ。』

かういひ捨てたまゝ、一同の方へくるりと背中を向けて、再びその邊を懸命に探し出す村松氏。

『待てよ、これアどうして、下手な探偵どころぢやないぞ。』

その村松氏の姿を眺めて、峯島警部補は初めて思つた。入浴者の名前を調べるなどといふことは、實際の探偵術としてさう困難なことではない。が、それにしてもかうまで短時間のうちに調べるのは、餘程熟達したものでないと出來難い。

考へてゐるうちに、しかし村松氏は警部補の意向などにはまるで無頓着。脫衣場の壁にかけてあつた鏡の中を覗いて見たり、火鉢に突き差してあつた卷煙草の吹殼を一本一本取上げて見たり、驚くべき細心さでそこを探し廻つてゐた。

『失禮ですが、あなたはかうした事件の搜査に、何か從事したやうな御經驗でもお有りなのですか。』

ふと、警部補はそんなことを訊いた。

村松氏の答へはない。が、次の瞬間、ひよいとこちらを振向いた顏には、包み切れぬ揶きがあつた。

『いや、初めてですよ。』

いひながら、右手の人差指を大切さうにして警部補の前まで持つて來た。見ると、白つぽい粉がその指の先に附いてゐる。

『ありましたよ峯島さん。これはあなた、小麥の粉だと思ひますがどうでせう。』

なるほどそれは小麥の粉に違ひなかつた。が、警部補には一寸譯が分らない。

『小麥だとするとどういふことになります。』

『さア、どうなるかまだはつきりとは分りません。が、そこで一寸先刻の手帳をお貸し下さい。多分、そこに書いてある名前のうちには、米穀商の名前などはなかつた筈です。』

小說中の探偵とは違つて、推理の立て方は極めて平凡。だ

が、それだけに又峯島警部補は、村松氏のこの發見に、甚だ重大な價値を認めざるを得なかつた。

村松氏のいつたやうに、犯行時、即ち九時半以後の入浴者を知るといふことが、此際非常に大切だつた。それが今村松氏の發見によつて、急に手懸りがつきさうになつたのである。小糠は衣服戸棚の中に零れてゐたものであつた。農家の多い田舍とはいへ、この嚴冬に小糠の附着した着物を着てゐるものは滅多にない。

『兎に角、その方面を當つて見ることですね。』

村松氏は、警部補の顏を眺めて靜かにいつた。

『やりませう！』

警部補は答へた。

折から暮れに近づいた雪道を目して、二人の刑事がすぐに藤の湯を出て行つたのだつた。



四

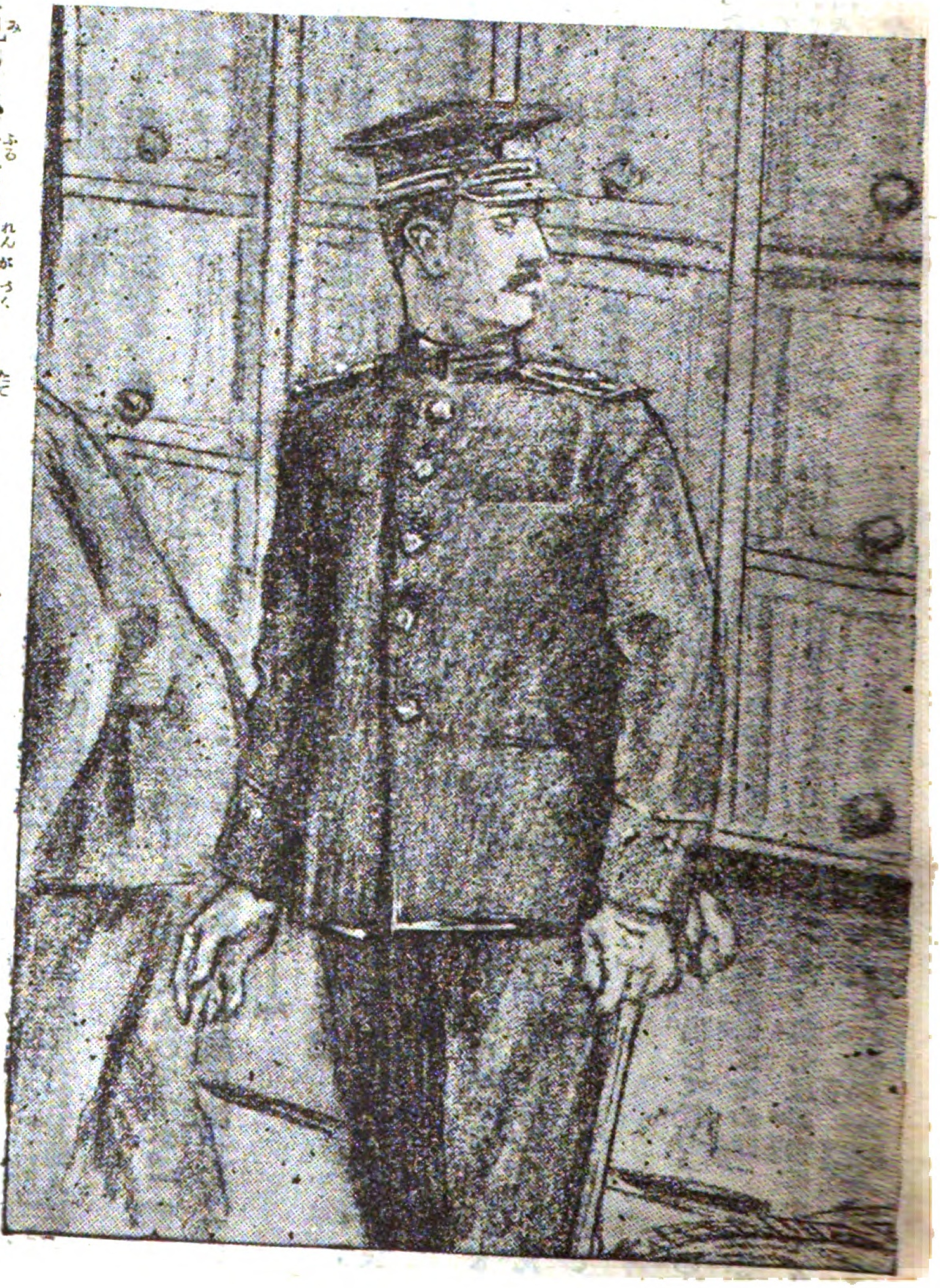
村松氏が隱れたる犯罪研究家であるといふ噂が、急にその附近一帶へ擴がつて行つたのは、實にかうしたキッカケからであつた。

その日、村の駐在所を臨時捜査本部と決めて、間もなくそこへ引揚げて行つた峯島警部補の一行が、それから後いかなる行動を執つたのか、その詳しいことは省略する。彼等がそこへ引揚げる時、一旦別れを告げた村松氏を、警部補がその自邸まで、わざ〱訪問して行つたのは、その夜も七時を過ぎた頃である。

風はなかつたけれど、氣温が零度下七度といふ寒さだつた。それに村松邸へのだらだら坂は、一旦解けた雪が凍つて了つて、警部補は幾度となく足を取られさうになつた。

漸くにして玄關まで辿りついて見ると、古びた煉瓦造りの建物は、雪と氷柱とに覆はれて、巨大な墓石のやうな靜けさである。

ベルを押して少時待つた。



『や、よく來て下すつた。』

自ら玄關まで迎へたのは村松氏である。長靴を脱いで上ると、そのとつつきがすぐに應接室になつてゐて、そこには赤々と石炭の火が燃えてゐる。厚ぼつたい窓掛やどつしりとした飾

戸棚。外見の淋しさは兎も角、凡ての調度が主人公の上品な容貌にしつくり合つて、警部補は漸くそこでホツとした。

『あれから後はいかゞでした？』

村松氏は暖爐の前の肘附椅子を客に勸めて、自分もそれに並んで腰を下した。

『そのことについて上つたのです。』警部補は少し堅くなつて答へた。『實は、あの時のお話に基いて、早速村の米穀商と、それから精米をやつてゐるものとを取調べました。』

『なるほど。精米の方は、そいつは私も氣付きませんでしたね。――で、結果は？』

『そこなんです。結果はお說の通り、昨夜の犯行時前後に、與七といふ男が藤の湯へ入浴に來たことが分りました。唐澤與七といつて、天龍川の岸で水車業をやつてゐる男なのですが、多分御承知かと思ひます。』

村松氏はそれが癖であるらしい、顋を萬遍なく撫でながら、一寸の間記憶を呼び起さうとする風であつたが、やがて輕く膝頭を打つた。

『あ、分りました。それは與七などといふよりは、瘤七といつた方が分り易いです。少し低能で、それに額に大きな瘤のある男でせう？　あの男なら私も時々顏を見て、立話などしてやつたことも數回あります。――ぢやア、あの男が入浴したといふのですね。』

瘤七といふのは、別名を又阿呆の與七ともいはれてゐる。自分自身はそれ程ひどい低能ではないが、仙太といふ子供が一人あつて、その仙太は全くの低能だつた。村の人家とは少し離れた天龍川の岸に水車小屋を持つてゐて、そこに父子二人きりの暮らしであるが、低能は低能なりに、子供の仙太を普通人以上に可愛がつてゐるとのことであつた。

『さうです。その與七即ち瘤七が來たといふのですが。』警部補は頷きながらいつて、しかし稍當惑の色を顏に浮べた。『彼が實は、甚だ妙な證言をしましたので――』

『與七がですか。どんなことをいつたのです。』

『つまり、重大な手懸りになりさうでゐて、それが一向に他愛のないことなのです。』

村松氏の態度は非常に冷靜だつた。が、瞳だけがその態度を裏切つて、あらゆる熱心さに燃えてゐた。その村松氏の顏を見詰めながら、警部補の語つたところは、大體次のやうなものである。

即ち、村の米穀商達を順々に駐在所へ呼出して行つて、その四人目に出頭したのが與七であつた。警部補はその時、與七が多少低能であることをまだ知らなかつた。與七は非常にオドオドとして這入つて來る。それで彼は、ふとこの男が犯人なので

はないかとも思つたさうだが、それはすぐに傍の巡査に耳打ちをされて事情が分つた。

『お前は昨夜、藤の湯へ行つたナ。』

『へい、參りました。』といふ正直な答へ。

流石に警部補はドキリと胸を躍らせて、それからだん〜に訊ねて見ると、その入浴した時間は、はつきりとはしないが多分十時頃のことであつたといふ。

『湯の中には、お前の他に誰かゐたか。』

『へい、儂が一人きりでございましただ。』

『女湯の方はどうだつた。』

『さア、よく分りましねえが、ひどくしーんとしてゐたで、誰もゐなかつたづらと思ひますだが——』

與七はこゝで一寸言葉を濁らして、不安さうに警部補の顏を見上げたといふ。そして急に聲を潜めて、その時被害者の妙子が、それまでぢつと番臺へ坐つてゐたのを、與七が湯から上る少し前、つと立上つて奥へ這入つたといふことを述べた。

『儂はね、あの時妙子さが殺されたのぢやアねえかと思ひますだ。いんにや、何も儂はそれを見たつちうのではねえけれど、娘つ子はそれつきり顏を出さなかつただ。』

『何か、裏の方で叫び聲のやうなものでも聞えなかつたか。』

『そいつはどうも、ねつから氣が付かなかつただが——』

甚だ漠然たるものではあつた。だが、その次に彼のいつた言葉が、實に重大な意味を有つてゐたのである。

即ち、彼はその時何も知らずに藤の湯を出た。そして建物の角を、あの一間巾の裏道に沿つて、水車小屋へ歸るべく左へ曲がつた。すると恰度その藤の湯の横手の壁を、あと二三歩で行き過ぎようとした時である。その時は盛んに降り出した雪が、もう一尺近く積もつてゐたとのことであつたが、彼は何心なく横を振向いて、ゾクンと肩を縮かめた。左手の空間に、胴體も何もない一つの首が、ぶらりと浮いてゐたのである。首は頭に何か黑い尖がつた帽子を冠つてゐたさうである。そして、眼玉をキラリと輝かせたさうである。彼は、それを見た瞬間、思はずギヤツと叫び聲を擧げて、一目散に逃げ出して了つた。それが何者の首なのか、男女の別さへ見別ける暇はなかつたといふ。

『儂は、あんな恐ろしい目に遭つたことは、今までに一度だつてござんしねえ。』

與七はさういつて、怯えたやうな顏をした。——といふ話。

語り終つて峯島警部補は、まじ〜と村松氏の顏を覗き込んだのである。

『まあ、かういつたやうなわけなんです。首が宙に浮いてゐたなんて、甚だ他愛ないことのやうにも思ひますが、被害者はああして、別に首を切り離されたのでもありませんし、いつた



い、どうしたといふことなのでせう。』

首の話を、他愛ないなどといひながら、その實警部補も、少なからず氣味の惡さうな面貌だつた。

村松氏も、その警部補の物語を聞くうちに、益々瞳の光を増して來た。

一通り聞いて了つた後、少時は『フム』といつて腕を拱いたまゝ、ぢつと考へに沈んでゐる。

『いかゞでせうな村松さん？』

警部補が一度いつたけれど、それには返事さへもしなかつた。

さうして、やがて何思つてかプイとその席を立つた。一旦應接室を出て行つ

たかと思ふと、間もなく、洋服に厚いオーバーといふ姿に着換へて來た。

『峯島さん、出掛けませう。』村松氏はいつた。『うまく行くと、犯人がすぐに捕まるかも知れませんよ。』

『え、ほんとですか！』警部補は思はず叫んだ。

『ほんとですとも！　あなたは是非一緒に行つて下さい。多勢行くと反つていけないかも知れませんが、ピストルだけは携帶させて下さい。』

五

峯島警部補には何が何やら分らなかつた。村松氏が、それつきり一言も口を利かなくなつたからである。

が、半分は魔術にでもかけられたやうな氣持で、それから村松氏の導くまゝに隨いて行つた。

村松邸前の坂を下つて右へ折れ、少時は凍りついた町通りを眞直に、やがて近づいたのは、藤の湯からは二町ばかり北の、鬱蒼たる杉の森であつた。そこは恰度、村の人家と與七の水車小屋との中間に當る。

『寺ですね？』

警部補は思はずいつた。森の入口に朽ちよろめいた山門があつて、そこに玄雲寺といふ朧氣な文字が書かれてゐる。

『さうです。』と村松氏は低く答へた。

『この寺に犯人がゐるのですか。』

『ゐるかゐないか、兎に角、和尚に會つて見るのです。玄雲寺ですから、和尚一人しかゐませんけれど。』

『和尚に會へば分りますか。』

『多分分りませう。非常に變つた男なんです。――が、靜かにして下さいよ。覺られると面倒ですから。』

雪が積もつたまゝ、そこには一人二人の歩いた足跡だけが殘つてゐる。山門から庫裡の前まで、二人はサクリ／＼と雪を踏んで近づいた。

中には洋燈が點いてゐると見えて、戸の隙間からかすかな光が漏れて來る。

村松氏は、戸に耳を押しつけて、ぢつと中の氣配を窺つた。森閑として物音一つ聞えない。

『ゐますか？』と警部補が囁いた。

が、村松氏はそれには答へず、ホト／＼と庫裡の戸を叩いた。

『今晩は、今晩は――』

二度三度繰返して、だが、中は相變らずの靜けさである。それがぞつと肌に浸みる不氣味さだつた。

村松氏は、ひよいと警部補の方を振向いた。

『いけません。駄目です。這入つて見ませうか。』

警部補が頷くと、村松氏は戸に手をかけてゴト／＼と開けた。すぐにそこは廣い土間で、土間の向ふのとつつきが、荒れ果てゝはゐながら二十疊程の廣間である。土間からの上框に近く、この地方の習慣で大きな火爐が切つてあり、その向ふが、煤けた柱や帶戸で仕切られて、太い柱の根に炬燵が淋しく置いてあつた。

村松氏は靴のまゝで、素早くその廣間へ踏み込んだ。そして、ツカ／＼と炬燵へ近づき、汚い布團を捲つて手を入れた。

『火がありますか。』と警部補が訊いた。

『氷のやうに冷たいです。少くとも、一日間もう火を入れてありませんよ。』答へたまゝ村松氏は、帶戸をガラリと開けて次の間へ進んだ。そこは書院風に出來てゐて、しかし、襖も障子も破れてゐる。芭蕉を描いた屛風の蔭と、床前の横の押入れとを、素早く調べて次の室へ。

その間に、峯島警部補も流石に大體のことは當りが付いた。庫裏から本堂へ踏み込んで、探し當てた蠟燭に火を點けた。ここも無殘に荒れ果てた有樣で、須彌壇の造花は倒れかゝり、如來の像は手頸がなかつた。大きな木魚だけが、綿の出た座蒲團に乘つてゐる。須彌壇の下から位牌堂まで、警部補は大膽に細心に調べて廻つた。

一旦庫裏で別れた二人が、再びバツタリと顏を合せたのは、庫裏と本堂とを絡ぐ、がらんどうな板の間だつた。

『どうでしたそちらは？』と警部補が訊く。

『ゐませんよ。――しかし、大變なものを見付けて了ひました。こちらへ來て御覽なさい。』

村松氏は、袖をぐい／＼と引く樣にして、警部補を以前の書院へ連込んだ。そしてそこの古ぼけた本箱を亂暴に開けた。見ると、中にはお經の本などは一册もなく、全部が探偵小説と犯罪研究に關した書籍ばかり。

呀ツと警部補は驚いた。だが村松氏は無言である。續いて、その本箱と壁との間から、鼠色の風呂敷に包んだ平ぺつたいものを取出した。風呂敷をくる／＼と解いて行くと、中からは、血痕こそ附いてゐないが、ドキ／＼するやうな出刄が出て來た。

『ウム。』警部補は思はず唸つた。

『どうです、お分りですか。』村松氏が初めてかういふ。

『驚きました。犯人はこの寺の和尙なのですか。』

だが、氣付いて見ると、この時もう村松氏はすつかり冷靜な態度に還つてゐた。そして、靜かに首を振りながら『多分――』と答へた。

『何故です。何故多分などといふのです。犯人がもう、はつき



りと分つてゐるではありませんか。』

『分つてはゐます。ですけれども、捕まへて調べて見るまでは、斷定することも出來ますまい。』

後に、こゝで發見された出刄を、被害者樋口妙子の傷口に合せて見ると、殆んどピッタリ合つて了つた。だから、それが犯人の用ゐた凶器であることは、間違ひもない事實であつたのだが、警部補は、その時の村松氏の落着いた態度に、すつかり舌を捲いたといふ。

『な、なるほど！』と彼は吃つていつた。『それはまあ理窟です。――しかし、いつたいあなたは、どうしてこゝの和尚が怪しいといふことに氣付いたのですか。』

『非常な變人で、檀家からもすつかり見放されてゐると聞いてゐました。』

『しかし、それにしても、まるで魔術のやうな遣方ぢやアありませんか。』警部補には、まだ譯が分らなかつたのである。村松氏は、漸くそこで微笑を浮べた。

『なアに、子供騙しの推理ですよ。あの與七があなたに語つたといふ首の話、あれで一度に見當がつきました。今日も、晝間現場へ行つた時に見て來ましたが、あの藤の湯の裏道に沿つた塀は、內側塗りだつたではありませんか。』

『といふと？』

『だからです。與七の眼に、首が宙に浮いてゐるやうに見えたといふのは、首から下が見えなかつたといふことになりませう。無論、落着いてゐたら、そんな阿呆なこともなかつたでせうが、何しろ低能な男のことです。見た瞬間に、首だ！とばかり思つたのでせう。私は、その首が白い着物を着てゐたに違ひないと考へたのです。そして、この冬に白い着物などを着てゐるのは、結局、僧侶位なものではないでせうか。』

いひながら村松氏は、少々氣まり惡さうだつた。そして辯解するやうに言葉を續けた。

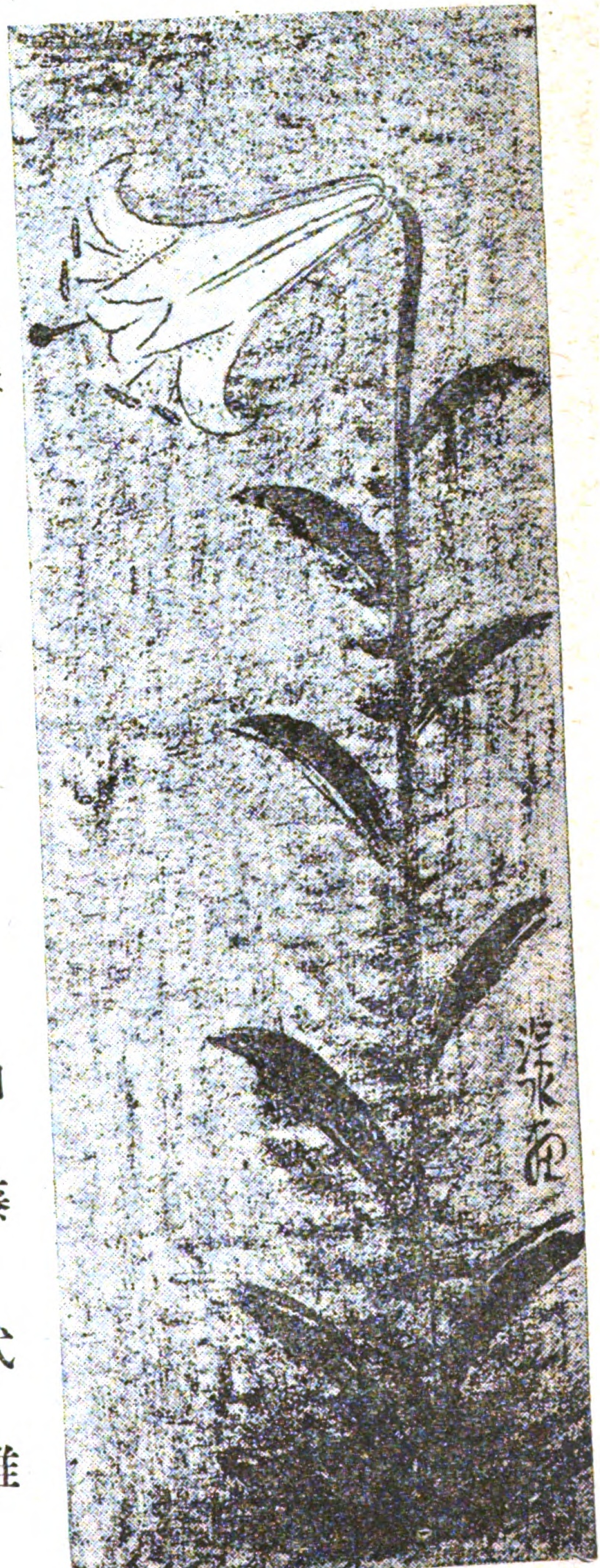
『それにまだ、眼玉をキラリと光らせただの、尖がつた帽子を冠つてゐただのといふことも、矢張りすぐに思ひ當りました。こゝの和尚は、いつも土耳古帽を冠つて、大きな縁無しの眼鏡を掛けてゐます。多分彼は、その時ピタリと塀に貼りついて、與七を行き過ごさせようとしたのではなかつたでせうか。殺した後なのか、それとも殺す前だつたかは分りませんが、兎に角白い着物を、殊更外套もなしで着てゐたといふのは、恰度雪の降つてゐる時でもありましたし、豫め目立たないやうにしてゐたと思へますね。』

村松氏自身もいつてゐるやうに、それは案外簡單な着眼點に過ぎなかつたのである。

米島警部補は、しかし少時の間口も利けなかつた。それを見

て村松氏は、益々氣まり惡さうな顔になつた。
『や、しかしそんなことはどうでもよいとして、かうして本箱を見ると、容易ならぬ人物だといふことが分ります。早く捕まへないとまだ、どんな恐ろしいことをするか知れません。』
この、何氣ない調子で云つた村松氏の言葉は、やがて恐るべき眞實となつて現れた、信頼すべき豫言でもあつたのである。
村松氏は、自分でそれをいつて置いて、ふと恐ろしさうに肩を竦めた。が、さうしてこの時流石の村松氏も、たつた一つだけ氣の付かぬことがあつた。
それは、彼等が寺の中を搜索し始めた頃である。この女雲寺へは、雪の中をソロリ〳〵と這ふやうにして、靜かに近づいて來た一人の人物があつた。その人物は、最初床裏から中へ這入らうとしたが、ふつと思ひ返した風だつた。間もなく本堂の裏手へ廻り、そこの床下へゴソ〳〵と音を立て丶潜り込んだ。そして村松氏と峯島警部補とが、再び書院に立戻つて、今の會話を取交した時、床下からぢつと耳を欹ててゐたのである。
床下と床上なのだから、どの程度まで上の會話を聽き取れたのかは疑はしい。
だが彼は、やがていづこへともなく姿を消してしまつたのである。

（つゞく）



春遠からす

加藤武雄
伊東深水畫

その夜の二人

禮吉は、逸り立つ心を押鎭めて、此の場合何うするのが最善の方法かを考へた。

「かうして所在を突きとめさへすれば、會ふのは急が無いでもい〻。今、欣助が居るところへ押掛けて行つて淺間しく爭ひ合つたところで、それが何にならう？ やがて欣助が歸つた後に、尋常の訪問者として訪ねればそれでい〻のだ──。

然う思ひ定めた禮吉は、門の傍の暗がりにた〻ずんだり、そのあたりを足音をぬすんで往復したりしながら、欣助が出て來るのを待つた。

二十分、三十分──時は、彼の焦燥を刻んで過ぎて行

つた。
一時間、一時間半と絶つても欣助は未だ出て來無かつた。時計を見ると、もう十二時を過ぎてゐた。
今夜は歸らないのか？　こゝへ泊るのか？
然う思ふと、禮吉は胸を刺すやうな痛みを感じた。もう斯うしてぢつとしてはゐられないやうな、いきなり家の中に飛び込んで行きたいやうな氣持になるのであつた。
と、その時くゞりの戸が開いて、よろめくやうに出て來たのは欣助であつた。
禮吉は慌てゝ身を翻へした。が、欣助のきらめく眼は、すぐに禮吉の姿を捕へた。欣助は闇を透かして、それが何人であるかを見定めると、つか〳〵と歩み寄つた。
『おい、君！』
欣助はいきなり禮吉の腕を引掴んで、荒く呼吸を喘がせながら云つた。
『君は、何しにこんなところへ來てゐるんだ？』
『…………。』
禮吉は狼狽した。彼は答へる事が出來無かつた。
『卑怯だぞ！　君は――。君は何處へあの女を伴れ出したのだ？』
欣助は物狂はしく叫んだ。この欣助の言葉は、ひどく禮吉を驚かした。
『伴れ出した？　――君は何を云つてゐるのです？』
『おい、おい！　しらばツくれるのも可加減にしろ。他の女を盗み出しやがつて――何、何處へ伴れて行つたんだ。』
『僕には君の云ふ事がわからない。君は何か考へ違ひをしてゐる。』
『何が考へ違ひだ。現にあの女は居無くなつてるぢや無いか？』
『居無くなつてゐる？』
禮吉も驚きの叫びを立てた。
『何、何處へ伴れて行つたのだ？　え、何處へ伴れて行つたのだ？』
欣助は、腕を掴んだ手に力を入れて禮吉の身體をゆすぶるやうにした。
『本當に、あの人は居無いのですか？　それは本當なんですか？』
『まだ君は白ばツくれてゐるのか？』
欣助は噛みつくやうに云つた。
『まあ、落着いて呉れ給へ。君は誤解をしてゐるのだ。』
『此んな場合に落着いてなんか居られるものか？』
欣助は地團駄を踏んで、

『――ぢや、どうして君はこんなところにうろついてゐるのだ？』

『その人に會はうと思つて來たのだ。正直に云はう――君のあとをつけて來たのだ。僕は是非その人と會ひ度いのだ。だが、未だ會へずにゐるのだ。伴れ出したの盜み出したのと云ふのは君の誤解だ。――第一、僕が伴れ出したんなら、こんなところにうろついてゐて君に見つけられるやうな眞似はしない筈ぢやあ無いか？』

然う禮吉に說明されて見ると、欣助は次第に自分の誤解に氣がついたらしく、

『本當に君が伴れ出したのぢやあ無いのか？』

茫然と、空虛な眼を瞬つて欣助は云つた。

『僕ぢやあ無い。』

きつぱりと然う云はれると、此上もう疑ひの餘地は無かつた。

訪ねて見るとしげ子が居無い。殆ど監禁も同樣に、身邊の見張を賴んで置いたのに、どうして外出などさせたのかと、欣助は激しく主婦を詰つたのだが、主婦は、田川の奧樣がお出でで、奧樣と一緒にお出掛けだつたから――と、さう辯解した。先刻の夏子の口吻を思ひ合せてしきりに不安を感じたものゝ、まさかに、夏子が伴れ出したらうとは思へないので、やがて戾つて來るだらうと、欣助は今まで、二時間近くも待つてゐたのだつた。が、十二時近くなつても歸らない。氣がついて見ると、きちんと取片附けられた部屋の樣子などにも、どうやら再び歸らぬつもりで出て行つたらしい形跡が見える。矢張、逃げて去つたのか？　夏子と一緒に出たといふからは、夏子がそゝのかして伴れ出したとも考へられない事は無いが、夏子がどうしてそんな意地の惡い事をするのだらう？　いや、夏子がそんな事をするわけが無い。あの女が、夏子の來訪を利用して逃げ出したのだ。よし、外からの監視の眼はゆるむ事があらうとも、恩で縛り操で搦めて、そこにつくりあげて置いた精神的の牢獄は、彼女の弱い心では、決して切り破る事は出來まいと思つてゐたのに、あの女はとう〳〵逃げ出して行つたのか？

失望に挫かれ憤然に燃えながら、飛び出して來た欣助は、門の前でぱつたりと禮吉に會つたのだつた。だから、彼が、しげ子を伴れ出したのは、てつきり禮吉だと、いきなり然う思ひ込んでしまつたのも無理は無かつた。

だが、それは誤解だつた。

誤解だとわかりながら、欣助は向ほ未練らしく相手を睨めて、

『ぢやあ――ぢやあ、君ぢやあ無いんだな。』と繰返した。

『僕ぢやない。――だが、その人は本當に居無くなつてしまつた

んですか？　本當に居無いんですか？』

失望はむしろ禮吉の方が强かつた。折角所在を突きとめたと思へば、もうその人は居無くなつてゐる。この同じ失望が、これで二度目、いや三度目なのだ。何處まで意地の惡い運命の飜弄であらう？

『居無いんだ！　逃げちやつたんだ！』

欣助は吐き出すやうに云つた。欣助は、しげ子を連れ出したのが禮吉で無いとはわかつても、しげ子の失踪が何か禮



吉と關係があるやうな氣がしてならなかつた。欣助の眼は、敵意の爲めにとがつてゐた。

しかし、二人はいつの間にか肩を並べて步き出してゐた。

十步ばかり步くうち、二人は一樣に首を垂れて一樣に溜息を足元に吐いてゐた。

――欣助は、失はれたと知つた今、今更の如くいかに自分が彼女を愛してゐたか？　を知つた。彼女が今まで自分が愛して來た多くの女とは全く違つたものであつた事を――そして、今までそれ等の多くの女を愛して來た愛とは全く違つた愛が自分の裏に育ちつゝあつた事を知つた。ああ、おれははじめて本當の愛といふものに眼覺めかけてゐたのだ！　それなのに、どうして彼の女は逃げてしまつたの

だ？　さう思ふと欣助は口惜しくてたまらなかつた。

禮吉は禮吉で、眞暗な失望の底に果敢無く思ひ沈んでゐた。一度ならず二度までも、二度ならず三度までもの此の失望！　所謂、相會ひ難き運命なのであらうか？　あの霧の夜の幻めく面影をのみ自分の心に殘して、遂に不可知の世界へと消え去つてしまつた人なのであらうか？

二人は默々として歩いた。やがて、横町を出た。そこで右と左へ、二人はそれ〴〵の道に別れて行かうとした時、

『荻原君！』

呼びかけたのは欣助だつた。禮吉は立ちとまつて、欣助の顏を見た。

『僕は少し君と話し度いのだ。——もう少し一緒に歩いて呉れないか？』

『あゝ。』

禮吉はうなづいた。

『君、君はあの女を愛してゐるのか？』

『…………』

禮吉は答へ無かつた。

『君とあの女とは一體どういふ關係なのだ？』

『僕は、未だその人に會つた事が無いのだ。日外も君に話したと思ふが、僕はある人に賴まれて、あの人を探してゐるのだ。』

『ある人？　それは何人だ？』

『あの人の父親だ。』

『父親？——あの女に父親なんか無い筈だ。もう疾くに死んでしまつたとあの女は云つてゐた。』

『さう云へば、あの病氣の母親はどうしたのですか？』

さうだ。それを訊くのだつたと氣がついて、禮吉は斯う問うた。

『あのきちがひの母親も、とう〳〵死んだよ。』

『死んだ？』

禮吉は驚きの叫びを發せざるを得無かつた。

『何時——何時死んだのだ？』

『つい、此間だ。』

欣助は冷たく呟き捨てたが、

『君は、あの女については、その通り何も彼も知つてゐるぢやあ無いか？　隱さなくてもいゝ。君とあの女との間には過去に於て何かがあつたのだ。いや、君とあの女とは愛し合つてゐたに違ひないのだ。何故君はそれを僕にかくさうとするのだ。』

『違ふ。そんな事は無い。』

『ぢやあ、君で無かつたら何人だといふのだ。あの女が愛してゐる男が、君で無かつたら——。』

『その人は何人かを愛してゐるのですか？』



禮吉は一寸立止まり、欣助の顔を見据ゑるやうにした。

『だから逃げたのぢや無いか？』

欣助は腹立たしく叫んだが、直ぐに、滿面に嘲りの笑ひを浮べて、

『だが、君に云ふが、あの女は君を愛してゐるかも知れ無いが、あの女の處女は完全に僕のものだつたよ。あの女は恥を知つてゐるのだ。だから、あの女は君のところへ逃げては行か無かつたのだ。』

『君はまるで誤解してゐる。』

重苦しくつぶやく禮吉に、上からおしかぶせるやうにして、欣助は笑つた。

『は、は、は！　あの女は貞操の何ものたるかを知つてゐるんだ。だから、あの女が君のところへ逃げて行かなかつたのだ。は、は！　あの女は僕から逃げても、あの女の貞操は――あの女にとつて生命よりも大切

な貞操は、もう此方へ抵當にとつてあるんだ。あの女は屹度又僕のところへ歸つて來るよ。いや、歸つて來させずには措かないよ。』

欣助は挑戰的に、斯う詰々しく叫んだのであつた。

何と云ふ卑劣な事を云ふ奴だ！　禮吉は、飛びかゝつて締めつけてやり度い程の憤りを、じつと抑へながら、

『君の話といふのはそれだけか？』

『それだけだ。』

『ぢや、もう用は無いんだらう。失敬する。』

禮吉は歩度を早めて歩き出した。

禮吉が失望と疲勞とに打ちのめされて、その家に歸つた時は、もう一時に近かつた。

『お歸んなさいまし。』

老婢は、眠さうな顏で迎へた。

『おそくなつて濟まなかつたね。――起きてゐなくも宜かつたのに――。』

上り框で靴を脫いでゐると、ばた〳〵と小さな足音を立てて、みち子が奧の方から走り出して來た。

『お歸んなさい。』

『おや、みち子さんも起きてゐたのかい？』

書齋へはひると、禮吉はぐつたりと椅子に腰をおろした。

『ずゐ分遲かつたのね？』

みち子は、禮吉の顏を見上げた。その眼は、未だ？　と訊いてゐた。未だ、姉さんは見つからないの？　さう訊いてゐた。

『あゝ。――どうして眠くなかつたの？』

『お歸りになるの待つてゐたのよ。』

大きい眼が不安さうにふるへてゐた。そして、未だ？　と、その問ひを繰返してゐた。

『姉さんは未だ見つからないよ。だがね、みち子さん。姉さんはもうあの可厭な奴とは一緒には居ないよ。それだけはわかつたんだ。』

『さう？　もう、あいつとは一緒にゐないの？』

みち子の顏は急にぱッと明るくなつたやうに見えた。

『あゝ。もうあの男とは一緒にゐやしないよ。』

『どうしてそれがわかつたの？』

『今夜、あの男に會つたのだよ。』

『さう？　それでわかッたのね。まあ、うれしい。』

みち子はさも欣ばしげに云つた。そのみち子の欣びを見ると、禮吉の胸にも同じ欣びが湧きあがつて來た。今までは、會へなかつた失望だけに閉されてゐた心が、一道の明るみに開けて來る思ひがした。さうだ。會へなかつた事は寧ろこの上も無い

が、その人が、あの男の桎梏から脱け出して行つた事は、その人の爲めによろこばねばならぬ事だ。そして、つまり、それだけ自分に近くなつた事になるのではなからうか？

『私、姉さんが、あいつと離れてしまふんだつたら、姉さんのところから逃げ出すんぢや無かつたわ。』

『は、は！　そんな事を云つても仕方が無い。』

禮吉は淋しく笑つたが、その時禮吉は、もう一つみち子に告げねばならぬ事のあるのを思ひ出した。それは母親の死である。欣助の話によると、あの不幸な母親は死んでしまつたといふのだ――。

禮吉は、しかし、今それを云ひ出して、此の幼い者の心を痛めるに忍び無かつた。

『私、忘れてたわ！』

と、みち子ははしやいだ調子で續けた。

『今日、お留守に、水野さんがいらしッたのよ。ずゐ分待つてたけれど、あまり遲くなるからと云つてお歸りになつたわ。』

『あ、然う？』

禮吉は微笑ましくうなづいた。水野は、みち子の病氣が癒つて、こゝに引取られるやうになると、殆ど毎日のやうにみち子を見にやつて來るのだつた。水野が、どんなに此の「小さい王女」を愛してゐるか？　みち子がまたどんなに水野に慕ひ馴染んでゐるか？　貧しい童謠詩人と、不幸な少女とが、不思議な友情に解け合つて、水野が、自作の童謠をとぼけた調子で歌つてきかせたりすると、みち子がそのかなしみをもしばらくは打忘れて、他愛無く笑ひほけたりするその光景を、禮吉は涙ぐましい氣持に思ひ描くのであつた。

『ねえ。』とみち子は、何か思ひ入つた調子で、禮吉の顏を見つめた。そして、その眼を、壁上に掲げられた例の肖像畫の方へやりながら、『水野さんは、さうぢや無いつて云ふんだけど、あの繪、矢張、私の姉さんを畫いた繪なんでしよ？』

『姉さんだと思ふ？』

『えゝ。でも、よく見てゐると、お母さんのやうにも見えて來るのよ。』

『お母さんのやうに？』

禮吉は、胸の痛みを感じながら云つた。

『えゝ。お母さん、もうせんに、あんなにならないうちはやさしいゝお母さんだつたわ。私、この繪を見てゐると、あの時分のお母さんを思ひ出すのよ。』

『…………。』

『だけど、こんな繪、どうしてこゝにあるの？』

『…………。』

『あんた、前から私のお母さんや姉さんを知つてゐたの？』

『知らない――知らないのだよ。』

『だつて、ぢやあ、どうしてこんな繪が――。』

みち子はその繪と禮吉の顏を見くらべるやうにした。その眼眸には解きがたい謎を前にした切ない魂の惑ひと惱みとが痛痛しく示されてゐた。

『みち子さん。』

と、禮吉は兩手を肩にかけてみち子を引き寄せて、

『今にわかりますよ。ね、今にわかる。そして、今に何も彼もよくなる。いいえ、僕が屹度よくして見せますよ。』

さう云つたのであつた。



新しい生活

夏が過ぎた。この熱閙の都會にも、清冷な秋がおとづれて來た。そしてしげ子には新しい生活がはじまつてゐた。

しげ子をして、その臆病な躊躇を捨てさせ、そのむしろ愚かとも云ひ度いくらゐにまで過ぎる貞操意識からより自由な世界へと眼覺めさせ、そして、しげ子を新しい生活へと導いて吳れたのは夏子夫人だつた。

彼女は夏子夫人の手で、あの牢獄のやうな家からたすけ出された。同時に精神的にも、その心の牢獄ともいふ可きものから救ひ出された。――夏子夫人は、實に親切だつた。賴もしき、よき相談相手として、そこを出てから後の彼女にさまぐの心づくしを見せて吳れた。

小石川の方の、人の好い老夫婦の家の二階が彼女の新しい落着場所だつた。それは、前にゐたところと、然う遠く無い地點だつた。若しや、みち子がそのあたりに戻つて來はしないか？といふ考へから、わざとそこを選んだのであつた。しげ子はそこから毎日、神田の方の或る出版社に事務員として通ふ事になつた。その勤め口も、夏子夫人が知人の手を通して探して吳れたものであつた。

勿論、そこから得られる報酬は極めて僅かなものだつた。しかし、彼女にはもう病人の母が無かつた。彼女は、もうその大きな負擔の爲めにいやな〱珈琲店づとめなどする必要は無かつた。自分一人がつゝましやかに生きて行くには、女事務員としての僅かな報酬でも事は足りるのであつた。

勤め先の仕事は――それは、五六人の同僚と机を並べて、廣告郵便の上書を書いたり、照會の返事を書いたりするやうな簡單な仕事で、別に骨も折れ無かつた。文藝書類を主とし、他に文藝雜誌をも發行してゐるかなり大きな出版社で、二階の編輯室へは、雜誌の方の記者たちが、始終出たりはひつたりしてゐた。雜誌の寄稿家らしい人達や、また、出版に關係のある文學者達も、入れかはり立ちかはりやつて來た。彼女たちの卓がその一隅を占めてゐる階下の大廣間には、出版部のいろ〱の部面の人々がそれ〲の卓を控へ、そこへは、紙屋だの、廣告取りだのと云つた種類の人々が始終つめかけてゐた。しつきり無しに電話が鳴つた。時には電話係りの代理になつて受話器に飛んで行かなければならず、訪問者がたてこむと、受附けの少女の手助けをして、名刺を受取つたりスリツパをそろへたりもしなければならなかつた。

『今の人、東條さんね。東條さん、まるで活動役者見たいね。』

隣りにすわつて居た川崎菊子といふ女學校を出たばかりの娘は、受附をすましてもどつて來たしげ子にさゝやいた。



『あ、あれが東條さん？　私、氣がつきませんでしたわ。』

東條晋吉と云へば、美しい抒情詩を書く詩人として、殊に近頃壓倒的に流行した『都會行進曲』の作者として知られた男だつた。勿論、しげ子もその名は知つてゐた。

『まあ、氣がつかなかつたの？　あなたは本當に呑氣ねえ。』

色白の、白い小猫のやうな感じのする娘が、呆れたやうに云ふ傍から、

『美しい詩を書く人は矢張美しいのねえ。』

と、向側から、井田さんといふ老嬢が云つた。

『あら、でも、さうとは



限らないわ。あの山岡さんなんて、小説はずゐ分やさしいんだけれど、實物を見るとがつかりしちやふぢやないの。』

菊子が云つた。

その、東條氏は簡單に用事が濟んだと見えてすぐに歸つて行つたが、東條氏を玄關先まで送り出した記者の横井は、瘦せた色の惡い顏ににや〳〵と微笑を浮べながら、しげ子の背後に寄つて來て、

『鏑木さん！』と呼びかけた。

『は？』しげ子が、何用かとペンの手をやめて振向くと、

『今東條晋吉氏の取次に出たのはあなたでせう？』

『は、私でございますけど――。』

『東條氏は非常にあんたを讃美してゐましたぜ。すばらしい女がゐるぢやあ無いか？あれは一體どういふ人だつて。』

『まあ！』

しげ子は思はず赤くなつた。

『あんな美しい人がどうして事務員なんかしてゐるのだツて、しきりにあんたの事を聞いてゐたですよ。』

『まあ、御冗談を――。』

しげ子は腹立たしく云つた。

『流石に、東條晋吉ですよ。實にすばやいもんだ。――だが、東條氏ばかりぢや無い。昨日久喜氏に會つたら、久喜氏もあんたの事を言つてゐた。君んとこの事務員にやすばらしい美人がゐるぢやあ無いかツて。』

『まあ、何を仰言るのでせう？』

しげ子は苦ツぽく笑つた。

『素敵ねえ。鏑木さん！　みんながもうあんたの評判をしてゐるのねえ。』

菊子は叫ぶやうに云つた。その底光りのする眼眸に娘らしい

嫉妬が露骨に示されてゐた。
『まあ、いやですわ。』
しげ子は眉を押顰めた。――しげ子はそんな風に云はれる事を些とも嬉しいとは思へ無かつた。彼女はこゝでも亦、多くの男達の眼が――ひとり東條氏と云ふやうな人ばかりで無く、同じ社の同じ部屋に働いてゐる人達にしろ、今眼の前に立つてそんな事を云つてゐるその若い記者にしろ、凡そ男といふ男の眼が、皆、自分に注がれてゐる事を知つてゐた。だが、その中の何人の眼が、不安の感じ無しに見迎へる事が出來ただらう？その中の何人の眼が、本當の精神的な淸らかさで濁り無く澄んでゐたであらう？
みんなみだらがましい眼だ。無作法な欲求に燃えてゐる眼だ。あの男の――榎本欣助のそれと同じ眼だ。
しげ子は、あの夏子夫人が言つて呉れた言葉を思ひ出さずにはゐられなかつた。
『あなたのやうな人が世の中に立つて行くのもこれでなか〳〵大へんねえ。女性があんまり美し過ぎるのは、慥かに一つの不幸だわ。一つの不幸――いゝえ、一番大きな不幸と云へるかも知れ無いわ。何處へ行つてもあなたは餘り目立ち過ぎるのよ。男性の眼に附き過ぎるのよ。』
夏子夫人は云ふのであつた。
『薔薇なら美しくても棘があるからいゝけれど、あなたは棘の無い薔薇だから困るのよ。棘の無い薔薇、白い薔薇――いゝえ、白い百合なのよ、あなたは。』
一人の欣助からは逃れ得ても、世間には、百人の欣助が、千人の欣助がゐる。夏子夫人は、それを、しげ子の爲めに憂へるのであつた。が、しげ子は思ふのだつた。あの時、欣助の誘惑を拒み兼ねたのは、病人の母の爲めに、あゝするより外に方法が無かつたからの事だ。今はもう母は居無い。たゞ自分一人に生きる爲めになら、どうしてあんな愚かな過失を繰返す必要があらう？
とは云へ、しつこく追ツかけ廻す男共の眼はたまらなく嫌はしかつた。彼女は自分の美しさを呪ひ度い氣がした。
『美しいには美しいが、いやにつんとしてゐるぢやあ無いか？』
『美しさを意識してゐるんだね。それで、すましてゐるんだよ。』
『いや。然うぢや無い。何か考へ込んでゐるんだ。あの女は、何かひどく不仕合なのだ。』
男の社員達が、そんな風に囁き合ふのを耳にした事もあつた。
事實、新しい生活への心の彈みは感じながらも、憂悶の思ひは尙ほ彼女の胸に深かつた。
あの今にまだ行衛の知れ無いみち子の事を考へると、しげ子は居ても立つてもゐられ無い氣がして來るのであつた。（つゞく）

古今風流函

○題のつきた歌

白河樂翁侯がある日近侍を集め、『何んでもよいから代る代る題を出せ、連吟してみよう』と云つたので、近侍はあれよこれよと次々に歌題を提出した。樂翁はそれに應じて、一つ〳〵流れるやうに連吟して百五十題にも及んだ。たうとう近侍の方で題を選ぶのに閉口してしまつた。

『もう、題が盡きましてございます』と云ふと、樂翁また即座に詠み上げた一首、

　きりて出す題のなければ言の葉も
　花のつぎほは咲くよしもなし

○くもりなき世に

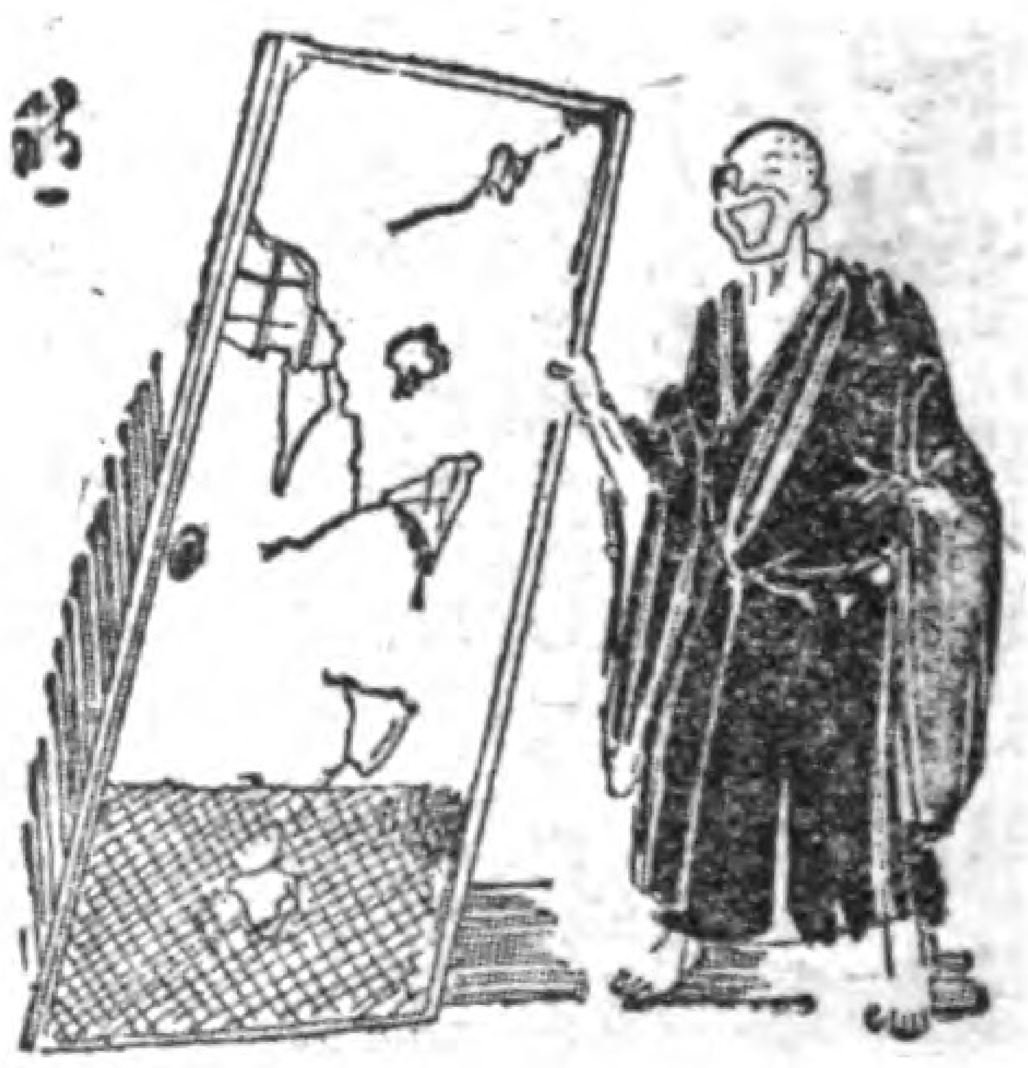
岩代の會津に桃三千丸といふ人があつた。狂歌はもとより、藝といふ藝は、茶の湯でござれ生花でござれ、唄でござれ、出來ぬものは何一つなかつた。

或る時、さる大家に招かれて行つたが、一座は酒興に乘じてそれぞれかくし藝を出し、或は舞ひ、或は唄ひ斷醉湧くが如くであつた、然るに三千丸ひとり、默々として控へて居たので、家の主人は、『何か一つ藝をやつてくれ』と三千丸にいふと、何の答へもなく、たゞさら〳〵と短册に歌を認めて差し出したのを見ると、



　くもりなき世に生れても何ひとつ
　みがいたやうな藝とてはなし

○襖一つ



江戸八丁堀龜島町に慈雲といふ禪僧が住んでゐた。或る日、外から歸つてみると、留守の間に泥坊がはいつて、袈裟法衣から器具のたぐひをすつかり持ち去つてゐた。のこしてゐるのは破れ襖がたつた一枚きり。慈雲和尚、『なか〳〵親切な泥坊だわい』と感心の體で、一首、

　寒き夜はこれをかつぎてふせよとや
　　襖一つをおきつしらなみ

白浪とは、泥坊のことである。

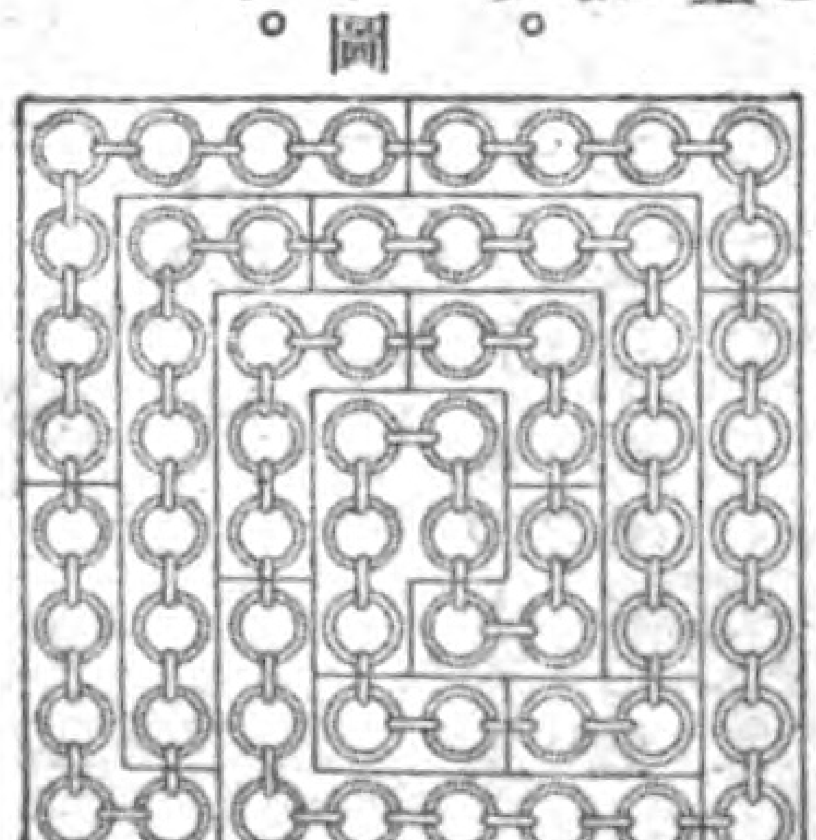
智慧くらべ解答（文二八五）

（一）下圖の通りです。

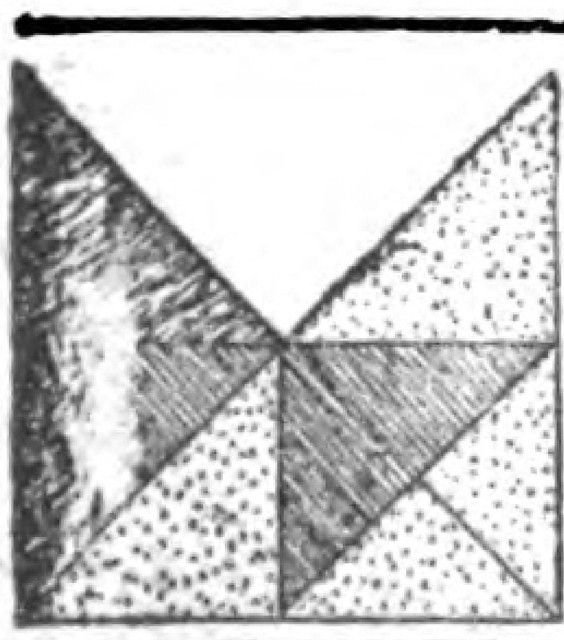


（二）一寸考へると酒の方が多い樣ですが事實は水も酒も同量です最初酒は茶匙一杯水の方へ入りますが一度目に今度は水と一緒に歸つて來る酒の量引くと差引酒と水とは同量と云ふ事になります。

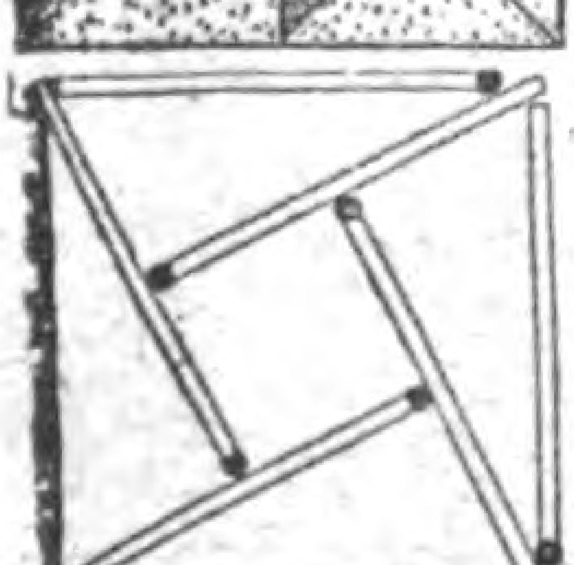
（三）下圖の通り。



（四）の答



（五）の答





秀吉



小雪



お袖



雅樂之介

時代小説

大醜女物語

本田美禪

礒田長秋畫

本篇に活躍する主なる人々

秀吉　母大政所の病氣は小雪によつて平癒した。安堵の胸をなでおろし朝鮮へ軍を送る準備をすゝめてゐる。

小雪　本篇の主人公大醜女。大政所の難病を治した功によつて秀吉寵愛の小姓吉良雅樂之介と夫婦となり、今は三萬石の大名の奥方となつた怪力無双の勇婦。

お袖　影の形に添ふ如く一生を小雪に捧げる純情の美しき女丈夫。

吉良雅樂之介　聚樂第一の美男子として秀吉の寵遇厚かつた小姓、主君の命いなみ難く小雪の夫として西下する。

三萬石の大名に封ぜられて、はる〲九州肥後へ下つたもの〻吉良雅樂之介に取つては少しも嬉しい出世では無かつた。秀吉の命とは云へ、あの醜い小雪が妻と云ふ名で自分の側に居ると云ふ事は、考へただけでもゾッとする。しかもこの三萬石はもと〲小雪のものだ。雅樂之介自身にとつては何の未練も愛着もない。さればこそ日夜、愛妾早苗を相手に酒宴に耽つて胸中の欝を散じてゐるのである。

小雪の心は暗く淋しい。自分をこんな顔にした運命の神が今更に恨めしくもある。でも何時かは自分の誠意の通ずる日もあらうと果敢ない望を抱いて健氣にもます〲貞淑に仕へてゐた。その小雪に家臣の信頼と人望の集らぬ譯はない。中にも騎馬奉行として召抱へられた怪童駒市は、大の奥方贔屓で殿の愛妾早苗を憎むことも人一倍强かつた。

偶ゝ阿蘇大宮司家の家臣猿渡丹波が新城主吉良雅樂之介夫婦の首級を求めてゐる事が解つた。忠義一徹の駒市は思案の末丹波に僞首を掴ましてその裏を掻かうと企てた。雅樂之介の僞首は首尾よく得る事が出來たが、小雪の僞首は未だ得られない。駒市は苛立つた。遂に思ひ決して黒裝束に身を包み、早苗の局へ忍び込んだ。



清正



加地五郎太



早苗



山邊年熊

清正 秀吉の命によつて、小雪、雅樂之介の媒介となり、又指導者となる。

加地五郎太 美貌のお袖を追うて聚樂をぬけ出し、友人雅樂之介の許へ落着き、機會の來るを待つてゐる。

早苗 淀君氣に入りの侍女。雅樂之介の後を慕うて今はその愛妾となる。

山邊年熊 淸正に滅された肥後の名門伊津野家の遺臣、淸正、小雪、雅樂之介等西下の途次、淸正を船中に襲うて果さず、小雪の情によつて召抱へられ吉良家の家老となる。

駒市 吉良家新領土阿蘇の高原に遊牧せる少年。馬馴しの神技を小雪に見出され騎馬奉行に拔擢さる。

猿渡丹波 阿蘇大宮司家の忠臣。衰頽せる主家を挽回せんとしきりに暗中飛躍を試みてゐる。



駒市



猿渡丹波

意氣軒昂たる怪童

『幸ひにして病氣が癒つて、また元のやうな體になつても其のまゝにしちや置かねえ畜生、俺に斬られてその首が奥方様の首としてあの頭丘入の手に渡りや、當家のために五千兩儲ける事が出來るのだ。欣んで死ね』呟きながら駒市は腰の大刀をすらりと拔くと、その斬先で蚊帳を揚げて靜かに蚊帳の內へと入る。

行燈の灯を蚊帳越しに蒼く浴びてゐる早苗の寢顏は、勿論いたく窶れてゐるが、その面には奥方の僞首として用ゐるに足る品と綺麗さとを持つてゐる。

『だが、夜が明けてこの首が亡つたことが分つたら、あの腰拔けの殿様がどんなに驚く事だらう、いや、お歎きになる事だらう。其れを思ふと、氣の毒のやうな氣持もするが、奥方様のお爲を思へば……。詰るところ殿様のお爲にもまたなる事だ、行れッ!』

蚊帳越に射す行燈の火影にきらり、閃いた白刄は蚊帳の天井をさと斬りながら熟睡してゐる早苗の咽喉のあたりへ落ちた。

血煙が起つ。

枕がけし飛ぶ。

悲鳴も揚げず斷たれた首は、蚊帳の裾を二つ三つもんどり打つて轉がつた。

「斬れたッ！」駒市はその首を眼で追ひながら覺えず叫んだ。

『人を斬つたのは今夜が初めて！　どんなものかと思つてゐたのに、案外造作ねえものだ。はゝ、はゝゝゝ。戰場へ出て打ッた斬る敵の軍勢の首だつて矢ッ張り斯んなものだらう。面白え！』會心の笑みをにつこと含んで、轉がつた首を拾ひ上げ、蚊帳から出ると悠々と廊下の方へ引ッ返す。

この時だつた城外から九つの鐘が響いて來たのは。

『や、鐘が鳴る。熊と猪之が厩から馬を引き出してくれてる時分だ。急がにやなるめえ』

身を躍らすと駒市は脱兎のごとく雨戸の隙から外へ飛び出して闇中を一直線に走り出す。城中の地理は明かに——わが掌を見るやうに何處でも渠は知つてゐるのだ。

× × × × × × ×

東の天に一抹の曙光が淡く見え出した頃、宇土街道の砂塵を蹴上げて十一頭の駿足が、南へ川尻の方へと向つて、疾風のやうに馳けてゐた。眞先なのは名馬鬼鹿毛、上には駒市が乘つてゐる。後から續く十頭はみな鬼鹿毛の所產だが、その中の二頭には、猪之と熊とが乘つてゐる。人を乘せぬ八頭は、みな眞正の裸馬、鞍は無論、なくてはならない手綱も轡もつけられてない。其れが大人しく母馬の後から列を亂さずにとッ〳〵と續いて街を走つてゐるのだ。先頭に立つ駒市がぴゆうと口笛を吹きさへすれば、渠等はたとへ一日に百里を走る場合といへども、亂れた列を立て直し、手綱によつて一糸が操縱されて行くやうに、行儀よく鼻面を並べて街を翔けるのである。

九つの鐘の鳴るのを合圖に、濱町城内から忍び出て、十五六里の道程を夜の明けぬ間に飛んで來て、今茲に斯うやつて砂塵を揚げてゐるのであるから、その速力は一時（今の二時間）七八里を翔けた事となる。どの馬もみな白泡を噛み、汗をだく〳〵と垂れてゐる。夏の夜は早く明けるが、まだ然し行人の影を路上に見出すまでには、大分の間があるらしい。

『喃ア猪之』駒市は走りながらも、忍びやかな聲を後へ投げた。『この鹽梅では頭丘入に會ふ頃まではつきりと夜は明けきりはしねえから、どう間違つても僞首と感づかれることはなからうと思ふ』

『然うだ、大丈夫だその點は』

『其れにもう向ふに見えるあの黑いのが川尻の町。もう一息で行きつける』

『妙光寺といふ寺にゐるんだ。人數だつて然う多くはあるめえ。首と馬と引替へに金を捲き上げたらお前等兩個は約束どほりその金を二頭の馬に括りつけ、すぐどし〳〵と逃げ出してくれ。おら無茶苦茶に荒れ廻つて、頭丘入初め寺にゐる奴等をみんな叩ッ斬り、後から直に追ひかけて行く』

『其りや心得てはゐるけれど、お前一個では危なかねえかな』

『大丈夫！　人間の首の斬様はおらもうちやんと知つてる

んだ』

『病み上りの女の首と、侍の首た些ッと違ふぜ』

『同じ事ッた。骨が少しぐれえ堅えからッて、この腕節で叩ッ斬るんだ。作りながらこの腕にや十人力はたしかにあるんだ。片ッ端から骨灰微塵よ』

『什うだか知れたもんじやねえや』と話しながらとッ〳〵と路上に砂烟を上げて行く。

懦弱なる城主の狂態

この一隊が眞一文字に、川尻妙光寺の門前へ乗りつけた頃だつた。

濱町城中の早苗の局で、病室中のかの女の首が失はれてゐる意外な事實が女中の一人に發見せられて、局中上を下への大騒動となつてゐたのは。

其れを聞くと雅樂之介はすぐ病室へと馳けつけた。九死の中に一生を得て、消えなんとした燈火の僅かに殘炎を保ち得たやう、幽かな光明と希望とを周圍の者に懐かしてゐた哀れな人の窶れた首は、いつの間にか無慙に斷たれて、胴體だけが褥の上に、血汐の中に轉げてゐたのだ。然もその首は手を分けて捜索しても見出せないのだ。憤然と悲歎とに精神の狂はしくなつた雅樂之介のまづ第一に抱いた疑惑は、その下手人は小雪贔屓の家來の中の或者に違はぬといふ事だつた。

『行りをつたな迂奴。雪を呼べ、奥を呼べ!! 彼奴が吩咐けてさしたに違はぬ。何といふ憎むべき非道な事をする奴だいよッ。もう今日こそは恕して置かぬぞ。奥を呼べ、雪を呼べ!』と女中に向つて、渠は怒號を續けたのだが、貞淑なる小雪の眞意をよく知つてゐる女中等は、命令どほり小雪の屋方へ馳けつけようとしなかつた。

『好し、躬が自身にて引ッ捉へ、屹と成敗してくれる』と絶叫しながら、雅樂之介は褥(疊代りの)を蹴立つて渡廊下の端まで來たが、ふと氣がつくと爰から先へは、渠自身では一歩も踏み込むことは出來ぬのだつた。『體は一つ城内に起臥をしてゐるにせよ、表と奥の交通は向後一層に嚴重に斷ち、いかなることがあらうとも、躬の屋方へは汝の歩を踏み入れることを禁止する。勿論汝の屋方へは躬も一歩も踏み入れぬ。申しつけたぞ、誓つたぞ、忘れるな雪ッ!』と渠は先夜宣告し、且つ斷言をしたのであつた。其れを今想起したのだ。

『む、……、然うであつたな』渠は齒を嚙んで欄に倚り、向ふをじつと睨んでゐたが、その狂ふやうな心の怒りは、どう抑へても小雪の屋方へ歩を飛ばすべく唆のかす。だが落ちついて冷靜に、自分の地位と實力の什ういふものであるかを思ふと、歩は自から竦んで動かぬ。自から立てた誓ひを破つて、小雪の屋方へ闖入し、かの女の罪を責めるにしても渠自身では什うにもならない。お袖にさへも敵し得ぬ懦弱な渠の細い手で、武勇絶倫の妻を捉へて成敗することは不可能だ。惡くすると反對に捻伏せられる惧れさへある。この春以來妻の好意や、臣下一同の

忠誠や、老臣共の諫言を宿醉中に排けて、自から好んで床の間の置物同樣の物となり、孤獨の地位に立つて來た自分の所爲の愚さが今明らかに分つて悔しい。

だが事は重大である。

打ち捨てゝ置くわけにはゆかない。

『誰かある、其れへ出い！』渠は耐りかねて覺えず怒鳴つた。眼は呪ふやうに渡り廊下の向ふを屹と睨まへてゐる。が、向ふからは返事がなかつた。その筈である糊米明、小雪の屋方の女中等はまだ一人も起きてゐぬのだ。

『言語道斷！ 躬が自身にて呼んでゐるのに、聞えぬ風をしてゐをる！』

『殿、什うなすつたので御座います』といふ聲が後でしたので、渠は氣がついて振り向くと、加地五郎太が立つてゐる。

『おゝ五郎太か』

『大變な事が起りましたな』

『むゝ……』

『御心中お察し爲ます』

『好い所へ來てくれた』雅樂之介は怒氣に戰く火のついたやうな調子で續けた。『實は今小雪を捕へて、何者に吩咐けて、あのやうな事をさせたのか、聢と糾明する考へで爰までやつて來たのだが、お知りやるとほりこの廊下、躬は渡ることは出來ぬのだ』

『はゝゝゝ、然うで御さいましたな』

『で、お身に頼み入る、躬に代つて彼方へまゐつて、躬の名をもつて下手人の詮議を遂げてもらひたい』

『承知しました』

『既に調伏の事もある、小雪の所業に相違ないのだ。その考へで詮議をしてくれ』

『心得ました』加地は答へながら悠々と渡り廊下を踏んで行く。

『畜生め！ 躬が早苗を失へば、自然と妻に心を傾け、妻に妻らしい待遇を與へるやうにならねばならぬ。然うなる日にはわが戀が……といふ考へが心にあるので、肚では彼奴は勇んでゐるのだ。が、然うは行かんぞ。幸ひにして早苗の慘死は、妻の關知するところでなうても、躬は妻の罪は斷じて赦さぬ。調伏をして躬の和子を――分娩の際早苗の胎から、手を斬り、足を斬り、首を斬りして、辛との事で引き出したあの日の事を考へると、躬の腸は裂けさうになる、妻の憎さは妻の體を八裂にしてくれても足りぬ、和子の讎だ、早苗の讎だ――と思うてゐたのに、今また彼は早苗の命を、然も無慙にも首など掻かして……、吁、何といふ呪はしい、非道な事をする奴だらう。殿下の上意止むを得ず、其れに家名再興の希望を持つてゐるために、虫を殺して祝言をして九州下りしたのであつたが、もうこの上は一時も躬は當地にはゐたくない。命を待たずお聲がかりの妻をふり捨てゝ領地を離れる、その罪死に誅るといふのなら、躬は欣んで死に就かう。吁、其れにしても斯る場合に、出發の際京都から故郷へやつた角内（忠僕）が當地に居つてくれ

たなら、相談相手にならうもの、什うして渠は今もつて當地へ歸着せぬのであらう』と其んな事まで、考へながら渠は尚ほ渡り廊下の取ツつきに突ツ立つたまゝ邃の屋方を忌々しげに睨んでゐたが、暫くしても使にやつた五郎太の歸る樣子がないので、さすがの渠も我を折つて早苗の局へ取つて返すと、死骸の側へ坐つてしまつた。その眼の中には悲憤の涙が溢れるやうに浮かんで來てゐる。

忠僕吉良より歸る

女中等は仰々しく雪洞の灯を點しつらねて、死者の亡骸を守護するやうに屏風を取り卷いて坐つてゐるが、物をいふ者は一個もない。

『緣側の雨戸をこじ開け、廊下から寢所へ入つて、是程の事をした曲者のあつたことを誰も知らぬとは、言語に斷えた油斷でないか。殊に宿直の者共は——陸、清、汝等はたしか當番だつたな』雅樂之介は充血した眼で兩個の顏を睨み廻はした。

『申譯が御ざいません』

『私共は御寢所のお次に居つたので御ざいましたが、つい晝の間の疲れが出まして……』と女中等は戰いてゐる。

『が、今さら何をいうても返らぬ』雅樂之介は屏風の中なる死骸の狀を見ながらいつた。狂はしいまでに昂奮してゐた憤怒も今はいくらか和らぎ、その心には哀愁の涙の波が騷いで來たので、樣子までが何所となく悄然として哀れに見られる。『懇ろにして葬ふやうに總ての用意しておいてくりや。躬はこのあひだ彼方にあつて、心ばかりの供養をして居る。賴むぞ』と腰を起す。

『畏まりました』

『哀れな狀になつたものだな』またもう一度屏風の中なる無慙な人の姿を見てから、雅樂之介は涙を拂つて自分の居間の方へと戻つた。

が、然し怒りは譯けない、悲しみもまた少しも消えない。妻の罪を思ふ存分責めてやることがわが手で出來ない。其れが悔しくて耐らないのだ。些とも早く下手人をわが眼の前へ坐らせて、兩斷にして愛人の靈に手向けたく思ふのだが、その下手人の誰であるかを詮議にやつた五郎太まで、既に小一時經つてゐるのに、まだ今もつて歸つて來ぬのだ。什ういふわけか妻の屋方に止まつてゐて歸つて來ぬのだ。

その中に時刻は經つて、正午も過ぎ八つも過ぎたに五郎太は矢はり歸つて來ぬのだ。何時までしても復命をもたらしさうな樣子はないのだ。『言語道斷！ 渠奴も躬を裏切つて、小雪についてしまひをつたな。好し、その儀なら躬にもまた……』渠は一個して齒嚙みして、自裂て、身悶してゐるのだが、さて實際には什うにもならない。本來ならば渠の屋方に不慮の凶變の起つた事が五郎太によつて傳へられると、同時に家中一統の者、駈けつけて來て懇ろに弔意を表すべき筈であるのに、然うする者は一個もないのだ。比較的渠に對して、好意を寄せてゐる家

老筆頭、あの忠實なる山邊さへ一度も顏を出さぬのだ。斯うなつて來ると高を括つて——！その心では妻の貞節、妻の弱點を見すかして、拗ねて特更に臣下の者等の捧ぐる忠誠を排けてゐた倨傲な渠も犇々と孤獨の感に囚はれる。世界中の人間に捨てられたやうな感さへして來る。

『だが、加地だけは躬の味方、躬の腹心でなければならぬに……。吁！　渠奴までが寢返りを打ち、雪めに付いてしまつたらしい。其れは好いが早苗の死骸は什うしたならば好いだらう。下手人を詮議して盜まれた首を取り返し、首と共に葬式を營むことの出來るまで其のまゝにして置かねばならぬが、何にしろこの暑中、然うしてゐては死骸は腐つて殘らず蛆になるかも知れぬ。あの玉のやうな體が蛆に！　吁、考へても耐らない。斯うした苦痛悲みを躬に見せるのも雪めの所業だ。あの化物めが嫉妬して……。好し、もう斯うなつては先の夜の誓約などは守つてゐられぬ。自身で行つて雪を捉へて——』決心すると居間から飛び出し、緣を蹴立てゝつゝツ〳〵と渡り廊下の方へと來かかる。

と、出會頭にぱつたりと意外な者にぶつかつた。

『おゝ爺！』と一歩退る。

その眼の前へ立つたのは、舊臘渠が京都を立つ時、大名となつて赴任するその吉報を傳へるために、故郷の吉良へ歸した老僕——今も渠は心に描いて信賴の意を馳せてゐたあの忠實なる角内だつた。

『わ、若樣では御ざいませんか』どういふわけか角内は驚き顏で主人を眺めた。

『むゝ躬じや』雅樂之介はその顏を怪しみながらじつと見返し、『が、何でさう躬の顏を訝かしさうにきよろ〳〵見るのじや』

『でも御城下で伺ひましたところによると若樣は、いえ殿樣はたしかに昨晩、奥方樣と御一緒にお討たれあそばしてゐらつしやるやう』

『何、躬が奥と共に討たれたと？』

『へえ、そのやうな評判をして居つたもので御ざいますから、爺めは實に驚きましてな、夢心地でお玄關まで馳けつけたので御ざいましたが、取次衆はどれもみな近づきのない顏ばかり、其れに何を尋ねても頓珍漢な事ばかり仰しやるもので御ざいますから、爺めも劫を煮しましてな、失禮だとは存じましたが、お許しの出るのも待たず、お居間へ直に伺ふつもりで、このお廊下へかゝつて來ますと、貴下樣にぱつたりとお會ひ申したので御ざいます』

『…………』

『でも御城下の取沙汰は嘘、昔にましてお壯健にてわたらせらるゝお顏を拜して爺めは辛と安堵しました。が、然し奥樣は……。この御樣子では奥樣の悲しいお噂も眞實ではないかのやうに思はれますが……』

『うん、雪めは達者だ』

『それ伺つて本當に爺めはやつと安心しました。吁、わしや

れ』まだ旅姿の腰を伸ばして、角内は眼に涙を湛へた。嬉し涙だ。

主命によつて京都から故郷の吉良へ立ち歸り、雅樂之介の父貞弘（右近太夫、薙髮して道光寺入道といふ）に會ひ、上々吉の報告をして、わが手柄でもあるやうに大威張りして戻つて來た渠には領地濱町の風物はみな珍らしかつた。何を見てもみな嬉しく思へた。その中でも新たに成つた――城下外れの路上から見た當城廓の外觀は渠を有頂天にしたのであつた。『吁、とうとう若樣も一城の主人におなりあそばした。其れもみな貞節なあの小雪樣のお力だ。でもよく若樣は爺めの意見をお容れ下すつてあの方と御夫婦になつて下すつた。立身出世するためにや、些とやそつとお心に副はない事もなさらにやなるまい。は』其んな事を考へながら、大欣びで城下へかゝると、大變なことを耳にしたので、渠は蒼くなつて馳けつけたのだが、さて來て見ると意外な有樣！　主人が無事であつたばかりか、力と頼む小雪にも異變は毫もないのであつた。『何の事だ莫迦々々しい、間違ひにも程がある』とは思つても嬉しさは込み上げて來て眼の中に儚ないものを持つたのだつた。

初めて明す肚裡の懊惱

『然し若樣』と渠は續けた。『什ういふわけで跡形もない厭なお噂を城下の者等はして居りますので御さいませうかな』

『さア……』と雅樂之介は考へながら、『其れは多分早苗の事をば……』

『早苗樣と仰しやいますのは、あの聚樂でのお方では？』

『然うじや、那女がまゐつてゐたのだが、然し……。躬が討たれたといふ沙汰を城下の者がしてゐたといふ事實が躬にはさつぱり分らぬ。まさか躬も早苗同樣討取る手筈でも家來の者等がして居つたのではあるまいな』

『な、何で御さいますツて！』

『いや』と雅樂之介は慌てゝ抑へて、而うしてそつと四方の樣子を警戒するやうに見廻はした。渠の胸には、今恐ろしい疑ひが頭を如飴と擡げて來たのだ。

『什うなすつたので御さいます』

『いや』と今度は靜かに、『今着いた汝の耳には、みな新しい事のみで、搔い摘んでの話說では得心させることは出來ぬから、其れは改めていたすとするが、躬は今實にいふに忍びぬ苦しい地位に立つてゐるのじや』

『然う仰しやればお顏の色も好うないやうに拜されますが……』

『むゝ』雅樂之介は脣を嚙み、脚下をじつと見つめてゐたが、暫くすると溜息をして、『其れもみな自業自得』と自分自身を嘲けるやうににやりと笑つた。

『什うなすつたので御さいます』

『いや』雅樂之介はまた靜かに抑へて、『其れよりは故郷の消息を居間で悠々と聞くといたさう。參れ』といひながら先に立つ。その顏色は蒼白めてゐる。

角内は主人について、主人の居間へ入つたが、入ると共に驚いた。見かけは堂々たる屋方だが、内部の裝飾は極めて粗末で、疊代りの莚さへあまり質の好いものではないのだ。是れが大名の殿樣のお住ひになる部屋かと思ふと彼は情けなくなつて來たのだ。聚樂にあつて秀吉の豪奢な生活を見るにつけ、大名なる者の生活を其れに結びつけて夢想してゐた彼は案外に思はれたのだ。

『什うだ』雅樂之介は嘲けるやうに、『是れが今の躬の住居。躬の暮らし向きの什ういふものかは、是れを見ればよく分るであらう』

『へえ……』

『だが、其れよりは無念でならぬは――といふよりは今はもう覺悟を確と定めねば叶はぬ時に臨んだのだが……』といひかけたが、ふつと氣づいて、『いやまづ故郷の消息を聞かう。父上は矢はりお達者か』

『御意……』と角内は眼に涙を湛へて、『あのお手紙を御覽あそばし、どんなにお欣びあそばしたでせう』

『然うあらう』と頷きかけたが、その頷きを俄かに止めると、蒼白めた顏を一段とまた暗くして苦笑した。

『この上はもういつ死んでも心に殘ることはない。が、然し前代未聞の朝鮮お手入れがあると聞く。雅樂もどうか出陣をして、源家の裔に應はしい手柄を立てゝむらひたい。歸つたなら然ういふやうにと、呉々御傳言で御さいました』

『然やうか……』と雅樂之介は唇を噛む。

『で、奥樣に差上げるお文も頂いてまゐりましたが、奥樣のお住居はどれにありますので御ざいます』

『其れはいづれ案内させるが……實は今ちよつと話した――汝の留守中に當地へまゐつて、いや、躬の後を追うて來た早苗が昨夜殺されたのじや』

『そ、それは什うも……』

『で、其れゆゑのあの騷ぎ』雅樂之介は耳を澄して、局の方の物音に注意を拂ひながら語り續ける。『其所へ汝は歸つて來たので、執次の者に案外な仕向けをされた次第じやが、爺！ 躬が大名になつたのはこの上もない禍だつた』

『ど、什うしてで御座います』

『其れはすぐに分ることだが、今の躬は敵軍の重圍の中にあるのも同じじや』

『はゝゝゝ異な事ばかり仰せあそばす』

『いや眞實じや』

『申し上げます……』

『むッ』雅樂之介は絶叫しながら、闇の外を屹と眺めた。小雪づきの女中の一個を廊下の上に彼は見たのだ。

『何じや』と激して詰つた。

『奥方樣仰せには……』

『むゝ……』と覺えず息卷く。

『早苗樣お通夜の用意は調ひまして御さいますゆゑ、御移りなが

ら御前様にも、彼方へお越し下さいますやう、お願ひ申してまゐるやうにと……』とおづおづといふ。

『彼方とは何所をいふのじや』

『奥方様お居方へ』

『ふん』雅樂之介は冷笑しながら『早苗の死骸は當方にある。其れに何で奥の居方で』

『いえ、早苗様御死骸は、もう疾に奥方様お居方の方へお移し申して』

『何ッ！』雅樂之介はまた絶叫をした。憤怒のために其れの體は、わなわなと戰いてゐる。『誰が吩咐けて然やうな事をば』

『早苗様今回の御葬式の儀は特別に、奥方様資格でお營みになる御様子で……』

『奥の資格で？』

『はい……』とふるへながらも、女中は勇を鼓して言葉を續ける。『で、是非お供してまゐるやうにと……』

『好し分つた。はゝゝ。尋らしい狂言じや。わが手でそつと討たして置いて、――いや、もう何も申すまい。家中悉く身に背き、身もまた早苗同様にしてのけんとて然やうな事をば……。身も武士じや。行つてとらせる。覺悟は既に極めてゐたのじや。參まゐれ』

『は』と角内はその後から續く。渠には何の紛擾やらさつぱり譯が分らないので、たゞ心痛をしてゐるばかりだ。

是れはまた意外の光景

渡り廊下の袂には加地とお袖とが出迎へてゐた。裏切者と信じてゐるので、雅樂之介は五郎太には尻眼もくれず行きすぎる。其の足どりは荒つぽかつた。

お袖だけが先に立ち、案内の歩をしづかに運ぶ。長廊下を通りすぎ、小雪が家臣一同に武藝の指南するために特に作らした檜造りの大道場の前まで來たとき、雅樂之介は眼を睜つて停つた。

何といふ光景だらう。

通夜の間にあてられたのは、佛間ではなく武技の場なのだ。然もその周圍の襖門や板戸は全部拂はれてある。

その正面には錦襴で高く覆はれた佛壇が、逆さに立てた金屏風を背景として立つてゐる。白木の位牌、香爐などみな莊嚴に飾り立てられ、縷々とした香煙が哀愁の氣をその上に白く朦朧と漂はしてゐる。

雅樂之介の居方から運ばれて來た早苗の死骸は、その眞下に安置され、白布で全部覆はれてある。首のない見にくさと、無慙な狀を人々に見せないための用意であらう。その上には生前にかの女が常に好んで着てゐた、擢綃をした練絹の一重の衣が被けてある。側には數個の圓頂が、みな型のごとく袈裟をかけ、水晶の珠數を爪ぐつて靜かに經を誦してゐる。が、雅樂之介が一目見て驚いたのは其れではなかつた。道場の兩側に列

正して居並んでゐる家士の面々の扮装だつた。

みな一様に厳めしく物の具に身を堅めてゐるので、紺糸をどしや、節縄目や、胡麻がら縅しや腹巻の袖や草摺が靡いてゐる。左側には家老筆頭山路年熊を初めとして、侍大将須藤逸彌太、物頭森金兵衛、川上與太郎、吉岡軍六、滲戸右兵衛以下三十餘名、右側には軍師加々爪景治、鐵砲組頭牧野仙左衛門、弓組頭岡村靱負、槍組頭千塚典膳、物頭格小川庄兵衛以下三十餘名、粛然として坐つてゐるのだ。で、道場には殺氣横溢、諸士の顔には戦爭氣分が漂うてゐるやうにも見られる。

『奇怪至極な！』雅樂之介は心で叫んだ。祭壇の前へ引ツ張り出された犠牲のやうに自分自身を擬へて見て、、、くわつとしたのだ。

が、然し家士等は靜かに、此方へ向いて一齊に最敬禮を渠に捧げた。

『何を莫迦な、逆臣共が主を討つのに今さら何の敬禮ぞ。其れにしても小雪めは一體何所にゐるのであらう』考へながら眼を擧げて一座の中を物色したが、其れらしい者は見出せなかつた。

『雪、雪ツ！』

渠は耐りかねて呼んで見た。

と、思ひもよらぬ後から、『爰に居ります』といふ聲がしたので、渠は驚いてふり向くと、糸の色あざやかな小櫻縅しによろうた一個が、柔縮緬の覆面をした頭を垂れて平伏してゐる。

いふまでもない妻の小雪だ。雅樂之介が今怒り狂うて、廊下を踏み立てゝ來た時は、かの女は其所に立つてゐる衝立の陰に蹲まり、罪を待つ人のやう、小さくなつてゐたのだが、雅樂之介はその前を其れと氣づかずに過ぎたので、彼女はそつと辷り出て、夫の立つた後の廊下へまた改めてひれ伏して聲のかゝるのを待つてゐたのだ。

『其んな所に居つたのか』雅樂之介は妻の頭上へ憎悪に燃ゆる瞳を射すゑた。

『はい……』

『汝までも物の具をつけ、一體何の狂言なのだ』

『狂言では御さいません』

『では何だ』

『早苗殿の弔戦を今夜いたすので御さいます……』と語尾を微らす。

『何ッ』雅樂之介は案外の言葉に拍子ぬけがして、最前からの自己の邪推と、誤解と不明とを心に恥ぢたが、然し全くは小雪の言葉を信ずる氣にはなり得なかつた。『はゝゝゝゝ、身はまた汝が家來等と共謀をして身を討つ積りで、身を出しぬいて然

やうな姿をして居るのではないかと思つた』
『まア何といふ情けない……』夫の顏を仰ぎ見た小雪の眼には熱涙が溢れるやうに光つて見える。『假にも一城の主人たる御身でありながら輕率な……』
『でも早苗の通夜をするゆゑ、來てくれといつて置きながら、さて來て見ると斯る有樣！　誰でも變に思ふではないか』
『其れにしても餘りな仰せで……雪は悲しう御ざいます』
『世迷言は聞くに及ばぬ。早苗を討つた下手人の詮議は屹と遂げたであらうな』
『………』
『殿、拙者より申し上げます』
『何ツ？』雅樂之介は覺えずふり向き、『汝は加々爪景治だな』
『御意』軍師は列の首席から悠々として體を起すと、衣摺の音をさせながら佛壇の側へ寄つて來て、その左方へと跪き、『憚りながら何うぞ此方へ』
『むゝ』雅樂之介はつか〱と佛壇の前へ進んだが、事毎に自分の豫期とは反した事のみに遭遇するので、腹では少し照れながら、『弔戰するとの事だが、身には其の仔細が分らぬ。無用の事を聽かうより些とも早く下手人を得てこの鬱憤が晴らしたい。早苗の讐が討つてやりたい。喃う、下手人は汝の手で詮議は遂げてあるであらうな』
『御意』景治は少しも騷がず、『下手人は阿蘇の一族』
『何ツ』雅樂之介は嘲けるやうに、『雪ではないと申すのか』
『勿論の儀で！』
『ふん、一族と申す以上は、多人數にて早苗の寢所へ踏ン込んだものと思はにやならぬが、昨夜は其んな樣子はなかつた。もしまことあつたとすれば、濱町一城の守備に任ずる汝等の懈怠油斷の罪は遁れることは出來んではないか』

軍師匪徒の策謀を說く

『いや』と景治は飽くまで靜かに、『早苗樣お首を頂戴いたしたのは御當家の者、馬場駒市めに御ざりまするが、渠をして然うせねばかなはぬやうにさせたのは、阿蘇の一族、目下目丸に潜伏して居る阿蘇惟前めで御座います』
『曲り諄い理窟は兎も角、早苗の首を討つたのはあの騎馬奉行を命じた儂か』
『御意』
『では矢はり雪めの所業じや』
『いや』景治はまた靜かに抑へて、『奥方樣は御存知ない事。今だから申し上げるが、先夜裏山の神木に藁人形を打ちつけて、奥方樣に濡衣をお被せ申したのも、渠等の奸計。憚りながら

婦人の愛に惑溺をしてゐらつしやる殿の御不覺につけ込んで、御夫婦のおん仲にまづ忌はしき波瀾を起させ、その虚に乘じて攻め寄せる計略だつたので御ざいます』

『什うして其れを知つたのじや』

『其れはあの件があつてこの方』景治は莊重な音吐で諄々と說明をした。

其れによると澄町を中心とした四方の部落や、山野の洞窟には肥筑の豪族、尾藤菊地隈部などいふ諸家の浪人が潛伏してゐる。二三年前までは、舊主所領地の附近に潛んで、旗擧の機の熟すのを密かに待つてゐたのだが、九州一圓に秀吉の腹心の者が封ぜられ、殊に肥後には、加藤小西の兩將が半國づつに分封せられて宇土熊本に首府を置き、城を築いて領主たる威武を堂堂と張つたばかりか、隈府、山鹿、植木、伊倉、木山、川尻、甲佐、御船、八代、日奈久、佐敷、水俣、人吉等に至るまで、苟も人口の數百以上ある地へはみな驍勇の聞えある武將を配置して守備を嚴にし、渠等諸家の浪人の勦滅にさへ着手した。で、部落らしい部落の中には渠等の潛むべき餘地はないので、この山間へ逃げ込んで來て、中古以來九州の名門として少なからざる潛勢力を持つてゐる大宮司家（阿蘇）へ投じてしまつた。が、然し大宮司家も、今は既に加藤家の支配を受けてゐる上に、祿高もまた以前と異り、三百石の小身で什うにもならぬ境遇にある。大志を懷く諸家の浪士に滿足させる行動を執り得る資力などはない。たゞ野心家の惟前が目丸の奧に潛伏してゐて、渠等に糧を供給してゐた。其所へ吉良が新しく領主となつて入部したので、叛意に燃ゆる渠等の瞳は吉良家の上へ集注された。

前にもちよつと記したごとくに、阿蘇惟前は大宮司家の當主惟光の叔父に當る。覇氣滿々の梟雄で、兄惟豊の全盛時代に、三十萬石の封土を有して、肥後全國に君臨してゐた當時の夢に憧れてゐる。で、多年宗家にあつて、幼主惟光の後見として威

を擅にしてゐた中に蓄積したる資力をもつて諸家の浪人に恩を售り、盟主となつて濱町城乘取りの策を樹てたのだつた。その參謀が例の怪傑、舊臘以來闇中飛躍を盛んにやつてゐた猿渡丹波だ。怪童駒市の誘惑や、藁人形の調伏や、みな渠の智嚢から出た計略中の一部であつて、その他にもまだ種々の詭計が渠の胸中には藏されてある。

其等の事を景治は間者を入れて聞き出し、機に臨み變に應じて、鏖殺にする方略を今では十分に廻らしてゐる。が、然し謀略は密なるをもつて貴しとする。敵を圖るには味方から圖つてかゝらねばならぬので、渠は駒市の獻策を排ける風を粧うてゐた。其れに渠は奥方に深い同情を持つてゐる。主人雅樂之介を一城の主人に應はしい者にするには、いかなる犧牲を拂つても愛妾早苗を亡きものにせねばならないと考へてゐた。で、駒市の策を排け、短氣な渠が憤起して早苗を討つてくれるのを密かに待つて居つたので、渠は駒市が二僕と共に、得々として僞首を持ち、十頭の馬を引き出して、密に城外へ出て行つた時には既に一切の事實を知つてゐたのであつた。城下の者が城主夫婦が昨夜何者にか討たれたといふ評判をして騷いでゐるのも、渠の方寸から出たことで、渠は然うやつて兇徒等を今夜引き寄せる考へなのだ。敵の術中に甘々と陷つた狀を爲てゐるのだ。渠が探らしたところによると、目丸には惟前を首將と仰ぐ一隊がある、人數はちよつと三百ばかりだ。馬の谷には尾藤の遺臣、厩貴善右衛門の率ゆる浪士が百人ばかり潜伏してゐる。田小野には隈部の殘黨、穴山一角を黨首に戴く八十人ほどの一團がある。馬見原口の須原在には、參謀猿渡丹波の率ゆる二百ばかりの猛者がゐる。是等の者が一齊に今夜蜂起して來ることは、渠には明かに分つてゐるので、通夜に托して起きてゐて、四方から引ッ包み、一個殘らず討つて取り、將來一揆などといふ煩い事のないやうに四隣に武威を示す氣なのだ。武裝は其れがためなのである。

（つゞく）

讀者慰安ー
三萬円大懸賞募集

福運をおあて下さい。問題は簡單でどなたにも出來ます。賞品三萬圓、當選五萬人！

皆さんも御存じの様に本社では九つの雜誌を發行して居ります。即ち子供の雜誌では、幼年倶樂部、少年倶樂部、少女倶樂部の三雜誌、大人の雜誌では、キング、現代、雄辯、講談倶樂部、婦人倶樂部、富士の六雜誌です。**これだけの雜誌が、あだかも親子兄弟の様にむつまじく、足並揃へて同じ理想の下に編輯され、**あまねく津々浦々まで行きわたつて居ります。

毎年お正月には、この九大雜誌が聯合て大懸賞を催しますが、今年は一層親しみのある方法によりたいといふので、賞品も大奮發、投書の仕方も一風變つた工夫に致しました。どうぞ問題をよく讀んで、奮つて投書して下さい。

○左に動物畫の第二號の圖が一つあります。その圖の中に動物が二匹ゐるのですが、

どういふ動物だかわかりません。之がこの問題の面白いところです。

○ところが、この動物がたちまちわかる方法があるのです。それは、もう一つの繪

問題

一號の檻を持つて來て、この檻と二つ合せると、不思議々々、ハツキリと二匹の動物があらはれます。

○そんなら、その第一號の檻がどこにあるのかと申しますと、本誌の二月號にあるのです。ですから、二月號が出るまで待つて、この二枚を組合せると、誰にもすぐわかるのです。

○ところが、二月號まで待たなくても、新年號だけでわかる方法もあるのです。それは、あなたの家のどなたかがお買ひになつた本社の子供雜誌（幼年俱樂部、少年俱樂部、少女俱樂部）の新年號にはこの第一號の檻がついてゐますから、それと合はせれば忽ちです。

○ですから、二月號まで待つて二枚合せて投書してもいゝし、子供の雜誌の新年號のどれかについてゐるのと、二枚合せて投書してもいいのです。

○そこで投書のメ切を二度にしました。第一回メ切……一月二日、當選發表本誌四月號（之は子供の雜誌と新年號と合せて投書する方）——第二回メ切……二月三日、當選發表本誌五月號（之は自分の雜誌の二月號と合せて投書する方）

○新年號だけで子供の雜誌と組み合せて投書した人は、二月號で又全じ樣に子供の雜誌と組合せて出せる樣になつてゐます

◎賞品と投書の仕方は次頁にあります

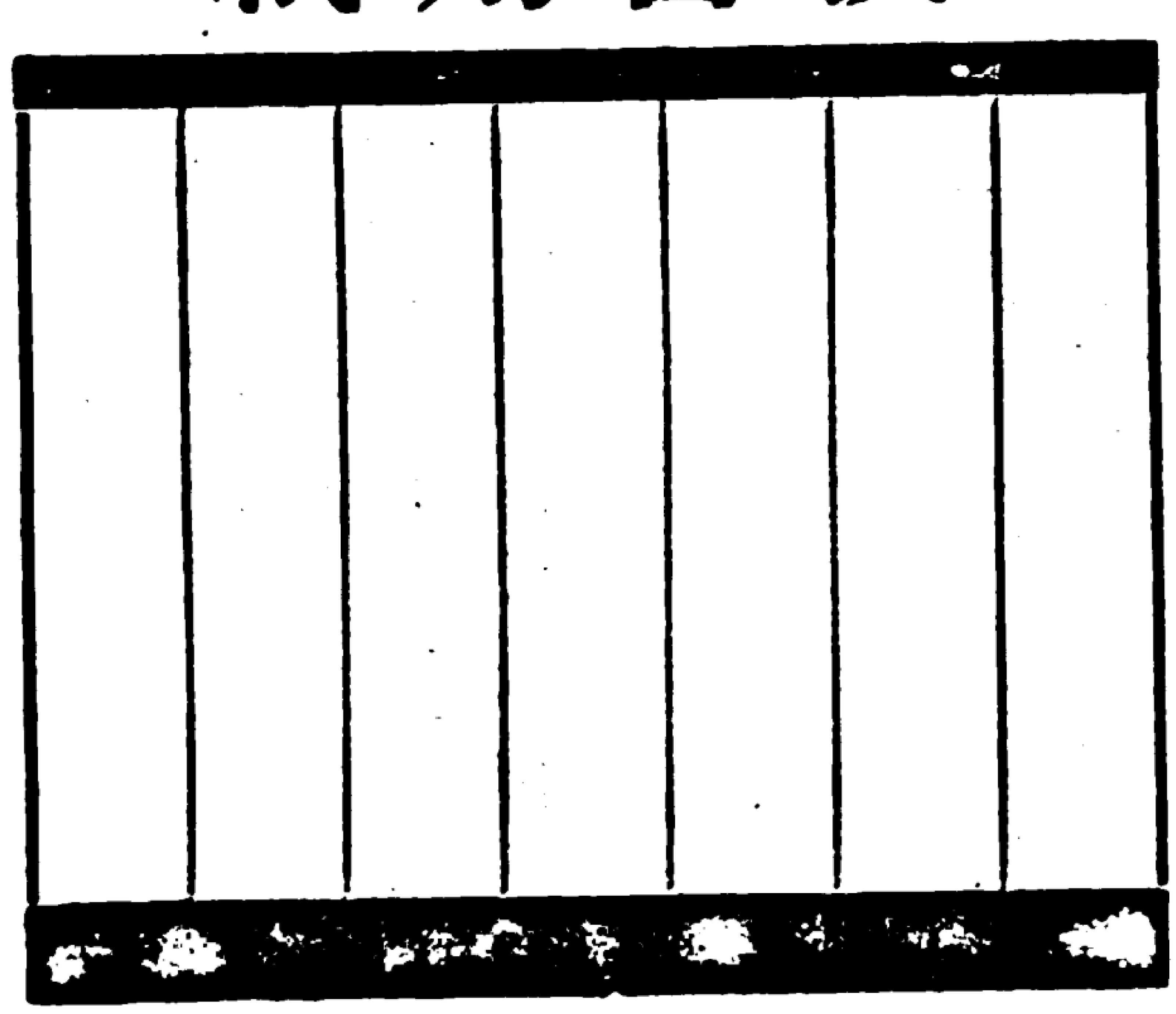
第二號檻



第一號の檻は本誌の二月號又は子供雜誌の新年號にあります。

（切リ取ル）

投書用紙



キング愛讀者

住所

氏名

（切リ取ル）

注意

投書はこの用紙を用ひなければ無効に致します。投書の仕方は次の頁にあります。

スバラシイ賞品

特等賞品 八十名に進呈（一品二十八圓以上の品です）

△西川の夜具蒲團（新銘山三枚組）（西川商店特製）二十組
△ナポレオン蓄音器（大衆號）（大業商店製贈）二十台
△富士自轉車（子供用）（大日本自轉車株式會社特製）二十台
△天賞堂の十八金側腕時計（天賞堂特製）二十個

一等賞品 百九十名に進呈（一品十圓以上二十圓迄の品です）

△ブドウ印セル地（市田商店特製）五十反
△電氣應用模型電車（朝日科學玩具製作所特製）四十台
△クローム側腕時計（天賞堂特製）六十個
△三菱電氣アイロン（三菱電機株式會社特製）四十個

二等賞品 八百五十名に進呈（一品五圓以上七圓までの品です）

△ノーブル美顏器（東京美容館特製）二百個
△マスター組合（五百番粉白粉外）（尚美堂特製）二百組
△スワン萬年筆（1號）（スワン萬年筆製作所特製）二百五十本
△昭和漆器・ペン皿（榮光社特製）二百個

三等賞品 壹千百名に進呈（一品二圓以上三圓までの品です）

△マスター組合（百番水白粉外）（尚美堂特製）三百組
△凸形フエバー體溫計（三田村商店發賣）三百本
△スワン萬年筆（2號）（スワン萬年筆製作所特製）三百組
△歌麿染裏地（谷島商店發賣）二百反

投書の仕方

間違ひない樣によく讀んで下さい

○（一）第一號の檻と第二號の檻を七つづつに切りはなします（黒い太いタテの棒の通りに）

○（二）切つた十四の切れはしを、別々に二匹の動物が出來上る樣に考へながら七枚一組に並べて下さい。

○（三）からして出來た二匹の動物の中、どちらか一匹（どちらでも結構です）投書用紙の點線の中にはめ込んで貼つて下さい。もう一匹の動物は子供の雜誌の投書用紙か、或は本誌二月號の投書用紙に同じ樣に貼つて下さい。

○（四）子供の雜誌に組み合はした人は、新年號だけで自分の投書が出來、子供の方も投書が出來ます。子供の雜誌と組み合せることが出來ない人は、二月號さへ手に入れると、それと組み合せて自分だけで一度に二枚投書が出來ます。

○（五）投書用紙は外がはの點線（切りトルとある所）から切り放して縱五寸横三寸（曲尺）の厚紙に（實用紙、ボール紙、その他ハガキより厚い紙なら

どれが當るでせう

四等賞品　四千二百名に進呈（一品一圓七十錢以上二圓二十錢までの品です）

△キング川口ハーモニカ（增宗樂器部特製）六百個
△キング川口ハーモニカ（吉田樂器店特製）六百個
△蝶印ハーモニカ（日本樂器株式會社特製）六百個
△サンキューハーモニカ（西村商店特製）六百個
△メタリコンハーモニカ（須賀商店特製）六百個
△スターハーモニカ（新見商店特製）六百個
△ミヤタバンドハーモニカ（宇野商店特製）六百個

五等賞品　壹萬九千人に進呈（一品四十五錢以上六十錢までの品です）

美眼液バミール（本社代理部特製）三千個
美眼藥スマイル（玉置合名會社發賣）三千個
△スワンシャープペンシル（スワン萬年筆製作所特製）四千本
△オリヂナル香水（安藤井筒堂發賣）二千本
△家庭常備藥オゾ（都南莊發賣）三千個
△リソウバン（特許紙製絆創膏）（日進工業合資會社特製）四千個

六等賞品　二萬五千名に進呈

△美麗繪ハガキ十枚組＝本社特製＝二萬五千組

當選者總數五萬四百廿人

＝正解者多數の時は、くじびきで當選者を決め、更にくじびきで等級を決めます＝

何でも結構）貼つて、住所氏名をハッキリ書いて下さい。官製ハガキに貼つてはいけません。

○（六）宛名は左の樣に厚紙の裏に書いて下さい。

宛名書方

二錢切手

東京市本郷區
大日本雄辯會講談社
懸賞部

○（七）二錢切手を貼つて下さい、一錢五厘ではいけません。（投書用紙一枚づつに二錢切手を貼らなければいけません）

〆切り

▲第一回……一月三日　當選發表本誌四月號（之は子供雜誌と組み合せて投書する方）

▲第二回……二月三日、當選者發表本誌五月號（之は自分の雜誌の二月號と組み合せ投書る方）

注意

▲上の賞品は各等とも二つに分け、一月三日〆切の分に半分、二月三日の分に半分進呈します。

▲隨つて新年號の子供雜誌と大人雜誌とを組み合せて一月三日まで本社に着くやう出し、又二月號の子供雜誌と大人雜誌を組み合せて二月三日までに着くやう出した人は、二度くじびき出來る譯です。

誰にも出來る簡單な美人術

＝お化粧なしで常に美しく見える…眞の美貌は素顔から＝

藥學士 澁谷乾三

美しくなる爲めには

『わたくしは貌が醜かつたために人から見離され、世の中の不用物と感じました』といふ言葉はドイツの或る若い女が自殺したあとにその机上にあつた遺書の一節であつたといふことであります。貌が醜い、それがために人から見離され、不用物であるとまで感ずるといふことは、あまりに極端なことであると思はれるものゝ、生れつき醜い容貌をもつた人は勿論のこと、比較的美しかつたものが、年や境遇から醜くなりかゝつた時、その心に受ける打撃はとても想像のできないほど大きなものでありませう。

まことに人として、ことに女性と生れて容貌の醜い程不幸なことはありません。『美人薄命』とはいひ來りの言葉でありますが例へ薄命であらうともせめて美人でありたいとは、恐らく、凡ての女性の心の底に潛む慾望ではありますまいか。

美の力…美の魅力

美人としての根本條件は素顔や地肌の美しいといふことで限りない魅力、衰へるを知らぬ容色は、この地肌、素顔の美しさを措いてはないのであります。どんな美しい模樣や、染色に精進された衣裳で裝ふとも亦如何ほど高價な化粧料に浮身をやつしたところで、美の根源である地肌が醜かつたなら、それは幻の美であり、最初から破綻した美であつて、眞に自然の輝きをもつ美しさではないのであります。ばらの花にも比ぶべきお化粧の美よりも、見飽かぬ、けだかい、神々しい百合の花にたとふべき素顔の美、これこそ永遠の美、衰へざる限りなき魅力をもつ美として仰ぐべきものであります。

讃ふべき素顔の美

只外見ばかりのお化粧では、眞の容色の美

は發揮されません。眞のお化粧美容の秘訣はいつまでも剝げない、常に見劣りのしない、地肌の美しさ、卽ち素顔の美を整へることであります。

第一肌を美しくするといふことは、一寸注意すれば、たやすく出來ることであつて、脂性には脂肪性の飲食を控へ目となし、荒れ性の人には反對にそれを好んで攝るやう心掛けると云ふ事も最も手輕な一方法でありますが玆に最も簡單で確實に眞の美容の目的に到達させるために完成された『チ、ナソルト』は洗顔のとき、その僅かを洗面器に入れますとどんな水でも忽ち膚さはりのよい、水質一變してすべての惡い成分が破壞されて了ひ、反對に根本から皮膚のキメ細かに美しくする作用があらはれ、艶やかに色を白くする漂白性つよく、殊に脂性の方などは、直ぐ樣見ちがへる計りにすつきりと、奇麗になります。

チ、ナの根本的效果

その他地肌のいろ〳〵な缺點、たとへば、ニキビ、ハタケ、ソバカス、顔のシミ、産後にあらはれる皮膚のシミ、殊に性來の色黑き方などには覿面に効き目があらはれます。しかも白粉のりをよくし、これを浴槽に用ひたなら水質を純化させると共に、全身が滑かに美しく曾てない爽かさを覺えます。

この驚くべき『チ、ナソルト』の根本的の効果は、ひそかにゴム糊を交へた化粧水を顔につけて手で擦つてゐるうちに、その含まれたゴム糊が干乾びて垢のやうに黑々と落ちるのを、全く肌のよごれの脱れたものと思ひ違ひして色の白くなりさうなものと感ぜさせるやうな、ありふれたいかさま美容料とは全く別な、自然美を實際に發揮するものであることは、實驗された多くの方々のひとしく驚喜に近い確かな證明によつても判るのであります。眞個の意味の美顔術、お化粧に目覺めた方、地肌の美、素顔の美を欲する方、小皺を惧れる方、顔に吹出物があつたり出やすい方、シミなどに悩まれる方の常用してもつとも簡單にできる間違なく驚くほど滿足のできる新發見の美肌料としてお奬め致します。この『チ、ナソルト』は邦名を『素肌の美』といひ、價一罎二圓（送料內地十二錢、鮮外四十五錢）未だ何處にも發賣されて居りませんから御試用希望の方には特に本社代理部へ御申込みになれば便宜御取次いたします。



美身劑チ、ナソルトの常用者（水谷八重子さん）

「素肌の美」に寄する實驗者の言葉

△水谷八重子さん＝洗面器に一匙を投げる。忽ちこれ迄に感じたことのない柔らかな手觸はりがして、ほんとに垢ぬけのした素顔になれる。その名にそむかぬ『素肌の美』を責任をもつてお奬めいたします。

△大河內傳次郎丈＝油に滲む不愉快な顔などは一度の試用によつて、立どころに快よい磨きをかけた自然美ができます美容の目的としての理想的なものであると信じ愛用してをります。



△坂東秀調丈＝常用してをる間に驚くほど皮膚を美化することを實驗いたしました。素肌の惡い方は勿論のこと、年の關係で老け易い方などの皮膚若返り法としては最も適當のものとして、美貌を欲する方々の常備品として推奬いたします。

「フケぬけ毛をピタリ止める」

日本に初めて出來た理想的完全品

クイン一ツで香油とポマードの代用になる

フケが多くて頭が痒い程氣持の悪いものはないのみならず、フケは非常に毛髪を荒しますから毛髪は自然榮養や發育を妨げられて段段赤細くなり艶を失ひ遂には脱落して了ふ男女を問はず頭髪の抜けたり白毛が出來る程淋しい感じのするものはない。

フケや拔毛は單に毛髪を洗つたり粗雑なフケ止液や在來の怪しげな毛生藥を振りかけた位では何の効果もないばかりか徒らに安價なアルコールに刺戟されて毛質及皮膚面を害する事も實に甚しい。

唯一度でピッタリ止る

本社が特に推薦する「クイン」は純植物性の毛髪榮養料を主としてあらゆる科學の原理を應用し超人的な方法に依り精製された事は申すまでもなく、その不思議な作用は皮膚の深部にまで及びフケの發生をピッタリ止めてしまひます。

一度用ひると二十日間はどんなにひどいフケでも全く嘘のやうに止り常用すれば漸次少なくなつて數回後にはあれほどヒドかつたフケ拔毛が全く根本から取除かれて氣分も自然と晴々して參ります。

而も奇妙なことは若はげ髪が薄く切れ易く光澤のない方などが常用すれば必ず一切の痒みを拭ひ去つて眞に一點のフケもなくなり若々しい濃黒な生き生きした頭髪を保つ事が出來ます。

ポマード・香油の代用に

又重寶な事に「クイン」はポマード代用になりますから平素ポマードや水油を御用ひになる方もこの「クイン」一つで何にも入りません（勿論香油と併用するも可）頭髪を短かくして居られる方に使用して三四時間後に直ぐ洗ひ落してもその効果は變りなく然も粘つく事がないから用ひた後の爽快さは又格別でその中に含有する高貴な香料は馥郁として身に迫りそれが如何にも氣高い風味と深い教養を象徴するために上流階級の方々は競うて愛用して居ります。

德川侯爵御夫妻の如き口を揃へて、このクインの實効を賞揚なされ『外遊中なかなか純良な頭髪化粧品がなくて困りましたが、今回贈られたクインは全く說明書と寸分違はぬ不思議な効果に驚いた、然もサラサラして少しも粘付かず拔毛もピッタリ止つて本當に晴々しました』と尚

鶴見祐輔代議士も「私は頭が痒くなると止め度もなく痒くなつてたまらぬ程ヒドイフケ性なのにこのクインのお蔭で忘れた樣に快復しました」と喜ばれて居ります。

頭髪病を防ぎ毛質をよくする

新發明のフケ拔毛止『クイン』を一度用ひて二三分すればすべてのカユミを忘れ不快味を一掃しフケや拔毛を完全に止めます。又あらゆる頭髪病を防ぎ完全無害に純良な頭髪を生育する作用のある事は全く之までに見る事の出來なかつた科學の力で正に實驗した記者の體驗より眞に優秀品として切に各位に御すすめ致します。この新發明のフケドメポマード『クイン』は特に御希望の方へ、お頒ちいたします。たゞ御斷りいたしておきますことは、多くの原料のうちで、容易に得難い一品があつて一回の調製數に限りある由でありますから、品切れになりますと、約四十日間はお待ちを願はねばなりませぬ故お申込はお早くお願ひ致します。

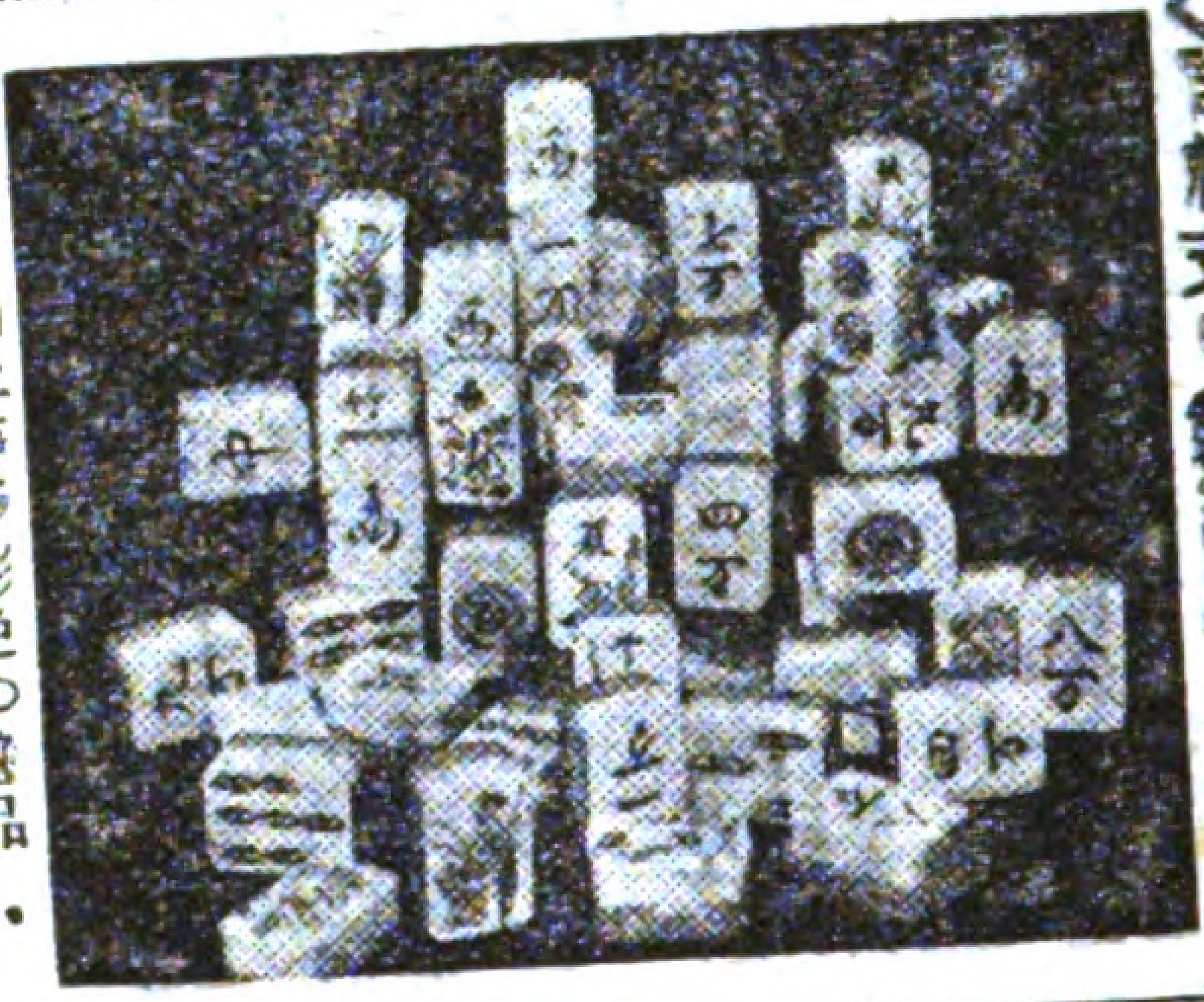
お値段は一圓と一圓八十錢兩用二圓五十錢の三種、送料は三個まで内地十二錢海外は三個迄五十錢で、東京市本郷區駒込坂下町四八大日本雄辯會講談社代理部振替東京六六二九番でお頒ちいたします。

本社代理部直輸入

世界的大流行の

支那遊戲 麻雀

◇新着支那製器具特賣



牛骨製厚肉上等極彩色の逸品・何れも上等容器計數器付

▼一號　特價　貳拾五圓

▼二號　特價　貳拾八圓

▼三號　特價　參拾圓

▼四號　特價　參拾五圓

▼五號　特價　四拾圓

荷造送料内地四十錢領土九十錢

▽麻雀解說書　一圓　送料二錢

マッチ一本で手輕に接く

糊狀ハンダ

(一名道具いらず糊ハンダ)

ラヂオ等の組立に頗る便利



る便利なハンダです。

どんな金屬でも小さなものはマッチ又はローソクの火で(勿論大きなものは鏝)他に何にも要せず即座に手輕に接着出來。取扱ひの簡單なものと出來上りの美麗で完全なのが本品の特長です。家庭用として最も便利です。

試用小罐　四十錢

德用罐　一圓(送料四錢)

SN式携帶用

顯微鏡

萬年筆形ポケット用

倍率正確



萬年筆大のものでポケットに入れ携帶することが出來何時何處でも使用する事が出來ます。然も價がズハ抜けて安く、倍率が正確で使用に少しの面倒がなく構造頗る堅牢永久的使用に堪へる便利品。トテモ他の顯微鏡や擴大鏡の比ではありません。二百倍二圓六十錢、三百倍三圓六十錢、送料内地十五錢外五十錢

讀書三昧の好伴侶

寢ながら讀書の出來る

ブックスタンド



雜誌、書籍はその大小に拘らず、總てこれに用ひられ横向きでも仰向けになつてでも、寢ながらでも樂々と書見が出來ます。角度の加減回轉高低は自由故、目の爲によく衛生に叶ひ病人は勿論、身體の疲勞した場合に大層重寶であります。本器は左の如く種々の用途があり、尙その上實に便利ですから發賣以來非常な好評を博して居るのであります。



一臺で六種使用出來る

◇寢讀二通り　◇音樂演奏殊に尺八琴等の譜面臺に◇卓上用書見臺◇筆記用に便利　◇書架となる　◇氷嚢つり

上製三圓五十錢

並製三圓

三種用二圓五十錢

送料内地三十錢　領土七十五錢

旅行、移轉、保存に便利な

蒲團袋



夜具は旅行や移轉の際の運搬には勿論、保存にも大變厄介なものですが、この蒲團袋を用ひれば、その取扱ひは非常に樂であります。一枚以上五六枚まで一人で手輕に完全に包め、バンドで締めれば便利至極、厚地で別に紐等を用ひずとも運搬至極便利、又何處へ放り出しても安心、ズック製故完全に保護せられます。上等上製九圓五十錢、特製十一圓(特製は防水裝置につき)(送料内地四十錢、領土六十錢)

埃よけ、虫よけ、濕氣よけ

新案特許

洋服保存器

(簡便な洋服簞笥代用品)



背廣用上　一圓八十錢

外套用上　二圓

(送料内地廿五錢領土六十錢)

極く丈夫な紙で圖の樣に作られてあります。内部へ洋服を吊り下げ、口を閉ぢれば外氣を完全に遮斷しますから絶對に蟲食ひなどの生ずることなく黴にもならず完全に保存することが出來得る重寶なものです。

大日本雄辯會講談社代理部

振替東京六六二九番

醫師も驚いた温灸の効め

靜岡縣熱海町　農學士　駒井德三

三月廿日突然發熱し二週間の間三十九度より四十度の間を前後し醫師は腸チフスならんと言ふ。下痢と發熱の爲め衰弱甚しく忽ちの中に體量は十六貫五百から十三貫餘に激減して失つた。

偶々東京日々新聞記者鈴木茂三郎君來訪せられ、温灸の効力偉大なる事を自己の體驗より詳述して切りと勸められた。余も講談社の雜誌等にて承知せるに依り直ちに注文温灸治療を試むるや兩三日にして不思議にも空腹を感じ食慾を生じたるまゝに今までの粥食を廢して、思切つて平常食とせるに、三食は勿論食間も空腹を覺える樣になり、寢前の食餌も翌朝は完全に消化され、朝食を攝るに何等の支障なく誠に不思議の感あり、しかも一方體量は温灸治療前十三貫五百目のものが僅か三週間にして十五貫二百目となり醫師も其の効力の偉大なるに驚き居れり。

余は最初温灸を初めんとする頃其の効力に大分疑ひを持ち居りし醫師も今日にては其の偉大なる効果を確信し最近にて自ら余の温灸器を借り行きて使用するに至りたるなど愉快に堪へざる處なり。

名士とラヂウム温灸

近來政界財界の名士間にラヂウム温灸の流行は素晴しいもので東都中心丸ノ内邊の官廳大會社などでは一社數十名の温灸黨がある程で、試用者が悉く驚嘆感謝して居ります。

◇村山子爵　前商相中橋閣下曰く『永年不治の胃腸病がラヂウム温灸で全快、諸名士達にも勸めた處皆よく効くのに驚いて居る、まあ僞されたと思つて君使つて見給へ』と。

◇谷村大佐談　島村閣下邸で推奨のラヂウム温灸の端瀨中將閣下も用ひた處身動きも出來ぬ程衰弱した胃腸病が恢復元氣となり外出も出來る樣になつたので僕も實行中だ。

醫學者の證明と推奨

名古屋博士曰く＝ラヂウム温灸器を實驗して見たが婦人病や神經痛等にも卓効がある實によいものを發明した。

岸本博士曰く＝唯一回にて容態に著明の變化を來し腹痛も輕減して夜間の苦惱を減じたるは確かに顯著なる効驗と存候（體驗）

藤卷博士曰く＝多數の患者に使用實驗の効力顯著なる事を認め敢て一般に推奨に價するを信ず。

西田博士曰く＝使用實驗の結果諸種の内科的疾患に有効にして殊に胃腸病に効力顯著なり。

佐藤醫學士曰く＝親しく小生自身の胃アトニー症に使用せしに偉効あるを確認せしを以つて多數の患者に使用し胃腸疾患に卓効を認む。

尚この外阿部博士外三十餘名の醫學大家又諸先生達が證明又は推奨しその實證効力は今や日本全國は勿論遠く海外に居らるゝ多數の醫家が直接患者に使用しその驚くべき効能を立證されて居られます。

記者附記

ラヂウム温灸治療器の胃腸病征服の偉力は全く驚くべきもので、玆に發表の五十日に五貫肥つた中央大學の興村氏の外にも、白山自動車會社の佐伯氏の三十五日目に三貫五百匁肥り、帝大の三木三郎氏の七日間に一貫匁以上肥り、其他驚嘆すべき例は實に枚擧に遑ない程であります、しかも之等の方々が悉く永年の慢性胃腸病に苦しめられ粥も消化出來ぬ人々であるから更に驚かざるを得ません。尚最近の實例を列記するならば、

皆川幸三郎氏	（宮城）	六十日間に	七貫匁増加
柏木千代子様	（澁谷）	九十日間に	六貫匁〃
赤羽文子様	（大連）	百五十日間	四貫五百匁
田原直敏氏	（山口）	六十日間に	四貫匁増加
及川伊十見氏	（臺灣）	九十八日間	四貫匁〃
小笠原原氏	（島根）	百二十日間	四貫匁〃
平沼謙氏	（千葉）	百五十日間	三貫五百匁
杉山可勝氏	（千葉）	百五十日間	三貫二百匁
野澤常次氏	（東京）	六十日間に	三貫匁増加
飯井酒造藏氏	（橫濱）	五十日間に	二貫九百匁
猪又八重吉氏	（鹿島）	七十日間に	二貫四百匁

右の外數百名の驚く可き體重増加例あり省略

ラヂウム温灸器とはどんなものか！

近來愈よ驚異的卓効を示して現代醫學界の注目の焦點となり胃腸病者の渇仰救世主の如きラヂウム温灸器とはどんなものか！

古來我國に於て腹痛と下痢止の秘法として不思議の靈効を傳へられて居る臍部の灸療法に就いて、東京理學療院長河野先生が苦心永年御研究の結果遂ひにその原理を極め胃腸機能の眞理に結合し更に最近化學を應用して完成し得た專賣特許治療器であります。

手軽て便利で即座に効く

この温灸器は極めて完全な治療器で家庭に居ながら容易く使用する事が出來、この恩恵に浴する事が出來ます、尚温灸が胃腸病に奏効する事前述の通りでありますが、その治療範圍も極めて廣く特に今日まで目立つて好成績なのは冷え症、婦人病、不眠症、消化不良神經痛、痔疾、肩のこり、腰痛等で中でも婦人病、冷え症等は殆んど百人が百人折紙付即効と申して過言ではありませぬ。

元來
温灸は
その
効精の
か艾
神秘
な奏
力で
か ら
昨今
り ふ
たれ
的料學
薬配
とな台
然はと
根そ全
據の
異にを
一度し
使用御に



ラヂウム温器一揃

なれば速く解る事で絶對に有効無害、然も御家庭で毎日僅かに一時間乃至二時間の治療で十分ですから頗る經濟で至極重寶、又使用上には少しの面倒があるわけでもありませんから誰様も今速くこの場所でその絶大な効果に浴する事が出來ます。

尚本温灸器に就いてのお尋ねは返信料添へ本社代理部係附河野義宛に御願ひ申上げます

胃腸病及虚弱者の體質改造に折紙付

醫學博士 藤卷先生實驗推奬
醫學博士 西田先生實驗證明
醫學博士 重田先生責任推奬
醫學大家 三十餘名推奬證明

ラヂウム温灸治療器

專賣特許
英米既願
新案特許
意匠登錄
商標登錄

特長

熱くなく・痕つかず
家庭的で・危險なし
無煙式で・便利經濟
優美堅牢・價格低廉
卓効試驗・世界第一

ハガキで申込次第百卅頁の
説明書實驗錄進呈

定價表

藥及特效艾五週間付 上桐箱入 一揃 十三圓
荷造送料 内地八十錢 領土一圓
補給用藥及艾五週間分 三圓五十錢
荷造送料 内地三十錢 領土六十錢

尚神經痛痔肩のこり其他慢性諸病の局所用としては至極便な特懐中用があります
藥及艾五週間付桐箱入一揃定價十圓
荷造送料 内地八十錢 領土一圓
補給用藥及艾五週間分 二圓七十錢
送料 内地三十錢 海外六十錢

發賣元 東京本鄕區駒込坂下町四八
大日本雄辯會代理部
（振替口座東京六六二九番）

醫學界空前にして絶後の大發見！
喘息、百日咳、肺炎が容易に治る樣になつた

氣管支加答兒や流感等は一夜に輕快となり
實驗の四大醫學博士、五大醫學士悉く驚嘆す

進歩した醫學で治らぬ病氣

醫學の進歩した今日でも喘息と百日咳の完全な治療法は世界各國共に未だ發見されて居りません、それのみか肺炎、氣管支加答兒にさへ確効ある藥は殆ど無いと云つても差支へありません。就中百日咳には全く方法がない上に抵抗力弱き子供に多い病氣丈に其の死亡率の高い事は皆樣も御存じの通りで我國丈でも毎年數萬人づつ死亡すると云ふ遺憾な狀態であります。

喘息にも根治藥なく僅に痲醉性の劇毒藥の注射をして一時の苦痛を凌いだり、痲醉性の內服藥を服用して一時押へで逃れて來ましたが、いづれも根本的に全快さすると云ふ事が出來ないので一度本病にかゝると遂に終生付き纏ふ業病となつてしまふのであります。

處が嬉しいことには新發見された「ダウンチリメン」一草は佐野、岡部、合屋、三木の四醫學博士外五醫學士に依り去る大正十三年來數千人の呼吸器病患者に實驗されし結果鎭咳袪痰、解熱、強心、健胃の五大作用を具備し小兒、老人、衰弱したる者にも絕對無害にて、難治の喘息、百日咳が易々と治るのみか呼吸器病一般に偉大なる効果のある事が發見されました。

喘息患者は悉く救はる

百日咳の如きは早いのは二日、普通で七日極惡性でも十五日以上を要した例がありません。喘息の如きも早いのは服用だ翌日既に發作が止つたと云ふ例さへあり普通の者は服用數日後發作が止ると云ふ驚異的偉効を奏するのであります。岡部博士は本草に對する文獻の一節に（第卅二回九州醫學會誌ヨリ拔萃）

余ハ氣管支性喘息ト百日咳ニ本草ノ浸出液デ吸入ト內服ヲ併用スレバ著明ナ効果ノアル事ヲ確信スル、本草ノ喘息ニ對スル効果ハ慢性氣管支加答兒ヲ治シテ發作ヲ止メルモノノ樣デアルカラ痲醉性ノアルカロイド又ハアドリナリン注射ノ如キ一時的ノ奏効トハ違フ、本劑服用ニ由テ幼年ヨリ數十年持續セル頑固ナル喘息ガ二ケ年來全ク發作ヲ見ナイ例モアル……云々と御發表になつて居ります。

本草に對する研究は岡部博士の喘息、百日咳、氣管支加答兒等、佐野博士は百日咳、肺炎、氣管支加答兒、チブテリー流感等其の他の諸先生は肺結核、喉頭結核、肺炎、肋膜、

肺尖加答兒等でありますが、就中佐野醫學博士は最も多くの患者に最も廣く御研究を重ねられ今尚御研究中であります、佐野先生は本草の主成分を抽出しそれに依つて實驗を重ねられたのでありますが、左に去る昭和二年七月末日から同三年一月に至る八ヶ月間丈に取扱はれし臨床實驗を略記せば、

◎百日咳　實驗者二十四人の全快日數は二日目二人。四日目七人。七日目三人。八日目四人。十日目一人。十二日目二人。十四日目二人。十五日を要したもの一人と云ふ眞に世界治療界新記錄の全快率であります。しかも一人の死亡者の出ないと云ふ事は何と喜ばしい事ではありませんか。

◎肺炎　實驗者は四十六人で此の成績は二日目五人。四日目十人。六日目十人。八日目十一人。十日目六人。十三日目一人。十六日目二人。十八日を要したる者一人と云ふ……之又世界醫學界の新記錄であります。

◎氣管支加答兒　七十九人の實驗者中其の全快日數は二日目十九人。四日目二十五人。六日目には二十二人。八日目には七人。十日目には三人。十五日を要した者三人と云ふ絕對的の全快率であります。

◎流感、咽頭、喉頭兩加答兒、肋膜炎等尚數百の實驗例が御座いますが、いづれも殆ど一夜で全快して居ります。斯様な例は在來の何藥と雖も遠く及ばぬ處で呼吸器藥の大革命であります。尚本草は肺結核、肺尖加答兒、肋膜炎患者が服用すれば食慾增し熱を取り咳を止め非常に早く快方に向ひます、特に肋膜炎には最も適して居ります。之等の病症の全快例は紙面の關係で今回は發表出來ませんが次回に於て流感、咽頭加答兒、喉頭加答兒、肋膜炎等數百例と共に確實なる數字を以つて全快例を現し御發表申上げます。



內務省に寄贈するダウンチリメン草がはるばるジャワ島から本社代理部へ到着したる處です

ダウンチリメンの特長

本草はペラゴニューム科に屬する熱帶植物で其の特長は(1)鎮咳と祛痰の强力な作用を具備す。(2)解熱の作用又强力にして四十度の高熱も忽ち消散し結核性諸病、肋膜炎の如き頑固な熱にも頗る妙、特に在來の解熱劑の如く發汗せずに解熱する故に衰弱した患者に最も適す、(3)「ヂキタリス」の如き强力な强心の作用あれば高熱の肺炎、流感の如きに實に適す、(4)不思議に數日の服用で喀血が止る、(5)オキシフル以上の殺菌力を有す、(6)服藥の分量を超ゆることあるも又連續一ヶ年以上服用するも何等副作用を伴はず醫藥との併用差支へなし等々であります。

本草は原藥草そのまゝと、用法の簡單な錠劑の二種類です。効目は皆同じです。使用法はいづれも現品に添付してあります。

▼ダウンチリメン草約十五日分壹圓也、約三十日分貳圓也、送料內地十二錢領土五十錢

▼同錠劑小瓶五日分金壹圓也、中瓶十五日分金貳圓八拾錢也、大瓶一ヶ月分金五圓也、送料同前、便宜上東京本郷區駒込坂下町大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二九番）へ御申込み下さいませ。

◎◎◎ニキビ、ソバカス、吹出物を

根治し眞に色を白くするエスゾールの發見とその實際効力に就いて■■■

藥劑師　松浦泰造

ニキビ、ソバカスの藥には

男女を問はず青年期になると十人中八九人迄はニキビや吹出物の出る方は隨分多く誠に見苦しいものであるが本人にとつて是がどんなにか氣苦勞であるかを想像いたしますと全く同情せずには居られません。是までニキビソバカス、吹出物の藥は澤山發賣されては居りますが何れも一長一短で是ならばと云ふ完全な藥は尠いのであります。今日程進歩した醫學で短期日に是を治する方法を發見されないのは實に殘念なことではありませんか。從來、皮膚病中特にニキビ、ソバカス、吹出物の治療に就いては硫黄化合體が一番効果があるとされて居り、この學說に基いて造られた藥は今までにも隨分澤山ありますが何れも硫黄の粉末が粗雜の爲に塗つた場合皮膚面に於ける滲透作用が不充分であり而も皮膚を刺戟せぬ様創製する事が出來ないので其の効力を充分發揮することが出來ません。

エスゾールの效果は偉大

ところが今回發見のエスゾールは多年研究の結果浸透作用不充分とされて居た硫黄粉末を電氣の力により更に十萬分の一以上の微粒子となすことに成功し、これを獨特の製法に依つて液體に創製されたものであります。從つて皮膚面に於ける浸透作用が強烈でありますから、皮膚の眞底から漂白され二三回の塗布に依つてニキビ、ソバカス、吹出物は忘れた様に治り何等の副作用もなく樂々と其の効果を見ることが出來ます。これこそ全く理想的の皮膚病專門藥で本藥の卓效に就いては今まで多數の實驗者が異口同音に其效果のいつはらざるに驚嘆され、殊に山田醫學博士はエスゾールが意想外の効果を收めたることより賞讃の辭を寄せられ、これならば完全に根治すると云ふ確信を得たのであります。

見て居る間に色白くなる

試みにエスゾールを家人にも告げず少しく使用なされればニキビ、ソバカス、吹出物が拭つた様に綺麗に除去されますのでお友達は申すも迄もなくお家の方々もビックリなさる程早いのであります。又前に述べた通り強烈な浸透作用に依つて皮膚色素が根本的に改造されますので一度使へば見る間に見違へる程綺麗に色白くなり、顔の色艶も非常に良くなりますから、色の黒い方や日ヤケでお困りの方はエスゾールを是非御使用下さい。

藥價は一圓、二圓、三圓、四圓、（送料各十五錢、領土五十錢）でありまして從來の他品に較べて一層安價に廣く皆様にお頒ちする事になりました。御希望の方は**講談社代理部**（**振替東京六六二九**）へ御申込みになれば、直ぐ御送りいたします。

ニキビ、ソバカス、吹出物の藥としては種類も多く、其の選定に迷はれ悶々の内に日を過されて居る方が尠くないと思ひますが、この**エスゾール**丈は全く安心しておすゝめ出來御試用も頂ける理想的品でこれまで多數の方々が試用して一樣に驚嘆感謝されて居ります。ですから躊躇せず一日も早く御使用の上根治の喜びを得られます樣御願ひします。」



田原長岡兩博士有効御證明の溫浴素……」

どこの家庭でも自然の溫泉浴が出來る

殊に婦人病、冷え症、神經痛、リユーマチス、腰痛、痔疾、貧血症、肩のコリ、常習頭痛等の難病に實によく効く

昔から溫泉地には一般に長壽者が多いと申されて居ります。溫泉には數々の靈妙な天然の成分が含まれて居りまして到底一般藥品の及びもつかないものがありますし亦人間本來の體質から申しましても、この自然の溫泉に親む位結構な健康法はなく、然も之によつて常に心身共爽快を覺え冬でも寒さ知らず、まことに幸福な生活が得られるわけであります。只殘念な事には病氣に本當によく効く好ましい溫泉は大てい山間の僻地に多く、その爲め病弱に苦しんで居られる方や、老人子供或は寸暇を惜まるゝ方殊に御家庭から離るゝ事を許されない、御婦人などはなかなかその機會が得られず、何んとかして各家庭に溫泉そのまゝを移す方法はないものかと希ふのは只にこの方面を專門的に苦心研究されて居る桑原氏のみに止りません。以下桑原氏發見の溫浴素のお話をそのまゝ記して見ませう。＝記者＝

◇毎日喜ばしいお便りの山

曾つてこの溫浴劑の發見までの苦心談と非凡な靈効が婦人倶樂部誌上に發表されました處、忽ち素晴しい大評判となり、各方面の方々から、是非一度試して見たいと續々御申込が御座いましたが何分にも人跡未踏の海拔四千五百餘尺の高山中からほんの僅か宛採取し得る程度のものですから、一時は全く天手古舞の有樣でした。

處が昨今では、それら御試用の皆樣から次々と色々珍しい御報やら喜ばしい御便りが日日机上に山積の有樣、事實この効力の著しい事に就いては全く豫想外の成績で、こんな貴重な療法が自宅にあつて然も自然の溫泉以上の効果に浴する事が出來ると愈ゝ大好評を博して參りました。現に帝劇俳優尾上梅幸丈、松本幸四郎丈始め歌舞伎座俳優中村歌右衞門外諸丈も熱心な御愛用家で今回この溫浴劑を賞揚して態ゝ御連名で感想記を寄せられました。

又極く最近記者の知人の辯護士等實驗して十數年來惱まされて居た惡性の痔疾が、僅々數回の溫浴でケロリとして失つた事など全く夢の樣な事實も御座います。

◇入浴する丈で難症も治る

殊に婦人病神經痛リユーマチスの方からの感謝狀が一番に多く、中でも極めて效力顯著なのは婦人病で、冷え性、子宮病、白帶下、不姙症等の爲めに長年患ひ通した方々から之で全く救はれたと御喜びの御手紙を寄せられたもの又、腰痛、肩のコリ、手足の冷、常習頭痛等にも實によく効き、夏は粉末のまゝ汗除けに用ひて、至極重寶です。

おでき腫物ならこの粉末を胡麻油にトロトロ溶解して患部に塗布し、水蟲、田蟲、火傷にはリスリンと煉り合せて塗布して繃帶して置けば少しの痕跡もなく全治して了ひます。

それに入浴する丈ですから他の藥品などと異り副作用や中毒など起す心配が絶對になく日頃健康な方が入浴すれば血色は益よくなり食慾の增進すること實に妙で、一度御試用になられた御方は必ず續けて御愛用になられ何んとも言へないよい氣持だと非常に喜ばれて居ります。

◇腰湯丈でも結構

用料は普通一人風呂（約一石位）に對し小袋一箇位を適當と致しますから費用も極めて僅かなものです。

尤も御風呂の設備のない方は一回分を三分の一として腰湯にした丈でも、婦人病、皮膚病、痔疾等には十分効果を納める事が出來ます。又入浴は勿論腰湯さへも出來ない樣な場合には極く少量を湯に溶かして十分溫めてからタオル又は布切れで、患部に溫濕布した丈でも、その偉力は十分に働きますから痛みを退り快癒させる事も容易であります。

◇棄湯まで利用出來る

斯樣に諸病に用ひて效果があるばかりでなく面白い事には入浴後の棄湯を野菜の肥しに致しますと、他の肥料以上の效果があり害蟲の驅除ともなり粉末をそのまゝ厩箱、便所等に撒布すれば除蟲劑ともなり、又棄湯にて白衣の洗濯すれば垢や汚れも綺麗に落ちる事もむしろ不思議な位であります。

◇諸博士も續々有效證明

一體この溫浴劑は普通一般の湯の花などとは全然その性質を異にした乳白無臭の美しい粉末で、白粉焼けがするとか、色が染るとか、肌荒等は絶對になく、殊に石鹸袋を使用しても少しも淸水と異る所なく全く理想的な溫浴劑で田原良純博士長岡秀四郎博士も親しく分析の上有効なるを御證明なりました。

◇特に御奬めしたい方々

左樣なわけでその治効力の偉大さには一回毎に驚きますが特に御奬め申上げたいのは長年惱續けて居る胃腸病又は婦人病、こしけ、子宮病、冷え性、疝氣、リユウマチス、神經痛、痔疾、貧血症、關節炎、皮膚病、疥癬等の方々で、その特効を一々申上げるまでもなく一度御試用下さいますればすぐお解りになる事で御座います。（桑原氏談）

どなたも一日も早く御試用下さい、そしてこの非凡な天然靈効を人々に御吹聽下さい。

吾妻溫浴劑は約十回料一圓五十錢、約廿回料二圓八十錢（送料内地十八錢、領土五十錢）便宜上東京本郷駒込坂下町大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二九番）で御取次致します。

論
に
らる
病弱者
胃腸

視力增進



◇老眼も若返り　近眼弱視も視力恢復

頭腦が明晰　精力を增進し不眠症にも妙効

斯の如き不思議な効驗を持つ珍らしくも貴い藥が發見された、名はエモヂンと言ひその原藥は支那の奥地、龍門附近に産する支那特有の植物の精粋で、數千年の昔より彼地に於ては腦及視力の貴藥として珍重されて居りました。

支那古來の傳說に依れば、**「エモヂンを百日飲めば夜目がきく」**とさへ言はれて居ます位で、兎に角このエモヂンを服用した大抵の人が第一に氣付く事は便通が非常によくなり、夜五六ペンも小便に起きた人が一度ですむ様になつたとか、少し續けて用ふれば、眼になんとなく力がついて來て、肩のコリや不眠症の兆候も拭つた様によくなつて、成程と思ふ事です。

二三ケ月の服用で眼はハッキリ

然もエモヂンの特長とする所は、現在の醫學で最も難治とされて居る老衰による視力の減退や弱視近視などに用ひて視力強大となり用ひれば用ふる程、視力は整ひ眼病もよくなり眼中爽快、頭腦は明晰となつて全身の精力も增進すると言ふ事であります。その不思議な効果はそれからそれへと傳へられ實驗者悉く驚嘆され感謝されて居ります。亦事實針仕事さへも出來なかつたといふ様な方が僅か二三ケ月の服用で眼はハッキリお蔭で新聞さへも讀む事が出來る様になつたと喜ばれ、又或る人は強度の強から近視となり眼鏡を用ひても猶困難を感じたのがエモヂンの服用に依つて次第に視力が増し近々四五ケ月後には見事丈夫な眼になつたと感謝された等、その例は少くありません。

最もこのエモヂンは、所謂眼藥ではなくその特能成分が神經細胞の新陳代謝を促し進んで病根の中樞神經に溶解作用を與へるものでありますから如上の目的を達成するその作用を遺憾なく發揮せしむるのであります。

年の割合に視力が衰退した人弱視の人眼性の悪い人などは勿論然も之を連服することに依つて腦は不思議にハッキリし便通が整つて氣分は愈々爽快になります、又腦の惡い方などには何よりもよい持藥であり又永年の不眠症や神經衰弱等にも効驗が著しいのは幾多の實例が立證して居ります。

お茶コーヒーの代用に

又保健飲料として風味頗る良くお茶や珈琲の代用ともなり近頃では各家庭で常用され來客にまで應用せられてゐる人も澤山ある位です。

エモヂンは視力障害に如斯効果がある許りでなく保健藥養劑ともなりますから御家庭に常備なされ御愛用なさいます様特に御すゝめいたします。然も絶對に副作用等の御心配もなく他藥と併用なされても支障はありませんからこの點御安心下さい。

エモヂン十七日分一圓五十錢　五十五日分四圓　送料内地十五錢領土五十錢、便宜上東京本郷駒込大日本雄辯會講談社代理部で御取次いたします（振替東京六六二九番）

御注文の仕方

……命は、天下萬人が輝かしい希望と明るい和樂に生きる事であ……キングの愛讀者が一人増え二人増える事は、それ丈國を……る所以だと信じます。又キングの愛讀者が一人でも多……産の原理からして、より良い雜誌をより安く讀むことが……ます。どうか讀者諸君の御知合の中で、まだキングの讀……りましたら講讀を御勸め下さるやう願ひます。

……社發行の書籍雜誌は、お近くの書店でお求め下さい。若し品切で御手に入らぬ時、又は近くに書店のない方は、直接本社へ御注文下さい。

○本社への御注文は前金に限ります。

○御送金は振替貯金が一番安全で且送金代が安くすみます。振替貯金の用紙は郵便局にあり、その使ひ方も局で敎へてくれます。

○郵便爲替や郵便切手代用でも結構ですが、郵便切手代用の時は必ず一割増に願ひます。

○爲替や切手を封入した郵便物は、ぜひ書留郵便に願ひます。

○代金引替と集金郵便では一切扱ひません。

○御注文書には必ず書籍名なり雜誌なら雜誌名と何月號からといふ事をハッキリお書き下さい。

○御住所と御名前とはぜひ楷書で願ひます。

○御注文は大日本雄辯會講談社營業部宛に願ひます。振替口座は東京三九三〇番です。

○代理部への御注文は大日本雄辯會講談社代理部宛に願ひます。代理部の振替口座は東京六六二九番です。

○本誌へ廣告掲載御希望の方は、大日本雄辯會講談社廣告部宛御照會下されば、詳細御報知御相談に應じます。

定價表

冊數	國內及滿洲支那（送料共）	諸外國（送料共）
一冊	金五拾參錢五厘	金六拾八錢
三冊	金壹圓五拾錢	金壹圓九拾五錢
六冊	金貳圓九拾四錢	金參圓八拾四錢
十二冊	金五圓六拾四錢	金七圓四拾四錢

◎特大號で定價を上げた場合は、その増した分だけ右表の外に頂くことになります。但し前金にて數ヶ月分お拂込の方は、そのお預り金の中より差引計算致しますから、其の都度御送金には及びません。

昭和四年十二月三日印刷納本
昭和五年一月一日發行第六卷第一號

毎月一回
一日發行

編輯人 淵田忠良
發行人 廣瀨照太郎
印刷人 高木鳥三
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所 株式會社秀英舍

東京市本鄕區駒込坂下町四十八番地
發行所 大日本雄辯會講談社
振替口座東京三九三〇
電話小石川 [illegible]

元取次店 東京堂・東海堂・北隆館・大東館

キング愛讀者諸氏

は頭腦の人より須らく腹の人となり病氣境遇に支配せられる事なく不安を一掃せられ心膽を鍊り剛健なる氣力を養成せられん事を乞ふ

東京帝國大學教授醫學博士二木式呼吸法發案者二木謙三先生の實驗激賞されたものにして病弱者は勿論、健康者にも推奬せらる

病弱者虚弱者は必ず試みられよ

病弱者
胃腸病
神經衰弱
憂鬱
倦怠
無氣力
便秘
痩體
長壽
には

新案特許「心身强健帶」



肉體の强健、精神の剛健、膽力の養成は腹部の鍛錬にあり。剛健の氣を養ふは腹の修養にあり。腹は實に心身剛健の源泉なり。

一度「心身强健帶」を使用せば偉大なる精神と絶大なる氣力は臍下丹田に充實し鬱血したる腹部の血液は其の壓力により間斷なく心臟に返り全身の血液循環は良好となり內臟は强健に上記の病症は一掃され心身日に増し剛健心膽は鍊られ膽力は養成せらる。倦まざれば心量次第に寛大となり氣力常に勇壯、百歳に至ると雖も齒牙堅剛、怠らざれば長壽を得

腹部の鍛錬によつて健康となり肥滿となり長壽を得る事は古來よりも實驗からも醫學上からも證明されて居ります。之を誰もが容易に出來る樣に考案されたのが「心身强健帶」であります。上記の病症は勿論健康な方も是非お奬め致します。

優美堅牢(肥滿者痩體にも調節自在)

定價 參圓五十錢

送料(內地十二錢 領土四十五錢) 代金引替(內地廿八錢 領土五十錢)

東京市麻布區永坂四四

東京健康法奬勵會

振替東京七三〇一五番

胃腸を强健にし二三貫は安々肥る新案特許「心身强健帶」

NG. Published monthly by the Dai Nippon Yubenkai Kodansha, Tokio, Japan. Entered as second class mail matter at the P. O. at Los Angeles, Cal., U. S. A.
大正十三年十一月二十日第三種郵便物認可　昭和四年十二月二十三日印刷納本　昭和五年一月一日發行（毎月一回一日發行）

